

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第168集

ひめ ^{した} 遺跡
姫 下

2012

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

安城市は昔から東海道や矢作川を通じた人や物の往来で栄えた地域であり、碧海台地の縁辺部を中心に、堀内貝塚や姫小川古墳・二子古墳、寺領廃寺など一帯には多くの遺跡が存在します。特に亀塚遺跡で出土した古墳時代初頭の人面文土器は、全国的に著名で、当時の習俗を知る上で重要な資料となっております。

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター（当時）では、平成17年から18年にかけて、鹿乗川の河川改良工事に伴う事前調査として、安城市姫小川町に所在する姫下遺跡の発掘調査を行いました。その結果、弥生時代中期、古墳時代前期から室町時代にかけての竪穴建物や掘立柱建物、河道、井戸などが見つかりました。また遺物としては人面文が施された線刻土器や、河道周辺から出土した古墳時代前期の土器群、大型掘立柱建物の建築材・椅子などの多量の木製品が注目されました。

本書はこれらの成果をまとめたものであり、今後学術的な資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に対して御理解、御協力を賜った関係諸機関並びに地元の皆様、発掘調査や資料整理に参加協力していただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

平成24年3月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 加藤高明

例 言

1 姫下（ひめした）遺跡（遺跡番号 540121：『愛知県遺跡分布地図Ⅱ（知多・西三河地区）』1995 による）は、愛知県安城市姫小川町姫下に所在する遺跡である。

2 本書は、愛知県建設部河川課が計画する鹿乗川河川改良工事に伴う事前調査にかかる発掘調査報告書である。発掘調査は愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター（当時、現公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。調査対象面積は 7420 m²である。

3 発掘調査及び遺物水洗作業は平成 17 年 10 月～平成 18 年 3 月、平成 18 年 10 月～平成 19 年 3 月の二カ年に分けて行われ、その後報告書のための整理作業を平成 21・22 年度に実施している。なお出土遺物は、コンテナ 270 箱を数える。

4 現地における発掘調査は業務支援を受けて行っている。調査スタッフについては下記のとおりである。

平成 17 年度：

愛知県埋蔵文化財センター：宮腰健司、鈴木正貴
岡三リビング株式会社 現場代理人：西濱努
調査補助員：高野雅浩
測量技師：大谷祐司

平成 18 年度：

愛知県埋蔵文化財センター：宮腰健司、永井邦仁
加藤建設株式会社 現場代理人：金子健一
調査補助員：田村大器
測量技師：北島誠司

5 調査にあたっては本センター理事・専門員をはじめ次の各関係機関のご指導とご協力を得た。

愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、安城市教育委員会、安城市埋蔵文化財センター、愛知県建設部河川課

6 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標 VII 系に準拠した。表記は世界測地系を用いている。

7 遺構は以下の分類記号を用い、原則調査時に使用した表記をそのまま使用した。

SB：建物、SK：土坑、P：ピット、SD：溝、SE：井戸、SX：その他の遺構、NR：自然流路、SU：遺物集積

8 本書の執筆は下記のとおりである。

第 2 章第 2 節、第 3 節 永井邦仁
第 2 章第 4 節、第 5 節 鈴木正貴
第 3 章第 4 節 樋上昇
第 4 章 株式会社パレオ・ラボ

その他は宮腰健司が執筆している。また全体の編集も宮腰が行った。

第 4 章 自然科学分析については、調査に関わる部分について加筆を行うとともに、一部割愛して掲載している。なお全文については添付の CD に納めた。

9 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の各氏をはじめ多くの皆様のご協力・ご教示を得た。

黒坂貴裕、設楽博己、古尾谷知浩、山田昌久（敬称略）

10 樹種同定・プラントオパール分析・AMS年代測定については株式会社パレオ・ラボに、遺物の実測・トレースについては株式会社アコード・国際文化財株式会社、図版作成については有限会社アルケーリサーチに、写真撮影については写真工房 遊に、3Dレーザースキャンについては株式会社サンキに委託した。

11 発掘調査及び整理については、多数の発掘作業員・整理補助員の皆様のご協力を得た。記して感謝する次第である。

12 調査記録（図面・写真資料・日誌等）は、本センターにて保管している。

13 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

14 添付のCDには本報告書PDF、遺構一覧、遺物一覧、遺物の3Dレーザースキャンデータ、自然科学分析データが納められている。遺物の3Dレーザースキャンデータは下記の資料となる。

姫下 260・287・329・341・488・601・605・642・650・705・762・907・924・1215・1242

本報告書

朝日 V2079 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994『朝日遺跡V』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集 線刻土器 2079

麻生田 606 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1991『麻生田大橋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第21集 土偶 606

島田 1 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1995『島田陣屋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第58集 人面付土器 1

東光寺 511 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1993『東光寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第42集 土偶 511

廻間 117 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 線刻人面文土器 117

※ 3D PDF ファイル は、アドビリーダー、アドビリーダー ブラウザー プラグイン、アドビ アクロバット プロフェッショナルで表示可能です。

光沢の気になる方は、アドビリーダーの設定を以下のように変更してください。

（「編集」）→「環境設定」→「3Dとマルチメディアのレンダラオプション」と進み、「優先的に使用するレンダラ」を「ソフトウェア」へ変更し「OK」を押す。

目次

第1章 序章	
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の概要	1
第3節 遺跡の概要	2
第2章 遺構	
第1節 遺構の記述	6
1 遺構名	6
2 時期区分	6
第2節 06A区	6
1 調査の経過と概要	6
2 第2面	6 (1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構 6 (2) 溝 21
3 第3面	21 (1) 竪穴状遺構・不明遺構 21 (2) 土坑 21 (3) 溝 23
第3節 06B区	23
1 調査の経過と概要	23
2 第1面	24 (1) 溝 24
3 第2面	24 (1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構 24 (2) 土坑 52
4 第3面	55 (1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構 55 (2) 溝 60
第4節 05A区	61
1 調査の経過と概要	61
2 第1面	61 (1) 溝 61 (2) その他 61
3 第2面	63 (1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構 63 (2) 土坑 88
4 第3面	88 (1) 土坑 88 (2) 溝 88
5 第4面	93 (1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構 93 (2) 土坑 93
第5節 05B区	93
1 調査の経過と概要	93
2 第1面	96 (1) 溝 96
3 第2面	96 (1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構 96 (2) 掘立柱建物 116 (3) 土器集積 116 (4) 土坑 116
4 第3面	118 (1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構 118 (2) 土坑 119 (3) 溝 120
第6節 06C区	120
1 調査の経過と概要	120
2 第1面	120 (1) 溝 120
3 第2面	120 (1) 竪穴状遺構・不明遺構 120 (2) 土坑 123 (3) 溝 123
4 第3面	130 (1) 土坑 130 (2) 井戸 130 (3) 溝 130
第7節 05B区NR01・05B区NR02・06C区001NR	131
1 05B区NR01	131
2 05B区NR02	135
3 06C区001NR	135
第3章 遺物	
第1節 遺物の記述	144
第2節 土器・土製品	144
1 06A区	144 (1) 遺構内出土 144 (2) 遺構外出土 144
2 06B区	144 (1) 遺構内出土 144
3 06A区	145 (1) 遺構内出土 144 (2) SD42・43 149
4 05B区	149 (1) 遺構内出土 149 (2) SU01 151
5 06C区	151 (1) 遺構内出土 151 (2) 検出等 153 (3) 151SK 153
6 05B区NR01・SU02・SU03	160 (1) SU02 160 (2) SU03 160 (3) NR01 160
7 06C区001NR・234SU	167 (1) 234SU 167 (2) 001NR 179

第3節	石製品	190
第4節	木製品	199
1	弥生時代中期～後期	199
2	廻間Ⅲ式期	199
3	廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期	224
4	古代	243
5	時期不詳	243
6	まとめ	243
第4章	自然科学分析	
第1節	放射性炭素年代測定 1	261
第2節	放射性炭素年代測定 2	263
第3節	姫下遺跡出土木製品の樹種同定	266
第4節	姫下遺跡のプラント・オパール	269
第5章	総括	
第1節	遺跡の変遷	271
(1)	弥生時代	271
(2)	古墳時代前期	271
(3)	古墳時代後期	272
(4)	平安時代	275
(5)	平安時代末期～室町時代	275
(6)	江戸時代後期～明治時代	275
第2節	古墳時代前期土器の変遷と様相	275
(1)	時期区分	275
(2)	古墳時代前期土器の様相	277
図版	1～14	
写真図版	1～32	
報告書抄録		

挿 図

第1図	姫下遺跡位置図	1
第2図	姫下遺跡と周辺の遺跡	3
第3図	姫下遺跡調査区位置図	4
第4図	06A区東壁土層断面図	7
第5図	06A区北壁土層断面図	8
第6図	012SX・013SX・014SX・015SX・016SX平面図・土層断面図	9
第7図	020SX・022SX・023SB・024SX・090SX平面図	10
第8図	020SX・022SX・023SB・024SX・090SX土層断面図	11
第9図	009SX平面図・土層断面図	12
第10図	039SB・040SX平面図・土層断面図	13
第11図	092SX平面図・土層断面図	14
第12図	050SX・094SX・101SX・102SX平面図・土層断面図	15
第13図	046SX・047SX・093SX平面図・土層断面図	16
第14図	107SX平面図・土層断面図	17
第15図	074SX・077SB・097SX平面図・土層断面図	18
第16図	003SX・005SB・006SX・008SX平面図	19
第17図	003SX・005SB・006SX・008SX土層断面図	20
第18図	031SX平面図・土層断面図	20
第19図	112SX平面図・土層断面図	21
第20図	115SX平面図・土層断面図	21
第21図	06B区北壁土層断面図	22
第22図	06B区北壁土層断面図	23
第23図	096SB・097SB・098SB・099SX平面図・土層断面図	26
第24図	100SX・102SX・103SB・104SX平面図・土層断面図	27
第25図	106SB・114SB・115SB・116SB・117SB・118SB・119SX平面図	28
第26図	106SB・114SB・115SB・116SB・117SB・118SB・119SX土層断面図	29
第27図	267SX・282SB・283SB・284SX平面図・土層断面図	30
第28図	120SX・121SX・122SX平面図・土層断面図	31
第29図	112SX・123SX・124SX平面図・土層断面図	32
第30図	129SX・130SX・379SX・127SX平面図・土層断面図	34
第31図	157SB・158SB平面図・土層断面図	35
第32図	161SX・162SX・163SX・164SX平面図・土層断面図	36
第33図	153SX・155SX・156SX・166SB平面図	37
第34図	153SX・155SX・156SX・166SB土層断面図	38
第35図	272SX・273SX・274SX・276SX・277SB・381SX平面図・土層断面図	39
第36図	291SB・295SB・301SB・302SB平面図・土層断面図	40
第37図	241SX・244SX・320SX・321SX・325SX平面図・土層断面図	42
第38図	233SB・234SX・235SB・238SX・239SB平面図	43
第39図	233SB・234SX・235SB・238SX・239SB土層断面図	44
第40図	191SB・344SB・468SB・466SK平面図・土層断面図	45
第41図	177SX・298SX・326SB平面図・土層断面図	47
第42図	273SX・242SB・303SB平面図・土層断面図	48
第43図	246SX・247SX・248SX・251SX・347SX・245SX平面図・土層断面図	49
第44図	246SX・247SX・248SX・251SX・347SX・245SX土層断面図	50
第45図	341SX・250SB・342SB・333SK・334SK平面図・土層断面図	51
第46図	095SK平面図・土層断面図	52
第47図	410SB・414SB平面図・土層断面図	53
第48図	420SB・426SX平面図・土層断面図	54
第49図	502SB・504SX平面図・土層断面図	55
第50図	411SB平面図・土層断面図	56
第51図	413SB平面図・土層断面図	56
第52図	418SX平面図・土層断面図	57
第53図	452SB・453SB平面図・土層断面図	58
第54図	348SB・349SB平面図・土層断面図	59
第55図	494SD・509SD平面図・土層断面図	60
第56図	05A区東壁土層断面図	62
第57図	05A区東壁土層断面図土色	63

第 58 図	05A 区西壁土層断面図	64	第 119 図	06C 区東壁土層断面図	121
第 59 図	SX02 平面図・土層断面図	64	第 120 図	06C 区東壁土層断面土色	122
第 60 図	SB34・SX36 平面図・土層断面図	66	第 121 図	276SX・281SX・286SX 土層断面図	122
第 61 図	SX33・SB39・SX41 平面図・土層断面図	67	第 122 図	282SX・283SX・284SX 土層断面図	123
第 62 図	SX32 平面図・土層断面図	68	第 123 図	010SX・012X 土層断面図	124
第 63 図	SX26・SX20 平面図・土層断面図	69	第 124 図	008SX・009X・011SX 土層断面図	125
第 64 図	SB35 平面図・土層断面図	70	第 125 図	031SX・032X・043SX 土層断面図	126
第 65 図	SB28・SX29・SX31 土層断面図	70	第 126 図	020SD・028SK・040SX 土層断面図	127
第 66 図	SB28・SX29・SX31 平面図・土層断面図	71	第 127 図	151SK 平面図・土層断面図	128
第 67 図	SB19 平面図・土層断面図	72	第 128 図	152SK 平面図・土層断面図	128
第 68 図	SB40 平面図・土層断面図	72	第 129 図	223SK・232SK・245SK 平面図・土層断面図	128
第 69 図	SX22・SB37 平面図・土層断面図	73	第 130 図	249SE 平面図・土層断面図	130
第 70 図	SB16・SX17 平面図・土層断面図	74	第 131 図	05B 区南壁土層断面図	131
第 71 図	SB15・SX24 平面図・土層断面図	75	第 132 図	05B 区 NR01 南北土層断面図	132
第 72 図	SB23・SB25・SB30 平面図・土層断面図	76	第 133 図	05B 区 NR01 西壁土層断面図	132
第 73 図	SX12 平面図・土層断面図	77	第 134 図	06C 区 001NR 東西土層断面図	133
第 74 図	SX13・SB27 平面図・土層断面図	78	第 135 図	06C 区 001NR 西壁土層断面図	134
第 75 図	SB08 平面図・土層断面図	79	第 136 図	06C 区 001NR 西壁土層土色	135
第 76 図	SB14 平面図・土層断面図	80	第 137 図	NR01・001NR 木製品・木材・杭出土状況	136
第 77 図	SB07 平面図・土層断面図	81	第 138 図	NR01・001NR 層別木製品・木材・杭出土状況	137
第 78 図	SB07 土坑平面図・土層断面図	82	第 139 図	NR013 層木製品・木材・杭出土状況	138
第 79 図	SB03・SB04・SB05・SB06・SB11 平面図	83	第 140 図	NR014 層木製品・木材・杭出土状況	139
第 80 図	SB03・SB04・SB05・SB06・SB11 土層断面図	84	第 141 図	001NR3・4 層木製品・木材・杭出土状況	140
第 81 図	SB01・SB02・SB10 平面図・土層断面図	85	第 142 図	SU02・SU03・234SU 遺物出土範囲	141
第 82 図	SB09 平面図・土層断面図	86	第 143 図	杭列出土状況 1	142
第 83 図	SK15・SK19 平面図・土層断面図	87	第 144 図	杭列出土状況 2	143
第 84 図	P244 平面図・土層断面図	87	第 145 図	土器・土製品：06A 区出土	145
第 85 図	P246 平面図・土層断面図	87	第 146 図	土器・土製品：06B 区出土	146
第 86 図	SK28 平面図・土層断面図	88	第 147 図	土器・土製品：05A 区出土	147
第 87 図	SD73・SD74・SD75・SD76・SD77・SD78・SD79 平面図・土層断面図	89	第 148 図	土器・土製品：05A 区 SD42・43 出土	148
第 88 図	SD42・SD43・SD82 平面図・土層断面図	90	第 149 図	土器・土製品：05B 区出土 1	150
第 89 図	SB45 平面図・土層断面図	91	第 150 図	線刻土器 170	151
第 90 図	SX42・SB43・SB44 平面図・土層断面図	92	第 151 図	土器・土製品：05B 区出土 2	152
第 91 図	SK78 平面図・土層断面図	93	第 152 図	土器・土製品：05B 区 SU01 出土	153
第 92 図	05B 区東壁土層断面図	94	第 153 図	土器・土製品：06C 区出土 1	154
第 93 図	05B 区東壁土層断面土色	95	第 154 図	土器・土製品：06C 区出土 2	155
第 94 図	SB01 平面図・土層断面図	96	第 155 図	土器・土製品：06C 区 151SK 出土 1	156
第 95 図	SB13 平面図・土層断面図	97	第 156 図	土器・土製品：06C 区 151SK 出土 2	157
第 96 図	SB02・SB03 平面図・土層断面図	98	第 157 図	土器・土製品：06C 区 151SK 出土 3	158
第 97 図	SB14・SX15・SB16 平面図・土層断面図	99	第 158 図	土器・土製品：06C 区 151SK 出土 4	159
第 98 図	SB05・SB06 平面図・土層断面図	100	第 159 図	土器・土製品：06C 区 151SK 出土 5	160
第 99 図	SB07・SB09 平面図・土層断面図	101	第 160 図	土器・土製品：05B 区 SU02 出土 1	161
第 100 図	SB08 平面図・土層断面図	102	第 161 図	土器・土製品：05B 区 SU02 出土 2	162
第 101 図	SB12・SB21 平面図・土層断面図	101	第 162 図	土器・土製品：05B 区 SU02 出土 3	163
第 102 図	SB12・SB21 土層断面図	102	第 163 図	土器・土製品：05B 区 SU02 出土 4	164
第 103 図	SB29 平面図・土層断面図	105	第 164 図	土器・土製品：05B 区 SU02 出土 5	165
第 104 図	SB17・SB18・SB19 平面図・土層断面図	106	第 165 図	線刻土器 645	165
第 105 図	SB18 完掘平面図・土層断面図	107	第 166 図	土器・土製品：05B 区 SU03 出土	166
第 106 図	SB20・SX30・SB34 平面図・土層断面図	108	第 167 図	土器・土製品：05B 区 NR01 1 層出土	167
第 107 図	SB34 完掘平面図・土層断面図	109	第 168 図	土器・土製品：05B 区 NR01 2 層出土	168
第 108 図	SB23・SX24・SB31 平面図・土層断面図	110	第 169 図	土器・土製品：05B 区 NR01 3 層出土 1	169
第 109 図	SB25・SB32・SB35 平面図・土層断面図	112	第 170 図	土器・土製品：05B 区 NR01 3 層出土 2	170
第 111 図	SB28 平面図・土層断面図	113	第 171 図	土器・土製品：05B 区 NR01 3 層出土 3	171
第 112 図	SB45 平面図・土層断面図	114	第 172 図	土器・土製品：05B 区 NR01 3 層出土 4	172
第 113 図	SU01 平面図・土層断面図	115	第 173 図	線刻土器 601	173
第 114 図	SK62 平面図・土層断面図	116	第 174 図	線刻土器 907	173
第 115 図	SK61・SK63・SK64・SK65・SK71 平面図・土層断面図	117	第 175 図	土器・土製品：05B 区 NR01 3 層出土 5	174
第 116 図	SB37 平面図・土層断面図	118	第 176 図	土器・土製品：05B 区 NR01 3 層出土 6	175
第 117 図	SK110 平面図・土層断面図	119	第 177 図	土器・土製品：05B 区 NR01 3 層出土 7	176
第 118 図	SK136 平面図・土層断面図	119	第 178 図	土器・土製品：05B 区 NR01 3 層出土 8	177
			第 179 図	土器・土製品：05B 区 NR01 4・5 層出土	178
			第 180 図	土器・土製品：05B 区 NR01 出土層不明	179

第181図	線刻土器 1112	179	
第182図	土器・土製品：06C区 234SU 出土1	180	
第183図	土器・土製品：06C区 234SU 出土2	181	
第184図	土器・土製品：06C区 234SU 出土3	182	
第185図	土器・土製品：06C区 234SU 出土4	183	
第186図	土器・土製品：06C区 234SU 出土5	184	
第187図	土器・土製品：06C区 234SU 出土6	185	
第188図	土器・土製品：06C区 234SU 出土7	186	
第189図	土器・土製品：06C区 234SU 出土8	187	
第190図	土器・土製品：06C区 001NR 1・2層出土1	88	
第191図	土器・土製品：06C区 001NR 2層出土1	189	
第192図	土器・土製品：06C区 001NR 2層出土2	190	
第193図	土器・土製品：06C区 001NR 3層出土	191	
第194図	土器・土製品：06C区 001NR 4層出土1	92	
第195図	土器・土製品：06C区 001NR 4層出土2	193	
第196図	土器・土製品：06C区 001NR 4層出土3	194	
第197図	土器・土製品：06C区 001NR 4層出土4	195	
第198図	石製品 1	196	
第199図	石製品 2	197	
第200図	石製品 3	198	
第201図	木製品 弥生時代中期～後期	199	
第202図	木製品：掘削具 1	201	
第203図	木製品：工具 1・雑具・調度品 1	202	
第204図	木製品：容器 1	203	
第205図	木製品：紡織具 1・編み具 1・運搬具 1・漁撈具 1	204	
第206図	木製品：建築部材 1	205	
第207図	木製品：建築部材 2	206	
第208図	木製品：建築部材 3	207	
第209図	木製品：建築部材 4	208	
第210図	木製品：建築部材 5	209	
第211図	木製品：建築部材 6	210	
第212図	木製品：建築部材 7	211	
第213図	木製品：土木材 1・矢板 1	212	
第214図	木製品：用途不明 1	213	
第215図	木製品：丸棒 1	214	
第216図	木製品：丸棒 2・板 1・丸太 1	215	
第217図	木製品：角棒 1	216	
第218図	木製品：角棒 2	217	
第219図	木製品：板 2	218	
第220図	木製品：板 3	219	
第221図	木製品：板 4	220	
第222図	木製品：分割材 1・残材・丸太 2・用途不明 2	221	
第223図	木製品：分割材 2・丸太 3	222	
第224図	木製品：丸太 4	223	
第225図	木製品：掘削具 2・工具 2	225	
第226図	木製品：掘削具 3・工具 3	226	
第227図	木製品：農具	227	
第228図	木製品：調度品 2	228	
第229図	木製品：容器 2	229	
第230図	木製品：紡織具 2・編み具 2・容器 3	230	
第231図	木製品：運搬具 2・漁撈具 2	231	
第232図	木製品：祭祀具・威儀具	232	
第233図	木製品：建築部材 8	234	
第234図	木製品：建築部材 9	235	
第235図	木製品：建築部材 10	236	
第236図	木製品：建築部材 11	237	
第237図	木製品：建築部材 12	238	
第238図	木製品：建築部材 13・丸太 5	239	
第239図	木製品：建築部材 14	240	
第240図	木製品：建築部材 15	241	
第241図	木製品：建築部材 16	242	
第242図	木製品：土木材 2	245	
第243図	木製品：土木材 3	246	
第244図	木製品：矢板 2	247	
第245図	木製品：丸棒 3	248	
第246図	木製品：角棒 3・板 5	249	
第247図	木製品：板 6	250	
第248図	木製品：板 7	251	
第249図	木製品：板 8	252	
第250図	木製品：板 9	253	
251図	木製品：板 10・分割材 3	254	
第252図	木製品：分割材 4	255	
第253図	木製品：丸太 6	256	
第254図	木製品：丸太 7	257	
第255図	木製品：古代・時期不詳	258	
第256図	木製品器種・樹種相関グラフ 1	259	
第257図	木製品器種・樹種相関グラフ 2	260	
第258図	06A区プラント・オパール試料採取地点	269	
第259図	姫下遺跡遺構変遷図 1	272	
第259図	姫下遺跡遺構変遷図 2	273	
第261図	姫下遺跡遺構変遷図 3	274	
第262図	河道層別対応図	276	
第263図	古墳時代前期土器変遷図 1	278	
第264図	古墳時代前期土器変遷図 2	279	
第265図	古墳時代前期土器変遷図 3	280	
第266図	古墳時代前期土器変遷図 4	281	
第267図	姫下遺跡 1期土器分類図	282	
表			
表 1	測定試料及び処理	161	
表 2	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	162	
表 3	測定試料及び処理	164	
表 4	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	165	
表 5	05B区 NR01 5層出土木屑一覧	167	
表 6	05B区 NR01 5層出土木屑集計	168	
表 7	試料 1gあたりのプラント・オパール個数	170	
挿図写真			
写真 1	05B区 SU02 調査風景	5	
写真 2	05B区 NR01 調査風景	5	
写真 3	05B区 NR01 調査風景	5	
写真 4	05A・B区現地説明会	5	
写真 5	06C区 234SU 調査風景	5	
写真 6	06C区 234SU 調査風景	5	
写真 7	06B区 001NR 調査風景	5	
写真 8	06A・C区地元説明会	5	
写真 9	151SK 土器出土状態 1	129	
写真 10	151SK 土器出土状態 2	129	
写真 11	151SK 土器出土状態 3	129	
写真 12	151SK 土層断面	129	
写真 13	151SK 完掘状態	129	
図版			
図版 1	06A区第2面遺構平面図		
図版 2	06A区第3面遺構平面図		
図版 3	06B区第1面遺構平面図		
図版 4	06B区第2面遺構平面図		
図版 5	06B区第3面遺構平面図		
図版 6	05A区第1面遺構平面図		
図版 7	05A区第2面遺構平面図		
図版 8	05A区第3面遺構平面図		
図版 9	05A区第4面遺構平面図		
図版 10	05B区第1面遺構平面図		
図版 11	05B区第2面遺構平面図		
図版 12	05B区第3面遺構平面図		
図版 13	06C区第1・2面遺構平面図		
図版 14	06C区第3面遺構平面図		

第1章 序章

第1節 調査の経緯

本書で報告した姫下遺跡の調査は、鹿乗川河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行ったものである。鹿乗川河川改良工事予定地には『愛知県遺跡分布地図Ⅱ（知多・西三河地区）』（愛知県教育委員会 1995）に記載された姫下遺跡が所在しており、さらに詳細に遺跡の範囲を決定することを目的に、平成12年度に愛知県埋蔵文化財センターによって予定地内の範囲確認調査が行われ、調査範囲として7420㎡の面積が設定された。発掘調査は平成17年度に3470㎡、平成18年度に3950㎡に分けて実施され、その後平成21・22年度に報告書のための整理作業を行っている。

第2節 調査の概要

調査は廃土置き場や現道の関係で、平成17年度が05A区・05B区の2区、平成18年度が06A区・06B区・06C区の3区に分けて行った（第3図）。また、平成18年2月11日に現地説明会、平成19年2月17日地元説明会を行い、それぞれ310名と250名の参加を得た。

05A区（調査期間：平成17年10月31日～平成18年1月16日）

4面に分けて調査を行った。第1面では近世以降の小土坑群と溝、第2面では古代の竪穴建物が26棟と竪穴状遺構・不明遺構15基が検出された。第3面では古墳時代以前の溝群が検出され、SD42では古墳時代前期の土器が多量に出土した。第4面では弥生時代中期の竪穴建物3棟と竪穴状遺構・不明遺構4基・土坑などを検出している。

05B区（調査期間：平成17年12月19日～平成18年3月20日）

3面に分けて調査を行い、第1面では近世以降の溝・土坑が確認されている。第2・第3面では調査区の南部1/3程に北東から南西にかけて走る河道NR01が検出され、肩部への土器廃棄SU02・SU03、河道埋土内より古墳時代前期の多量の土器・木器・木が出土した。また北部では古墳時代～古代の竪穴建物



第1図 姫下遺跡位置図

29 棟と竪穴状遺構・不明遺構 13 基、掘立柱建物 1 棟、土器集積 SU01、溝などが検出されている。

06A 区（調査期間：平成 19 年 1 月 16 日～平成 19 年 2 月 27 日）

第 1 面に相当する遺構は確認されなかった。第 2 面では古代～中世にかけての竪穴建物 4 棟、竪穴状遺構・不明遺構 45 基、溝が、第 3 面では時期不明の溝・土坑などが検出されている。

06B 区（調査期間：平成 18 年 10 月 23 日～平成 19 年 1 月 11 日）

第 1 面では近世以降の溝を検出した。第 2 面と第 3 面では古代～中世にかけての竪穴建物 44 棟、竪穴状遺構・不明遺構 73 基や条痕文土器が出土した O95SK を検出した。また第 3 面では南北に屈曲して走る時期不明の溝 310SD・458SD を検出している。

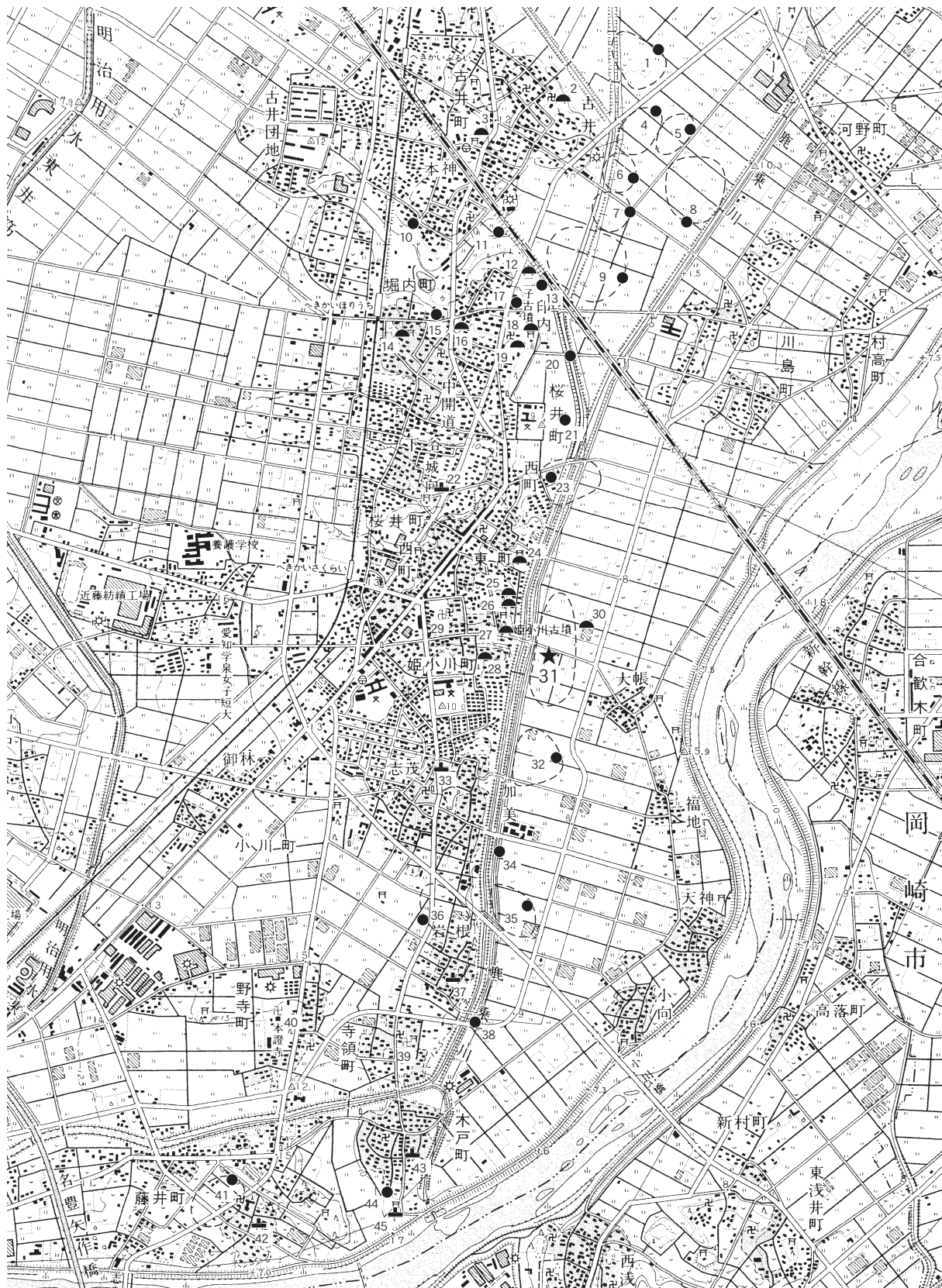
06C 区（調査期間：平成 18 年 11 月 20 日～平成 19 年 2 月 22 日）

表土及び中～近世の遺物を包含する 001NR 1 層を剥いだ面で、第 1 面と第 2 面に相当する遺構を検出し、近世以降の溝 006SD・020SD、土坑 028SK や古代の竪穴状遺構・不明遺構 24 基を確認した。さらに下面の基盤面で第 2・3 面相当の遺構を検出している。調査区北西部 1/2 には北東から南西に走る 001NR が検出され、上層では古代の土器が、下層では古墳時代前期の土器・木製品・木材が出土した。また河道肩部には古墳時代前期の土器廃棄 234SU がみられ、人面文土器が出土している。さらに多量の土器廃棄が確認された 151SK や井戸と考えられる 249SE も検出されている。

第 3 節 遺跡の概要

姫下遺跡は、碧海台地の縁辺に沿って流れる鹿乗川左岸の微高地上に立地する。この微高地は矢作川及びその支流によって形成されたと考えられ、砂層・シルト層が基盤となる。遺構検出面の標高は約 7 m で、碧海台地とは 3～4 m の比高がある。現在鹿乗川は直線的に改良されているが、それ以前は矢作川の浸食や堆積などの影響で、かなり入り組んだ地形であったことが、発掘調査などから判っている。今回の調査区内では南北にわたり明瞭な高低差は確認できなかったが、06B・05A・05B 区に古墳時代前期と古代の竪穴建物が集中しており、その付近が安定した地形であったことが推定できる。また 05B 南部から 06C 区北西部を流れる NR01・001NR 部分は古墳時代前期以前、少なくとも弥生時代中期頃から河道（NR02）として機能しており、古墳時代前期になって本調査で確認されたような安定した河道となる。その後河道は中世まで低地として遺存する。河道南側では確実な居住域は確認されていない。

鹿乗川に沿った碧海台地縁辺部には、多くの遺跡が集中する（第 2 図）。最も古い時期の遺跡としては、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土坑墓・土器棺墓・貝塚が出土した堀内貝塚がある。さらに遺構ははっきりしないがこの時期の遺物が出土している遺跡として、釈迦山遺跡、桜林遺跡、亀塚遺跡があげられる。弥生時代になって遺跡が集中するのは、古井堤遺跡や上橋下遺跡、下橋下遺跡などが近接して存在する一帯で、これらの遺跡を総称して古井遺跡群と呼ばれる場合もある。古井遺跡群は弥生時代から古墳時代初頭まで地点を変えながら連続して営まれる集落遺跡で、弥生時代中期後半に最盛期を迎える。また弥生時代中期後半の遺跡としては中狭間遺跡や加美遺跡・下懸遺跡がある。さらに弥生時代後期から古墳時代初頭になると、人面文土器が出土した亀塚遺跡、環濠と思われる溝が検出されている本神遺跡や中狭間遺跡、遺物が大量に出土した桜林遺跡・下懸遺跡・寄島遺跡など多くの遺跡が出現する。この地域の古墳で時期が判明しているものはわずかであるが、全長 69m を測る前方後方墳である二子古墳を中心とした塚越古墳・比蘇山古墳・碧海山古墳などと、全長 69m の前方後円墳姫小川古墳を中心とした獅子塚古墳・姫塚古墳・ハツ塚古墳などのグループに分かれる。奈良時代には寺領廃寺や、多数の墨書土器や木簡出土した惣作遺跡、文書木簡が出土した下懸遺跡がある。



※国土地理院発行 1/25000 地形図
「安城」「西尾」(H15年発行)を使用

- | | | | | |
|---------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 神ノ木遺跡 | 11 釈迦山遺跡 | 21 中狭間遺跡 | 31 姫下遺跡 | 39 寺領廃寺 |
| 2 塚越古墳 | 12 二子古墳 | 22 桜井城跡 | 32 寄島遺跡 | 40 本證寺境内地 |
| 3 愛宕古墳 | 13 二夕子遺跡 | 23 亀塚遺跡 | 33 小川志茂城跡 | 41 大畑遺跡 |
| 4 竹ノ花遺跡 | 14 堀内古墳 | 24 獅子塚古墳 | 34 下懸遺跡 | 42 藤井城跡 |
| 5 上橋下遺跡 | 15 堀内貝塚 | 25 姫塚古墳 | 35 五反田遺跡 | 43 木戸古城遺跡 |
| 6 野辺遺跡 | 16 碧海山古墳 | 26 崖古墳 | 36 加美遺跡 | 44 木戸城遺跡 |
| 7 彼岸田遺跡 | 17 桜林遺跡 | 27 姫小川古墳 | 37 岩根城跡 | 45 木戸城跡 |
| 8 下橋下遺跡 | 18 山伏塚古墳 | 28 王塚古墳 | 38 惣作遺跡 | |
| 9 古井堤遺跡 | 19 比蘇山古墳 | 29 誓願寺境内地 | | |
| 10 本神遺跡 | 20 宮下遺跡 | 30 八ツ塚古墳 | | |

第2図 姫下遺跡と周辺の遺跡 (S=1/25000)



※安城市都市計画基本図（平成14年）を使用

第3図 姫下遺跡調査区位置図 (S=1/2500)



写真1 05B区 SU02 調査風景



写真5 06C区 234SU 調査風景



写真2 05B区 NR01 調査風景



写真6 06C区 234SU 調査風景



写真3 05B区 NR01 調査風景



写真7 06B区 001NR 調査風景



写真4 05A・B区現地説明会



写真8 06A・C区地元説明会

第2章 遺構

第1節 遺構の記述

1 遺構名

平成17年度05A・05B区調査では、SB01・02…、SK01・02…というように遺構の種類ごとに番号をつけ、平成18年度06A・06B・06C区調査では、001SB、002SK、003SD…というように検出遺構順に番号を付した。本報告書では基本的に調査時の番号をそのまま使用したが、検討の結果、遺構の種類・性格の変更が必要と認めた場合は、SX(SB)というように新種別を前に、調査時の旧種別を括弧内に記した。

2 時期区分

遺構・遺物の消長をもとに下記のような時期区分を設けた。遺構の記述も下記を基本に行っている。

A期 弥生時代

A-1期 前期以前

A-2期 中期

B期 古墳時代

B-1期 古墳時代初頭～前期

B-2期 古墳時代後期

C期 奈良～平安時代

D期 平安時代末期～室町時代

E期 近世以降

第2節 06A区

1 調査の経過と概要

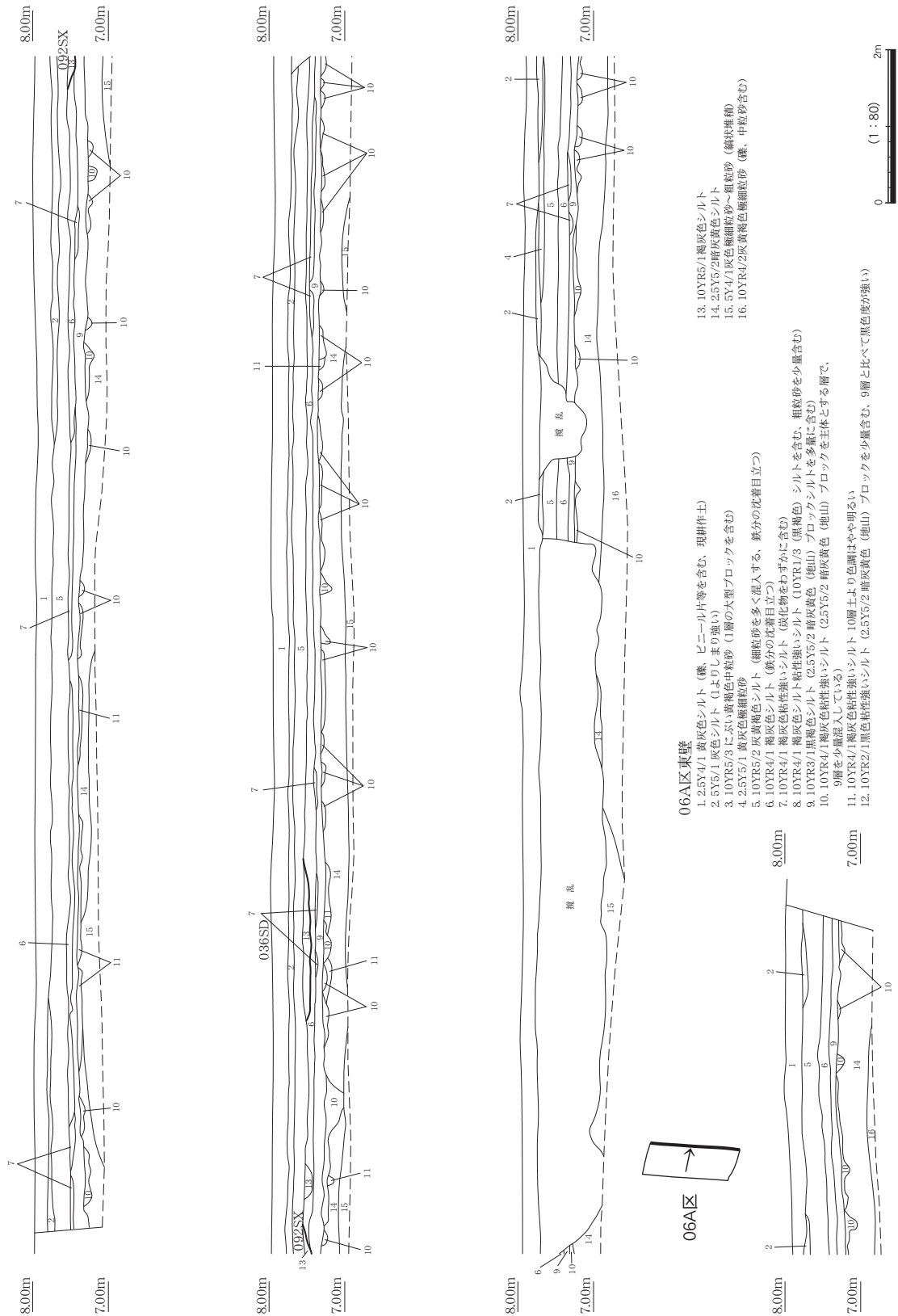
当該調査区は05A～06C中で最も北に位置している。重機による表土掘削は、現耕作土とその下の旧耕作土である灰黄褐色シルト層までの50cmを対象とし、褐灰色シルト層の上面を第1面とした。しかしながら同面では遺構が検出されなかったため再び重機掘削をおこない、黒褐色シルト層上面を第2面として遺構検出を実施した。検出時に出土した遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器であるが、小片が大半である。第2面調査時に設定したトレンチで下層遺構の存在が考えられる地点をいくつか選び出し、黒褐色シルト層を掘り下げて地山となる灰色砂質シルト～極細粒砂層の上面にて再度遺構検出を行った。これが第3面であるが、不整形な溝状遺構が検出されるにとどまった。

2 第2面

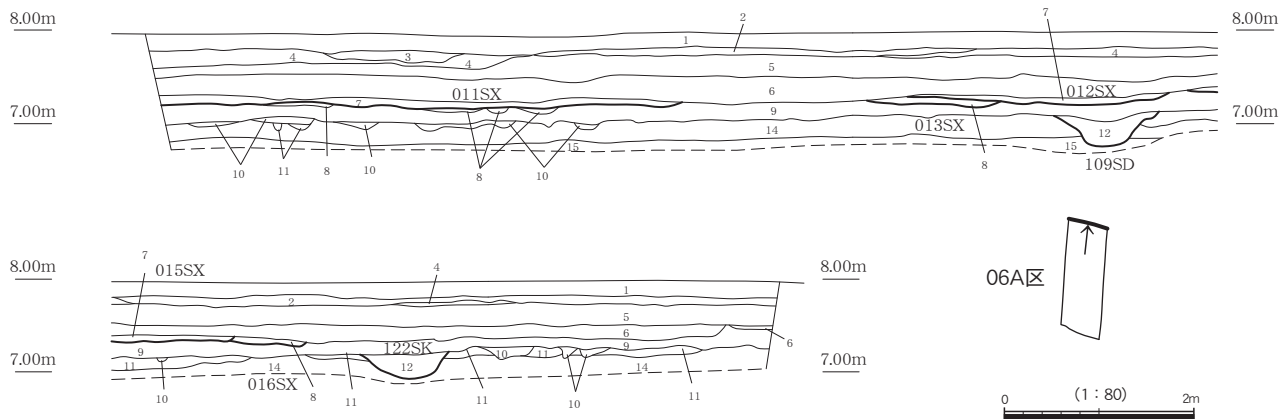
(1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構

A 012SX・013SX・014SX・015SX・016SX (第6図)

012SX(SB) 調査区北端に位置する。調査区北壁に接して1ヶ所の隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。土層観察(A-A'、B-B')では緩い壁の立ち上がりを認める。平面検出では竪穴建物を想定したが、検出範囲が少ない上に壁溝などの付属施設が明確にならなかったため、性格不明遺構



第4図 06A区東壁土層断面図 (S=1/80)



06A 区北壁

- | | |
|--|--|
| 1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト（礫・ビニール片等を含む、現耕作土） | 10. 10YR4/1 褐灰色粘性強いシルト（2.5Y5/2 暗灰黄色（地山）ブロックを主体とする層で、9層を少量混入している） |
| 2. 5Y5/1 灰色シルト（1よりしまり強い） | 11. 10YR4/1 褐灰色粘性強いシルト（10層土より色調はやや明るい） |
| 3. 10YR5/3 にぶい黄褐色中粒砂（1層の大型ブロックを含む） | 12. 10YR2/1 黒色粘性強いシルト（2.5Y5/2 暗灰黄色（地山）ブロックを少量含む、9層と比べて黒色度が強い） |
| 4. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 | 13. 10YR5/1 褐灰色シルト |
| 5. 10YR5/2 灰黄褐色シルト（細粒砂を多く混入する、鉄分の沈着目立つ） | 14. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト |
| 6. 10YR4/1 褐灰色シルト（鉄分の沈着目立つ） | 15. 5Y4/1 灰色極細粒砂～粗粒砂（縮状堆積） |
| 7. 10YR4/1 褐灰色粘性強いシルト（炭化物をわずかに含む） | 16. 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂（小礫、中粒砂含む） |
| 8. 10YR4/1 褐灰色シルト（粘性強いシルトに10YR3/1 黒褐色シルトが混じる、粗粒砂を少量含む） | |
| 9. 10YR3/1 黒褐色シルト（2.5Y5/2 暗灰黄色（地山）ブロックシルトを多量に含む） | |

第5図 06A 区北壁土層断面図（S=1/80）

である。遺物は土師器小片が1点ある。

013SX（SB） 012SX に重複しその西側で検出された緩い隅部が1ヶ所ある推定方形で皿状を呈する遺構である。土層観察（C-C'）では緩い壁の立ち上がりを認める。平面検出では竪穴建物の可能性が考えられたが、近世陶器とみられる小片が出土している。したがって比較的新しい掘り込みの可能性はある。しかしながら性格を特定する検出状況ではない。

014SX（SB） 013SX とほとんどが重複して検出された1ヶ所に隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。土層観察（D-D'、E-E'）では緩い立ち上がりを認める。顕著な遺物はなかった。性格不明遺構である。

015SX 012SX と重複してその東側で検出された不整形な遺構である。土層観察（F-F'、G-G'）では浅い凹みの堆積が認められたにすぎない。顕著な遺物の出土はなかった。性格不明遺構である。

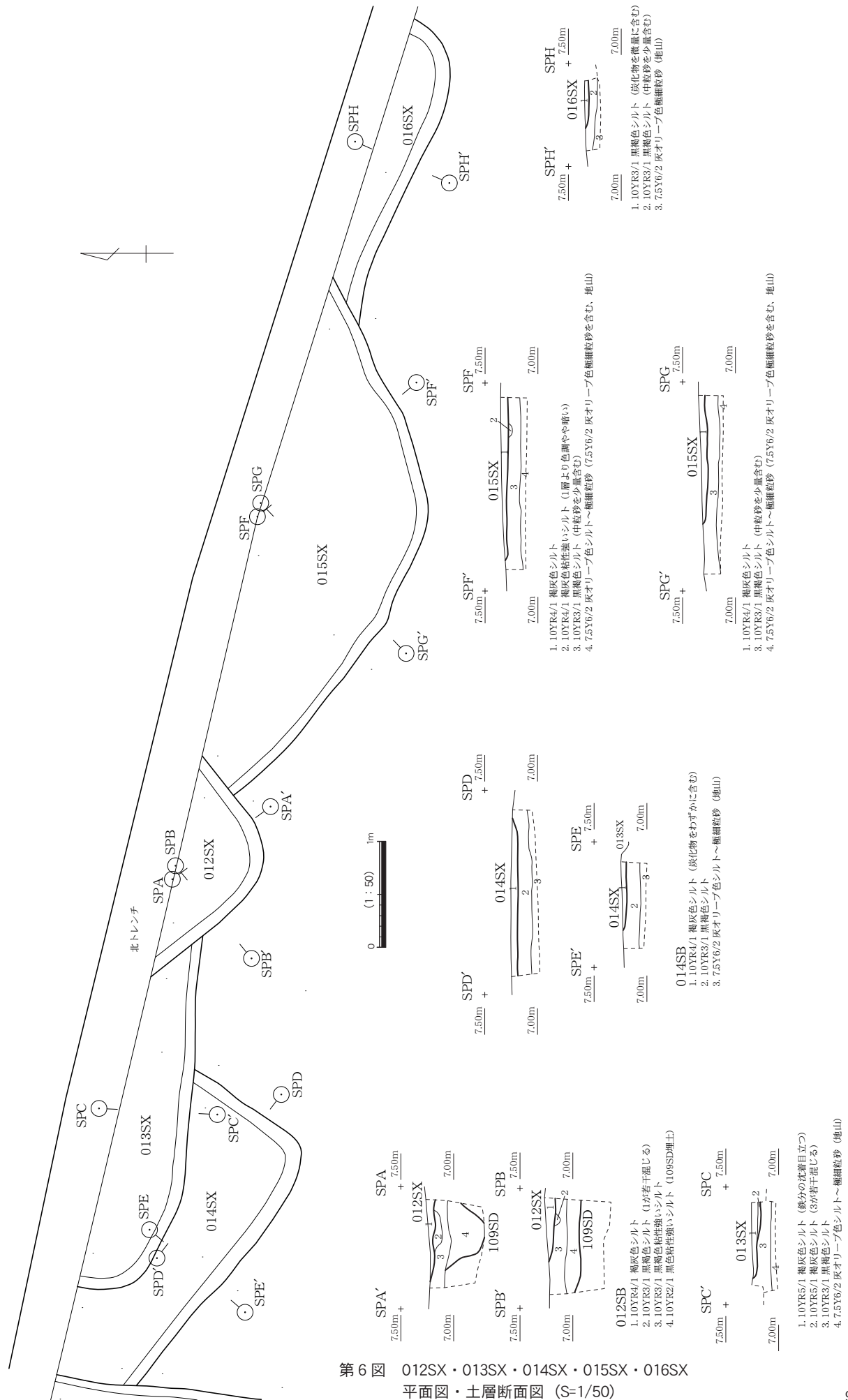
016SX 015SX と重複してその東側で検出された不整形な遺構である。土層観察（H-H'）では浅い凹みの堆積が認められたにすぎない。顕著な遺物の出土はなかった。性格不明遺構である。

B 020SX・022SX・023SB・024SX・090SX（第7・8図）

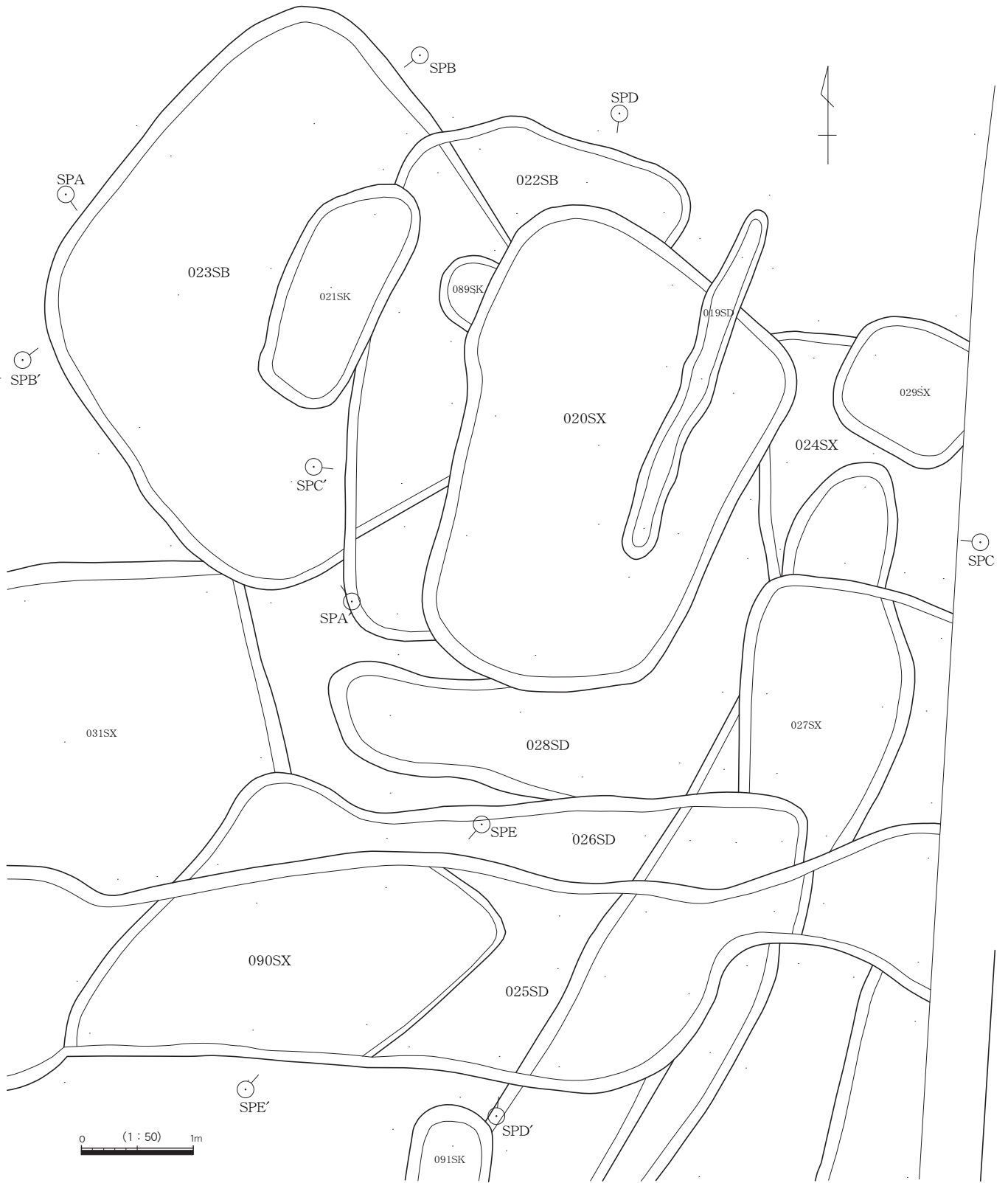
020SX（SB） 調査区北東部に位置する。022SX に重複して検出された皿状の落ち込みである。遺構の重複関係では最後に形成されたもので、埋土からは灰釉陶器小片2点が出土している。平面形状はやや不整形な隅丸長方形で、長径407cm、短径256cm、深さ8cmの規模である。土層観察では緩い立ち上がりが認められる。調査時は中世竪穴状遺構と認識していたが、022SX とほぼ同位置であることなどから、最終的には下位遺構によってできた自然の落ち込みと判断された。

022SX（SB） 020SX とほぼ同位置で重複して検出された、不整形な皿状を呈する遺構である。020SX の下位にあたる。土層観察では緩い立ち上がりが認められる。遺物は土師器伊勢型鍋の口縁（006）と灰釉陶器小片が4点出土した。020SX 同様に当該遺構も調査時は中世の竪穴状遺構と認識していたが、土層や他の遺構の検出状況を考え合わせると下位遺構（023SB など）によってできた凹みである可能性が高い。

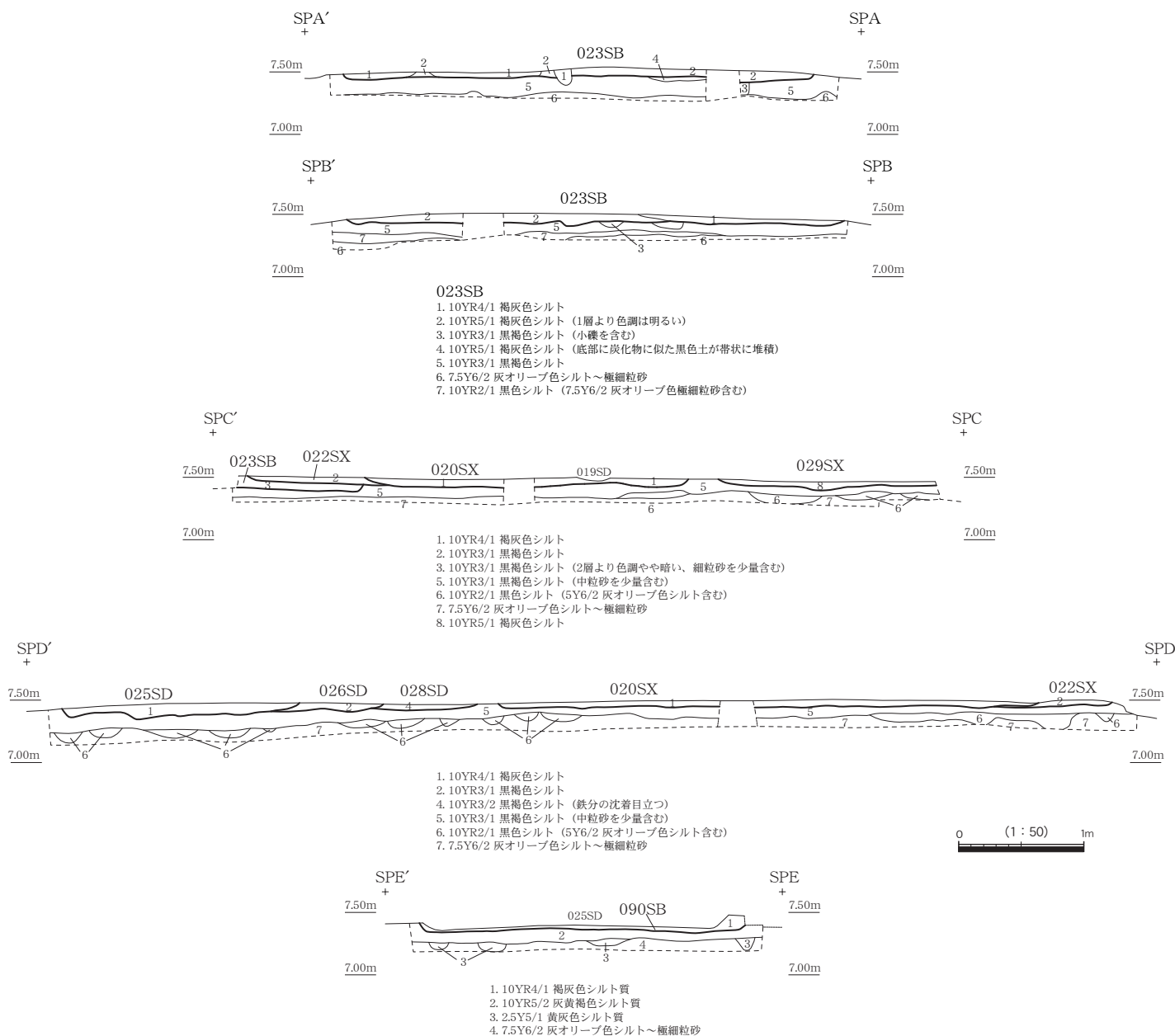
023SB 022SX と重複してその西側で検出された。3ヶ所で丸みのある隅部がある推定隅丸正方形で皿状を呈する遺構である。南西辺の長さは402cmで深さは11cmである。重複関係では020SX・



第 6 図 012SX・013SX・014SX・015SX・016SX
 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第7图 020SX・022SX・023SB・024SB・090SX 平面图 (S=1/50)

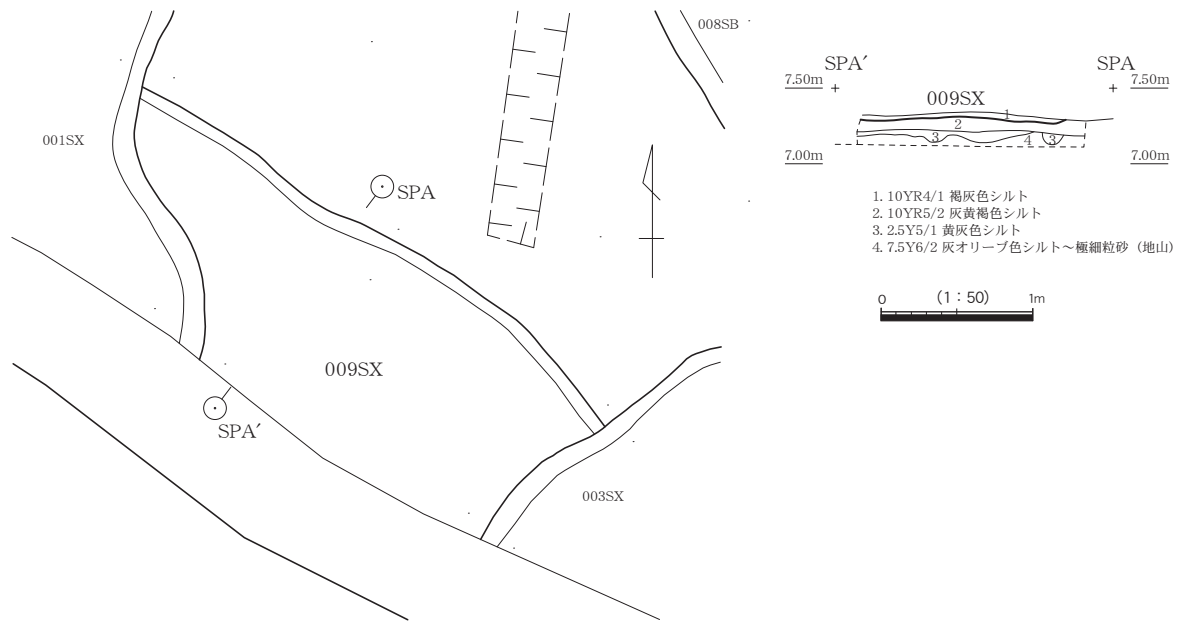


第8図 020SX・022SX・023SB・024SX・090SX 土層断面図 (S=1/50)

022SXに先行する。土層観察(A-A'、B-B')では、明瞭な壁の立ち上がりが認められる他、西隅付近に炭化物の集積する浅い凹みもみられた。ただしこれは平面検出では確認されていない。このような炭化物集積のある堆積は本調査区では他にみられず、当該遺構に伴うものと考えられる。壁溝や柱穴は検出されなかったが、竪穴建物の可能性が高いと考えられる。遺物は、灰釉陶器碗の底部(002)と、他に灰釉陶器小片が3点と土師器小片が2点出土した。遺物から9世紀後半以降、022SX出土の伊勢型鍋から13世紀以前の時期となろう。

024SX (SB) 調査区東壁付近で検出された、推定方形で皿状を呈する遺構である。顕著な遺物の出土はなかった。東西20cm、南北250cm以上の規模が想定される。

090SX (SB) 020SB～023SBの重複関係の南西に数m離れた地点で検出された皿状を呈する遺構である。一部(025SD下)では隅がみられたが、土層観察(E-E')にみるように025SDが部分的に深くなったものと考えられる。顕著な遺物の出土はなかった。



第9図 009SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)

C 009SX (第9図)

調査区南端で検出された不整形な皿状の遺構である。001SX・003SX が重複関係の上位にあってその全形は不明であり、溝の可能性もある。なお、001SX からは灰釉陶器碗 (004) が出土した。

D 039SB・040SX (第10図)

039SB 調査区の中中部やや東よりに位置する。2ヶ所に隅部がありその東半部は037SDによって滅失している推定方形で皿状を呈する遺構である。土層確認では壁溝が検出されなかったものの、明瞭な立ち上がりが認められる。また平面形が比較的明瞭であることから、一辺が約460cmの竪穴建物の可能性が考えられる。遺物は末期段階の灰釉陶器小片が出土している。

040SX (SB) 039SB と一部重複して検出された1ヶ所に隅部がある推定方形の遺構である。北西隅部は上位から039SBが掘り込まれている。顕著な遺物はなかった。

E 092SX (第11図)

調査区の中中部やや西よりに位置する。平面形は丸みのある隅部が3ヶ所で検出され平面形はやや崩れた長方形となる。土層観察では西側(A')で掘り込みがみられるが東側(A)では不明瞭であるため確定的な遺構形状とはいえず、性格不明遺構である。遺物は、灰釉陶器小片2点と土師器小片が2点出土した。

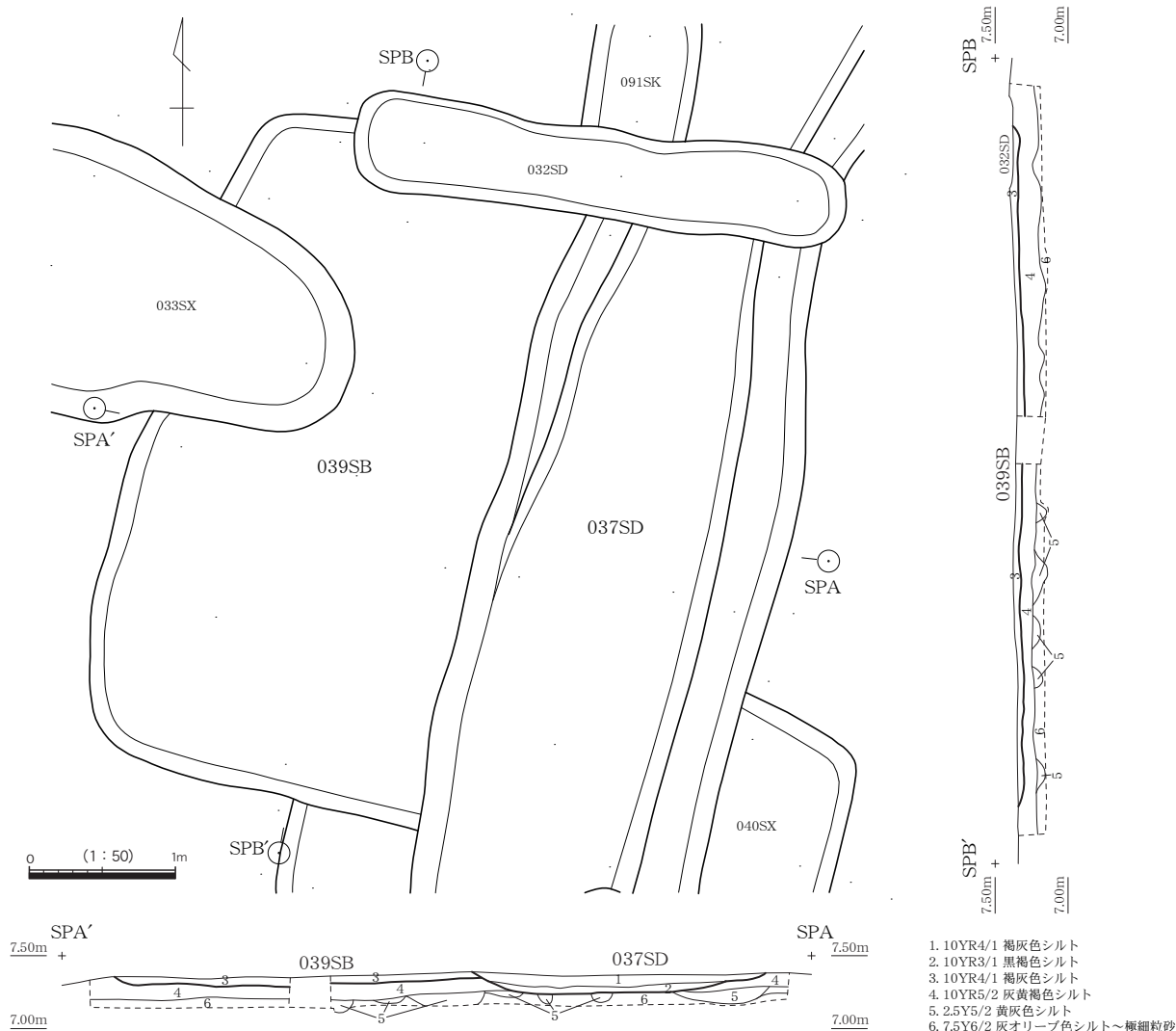
F 050SX・094SX・101SX・102SX (第12図)

050SX 042SD に南側が掘り込まれて滅失している不整形な皿状を呈する遺構である。顕著な遺物はなく、性格不明遺構である。

094SX (104SX) 102SX の後に掘り込まれ042SDに先行する遺構である。101SX・102SXに近い規模である。

101SX (SB) 042SD に北側が掘り込まれる南北303cm×東西235cmの長方形を呈する遺構である。102SX とほぼ同規模であることから一連のもの可能性もある。土層観察では比較的明瞭な壁の立ち上がりがある。竪穴建物の大きさとしては小さすぎるといえ、性格不明遺構である。

102SX (SB) 101SX の東側で並列するように検出された。平面形はやや崩れるが101SXと同じ長方形が基軸となる。土層観察では比較的明瞭な壁の立ち上がりがあるが、性格不明遺構である。出土遺物は中世の鉢(003)があるため、時期は鎌倉時代以降と考えられる。



第 10 図 039SB・040SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)

G 046SX・047SX・093SX (第 13 図)

046SX (SB) 調査区の中中部やや西よりに位置する。遺構の重複関係が複雑で、その中で最も古いものである。北半分が 041SX の下位で検出され、東西 480cm × 南北 275cm の長方形を呈する。しかし土層観察ではその断面は凹凸が多く明瞭ではない。遺物は灰釉陶器の小片が 1 点出土した。性格不明遺構である。

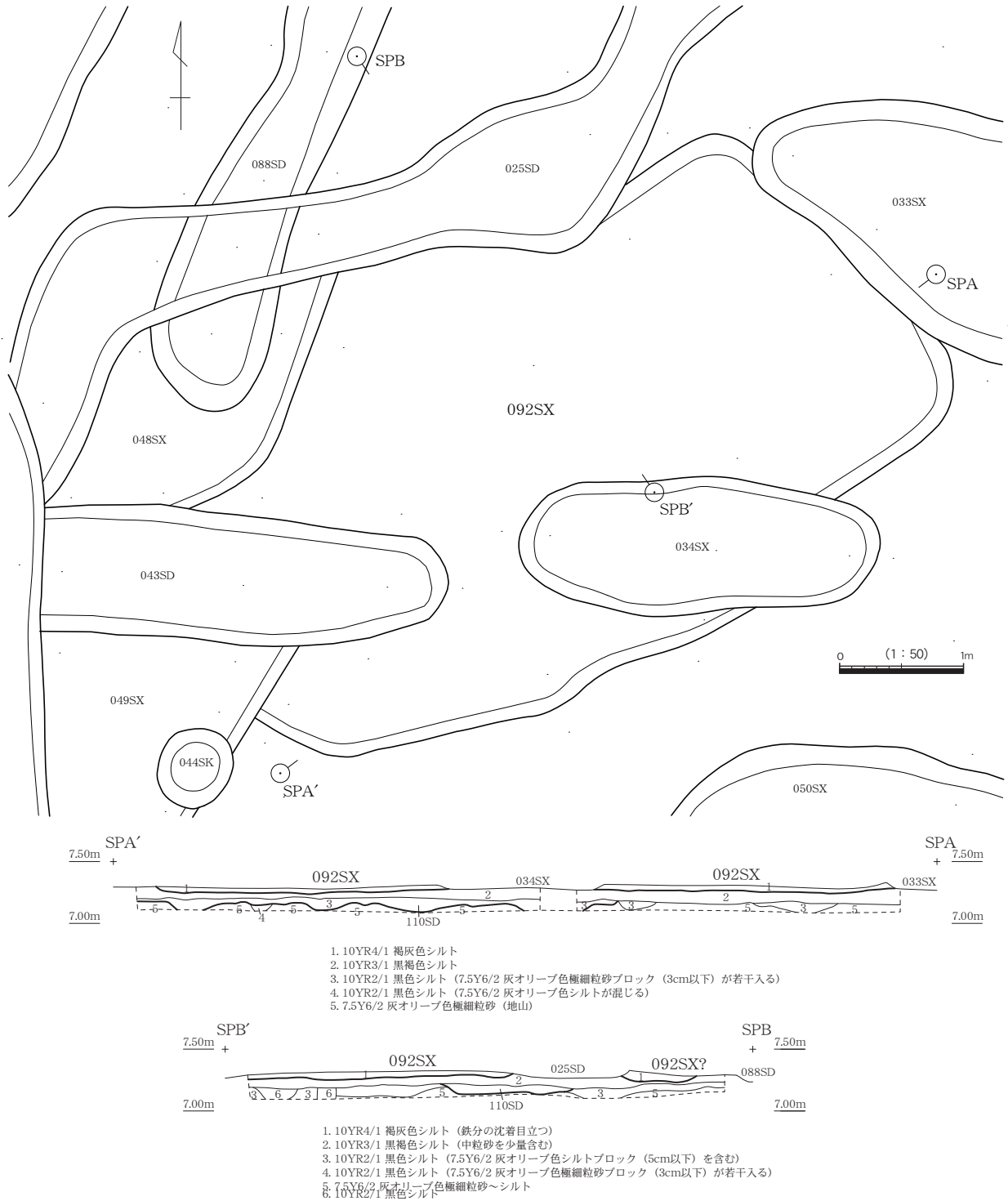
047SX (SB) 046SX の北側に位置する。丸みのある隅部が 1 ヶ所認められる。046SX の一部である可能性も考えられる。

093SX (SB) 046SX 同様に重複関係で古い方になる。隅丸の正方形に近い平面形状で、その一辺は南北で 340cm になる。顕著な遺物はなかった。検出された平面形は比較的整っているため、竪穴建物掘方の可能性も考えておきたい。

H 107SX (第 14 図)

調査区の中中部やや南よりに位置する。不整形な皿状を呈する遺構である。近世の耕作に関わるとみられる東西方向の溝 (106SD) より新しいため比較的新しい土坑と考えられる。顕著な遺物はなかった。

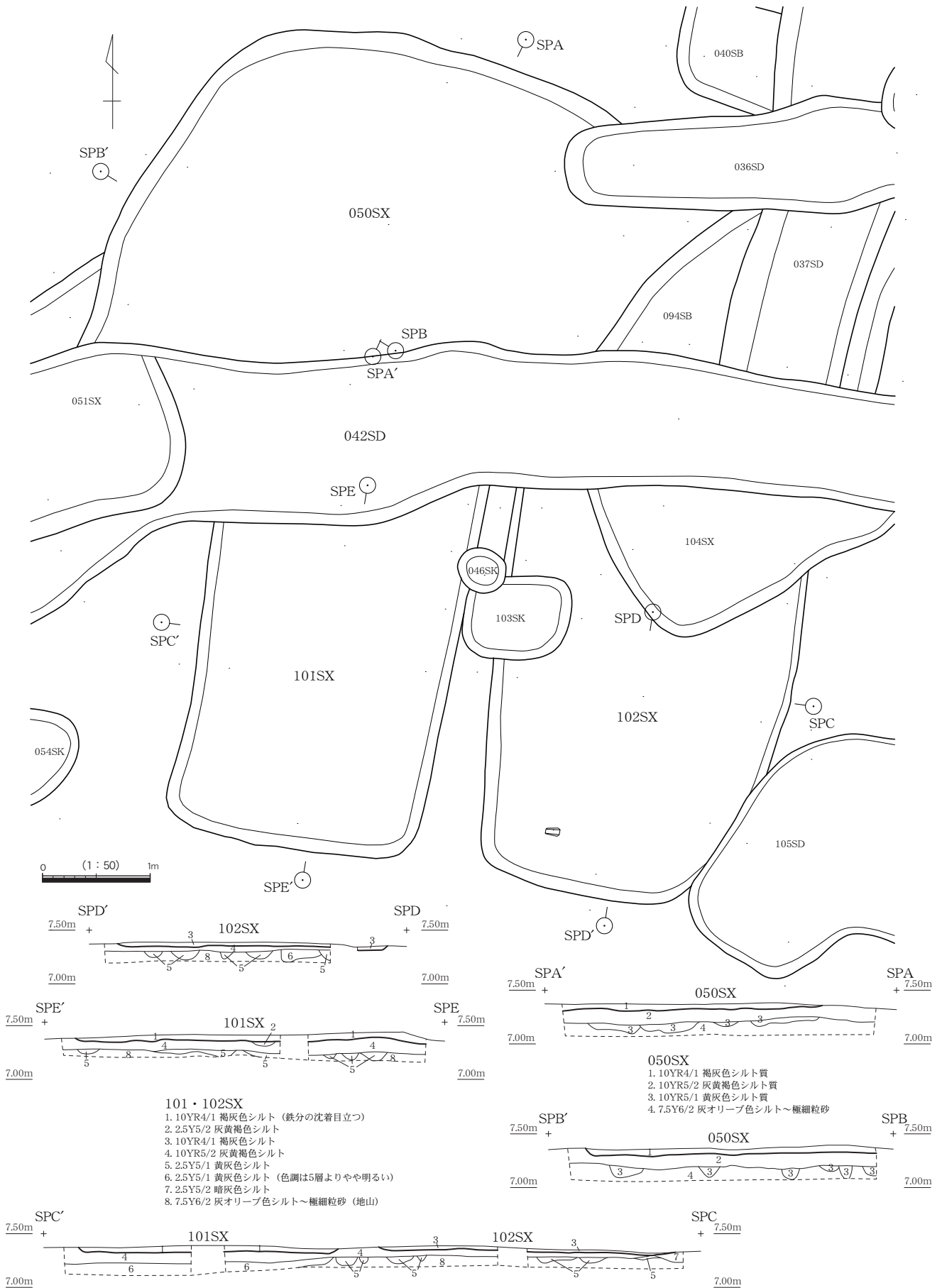
I 074SX・077SB・097SX (第 15 図)



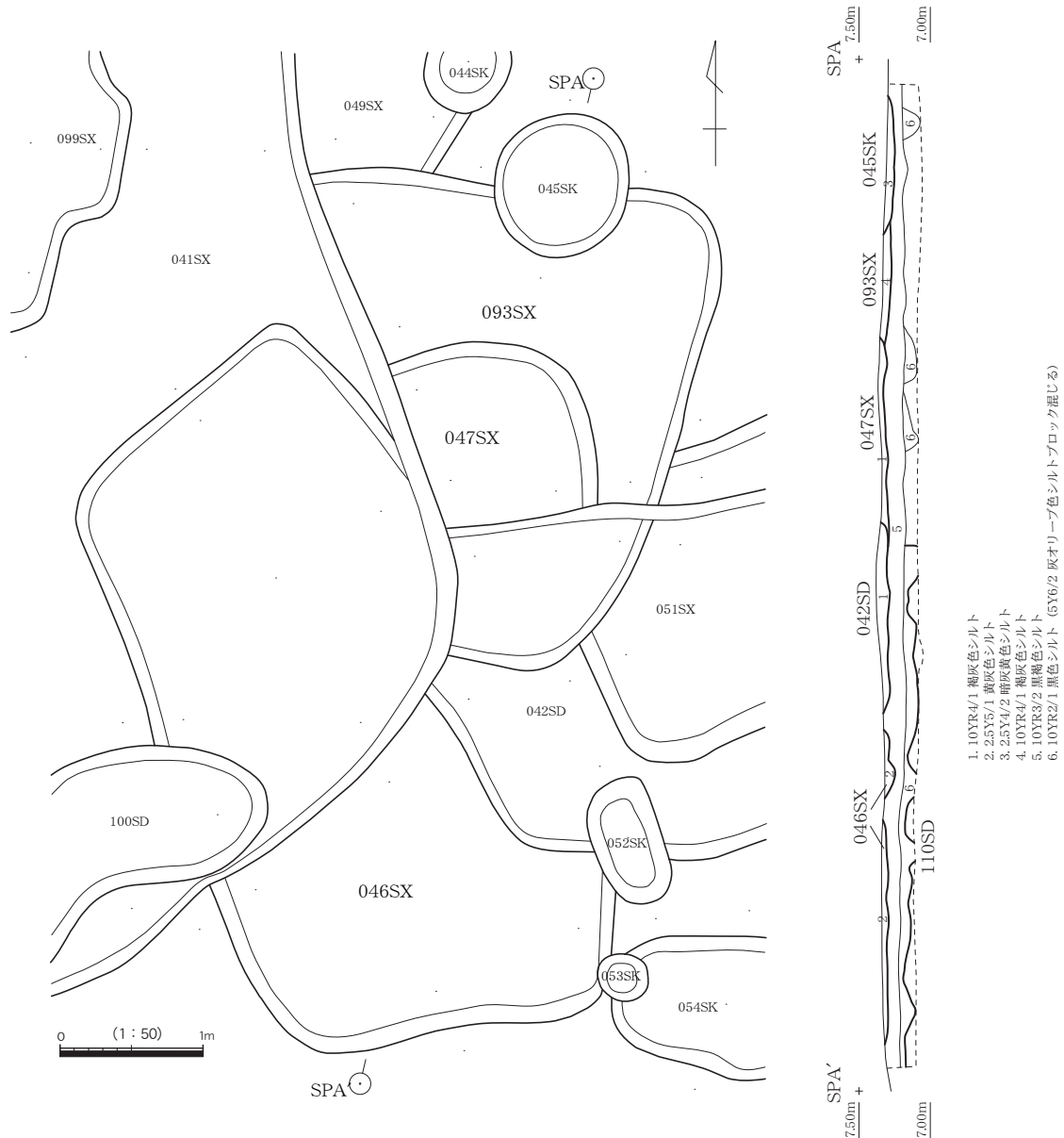
第 11 図 092SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)

074SX (SB) 調査区南東部に位置する。やや崩れた方形の皿状を呈する遺構である。土層観察 (C-C'、D-D') では緩い立ち上がりが見られるのみである。顕著な遺物の出土はなかった。性格不明遺構であるが、形状や方向は 042SD や 105・106SD のような東西方向の浅い溝に類似しておりその可能性もある。

077SB 074SX の北側に位置する。調査区東壁と攪乱で東半部が滅失しており、北半分はやや崩れた平面形をしているが南西隅が比較的明瞭に検出された。概ね方形の皿状を呈する遺構である。南北の長さは 325cm である。土層観察では南北方向 (B-B') で明瞭な壁の立ち上がりを認める。検出面か



第 12 図 050SX・094SB・101SX・102SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)



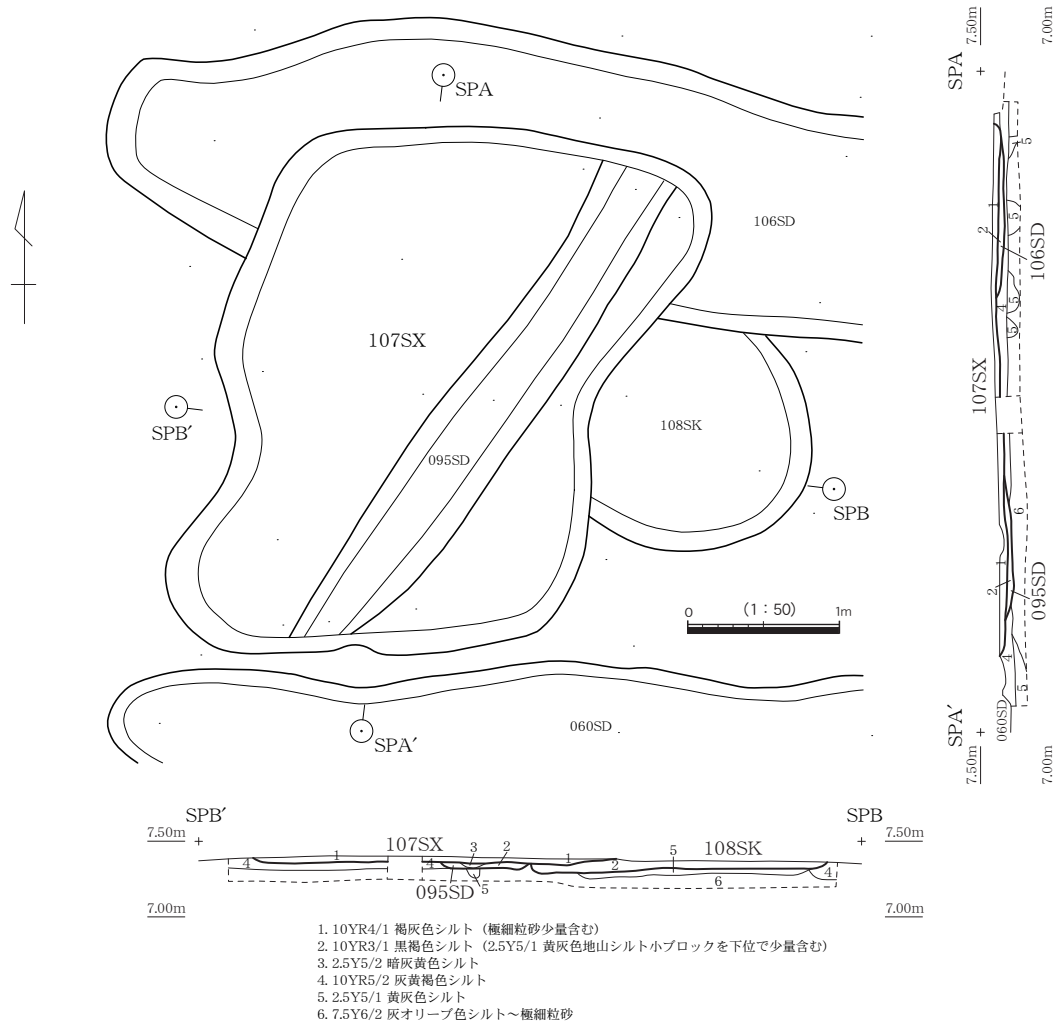
第 13 図 046SX・047SX・093SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)

らの深さは 5cm である。なお、同セクション 2 層は当該遺構外としたが、遺構埋土とした 1 層に対応して立ち上がっており関わりを考慮しておく必要がある。遺物は土師器小片が 11 点出土した。遺構形状から竪穴建物の掘方の可能性が考えられる。

097SX 074SX と一部重複してその南側に位置する。074SX の下位になる。2ヶ所の隅部をもつ推定方形で皿状の遺構である。東西方向に 446cm の方形になるとみられる。土層観察では、096SX による滅失のためほとんど埋土を認めず、遺物の出土もなく遺構の性格を想定するのは難しい。顕著な遺物の出土はなかった。

J 003SX・005SB・006SX・008SX (第 16・17 図)

003SX (SB) 調査区南端に位置する。005SB や 008SX の下位で検出された。不整形な平面形で皿状を呈する遺構である。北西辺から南東辺までの長さは 495cm である。遺構面からの深さは 6cm である。顕著な遺物はなく、性格不明遺構である。なお当該遺構の下位で竪穴建物の壁溝状となる 081SD が検出されているが、こちらは第 3 遺構面で検出されたもので、共時性は全くない。



第 14 図 107SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)

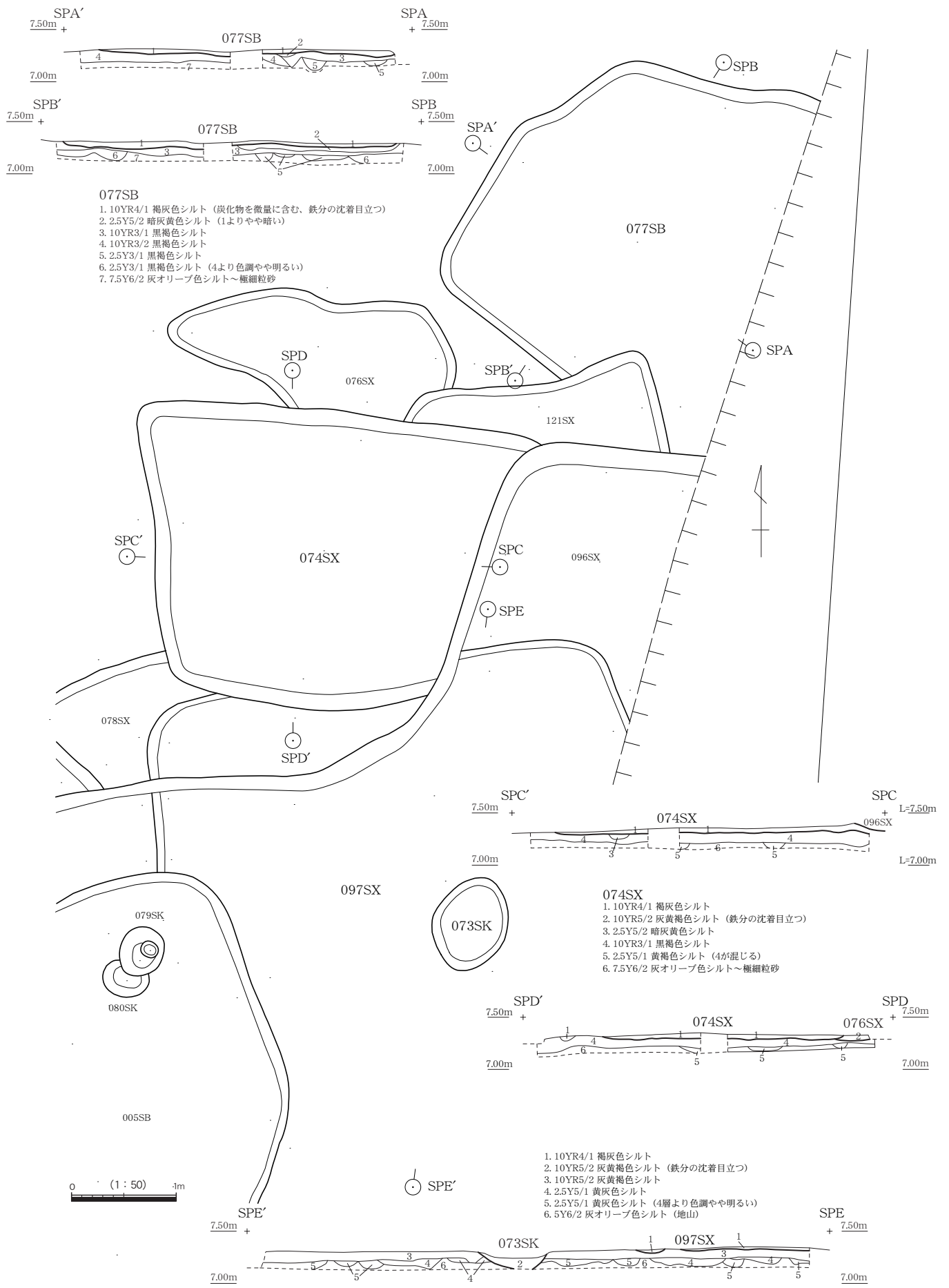
005SB 008SX に一部が重複して東側に位置する。北西と南西辺が明瞭で南東隅がやや欠けるものの長方形で皿状を呈する遺構である。南北 480cm × 東西 375cm で深さ 6 cm である。土層観察 (A-A'・E-E') では明瞭な立ち上がりを認める。北東隅の底部でピット (079SK・080SK) を検出した。顕著な遺物の出土はなかったが、遺構の形状から竪穴建物の掘り方の可能性が考えられる。

006SX (SB) 不整形な平面形で皿状を呈する遺構である。下位で 120SD が検出されている。顕著な遺物の出土はなかった。性格不明遺構である。

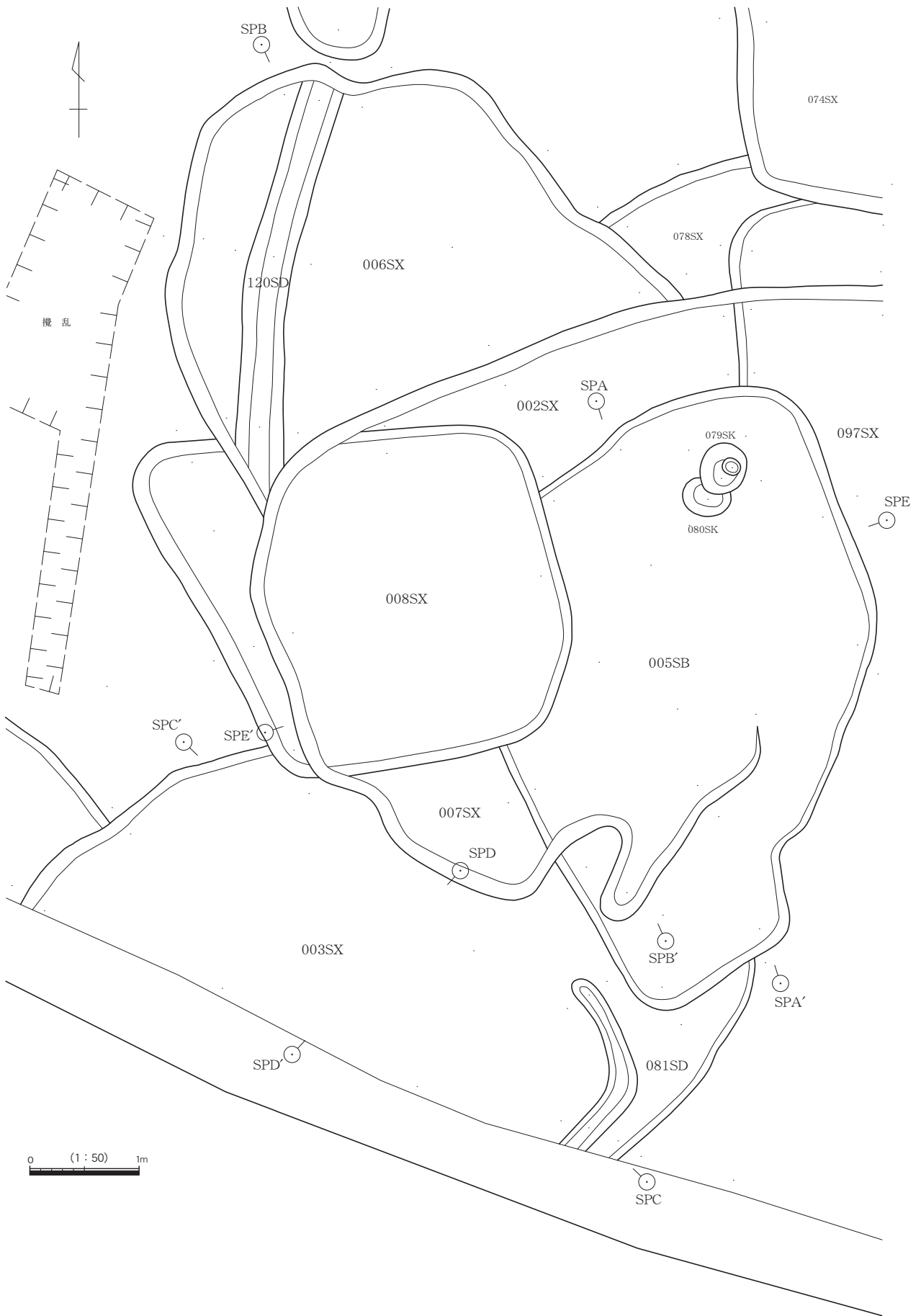
008SX (SB) 006SX の南側に位置する。平面形が台形で皿状を呈する遺構である。東西 260 ～ 355cm × 南北 325cm で深さは 4 cm である。重複関係では 002SX・006SX より古い。土層観察では明瞭な立ち上がりを認めるが、遺構の性格を示すには至らない。顕著な遺物の出土はなかった。

K 031SX (第 18 図)

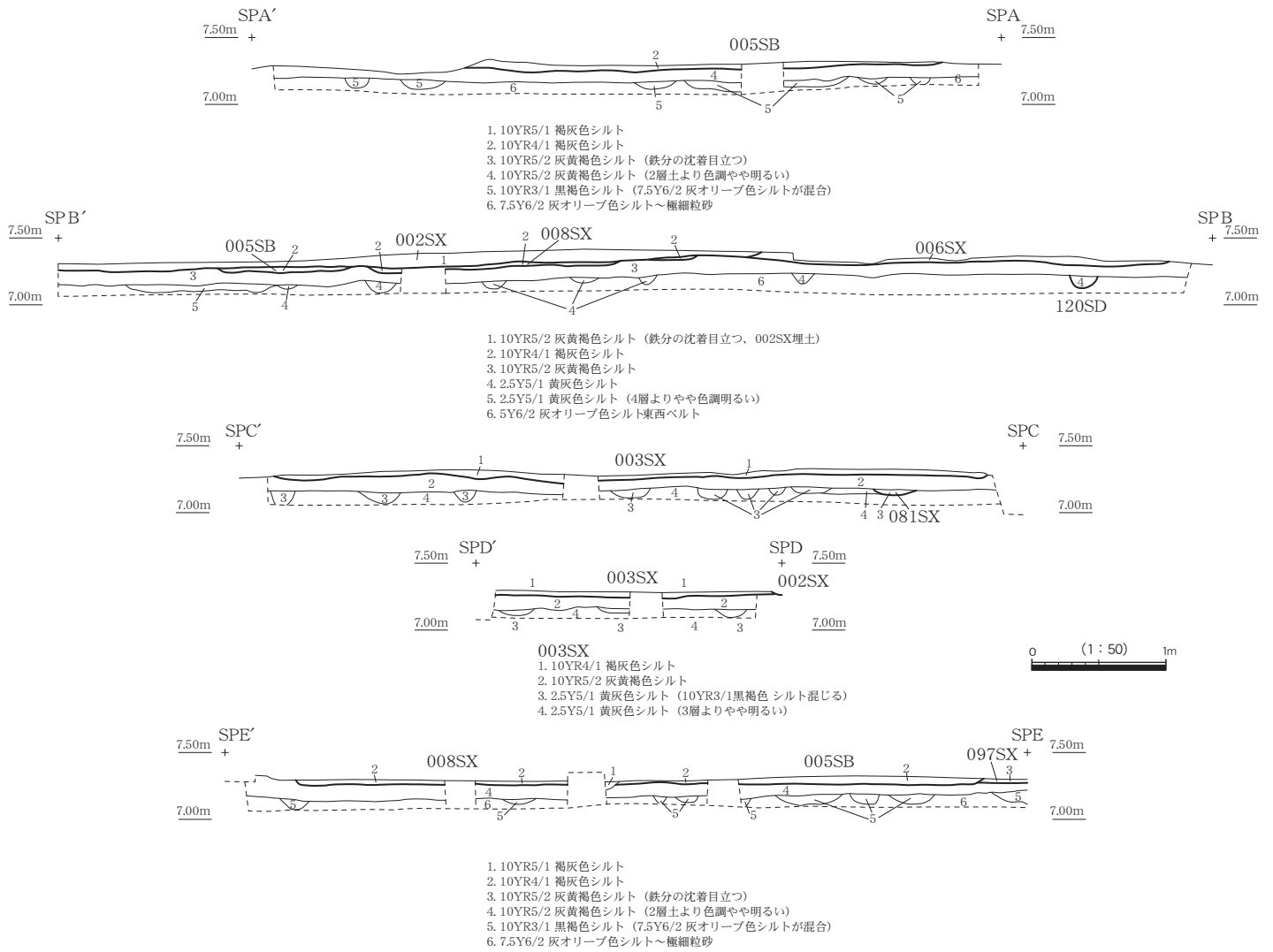
調査区の北部に位置する。直線的な東辺があるものの不整形な皿状の遺構である。008SX などの遺構が上位に重なり比較的古いと判断される。土層観察では東辺および北辺で明瞭な立ち上がりを認め、竪穴建物の可能性も考えられるが、性格不明遺構である。遺物は灰釉陶器小片が 4 点と土師器小片が 4 点出土した。



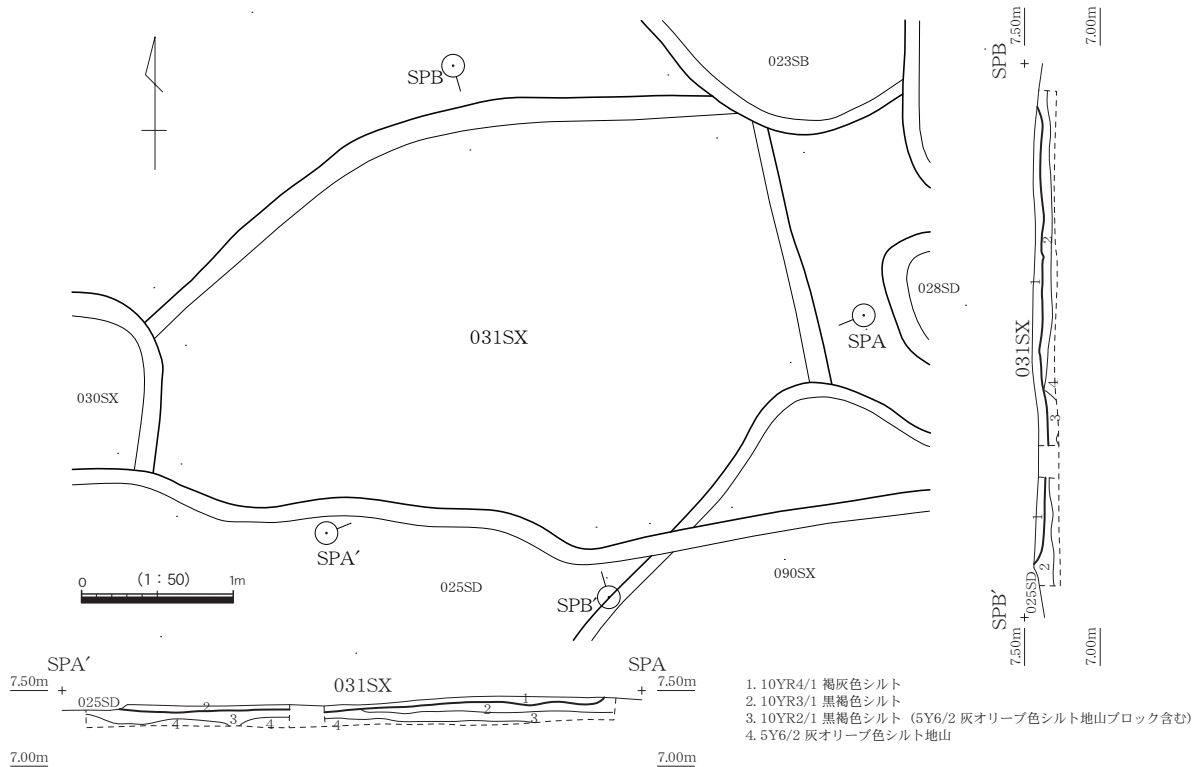
第 15 図 074SX・077SB・097SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 16 图 003SX · 005SB · 006SX · 008SX 平面图 (S=1/50)



第 17 図 003SX・005SB・006SX・008SX 土層断面図 (S=1/50)



第 18 図 031SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)

(2) 溝

A 042SD (第 12 図)

調査区中央部で東西方向にのびる素掘り溝である。幅約 54cm で深さ 6 cm である。他の遺構を切り込んでおり、比較的新しい時期のものと判断される。このような東西方向の溝は他に 063SD や 108SD があり、類似する性格が考えられる。

B 098SD 幅 98cm、深さ 6cm の浅い溝。上部より灰釉陶器底部片 (O11) が出土する。

3 第 3 面

(1) 竪穴状遺構・不明遺構

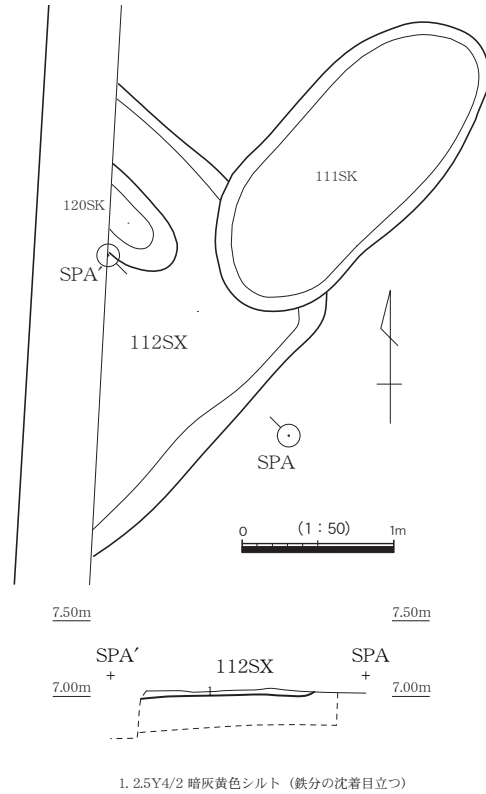
A 112SX (SB) (第 19 図)

調査区西壁付近に位置する。一部が検出されたのみであるが、方形の皿状を呈する遺構である。遺構面での検出状況からは竪穴建物の可能性を認めたが、土層観察では立ち上がりは緩く、確定的とはいいがたい。性格不明遺構。なお顕著な遺物はなかった。

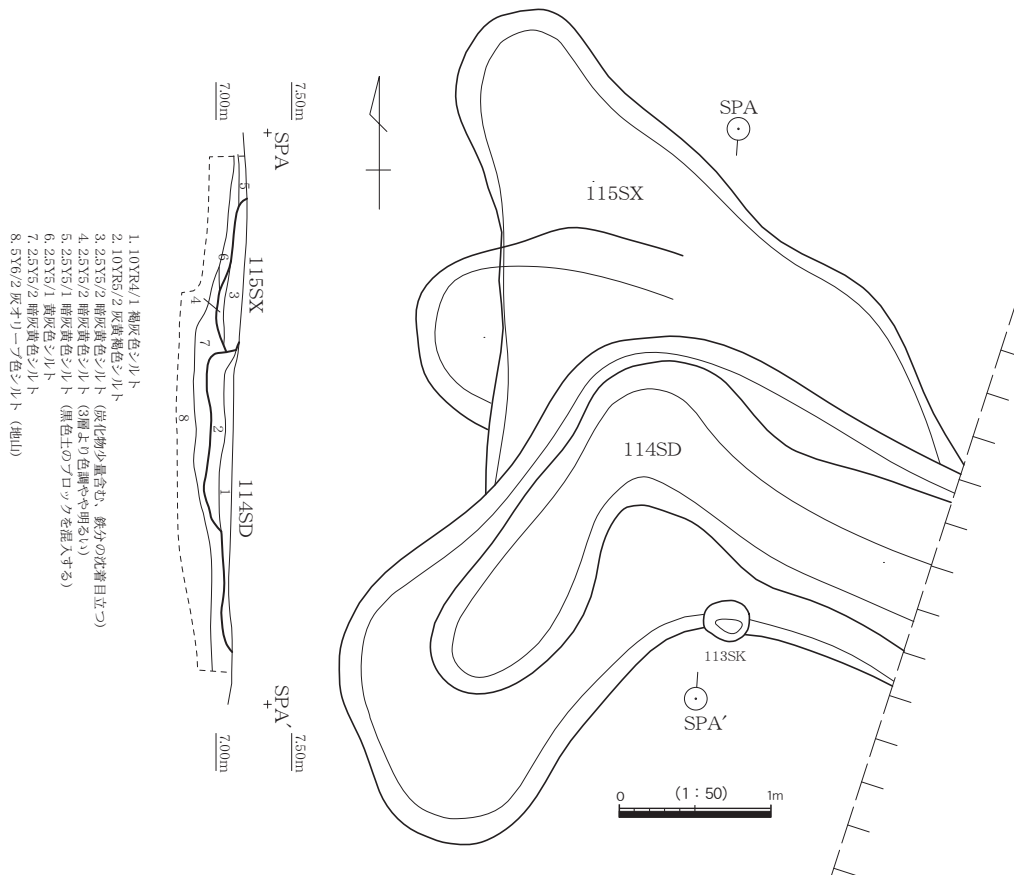
(2) 土坑

A 115SX (第 20 図)

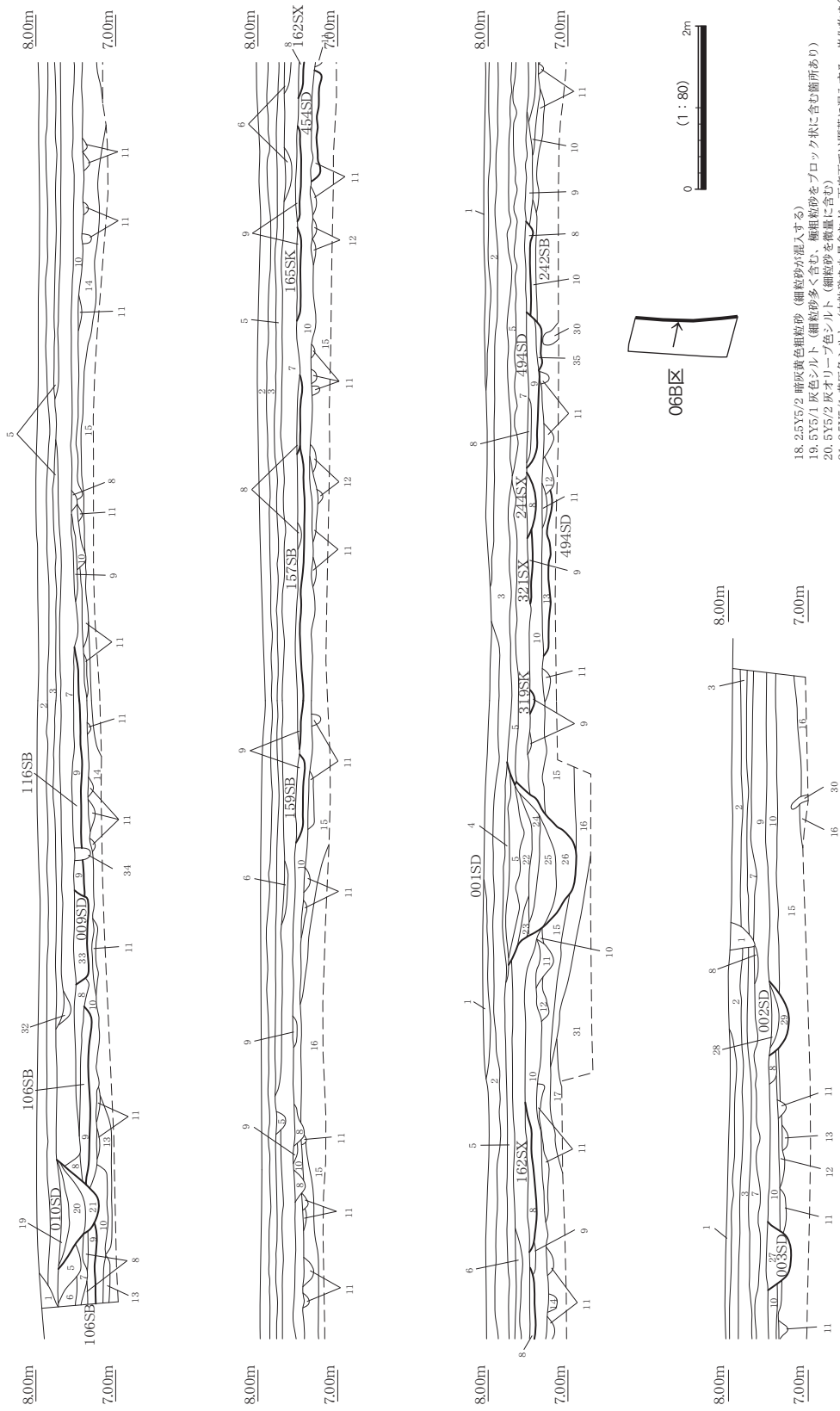
114SD の下位で検出された不整形な遺構である。断面は皿状とならずにやや深い箇所を認める。顕著な遺物はなかった。性格不明遺構である。



第 19 図 112SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 20 図 115SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 21 図 06B 区東岸土層断面図 (S=1/80)

- 06B 区東岸**
1. 5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂 (しまり強い、砂石含む)
 2. 5Y4/1 灰色細粒砂 (粗砂・小礫を多く含む、木片・角礫・ビニール片等を含む、調査開始時の新作土)
 3. 5Y4/1 灰色細粒砂 (中粒砂・小礫の混入目立つ、炭化物を微量に含む)
 4. 2.5Y5/2 黄灰色細粒砂 (中粒・粗砂の混入目立つ、炭化物を微量に含む)
 5. 10YR5/1 褐色細粒砂 (鉄分の沈着目立つ)
 6. 10YR5/1 褐色細粒砂 (細粒砂を混入する)
 7. 10YR4/1 褐色細粒砂 (9層土の小礫ブロックを含む、鉄分の沈着目立つ)
 8. 10YR5/1 褐色細粒砂 (鉄分の沈着目立つ)

9. 10YR4/1 褐色細粒砂 (細粒砂を少量含む)
10. 10YR3/1 黒褐色細粒砂 (5Y5/1=14層土シルトをブロック状に多量に含む)
11. 10YR3/1 黒褐色細粒砂 (他山シルトを少量混入する)
12. 10YR3/1 黒褐色細粒砂 (他山シルトを少量混入する)
13. 10YR5/1 褐色細粒砂 (他山 (15層) ブロック主体の層で、10層土を少量含む)
14. 5Y4/1 灰色細粒砂 (他山 (15層) ブロック主体の層で、10層土を少量含む)
15. 5Y5/1 灰色細粒砂 (以下は無遺物層)
16. 5Y4/1 灰色細粒砂 (炭化物をわずかに含む)
17. 5Y5/1 灰色細粒砂 (部分的に細粒砂を含む)

18. 2.5Y5/2 黄灰色粗粒砂 (細粒砂が混入する)
19. 5Y5/1 灰色シルト (細粒砂多く含む、細粒砂を混入する)
20. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト (細粒砂を微量に含む)
21. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (中粒砂を少量含むが、下底面では顕著に混入する、炭化物を微量に含む)
22. 5Y5/1 灰色シルト (細砂多く含む)
23. 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂 (中粒砂を多く含む)
24. 2.5Y7/1 灰白色細粒砂 (中粒砂が顕著に混入する)
25. 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂 (粗粒砂・小礫が顕著に多量に混入する、炭化物を微量に含む)
26. 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂 (粗粒砂・小礫が顕著に多量に混入する)
27. 10YR5/1 褐色細粒砂 (9層土を主体とし、9層土のシルトを少量混入する)
28. 10YR5/1 褐色細粒砂 (7層土を主体とし、9層土のシルトを少量混入する)
29. 10YR6/1 褐色細粒砂 (7層土を主体とし、15層土のシルトを少量混入する)
30. 5Y5/1 灰色細粒砂 (噴砂状)
31. 5Y5/1 灰色細粒砂 (細粒砂を混入する)
32. 5Y5/1 灰色細粒砂 (7層土を主体とし、5層土を少量混入する)
33. 5Y5/1 灰色細粒砂 (7層土を主体とし、23層と同様の土質であるが、しまり強い、木根痕か?)
34. 10YR4/1 褐色細粒砂 (7層土を主体とし、5層土を少量混入する)

(3) 溝

A 109SD

調査区北西部を西から北東方向へやや弧を描きながら走る溝。幅 118cm、深さ 28cm を測り、粘性の強い黒色シルトを埋土とする。遺物は出土していない。

B 114SD (第 20 図)

調査区の南東部に位置する。攪乱で滅失した箇所から西側で L 字に屈曲する部分を検出した。中央に深い部分がある。顕著な遺物はなかった。人為的に掘り込まれたものかやや疑わしい形状である。

C 117SD

調査区南端に位置する。不整形な溝状遺構である。北東方向から南西方向へ延びるが、北東端部は立ち消えとなり明瞭ではない。114SD などの延長である可能性も考えられるが、形状の違いがあるため否定的とならざるを得ない。

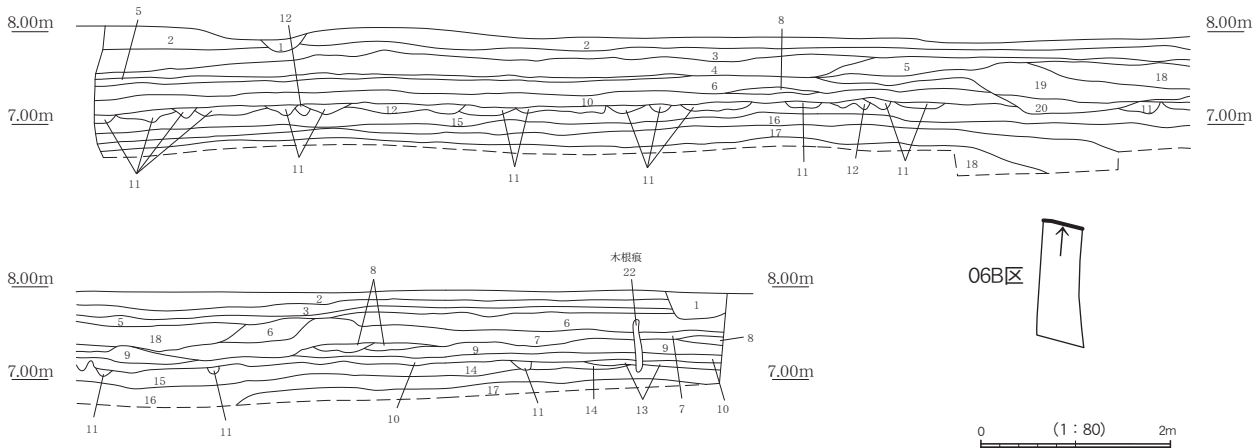
第 3 節 06B 区

1 調査の経過と概要

平成 18 年度の発掘調査で最初に表土掘削と遺構検出を実施した調査区である。表土掘削は、黒褐色シルト層の上面までの約 50cm を行い、溝状遺構を認めたためそれを第 1 面として遺構検出を実施した。結果、そのほとんどが東南東から西南西方向へ伸びる溝であった。出土遺物は近世以降のものが含まれた。それらの調査後、第 2 面への掘り下げを企図したが土量が膨大になるため再度重機による掘削を実施した。掘削時の遺物は弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗がある。

第 2 面は黒褐色シルト層上面に設定した。南接して 05A 区がありそこで 10 世紀代の竪穴建物を検出した経緯もあることから、同様に遺構の検出が予想された。竪穴建物と思われる方形の遺構と溝・土坑が検出された。しかしながらそれらは不明瞭なものも多く、その深さも検証する必要があるためサブトレンチを遺構に対して設定してから遺構掘削に入った。サブトレンチによる土層観察では、平面検出状況と符合しない堆積状況が認められることもあり、いくつかの遺構については再検討を行った。

第 3 面は砂質シルト層（基盤層）上面に設定した。遺物は寡少であったが、竪穴建物と南北に緩く蛇行しながらのびる小溝数条を検出した。



06B 区北壁

- | | |
|---|--|
| 1. 5Y5/2 灰オリーブ色極細粒砂（しまり弱い、碎石含む） | 12. 10YR3/1 黒褐色シルト（地山シルトを少量含む） |
| 2. 5Y4/1 灰色極細粒砂（粗砂・小礫を多く含む、木片・角礫・ビニール片等を含む、調査開始時の耕作土） | 13. 10YR5/1 褐色シルト |
| 3. 5Y4/1 灰色極細粒砂（中粒砂～小礫の混入目立つ） | 14. 5Y4/1 灰色シルト（地山（15層）ブロック主体の層で、10層土を少量含む） |
| 4. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂（中粒～粗砂の混入目立つ、炭化物を微量に含む） | 15. 5Y5/1 灰色シルト（以下は無遺物層） |
| 5. 10YR5/1 褐色極細粒砂（砂鉄分の沈着目立つ） | 16. 5Y4/1 灰色シルト（炭化物をわずかに含む） |
| 6. 10YR5/1 褐色シルト（細粒砂を混入する） | 17. 5Y5/1 灰色シルト（部分的に細粒砂を混入する） |
| 7. 10YR4/1 褐色シルト（9層土の小型ブロックを含む、鉄分の沈着目立つ） | 18. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗粒砂（細粒砂が混入する） |
| 8. 10YR5/1 褐色シルト（鉄分の沈着目立つ） | 19. 5Y5/1 灰色シルト（細粒砂多く含む、極粗粒砂をブロック状に含む箇所あり） |
| 9. 10YR4/1 褐色シルト（細粒砂を少量含む） | 20. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト（細粒砂を微量に含む） |
| 10. 10YR3/1 黒褐色シルト | 21. 2.5Y5/1 黄灰色シルト（中粒砂を少量含むが、下底面では顕著に混入する、炭化物を微量に含む） |
| 11. 10YR3/1 黒褐色シルト（5Y4/1=14層土シルトをブロック状に多量に含む） | 22. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂（しまり無し、木根痕と思われる） |

第 22 図 06B 区北壁土層断面図 (S=1/80)

2 第1面

(1) 溝

西北西から東南東にかけて走る 001SD を含め、002・003・006・007・008・010SD などの溝が同方向に走る。001SD は幅約 130cm、深さ約 110cm の溝で、褐灰色砂や黒褐色シルトとともに灰白色粗砂や灰黄色中粒砂などのやや粒の粗い砂が互層状の堆積している。時期は E 期。その他の溝の多くにも、もこれら粗砂が混入する。

3 第2面

(1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構

A 096SB・097SB・098SB・099SX (第 23 図)

096SB 調査区北西隅に位置する。097SB・098SB・266SB と重複関係にあり、その中で最も上位で検出された。当該遺構を切り込むのは 016SK・017SK の小土坑のみである。平面形は調査区外に延びるものの方角である。南辺の長さは 400cm である。土層観察によると B-B' の 1・2 層、C-C' の 2 層が該当するが、中央がやや浅くなり周溝状の掘方を反映しているものと考えられる。すなわち床面は滅失した状態にあるといえる。東辺と南西隅で壁溝とみられる落ち込みがみられたが、以上の理由から竪穴建物残存部の一部が検出されたと考えられる。なお顕著な出土遺物はみられなかった。

097SB 096SB の南側で一部重複してその下位で検出された、方形の遺構である。南東隅があり一辺の長さは 370cm 以上である。土層観察では浅い皿状の埋土と南東辺近くに壁溝にかかると思われる落ち込みが認められた。顕著な遺物はなかった。竪穴建物掘り方の可能性が考えられる。

098SB 097SB と重複してその下位で検出された。平面形状は一辺の長さは 450cm 以上である。土層観察 (F-F') では浅い皿状の埋土を認めた。097SB・226SB とは異なり掘り込みが深く掘り方が検出されている。南東辺では壁溝の一部が検出されている。竪穴建物の可能性が考えられる。顕著な遺物の出土はなかった。

099SX (SB) 098SB の東側に一部重複してその下位で検出された。土層観察 (E-E') では 098SB 同様に浅い皿状を呈する埋土が認められた。顕著な遺物はなかった。ほぼ同位置の第 3 遺構面で 414SB が検出されており、その上位にできた凹みの堆積である可能性が考えられる。

B 100SX・102SX・103SB・104SX (第 24 図)

100SX (SB) 調査区北部に位置する。推定方形に検出された遺構である。周辺で土坑と重複しその下位に位置する。北西辺で壁溝とみられる溝状の遺構を伴っている。土層観察 (G-G') では平らな堆積が認められるが壁の立ち上がりまでは確認できていない。顕著な遺物の出土はなかった。竪穴建物の可能性を考慮して調査したが、結果からはそれと判定するのは難しい。性格不明遺構である。

102SX (SB) 調査区北端に位置する。調査区北壁に接して 1ヶ所の隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。土層観察 (A-A') では緩い立ち上がりしか認められない。遺物は土師器小片が 1点出土したのみである。平面検出では竪穴建物の可能性が考えられたが、それ以外の観察所見からは竪穴建物と判定するのは難しい。性格不明遺構である。

103SB 100SX と一部重複してその東に位置する。2ヶ所に隅部がある推定方形の皿状を呈する遺構である。南西辺長は 510cm である。その南西辺では壁溝とみられる溝状遺構が伴っている。土層観察 (C-C') では明瞭な壁の立ち上がりを認める。顕著な出土遺物が全くなかったことや、やや不整形な遺構形状からやや懐疑的ではあるものの竪穴建物の可能性が考えられる。

104SX (SB) 102SX と一部重複してその南側に位置する。104SX の下位に検出された。土層観察 (B-B') では小さな凹みの連続しか認められず、平面検出にたいして否定的な結果となっている。顕著な遺物

もなく、性格不明遺構である。

C 106SB・114SB・115SB・116SB・117SB・118SB・119SX (第25・26図)

106SB 調査区北東部に位置する。調査区東壁に接して2か所に隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。南北長は412cmである。しかしながら土層観察(A-A'、B-B')で認められた壁の立ち上がり(2層)はこの結果と異なっており、西辺・南辺からそれぞれ約1m内側を廻っていることがわかる。またその下層にみられる明瞭な立ち上がりの堆積(4・6層)は、ほぼ同一規模の遺構が若干北側にずれて存在していることを示している。このことから2点の所見が導かれる。ひとつは、4・6層が106SBの掘方に相当し2層は床面上の埋土であるという点である。もう一点は、A'付近にみられる浅い皿状の凹みは106SBとは別の遺構であり、平面検出の結果は訂正されねばならない、ということである。結果としては比較的良好な竪穴建物であることが判明した。遺物は灰釉陶器小片が3点と土師器小片が多数出土している。時期は平安時代以降である。

114SB 115SBと一部重複してその南西側に位置する。重複関係では115SBの後になる。隅部が2ヶ所ある推定方形で皿状を呈する遺構である。東辺は275cmで深さは2cmである。底面では柱穴や壁溝は検出されなかった。土層観察(H-H'、I-I')では明瞭な壁の立ち上がりが認められる。遺物は土師器小片が6点出土した。竪穴建物の可能性が考えられる。

115SB 117SBと一部重複してその南側に位置する。重複関係では117SBの後になる。底面では壁溝が認められたが土層観察(G-G')ではわずかな凹みである。またその南北長は448cmであり、平面検出の結果とは齟齬がある。ここでは土層観察の所見を優先して遺構の形状を訂正する。遺物は灰釉陶器小片が3点と土師器小片が多数出土している。平安時代の竪穴建物と考えられる。

116SB 調査区東壁に接して位置する。1ヶ所に隅部のある推定方形の皿状を呈する遺構である。深さは2cmである。土層観察(F-F')では明瞭な壁の立ち上がりが認められる。遺物は土師器小片が5点出土している。竪穴建物の可能性が考えられる。

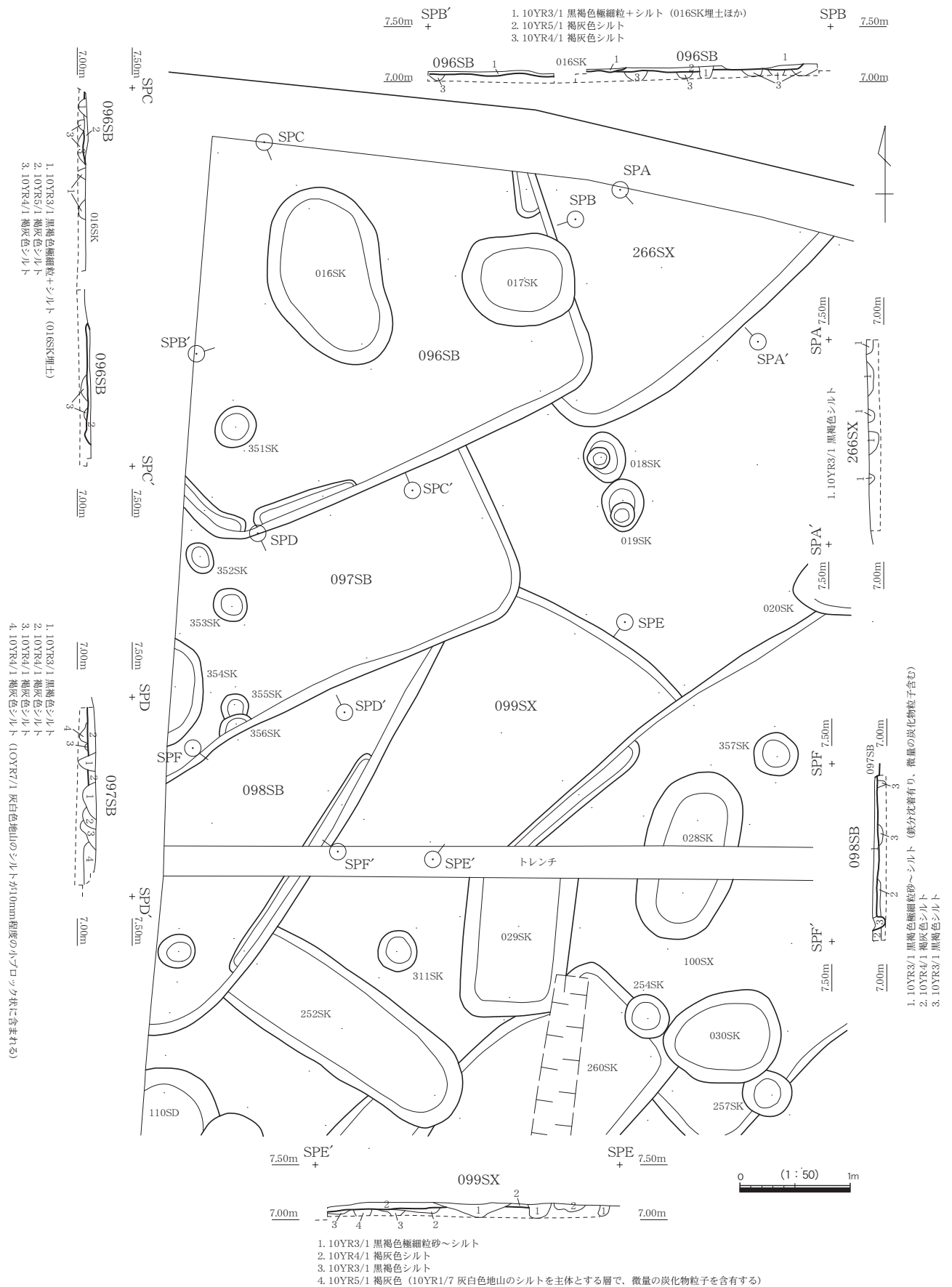
117SB 118SBと一部重複してその南側に位置する。118SBの上位で検出された。底面では壁溝が認められたが土層観察(D-D')では認められていない。また堆積状況からすると周溝状の凹みが認められることから、竪穴建物の掘方が検出されたものと考えられる。遺物は灰釉陶器小片が3点と土師器小片が3点出土している。時期は平安時代以降である。

118SB 106SBと一部重複してその南側に位置する。106SBの上位にあって1ヶ所の隅部がある推定方形の遺構で皿状を呈する遺構である。土層観察(C-C')では明瞭な壁の立ち上がりが認められる。堆積層は上下2層あり、上層の灰色がかかったシルト層が床面上の埋土に相当し下層は掘方と考えられる。壁溝などは検出されなかった。顕著な遺物の出土はなかったが、堆積状況から竪穴建物の可能性が高いと考えられる。

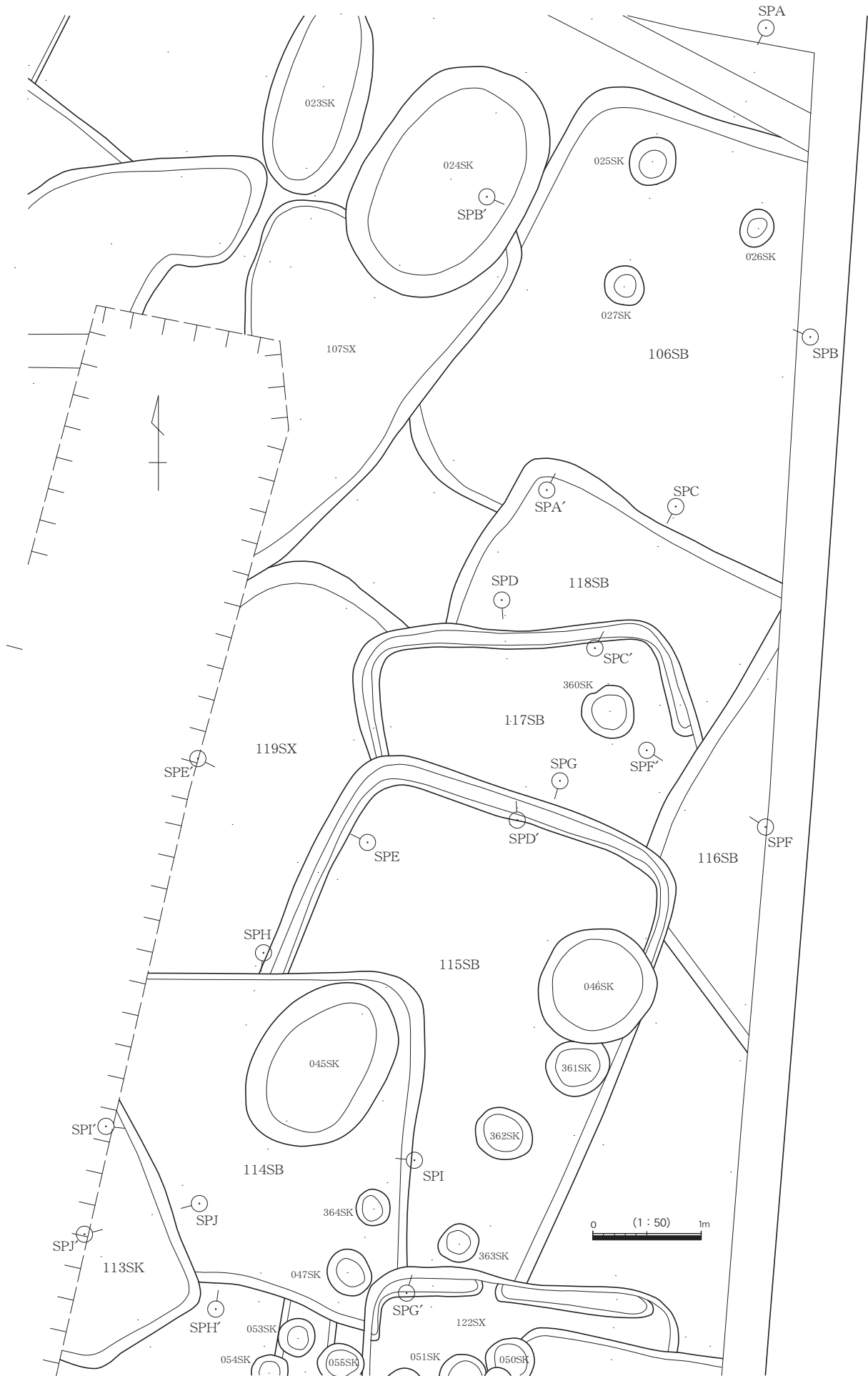
119SX (SB) 117SBと一部重複してその西側に位置する。丸みのある隅部が1ヶ所ある皿状を呈する遺構である。土層観察(E-E')では明瞭な立ち上がりがあって東側に位置する115SBと重複関係がないことが示される。当該遺構の下位の第3面で溝状遺構が検出されており、その影響でできた凹みの可能性もあるが、いずれにせよ平面検出と土層観察の所見に食い違いがあり、竪穴建物と判定するのは難しい。顕著な遺物の出土はなかった。

D 267SX・282SB・283SB・284SX (第27図)

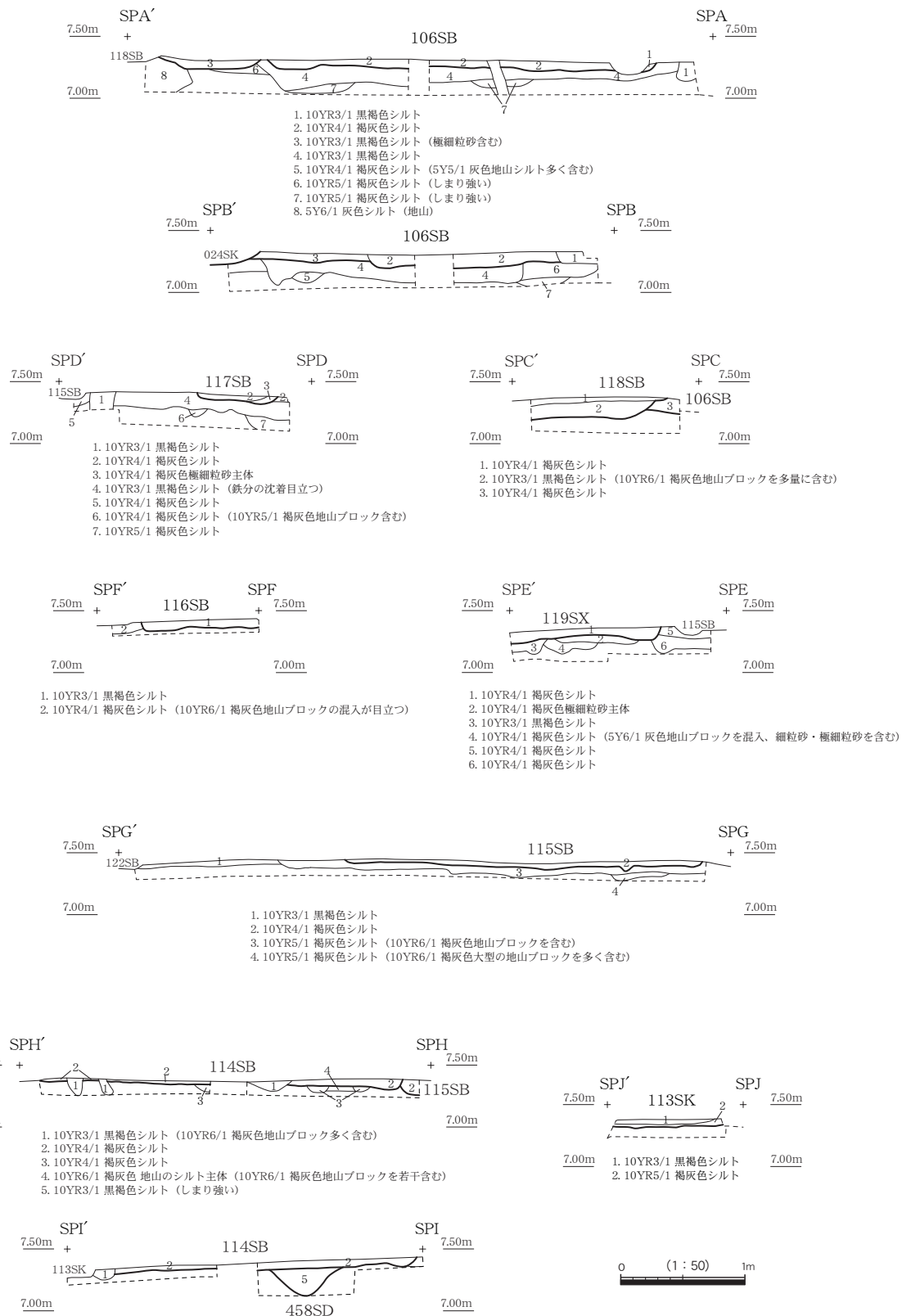
267SX (SB) 調査区北部に位置する。282SB・283SBと一部重複してその東側に位置する。2ヶ所に隅部のある推定方形で皿状を呈する遺構である。しかしながら溝状遺構(125SD)との重複関係も明確でなく、やや不安定な平面検出であった。土層観察(A-A'、B-B')では有る程度の平らな堆積は認められるものの、壁の立ち上がりは不明で、地山の上に堆積する黒褐色シルト遺物包含層を検出しただけにすぎないとも考えられる。顕著な遺物の出土もなく、性格不明遺構である。



第 23 図 096SB・097SB・098SB・099SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 25 图 106SB · 114SB · 115SB · 116SB · 117SB · 118SB · 119SX 平面图 (S=1/50)



第 26 図 106SB・114SB・115SB・116SB・117SB・118SB・119SX 土層断面図 (S=1/50)

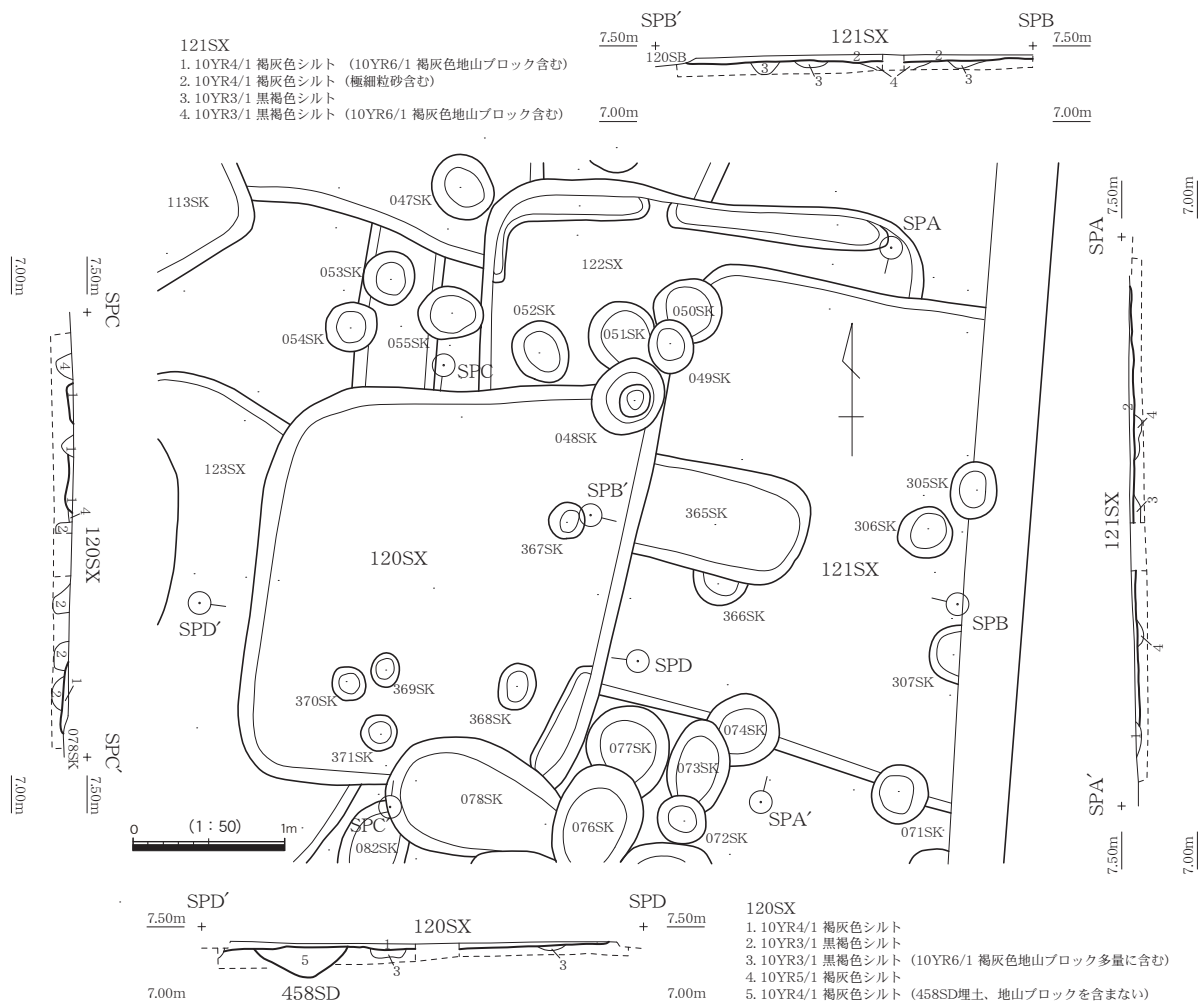
282SB 283SB と重複してその北側に位置する。2ヶ所に隅部のある推定方形で皿状を呈する遺構である。南辺長300cmで深さは10cmである。しかしながら平面検出で見出した南辺は土層観察(C-C')では該当箇所では壁の立ち上がりが認められなかった。そして283SBと同様な堆積状況であることや、遺構平面が同じで東辺も概ね延長上にあることから、282SBが283SBの一部であった可能性が考えられる。遺物は土師器小片が8点とA-2期(弥生時代中期古井式)小片が1点出土している。

283SB 282SB と重複してその南側に位置する。2ヶ所で隅部のある推定方形で皿状を呈する遺構である。南辺長433cmで深さ8cmである。土層観察(C-C'、E-E')ではともに平面検出での該当箇所では明瞭な壁の立ち上がりが認められる。なお、282SBとの重複関係が土層観察で見出せない点は先述の通りである。その判定に従うと南北長425cmの規模となる。顕著な遺物の出土はなかったが、竪穴建物の可能性が高い。時期は他の遺構との重複関係や出土遺物に灰釉陶器などが含まれていない点を考えると、当該遺跡では比較的古い古墳時代前期以前に遡る可能性も考えられる。

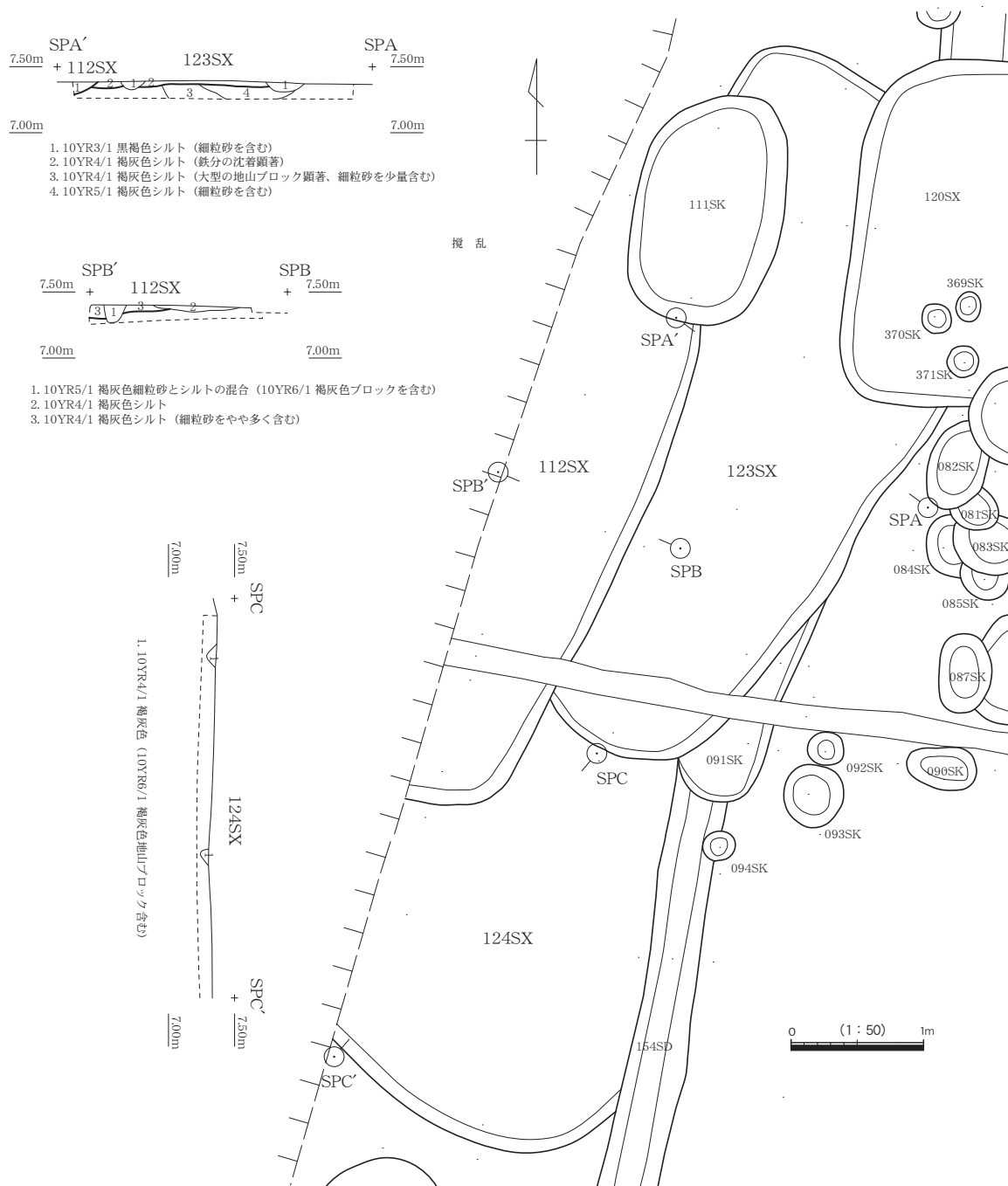
284SX (SB) 283SB と重複してその南に位置する。重複関係では284SBが前になる。2ヶ所に隅部のある推定方形で皿状を呈する遺構である。南辺長310cmで深さ6cmである。しかしながら土層観察(SPF-SPF')では平らな堆積状況が認められずかつ壁の立ち上がりも全くみられなかった。遺物は土師器小片が1点出土している。性格不明遺構である。

E 120SX・121SX・122SX (第28図)

120SX (SB) 調査区北東部に位置する。不整形な方形で皿状を呈する遺構である。南北長は255cmで深さは3cmである。土層観察(D-D')では明瞭な立ち上がりは認められなかった。遺物は灰釉陶器小片が2点と土師器小片が多数出土している。平面検出では竪穴建物の可能性が考えられたが、土



第28図 120SX・121SX・122SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 29 図 112SX・123SX・124SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)

層観察の所見からその判定は難しい。

121SX (SB) 120SX と重複してその東側に位置する。重複関係では 121SB が前になる。調査区東壁に接して隅部が 2ヶ所ある推定方形で皿状を呈する遺構である。南北長は 309cm で深さは 5cm である。底面で壁溝や柱穴は検出されなかった。土層観察 (A-A') では緩い立ち上がりが認められる。遺物は灰釉陶器椀 (O14) が 1点と土師器小片が 6点出土した。前者は 9世紀後半代とみられる。当該遺構は平面検出で竪穴建物と判断されたが、土層観察の結果はそれと判定するのは難しい。

122SX (SB) 121SX と一部重複してその北側に位置する。重複関係では 122SX が前になる。隅部が 2ヶ所ある推定方形で皿状を呈する遺構である。北辺長は 284cm で深さは 3cm である。北辺に

そって壁溝が認められるが、当該部分の土層観察の記録は得られていない。遺物は土師器小片が2点出土した。平面形状は竪穴建物を推測させるが、これ以外に明確な記録がないためその判定は難しい。性格不明遺構とする。

F 112SX・123SX・124SX (第29図)

112SX 調査区中部やや北よりに位置する。南北に長い攪乱によって西側が滅失している。隅部が1ヶ所ある推定方形で皿状を呈する遺構である。土層観察(B-B')では緩い立ち上がりを伴う浅い掘り込みの堆積が認められる。遺物は灰釉陶器椀(033)ほか小片が2点と土師器小片が5点出土した。033は折戸53号窯期と推定する。性格不明遺構である。

123SX (SB) 112SXと一部重複してその東側に位置する。2ヶ所に隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。形状は112SXに類似する。遺物は土師器小片が2点出土した。平面検出では竪穴建物を推定したが、結果的にその判定は難しい。

124SX 112SX・123SXと一部重複してその南側に位置する。重複関係では一番先行する。形状は、平面検出では丸みのある隅部を1ヶ所で認めたが、土層観察(C-C')では遺構にかかわる堆積がみられなかった。このように平面検出では遺構が見出せても土層観察ではほとんどそれが見出せない場合もある。

G 129SX・130SX・379SX・127SX (第30図)

129SX 調査区中部やや西よりに位置する。130SXの南側に位置する。平面検出時は別遺構として扱っていたが、土層観察(B-B')では130SXと同一遺構の可能性が示された。遺物は土師器小片が7点出土している。

130SX 129SXの北側に位置する。不整形かつその全体が把握できなかった遺構である。土層観察(B-B')では129SXとほぼ同一の遺構であると判断される。とすると、基本は南北415cmの方形遺構であると考えられる。また土層観察によると明瞭な壁の立ち上がりが1ヶ所で認められる。しかしながら壁溝や柱穴などの床面施設は検出されておらず、竪穴建物と判定するには至らない。なお、遺物は130SXとして土師器小片が2点出土している。

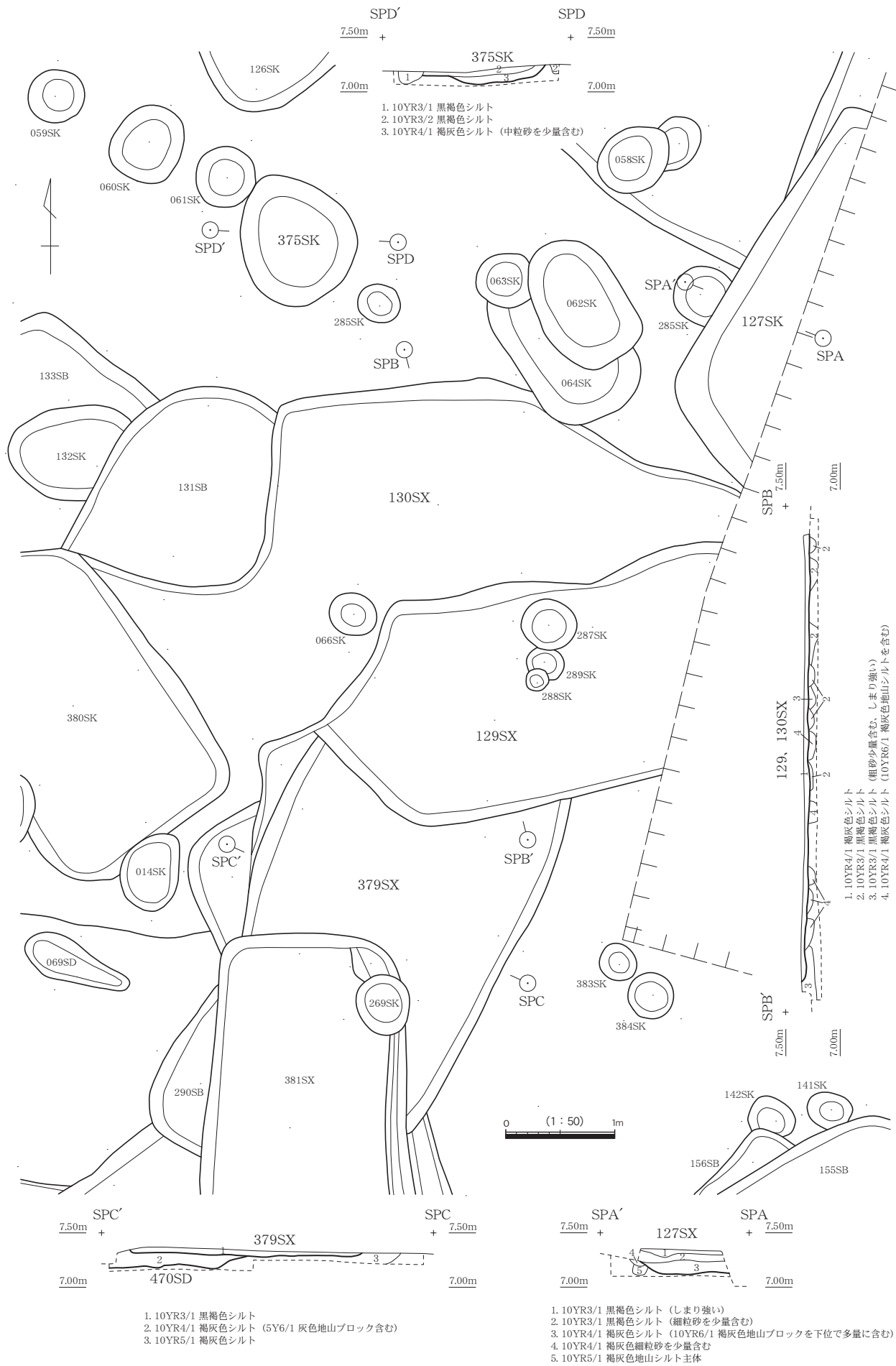
379SX (SB) 381SXと重複してその北側に位置する。平面検出時に別遺構とした290SXと同一で推定長方形の遺構である。当該遺構の平面検出時に竪穴建物として認識したが、後に下位の第3面に470SDが検出されてその上層部分である可能性が示された。顕著な遺物は出土していない。

127SX (SB) 攪乱によって東半分が滅失した状態で検出された。2ヶ所に隅部がある推定長方形の遺構である。土層観察(A-A')では深い掘り込みにできた堆積が認められる。しかしながら下位の第3面で溝(470SD)が検出されたことから、その一部であることが再検討の結果明らかとなった。したがって当該遺構からは土師器小片1点が出土しているが、これは470SDに伴うものである。

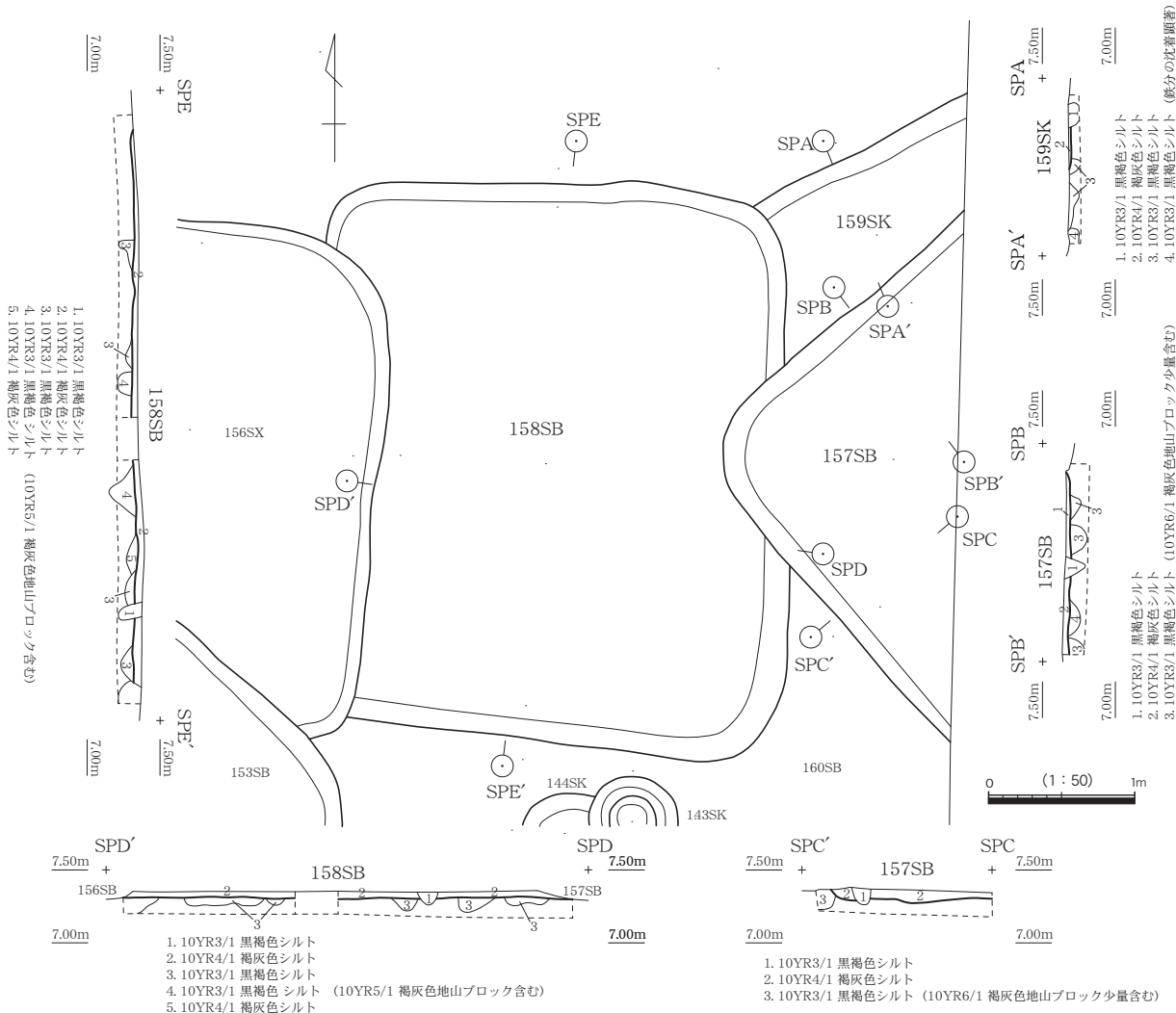
H 157SB・158SB (第31図)

157SB 調査区中部やや東よりに位置する。158SBと重複してその東側に位置する。重複関係では158SBの後になる。調査区東壁に接して、1ヶ所に隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。西辺の方位はグリッド北から東へ50°振れる。深さは7cmである。土層観察(B-B'、C-C')では明瞭な壁の立ち上がりが認められる。底面で壁溝や柱穴は検出されなかったものの、平面検出状況が明瞭であることから竪穴建物の可能性が高いと考えられる。遺物は土師器小片が多数出土しているが、158SBとの重複関係からすると時期は平安時代以降と推定される。

158SB 157SBと重複してその西側に位置する。一部は地山である砂質シルト層上面にて検出されている。3ヶ所に隅部のある隅丸正方形で皿状を呈する遺構である。南北長380cmで深さ8cmである。土層観察(E-E')では明瞭な壁の立ち上がりが認められる。底面で壁溝や柱穴は検出されなかったが、平面検出状況も明瞭であることから竪穴建物の可能性が高いと考えられる。遺物は灰釉陶器小片が3



第 30 図 129SX・130SX・379SX・127SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 31 図 157SB・158SB 平面図・土層断面図 (S=1/50)

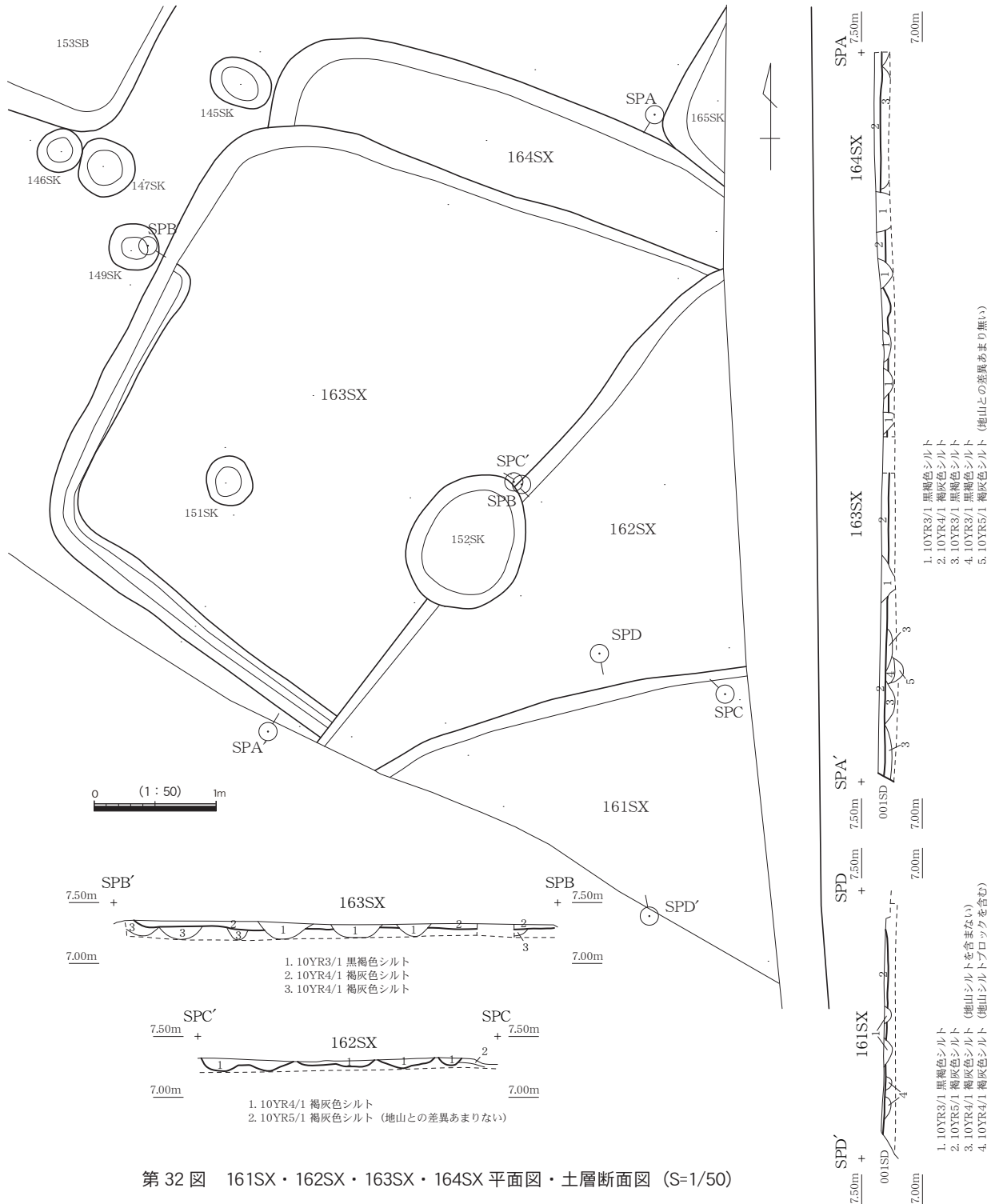
点と、土師器小片が多数出土している。時期は平安時代以降と推定される。

1 161SX・162SX・163SX・164SX (第 32 図)

161SX 調査区中部やや南よりに位置する。調査区東壁や 001SD に切られる形で一部が検出されている。直線状に東西に延びる遺構平面の一部によって、当初竪穴建物の可能性が考えられた。土層観察 (D-D') では、浅い皿状の堆積を認める。遺物は土師器小片が多数出土している。しかしながらこれらの所見のみで遺構の性格を判定するのは難しく、性格不明遺構とした。

162SX 161SX 同様に直線状な遺構平面の一部が検出されたにとどまる。これも竪穴建物を推定させたが、土層観察 (C-C') では小さな凹凸の連続がみられたのみで、その可能性は低いと考えられる。遺物は土師器小片が多数出土している。性格不明遺構である。

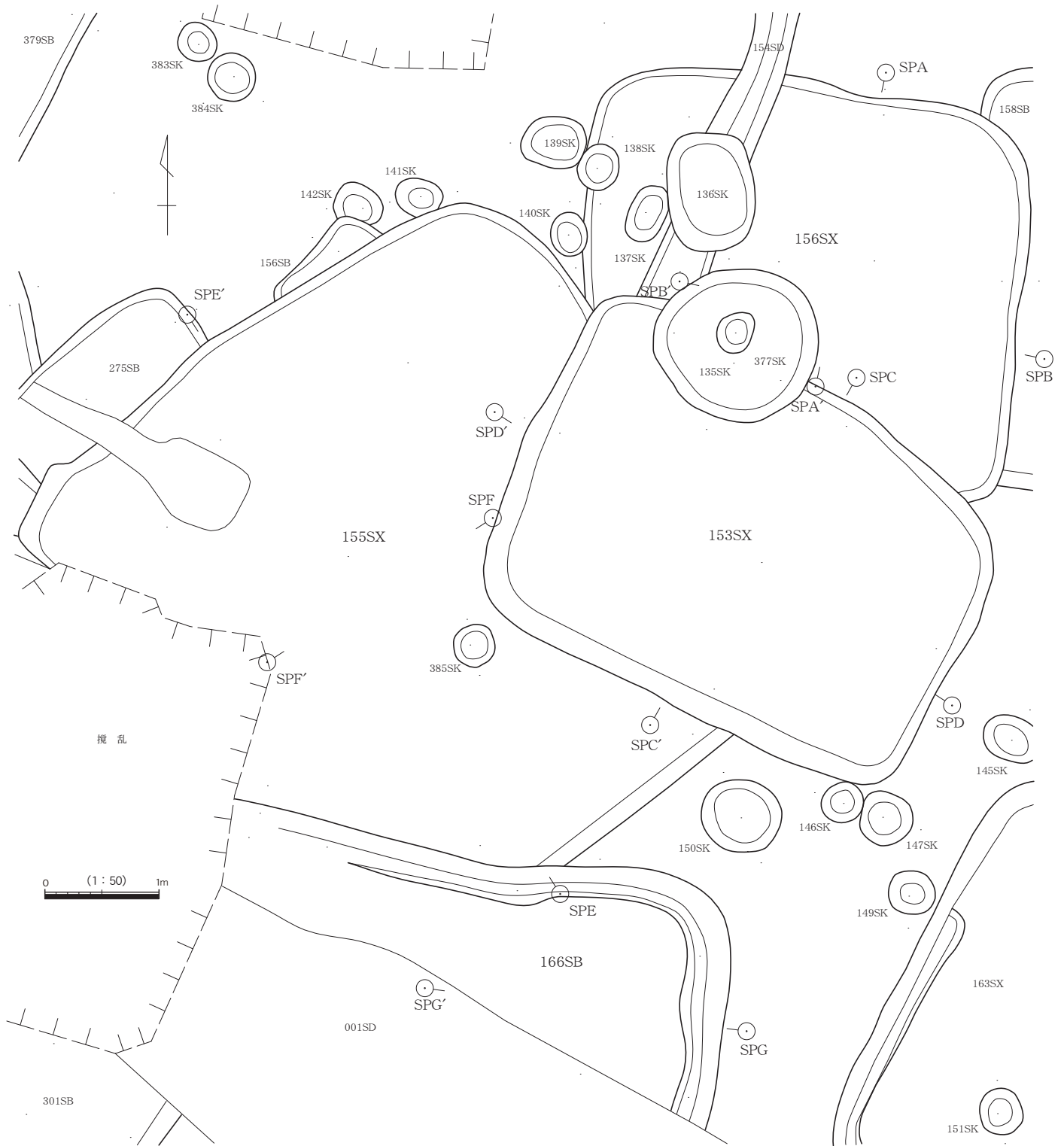
163SX (SB) 161SX・162SX と重複してその西側に位置する。2ヶ所の隅部がある推定方形の皿状を呈する遺構である。西辺長は 410cm で深さ 10cm である。当初竪穴建物として認識していた遺構である。西辺から南辺に沿って壁溝が検出されている。また 151SK は柱穴にふさわしい位置にあるが当該遺構との関係ははっきりしない。土層観察 (A-A'、B-B') では、明瞭な壁の立ち上がり認められるが、南辺である A' 付近で立ち上がりや壁溝がみられないのは疑問が残る。遺物は土師器小片が多数出土している。平面検出と土層観察所見の食い違いに不安定さがみられその形状は未確定であり、



竪穴建物と判定するのは難しい。

164SX (SB) 163SB と重複してその北側に位置する。1ヶ所の隅部がある推定方形の遺構である。深さは12cmである。土層観察(A-A')では平らな堆積をみとめるが163SXとの境界が不明瞭であり、確定的でない。またA付近でも立ち上がり認められず、形状に疑問が残る。したがってこれも竪穴建物の可能性を判定することが難しい。遺物は土師器小片が多数出土している。

161SX～164SXは平面検出では竪穴建物の重複を想定したが、土層観察で明らかになったのは163SX西側の立ち上がりのみである。また共通する点として土師器小片が多数出土していることで、一連の浅い落ち込みであるとも考えられる。また、このような直線状になる遺構の一部のみが確定す

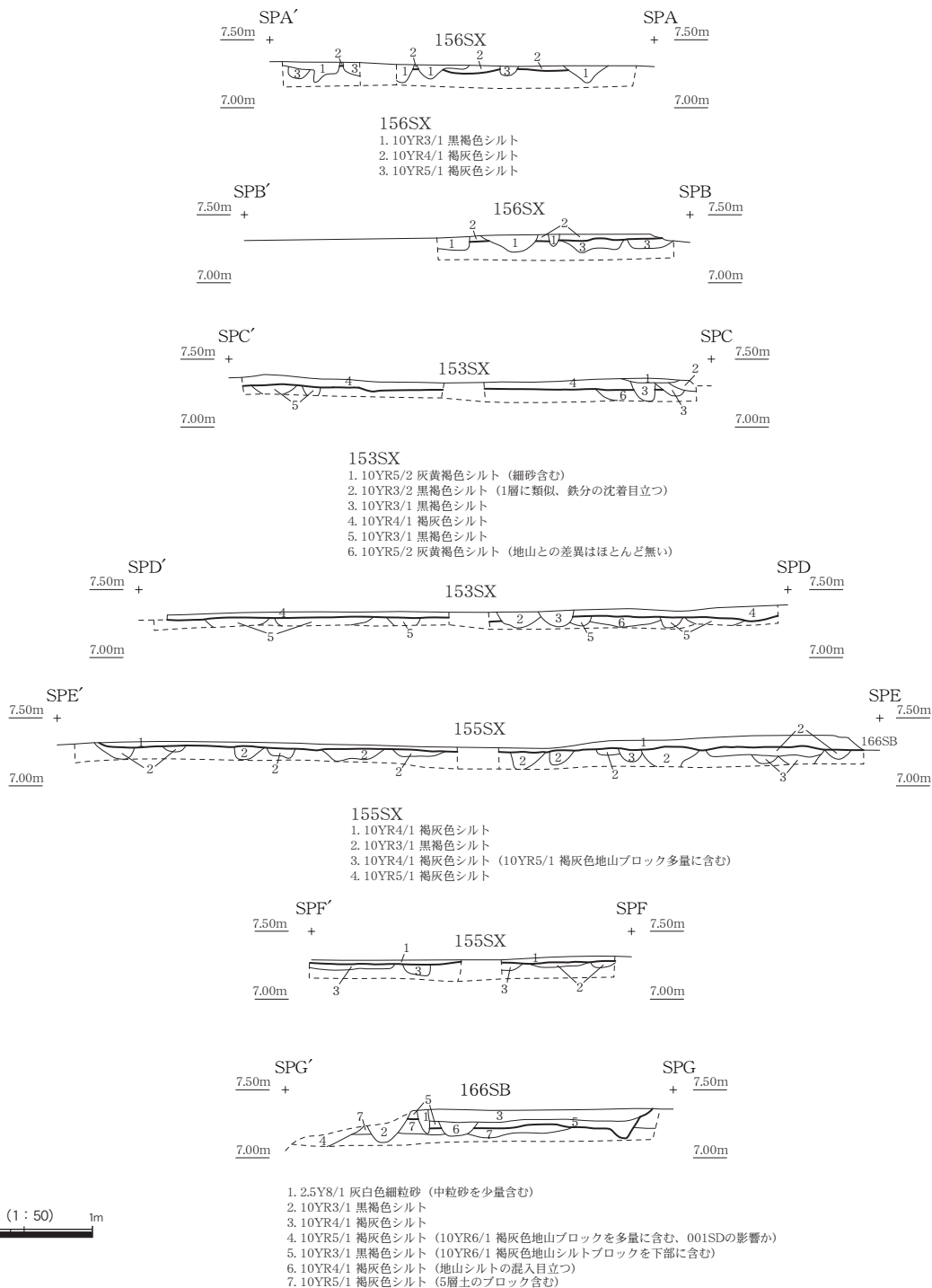


第 33 図 153SX・155SX・156SX・166SB 平面図 (S=1/50)

る事例は、当該調査区南端での 246SX～248SX でも示すように、水田遺構である可能性を考えておくべきであろう。

J 153SX・155SX・156SX・166SB (第 33・34 図)

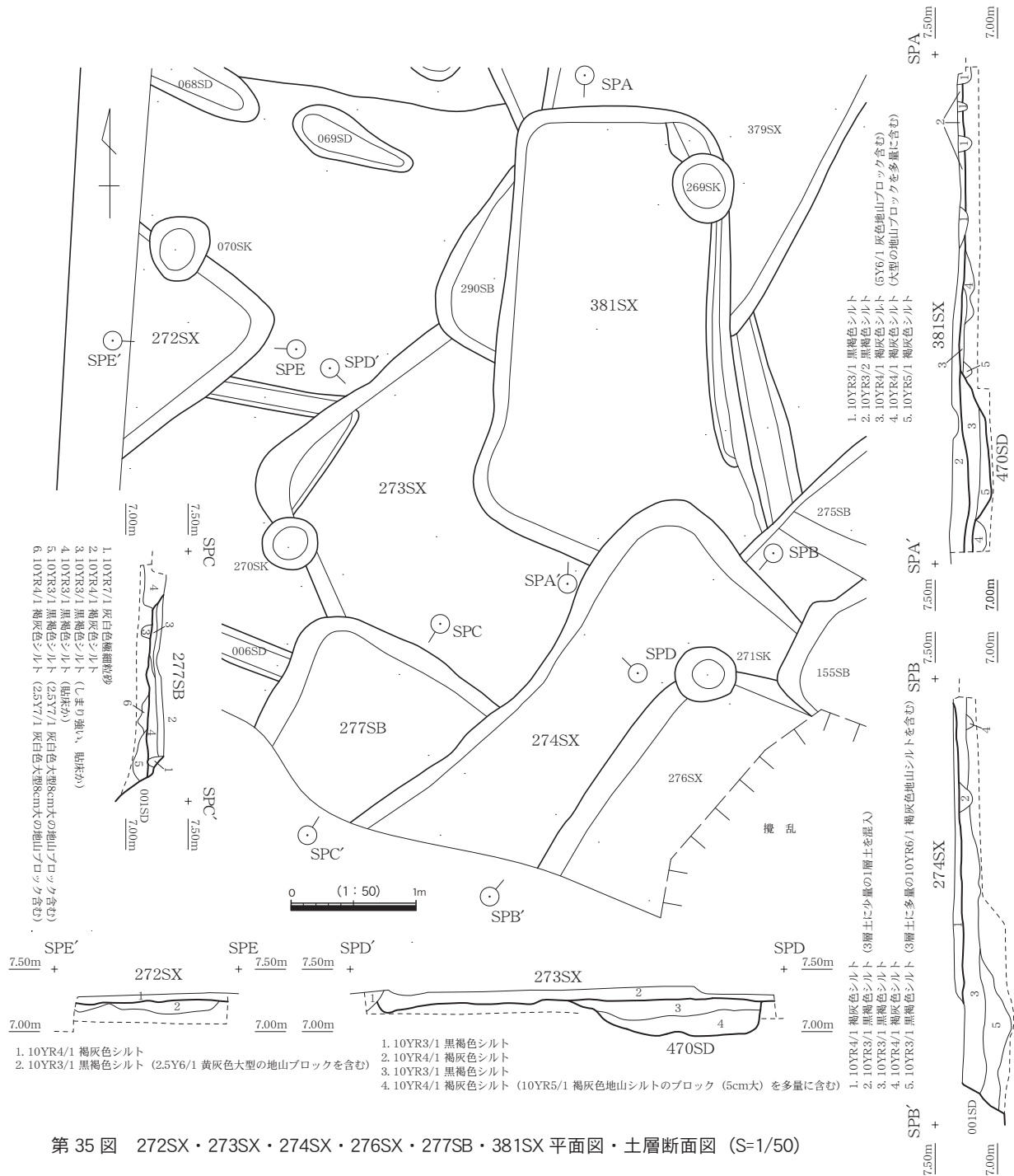
153SX (SB) 調査区中部やや東よりに位置する。156SX と一部重複してその南側に位置する。重複関係では 156SX の後になる。一方西側では 155SX と一部重複しており、これよりも後になる。丸みのある隅部がある長方形で皿状を呈する遺構である。平面検出では南辺長 430cm、東辺長 308cm



第 34 図 153SX・155SX・156SX・166SB 土層断面図 (S=1/50)

の規模である。しかしながら土層観察 (C-C'、D-D') では、平らな堆積は認められるものの、明瞭な壁の立ち上がりは認められない。遺物は土師器小片が多数出土している。平面検出と土層観察所見に食い違いがみられ、竪穴建物と判定するのは難しい。

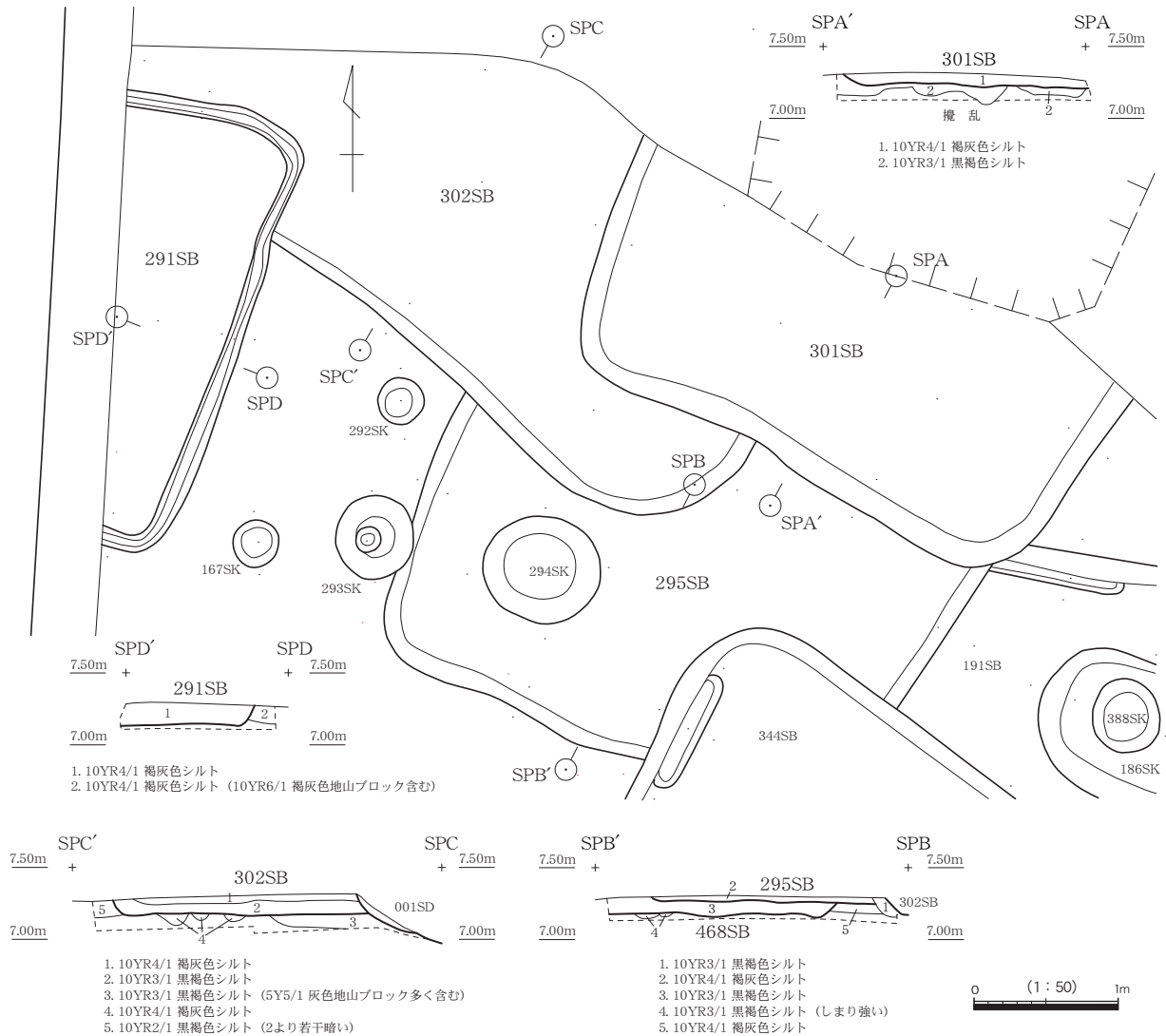
155SX (SB) 153SX と一部重複してその西側に位置する。重複関係では 155SX が前になる。2ヶ所の隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。北西～南東方向の長さは 557cm で深さ 5cm である。土層観察 (E-E') では北西辺 (E') で緩い壁の立ち上がりを認め、概ね平らな堆積がみられる。しかしながら壁溝や柱穴へ検出されていない。平面検出の結果では比較的大型竪穴建物の部類に属するとみられるが、掘方も明瞭ではなくその可能性があるものの根拠に乏しいといえる。遺物は灰釉陶



器小片が1点と土師器小片が5点出土している。

156SX (SB) 158SB と一部重複してその西側に位置する。重複関係では158SBの後になる。また南半部は153SXによって滅失している。3ヶ所の隅部がある推定正方形で皿状を呈する遺構である。北辺長は382cm、深さ6cmである。土層観察(A-A'、B-B')では、概ね平らな堆積は認めるものの、壁の立ち上がりが記録されているとはいえ、ややその形状に疑問が残る。遺物は須恵器小片が1点と土師器小片が多数出土している。性格不明遺構である。

166SB 155SX と一部重複してその南側に位置する。重複関係では155SXの後になる。南側の大部分が001SDによって滅失している。隅部が1ヶ所ある推定方形で皿状を呈する遺構である。底面では壁溝の一部を検出している。しかしながら西半部は攪乱による影響もあって遺構が不明瞭であった。したがって東西方向に450cm以上の規模となるかは確定的でなく、001SD南側で続きが検出されて



第 36 図 291SB・295SB・301SB・302SB 平面図・土層断面図 (S=1/50)

いないことを考慮すると、それより小さい可能性も考えられる。土層観察 (G-G') では上下 2 層の堆積が認められる。下層 (5 層) は、基盤となる黒褐色シルトに由来する斑状の混合土であることや、壁溝に相当する凹みもみられることから、竪穴建物掘方の埋土 (=貼床) であると考えられる。遺物は土師器小片が多数出土している。

K 272SX・273SX・274SX・276SX・277SB・381SX (第 35 図)

272SX (SB) 調査区中部西よりに位置する。調査区西壁に接して検出された方形を呈する遺構の一画である。しかし土層観察 (E-E') では、顕著な立ち上がりが認められず、最終的に竪穴建物と認定することはできなかった。遺物は土師器小片が 1 点である。

273SX (SB) 318SX の南側で一部重複して検出された。隅部が 1 カ所あり残存部から方形になるとみられる。土層観察では、下位に 470SD がありその上層部分とも考えられたが、断面が皿状で立ち上がりも明瞭であることから、竪穴建物の可能性も考えておきたい。なお遺物は土師器小片が 6 点である。

274SX (SB)・276SX (SB) 277SB などに重複して検出された。隅部が 1 ケ所ある方形の遺構として検出された。土層観察 (B-B') ではきわめて浅い皿状の堆積が認められた。しかしながら第 3 面で

当該地点を再度検出したところ、両者を合わせた規模の418SXが検出された。したがって当該遺構は418SXの上層部分であると判断される。遺物は274SXから土師器小片1点、276SXから山茶碗小片1点がある。時期は中世以降に下るであろう。

277SB 273SX 南側に位置する。方形を呈する遺構の一角が検出されたとみられ、土層観察では、2～3層からなる皿状の堆積が認められた。その立ち上がりは明瞭で下層が竪穴建物の貼床に相当すると思われる。001SDによって滅失した部分の南側に竪穴建物302SBが検出されており、それと同一のものと考えられる。なお遺物の出土はなかった。

381SX (SB) 調査区の半ばに位置する。長方形で皿状を呈する遺構である。遺物は土師器小片が1点である。当該遺構直下の第3面で南北溝310SDが検出されており、それと位置・形状が近いことから310SDの上位が窪んでできた堆積であると考えられる。

L 291SB・295SB・301SB・302SB (第36図)

291SB 調査区の中中部西よりに位置する。302SBに一部重複して検出された。方形の遺構である。平面検出で3辺とそれに伴う壁溝が確認され2辺間の長さが329cmである。土層観察(D-D')では、壁溝に相当する堆積がみられない点は齟齬をきたしているが、立ち上がりが明瞭な皿状の堆積であることから竪穴建物の可能性が考えられる。遺物は灰釉陶器小片が2点、土師器小片が3点である。

295SB 302SBに一部重複して南側で検出された。方形で皿状を呈する遺構である。平面検出で3辺が確認され2辺間の長さが374cmである。土層観察(B-B')では、きわめて浅い堆積を認める程度で、遺構としての残存状況はあまり良くない。顕著な出土遺物はなく、平面形状と重複関係から302SBに先行する竪穴建物の可能性を考える。

301SB 302SBに一部重複して東側で検出された。方形で皿状を呈する遺構である。南西辺の長さは373cmある。土層観察(A-A')では、比較的緩いが立ち上がりを認める。竪穴建物の可能性が考えられる。遺物は土師器小片が9点であるが、302SBとの重複関係からそれより新しい時期であろう。

302SB 001SDと重複してその南側に位置する。隅部が1ヶ所ある方形で皿状を呈する遺構として検出された。土層観察(C-C')では明瞭な立ち上がりで2層の堆積が認められたことにより、竪穴建物と考えられる。下層が掘方および貼床に相当すると思われる。掘方の深さは10cmである。001SDを挟んで北側に位置する277SBと方向が一致し、同一の遺構である可能性が高い。その場合、長径(南西辺)の長さ500cm、短径(北西辺)の長さ450cmとなる。出土遺物は灰釉陶器皿(027)と須恵器盤(028)がある。後者は底部外面に墨書がある。遺物の時期は概ね9世紀第2四半期であり、遺構の時期を示すと考えられる。他に土師器小片が多数出土した。

M 241SX・244SX・320SX・321SX・325SX (第37図)

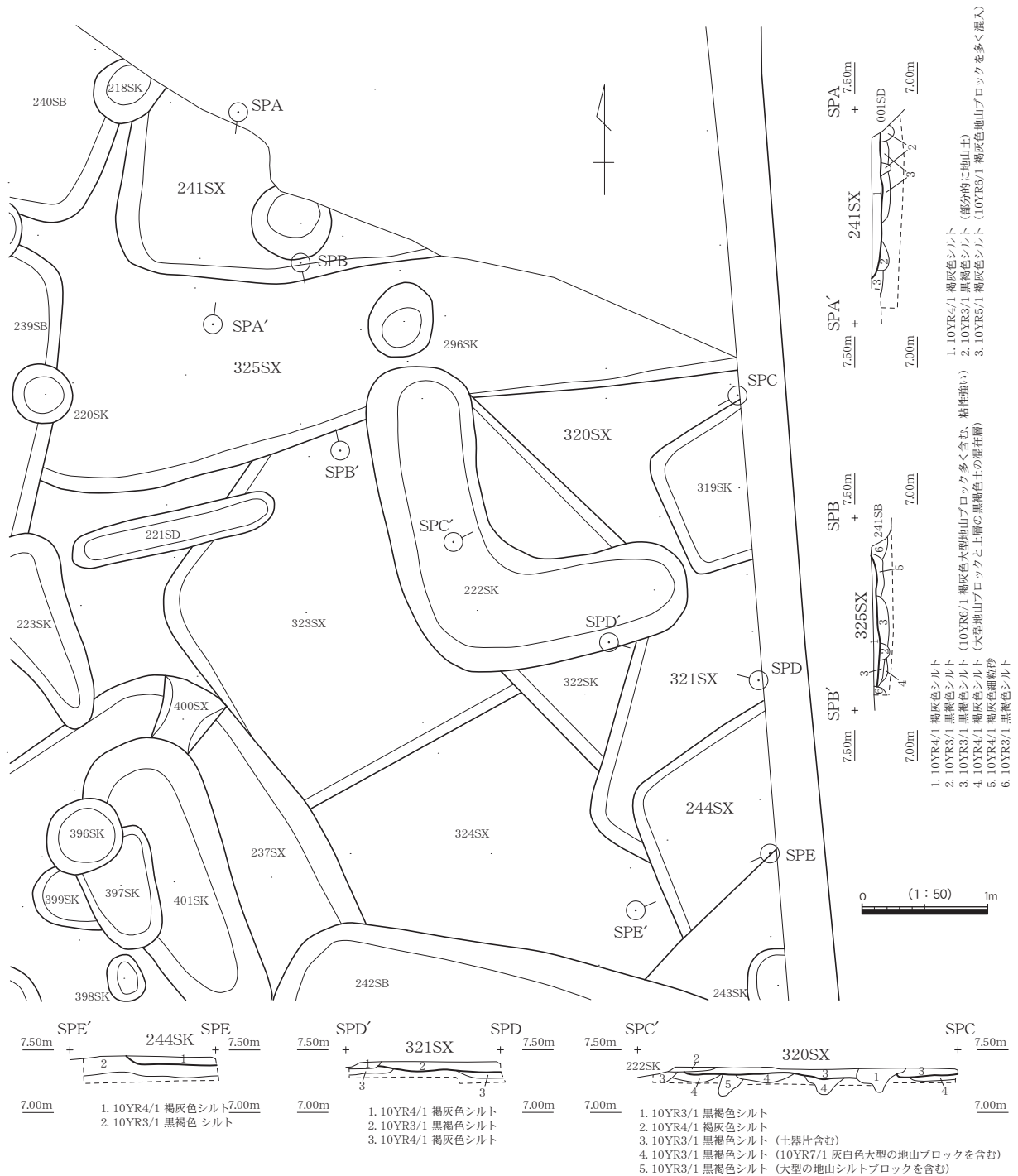
241SX (SB) 調査区中央部に位置する。隅部が1ヶ所ある方形で皿状を呈する遺構である。土層観察(A-A')によると、比較的緩い立ち上がりが認められる。遺物は土師器小片が1点である。根拠が不十分であるため竪穴建物の分類からは除外した。

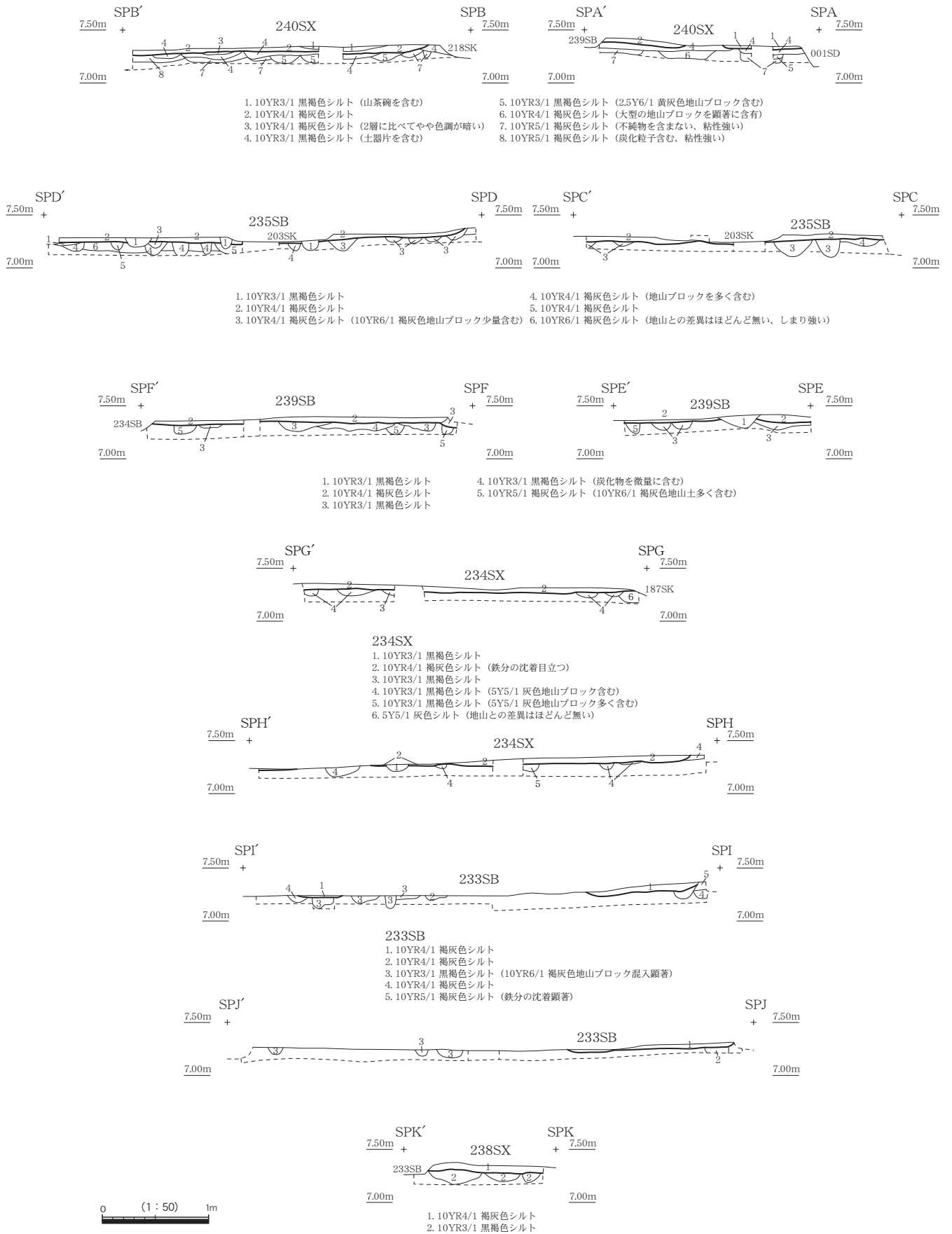
244SX (SK) 321SXに一部重複して検出された。隅部が1ヶ所ある方形で皿状を呈する遺構である。土層観察(D-D')では皿状の浅い堆積が認められるのみである。遺物は土師器小片が多数である。性格不明遺構である。

320SX (SB) 325SXに重複して検出された。直線的な平面形の一部がみえているが、土層観察(C-C')では浅い堆積が認められたのみである。性格不明遺構である。遺物は土師器小片が多数ある。

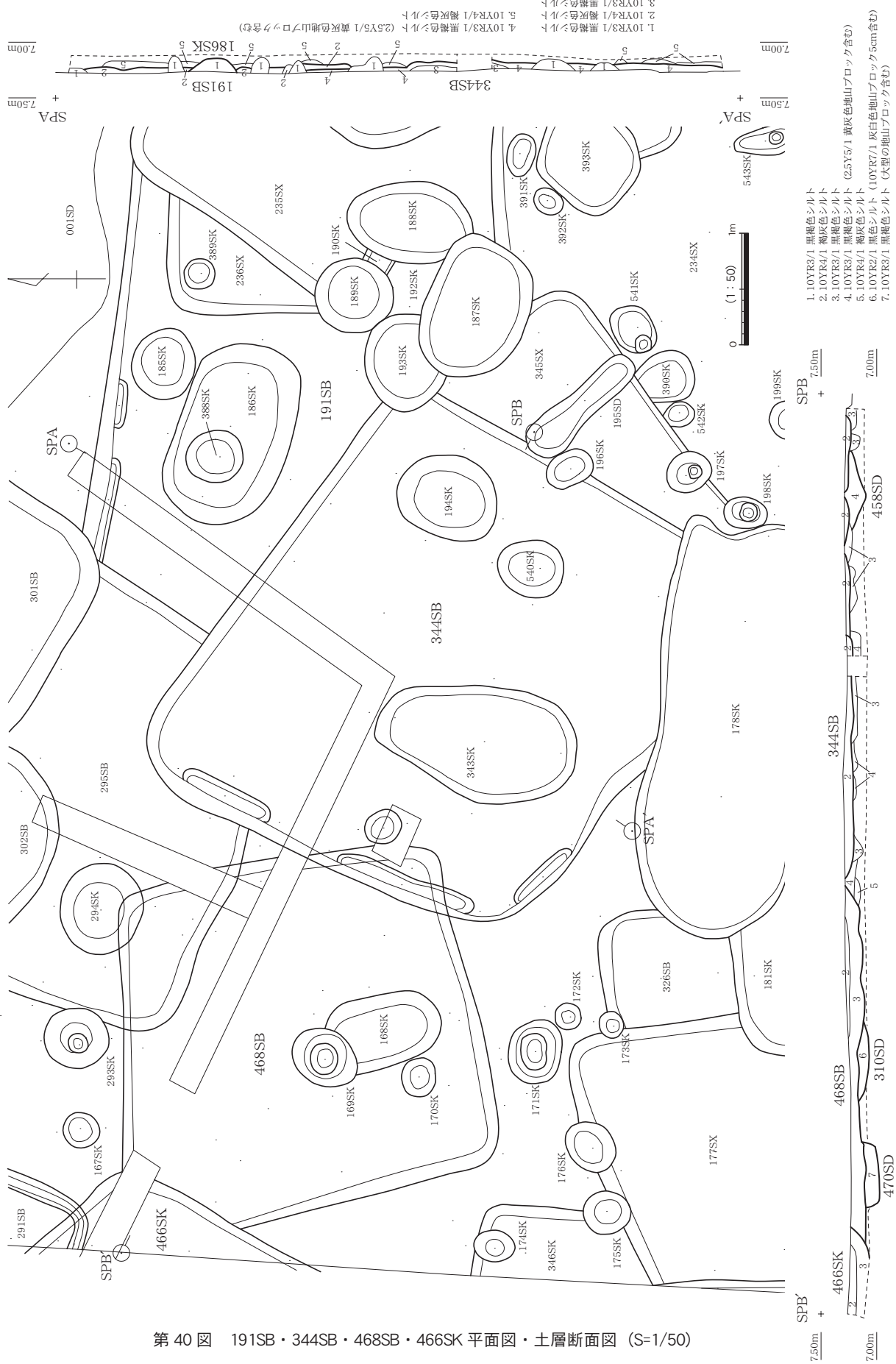
321SX (SB) 320SXの南側に位置する。隅部が1ヶ所ある方形で皿状を呈する遺構である。土層観察(D-D')でも緩い立ち上がりの堆積が認められるのみである。遺物は灰釉陶器小片が1点と土師器小片が多数である。性格不明遺構である。

325SX (SB) 241SBに重複して検出された。平面検出では竪穴建物の可能性が考えられたが、土層





第 39 図 233SB・234SX・235SB・238SX・239SB 土層断面図 (S=1/50)



第 40 図 191SB・344SB・468SB・466SK 平面図・土層断面図 (S=1/50)

が、当該遺構との関連は見出せなかった。遺物は土師器小片が多数出土している。竪穴建物の可能性があると考えられる。

234SX (SB) 233SB と一部重複する。隅部が 1ヶ所ある方形の遺構である。土層観察 (H-H') ではきわめて浅い皿状の堆積が認められるのみである。平面形は竪穴建物を推測させたが、断面形状からはその可能性が低いと考えられる。なお、遺物は灰釉陶器椀 (017・018) が出土している。時期は O-53 号窯期とみられる。その他似灰釉陶器小片が 3 点、須恵器小片が 4 点、土師器小片が多数出土している。

235SB 234・236・249SX・239SB に重複する。長径 381cm、短径 265cm を測る長方形の竪穴建物。灰釉陶器片が出土する。

238SX (SB) 232SB と一部重複しながら東側で検出された。遺構検出では隅部が 1ヶ所ある方形の平面形と認識したが、土層観察 (K-K') では壁の立ち上がりが認められず、疑問の残る結果となっている。遺物は灰釉陶器小片が 1 点、土師器小片が 1 点である。

239SB 234SX などの遺構が重複するやや東側、比較的下位で検出された。隅部が 1ヶ所ある皿状を呈する遺構である。土層観察 (F-F') では明瞭な立ち上がりを認める。一方の土層断面 E-E' では壁近くで凹むことがわかる。竪穴建物の掘方に相当する可能性が考えられる。遺物は土師器小片が多数出土した。

O 191SB・344SB・468SB (第 40 図)

191SB 調査区中部やや西よりに位置する。344SB などの遺構と重複して比較的下位で検出された。竪穴建物北辺に相当する直線的な平面形が検出されたのみで、遺構の全体形は不明である。しかしながらそれに付随して壁溝とみられる小溝を検出し、土層観察 (A-A') では底面に相当する平らな土層を認めることから、竪穴建物の可能性が考えられる。遺物は灰釉陶器小片が 1 点と土師器小片が 7 点出土した。

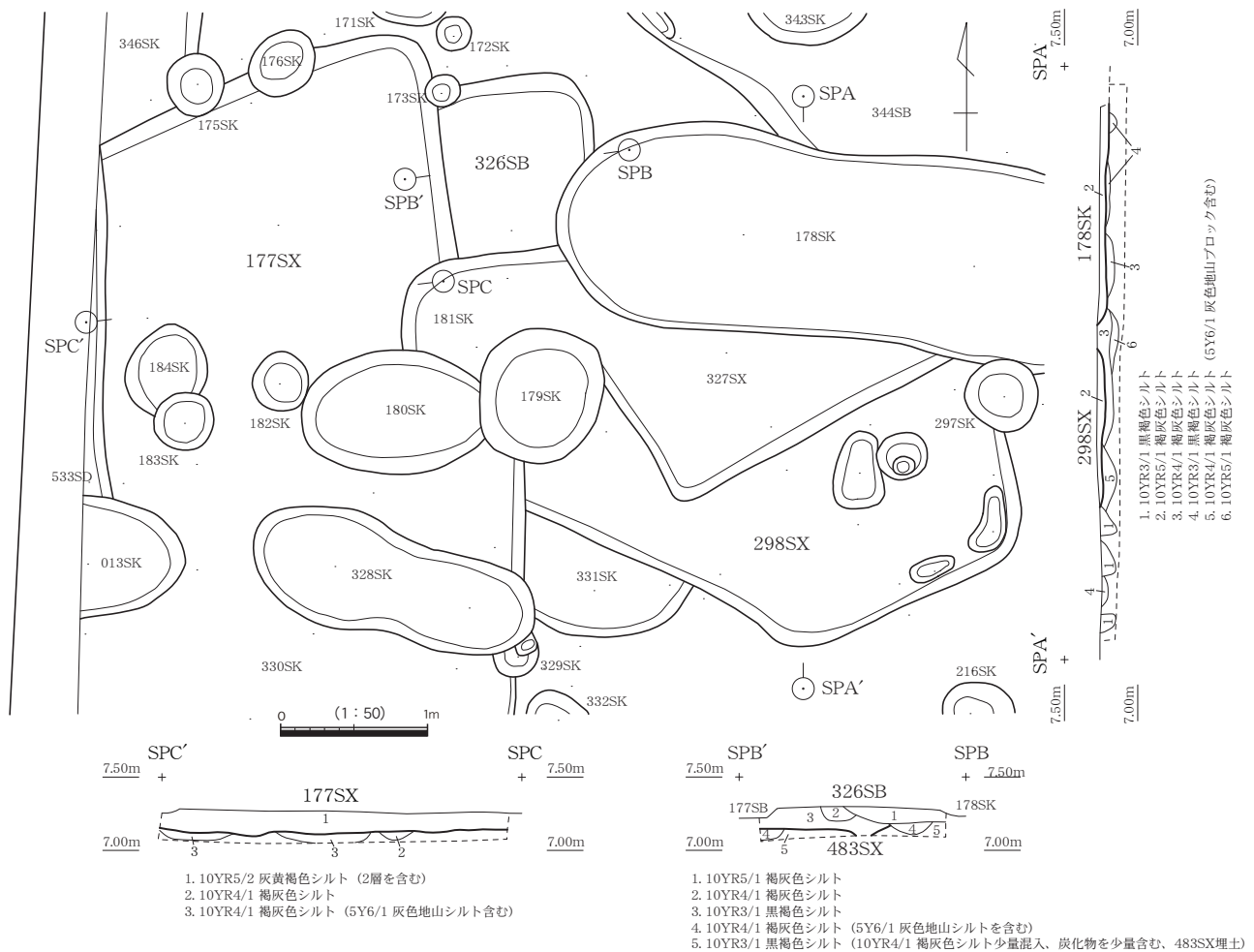
344SB 方形で皿状を呈する遺構である。南西辺 400cm、北東辺 375cm で深さは 6 cm である。座標グリッドに対して東へ 27° 振れる。土層観察 (B-B') では南東側がほとんど残存していないことになるが、北西辺付近では壁溝も認められる。壁溝は北西辺と南西辺で部分的に検出された。遺物は灰釉陶器や須恵器小片が 3 点、土師器小片が多数に A-2 期 (弥生時代中期古井式) の小片が 2 点出土した。竪穴建物の可能性が考えられる。

468SB 344SB の西側に位置する。南東隅部が 344SB と重複し下位で検出された。方形で皿状を呈する遺構である。一辺約 320cm の正方形になる。深さは最深部で 6 cm で中央がやや浅くなる。竪穴建物の掘方に相当するものと考えられる。土層観察 (B-B') では、上下 2 層に分かれるが、下層 (3 層) が掘方埋土となる。したがって深さはあるもののほとんど床面が検出されていない状況であることがわかる。また遺構範囲内で土坑が数基検出されているが関係については不明である。遺物は土師器小片が多数出土した他、甑の把手が 1 点出土した。

P 177SX・298SX・326SB (第 41 図)

177SX (SB) 調査区南西部に位置する。調査区西壁に接して隅部が 1ヶ所ある概ね方形となる遺構である。しかしながら土層観察 (C-C') では灰色がかかった粘土が主体の埋土が認められたのみで他の竪穴建物と考えられる遺構の埋土とは異質であった。さらに南側の遺構範囲が把握できないなど、竪穴建物として認定不可能な要素がでてきた。後に第 3 面調査時に当該地点で南北溝 310SD や複数の土坑が検出されたことから、その上位にできた凹みと考えられる。なお、当該遺構からは灰釉陶器椀 (016) が出土している。326SX に関わる遺物の可能性も考えられる。その他には土師器小片が多数出土している。

298SX (SB) 177SX の東側に位置する、平面検出では 177SX の上位で検出されている。平面形が



第 41 図 177SX・298SX・326SB 平面図・土層断面図 (S=1/50)

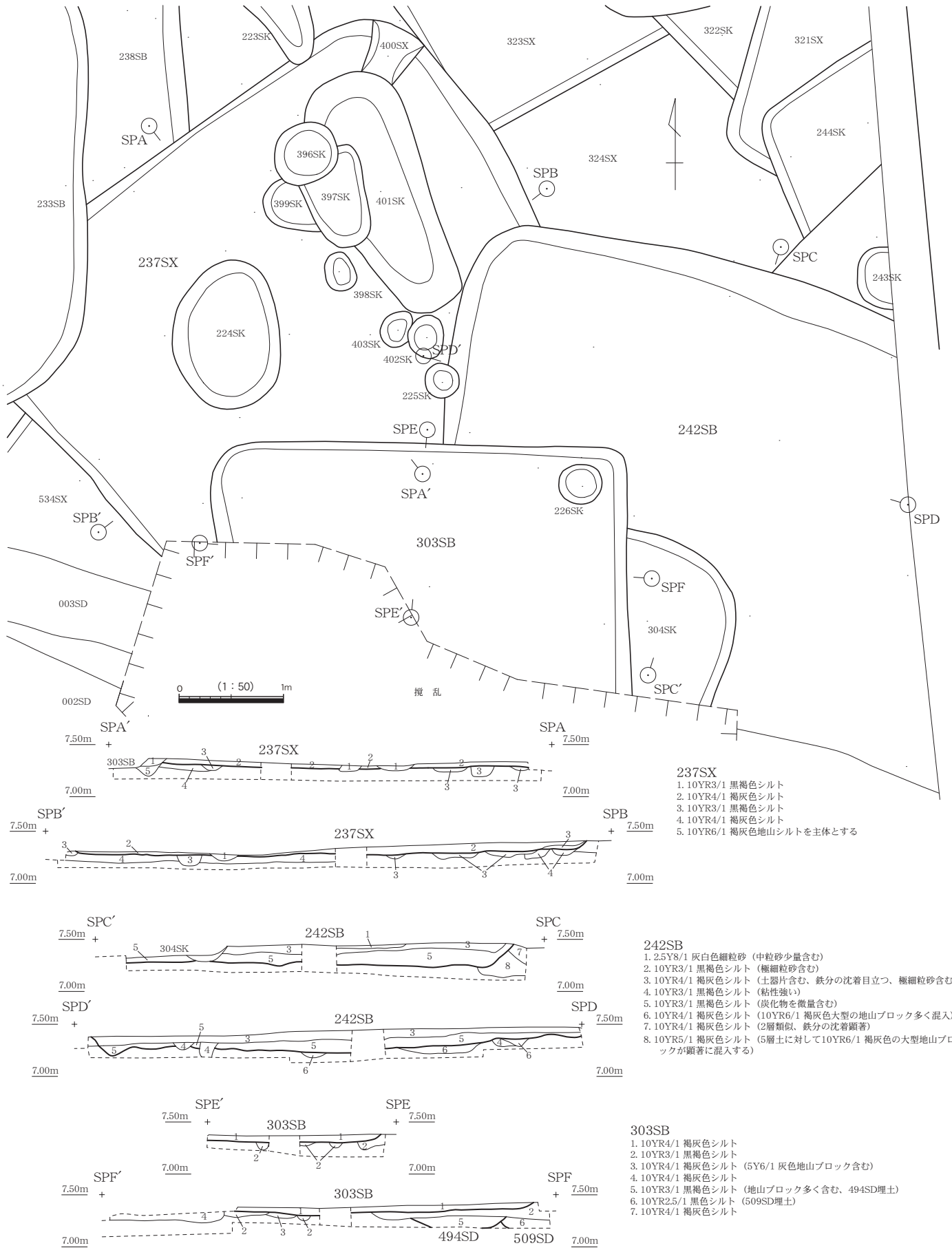
不整形なうえ土層観察 (A-A') では浅い皿状の堆積が認められたのみで、竪穴建物とする根拠がない。177SX と一連の堆積であろう。顕著な遺物の出土はなかった。

326SB 177SX に重複してその下位で検出された。隅部が 1ヶ所ある方形遺構の一面が平面検出されている。土層観察 (B-B') では壁溝のような凹みを伴う平らな堆積が認められたが、竪穴建物と認定するには他の遺構との激しい重複関係もあって根拠が弱い。性格不明遺構である。なお遺物は土師器小片が 3点ある。

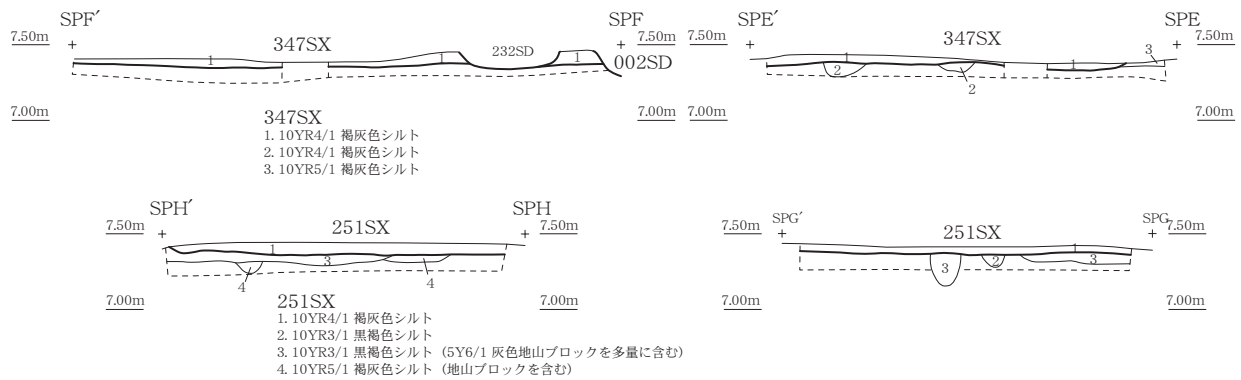
Q 273SX・242SB・303SB (第 42 図)

237SX (SB) 調査区南東部に位置する。推定 2か所に隅部のある方形で皿状を呈する遺構である。土層観察では、B-B' で明瞭な壁の立ち上がりが認められるものの、それ以外では見出せなかった。平面検出では竪穴建物の可能性があると考えられたが、結果的にそれと判定するのは難しい。遺物は土師器小片が多数出土した。

242SB 237SX に一部重複してその東側に位置する。237SX より上位で、3030SB より下位で検出された。隅部が 1ヶ所にある方形で皿状を呈する遺構である。北辺で 460cm 以上の長さがあり、深さは遺構面から 16cm である。土層観察 (C-C'、D-D') では、明瞭な壁の立ち上がりが認められる。埋土は主に上下 2層に区分され、下層の黒褐色粘質シルト層が貼床に相当すると考えられる。上層の灰色がかかったシルト層もかなりの部分で認められ、一部にはさらに上位の砂層まで残存していた。平面形および堆積状況から竪穴建物の可能性が高いと考えられる。遺物は山茶碗 (022)、土師器ミ



第 42 図 273SX・242SB・303SB 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 44 図 246SX・247SX・248SX・251SX・347SX・245SX 土層断面図 (S=1/50)

ミニチュア土器 (023)、灰釉陶器椀 (021) の他に土師器小片が多数出土している。山茶碗は比較的初期のもので、当該竪穴建物の下限を示すものと考えられる。ミニチュア土器は古墳時代前期である。303SB 242SB に一部重複してその南側に位置する。242SB より上位で検出され南側は攪乱などで滅失している。2ヶ所で隅部のある方形で皿状を呈する遺構である。北辺の長さは 396cm で正方形になると推定される。土層観察 (E-E'、F-F') では比較的明瞭な壁の立ち上がりが認められ、平らな埋土 1 層である。北東隅で土坑 (226SK) が検出されているが、当該遺構の一部であるかは不明である。遺物は灰釉陶器や須恵器の小片が 4 点と土師器小片が多数出土した。

R 246SX・247SX・248SX・251SX・347SX・245SX (第 43・44 図)

246SX (SB) 調査区南東部に位置する。1か所に隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。北半部は 002SD や攪乱によって滅失している。土層観察 (A-A'、B-B') では明瞭な壁の立ち上がりが認められず平面検出では竪穴建物の可能性が考えられたが、結果的にそれと判定するのは難しく、性格不明遺構である。遺物は灰釉陶器椀の底部 (024) がある。概ね 10 世紀台とみられる。その他には須恵器小片が 2 点と土師器小片が多数出土している。

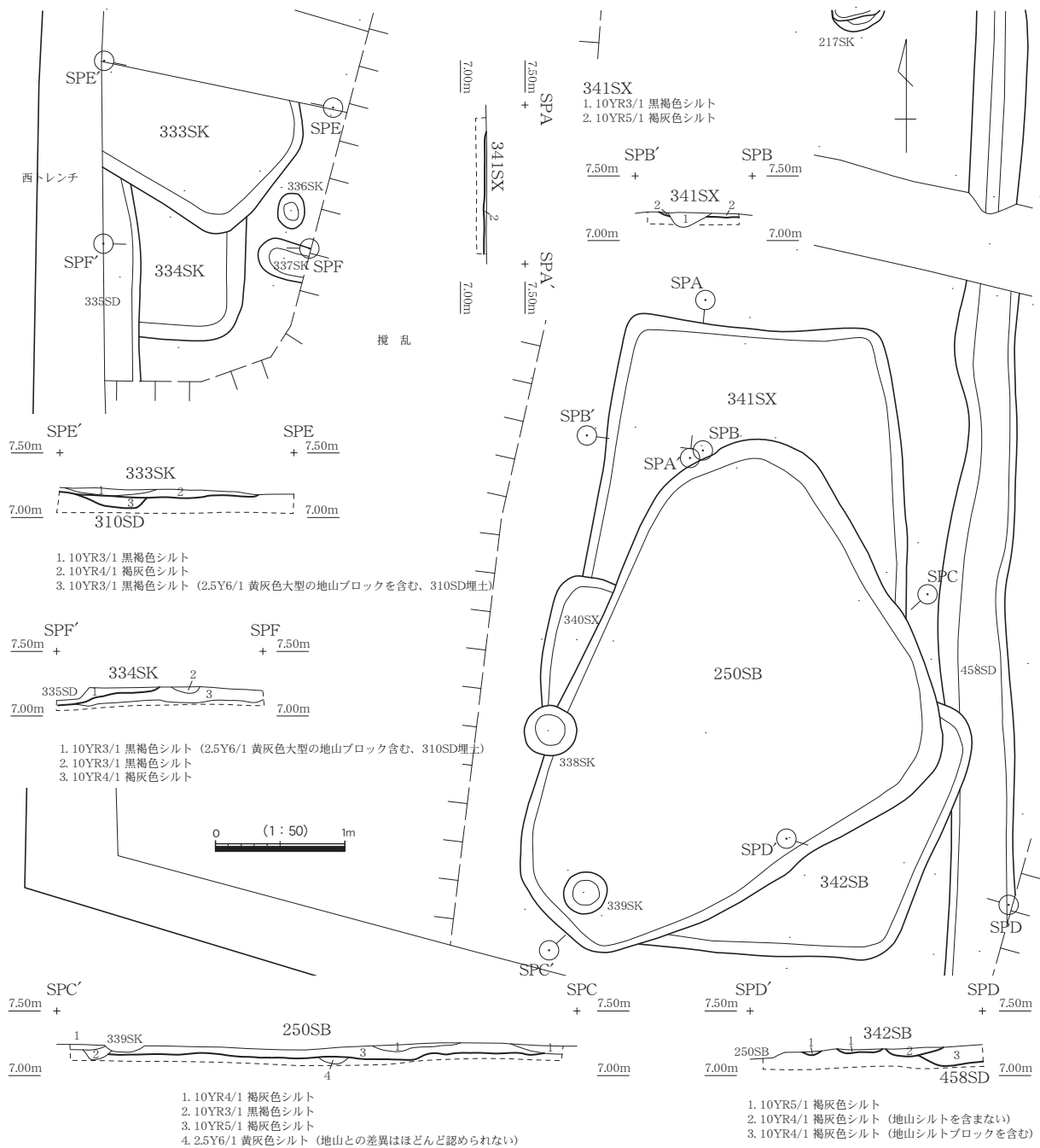
247SX (SB) 246SX と一部重複してその南側の下位で検出された方形で皿状を呈する遺構である。2ヶ所の隅部があり南辺の長さは 315cm である。土層観察では南辺近くで若干の立ち上がりが認められたものの、結果的に竪穴建物と判定するのは難しい。遺物は須恵器小片が 2 点と土師器小片が多数出土した。

248SX (SB) 247SX の南側に位置する。隅部が 1か所ある推定方形で皿状を呈する遺構である。土層観察 (C-C') ではいくつかの凹みが認められるものの、一連のものである確証は得られなかった。平面検出では竪穴建物の可能性が考えられたが結果的にはそれと判定するのは難しく、性格不明遺構である。なお、遺物は須恵器小片が 3 点と土師器小片が多数出土した。

251SX (SB) 248SX の東側に位置する。隅部が 1ヶ所ある推定方形で皿状を呈する遺構である。土層観察 (G-G'、H-H') では SPH-SPH' で壁の立ち上がりを認めたにすぎず、竪穴建物と判定するのは難しい。なお遺物は灰釉陶器小片が 4 点と土師器小片が多数出土した。

347SX (SB) 251SX と一部重複してその東側で検出された隅部が 1か所ある推定方形で皿状を呈する遺構である。土層観察 (E-E'、F-F') では、E-E' のみで壁の立ち上がりを認めたにすぎず、竪穴建物と判定するのは難しい。遺物は灰釉陶器椀 (030) が出土している。H-72 号窯期～百代寺窯期で 10 世紀後半～11 世紀前半と考えられる。その他には土師器小片が多数出土している。

246SX・247SX・248SX は概ね東辺が一致しており、一連の遺構を別個の遺構として認識した可能性が考えられる。またこれらはその東側約 1m に位置する 251SX とも方位が揃っている。加えて 347SX も同様の方位で埋土の状況も似ており、251SX と 347SX も一連のものであると考えられる。



第45図 341SX・250SB・342SB・333SK・334SK 平面図・土層断面図 (S=1/50)

このように類似する方形の掘り込みが接近して並列する様子は水田遺構そのものである。今回の発掘調査後に、姫下遺跡南方の惣作遺跡や下懸遺跡で実施した発掘調査で、平安時代～鎌倉時代の水田遺構が検出されており、その結果を踏まえると当該遺構群も水田遺構を検出していた可能性が高いといえよう。

245SX (SB) 347SX の北側に位置する。南半部が002SDによって滅失している。推定方形で皿状を呈する遺構である。土層観察 (D-D') では緩い壁の立ち上がりようであるが、竪穴建物の掘方と確定するには至らない。遺物は土師器小片が多数出土した。性格不明遺構である。

S 341SX・250SB・342SB (第45図)

341SX (SB) 調査区南西部に位置する。2ヶ所に隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。

平面検出では竪穴建物の可能性も考えられたが、土層観察(A-A'、B-B')ではわずかな堆積を認めただけで、竪穴建物と判定するのは難しい。顕著な遺物もなく、性格不明遺構である。

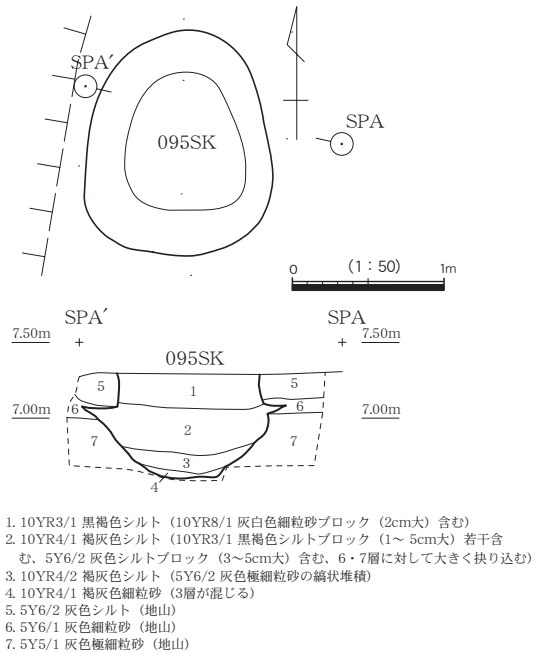
250SB 341SX に重複してそのほぼ同位置上位で検出された。1ヶ所に丸みの強い隅部がある不整形な遺構である。土層観察(C-C')では明瞭な立ち上がりは認められず、竪穴建物と判定するのは難しい。顕著な遺物の出土はなく、性格不明遺構である。

342SB 250SX に重複してその下位で検出された。推定方形の平面形の遺構である。しかしながら土層観察(D-D')では一定の平らな堆積ではなく小さな凹みの連続がみられるのみである。遺物は土師質土器の小片が数点ある。性格不明遺構である。

(2) 土坑

A 095SK (第46図)

調査区中部に位置する。第2面で検出されたが、当該遺構から東側の2グリッド(3G19j・3G19k)では地山となる砂質シルト層が高く盛り上がり、その上面での検出となっている。遺構の平面形はやや崩れた円形である。長径(南北)150cm、短径(東西)124cmで深さは68cmある。地山のさらに砂質が強い層まで掘り込んでいる。またその掘り込みは、底部で湾曲しているが上方では垂直に近く、袋状土坑に近い断面形態となっている。土層観察(A-A')では、下層(3層)でラミナ状堆積が認められ、上層(1・2層)は人為的な埋め戻しなのかブロック状のシルトが多数混じっている。また2層の両脇である地山は細粒砂で崩れやすいため、大きく抉りが入っており、この埋め戻しの際に浸水があったために抉りが発生したものであろう。遺物は条痕文土器の小片が1点(031)出土している。時期は弥生時代中期以前のA期と位置づけられよう。



第46図 095SK 平面図・土層断面図 (S=1/50)

B 113SK (第25・26図)

114SB と一部重複してその西側に位置する。重複関係では114SBの後になる。1ヶ所の隅部がある皿状を呈する遺構である。顕著な遺物の出土はなかった。

C 159SK (第31図)

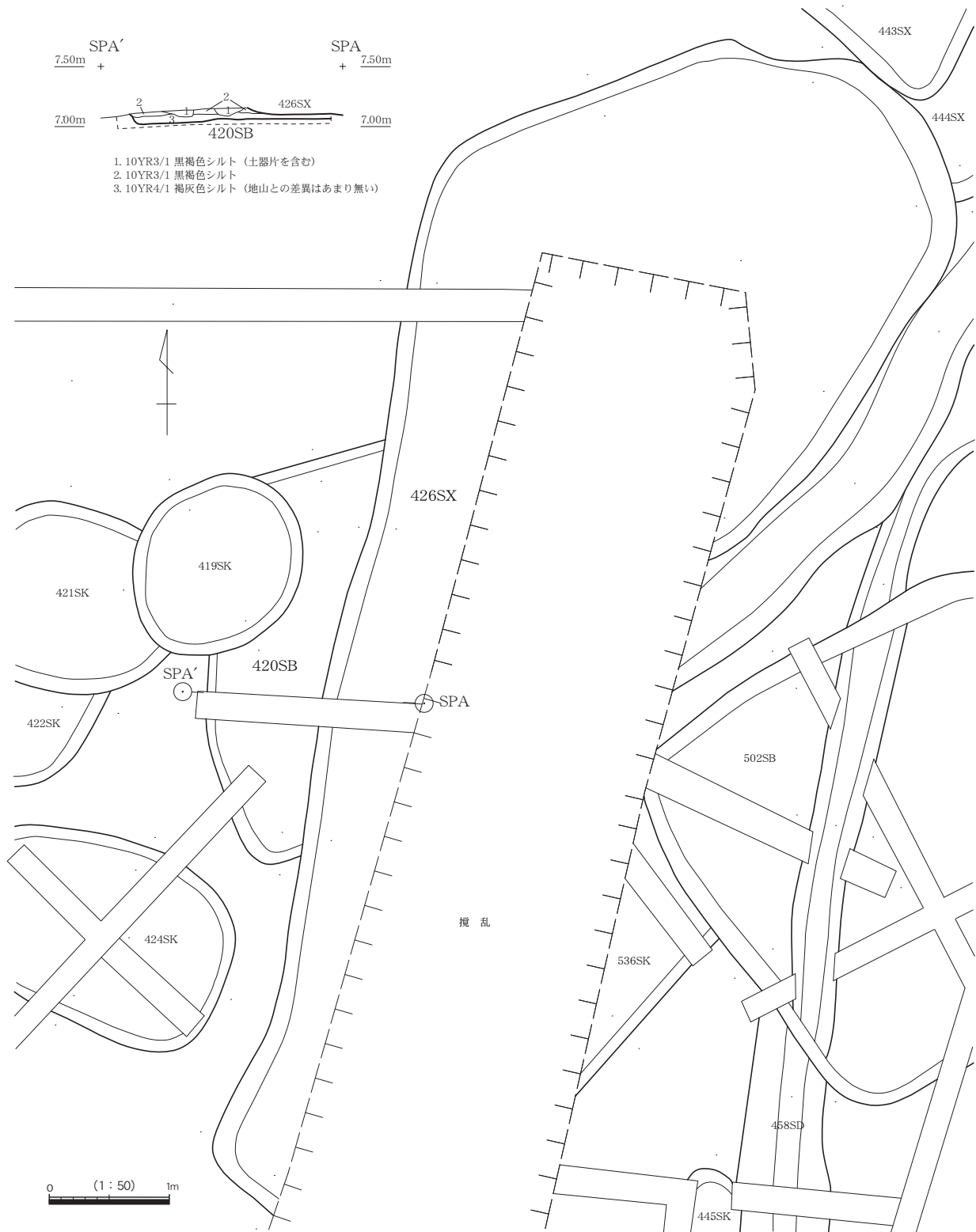
157SB・158SB と重複してその北側に位置する。直線を呈する遺構の一部が検出されている。土層観察では浅い凹みが認められる。顕著な遺物の出土はなかった。遺構の性格を特定するには至らない。

D 466SK (SB) (第40図)

調査区西壁付近で方形と推定される遺構の一部が検出されたものである。468SB と重複しておりその上位で検出された。土層観察(B-B')ではやや深い(16cm)の掘方であることが認められる。上下2層あり上層のやや灰色がかった粘質シルト層が他の遺構と比べて厚い。平面形は竪穴建物のそれを想定させたが、全体形がふめいな点や土層の状況から判断して土坑の一部である可能性が考えられる。遺物は土師器小片が3点出土した。

E 333SK・334SK (第45図)

333SK 調査区南西部に位置する。隅部が1ヶ所ある推定方形で皿状の遺構である。土層観察(SPE-



第 48 図 420SB・426SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)

4 第3面

(1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構

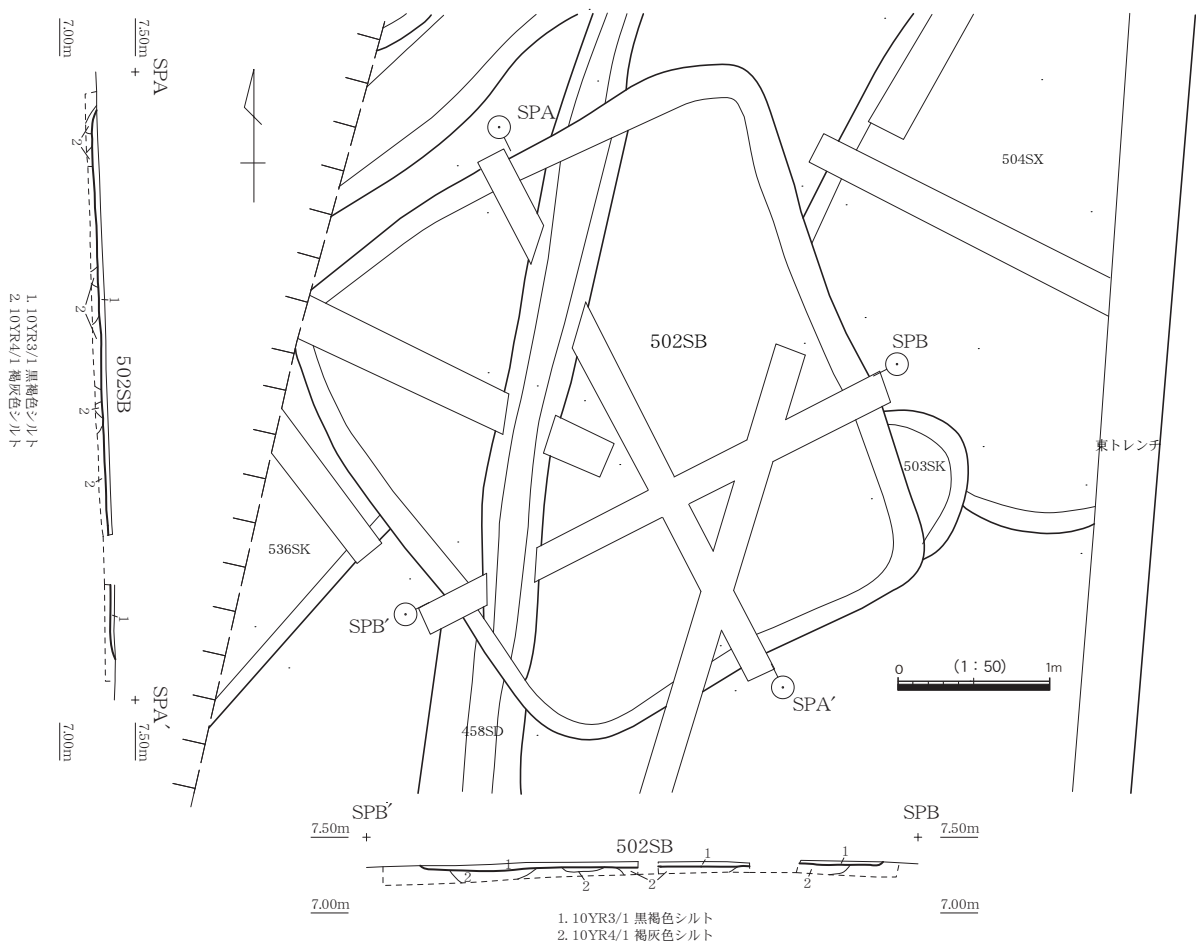
A 410SB・414SB (第47図)

410SB 調査区北西部に位置する。414SBに一部重複してその南側で検出された長方形の遺構である。長径(南北)325cm、短径(東西)257cmである。北辺を除く各辺で壁溝が伴っている。土層観察(B-B'、C-C')では概ね上下2層に区分され、壁溝は下層に対して掘り込まれていることがわかる。下層が貼床に相当すると考えられる。床面では土坑3基(510～512SK)が検出されているが、当該遺構との関係は不明である。遺物は須恵器の小片1点と土師器の小片4点がある。このことから当該遺構は、古墳時代後期以降の竪穴建物である可能性が高いと考えられる。

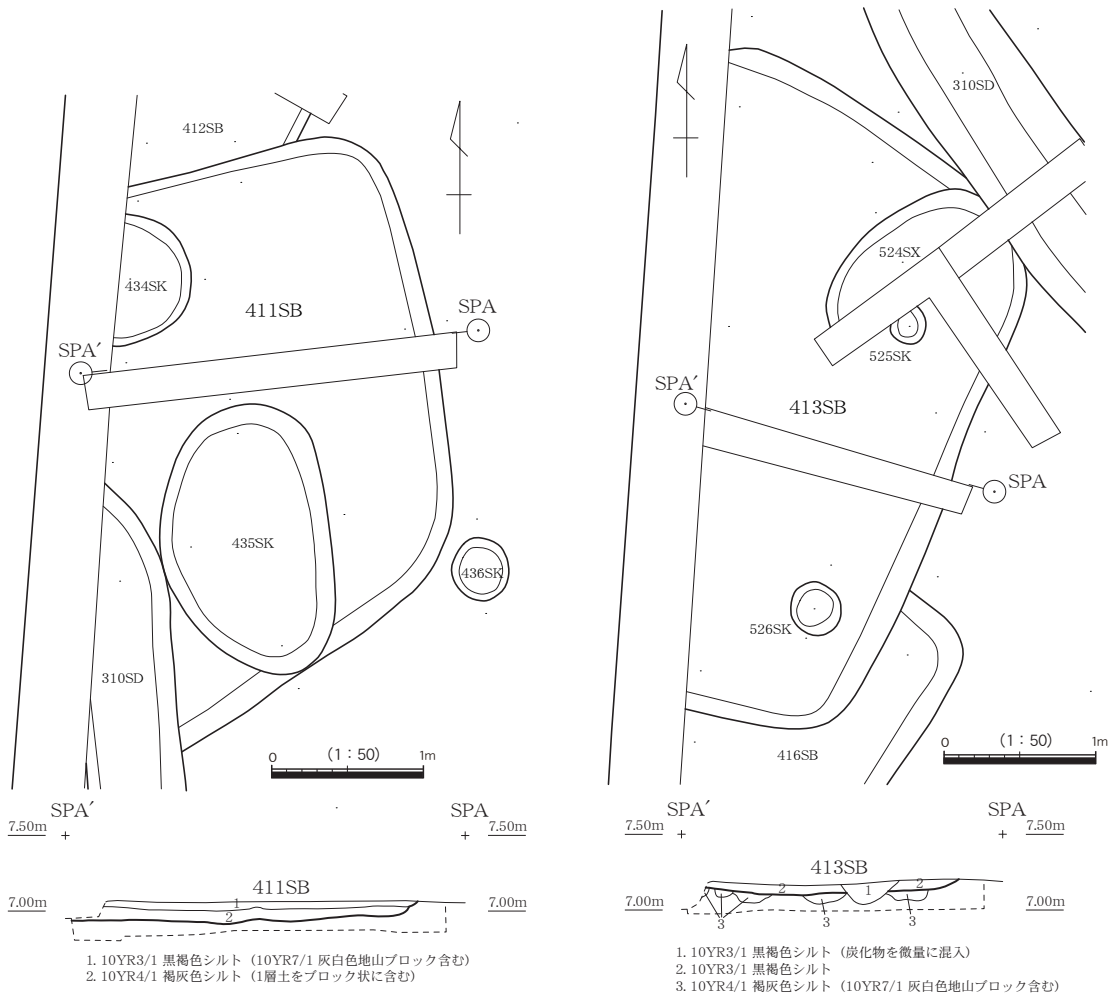
414SB やや不整形な正方形で皿状を呈する遺構である。土層観察(A-A')では明瞭な立ち上がりが見られる。ただし壁溝や柱穴などの痕跡は認められなかった。遺物はA-2期(弥生時代中期古井式か)とみられる土師質土器の小片が出土している。第2面の099SXはこの上位にできた凹みであろう。

B 420SB・426SX (第48図)

420SB 調査区中部やや西よりに位置する。426SXに一部重複してその西側に位置する推定方形で皿状を呈する遺構である。南北長は316cmで、深さは6cmで426SXより深い。土層観察(A-A')では明瞭な壁の立ち上がりと上下2層の堆積が認められる。出土遺物はなかった。形状から竪穴建物の可能性が考えられる。



第49図 502SB・504SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 50 図 411SB 平面図・土層断面図 (S=1/50)

第 51 図 413SB 平面図・土層断面図 (S=1/50)

426SX 調査区北部から中部にかけて展開する幅広い溝状の遺構である。幅 400cm、南北長 1080cm で深さは 4 cm である。土師器の小片が 2 点出土している。凹み地形とも考えられる。

C 502SB・504SX (第 49 図)

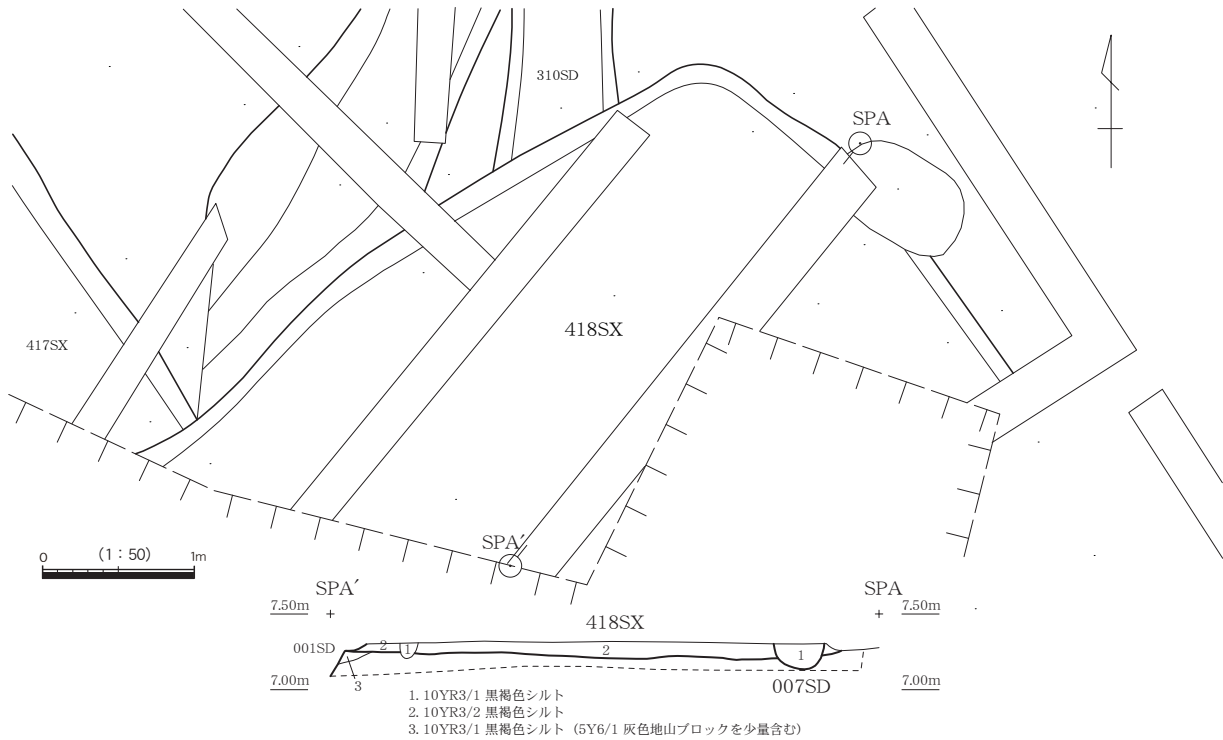
502SB 調査区の北東部に位置する。長方形で皿状を呈する遺構である。長径(南北) 372cm、短径(東西) 348cm である。深さは 6 cm である。壁溝や柱穴は平面検出で見出すことが出来なかった。土層観察では壁の明瞭な立ち上がりが認められる。底面下位に小凹みがいくつも認められるが、溝(458SD)や木根とみられる。遺物は土師器小片が多数出土している。このことから竪穴建物の可能性が考えられる。時期は、下位の 504SX から灰釉陶器が出土しており、それ以降と考えられる。

504SX 502SB と一部重複してその東側に位置する。推定方形で皿状を呈する遺構である。遺物は灰釉陶器小片 3 点と土師器小片 8 点がある。性格不明遺構であるが、概ね平安時代以降のものであろう。

C 411SB (第 50 図)

調査区の北西部に位置する。2ヶ所に隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。南北は 340cm で深さは 5 cm である。土層観察(A-A')では、明瞭な立ち上がりとは上下 2 層の堆積が認められるが、壁溝は検出されなかった。顕著な遺物の出土はなかった。平面形・土層ともに明瞭であるため竪穴建物の可能性が考えられる。

D 413SB (第 51 図)



第 52 図 418SX 平面図・土層断面図 (S=1/50)

調査区中部、調査区西壁に接して位置する。2ヶ所に隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。壁溝は検出されなかったが、底面で検出された2基の土坑(525SK・526SK)があり、柱穴の位置としては問題ないが、当該遺構との関係は確定的でない。土層観察(A-A')では明瞭な立ち上がりが認められる。顕著な遺物の出土はなかったが、竪穴建物の可能性が考えられる。

E 418SX (第 52 図)

調査区中部に位置する。平面検出では不整形な方形の遺構として認識された。南半部は001SDによって滅失している。また重複して下位を溝(310SD)が南北に延びている。土層観察(A-A')では明瞭な立ち上がりは認められなかったものの平らな堆積であることは確認された。当該遺構の上位同位置では第2面で274SX・276SXが検出されているが、一連の凹みである可能性が考えられる。418SXについても2条の溝が接近する地点であり、それとの関連が考えられよう。したがって竪穴建物と判定するのは難しい。なお遺物は土師器小片が2点であった。

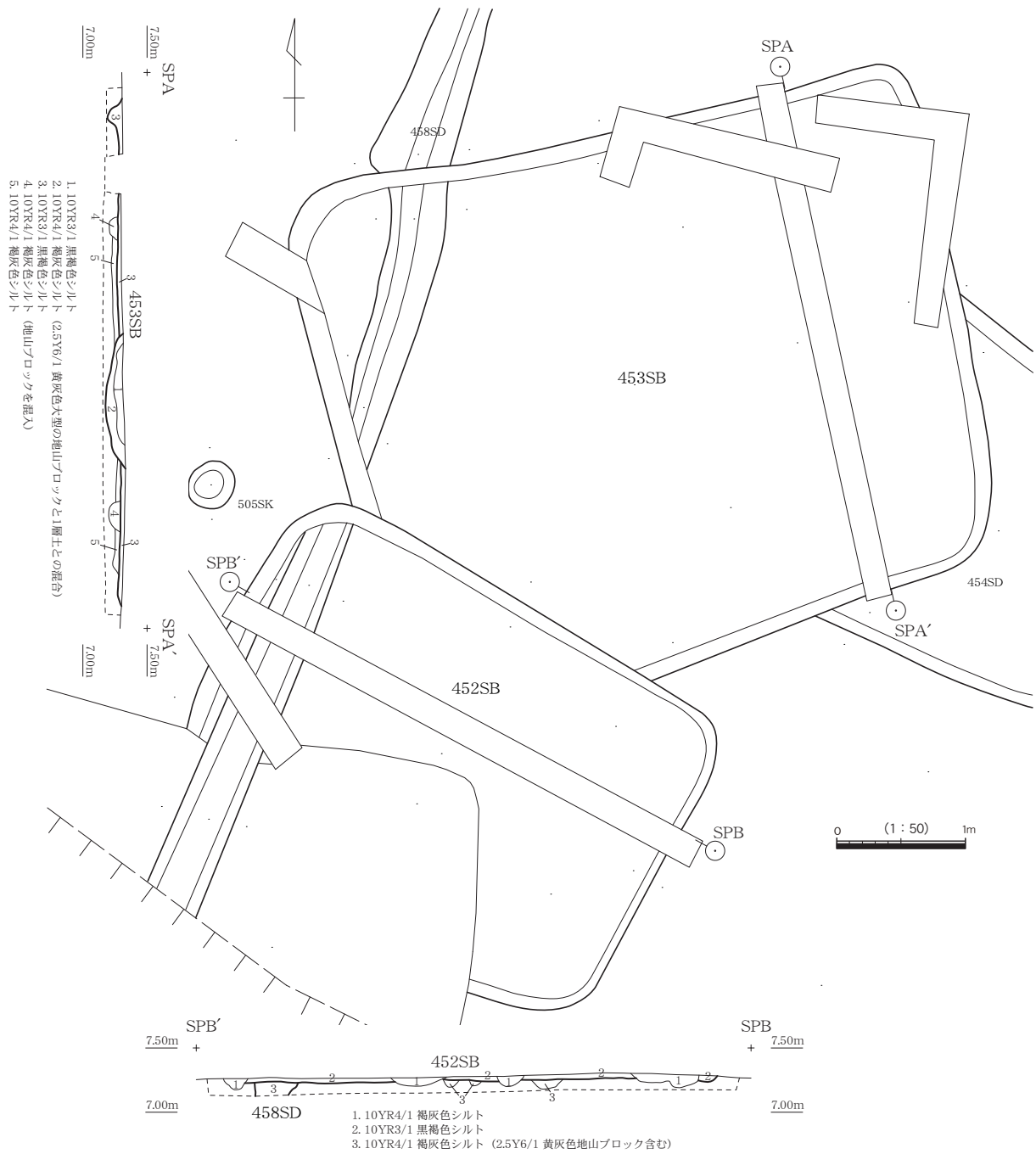
F 452SB・453SB (第 53 図)

452SB 調査区中部に位置する。453SBと一部重複してその南側に位置する。3か所の隅部がある長方形で皿状を呈する遺構である。長径386cm、短径285cmで深さは3cmである。下位を溝(458SD)が南北に延びる。土層観察(B-B')では南東辺で壁の明瞭な立ち上がりが認められた。遺物は土師器小片が5点である。平面形状から竪穴建物の可能性が考えられる。

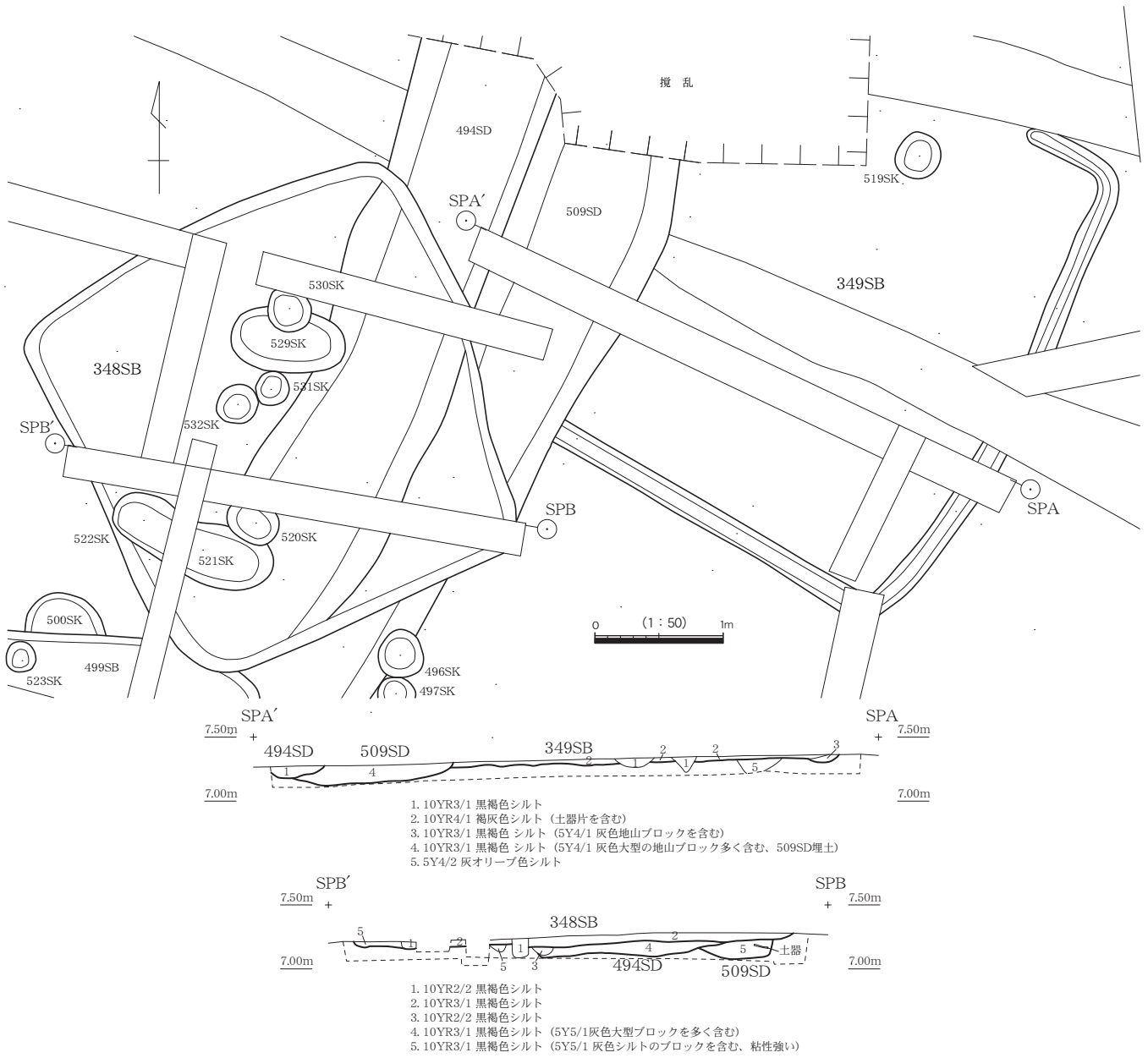
453SB 452SBと一部重複する。3ヶ所に隅部がある長方形で皿状を呈する遺構である。長軸(東西)500cm、短軸(南北)412cmで深さは5cmである。壁溝や柱穴は検出されなかった。土層観察(A-A')では、北辺で壁溝状の凹みが認められる。遺物は土師器小片が7点である。平面形状から竪穴建物の可能性が考えられる。

G 348SB・349SB (第 54 図)

348SB 調査区南端に位置する。正方形で皿状を呈する遺構である。一辺の長さは320cmで深さは4cmである。底面で壁溝や柱穴は検出されなかった。土層観察(B-B')では明瞭な壁の立ち上がり



第 53 図 452SB・453SB 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第54図 348SB・349SB 平面図・土層断面図 (S=1/50)

が認められる。また 494SD・509SD の断面も確認できる。遺物は土師器小片が多数出土したが、灰釉陶器を含む 494SD より後に位置づけられるので時期は平安時代以降と考えられる。平面形も明瞭に検出されたこともあり、竪穴建物の可能性が高いと考えられる。

349SB 348SB の東側に位置する。2ヶ所に隅部がある推定方形で皿状を呈する遺構である。各辺で壁溝が検出されているが、明確な柱穴は検出されなかった。土層観察 (A-A') では、壁の明瞭な立ち上がりと壁溝が認められ、494SD・509SD に先行することが確認される。遺物は土師器小片が9点である。遺構形状から竪穴建物の可能性が高い。時期は、溝群に先行するので、灰釉陶器以前で古墳時代前期までの幅が考えられるが、確定的ではない。ただし、第54図に示した遺構群の変遷により竪穴建物どうしの変遷の間に溝が掘削されていた時期のあったことが判明した点は重要である。

(2) 溝

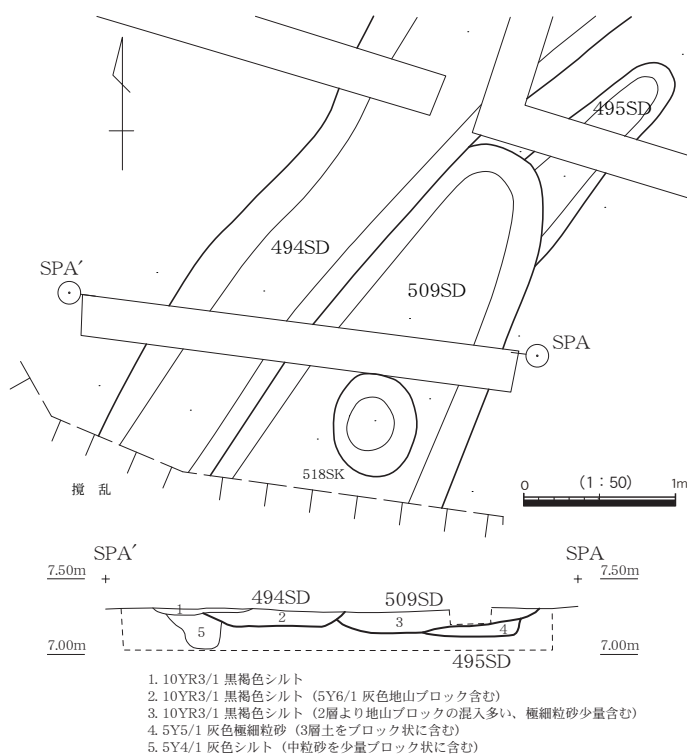
A 310SD・470SD・458SD

310SD は北から S 字状に屈曲しながら南南西に走る、幅約 70cm、深さ 10cm の溝で土師質土器片が出土する。この 310SD に切られる溝が 470SD で、幅約 90cm、深さ 13cm を測り、北北東から南南西にかけて走る。調査区北東隅部で収束する可能性もある。灰釉陶器片が出土する。310SD と同方向に走る溝が 458SD で、幅約 46cm、深さ 10cm を測る。調査区北東隅で幅広くなり収束する。遺物は出土していない。

B 494SD・509SD (第55図)

494SD 調査区南東部に位置する。円形の凹みである 492SX の上位で検出され、その付近の調査区東壁から南西方向へ延びる溝である。492SX 付近での幅は 200cm であるが、その南側では 70cm である。土層観察 (A-A') では皿状の断面が認められる。また 509SD と一部重複しその後形成されたものであることがわかる。

509SD 494SD と一部重複してその東側を併行して延びる溝である。土層観察 (A-A') では 494SD の下位、495SD の上位にあることがわかる。位置や形状からこれらの溝は一連のもので掘り返しによって生じたものと考えられる。なお 495SD・509SD からは顕著な遺物の出土はなかった。



第55図 494SD・509SD 平面図・土層断面図 (S=1/50)

第4節 05 A区

1 調査の経過と概要

05 A区は06 B区と05 B区に挟まれた位置にあり、今回の調査区ではほぼ中央に所在する。05 A区の基本層序は、上位から黄灰色土（第1層）、オリーブ褐色土（第2層）、黄灰色土（第3層）、灰黄褐色シルト（第4層）、にぶい黄褐色シルト（第5層）、褐灰色シルト（第6層）の順に堆積しており、第1層は現耕作土、第2層は旧耕作土、第3層は18世紀～19世紀の遺物を含有し、第4層は13世紀前後の山茶碗片などをわずかに含んでいた。重機による表土掘削は、第1層から第4層に相当する層厚約50cmの堆積を除去し、にぶい黄褐色シルトまたは褐灰色シルト層の上面を第1面とした。第1面ですでにC期からE期の遺構群が検出されていたが、遺構の重複が激しい上に、この面ではC期の遺構全体をうまく把握できなかつたため、第1面ではD期とE期の遺構群を中心に調査を実施した。第2面は特に遺構面を下げることなく第1面から引き続き遺構検出を実施した。第2面ではおおむねC期の竪穴建物を中心とする遺構群が確認された。これらの遺構群を掘削してしまふと、おおむね灰色砂質シルト～極細粒砂層の上面に達しており、一部高い部分を掘り下げる程度でさらに遺構検出を行った。これが第3面であり、弥生時代から古墳時代（A期とB期）の遺構群が検出された。第3面の遺構は05 A区北半部で重複が激しく、この北部を中心に分布する下位の遺構を第4面遺構として調査した。第4面も灰色砂質シルト～極細粒砂層を地山とする遺構群である。

2 第1面

(1) 溝

A SD01

調査区北端部に所在する溝で、第1面で検出された。幅は102cm、深さは23cmを測り、最下層で灰白色中粒砂が堆積していた。一定の流水があったと見られ、昭和時代(戦前か)の水路と思われる。

B SD02

調査区北半部で検出された溝で、西北西-東南東方向に走り、幅は182cm、深さは33cmを測る。大半は灰白色中粒砂と明褐色中粒砂が堆積しており、洪水により一気に埋積されたものと思われる。出土遺物からみて、明治時代と考えられる。

C SD03・SD08・SD10

SD03・SD08・SD10は第1面で検出された西北西—東南東方向に平行に走る溝群である。概ね幅は80cm前後、深さは15cmを測る。時期はE期か明治時代だろう。

D SD11・SD12

SD11・SD12は第1面で検出された西北西—東南東方向に平行に走る溝である。SD11の幅は91cm、深さは10cmを、SD12の幅は122cm、深さは20cmを測る。道路を形成していた可能性も考えられ、時期はE期か明治時代だろう。

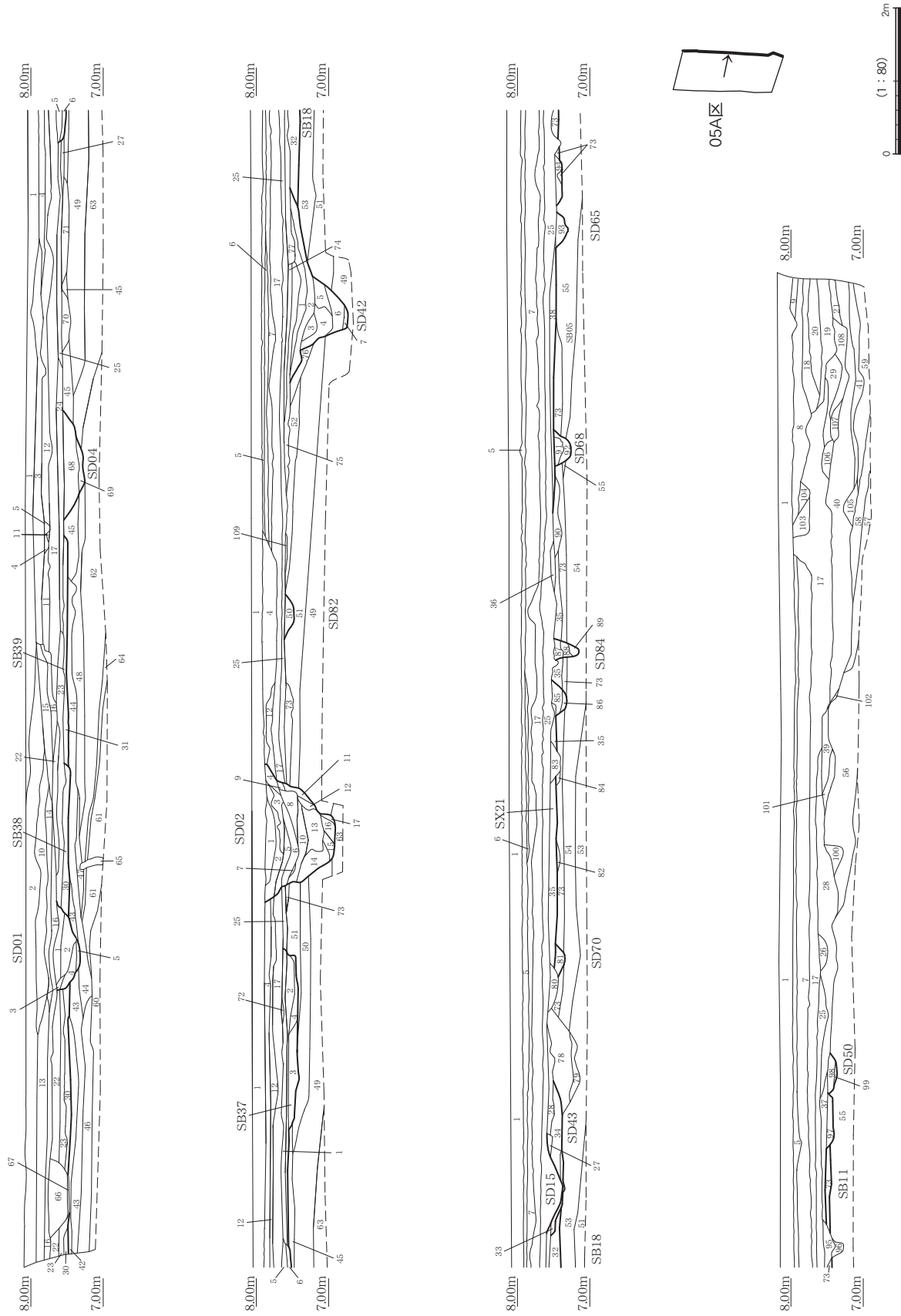
(2) その他

ここでは、上記以外の遺構で、特徴的なもののみを抜粋して報告する。

A P004～P222

P004～P222は調査区南半部で円弧状に連なる小土坑群で、大きく10列にまとめることができる。第1面で検出され、ほぼ全ての遺構よりも新しく、黄灰色土や灰黄褐色シルトを埋土とすることから、時期はE期以降であろう。性格は不明だが、土嚢の痕跡の可能性が指摘される。

B SX02 (第59図)



第 56 图 05A 区東壁土層断面図 (S-1/80)

調査区南端に位置する巨大な不定形土坑である。褐灰色粘質土を主体とする埋土だが、西半部は灰白色中粒砂層が広い範囲で分布する部分もある。時期はE期以降と思われるが、性格は不明。灰白色中粒砂は地震の液状化による噴砂の可能性が考えられたが、砂の堆積の下部に地山シルトブロックがみられ、破堤堆積物と推定するに至った。

3 第2面

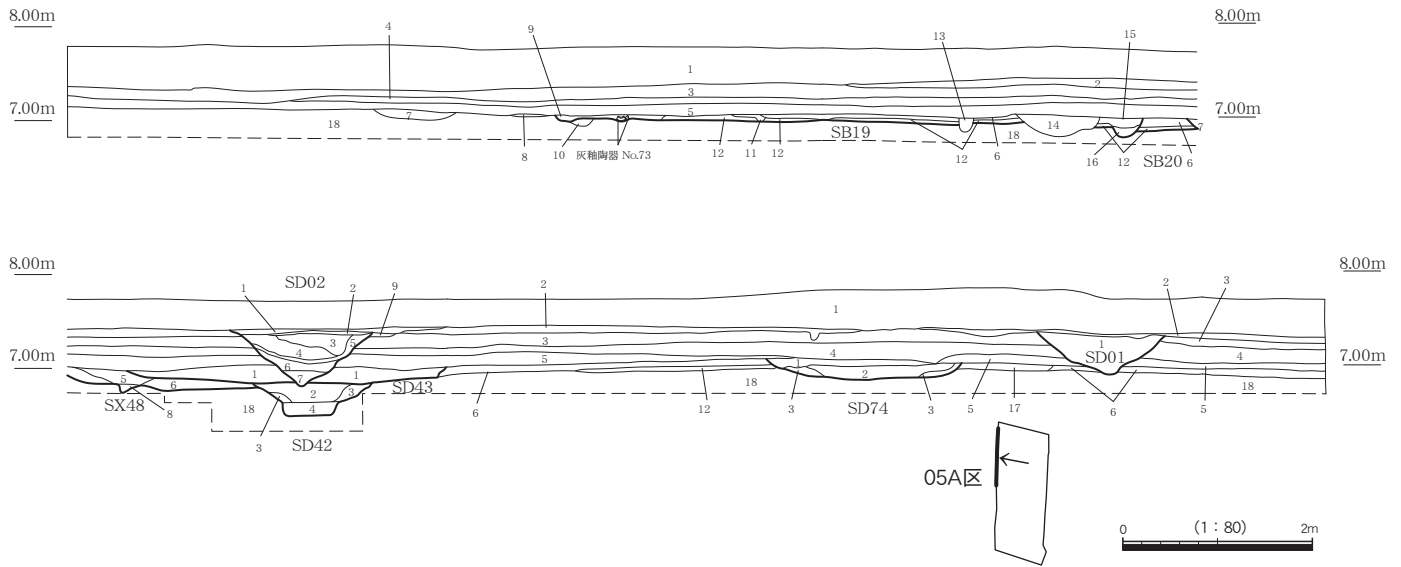
(1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構

竪穴建物と思われる遺構は検出段階では全部で41基を数えるが、最終的に竪穴建物と認定ができそうな遺構はSB01・SB02・SB03・SB04・SB05・SB06・SB07・SB08・SB09・SB10・SB11・SB14・SB15・SB16・SB19・SB23・SB25・SB27・SB28・SB30・SB34・SB35・SB37・SB38・SB39・SB40の26基である。残りのSB12・SB13・SB17・SB18・SB20・SB21・SB22・SB24・SB26・SB29・SB31・SB32・SB33・SB36・SB41の15基はここでは竪穴状遺構・性格不明遺構としてSXと表記した。

05A区東壁

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5/1 黄灰色土 (鉄分含む) 2. 2.5Y5/1 黄灰色土 (小礫含む) 3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土・2.5Y5/1 黄灰色土 4. 2.5Y5/2 暗灰褐色土 5. 2.5Y5/4 黄褐色シルト 6. 2.5Y6/3 にぶい黄色中粒砂 7. 2.5Y5/2 暗灰褐色土・10YR6/1 褐灰色粗粒砂・10YR7/1 灰白色細粒砂を層状に含む 8. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (炭化物含む) 9. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (炭化物微量含む、鉄分多く含む) 10. 2.5Y5/1 黄灰色土 (10YR6/1 褐灰色粗粒砂少量含む) 11. 2.5Y5/1 黄灰色土 (10YR7/1 灰白色細粒砂層状に少量含む) 12. 2.5Y5/1 黄灰色土 (10YR7/1 灰白色細粒砂を層状に含む) 13. 2.5Y5/1 黄灰色土 (10YR7/1 灰白色細粒砂部分的に層状に含む) 14. 10YR7/1 灰白色細粒砂・粗粒砂 15. 2.5Y5/2 暗灰黄色土 (10YR6/1 褐灰色粗粒砂少量・10YR7/1 灰白色細粒砂層状に含む) 16. 2.5Y5/2 暗灰黄色土 17. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (小礫含む) 18. 10YR6/2 灰黄褐色シルト 19. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 (鉄分多く含む) 20. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 21. 7.5YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む) 22. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト (鉄分含む) 23. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (鉄分含む) 24. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 25. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 (10YR 7/1 灰白色細粒砂少量含む) 26. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 27. 10YR /3 にぶい黄褐色シルト (鉄分含む) 28. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト・10YR7/1 灰白色細粒砂含む) 29. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト、鉄分含む) 30. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む) 31. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) 32. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む) 33. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) 34. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土・10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) 35. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む) 36. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土粒含む) 37. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む) 38. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む) 39. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む) 40. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土粒含む) 41. 10BG6/1 青灰色粘質土 (10YR8/1 灰白色シルトブロック含む) 42. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む) 43. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック少量含む) 44. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む) 45. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色シルト・10YR3/1 黒褐色粘質土含む) 46. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土粒少量含む) 47. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック少量含む) 48. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR8/1 灰白色細粒砂ブロック少量含む) 49. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR8/1 灰白色細粒砂ブロック少量含む) 50. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR8/1 灰白色細粒砂少量含む) 51. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量・10YR7/1 灰白色細粒砂含む) 52. 10YR6/1 褐灰色シルト 53. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト含む) 54. 10YR6/1 褐灰色シルト 55. 10YR6/1 褐灰色シルト・10YR7/1 灰白色細粒砂 56. 10YR8/1 灰白色細粒砂・中粒砂 (下部に10YR6/1 褐灰色シルト含む) 57. 10YR6/1 褐灰色シルト 58. 10YR5/1 褐灰色シルト 59. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土含む) 60. 10YR6/2 灰黄褐色細粒砂 61. 10YR6/1 褐灰色細粒砂 62. 10YR6/1 褐灰色細粒砂 (10YR6/1 褐灰色シルト粒含む) 63. 10YR6/1 褐灰色シルト 64. 10YR2/1 黒色粘質土 65. 10YR5/3 にぶい黄褐色中粒砂 66. 2.5Y5/3 黄褐色土 (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む) 67. 10YR8/1 灰白色細粒砂 68. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック・10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック含む) 69. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色粘質土粒含む) 70. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む) 71. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土・10YR7/1 灰白色シルトブロック少量含む) 72. 10YR7/1 灰白色細粒砂 | <ol style="list-style-type: none"> 73. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土多く含む) 74. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 75. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む) 76. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR7/1 灰白色細粒砂含む) 77. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色粘質土ブロック少量含む) 78. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む・10YR3/1 黒褐色シルト少量含む) 79. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土粒・10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック含む) 80. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土含む) 81. 10YR4/1 褐灰色粘質土 82. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む) 83. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む) 84. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト含む) 85. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む) 86. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む) 87. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む・10YR3/1 黒褐色粘質土粒少量含む) 88. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粒少量含む) 89. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック少量含む) 90. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト含む・10YR4/1 褐灰色シルト少量含む) 91. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒少量含む) 92. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) 93. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量・10YR7/1 灰白色シルト粒少量含む) 94. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) 95. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む) 96. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト・10YR7/1 灰白色シルト含む) 97. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む) 98. 10YR5/1 褐灰色シルト 99. 10YR6/1 褐灰色シルト 100. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR8/1 灰白色細粒砂筋状に含む) 101. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR8/1 灰白色細粒砂ブロック含む) 102. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む) 103. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) 104. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (10YR8/1 灰白色細粒砂含む) 105. 10BG6/1 青灰色粘質土 106. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR7/1 灰白色細粒砂粒含む) 107. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR7/1 灰白色細粒砂ブロック含む・10YR 8/1 灰白色細粒砂筋状に含む) 108. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR8/1 灰白色細粒砂含む) 109. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘土少量含む) |
| <ol style="list-style-type: none"> SD01 1. 2.5Y5/4 黄褐色土 (10YR8/2 灰白色中粒砂、小礫含む) 2. 2.5Y6/2 灰黄色土 (小礫含む) 3. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む) 4. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック少量含む) 5. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック含む・上部に10YR8/1 灰白色細粒砂層状に含む) | <ol style="list-style-type: none"> SB37 1. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 (10YR7/1 灰白色シルトブロック少量含む) 2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む) 3. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック少量・10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む) 4. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む) 5. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 6. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む) |
| <ol style="list-style-type: none"> SD02 1. 2.5Y5/2 暗灰黄色土 (小礫含む) 2. 2.5Y5/2 暗灰黄色土 (10YR8/2 灰白色中粒砂含む) 3. 10YR6/6 明黄褐色土 4. 2.5Y5/4 黄褐色土 (10YR8/2 灰白色粗粒砂ブロック状に含む) 5. 2.5Y5/2 暗灰黄色土 (10YR8/2 灰白色細粒砂含む) 6. 10YR8/1 灰白色細粒砂 7. 2.5Y5/2 暗灰黄色土 (10YR8/2 灰白色細粒砂含む) 8. 2.5Y5/4 黄褐色土 (10YR8/2 灰白色粗粒砂含む) 9. 10YR8/2 灰白色粗粒砂 10. 10YR8/2 灰白色粗粒砂 (2.5Y5/4 黄褐色土少量含む) 11. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む) 12. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む) 13. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色シルト・10YR8/1 灰白色細粒砂ブロック含む) 14. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む) 15. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック少量含む) 16. 10YR5/1 褐灰色シルト 17. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土粒少量含む) | <ol style="list-style-type: none"> SD42 1. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む) 2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルトブロック含む) 3. 10YR4/1 褐灰色粘質土 4. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む) 5. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒・10YR 3/1 黒褐色粘質土粒含む) 6. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む) |

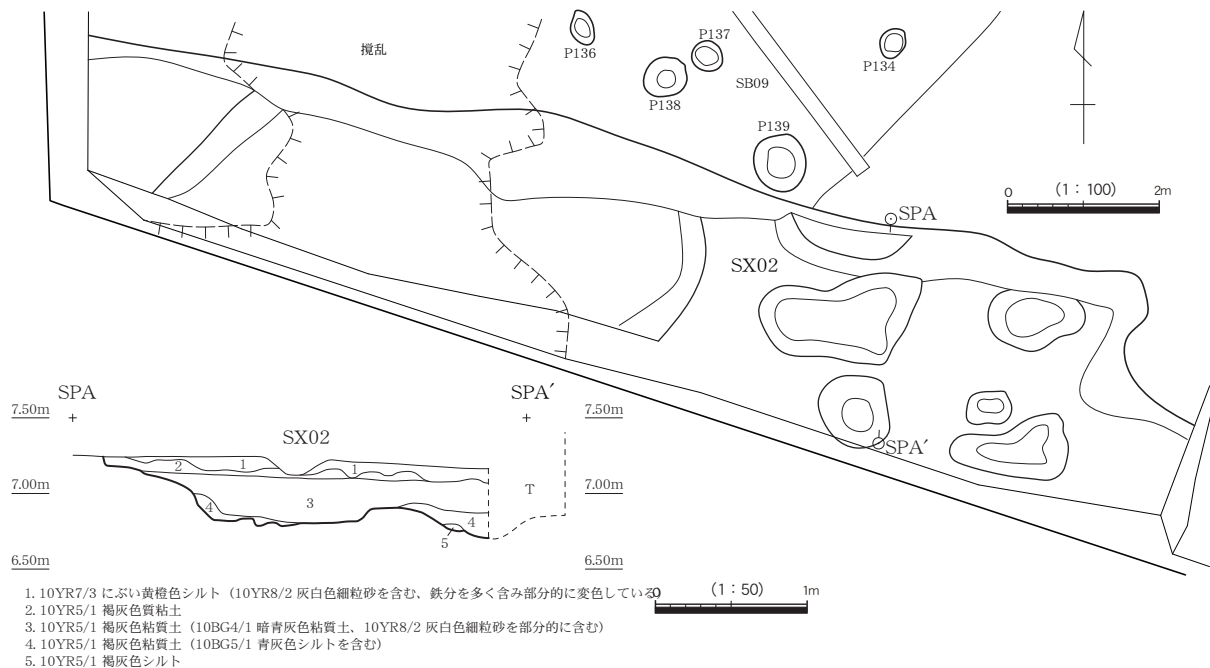
第57図 05A区東壁土層断面土色



05A区西壁

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y5/1 黄灰色土 (小礫含む) 2. 2.5Y5/2 暗黄褐色土 (10YR6/1 褐灰色粗粒砂を層状に含む) 3. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (小礫含む) 4. 10YR5/1 褐灰色粘質土 5. 10YR4/1 褐灰色粘質土 6. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック・粒・10YR6/1 褐灰色粘質土粒含む) 7. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土含む) 8. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色粘質土粒含む) 9. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色粘質土ブロック含む) 10. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む) 11. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土含む・10YR6/1 褐灰色粘質土ブロック少量含む) 12. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土粒・ブロック所々含む) 13. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色粘質土粒・ブロック含む、炭化物含む) 14. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土少量・10YR6/1 褐灰色粘質土ブロック含む) 15. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色粘質土粒含む) 16. 10YR2/1 黒色粘質土 (10YR6/1 褐灰色粘質土ブロック含む) 17. 10YR3/1 黒褐色粘質土(10YR6/1 褐灰色シルト粒含む、下部に10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) 18. 10YR6/1 褐灰色シルト 19. 10YR3/1 黒褐色粘質土(10YR4/1 褐灰色粘質土粒含む、炭化物含む) | <ul style="list-style-type: none"> SD01 1. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む) SD02 1. 10YR4/4 褐色細粒砂 (10YR5/1 褐灰色シルト含む) 2. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂少量含む) 3. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂含む) 4. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂・10YR6/2 灰黄褐色シルトが縞状に入る) 5. 10YR7/1 灰白色シルト (小礫少量含む) 6. 10YR7/1 灰白色シルト (10YR8/2 灰白色粗粒砂含む) 7. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂含む、下部に10YR8/2 灰白色粗粒砂含む) SD42 1. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック少量含む) 2. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック含む) 3. 10YR2/1 黒色粘質土 SD43 1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック粒含む、炭化物少量含む) SB48 1. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む、炭化物含む) 2. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック少量含む、下部に10YR6/1 褐灰色粘質土ブロック含む、炭化物含む) SD74 3. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色粘質土ブロック含む) 1. 10YR4/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト粒含む) 2. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック少量含む、炭化物少量含む) 3. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック少量含む) |
|--|---|

第 58 図 05A 区西壁土層断面図 (S=1/80)



- 1. 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂を含む、鉄分を多く含む部分的に変色している)
- 2. 10YR5/1 褐灰色粘質土
- 3. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10BG4/1 暗青灰色粘質土、10YR8/2 灰白色細粒砂を部分的に含む)
- 4. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10BG5/1 青灰色シルトを含む)
- 5. 10YR5/1 褐灰色シルト

第 59 図 SX02 平面図・土層断面図 (S=1/50、1/100)

A SB34・SX36 (第60図)

SX (SB) 36 調査区北端に位置し、東西長 336cm の規模を持つ平面長方形の浅い遺構である。北部は調査区外、東部は攪乱によって不明である。深さ 3 cm の皿状の断面を呈し、南辺で緩い壁の立ち上がりを認める。平面検出では竪穴建物を想定したが、壁溝などの付属施設が検出されなかったため、性格不明遺構である。出土遺物は須恵器片と土師質土器が出土している。

SB34 調査区北部に所在する南北 473cm × 東西 432cm で深さ 4 cm の規模を持つ遺構である。北東部の遺構検出面が下がっているために形状がやや歪となるが、隅丸方形を呈していただろう。各辺で緩い壁の立ち上がりが観察されるに留まり壁溝を持たないが、南半部で柱穴らしきピット (P382・P383) が検出されたために竪穴建物と推定した。重複関係では SB35 よりも新しい。覆土から灰釉陶器片が出土している。

B SX33・SB39・SX41 (第61図)、SB38

SX (SB) 33 調査区北端に位置し、東西長が 407cm、深さが 3 cm を測る平面長方形の浅い遺構である。北部は調査区外に拡がり、南部は溝によって破壊され不明である。東西両辺で壁が立ち上がり、内部に土坑も存在するが、明瞭な壁溝などの付属施設が検出されなかったため、性格不明遺構と判断した。灰釉陶器・須恵器片が出土している。

SX (SB) 41 SB33 の東側には、SB33 に切られる形でやや方位を異にするほぼ直線状の落ち込み SX41 が検出されたが、これも竪穴建物とは認定し難い。

SB39 調査区北部に所在する南東—北西 500cm × 北東—南西 325cm で深さ 5 cm の規模を持つ平面が歪な隅丸長方形の遺構である。内部には、特に南部に土坑群が展開しているが、P313 と P315 が支柱穴に該当すると考えられる。その他の内部施設は不明であり、かつ埋土は褐灰色粘質土が薄く堆積するのみだが、本来の床面が滅失した竪穴建物と想定したい。検出状況では SB32 よりも新しく、平安時代の灰釉陶器が出土している。

SB38 個別遺構図には掲載しなかったが、SB38 は調査区北東端で検出された遺構で、西端部のみが検出された。西隅部に支柱穴 P316 が存在することから竪穴建物である可能性が高い。灰釉陶器片が出土している。

C SX (SB) 32 (第62図)

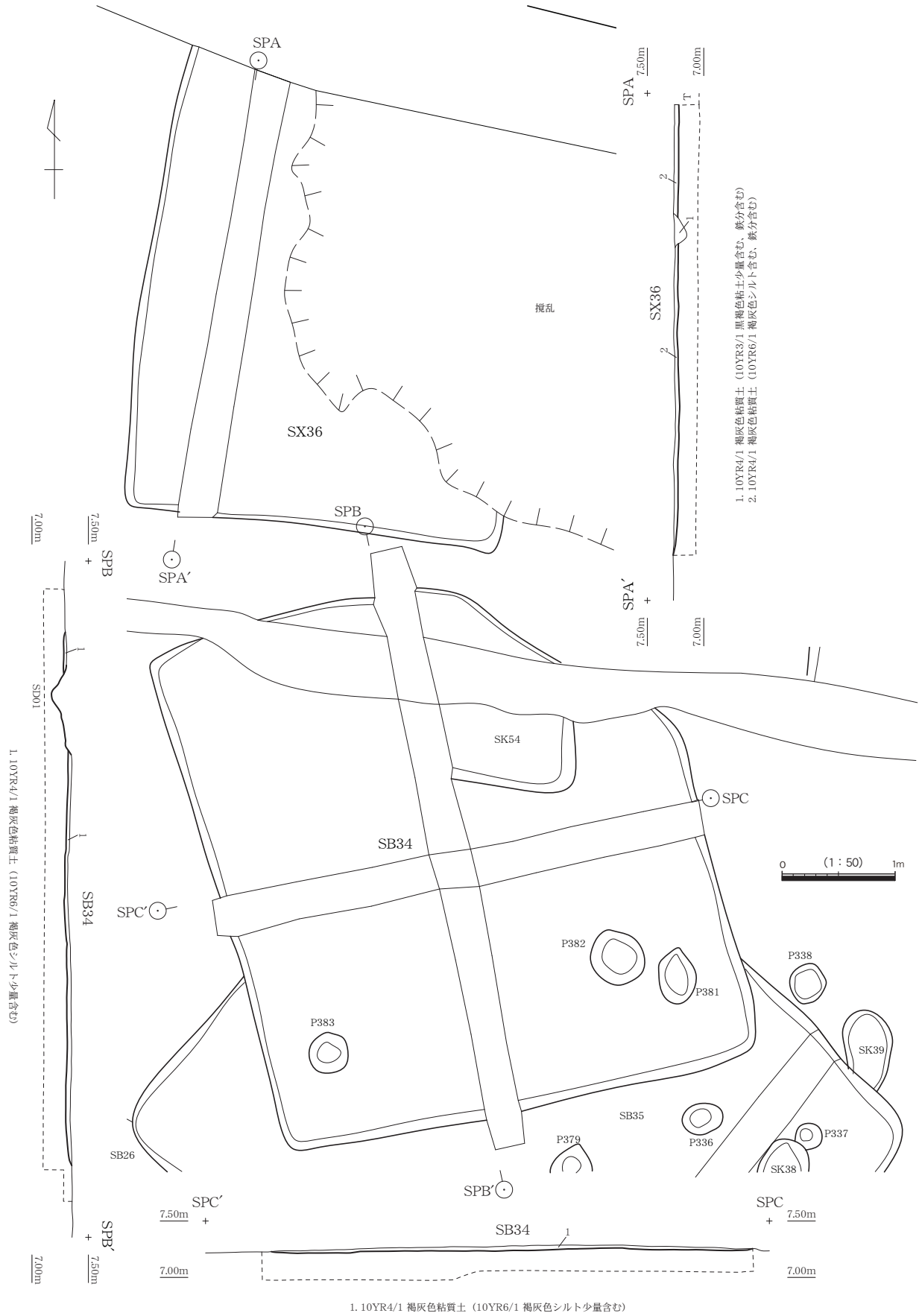
東西長が 572cm、深さが 9 cm の規模を持つ浅い遺構で、南北長は 614cm 以上を測る。北部は SB39 などの遺構に切れ、プランは不明である。各辺で壁の立ち上がりが認められるが、南辺西半部が張り出して形状は歪である。内部に柱穴に相当する土坑も存在するが、きれいに並ばないため、性格不明遺構としておく。北側に所在する SX33 との新旧関係は不明であるが、南側の SX31 よりも新しい。床面直上で灰釉陶器片が出土した。

D SB35 (第64図)

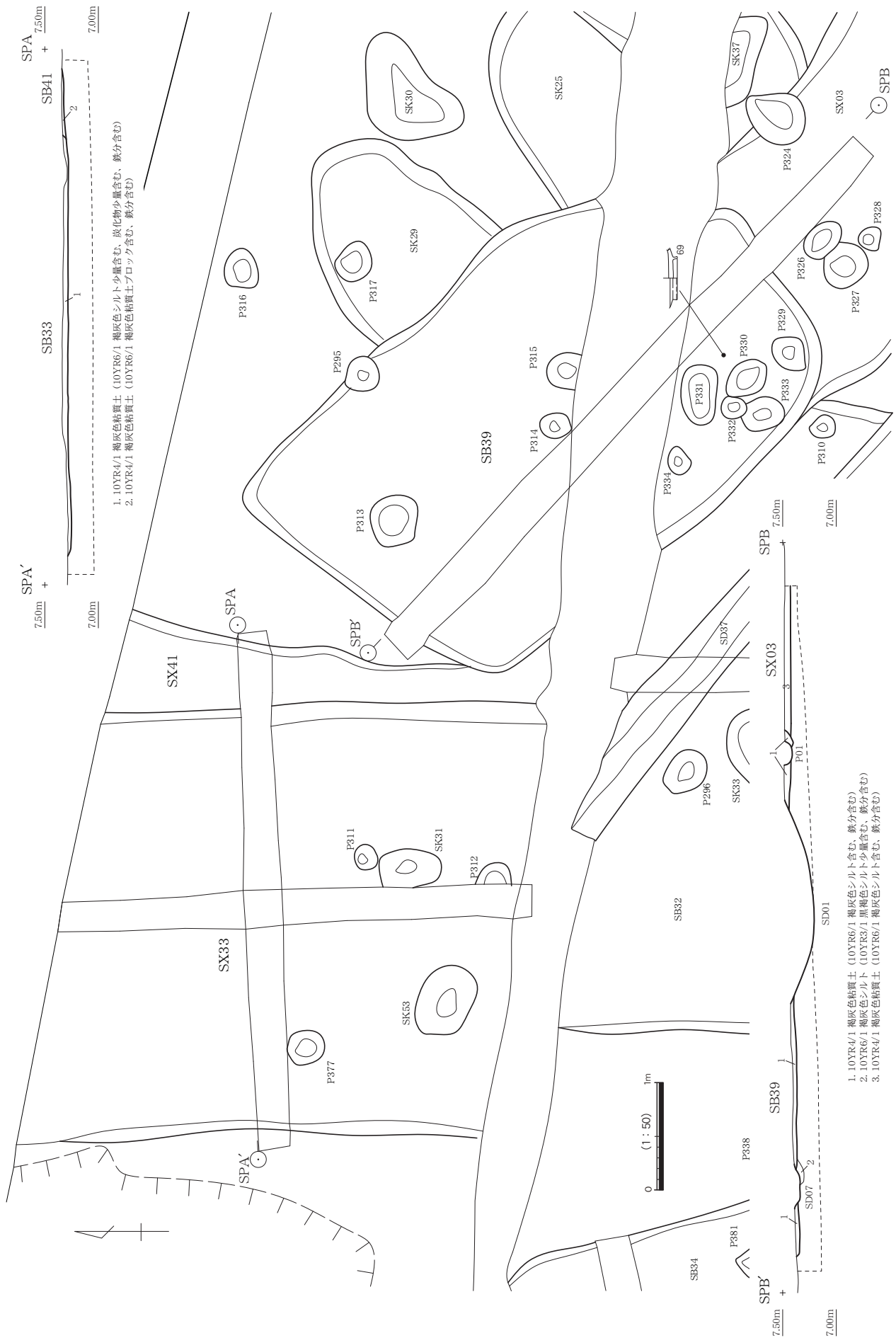
南東—北西 550cm × 北東—南西 496cm で、深さ 3 cm の規模を持つ平面が隅丸長方形の遺構である。北部は SB34 に切れ、南部は SB26 を切る形で検出された。柱穴と思われる土坑群が展開しているが、支柱穴に該当し得るものは P337 のみと考えられる。その他の内部施設は不明であり、かつ埋土は褐灰色粘質土が薄く堆積するのみで、竪穴建物と推定されるがやや疑わしい。灰釉陶器片が出土している。

E SX26・SX20 (第63図)

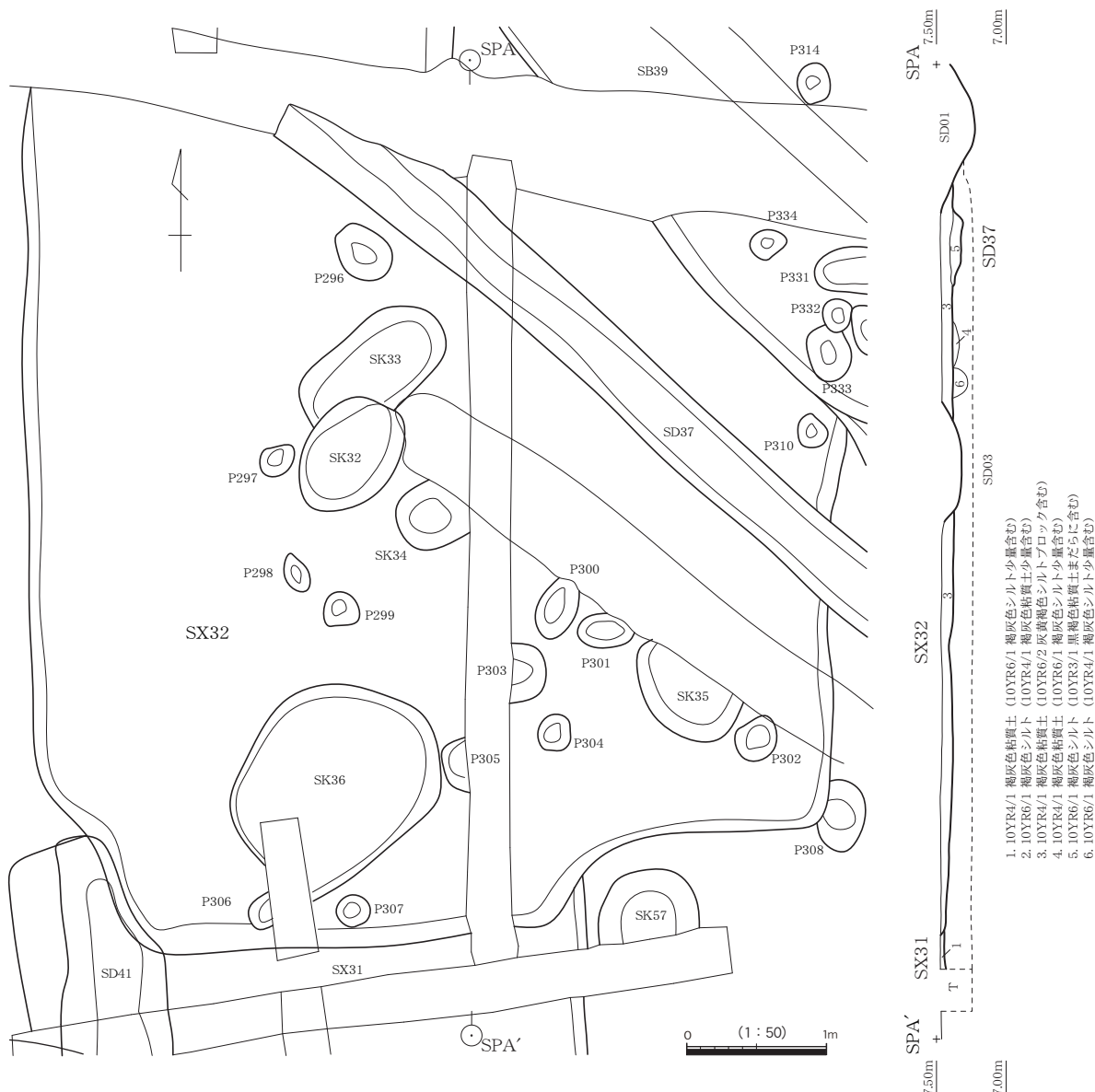
SX (SB) 26 南東—北西方向で 442cm を測る隅丸長方形の遺構で、深さは 6 cm を測る。炭化物を少量含む褐灰色粘質土を埋土とするが、壁溝や柱穴などの内部施設は一切検出されなかった。竪穴建物の可能性を考えて調査したが、性格不明遺構と言わざるを得ない。SX20 と SB35 に切られて検出されている。



第 60 図 SB34・SX36 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 61 図 SX33・SB39・SX41 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 62 図 SX32 平面図・土層断面図 (S=1/50)

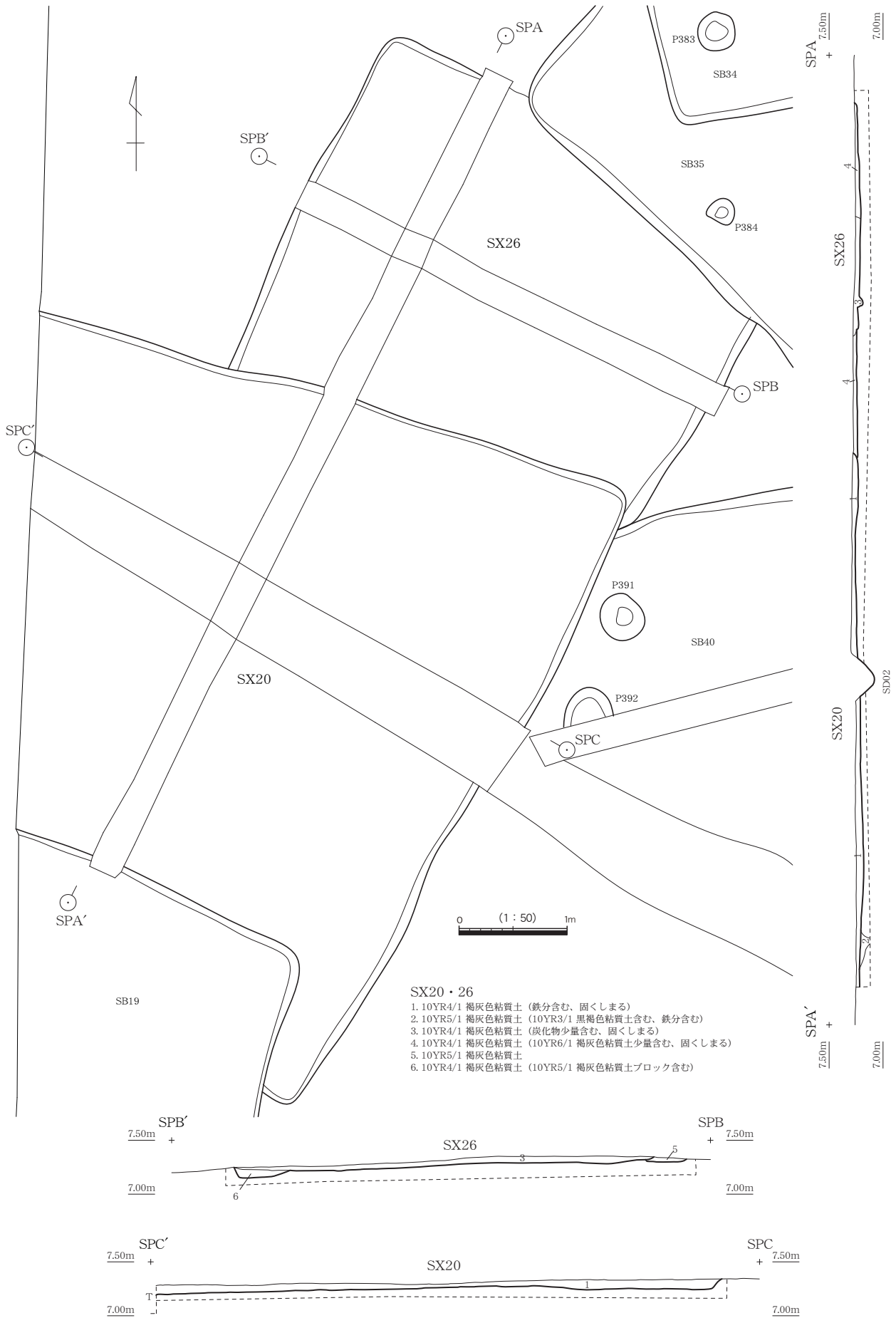
SX (SB) 20 北東—南西方向で 643cm の規模を持つ平面が歪な隅丸長方形の遺構で、深さは 6cm である。南部は SB19 に切られ、西部は調査区外に拡がり全形を知り得ない。SB26 と同様に、内部施設は全く検出されておらず、竪穴建物と認めることは難しい。

F SB28・SX29・SX31 (第 65・66 図)

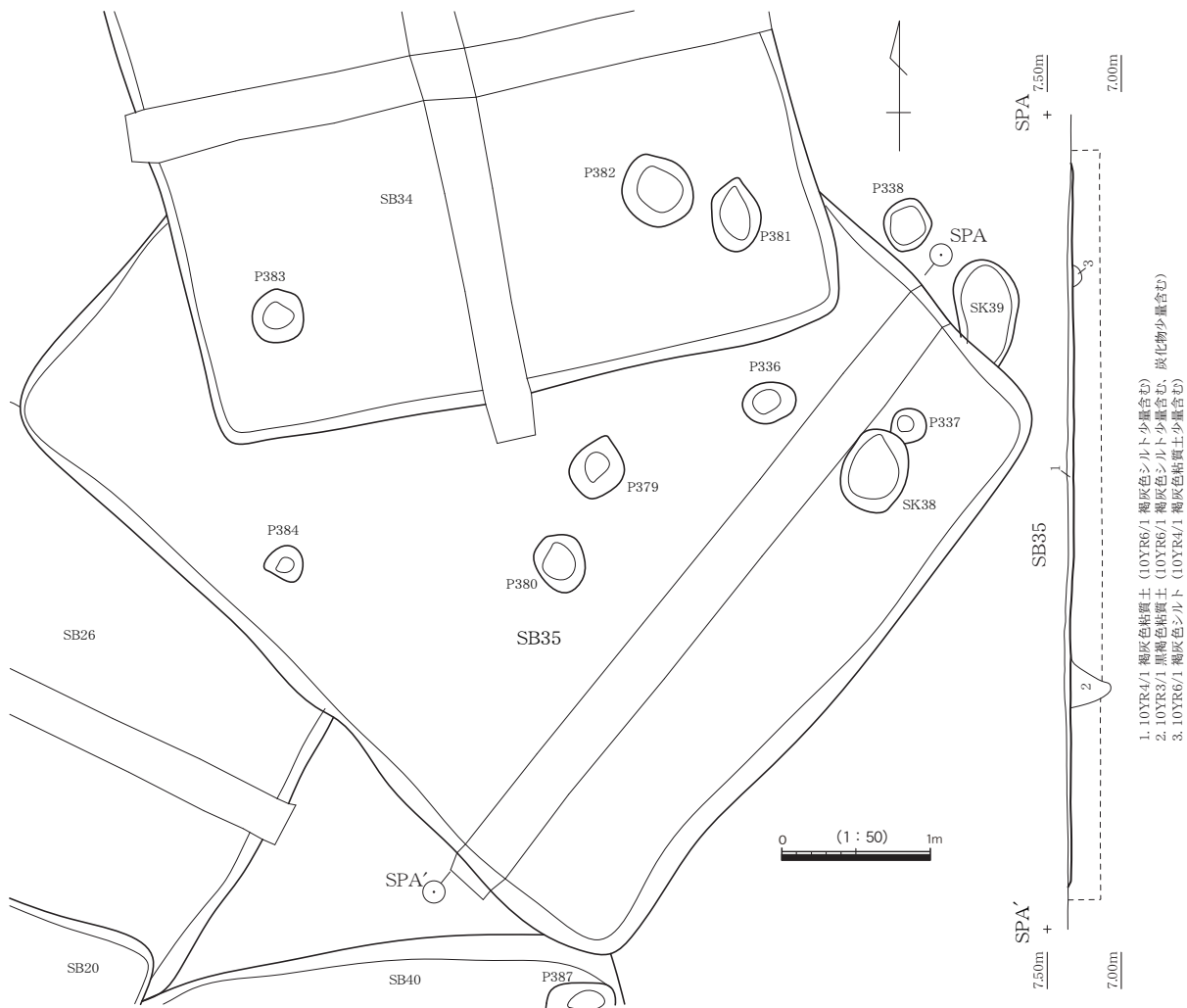
SX (SB) 31 南北長が 604cm、東西長が 406cm、深さが 6cm の規模を持つ浅い遺構で、北東部は SX32 に、南東部は SB28 によってそれぞれ切られている。西半部では堀形もほとんど残っておらず、壁溝と思われる SD41 をもとに西辺を推定した。ただし SD41 は屈曲した東端部で短く南に折れ SX31 のプランと合致していない。壁溝以外の内部施設は柱穴と思われるピットのみで、性格不明遺構とせざるを得ない。出土遺物も土師質土器がわずかに出土しているのみである。

SB28 南北長が 544cm、東西長が 446cm の隅丸方形プランを持つ竪穴建物と思われる遺構で、深さが 4cm を測る。内部に土坑が多数検出されたが、配置からみてこれらが全て柱穴とは考えにくい。出土遺物は灰釉陶器片が出土する。

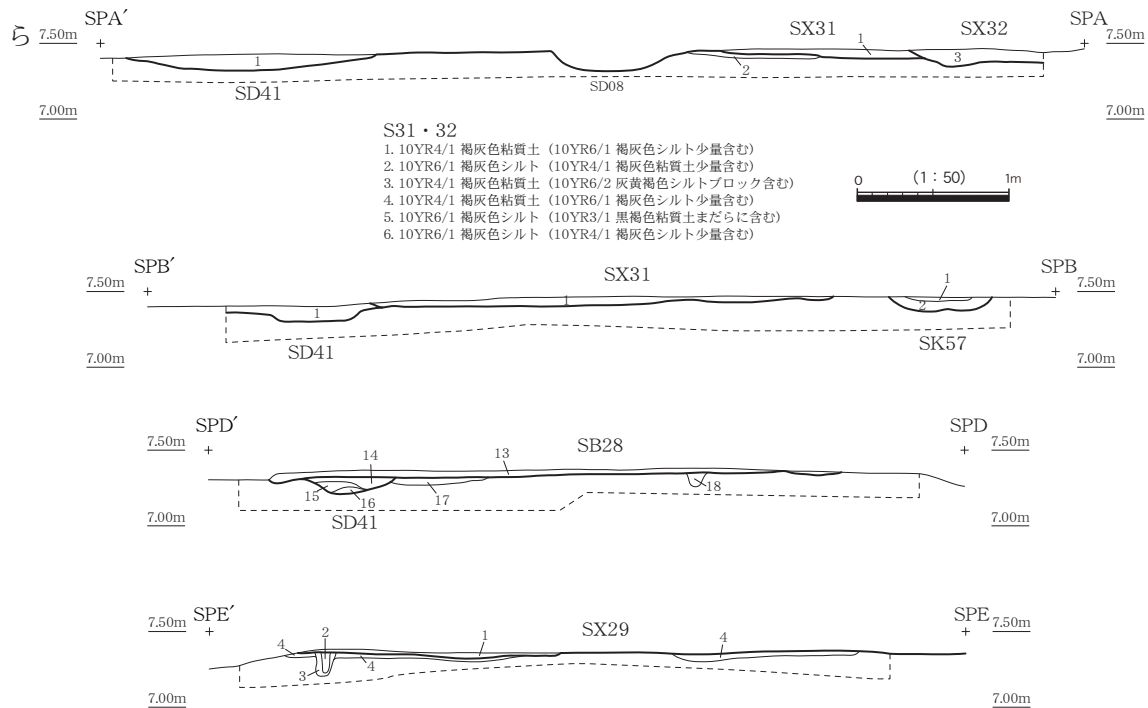
SX (SB) 29 北部が SB28 に、南部が SD02 に切られ、西辺も地山が下がるために堀形が残ってお



第 63 図 SX26・SX20 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 64 図 SB35 平面図・土層断面図 (S=1/50)



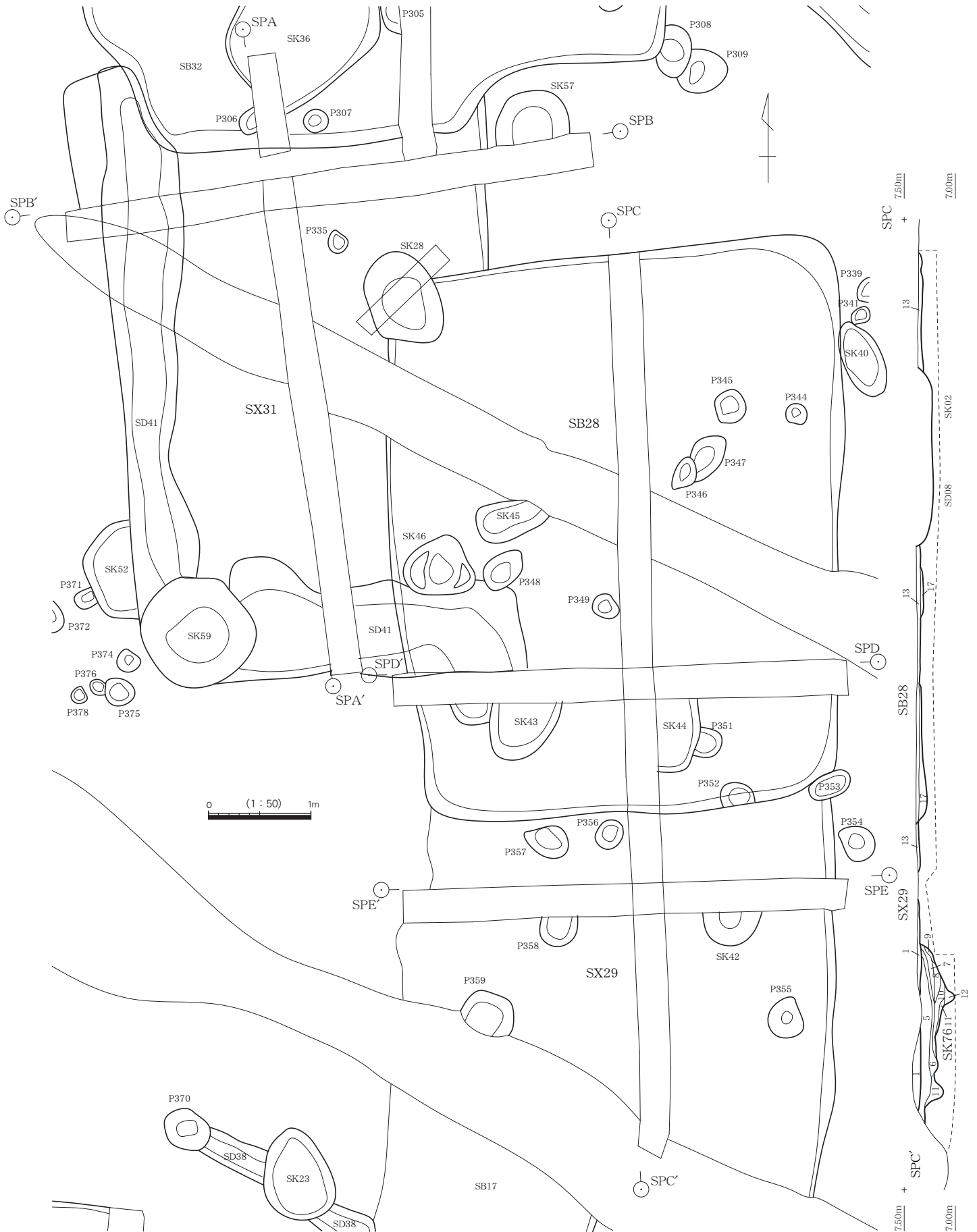
S31・32

1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む)
2. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む)
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/2 灰黄褐色シルトブロック含む)
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む)
5. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土まだらに含む)
6. 10YR6/1 褐灰色シルト

SB28・SX29

1. 10YR4/1 褐灰色粘質土
2. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土多く含む)
3. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む)
4. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト筋状に含む)
5. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む)
6. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量、10YR3/1 黒褐色シルト少量含む)
7. 10YR4/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む)
8. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色シルト少量含む)
9. 10YR5/1 褐灰色シルト
10. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土、10YR 6/1 褐灰色シルト含む)
11. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む)
12. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む)
13. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む)
14. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む)
15. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR8/2 灰白色シルト層状に含む)
16. 10YR6/1 褐灰色シルト
17. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む)
18. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト含む)

第 65 図 SB28・SX29・SX31 土層断面図 (S=1/50)



第 66 图 SB28・SX29・SX31 平面図・土層断面図 (S=1/50)

ず、規模の特定が難しい遺構である。壁溝は残存しない。P355 と P359 が柱穴となる可能性があるものの、竪穴建物か否かは疑わしい。

G SB40 (第 68 図)

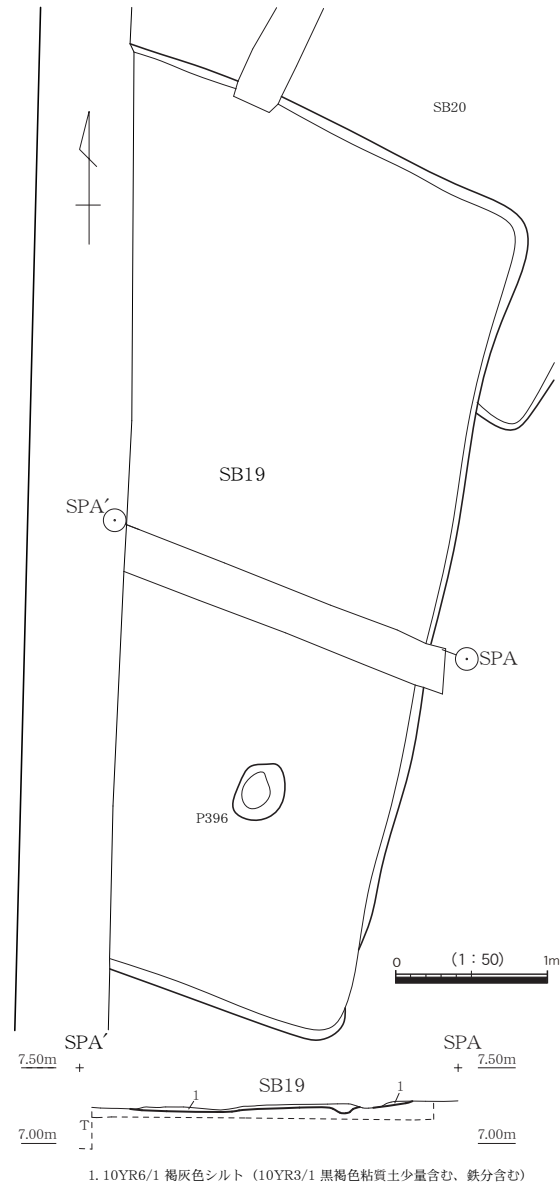
南北長が 428cm、東西長が 429cm 以上を測る隅丸方形プランを持つ遺構であり、壁溝は残存しないが、四隅に柱穴と思われる土坑が複数存在している。柱を何度か建て替えた竪穴建物であると推定したい。SX20 に切られるが、灰釉陶器片が出土しており、C 期に属する。

H SB19 (第 67 図)

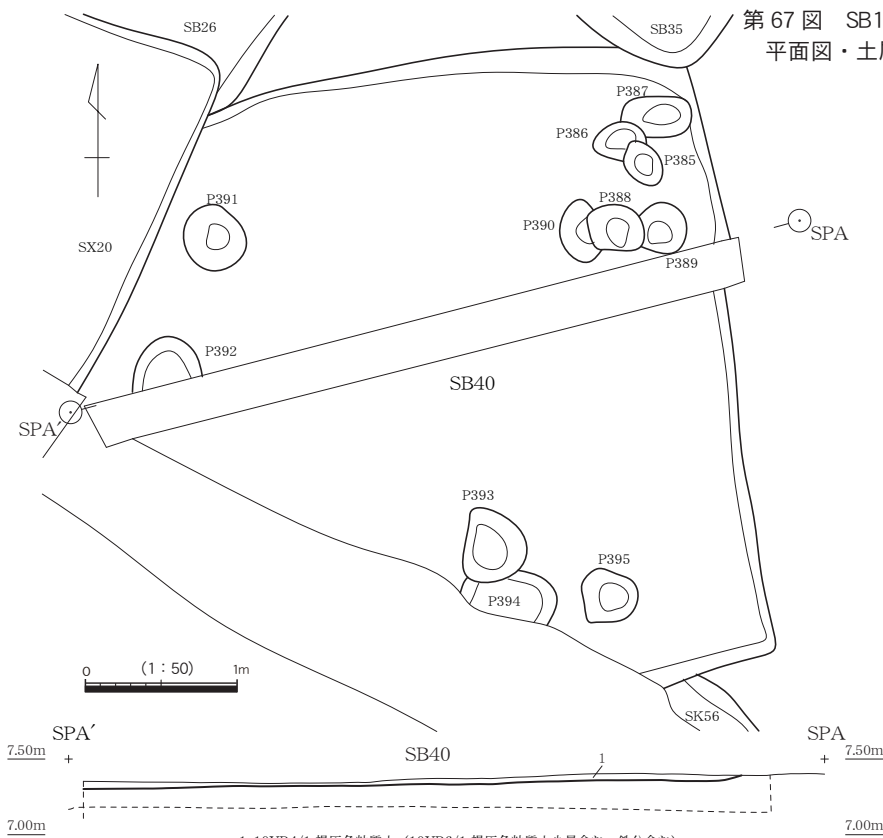
調査区西端で検出された浅い遺構で、大半は調査区外に拡がる。南北長が 590cm を測るやや歪んだ隅丸方形を呈しているが、壁溝は存在しない。南東隅に P396 があってこれが柱穴となると思われるため、竪穴建物の可能性を考えたい。灰釉陶器碗が出土しており C 期に位置づけられる。

I SX22・SB37 (第 69 図)

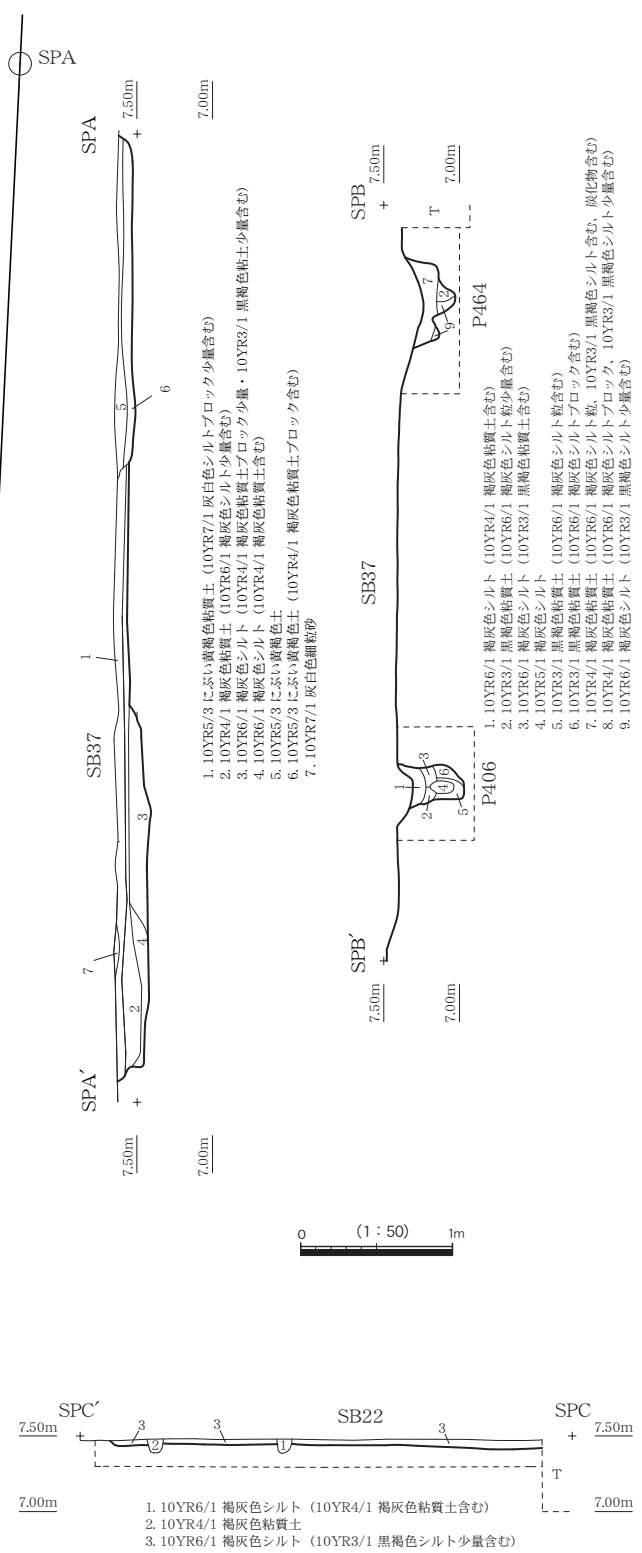
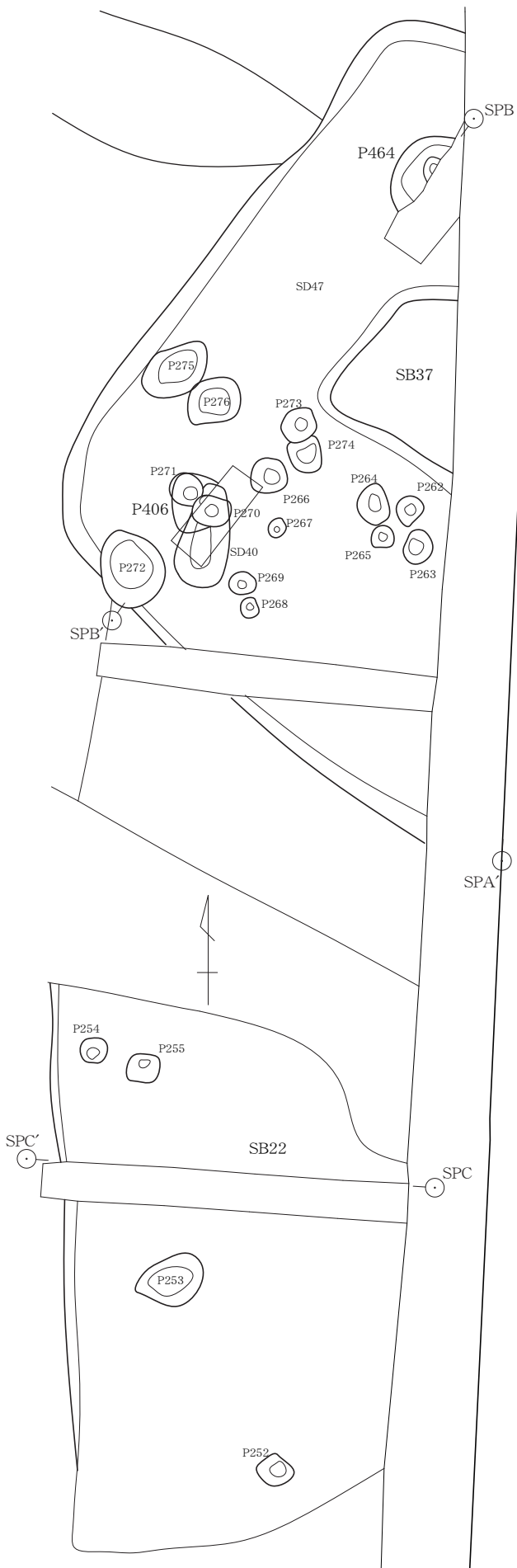
SB37 調査区東端で検出された南西—北東方向で 514cm を測る隅丸方形を呈する竪穴建物で、大半は調査区外に拡がる。幅約 240cm、深さ約 4 cm の幅広い周溝 SD47 を巡らせ、それを整地した後に柱穴 P406 と P464 が掘削されていた。本来の床面はすでに滅失しているも



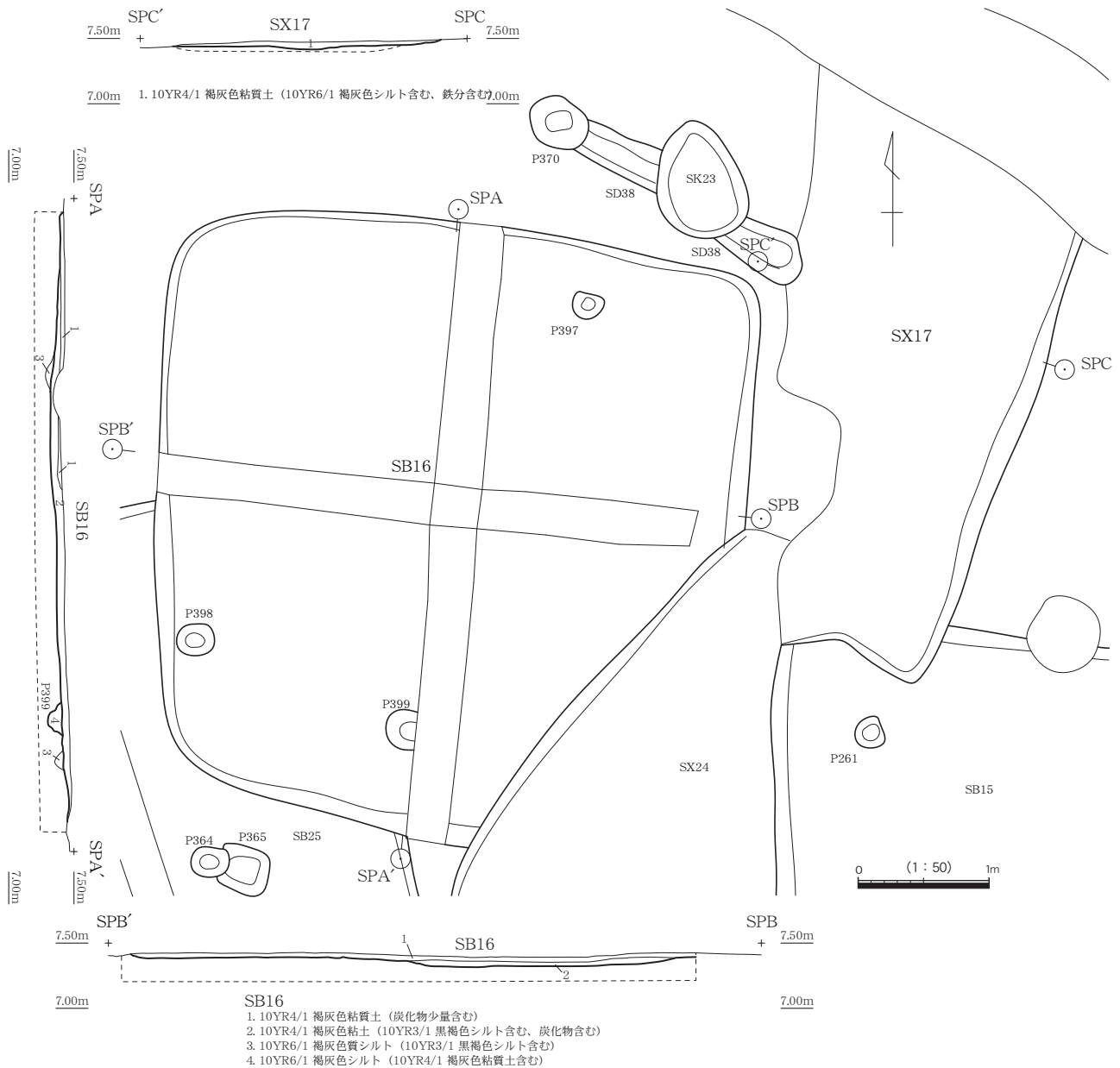
第 67 図 SB19
平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 68 図 SB40 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 69 図 SX22・SB37 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 70 図 SB16・SX17 平面図・土層断面図 (S=1/50)

のと思われ、火処遺構などは不明である。C 期か？

SX (SB) 22 SB37 の南で西辺のみが検出された浅い遺構である、北辺と南辺が滅失しており、全形を知り得ない。内部に土坑は認められるものの、性格不明遺構である。

J SB16・SX17 (第 70 図)

SB16 南北長が 470cm、東西長が 450cm を測る隅丸方形プランを持つ遺構で、南東部が SX24 に切られる。堀形は東半部がわずかに低くなっており、貼床されていた。壁溝は残存せず、柱穴と思われるピットは四隅に存在しないが、竪穴建物の可能性を残したい。

SX (SB) 17 東辺から南隅部のみが確認された遺構で、西半部では浅くなり埋土が全く残存していない。SB15 を切る形で検出されたため、SB16 と SX24 よりも切り合いは新しい。壁溝などの内部施設はなく、性格不明遺構である。時期も不明。

K SB15・SX24 (第 71 図)



第71図 SB15・SX24 平面図・土層断面図 (S=1/50)

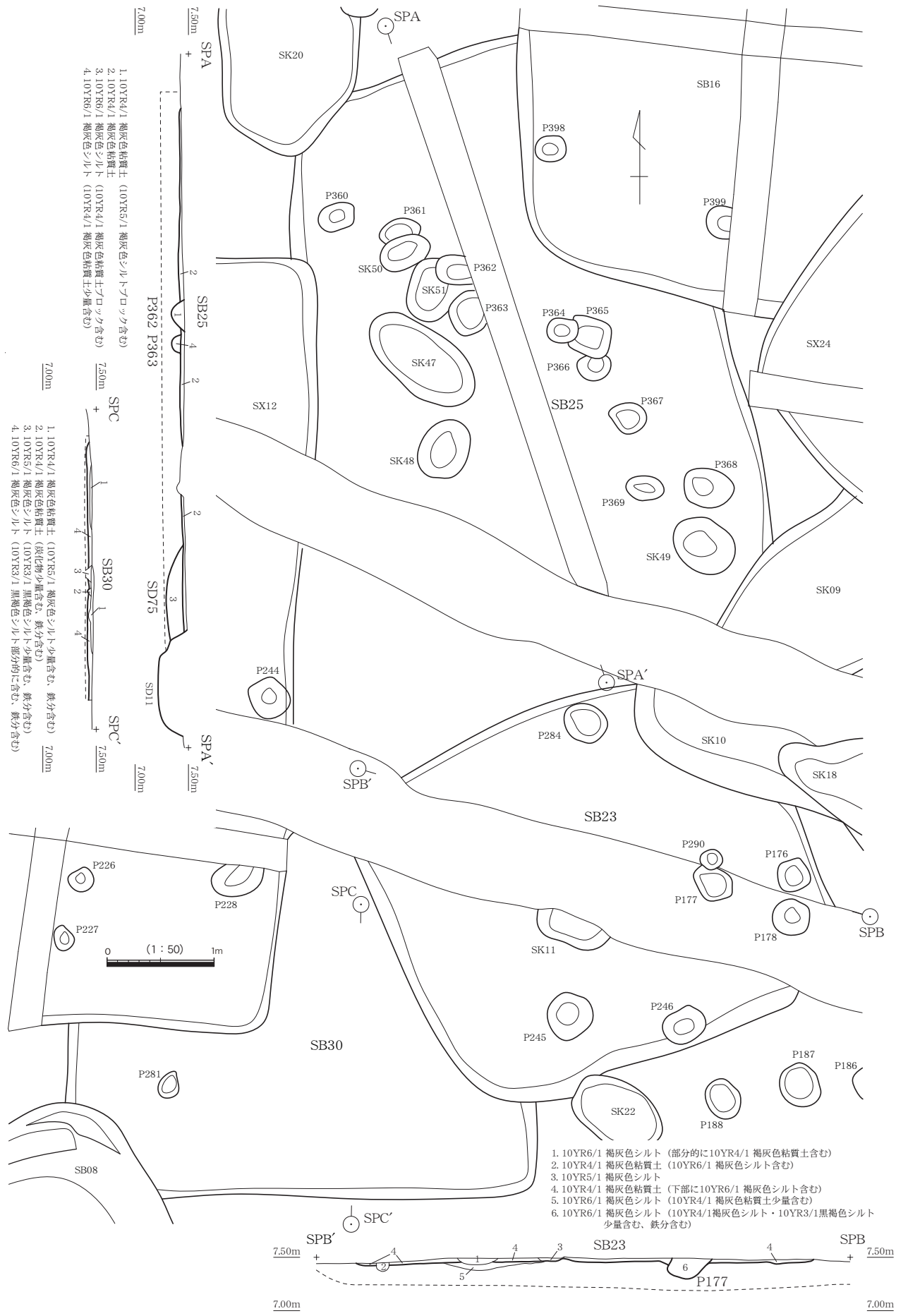
SB15 南北長が559cm、東西長が436cmを測る隅丸方形プランを持つ遺構で、SX24を切る形で検出された。下位に弥生時代の溝SD43があり、床面の一部は黒褐色粘質土でわずかに整地され、さらに褐灰色粘質土で貼床が施されていた。壁溝や火処遺構などは残存せず、柱穴と思われるピットは北辺にしか存在しないが、竪穴建物と考えておく。灰釉陶器碗が出土しており、C期の遺構と考えられる。

SX (SB) 24 西隅部を中心に西半部のみが確認された遺構で、SB15とSX17に切られる形で検出された。壁溝などの内部施設はなく、性格不明遺構である。墨書された灰釉陶器碗(063)が出土している。

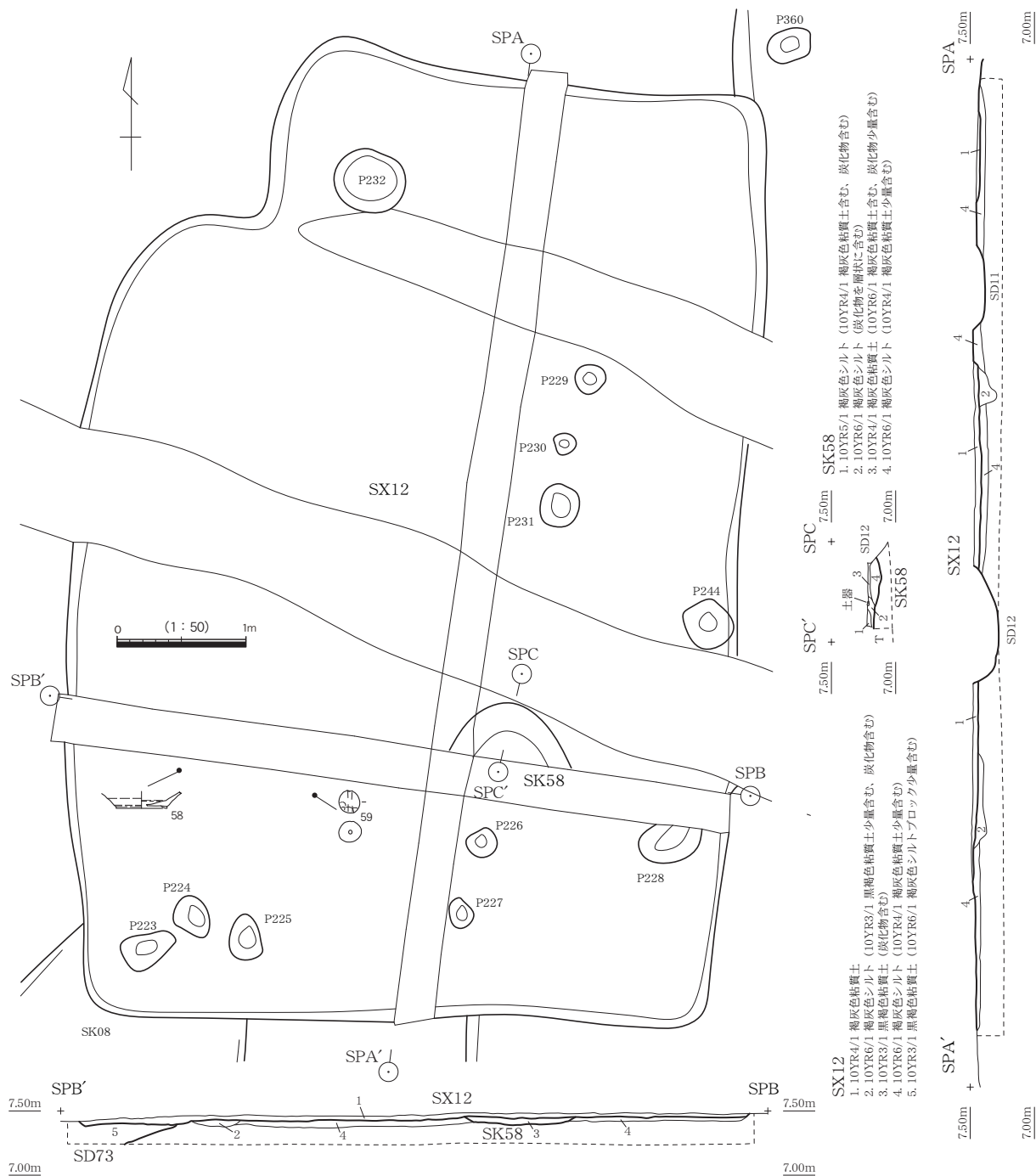
L SB23・SB25・SB30 (第72図)

SB25 南北長が540cm以上、東西長が394cm以上を測る遺構で、北東部はSB16に、南部はSB23に、SX12にそれぞれ切られている。壁溝や火処遺構などは存在しないが、土坑は多数存在しており、その一部は柱穴に相当する可能性がある。竪穴建物と考えておきたい。

SB23 南北長が350cm、東西長が400cmの規模を持つ遺構で、一部がSK10などによって壊され



第 72 図 SB23・SB25・SB30 平面図・土層断面図 (S=1/50)



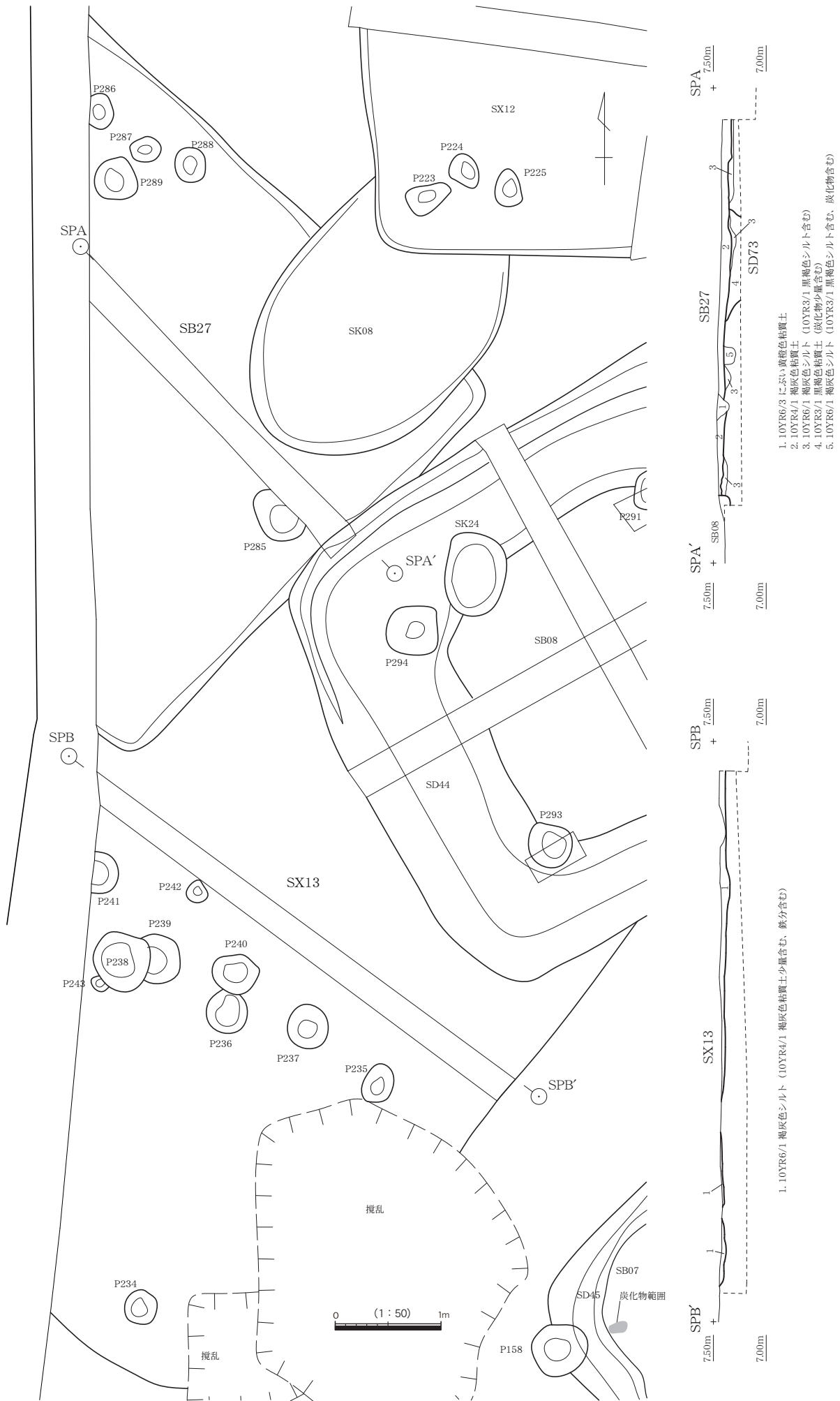
第 73 図 SX12 平面図・土層断面図 (S=1/50)

ていた。壁溝や火処遺構などは存在しないが、P245 や P178 など主柱穴に相当する土坑が存在しており、竪穴建物と推定しておく。

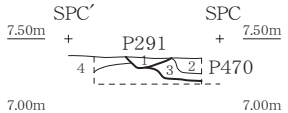
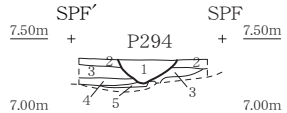
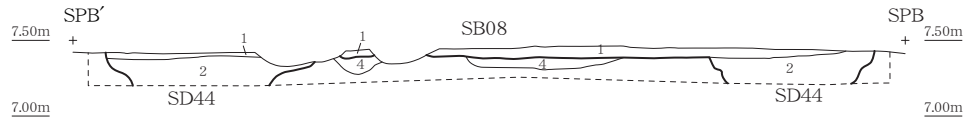
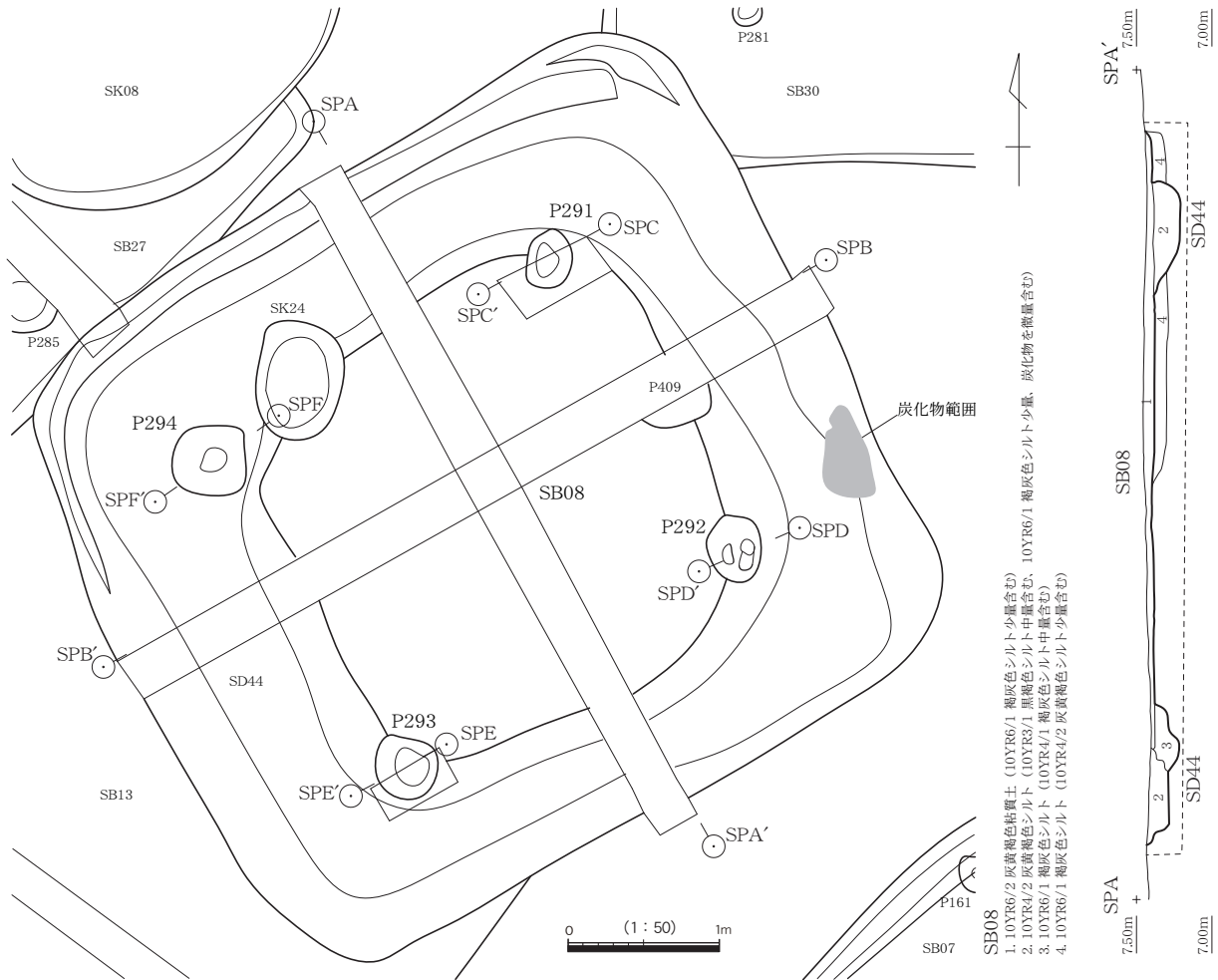
SB30 東西長が 440cm の規模を持つ竪穴建物で、北部が SB23 などによって壊されていた。壁溝や火処遺構などは存在しないが、P281 がかりうじて主柱穴に相当すると思われることから、竪穴建物と推定しておく。

M SX12 (第 73 図)

SX (SB) 12 南北長が 792cm、東西長が 528cm を測るやや規模が大きい遺構である。平面形が北西端部で入角となっており、複数の隅丸方形プランの遺構が重複していた可能性も考えられる。内部

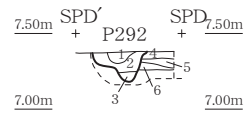
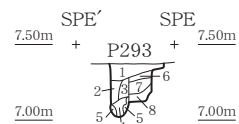


第 74 図 SX13・SB27 平面図・土層断面図 (S=1/50)



1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む、炭化物少量含む)
2. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト含む)
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む)
4. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色粘質土少量含む)
5. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む)

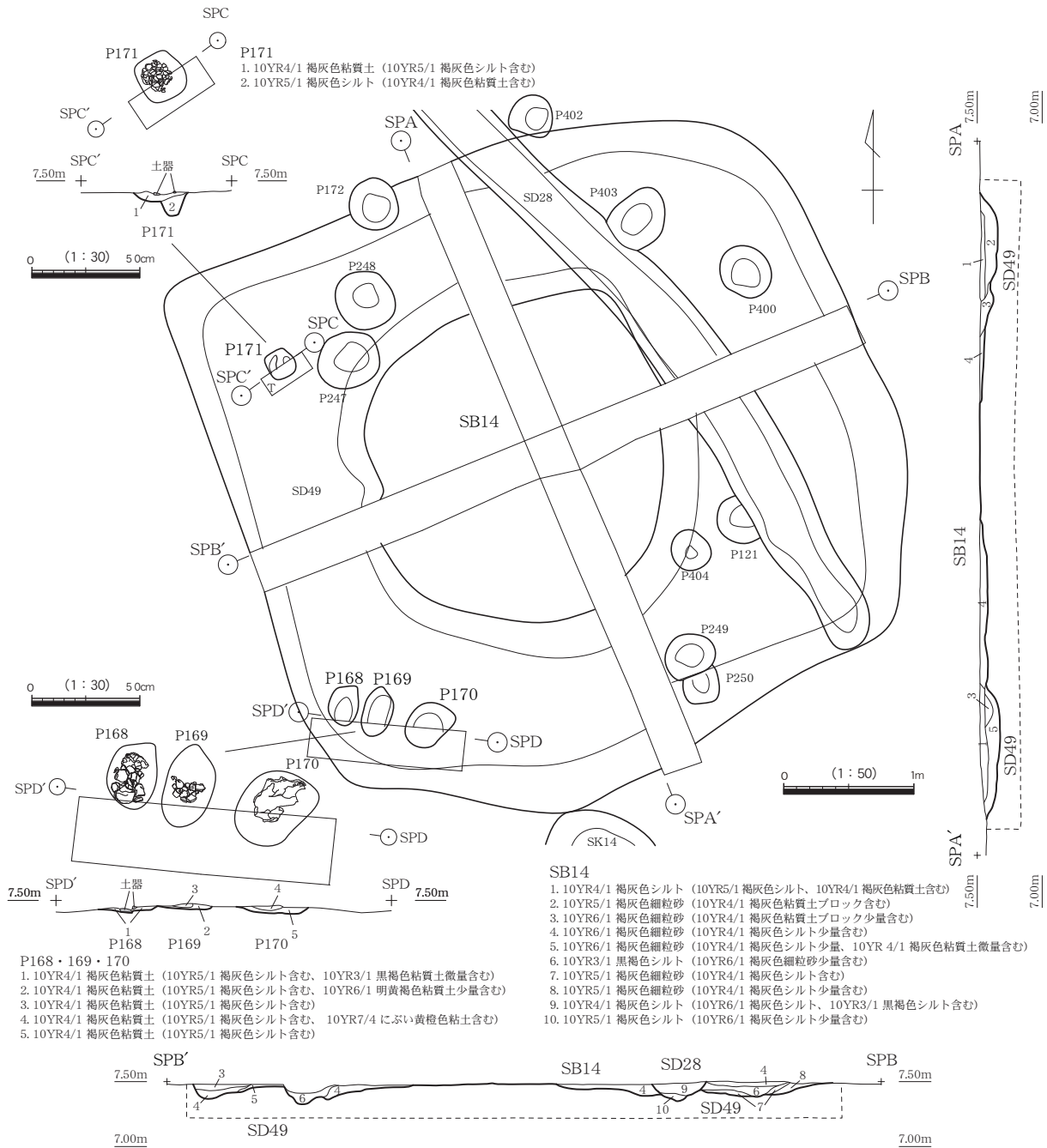
1. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土・10YR5/1 褐灰色シルト含む、炭化物少量含む)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR6/1 褐灰色シルト少量含む、炭化物少量含む)
3. 10YR6/1 褐灰色シルト (下部に10YR3/1 黒褐色粘質土含む)
4. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む)



1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルトブロック含む)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む、炭化物含む)
3. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む、炭化物少量含む)
4. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む、炭化物少量含む)
5. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色粘質土少量含む)
6. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む)
7. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む)
8. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色粘質土含む、炭化物微量含む)

1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (上部に10YR6/1 褐灰色シルト含む)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む、炭化物微量含む)
3. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む)
4. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む、下部に10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック含む)
5. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト含む)
6. 10YR3/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む)

第 75 図 SB08 平面図・土層断面図 (S=1/50)



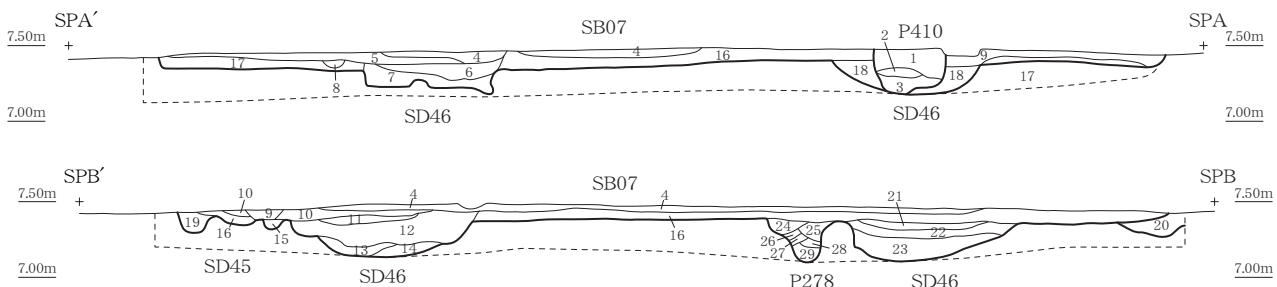
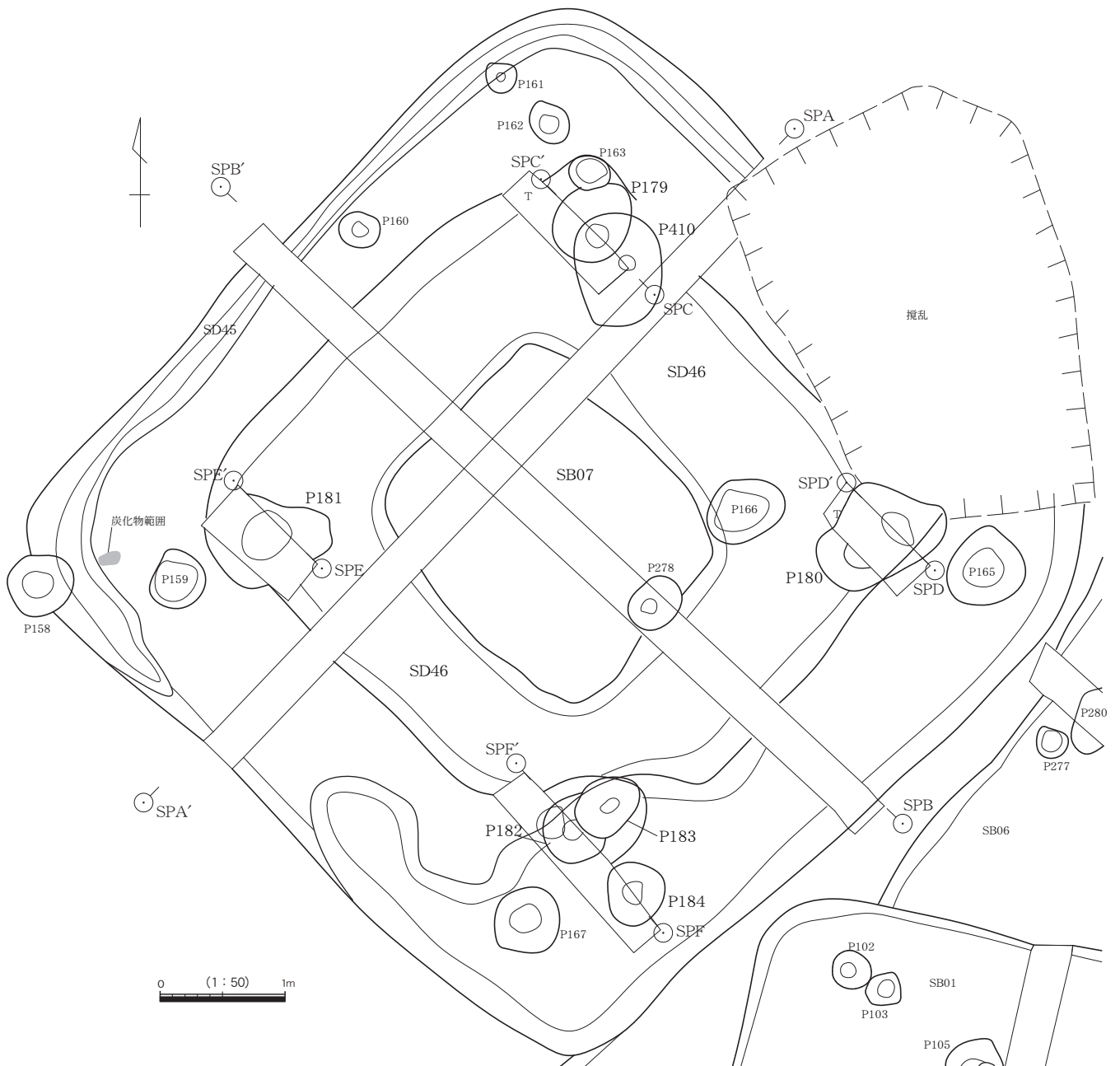
第 76 図 SB14 平面図・土層断面図 (S=1/50)

で土坑はいくつか存在するが、いずれも支柱穴に相当するとは言い難く、壁溝や火処遺構などは存在しない。埋土から山茶碗片が出土しており、竪穴建物よりはD期の竪穴状遺構と考えておきたい。

N SX13・SB27 (第 74 図)

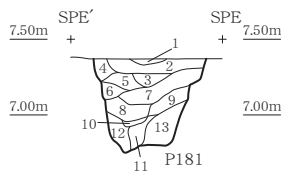
SB27 北東—南西方向で 486cm を測る隅丸方形の遺構で、深さは 7 cm を測る。褐灰色粘質土を埋土とし、P285 など柱穴と推定される土坑はいくつか認められるが、壁溝などの内部施設は検出されなかった。やや疑わしい部分もあるが、竪穴建物の可能性を考えたい。灰釉陶器碗が出土しており、C 期に属する。

SX (SB) 13 南東辺と南西辺の一部のみが確認された浅い遺構で、SB27 と SB08 に切られる形で検

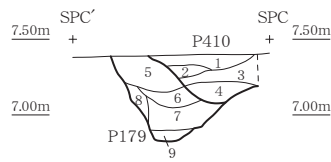


- | | |
|---|--|
| 1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色細粒砂を微量含む) | 16. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土を少量含む) |
| 2. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色細粒砂を少量含む) | 17. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土を微量含む) |
| 3. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルトを多量に含む) | 18. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土を中量含む) |
| 4. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトを微量含む) | 19. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR4/3 にふい黄褐色シルトを少量含む) |
| 5. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (10YR6/1 シルト多量に含む) | 20. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトを中量含む) |
| 6. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルトを微量含む) | 21. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトを多量に含む) |
| 7. 10YR 5/2 灰黄褐色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土を中量含む) | 22. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色シルトを少量含む) |
| 8. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土を少量含む) | 23. 10YR4/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土をブロック状に少量含む) |
| 9. 10YR4/3 にふい黄褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトを微量含む) | 24. 10YR4/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土を微量含む) |
| 10. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトを少量含む) | 25. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色シルトを微量含む) |
| 11. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR4/3 にふい黄褐色シルトを多量に含む) | 26. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土を中量含む) |
| 12. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR4/3 にふい黄褐色シルトを多量に含む) | 27. 10YR6/1 褐灰色シルト |
| 13. 10YR6/1 褐灰色細粒砂 (10YR3/1 黒褐色粘質土を少量含む) | 28. 10YR3/1 黒褐色粘質土 |
| 14. 10YR6/1 褐灰色細粒砂 | 29. 10YR6/1 褐灰色細粒砂 (10YR3/1 黒褐色粘質土を少量含む) |
| 15. 10YR4/3 にふい黄褐色粘質土 (10YR6/2 灰黄褐色シルトを少量含む) | |

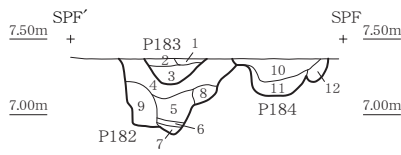
第 77 図 SB07 平面図・土層断面図 (S=1/50)



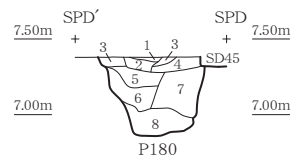
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む、10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む)
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土
4. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む)
5. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト多く含む)
6. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色粘質土含む、10YR 3/1 黒褐色粘質土少量含む)
7. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色シルト含む)
8. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック、10YR 4/1 褐灰色粘質土ブロック含む)
9. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルトブロック含む、炭化物微量含む)
10. 10YR6/1 褐灰色シルト
11. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量、10YR 3/1 黒褐色粘質土少量含む)
12. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト含む)
13. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粒少量含む)



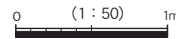
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む、炭化物微量含む)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む)
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量、10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む、炭化物微量含む)
4. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック含む)
5. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む)
6. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む)
7. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む、炭化物含む)
8. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト含む)
9. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む)



1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (炭化物少量含む)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む)
3. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト、10YR4/1 褐灰色粘質土含む)
4. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト・10YR3/1 黒褐色シルト含む、10YR 8/2 灰白色シルト筋状に含む)
5. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土含む。上部に10YR8/2 灰白色シルト含む)
6. 10YR5/1 褐灰色シルト
7. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む)
8. 10YR5/1 褐灰色シルト
9. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土含む、10YR 8/2 灰白色シルト少量含む)
10. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む、炭化物含む)
11. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む)
12. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土多く含む)



1. 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト (10YR8/2 灰白色シルト含む)
2. 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト (10YR8/2 灰白色シルト・10YR5/1 褐灰色シルト含む)
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む、炭化物微量含む)
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む)
5. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む、炭化物微量含む)
6. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む、下部に10YR3/1 黒褐色粘質土粒少量含む)
7. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色粘質土・10YR3/1 黒褐色粘質土まだらに含む)
8. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土・10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む)



第 78 図 SB07 土坑平面図・土層断面図 (S=1/50)

出された。壁溝などの内部施設はなく、性格不明遺構である。灰釉陶器碗が出土している。

○ SB08 (第 75 図)

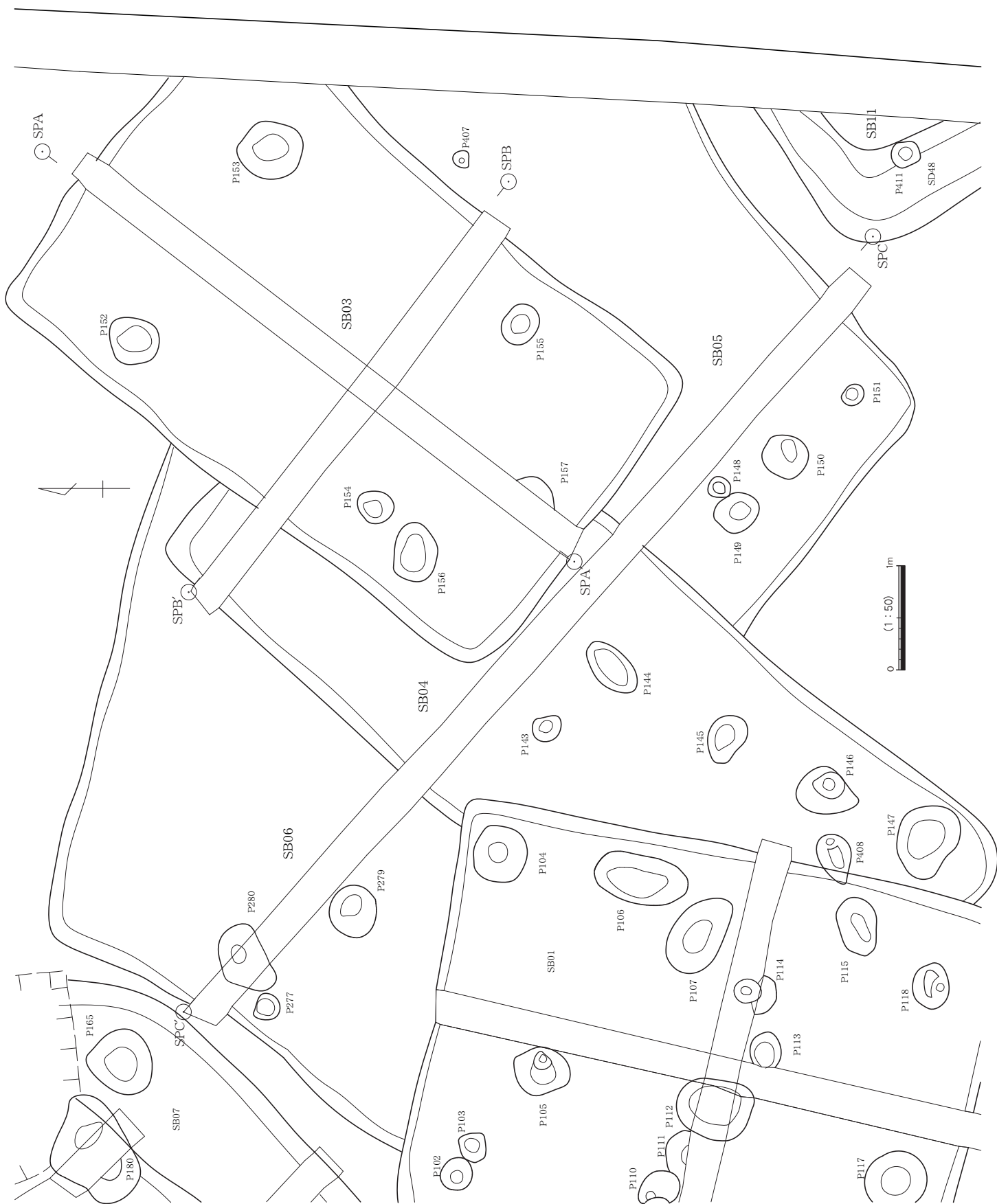
調査区中央部で検出された北東—南西方向で 514cm、北西—南東方向で 472cm を測る隅丸方形を呈する竪穴建物である。幅約 132cm、深さ約 22cm の幅広い周溝 SD44 を方形に巡らせ、それが灰黄褐色シルトの斑土で整地された後に主柱穴 P291 ~ P294 が掘削されていた。P292 と P293 には柱痕らしき堆積も確認された。床面中央部がわずかに凹み、褐灰色シルトで貼床されていた。東端部で炭化物の拡がりか認められたが、火処遺構などは不明である。時期は C 期か。

P SB14 (第 76 図)

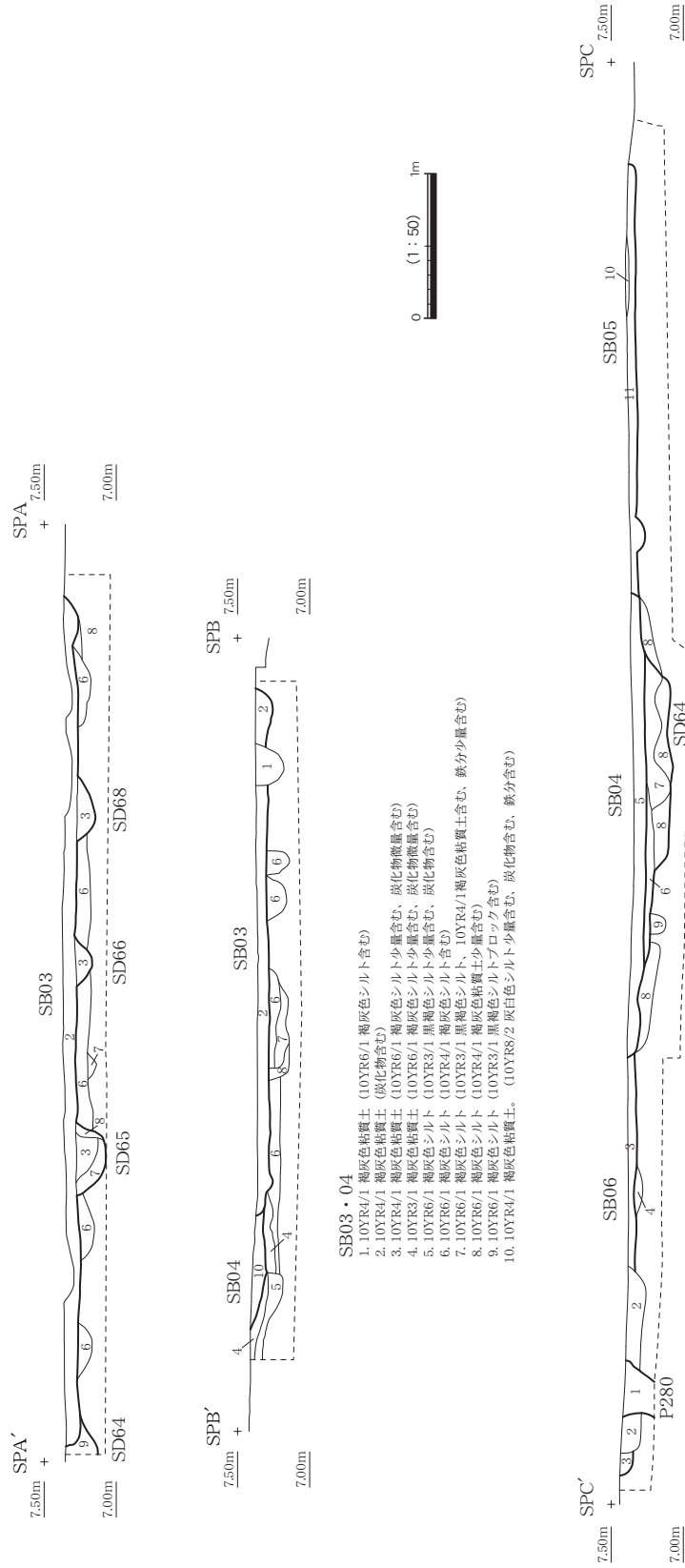
調査区中央部で検出された北東—南西方向で 500cm、北西—南東方向で 492cm を測るやや歪な隅丸方形を呈する竪穴建物である。幅約 150cm、深さ約 11cm の幅広い周溝 SD49 を方形に巡らせ、それが褐灰色細粒砂と粘質土の斑土で整地された後に柱穴などの遺構が掘削されていた。P121・P247・P403 が主柱穴に相当すると思われ、北西隅部に所在する土坑 P171 の上位に土器片が埋設されていた。南西部にも整地された床面から掘削された土坑 P168・P169・P170 があり、それぞれに褐灰色粘質土を貼り付ける形で土器が埋設されていた。火処遺構などは不明である。B 期に属するか。

Q SB07 (第 77・78 図)

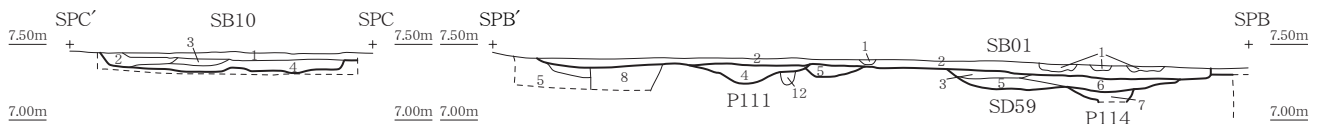
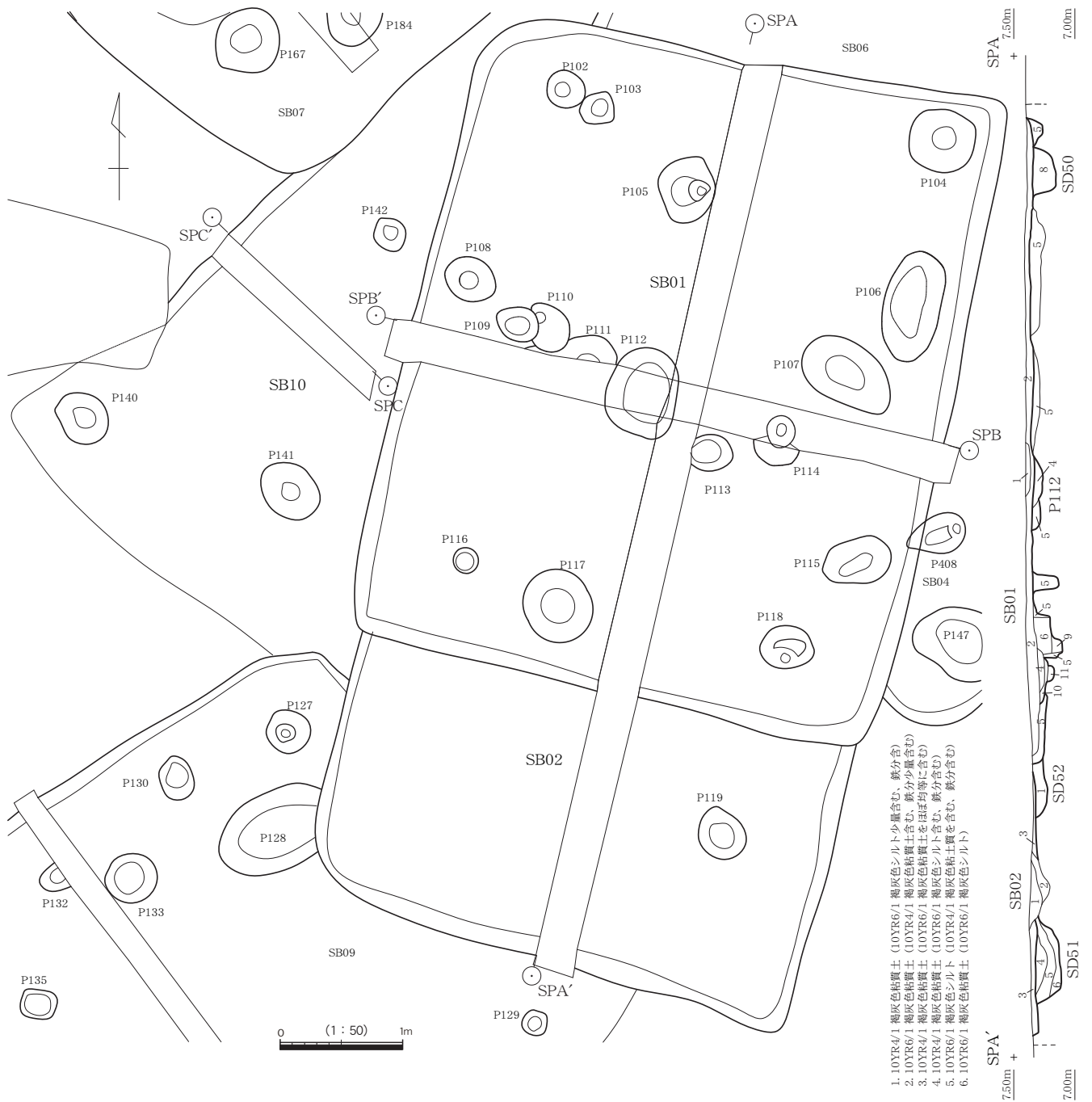
調査区南半部で検出された北東—南西方向で 660cm、北西—南東方向で 648cm、床面までの深さは 11cm を測る隅丸方形の竪穴建物である。北西半部で幅約 50cm、深さ約 14cm の狭い壁溝 SD45 が巡るが全周せず、南隅部で幅広い周溝状の落ち込みが存在する。その内側では幅約 90cm、深さ約 31cm の幅広い周溝状の溝 SD46 が全周している。SD45 は灰黄褐色シルトの斑土で、SD46 は褐灰



第 79 图 SB03・SB04・SB05・SB06・SB11 平面图 (S=1/50)



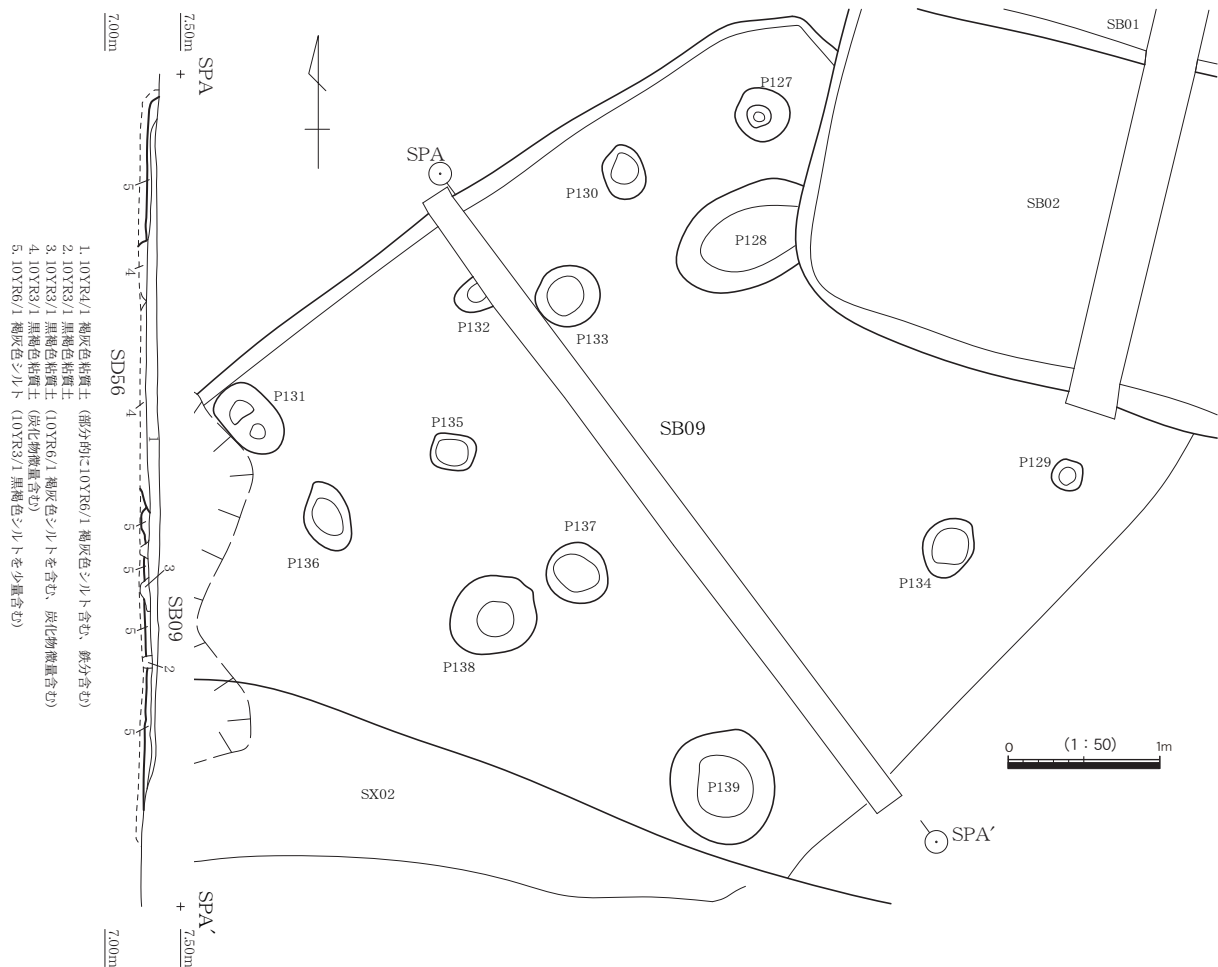
第 80 図 SB03・SB04・SB05・SB06・SB11 土層断面図 (S=1/50)



1. 10YR4/1 褐灰色粘質土
2. 10YR5/1 褐灰色シルト
3. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む)
4. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む)

1. 10YR6/3 黄褐色シルト (鉄分含む)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (鉄分含む)
3. 10YR4/1 褐灰色シルト (炭化物少量含む、鉄分含む)
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む、鉄分含む)
5. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土を含む、鉄分含む)
6. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む、鉄分含む)
7. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土を含む)
8. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色粘質土少量含む、鉄分含む)
9. 10YR3/1 黒褐色粘質土
10. 10YR6/1 褐灰色粘質土
11. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土含む)
12. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック少量含む)

第 81 図 SB01・SB02・SB10 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 82 図 SB09 平面図・土層断面図 (S=1/50)

色シルトの斑土で床面が整地されており、その上面から主柱穴 P179～P182 が掘削されていた。状況からみて、当初 SD46 を周溝とする北東—南西方向で 426cm、北西—南東方向で 466cm の規模を持つ竪穴建物があり、後に SD45 を壁溝とする竪穴建物に拡張したものと推定される。主柱穴 P179～P182 は拡張時のものとみられるが、その周辺にも柱穴が複数存在しており、拡張された後も数回は建て替えられたものと思われる。なお、P166 が当初の主柱穴に相当するかもしれない。火処遺構などは不明だが、床面に炭化材が少量散在しており、焼失建物の可能性がある。灰釉陶器皿などが出土しており、C 期に位置づけられる。

R SB03・SB04・SB05・SB06・SB11 (第 79・80 図)

SB03 北東—南西方向で 598cm、北西—南東方向で 360cm、深さが 9cm の規模を持つ隅丸長方形の竪穴建物である。褐灰色シルトの斑土で整地され貼床面とし、褐灰色粘質土で埋積されていた。P152～P155 が主柱穴となるが、壁溝や火処遺構などの施設は確認されなかった。SB04～SB06 を切る形で検出された。

SB04 SB01 と SB03 に切られる竪穴建物と思われる遺構で、北東—南西方向で 540cm 以上、北西—南東方向で 360cm、深さが 9cm を測る。平面プランがやや細長すぎるが、内部に柱穴らしき土坑が多数検出されている。壁溝や火処遺構などの施設は存在しない。

SB05 SB03 と SB04 に切られる遺構で、東部は調査区外に広がる。柱穴らしき土坑があるものの、壁溝や火処遺構などの施設は存在せず、形状も歪である。竪穴建物か否かはやや疑わしい。時期は B

ー 1 期か。

SB06 SB01 と SB04 に切られ、柱穴らしき土坑があるものの、壁溝や火処遺構などの施設は存在せず、形状も歪である。竪穴建物か否かは疑わしい。時期は B 期か。

SB11 大半が調査区外にあって全形は不明である。幅約 80cm、深さ約 20cm の幅広い周溝 SD48 が巡り、斑土で整地された後に支柱穴の可能性がある P411 が掘削されていた。壁溝や火処遺構などの施設は確認できないが、竪穴建物である可能性は高いといえる。

S SB01・SB02・SB10 (第 81 図)

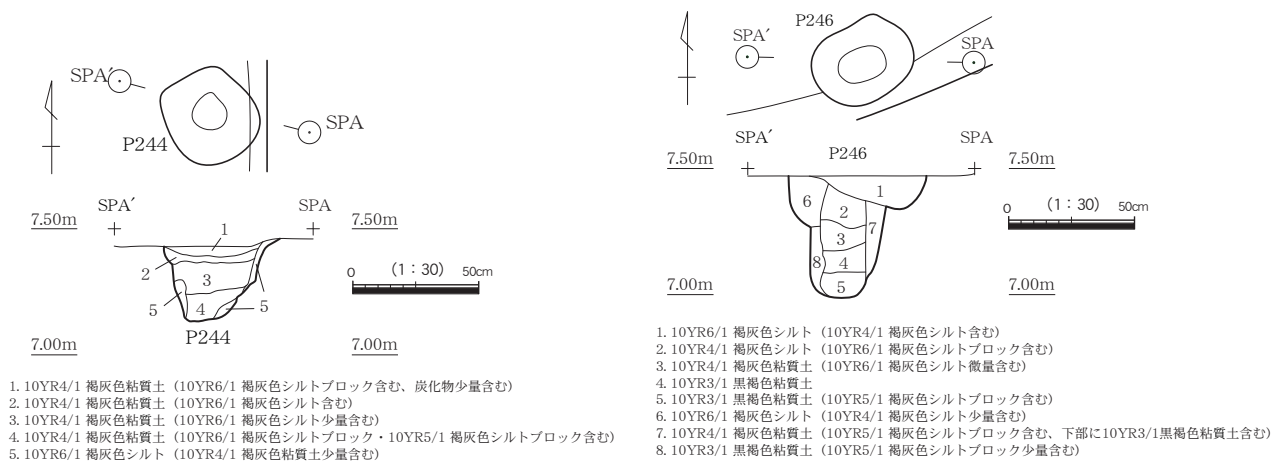
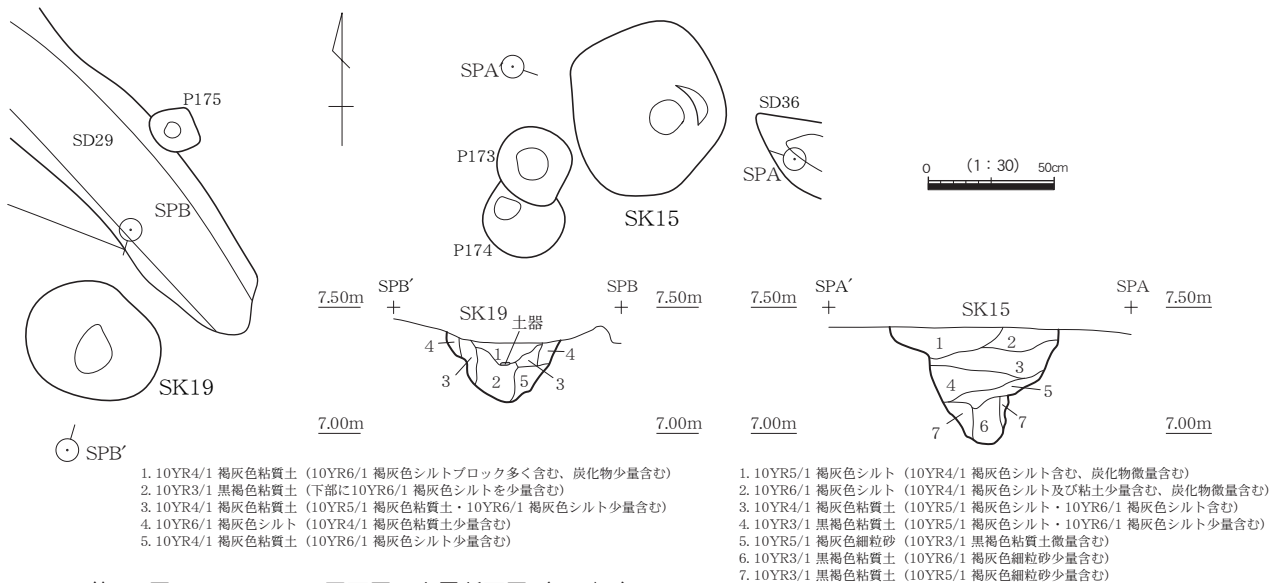
SB01 南北長が 526cm、東西長が 450cm の長方形プランの竪穴建物で、深さが 4 cm を測る。床面は滅失していると思われるが、内部施設には土坑類が多数存在し、P102・P104・P116・P118 が支柱穴となるだろう。壁溝や火処遺構などは不明である。覆土から灰釉陶器片が出土した。

SB02 方位を同じくする SB01 に大きく切られる竪穴建物と思われる遺構で、SB01 を拡張したものである可能性が高い。東西長が 420cm を測り、内部には支柱穴らしきピット P119 のみが存在する。

SB10 SB01 と SB02 に切られる遺構で、東部の形状は不明である。柱穴らしき土坑があるものの、壁溝や火処遺構などの施設は存在しない。竪穴建物とは断定はしがたい。台付甕が出土しており、B 期に属する。

T SB09 (第 82 図)

北西—南東方向で 482cm を測る隅丸長方形の竪穴建物である。内部施設には土坑類が多数存在し、P127 や P129 などが支柱穴となるだろう。壁溝や火処遺構などは確認できない。暗文土師器片などが出土した。



(2) 土坑

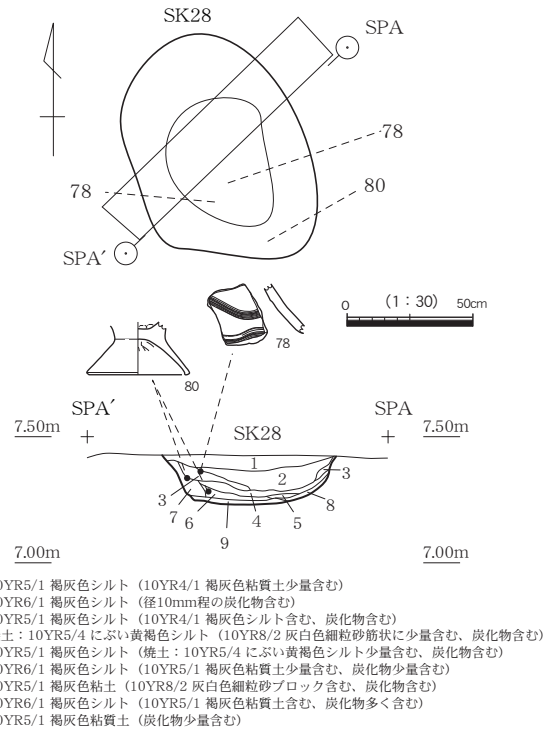
A SK28 (第 86 図)

竪穴建物 SB28 の北西端に所在する土坑で、検出状況からみて SB28 と SX31 より新しい。土坑床面付近で焼土層が薄く堆積しており、地床炉と推定される。埋土自体も炭化物を多く含む。南西部の焼土直上で弥生時代中期(古井式期)の土器片と白色砂礫が出土した。すでに床面が削られて滅失した建物に伴う炉跡かもしれない。

B SK15・SK19 (第 83 図)

SK15 調査区中央に位置し、平面形は 70cm × 65cm の楕円形土坑で、深さは 46cm を測る。第 2 面で検出され、黒褐色粘質土と褐灰色シルトが大きくブロック状に堆積していた。

SK19 SK15 の西隣に所在する平面形は 55cm × 44cm の楕円形土坑で、深さは 23cm を測る。第 2 面で検出された。掘鉢状の掘形で、下半は黒褐色粘質土で充填され、上位は褐灰色シルトが堆積していた。褐灰色シルト直下で土器片が出土した。



1. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む)
2. 10YR6/1 褐灰色シルト (径10mm程の炭化物含む)
3. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色シルト含む、炭化物含む)
4. 焼土: 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂筋状に少量含む、炭化物含む)
5. 10YR5/1 褐灰色シルト (焼土: 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト少量含む、炭化物含む)
6. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色粘質土少量含む、炭化物少量含む)
7. 10YR5/1 褐灰色粘土 (10YR8/2 灰白色細粒砂ブロック含む、炭化物含む)
8. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色粘質土含む、炭化物多く含む)
9. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (炭化物少量含む)

第 86 図 SK28 平面図・土層断面図 (S=1/50)

C P244 (第 84 図)

SX12 の東辺中央に所在する土坑で、平面形は 37cm × 34cm の楕円形土坑で、深さは 29cm を測る。上部には褐灰色粘質土が堆積していた。

D P246 (第 85 図)

竪穴建物 SB23 の南辺中央に所在する土坑で、平面形は 40cm × 30cm の楕円形土坑で、深さは 48cm を測る。下半は黒褐色粘質土が厚く堆積していた。

4 第 3 面

(1) 土坑

A SK66

第 3 面で SB07 の床面下から検出された土坑で、平面形は 170cm × 80cm の楕円形を呈する。深さは 6cm と浅いが古墳時代前期の土師器が出土した。

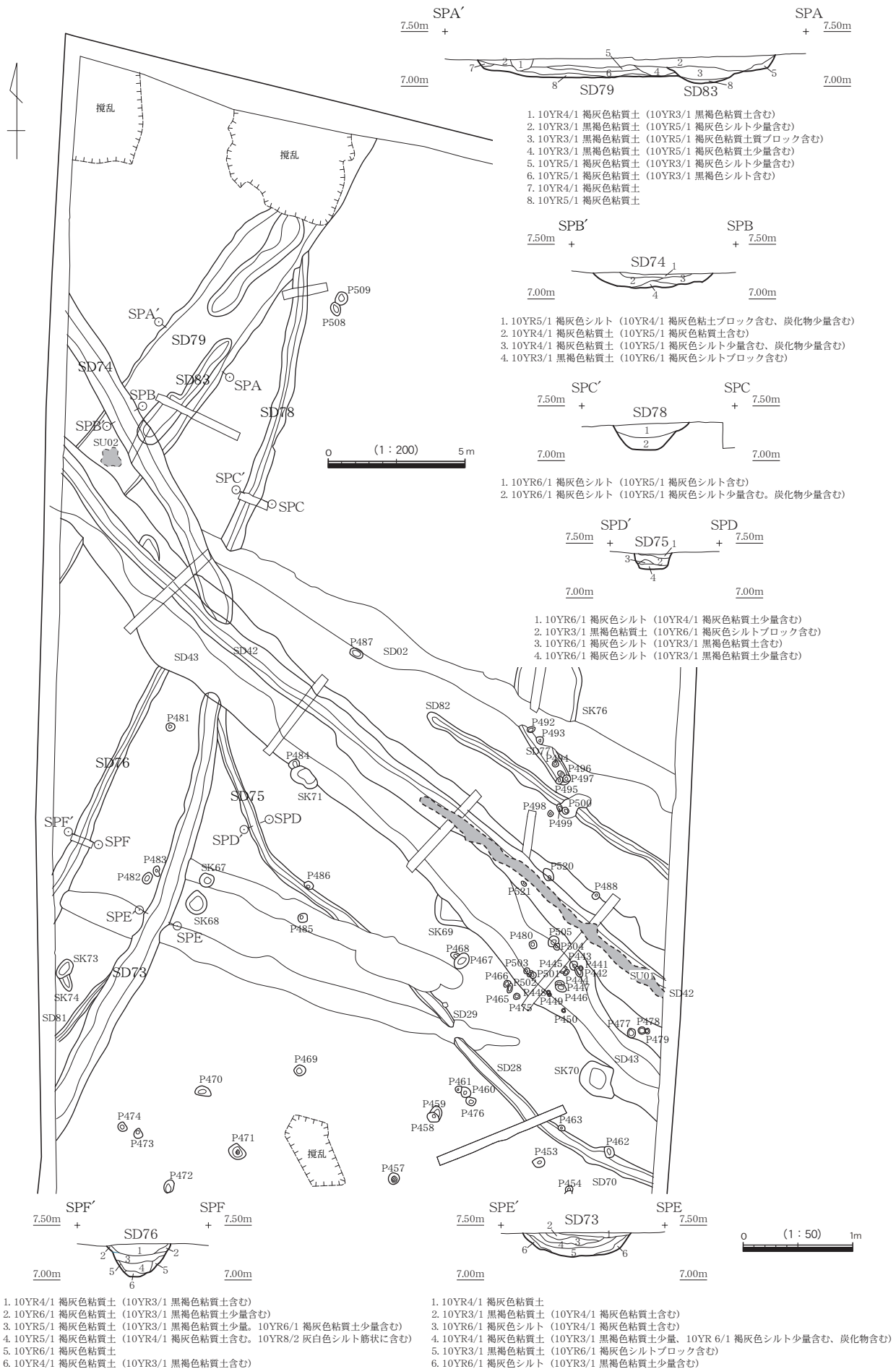
(2) 溝

A SD73・SD74・SD75・SD76・SD77・SD78・SD79 (第 87 図)

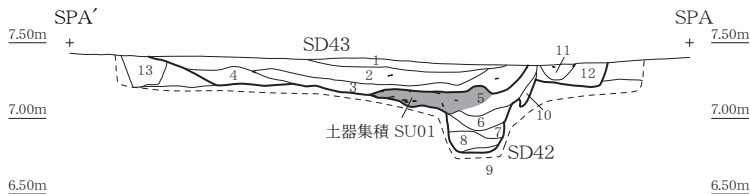
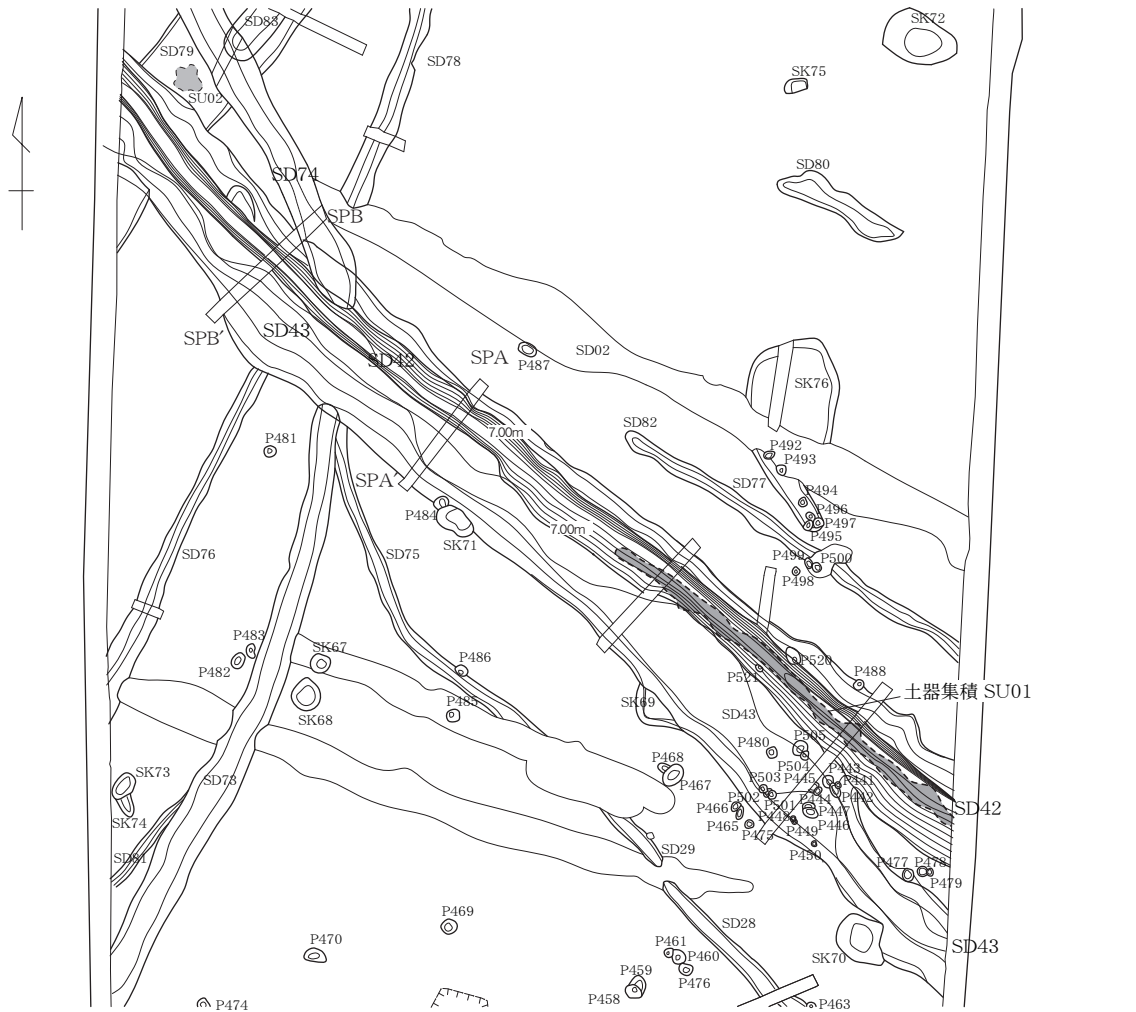
SD73 北北東—南南西方向にわずかに彎曲して走る溝で、幅は 124cm、深さは 22cm を測る。北端部は SD43 に切られているが、おそらく SD74 と連続したものと思われる。SD74 は北北西—南南東方向にわずかに彎曲して走る溝で、幅は 122cm、深さは 16cm を測る。SD73 と SD74 を一連のものともみると弧状に大きく彎曲し、その半径は約 25m を測る。第 3 面で検出され、出土した須恵器杯蓋から B—2 期に属する。古墳の外周部に伴うものかもしれない。

SD75 SD73 と同じ地点から南東方向に彎曲した後に蛇行する溝で、幅は 50cm、深さは 15cm を測る。調査区中央に位置し、平面形は 70cm × 65cm の楕円形土坑で、深さは 46cm を測る。第 2 面で検出され、黒褐色粘質土と褐灰色シルトが大きくブロック状に堆積していた。

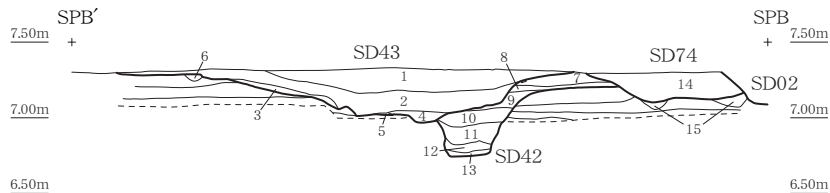
SD76 北北東—南南西方向に走る溝で、幅は 72cm、深さは 31cm を測る。一方、SD78 は北北東



第 87 図 SD73・SD74・SD75・SD76・SD77・SD78・SD79 平面図・土層断面図 (S=1/50)

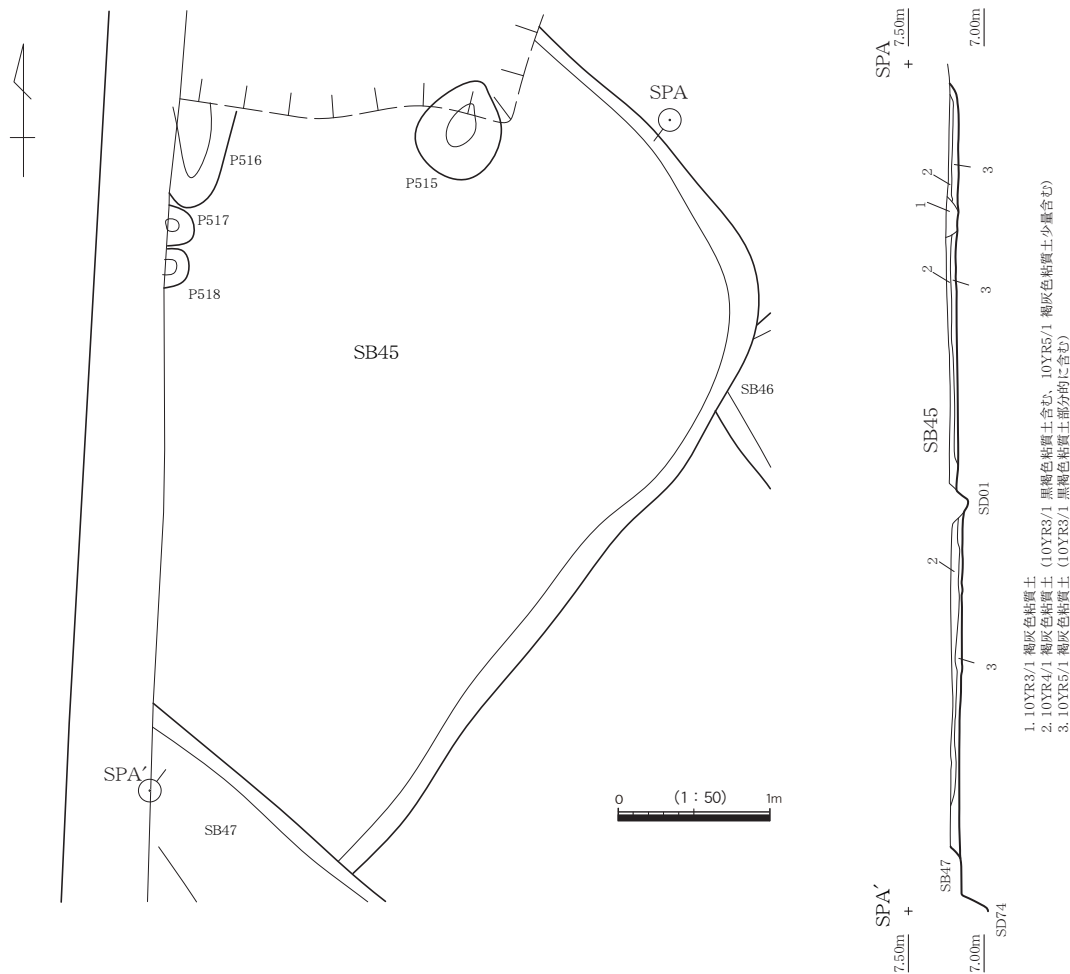


- | | |
|--|---|
| 1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (炭化物含む) | 8. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粒少量含む) |
| 2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒含む) | 9. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂含む) |
| 3. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック、10YR6/1 褐灰色シルト粒含む) | 10. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粒少量含む) |
| 4. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) | 11. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック含む) |
| 5. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む、土器を多く含む) | 12. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒含む) |
| 6. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) | 13. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) |
| 7. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土筋状に含む、炭化物含む) | 14. 10YR6/1 褐灰色シルト |



- | | |
|---|--|
| 1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 | 9. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む、10YR3/1 黒褐色粘質土粒少量含む) |
| 2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色粘質土粒含む、炭化物少量含む) | 10. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む、炭化物含む) |
| 3. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) | 11. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック多く含む) |
| 4. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色粘質土含む) | 12. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック含む) |
| 5. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む) | 13. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む) |
| 6. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む) | 14. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/1 黒褐色粘質土粒多く含む、炭化物含む) |
| 7. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土粒含む、炭化物含む) | 15. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 シルトブロック含む) |
| 8. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック) | |

第 88 図 SD42・SD43・SD82 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 89 図 SB45 平面図・土層断面図 (S=1/50)

—南南西方向にわずかに彎曲して走る溝で、幅は 70cm、深さは 24cm を測る。SD76 と SD78 は SD43 を挟んで一連のものともみられる。

SD79 SD78 を切る形で北東—南西方向に走る溝で、幅は 280cm、深さは 17cm を測る。SD79 は、SD43 と交差する付近で土器集積 SU02 があり、B—1 期に属する遺構と思われる。

B SD42・SD43・SD82 (第 88 図)

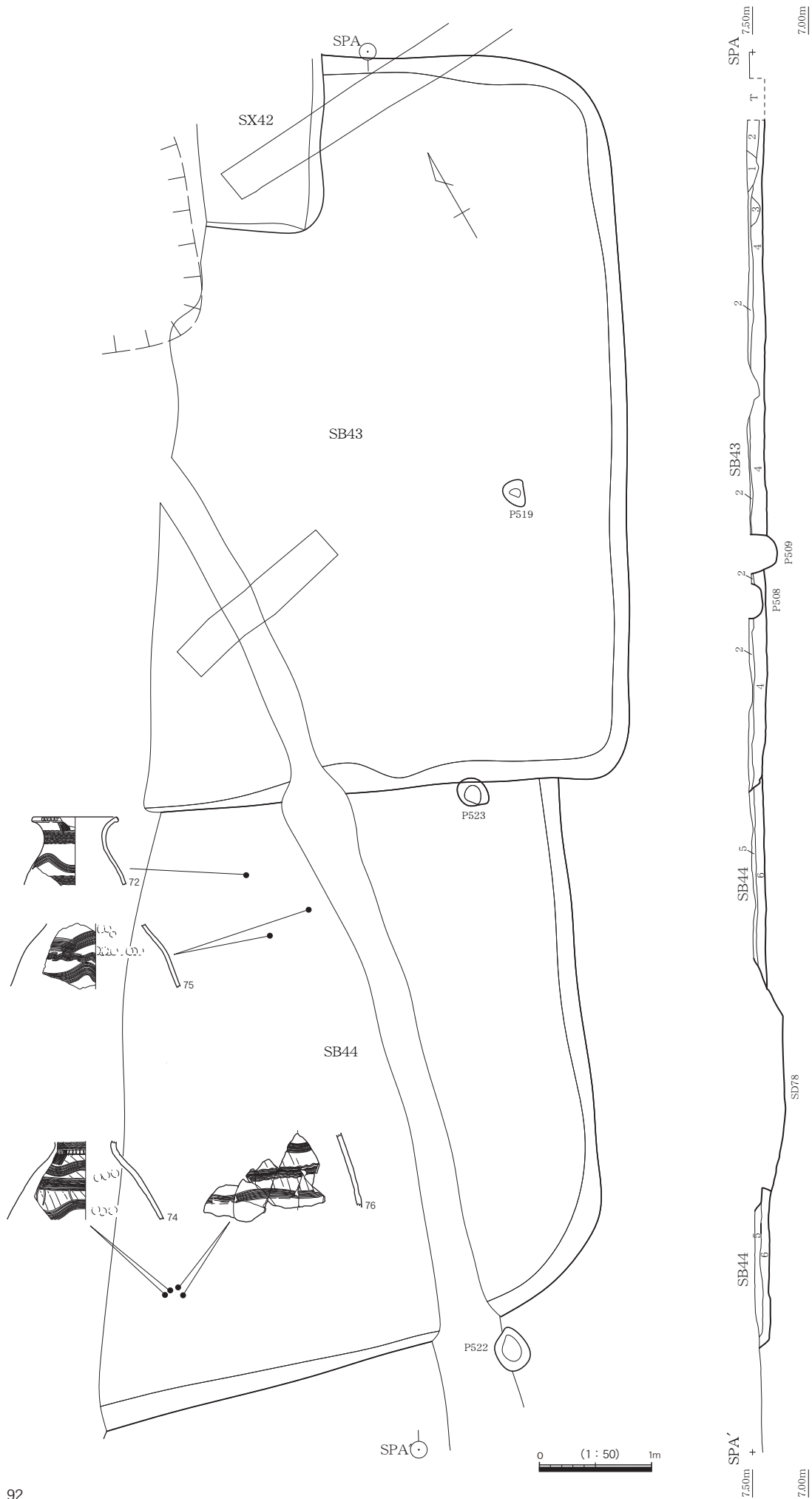
SD42 調査区北半に位置する溝で、北西—南東方向に走る。幅は 366cm、深さは 57cm を測り、下半は横断面が箱形となっている。黒褐色粘質土と褐灰色シルトが堆積し、箱形部分が埋積した直上部分で多量の土師器が出土した。この土器集積 SU01 は SD42 に沿う形で带状に調査区東半部に展開する。

SD43 SU01 および SD42 の直上で、SD42 と重複する形で検出された。北西—南東方向に走り、幅は 400cm、深さは 36cm を測り、横断面が皿状となっている。SD73 など切る形で検出されたことなどから、遺構の時期は B—2 期か C 期と推測される。

SD82 SD42 と SD43 に平行し走る溝で、幅は 56cm、深さは 6 cm を測る。

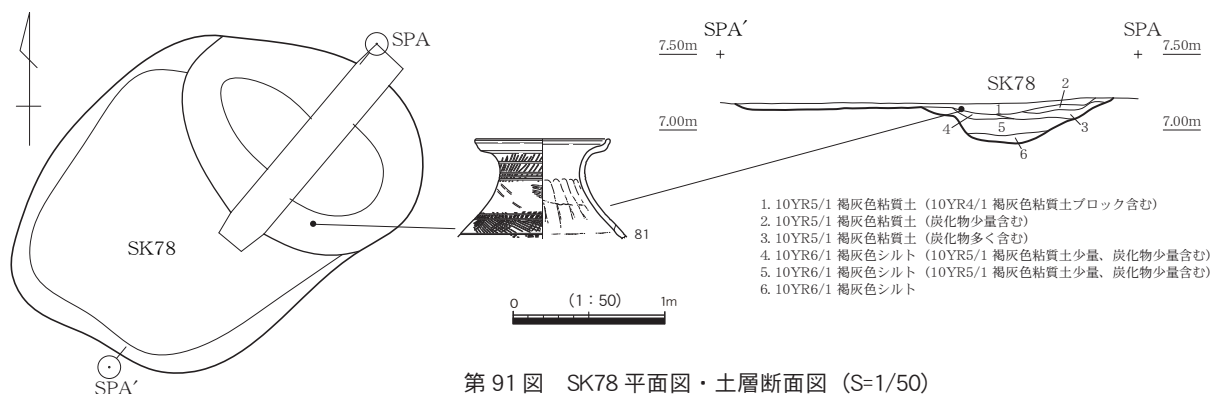
C SD51～SD68

北西西-東南東方向とそれに直交する方向に走る溝群で、幅は 30cm 前後、深さは 10cm 前後を測る。第 3 面で検出され、地山がやや暗い色調の粘質土の堆積となる範囲に分布している。出土遺物はほとんどみられず、時期は不明。畑の畝溝の可能性が指摘される。



1. 10YR5/1 褐色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む、炭化物微量含む)
2. 10YR5/1 褐色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む)
3. 10YR5/1 褐色粘質土 (10YR3/1 黒褐色シルト 含む、炭化物微量含む)
4. 10YR5/1 褐色粘質土 (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む)
5. 10YR4/1 褐色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土含む)
6. 10YR5/1 褐色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む)

第 90 図 SX42・SB43・SB44 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 91 図 SK78 平面図・土層断面図 (S=1/50)

5 第 4 面

(1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構

竪穴建物状の遺構は検出段階では全部で 7 基を数えるが、最終的に竪穴建物と認定ができそうな遺構は SB43・SB44・SB45 の 3 基である。残り SB42・SB46・SB47・SB48 の 4 基は竪穴状遺構・性格不明遺構として SX と表記した

A SB45 (第 89 図)

第 4 面調査にて SB47 に切られ、SB46 を切る形で検出された隅丸長方形の竪穴建物である。壁溝や火処遺構などの内部施設はほとんど確認されず、北東辺中央の位置と思われる部分に主柱穴となる P515 が存在する。時期は A 期に属すると推測される。

B SX42・SB43・SB44 (第 90 図)

SX (SB) 42 第 4 面調査にて検出された浅い遺構で、SD79 に大きく切られ全形は不明である。壁溝や火処遺構および柱穴などの内部施設は確認されず、性格不明遺構と言わざるを得ない。SB43 を切ることから、A 期でも比較的新しいものと推定される。

SB43 SX42 と同様に SD79 に大きく切られ全形は不明である。P519 以外に壁溝や火処遺構および柱穴などの内部施設は確認されなかったが、黒褐色シルトの斑土で整地された貼床が認められ、竪穴建物と推定したい。SB42 に切られ、SB44 を切っている。

SB44 SD79 と SB43 に大きく切られ全形は不明である。P523 以外に壁溝や火処遺構および柱穴などの内部施設は確認されなかった。竪穴建物と推定したいが、疑わしい。弥生時代中期の遺物が出土しており、A-2 期の遺構と考えられる。

(2) 土坑

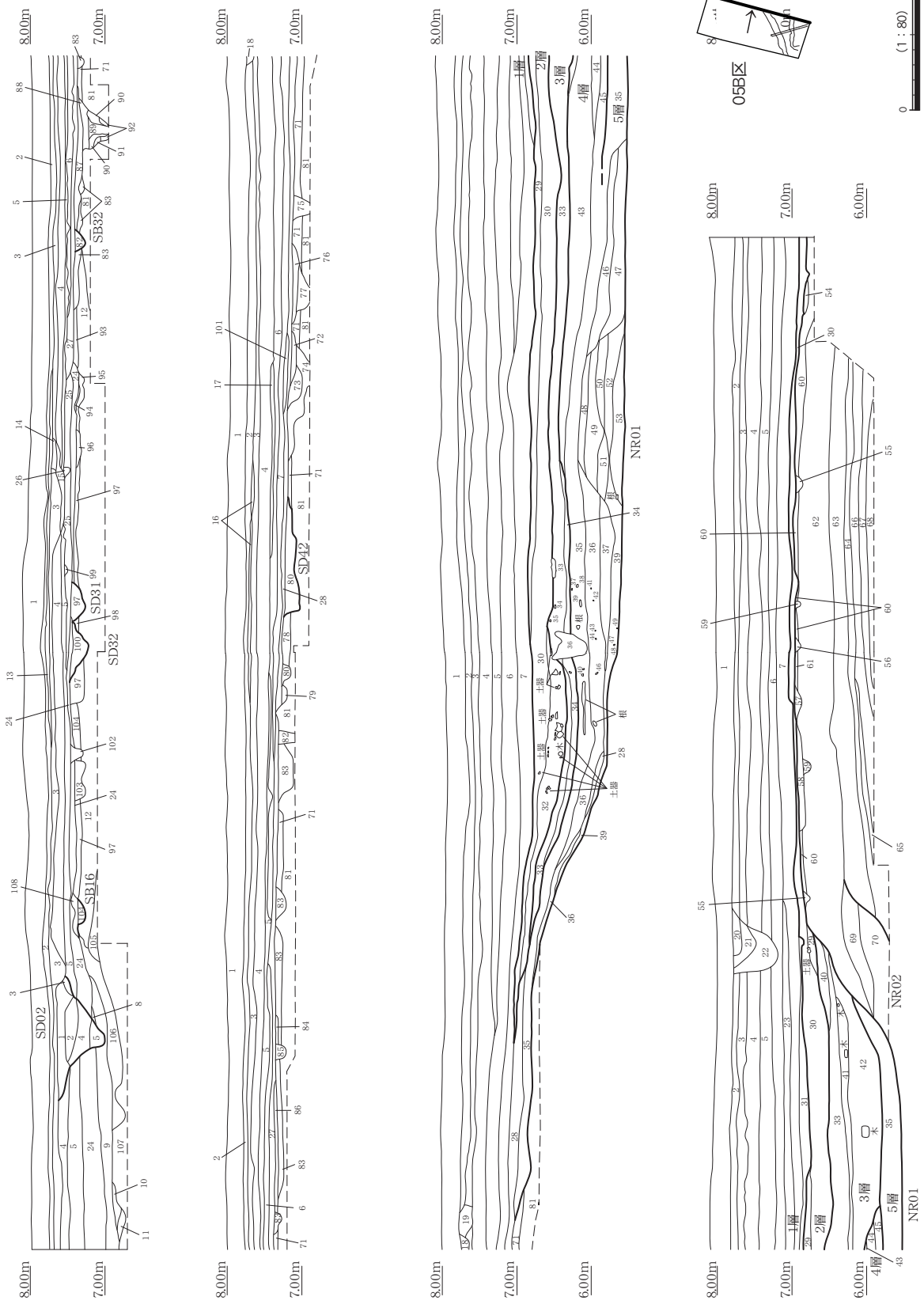
A SK78 (第 91 図)

平面形は 285cm × 186cm の楕円形土坑で、深さは 27cm を測る。褐灰色粘質土と褐灰色シルトが堆積する中、南部に弥生土器壺 (081) が出土した。

第 5 節 05B 区

1 調査の経過と概要

05 B 区は 05 A 区と 06 C 区に挟まれた位置にあり、今回の調査区ではわずかに南寄りに位置する。05B 区の基本層序は、上位から黄灰色土 (第 1 層)、灰黄色土 (第 2 層)、暗灰黄色土 (第 3 層)、灰黄褐色シルト (第 4 層)、褐灰色粘質土 (第 5 層)、褐灰色シルト (第 6 層) の順に堆積しており、第 1 層は現耕作土、第 2 層は旧耕作土、第 3 層は 18 世紀～19 世紀の遺物を含有し、第 4 層は 13

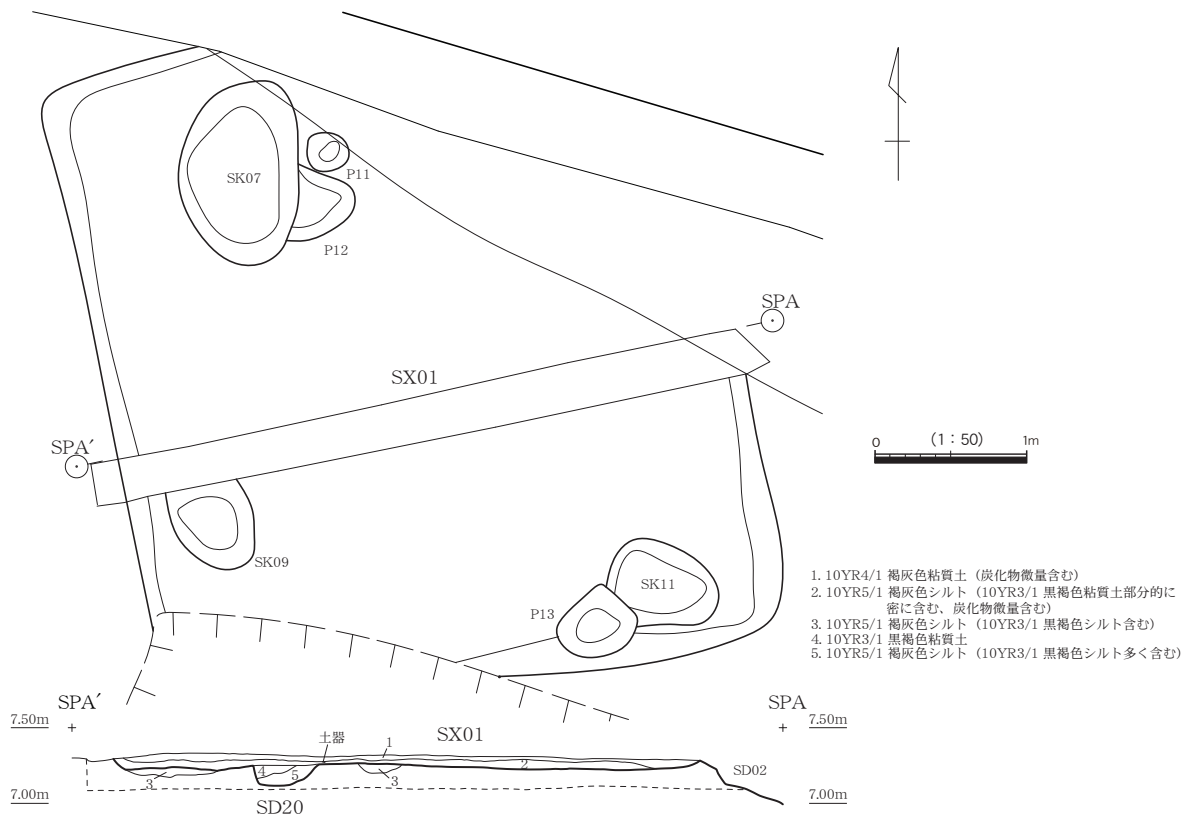


第92图 05B区東壁土層断面图 (S-1/80)

05B区東壁

1. 2.5Y5/1 黄灰色土 (小礫含む)
2. 2.5Y6/2 灰黄色土 (小礫含む)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色土 (10YR 6/1 褐灰色粗粒砂を層状に含む)
4. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (小礫含む)
5. 10YR6/1 褐灰色粘質土
6. 10YR5/1 褐灰色粘質土
7. 10YR4/1 褐灰色粘質土
8. 10YR5/1 褐灰色粘質土
9. 10YR6/1 褐灰色粘質土
10. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土を含む)
11. 10YR8/2 灰白色粗粒砂 (10YR3/1 褐灰色粘質土を含む)
12. 10YR8/1 灰白色粗粒砂
13. 2.5YR6/2 灰黄色土
14. 2.5Y5/2 暗灰黄色土 (10YR6/1 褐灰色粗粒砂を層状に含む、炭化物含む)
15. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (小礫含む、炭化物少量含む)
16. 2.5Y6/4 にぶい黄褐色粗粒砂
17. 10YR6/1 褐灰色粘質土
18. 2.5Y6/1 黄灰色土 (小礫含む)
19. 2.5Y6/4 にぶい黄褐色粗粒砂
20. 10YR7/4 にぶい黄褐色粗粒砂
21. 2.5Y5/2 暗灰黄色土
22. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (10YR6/1 褐灰色粘質土、小礫含む)
23. 5YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒、炭化物含む)
24. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土粒、炭化物含む)
25. 10YR5/1 褐灰色粘質土
26. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粘含む、10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む)
27. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (炭化物含む)
28. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト粘含む)
29. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR6/2 灰黄褐色粘質土ブロック・10YR6/1 褐灰色シルトブロック多く含む)
30. 10YR2/1 黒色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土を含む)
31. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土を含む)
32. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (木材・植物繊維多量に含む、炭化物層状に含む)
33. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (木材・植物繊維多量に含む、炭化物層状に含む)
34. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック・10YR 7/1 灰白色粗粒砂中・粗ブロック含む、木材含む)
35. 7.5YR4/3 褐色粘質土 (7.5YR4/3 褐色粘質土ブロック含む、木含む)
36. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色粘質土ブロック・10YR6/1 褐灰色粗粒砂が層状、10YR7/1 灰白色粗粒砂ブロック状に少量含む)
37. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR7/1 灰白色細・粗粒砂、粗粒砂、10YR4/1 褐灰色シルト層状に含む)
38. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR8/2 灰白色粗粒砂含む、木材含む)
39. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土含む、木材含む)
40. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR8/2 灰白色粗粒砂含む、木材含む)
41. 5Y6/1 灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む、木材含む)
42. 7.5YR4/3 褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色粘質土ブロック含む、木材含む)
43. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (植物繊維多く含む、木材含む)
44. 7.5YR4/3 褐色粘質土 (10YR7/1 灰白色粗粒砂含む、木材・炭化物含む)
45. 7.5YR4/3 褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色粘質土ブロック含む・10YR7/1 灰白色粗粒砂ブロック少量含む)
46. 7.5YR4/3 褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色粘質土ブロック含む、木材含む)
47. 10YR7/1 灰白色中・粗粒砂 (小礫混じる、木材多く含む)
48. 10YR7/1 灰白色中・粗粒砂 (10YR4/1 褐灰色シルト少量・10YR6/1 褐灰色粗粒砂ブロック少量含む)
49. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR7/1 灰白色細・中粒砂多く含む)
50. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR7/1 灰白色細・中粒砂含む)
51. 10YR5/1 褐灰色細・中粒砂 (10YR7/1 灰白色細・中粒砂含む)
52. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色粗粒砂 10YR7/1 灰白色粗粒砂層状に含む、木材含む)
53. 7.5YR4/3 褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色粗粒砂 10YR7/1 灰白色粗粒砂層状に含む、木材含む)
54. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む)
55. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック・10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック含む、炭化物含む)
56. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粘含む、炭化物含む)
57. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土少量・10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む)
58. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む・10YR6/1 褐灰色シルトブロック少量含む、炭化物含む)
59. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む、炭化物含む)
60. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR8/2 灰白色シルト含む、炭化物少量含む)
61. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む、木材少量含む)
62. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR8/2 灰白色粗粒砂層状に含む)
63. 5B5/1 黄灰色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック含む、5B7/1 明青灰色粗粒砂層状に含む)
64. 5PB4/1 暗青灰色シルト (5B7/1 明青灰色粗粒砂、少量含む)
65. N3/0 暗灰色シルト (5B7/1 明青灰色粗粒砂、少量含む)
66. N6/0 灰色粗粒砂 (5PB4/1 暗青灰色シルト、10YR8/2 灰白色中粒砂含む)
67. N3/0 暗灰色シルト (下部に5B4/1 暗青灰色シルト層状に含む)
68. N6/0 灰色粗粒砂 (5PB4/1 暗青灰色シルト、10YR8/2 灰白色中粒砂含む)
69. 5B5/1 黄灰色シルト (5B7/1 明青灰色粗粒砂層状に含む)
70. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (5B7/1 明青灰色シルト含む木片含む)
71. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘含む)
72. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粘含む)
73. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粘含む)
74. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘含む)
75. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト粘含む)
76. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト粘含む)
77. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト粘含む)
78. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色シルト粘含む)
79. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む、炭化物含む)
80. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘含む)
81. 10YR6/1 褐灰色シルト (所々10YR7/1 灰白色粗粒砂含む)
82. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘含む)
83. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト・粘質土粘含む)
84. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粘、炭化物含む)
85. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粘、炭化物含む)
86. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粘含む)
87. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粘・10YR8/2 灰白色粗粒砂含む)
88. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック・10YR8/2 灰白色粗粒砂含む)
89. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む)
90. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土粘含む)
91. 10YR8/2 灰白色粗粒砂 (10YR3/1 黒褐色粘質土粘含む)
92. 10YR8/2 灰白色粗粒砂 (10YR3/1 黒褐色粘質土粘含む)
93. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR8/1 灰白色粗粒砂含む)
94. 10YR4/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト粘、炭化物を層状に含む)
95. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘、10YR8/1 灰白色粗粒砂含む)
96. 10YR7/1 灰白色粗粒砂 (上層に10YR3/1 黒褐色粘質土粘、10YR6/1 褐灰色シルト含む、最上層炭化物層状)
97. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘・10YR7/2 にぶい黄褐色粗粒砂少量含む)
98. 10YR8/2 灰白色粗粒砂 (10YR3/1 黒褐色粘質土粘少量含む)
99. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (炭化物少量含む)
100. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘・10YR6/1 褐灰色シルトブロック・10YR8/2 灰白色粗粒砂含む)
101. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘少量含む)
102. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘含む)
103. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト含む、炭化物少量含む)
104. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘少量含む)
105. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘少量含む)
106. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む)
107. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粘少量含む)
108. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR8/2 灰白色中粒砂層状に含む、10YR5/1 褐灰色シルトブロック含む)
- SD02
 1. 10YR6/1 褐灰色粗粒砂 (2.5Y4/4 オリーブ褐色粗粒砂層状に含む)
 2. 10YR5/1 褐灰色シルト
 3. 10YR5/1 褐灰色シルト
 4. 10YR8/2 灰白色粗粒砂・2.5Y4/4 オリーブ褐色粗粒砂・10YR6/1 褐灰色粗粒砂・10YR8/2 灰白色粗粒砂含む)
 5. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト、小礫含む)

第 93 図 05B 区東壁土層断面土色



第94図 SX01平面図・土層断面図 (S=1/50)

世紀前後の山茶碗片などをわずかに含んでいた。重機による表土掘削は、第1層から第4層に相当する層厚約50cmの堆積を除去し、褐灰色粘質土層の上面を第1面とした。第1面ですでにC期からE期の遺構群が検出されていたが、先行して調査を実施した05A区と面を対応させるため、第1面ではD期とE期の遺構群を中心に調査を実施した。第2面は特に遺構面を下げることなく第1面から引き続き遺構検出を実施した。第2面ではおおむねC期の竪穴建物を中心とする遺構群が確認され、南部でNR01が検出された。これらの遺構群を掘削してしまうと、おおむね褐灰色シルト層の上面に達しており、一部高い部分を掘り下げる程度でさらに遺構検出を行った。これが第3面であり、弥生時代から古墳時代(A期とB期)の遺構群が検出された。

2 第1面

(1) 溝

A SD01

SD01は調査区南部に所在する少し角度が振れる東西方向の溝で、第1面で検出された。幅は75cm、深さは16cmを測り、昭和時代(戦前か)の水路と思われる。

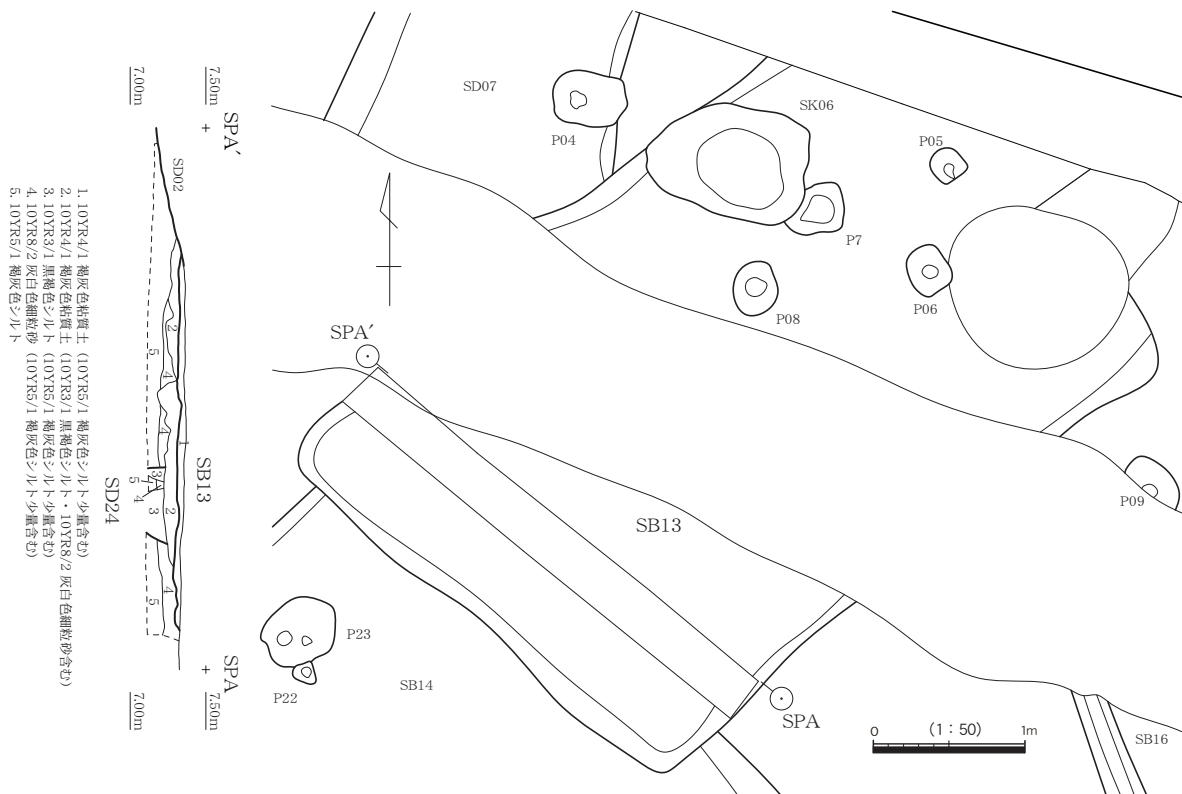
B SD02

SD02は調査区北端部で検出された溝で、西北西-東南東方向に走り、幅は175cm、深さは64cmを測る。途中に東部で土坑状の深まりが存在する。大半は褐灰色細粒砂、灰白色細粒砂と褐灰色粘質土が堆積しており、出土遺物からみて、明治時代と考えられる。

3 第2面

(1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構

竪穴建物と思われる遺構は検出段階では全部で34基を数えるが、最終的に竪穴建物と認定がで



第 95 図 SB13 平面図・土層断面図 (S=1/50)

きそうな遺構は SB02・SB03・SB04・SB05・SB06・SB07・SB08・SB09・SB12・SB13・SB14・SB16・SB17・SB18・SB19・SB20・SB21・SB22・SB23・SB25・SB27・SB28・SB29・SB31・SB32・SB34・SB35 の 27 基である。残りの SB01・SB15・SB24・SB26・SB30・SB33・SB36 の 7 基はここでは竪穴状遺構・性格不明遺構として SX と表記した。なお、SB10・SB11 は欠番である。

A SX01 (第 94 図)・SB04

SX (SB) 01 調査区北端西半に位置し、東西長 420cm × 南北長 390cm を測る隅丸方形の浅い遺構である。北東部は SD02 に切られ不明となるが、深さ 10cm の皿状の断面を呈する。土坑はいくつか認められるが、壁溝などの付属施設が検出されなかったため、性格不明遺構である。

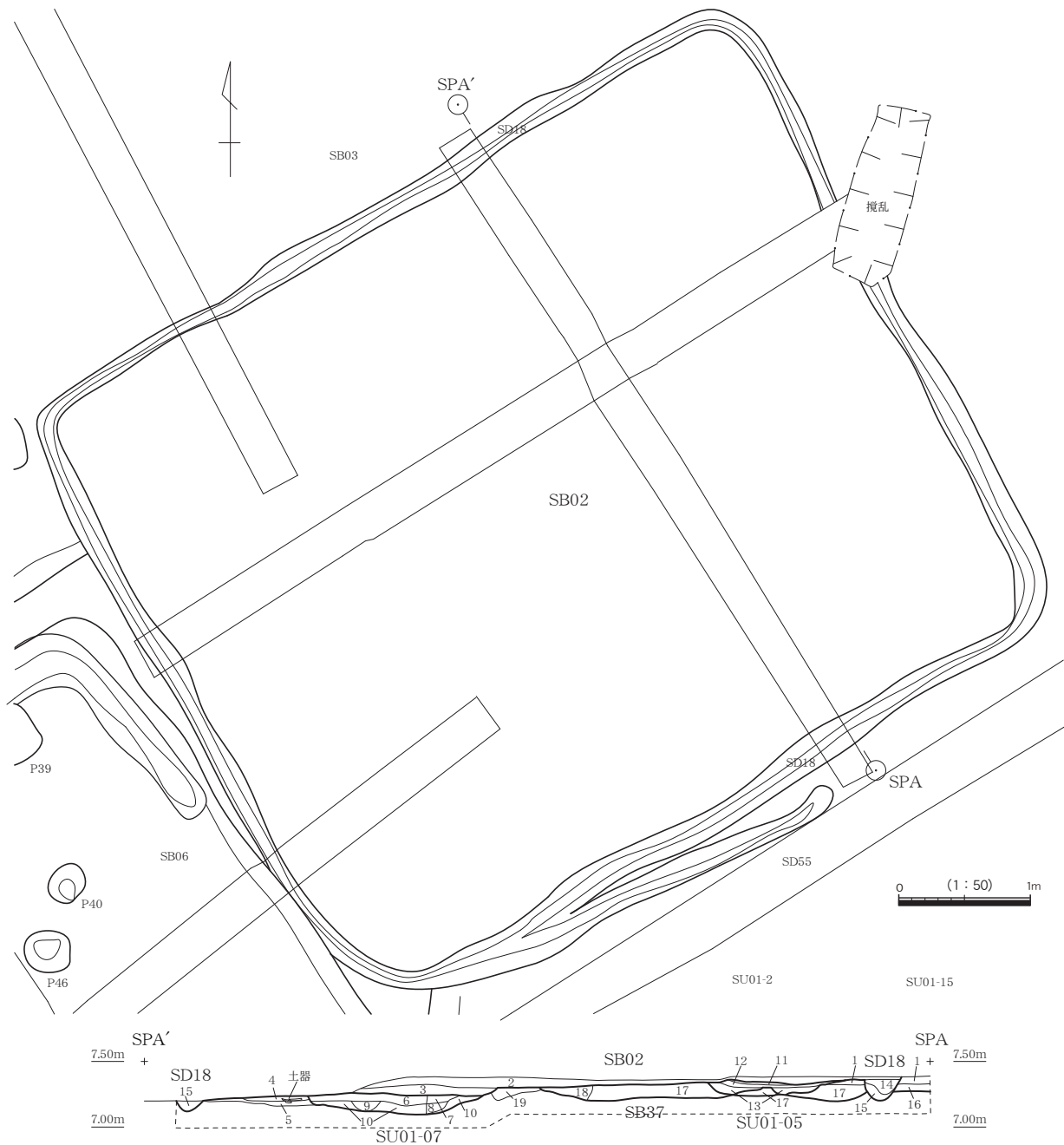
SB04 第 94 図の範囲にはないが、SB04 は調査区北西端に位置し、南東隅部のみが検出された竪穴建物である。壁溝などは検出されなかったが、主柱穴 P10 は存在する。

B SB13 (第 95 図)

調査区北端東半に位置し、北西 - 南東方向で 330cm を測る隅丸長方形の浅い遺構である。北部は調査区外に拡がり不明となるが、深さ 3cm を測り、床面は黒褐色シルトの斑土で貼床されていた。柱穴と思われる土坑が点在することなどから竪穴建物と推定されるが、壁溝や火処遺構などは検出されなかった。

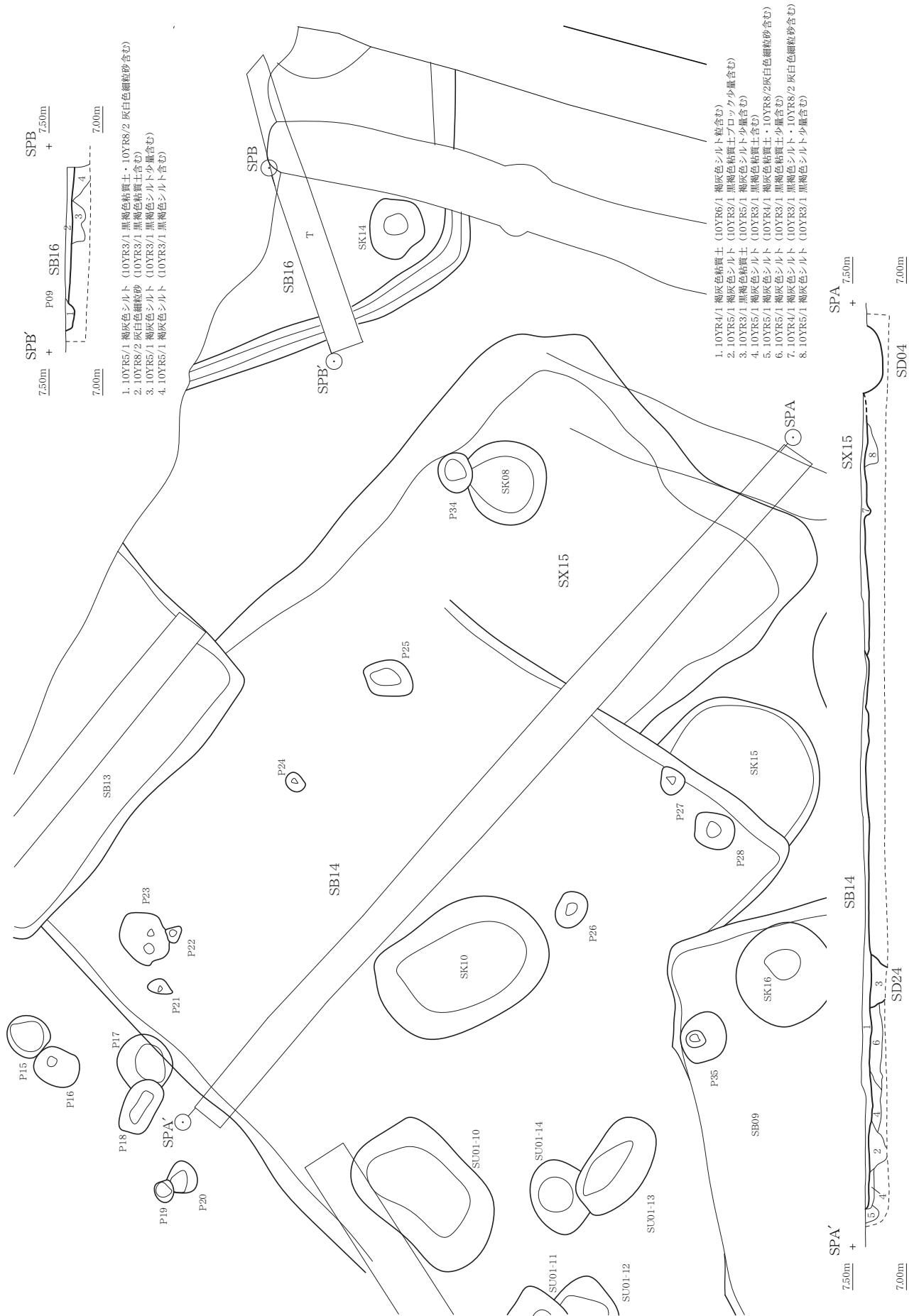
C SB02・SB03 (第 96 図)

SB02 北東 - 南西方向で 544cm、北西 - 南東方向で 629cm、深さが 10cm を測る竪穴建物である。下に SB37 が存在し、西隅部は SB03 に切られるが、西隅部は壁溝によってプランを知ることができる。幅約 22cm、深さ約 8cm の狭い壁溝 SD18 が全周するが、南東辺で同規模の壁溝 SD55 と切り合うため、SB02 は建て替えがあった可能性が考えられる。床面は北西半部でわずかに下がり段差を持つが、床面では炭化材が拡がるものの柱穴や火処遺構などの内部施設は一切検出されなかつ

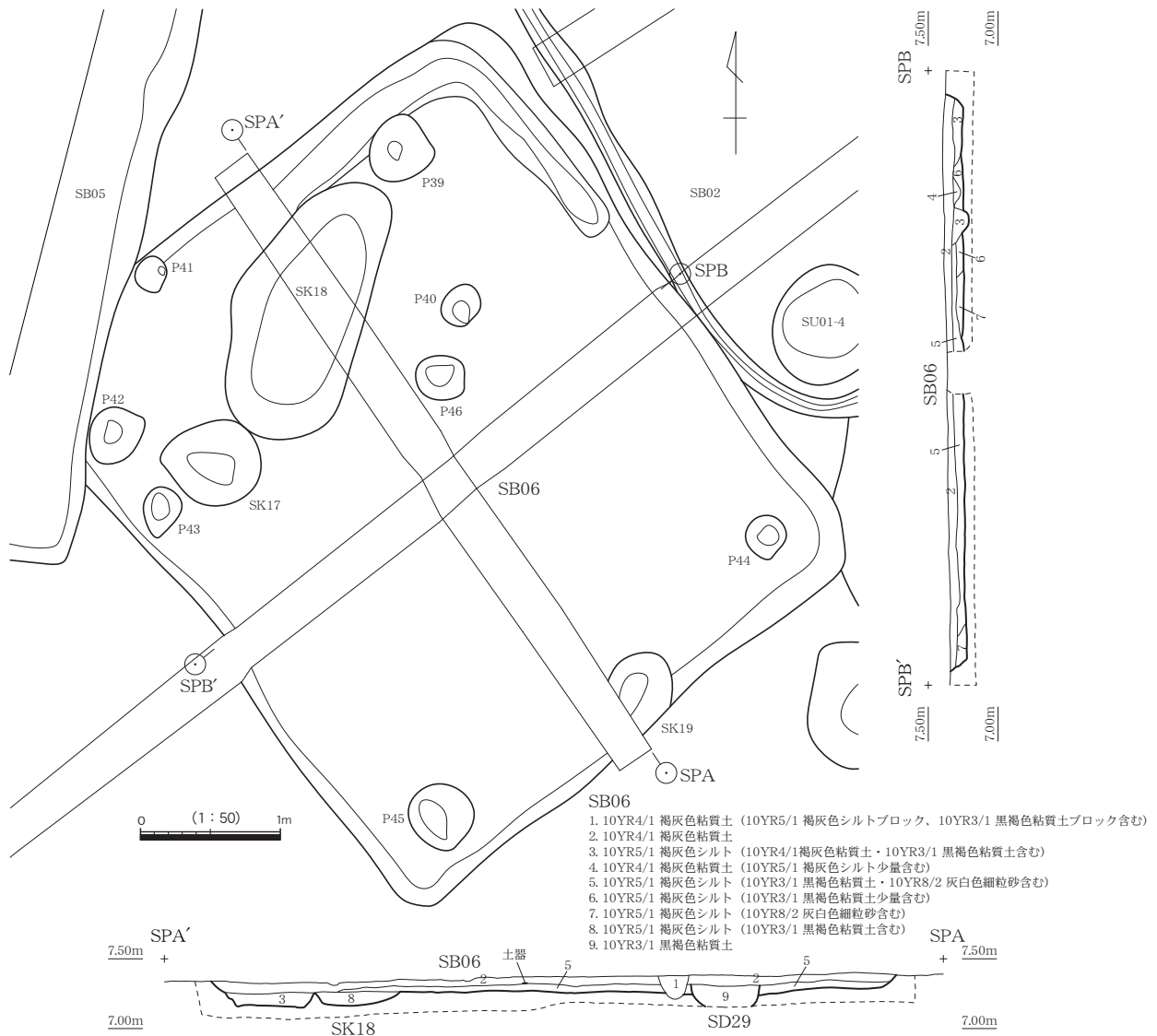


- | | |
|--|--|
| 1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む、炭化物含む) : 包含層 | 11. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (炭化物含む) |
| 2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒含む、炭化物少量含む) | 12. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト含む、炭化物多く含む) |
| 3. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む、炭化物含む) | 13. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む、炭化物含む) |
| 4. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒多く含む、炭化物含む) | 14. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む) |
| 5. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土含む) | 15. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む) |
| 6. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土含む、10YR6/1 褐灰色シルト粒含む、炭化物含む) | 16. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト、10YR3/1 黒褐色粘質土含む、炭化物含む) |
| 7. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土含む、10YR6/1 褐灰色シルト粒含む) | 17. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト含む) |
| 8. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒含む) | 18. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト粒含む) |
| 9. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒、炭化物含む) | 19. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む) |
| 10. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む) | |

第 96 図 SB02・SB03 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 97 図 SB14・SX15・SB16 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 98 図 SB05・SB06 平面図・土層断面図 (S=1/50)

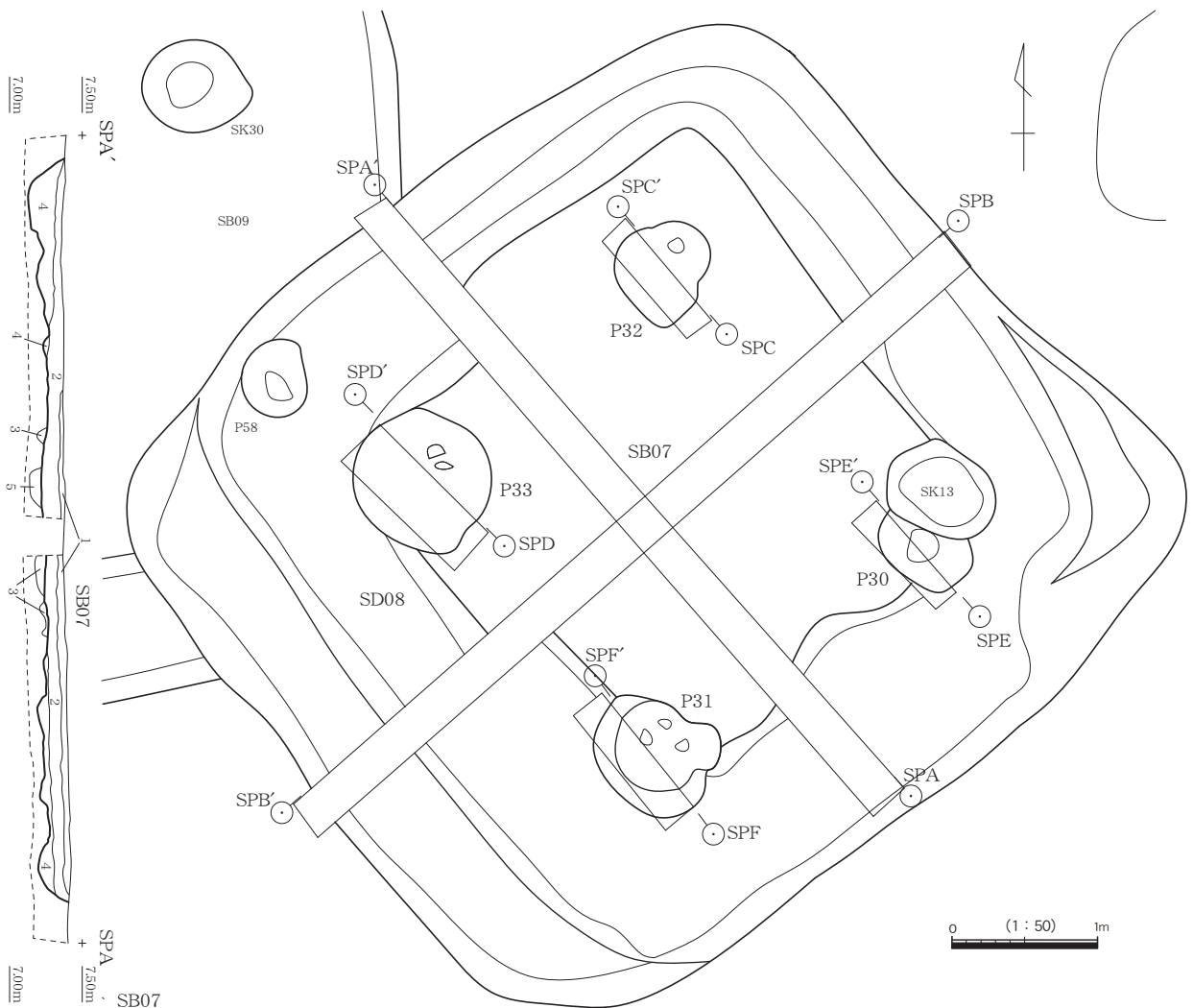
た。ただし、床面を露出した段階で浅い凹みに炭化物を多く含む不定形土坑 SU01 が 7 基存在し、その覆土から多数の古墳時代の土師器が出土した。同様の土坑は他に 3 基存在することと、SU01-8 は SB02 壁溝 SD18 に切られることなどから、この土坑群 SU01 は SB02 とは直接関連しないと考えておきたい。

SB03 北東—南西方向で 410cm、北西—南東方向で 510cm、深さが 10cm を測る竪穴建物である。西隅部は調査区外に拡がり、東隅部は地形が下がり滅失していた。P36 と P38 は主柱穴と思われるが、壁溝や火処遺構などの内部施設は確認できない。

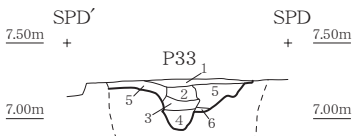
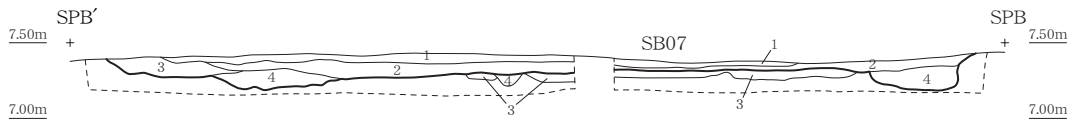
D SB14・SX15・SB16 (第 97 図)

SB14 520cm × 510cm の規模を持つ方形の竪穴建物である。深さが 3cm と浅く、東隅部と南西辺のプランは不明となっている。P23 ~ P26 は主柱穴と思われるが、壁溝や火処遺構などは認められない。SB09 と SB13 に切られ、SX15 を切る形で検出された。

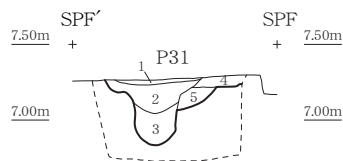
SX (SB) 15 北東 - 南西方向で 370cm を測る隅丸長方形の浅い遺構で、SB13 と SB14 に切られる。深さ 3cm の皿状の断面を呈し、緩い壁の立ち上がりが認められる。壁溝や柱穴などが検出されず、形状も歪であるため、性格不明遺構である。



- SB07
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む)
 2. 10YR3/1 黒褐色シルト (炭化物少量含む)
 3. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む、炭化物微量含む)
 4. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト含む、炭化物含む)
 5. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む)

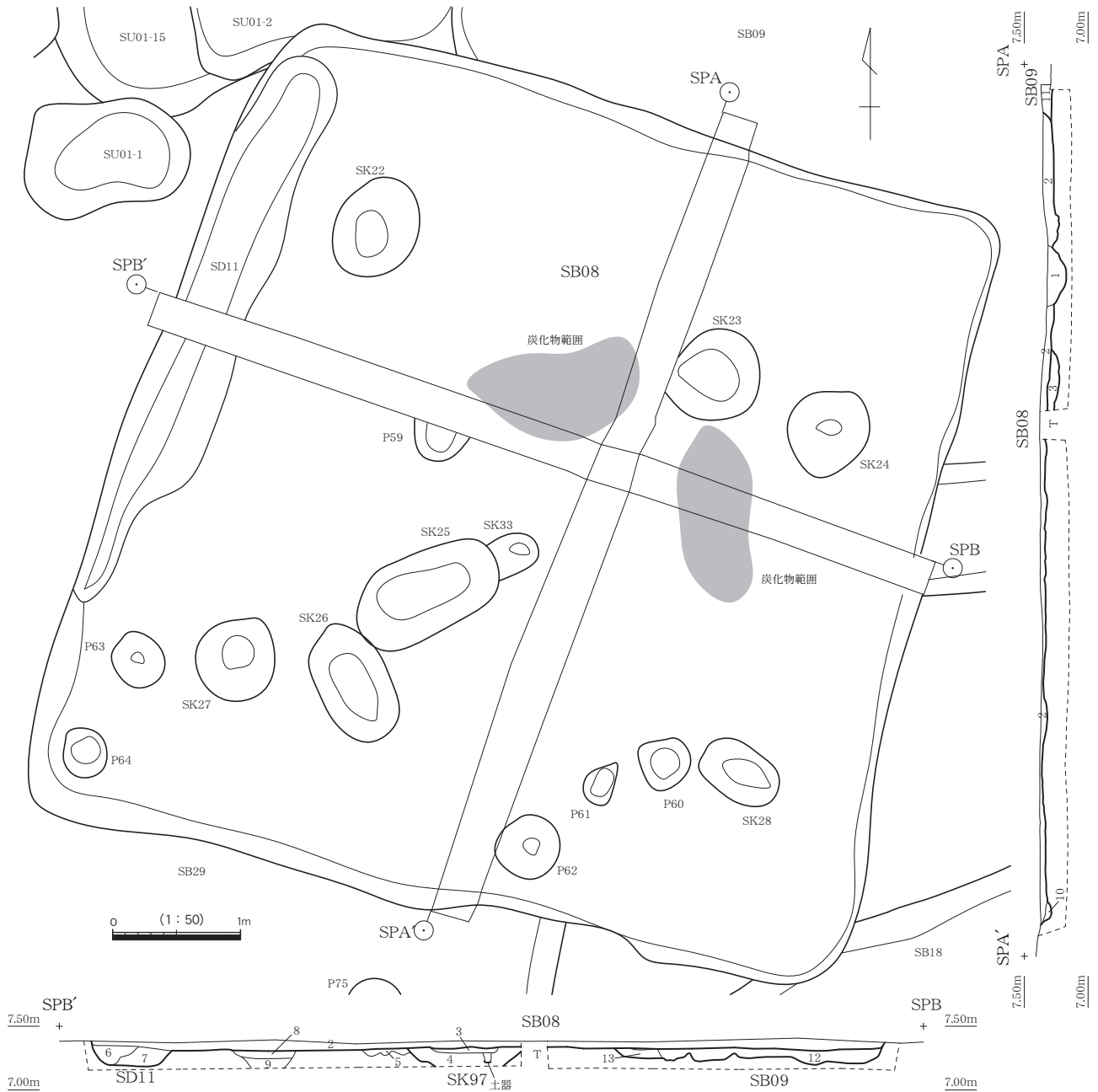


- | | |
|---|---|
| 1. 10YR3/1 黒褐色シルト (炭化物少量含む) | 1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 |
| 2. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR8/2 灰白色細粒砂少量含む、炭化物少量含む) | 2. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR8/2 灰白色細粒砂少量含む、炭化物少量含む) |
| 3. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルトブロック含む、炭化物含む) | 3. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルトブロック少量含む、10YR8/2 灰白色細粒砂少量含む、炭化物含む) |
| 4. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルトブロック・10YR8/2 灰白色細粒砂少量含む、炭化物含む) | 4. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む、10YR3/1 黒褐色粘土少量含む) |
| 5. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂含む) | 5. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト含む) |
| 6. 7.5YR4/6 褐色細粒砂 (10YR3/1 黒褐色シルト含む) | |



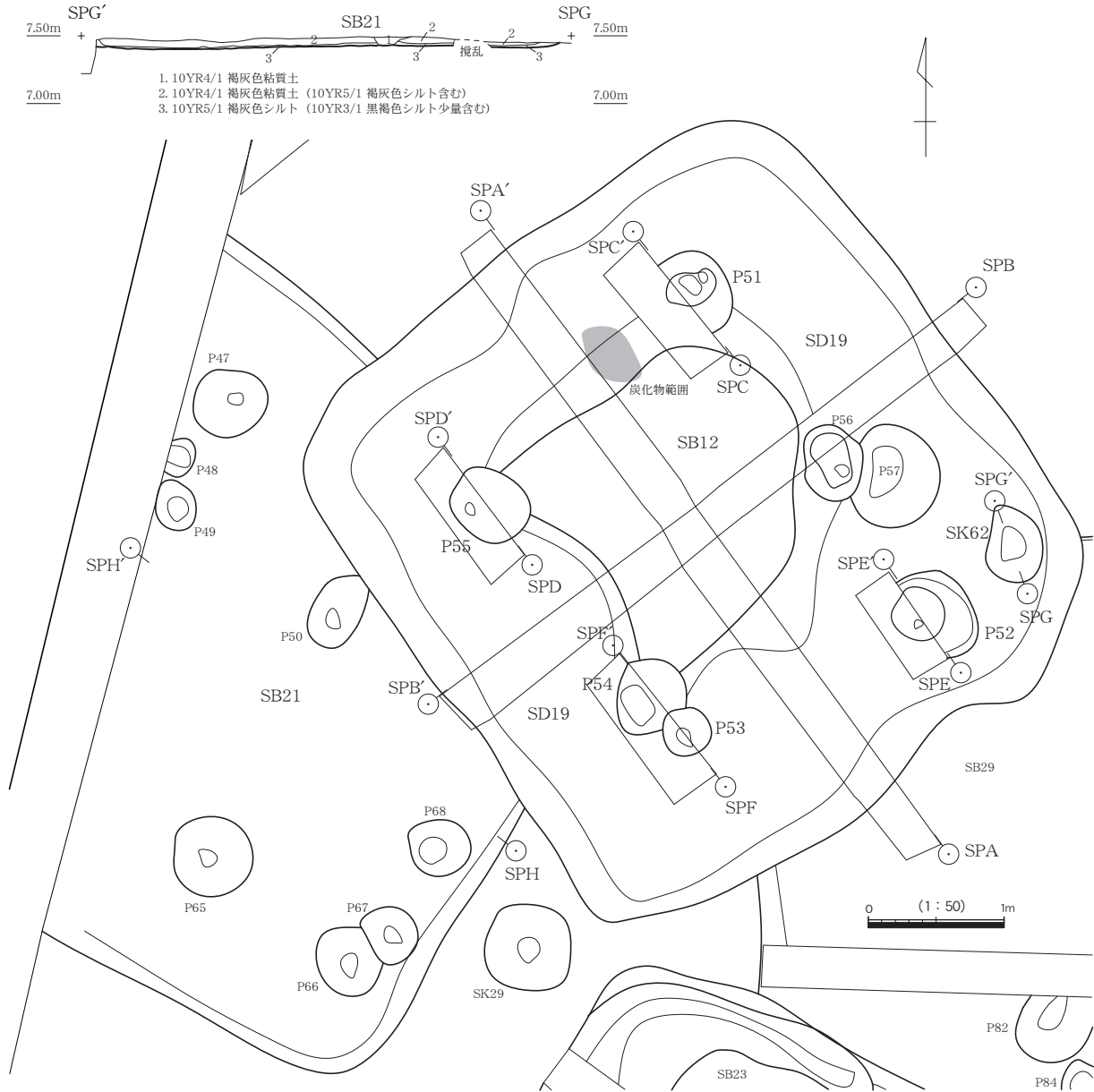
- | | |
|--|---|
| 1. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む、10YR8/2 灰白色細粒砂含む、炭化物含む) | 1. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土含む) |
| 2. 10YR8/2 灰白色細粒砂 (10YR3/1 黒褐色粘質土・シルトを網状に含む) | 2. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR8/2 灰白色細粒砂少量含む) |
| 3. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR3/1 黒褐色シルトを含む、10YR8/2 灰白色細粒砂少量含む、炭化物少量含む) | 3. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂含む、炭化物含む) |
| 4. 10YR8/2 灰白色細粒砂 (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む) | 4. 10YR8/2 灰白色細粒砂 (10YR3/1 黒褐色シルト含む) |
| 5. 10YR8/2 灰白色細粒砂 (10YR3/1 黒褐色シルト含む) | |

第 99 図 SB07・SB09 平面図・土層断面図 (S=1/50)

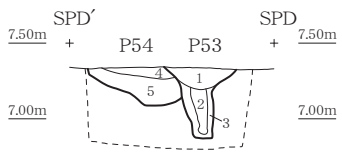


1. 10YR8/2 灰白色細粒砂。上部に10YR4/1 褐灰色シルト・炭化物含む。、下部に10YR5/1 褐灰色シルト・10YR3/1 黒褐色シルト含む)
2. 10YR4/1 褐灰色シルト
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む。炭化物多く含む)
5. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂含む)
6. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む)
7. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト含む)
8. 10YR4/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト・10YR 8/2 灰白色細粒砂筋状に含む)
9. 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む)
10. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む)
11. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量、炭化物含む)
12. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘土ブロック、10YR8/2 灰白色細粒砂含む)
13. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色シルト少量、10Y 8/2 灰白色細粒砂少量含む)

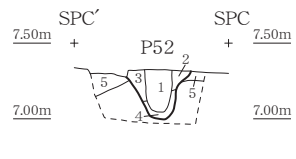
第 100 図 SB08 平面図・土層断面図 (S=1/50)



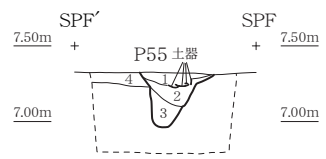
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む)
3. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む)



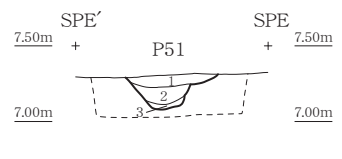
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土含む、炭化物含む)
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (炭化物少量含む)
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む)
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (炭化物多く含む)
5. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 シルト含む)



1. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (炭化物含む)
2. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルトブロック少量含む)
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む、炭化物含む)
4. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルトブロック含む)
5. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト含む)

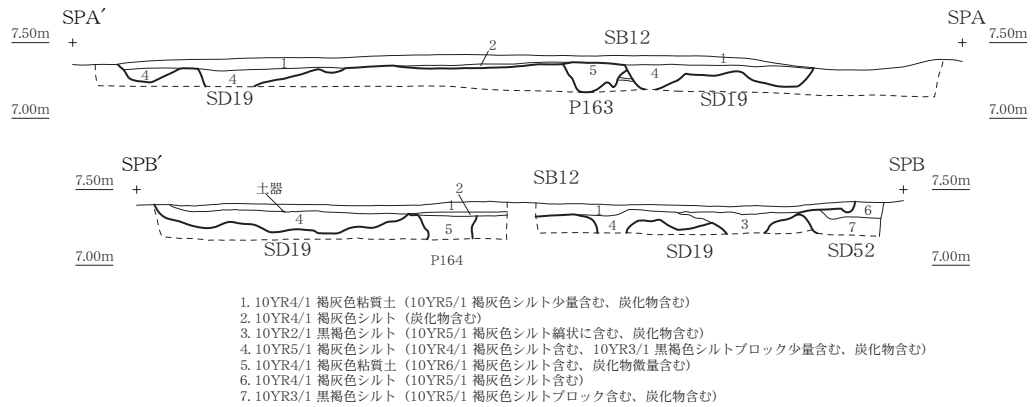


1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む、炭化物含む)
2. 10YR5/1 褐灰色シルト (上部に10YR4/1 褐灰色粘質土・土器を含む、下部に10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む)
3. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土少量・炭化物含む、下部に10YR8/2 灰白色細粒砂含む)
4. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト含む)



1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト粒含む、10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む、炭化物少量含む)
2. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土・10YR3/1 黒褐色粘質土含む、炭化物少量含む)
3. 10YR8/2 灰白色細粒砂 (10YR4/1 褐灰色粘質土微量含む)

第 101 図 SB12・SB21 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 102 図 SB12・SB21 土層断面図 (S=1/50)

SB16 南西隅のみが検出された竪穴建物で、北部は SD02 によって壊され不明である。西辺には壁溝が残存し、主柱穴 SK14 も存在する。

E SB05・SB06 (第 98 図)

SB05 東端部のみが検出された南北長 584cm を測る遺構で、竪穴建物と思われる。壁溝や火処遺構などは認められないが、P320 は主柱穴になると推測される。SB06 を切る形で検出された。

SB06 北東—南西方向で 410cm、北西—南東方向で 483cm、深さが 9cm を測る竪穴建物である。褐灰色シルトの斑土が貼床として整地され、北隅部だけに壁溝が掘削される。P39・P42・P44・P45 が主柱穴になると推定され、北西辺中央に土坑 SK18 が存在する。火処遺構などは認められない。平瓦などが出土しており、C 期に属する遺構である。

F SB07・SB09 (第 99 図)

SB07 北東—南西方向で 581cm、北西—南東方向で 548cm、床面までの深さは 7cm を測る隅丸方形の竪穴建物である。調査区内では地山が部分的に灰白色細粒砂となる部分があるが、この地点がそれに該当する。幅約 100cm、深さ約 20cm の幅広い周溝 SD08 が全周するが、東隅部と南西辺で周溝の外側にテラス状の細長い平坦面が存在する。SD08 東隅付近で白色粘土塊が、SD08 東南辺中央及び南西辺テラス中央で B 期の土器片が出土した。SD08 は黒褐色シルトの斑土で整地されており、その上面にはやや規模が大きい主柱穴 P30～P33 が掘削されていた。P30 は SK13 に切られており、建て替えられた痕跡の可能性も考えられる。火処遺構などは不明だが、床面に北部を中心に炭化材が散在しており、焼失建物の可能性がある。土師器壺や高杯などが出土しており、B—1 期に位置づけられる。

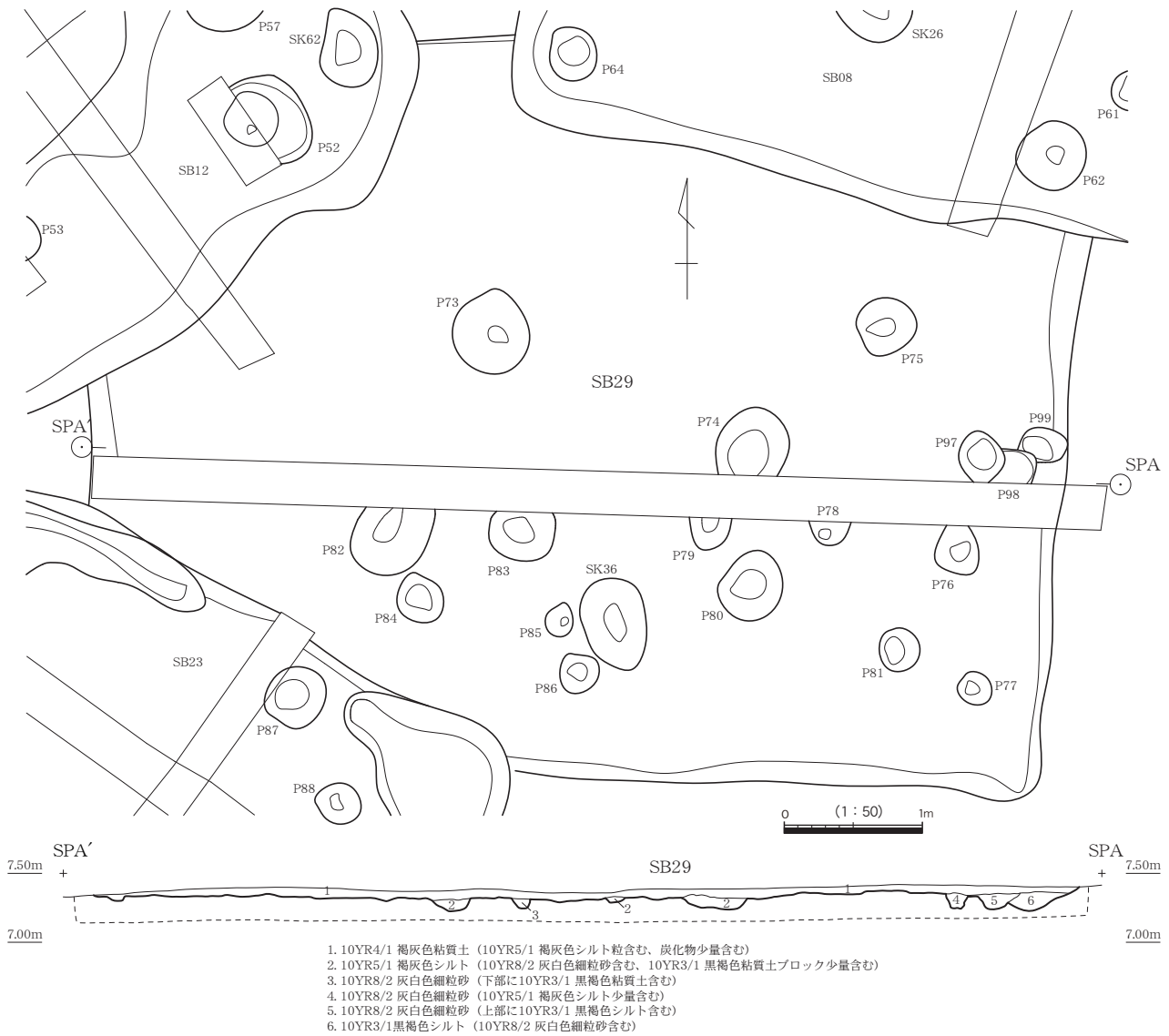
SB09 650cm × 562cm の規模を持つ隅丸長方形の竪穴建物である。深さが 0.06m で、南東隅部は SB07、南西隅部は SB08 に切られ、プランは不明となっている。南辺に幅広い周溝が残存し、SK23・SK30・P58 が主柱穴と思われる。火処遺構などは認められない。

G SB08 (第 100 図)

北東-南西方向で 650cm、北西-南東方向で 636cm、深さは 7cm を測る隅丸方形の竪穴建物である。地山が灰白色細粒砂となる部分に所在し、西辺で幅約 62cm、深さ約 13cm の幅広い周溝 SD11 が走る。中央部に 2ヶ所炭化物が分布する範囲があり、その中央には焼土が存在することから、これらが地床炉と思われる。やや規模が大きい主柱穴 SK22・SK24・SK27・SK28 が掘削されていた。SB09 と SB29 を切る。覆土からは山茶碗なども出土しており、時期は C～D 期に位置づけられる。

H SB12・SB21 (第 101・102 図)

SB12 北東—南西方向で 4.56m、北西—南東方向で 490cm、床面までの深さは 7cm を測る隅丸方

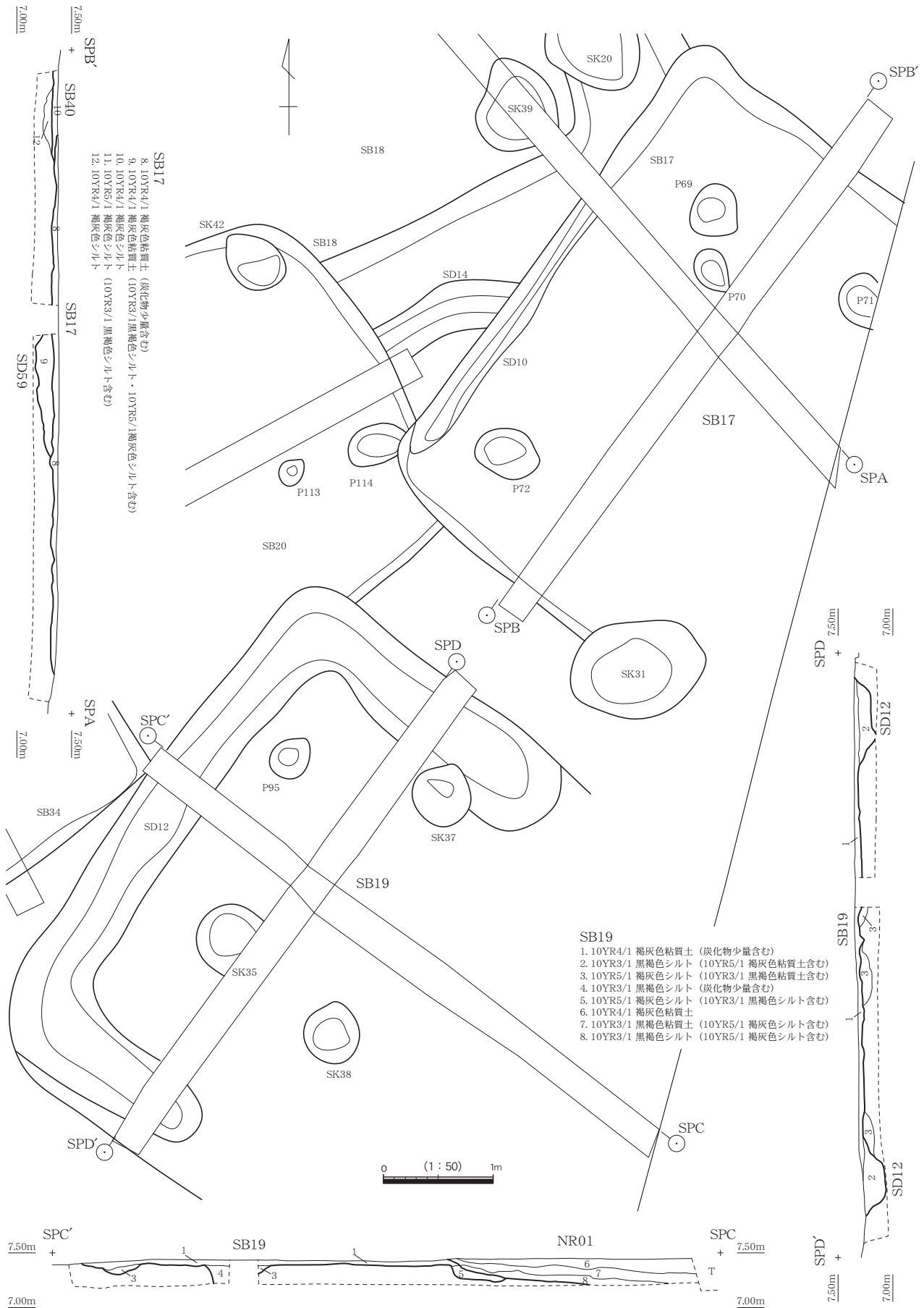


第 103 図 SB29 平面図・土層断面図 (S=1/50)

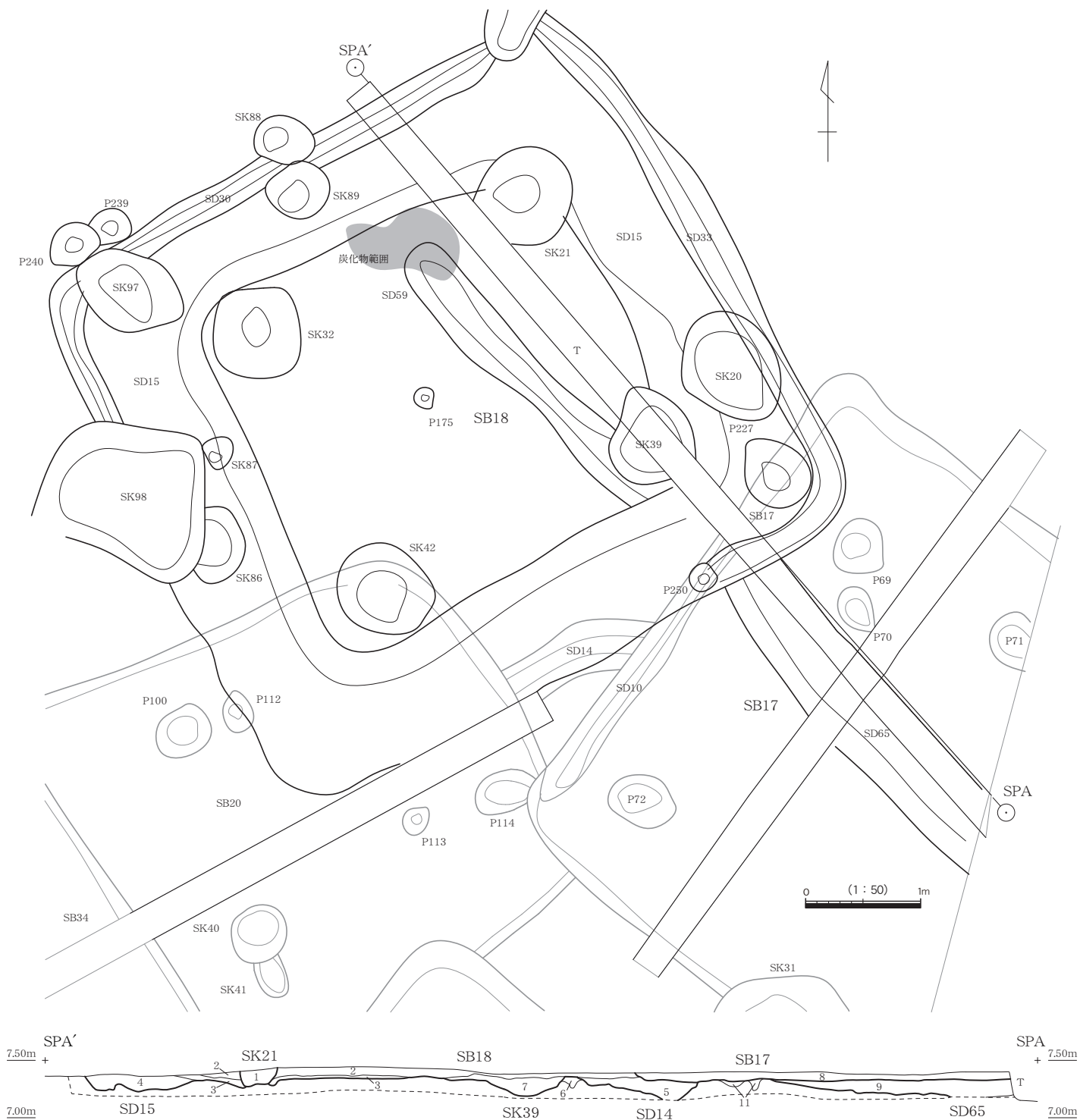
形の竪穴建物である。幅約 123cm、深さ約 20cm の幅広い周溝 SD19 が全周するが、プランは崩落のためやや蛇行する。SD19 は褐灰色シルトの斑土で整地されており、その上面にはやや規模が大きい支柱穴 P51 ~ P57 が掘削されていた。東隅で支柱穴とみられる土坑が 3 基存在しており、建て替えがあったことが推測される。東隅付近で SK62 が所在し、埋土上位で土師器壺 2 点が口縁部を重ねる形で横倒しに設置された状態で出土した。北西辺の中央寄りの位置に炭化物が集中する範囲があり、火処遺構の痕跡かもしれない。SB21 と SB29 を切る形で検出され、B-2 期に位置づけられる。SB21 北東 - 南西方向で 504cm の規模を持つ隅丸長方形の竪穴建物である。SB12 に切られ、西部は調査区外に広がる。深さが 0.05m で、褐灰色シルトの斑土で貼床が施され、支柱穴の候補となるピットが多数検出された。壁溝や火処遺構などは認められない。

I SB29 (第 103 図)

東西方向で 710cm、南北方向で 532cm、深さは 6cm を測る隅丸方形の遺構である。SB08・SB12・SB23 に切られ、壁溝や火処遺構などは認められない。内部に土坑が多数存在するが、支柱穴を特定することは難しい。竪穴建物と推測されるが、やや疑わしい。山茶碗片も出土したが、時期は

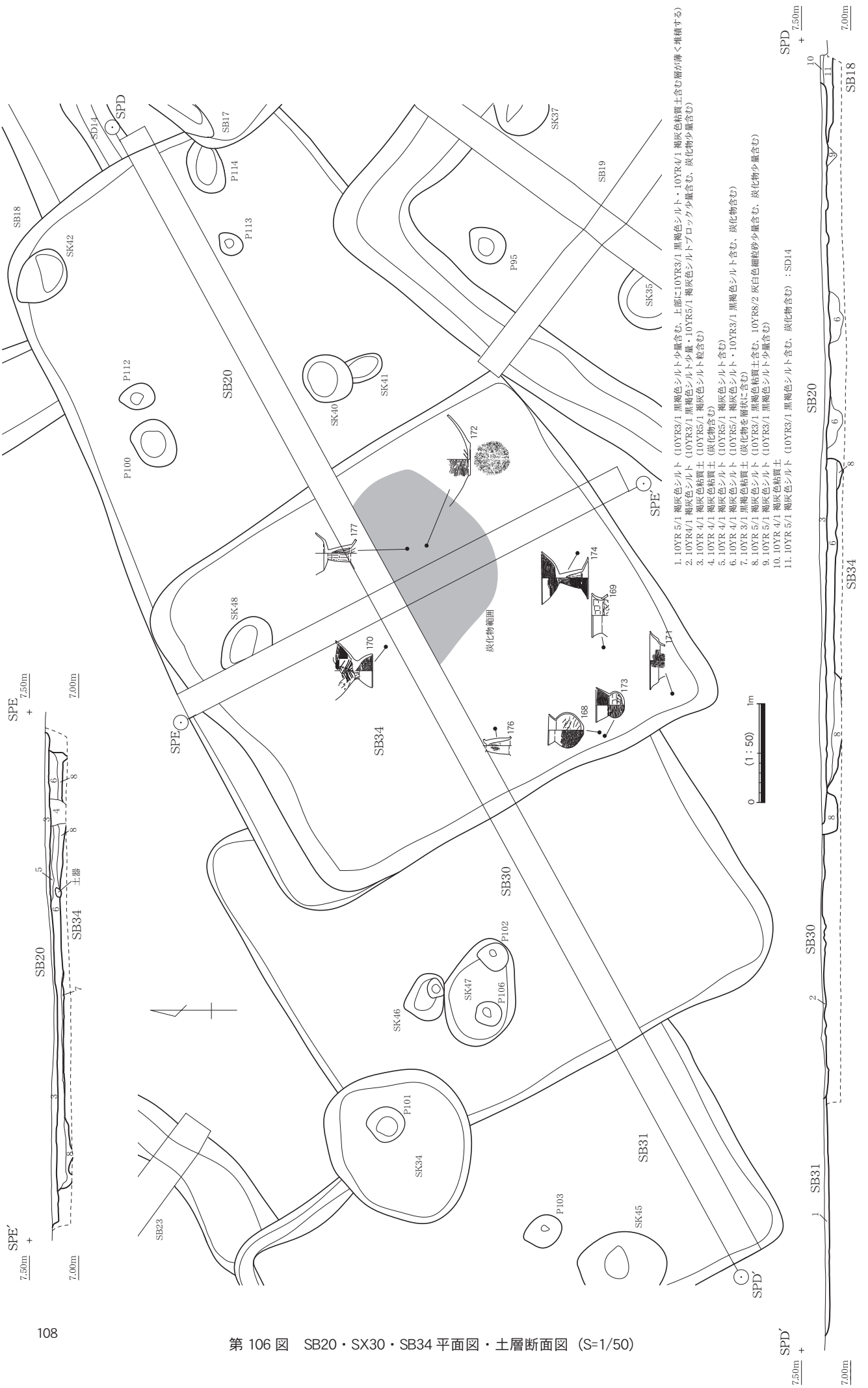


第 104 図 SB17・SB18・SB19 平面図・土層断面図 (S=1/50)



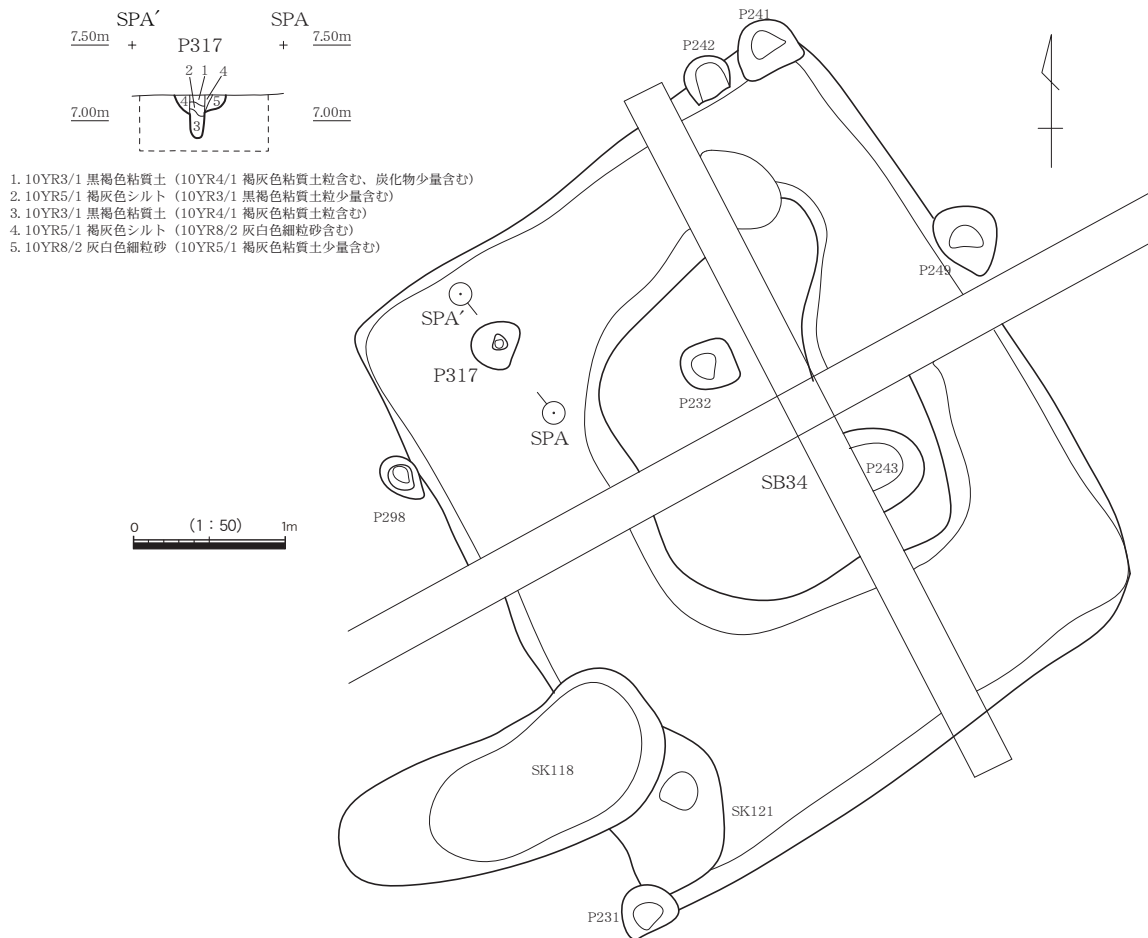
1. 10YR4/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量、炭化物少量含む)
2. 10YR4/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR8/2 灰白色細粒砂含む)
3. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂・炭化物が筋状に入る)
4. 10YR4/1 褐灰色シルト (10YR8/2 灰白色細粒砂含む)
5. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルトブロック多く含む、炭化物少量含む)
6. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト含む、炭化物含む)
7. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルトブロック少量含む、炭化物含む)
8. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (炭化物少量含む)
9. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色シルト・10YR5/1 褐灰色シルト含む)
10. 10YR4/1 褐灰色シルト
11. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト含む)

第 105 図 SB18 完掘平面図・土層断面図 (S=1/50)



1. 10YR 5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む、上部に10YR3/1 黒褐色シルト・10YR4/1 褐灰色粘質土含む層が薄く堆積する)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色シルト少量・10YR5/1 褐灰色シルトブロック少量含む、炭化物少量含む)
3. 10YR 4/1 褐灰色粘質土 (炭化物含む)
4. 10YR 4/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む)
5. 10YR 4/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む)
6. 10YR 3/1 黒褐色粘質土 (炭化物を層状に含む)
7. 10YR 3/1 黒褐色粘質土 (炭化物を層状に含む)
8. 10YR 5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む、10YR8/2 灰白色細砂少量含む、炭化物少量含む)
9. 10YR 5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土少量含む)
10. 10YR 5/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む)
11. 10YR 5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む、炭化物含む) ; SD14

第 106 図 SB20・SB30・SB34 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 107 図 SB34 完掘平面図・土層断面図 (S=1/50)

C 期に位置づけられるか？

J SB17・SB18・SB19 (第 104・105 図)

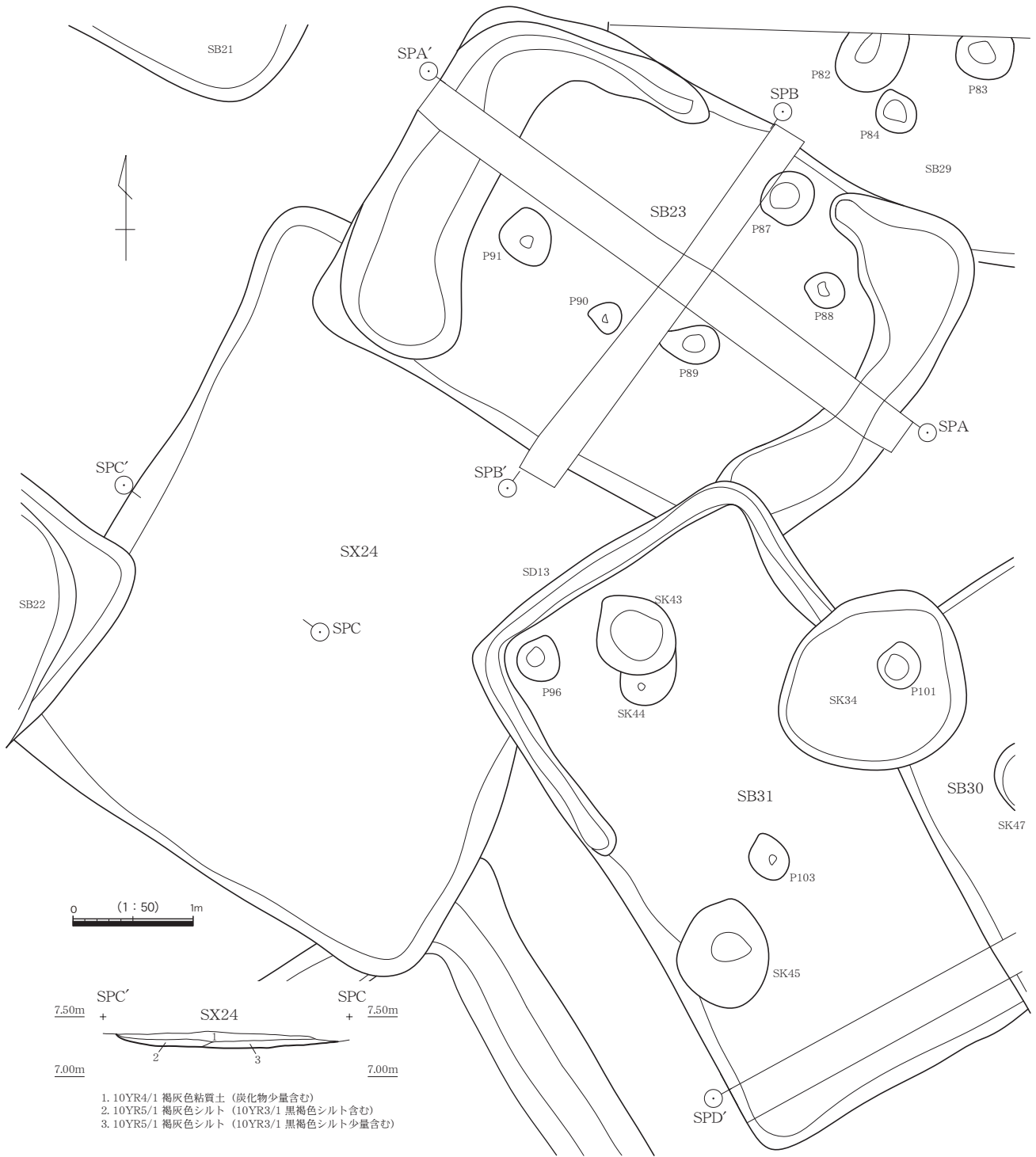
SB17 東部が調査区外に広がる竪穴建物で、北東—南西方向で 494cm、深さが 5cm を測る。北西辺に幅約 20cm、深さ約 1cm の壁溝 SD10 が走り、P69 と P72 が主柱穴になると思われる。SB18 と SB20 を切る形で検出された。

SB18 北東—南西方向で 550cm、北西—南東方向で 440cm、床面までの深さは 11cm を測る隅丸方形の竪穴建物である。地山が灰白色細粒砂となる部分に所在し、幅約 83cm、深さ約 3cm の幅広い周溝 SD15 が全周する。SD15 は黒褐色シルトの斑土で整地されており、その上面からやや規模が大きい主柱穴 SK21・SK32・SK39・SK42 が掘削されていた。北西辺の中央寄りの位置に炭化物が集中する範囲があり、火処遺構の痕跡かもしれない。SB17 と SB20 に切られる形で検出された。

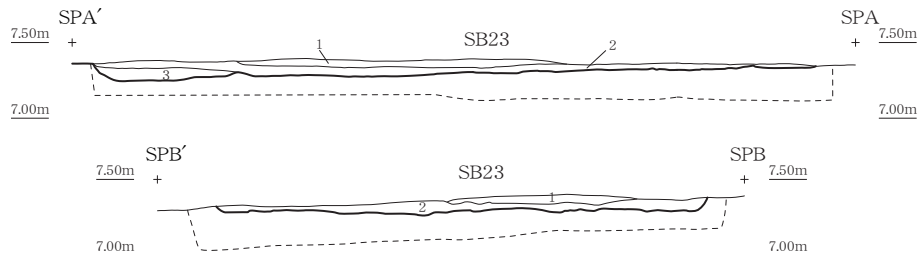
SB19 北東—南西方向で 520cm、深さは 8cm を測る隅丸方形の竪穴建物である。北西半部では幅約 57cm、深さ約 12cm のやや幅広い周溝 SD12 が巡り、南東半部は遺構検出が難航したこともあって結果として滅失してしまった。主柱穴の候補となる土坑は散見されるが、火処遺構などは不明である。SB20 を切る形で検出された。灰釉陶器片が出土し、C 期に位置づけられる。

K SB20・SX30・SB34 (第 106・107 図)

SB20 北東—南西方向で 768cm、北西—南東方向で 450cm、深さは 15cm を測る竪穴建物であるが、西部は大きく SB34 と重複しており、北東—南西方向の規模は疑わしい。壁溝や火処遺構などは不明であるが、主柱穴となる土坑はいくつか存在する。灰釉陶器片が出土しており、C 期と推測される。

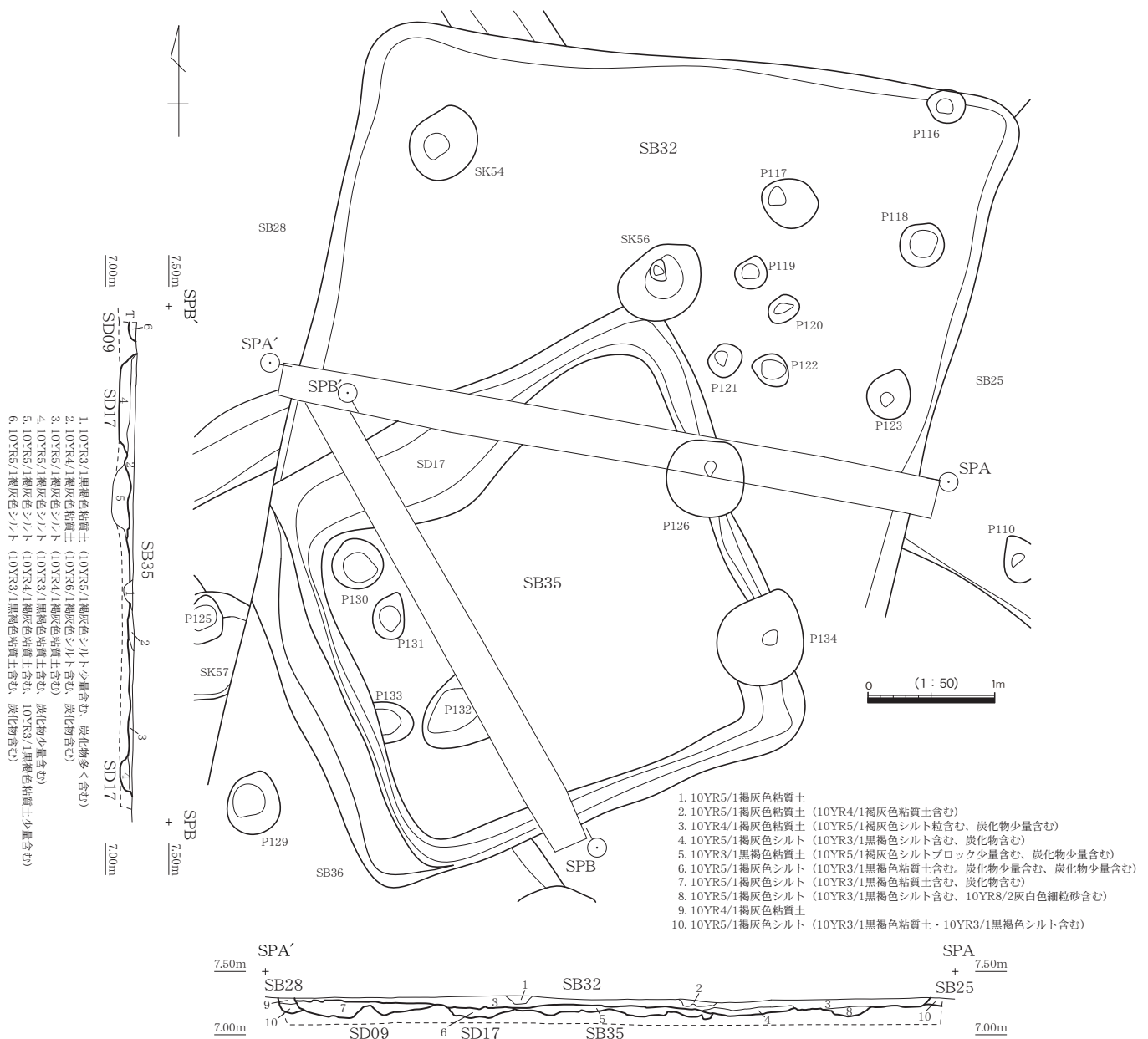


1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (炭化物少量含む)
2. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト含む)
3. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む)



1. 10YR 4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む)
2. 10YR 3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む)
3. 10YR 5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色シルト少量含む)

第 108 図 SB23・SX24・SB31 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 109 図 SB25・SB32・SB35 平面図・土層断面図 (S=1/50)

SX (SB) 30 北西—南東方向で 478cm、深さが 5cm を測る浅い遺構で、中央部付近で土坑 SK47 などが存在する。しかし、壁溝・支柱穴・火処遺構などは不明であり、性格不明遺構と言わざるを得ない。

SB34 北東—南西方向で 390cm、北西—南東方向で 452cm、床面までの深さは 9cm を測る隅丸方形の竪穴建物である。幅広い周溝が全周し、褐灰色シルトの斑土で整地されている。その上面 (床面) では中央に炭化物が堆積する部分があり、土師器屈折脚高杯や台付甕などが出土している。火処遺構の痕跡かもしれない。南隅部付近でも土師器壺類などの土器が多数発見された。支柱穴や壁溝は確認されなかった。SB20 と SX30 を切る形で検出された。時期は B—2 期と思われる。

L SB23・SX24・SB31 (第 108 図)

SB23 北東—南西方向で 3.34m、北西—南東方向で 4.76m、深さは 0.07m を測るやや小規模な竪穴建物である。南隅部が SB31 に切られるが、SX24 と SB29 を切る。南東辺と北西辺に幅広い周溝が

「コ」字状に巡り、褐灰色シルトの斑土で整地されている。主柱穴は P89 と P91 の可能性が考えられる。

SX (SB) 24 北東—南西方向で 5.22m、北西—南東方向で 3.90m、深さが 0.05m を測る浅い遺構である。壁溝・主柱穴・火処遺構などは不明であり、性格不明遺構と言わざるを得ない。

SB31 北東—南西方向で 2.82m、北西—南東方向で 5.10m、床面までの深さは 0.03m を測る隅丸長方形の竪穴建物である。幅約 0.26m、深さ約 0.03m の壁溝が北西半部のみ巡るが、主柱穴などは不詳である。SB23 と SX24 を切り、SB30 に切られる形で検出された。

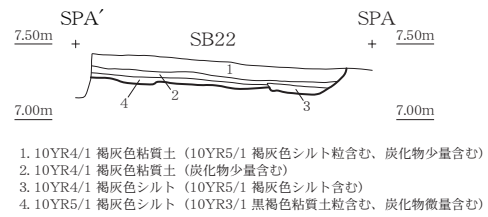
M SB25・SB32・SB35

(第 109 図)

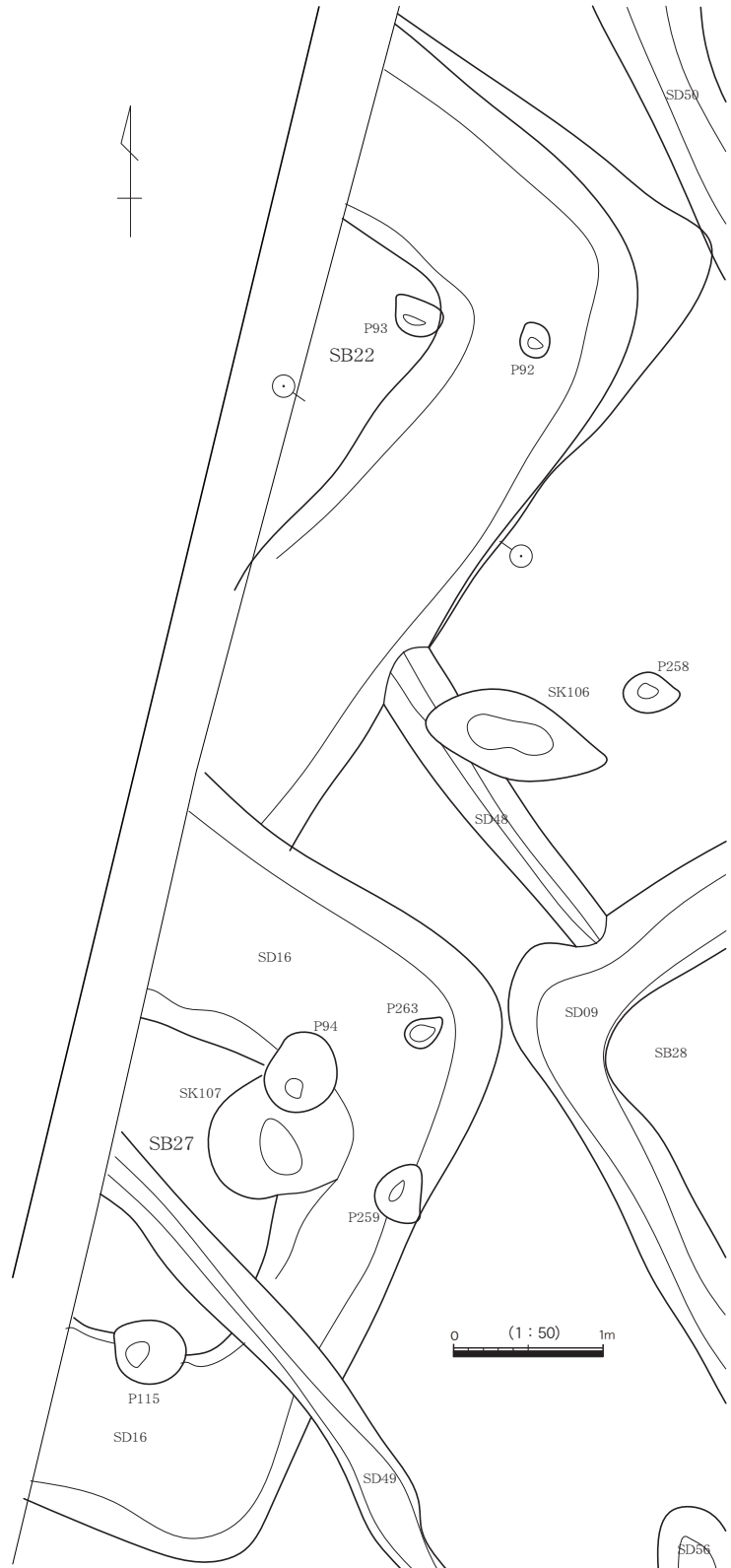
SB32 東西方向で 500cm、深さは 7cm を測る竪穴建物で、南部は SB35 に切られる。壁溝や火処遺構などは不明であるが、主柱穴となる土坑はいくつか存在する (SK54・SK117)。土師器屈折脚高杯などの土器が多数出土しており B—2 期に属するだろう。

SB35 380cm × 352cm の規模を持つ小型の竪穴建物である。床面までの深さは 6cm を測り、幅約 28cm、深さ約 13cm の壁溝 SD17 が全周しているが、主柱穴ははっきりしない。

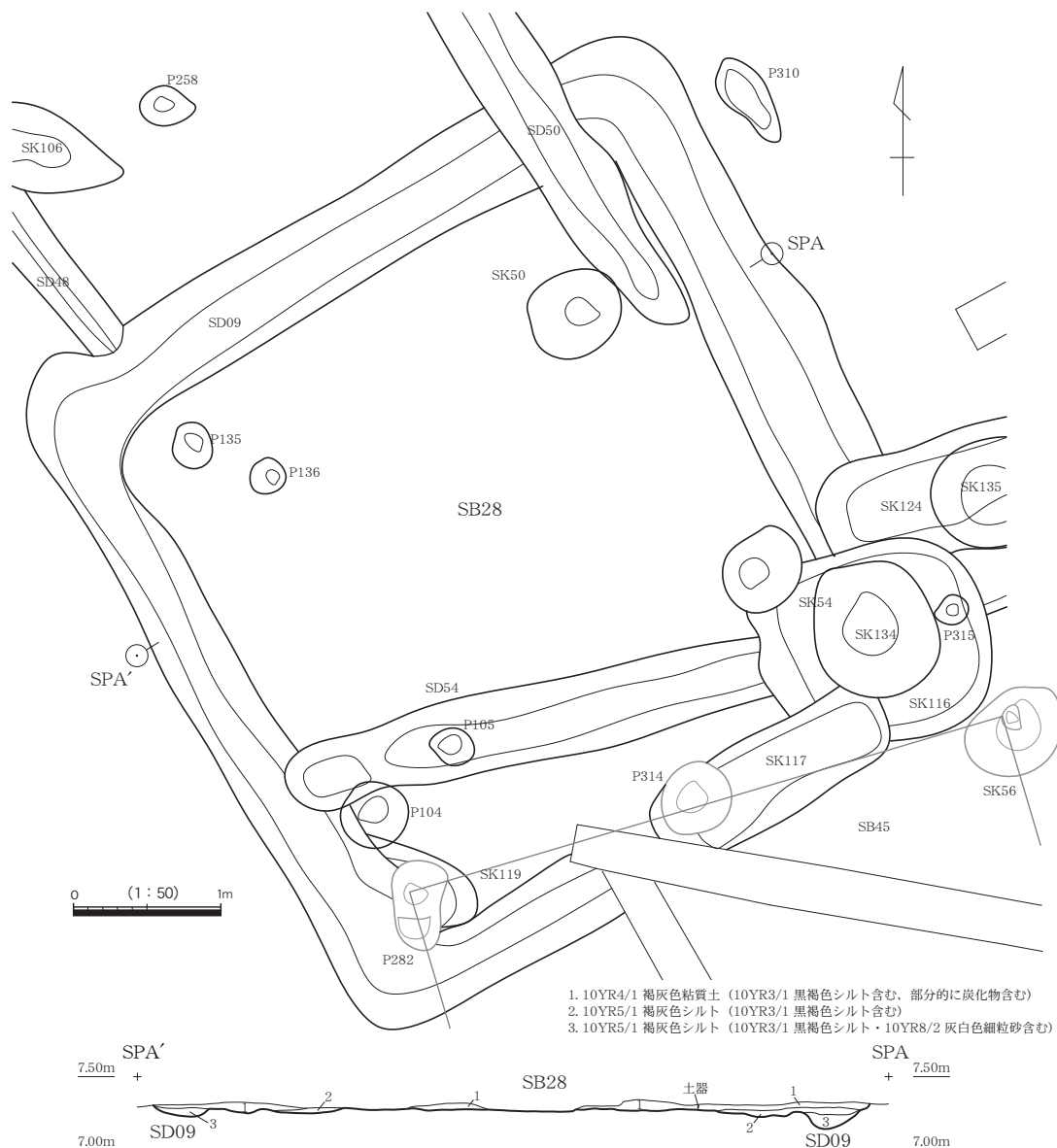
SB25 第 109 図には全形が示されていないが、SB25 は北東—南西方向で 506cm、深さは 2cm を測る竪穴建物と思われる遺構である。南部は NR01 の傾斜で滅失していて、SB32 に切られる。壁溝や火処遺構などは不明であ



1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト粒含む、炭化物少量含む)
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (炭化物少量含む)
3. 10YR4/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト含む)
4. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR3/1 黒褐色粘質土粒含む、炭化物微量含む)



第 110 図 SB22・SX26・SB27・SX33 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 111 図 SB28 平面図・土層断面図 (S=1/50)

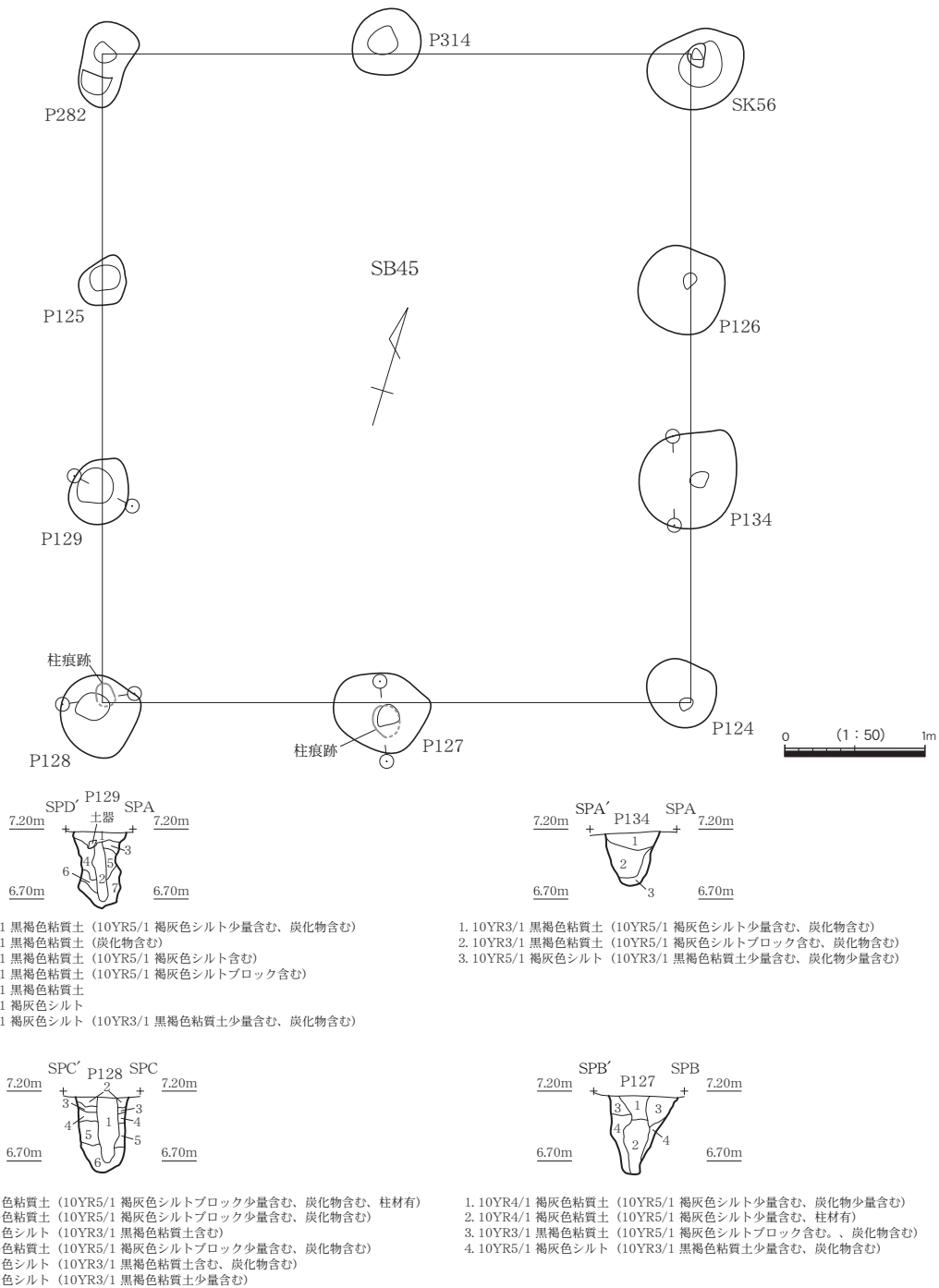
るが、P107 など主柱穴となる土坑はいくつか存在する。

N SB22・SX26・SB27・SX33 (第 110 図)

SB22 東隅部のみが検出された竪穴建物で、大半は調査区外に拡がる。幅約 122cm、深さ約 17cm の幅広い周溝が巡り、褐灰色シルトの斑土で整地されている。その上面でピット P92 と P93 が掘削された。SB27 に切られ、SX24 を切る形で検出された。

SX (SB) 26 東半部が残存する遺構で、南部は地形が傾斜して滅失している。内部施設として P115 が存在するが、竪穴建物 SB27 に伴う可能性が高い。性格不明遺構としておく。須恵器杯身が出土した。

SB27 東半のみが確認された一辺が 320cm の規模を持つ竪穴建物で、西部は調査区外に拡がる。幅約 150cm、深さ約 10cm の幅広い周溝 SD16 が巡り、整地された上に主柱穴 P94 が掘削された。SB28 内で検出された P115 も SB27 の主柱穴の可能性が高い。SB26 に切られ、SB22・SB28 を切る形で検出された。

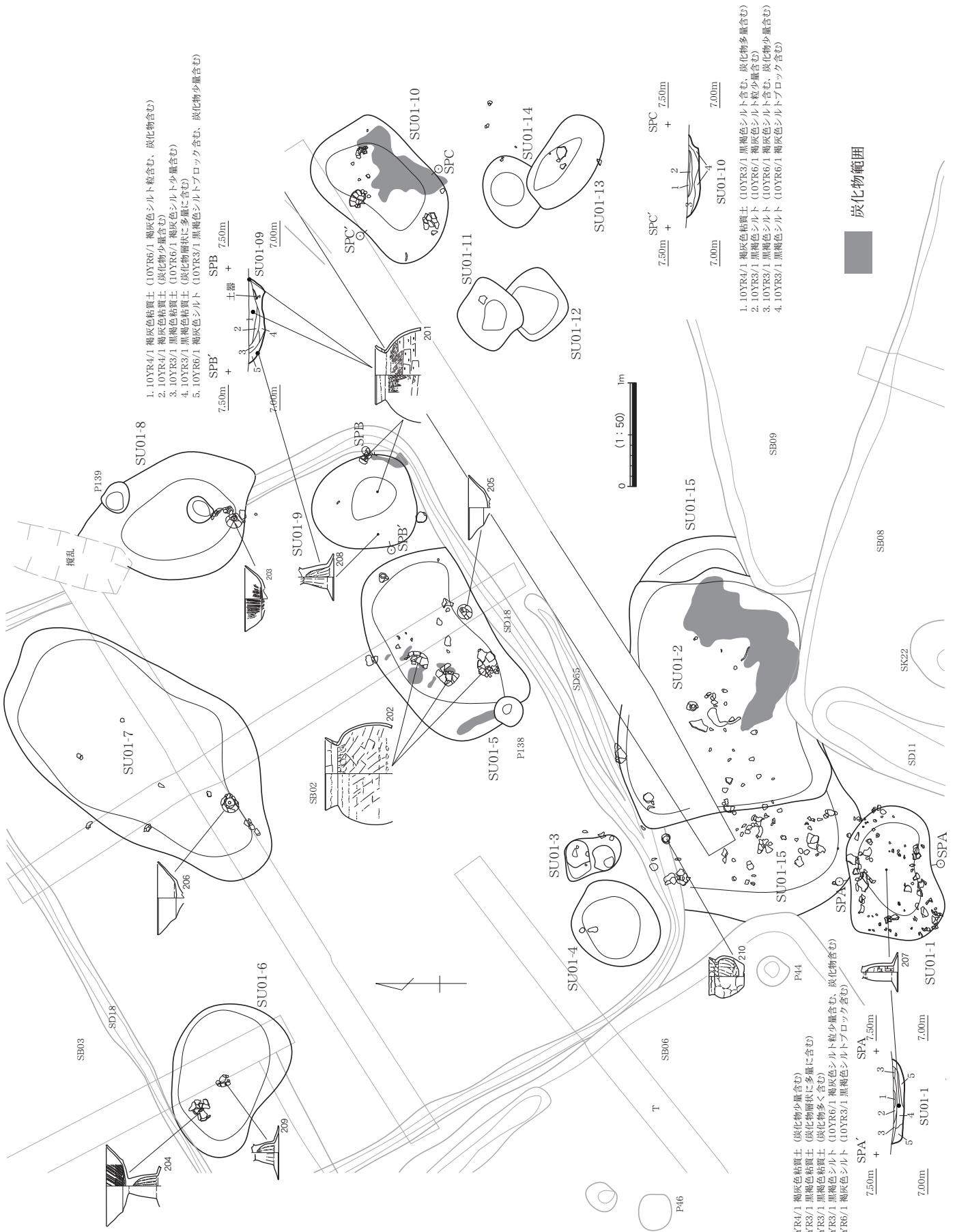


第 112 図 SB45 平面図・土層断面図 (S=1/50)

SX(SB) 33 第 110 図には図示されていないが、SX33 は SX26・SB28・SB32・SB35 に切られる遺構で、内部施設として土坑が複数存在するが、性格不明遺構と言わざるを得ない。

○ SB28 (第 111 図)

北東—南西方向で 510cm、北西—南東方向で 504cm、床面までの深さは 10cm を測る隅丸方形の竪穴建物である。北西半部では地山が灰白色細粒砂となっており、幅約 60cm、深さ約 4cm の幅広い周溝 SD09 が全周する。SD09 は褐灰色シルトの斑土で整地されており、その上面から支柱穴 SK50・SK54・P105・P136 が掘削されていた。P104 と P135 も支柱穴になる可能性があり、建て



第 113 図 SU01 平面図・土層断面図 (S-1/50)

替えが行われたかも知れない。床面には炭化物が散在していた。SX24 と SB27 と SB32 に切られる形で検出された。

P SX36

SX(SB)36 NR01 付近に所在する遺構で、南辺付近のみが検出された。内部施設は不明な部分が多く、性格不明遺構と言わざるを得ない。

(2) 掘立柱建物

A SB45 (第 112 図)

SB45 は調査区中央部に位置し、464cm × 425cm を測る 3 間 × 2 間の掘立柱建物である。東辺は SK56・P126・P134・P124、西辺は P282・P125・P129・P128、北辺は P314、南辺は P127 で構成される。柱間間隔は、東辺では北から約 1.6m・約 1.4m・約 1.6m、西辺では北から約 1.6m・約 1.5m・約 1.5m、北辺では西から約 2.0m・約 2.2m、南辺では西から約 2.1m・約 2.1m となる。時期は B 期と思われる。

(3) 土器集積

土器集積と認識された遺構 SU01 は 15 基存在する。浅い凹みに土器が埋積されているものが大半であり、本来は土坑とすべきかもしれないが、ここでは項目を分けて報告する。SB02 付近に集中的に分布し、炭化物層や焼土を伴う特徴がある。火を用いた活動が繰り返し行われ、そのまま土器が据えられた状態で遺棄された痕跡と推測される。

A SU01-1 ~ 15 (第 113 図)

SU01-1 は SB02 の南に位置する 132cm × 90cm の浅い不定形土坑で、上部で高杯など土師器が多数出土し、土器を取り除くと炭化物が層状に堆積していた。

SU01-2 は SB02 に南接する 234cm × 200cm の不定形土坑。南東部を中心に表面全体で炭化物が薄く堆積し、中央部を中心に土師器が出土した。

SU01-3 は SB02 内の南西隅に所在する 56cm × 32cm の土坑で、土師器が出土した。

SU01-4 は SB02 内の南西隅にある 90cm × 80cm の土坑で、埋土に炭化物が多量に含まれていた。

SU01-5 は SB02 内の南辺中央付近に位置する 192cm × 124cm の浅い不定形土坑で、上面に高杯など大きな土師器片が 5 点以上みられ、この他にも多数土師器が出土した。土器片付近には炭化物が集中して分布する様子が観察された。南半部を中心に焼土が広がっており、炉跡の可能性が高い。

SU01-6 は SB02 内の北西隅に所在する 154cm × 104cm の浅い不定形土坑に底部付近で炭化物が層状に堆積していた。東端部で焼土がみられ、上部で高杯など土師器が出土した。

SU01-7 は SB02 中央部北寄りに位置し、316cm × 160cm の規模を持つ。上部で炭化物が堆積し、外縁部付近で高杯など土師器が出土した。部分的に焼土が散在する。

SU01-8 は SB02 の東端部にあり SB02 に切られる。埋土には炭化物が多く含まれ、高杯など土師器が出土した。

SU01-9 は SB02 の南東隅に所在する 100cm × 90cm の浅い円形土坑。底部付近に炭化物が層状に堆積し高杯など土師器が出土した。

SU01-10 は SB02 の東に位置し、150cm × 95cm の浅い隅丸方形土坑である。上端部に炭化物が層状に堆積し、そこに土師器が多数含まれていた。

SU01-11 ~ 14 は SB02 の南東に位置する土坑群。埋土は炭化物を多く含み土師器が出土した。

SU01-15 は SU01-2 に切られる形で検出された浅い不定形土坑である。上端部に炭化物が層状に堆積し、そこに土師器が多数含まれていた。

(4) 土坑

A SK61 ~ 67 (第 114・115 図)

SK61～71はNR01の北岸斜面に所在する第2面で検出された土坑群である。ここではSK61～67を詳述する。

SK61 66cm×60cmの円形土坑で深さは19cmを測る。上部で黒褐色粘質土の中に土師器高杯が横倒しの状態で出土し、土坑下部では炭化物・炭化材が層状に堆積していた。

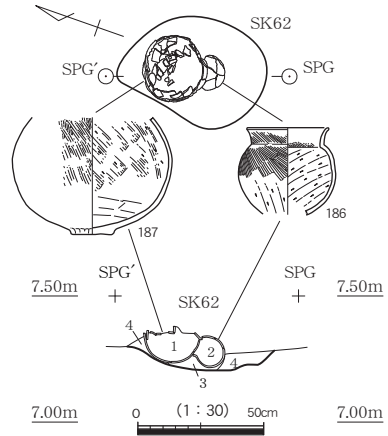
SK62 59cm×44cmの楕円形土坑で深さは12cmを測る。土師器甕と土師器小型壺が口縁部を合わせる形で横倒しの状態で出土した。土坑下部では炭化物がみられた。

SK63 240cm×216cmの不定形土坑で深さは41cmを測る。上位から黒褐色シルト、極暗褐色粘質土、暗赤褐色粘質土の順に堆積していた。極暗褐色粘質土と暗赤褐色粘質土中に焼土と炭化物が多量に含まれていた。上層で土師器片が多数出土した。

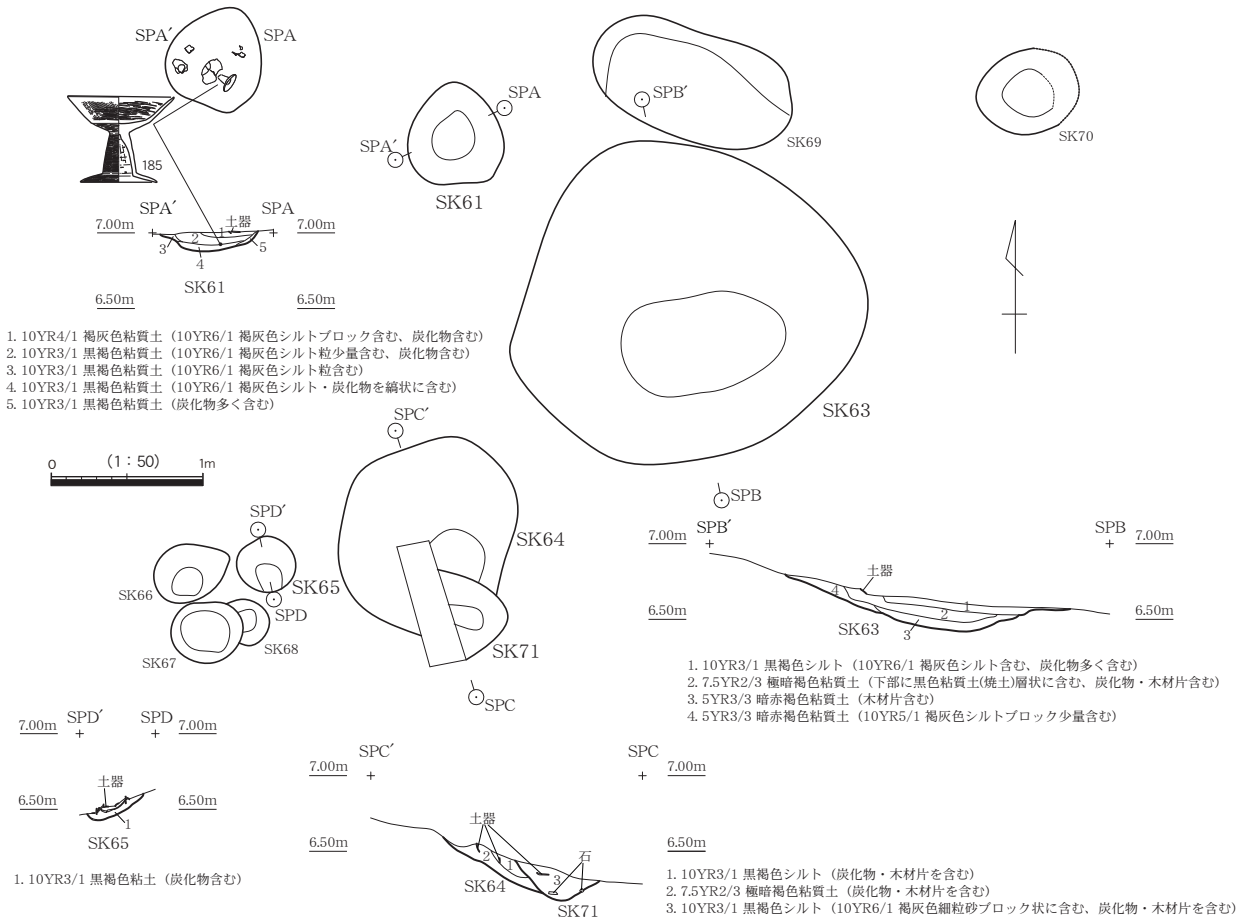
SK64 130cm×110cmの不定形土坑で深さは31cmを測る。第114図 SK62平面図・土層断面図 (S=1/50) 北側上部で土師器甕などが多数出土し、黒褐色シルト、極暗褐色粘質土の順に堆積していた。南部はSK71に切られる。

SK65 40cm×38cmの円形土坑で深さは14cmを測る。土師器甕が横倒して潰れた状態で出土していた。

SK66 104cm×80cmの楕円形土坑で深さは17cmを測る。土師器小型鉢が2個体分、口縁部をや



1. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色粘質土粒含む、硬くしまる)
2. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト少量含む)
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土
4. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト含む)



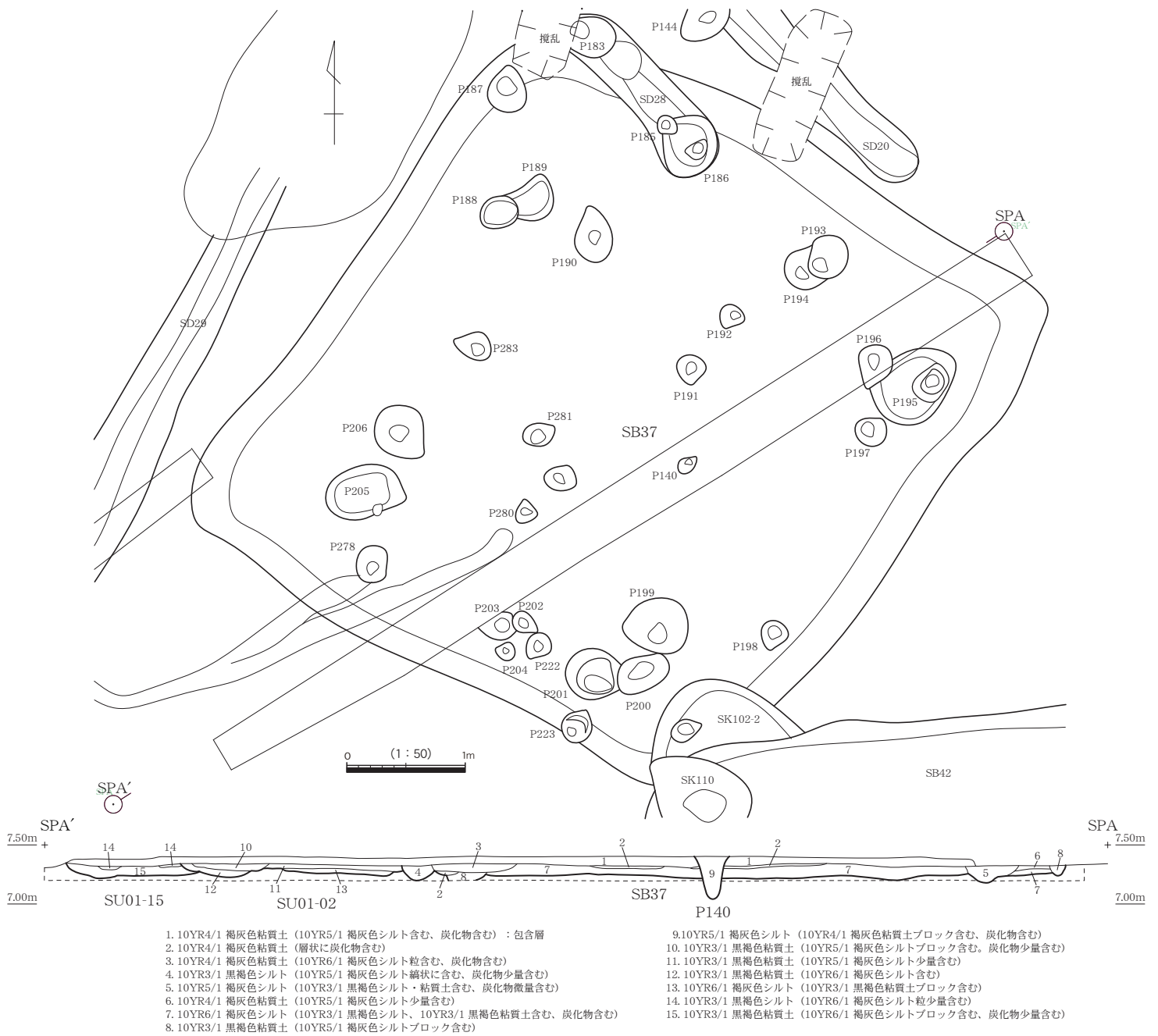
1. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む、炭化物含む)
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒少量含む、炭化物含む)
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒含む)
4. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト・炭化物を縞状に含む)
5. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (炭化物多く含む)

1. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト含む、炭化物多く含む)
2. 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土 (下部に黒色粘質土(焼土)層状に含む、炭化物・木材片含む)
3. 5YR3/3 暗赤褐色粘質土 (木材片含む)
4. 5YR3/3 暗赤褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルトブロック少量含む)

1. 10YR3/1 黒褐色粘土 (炭化物含む)

1. 10YR3/1 黒褐色シルト (炭化物・木材片を含む)
2. 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土 (炭化物・木材片を含む)
3. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR6/1 褐灰色細粒砂ブロック状に含む、炭化物・木材片を含む)

第115図 SK61・SK63・SK64・SK65・SK71平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 116 図 SB37 平面図・土層断面図 (S=1/50)

や向かい合わせるような状態で横倒しに出土している。

SK67 48cm × 40cm の円形土坑で深さは 13cm を測る。NR01 に埋積された木材に接しながら土師器片が出土した。

4 第 3 面

(1) 竪穴建物、竪穴状遺構・不明遺構

第 3 面で検出された竪穴建物・竪穴状遺構と思われる遺構は全部で 8 基を数えるが、最終的に竪穴建物と認定ができそうな遺構は SB37・SB42 の 2 基である。残りの SB38・SB39・SB40・SB41・SB43・SB44 の 6 基はここでは竪穴状遺構・性格不明遺構として SX と表記した。

A SB37 (第 116 図)

北東—南西方向で 554cm、北西—南東方向で 522cm、深さが 7cm を測る竪穴建物で、南端部は SB42 に切られる。壁溝や火処遺構などは不明であるが、P189・P195P・199・P205 が支柱穴となるだろう。

B SX38・SX39・SX40

SX (SB) 38 第 3 面で検出された北東部に所在する遺構で、西端部のみが検出された。内部施設として土坑があるものの、性格不明遺構と言わざるを得ない。

SX (SB) 39 SX38 の南に位置する遺構で、北西辺が検出された。壁溝などは確認されず、性格不明遺構と言わざるを得ない。

SX (SB) 40 SX39 の南に位置する遺構で、西部のみが検出された。壁溝などは確認されず、性格不明遺構と言わざるを得ない。

C SX41・SB42・SX43・SX44

SX (SB) 41 第 3 面で検出された北部中央に所在する遺構である。西部は壁溝 SD46 と SD47 が存在し、東端部は壁の立ち上がり部分を部分的に確認された。これ以外に内部施設と認められる遺構はなく、竪穴建物として調査したが、性格不明遺構と判断された。

SB42 SX41 の東側に位置する竪穴建物で、東西方向で 548cm、南北方向で 453cm、深さは 13cm を測る。南東部は SB07 に切られる。壁溝や火処遺構などは不明であるが、SK30・SK24・P177・P178 が支柱穴となるだろう。

SX (SB) 43 SX41 と SB42 の南に存在する遺構で、SB42 に切られる。南東辺のみが検出された。支柱穴とみられる遺構もあるが、壁溝などは確認されず、性格不明遺構としておく。

SX (SB) 44 北部西端部に所在する遺構で、東半部のみが検出された。内部施設は不明な部分が多く、性格不明遺構と言わざるを得ない。

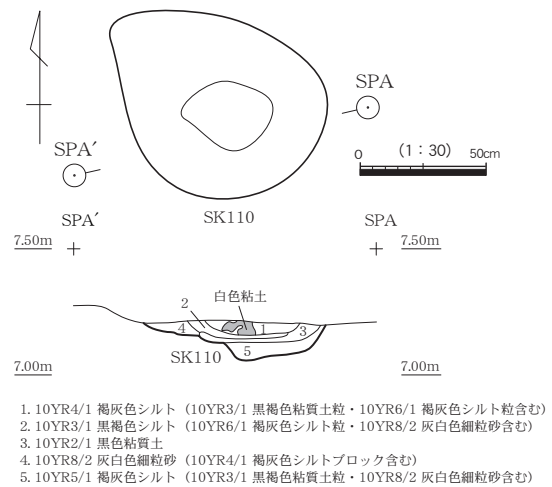
(2) 土坑

A SK110 (第 117 図)

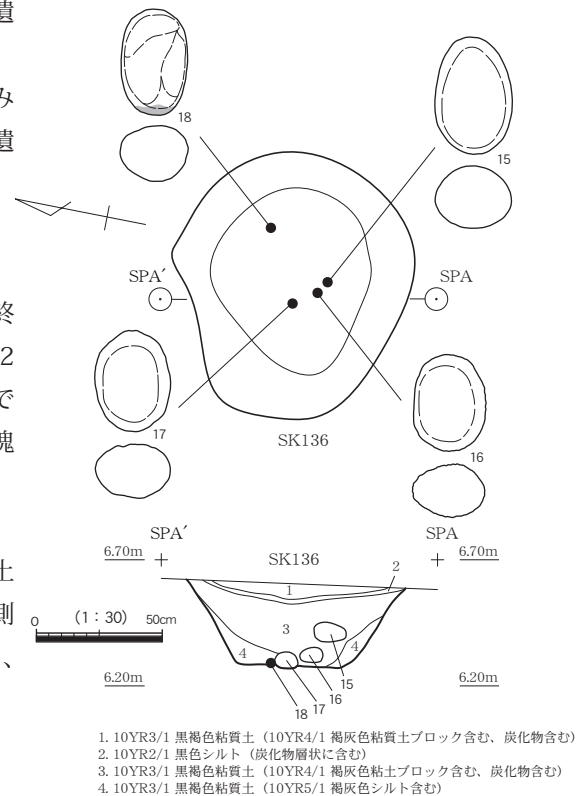
SK110 は SB42 の床面で検出された土坑であるが、最終的には SB42 のプランよりも外側に拡がることから SB42 とは関連しないと判断された。90cm × 70cm の楕円形で深さが 42cm を測る土坑である。埋土上部に白色粘土塊が点在していた。

B SK136 (第 118 図)

SK136 は NR01 の南に所在する第 3 面で検出された土坑である。105cm × 91cm の楕円形で深さが 40cm を測る土坑である。埋土上部に厚さ 2cm の炭化物層があり、埋土下部では円礫 4 個が出土した。



第 117 図 SK110 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 118 図 SK136 平面図・土層断面図 (S=1/50)

(3) 溝

A SD20

SD20は調査区北端部で西北西—東南東方向に走る溝で、第3面で検出された。幅は40cm、深さは15cmを測り、時期や性格は不明。

B SD21・SD22・SD23

北東—南西方向に直線的に平行して走る溝群で、幅は30cm前後、深さは10cm前後を測る。時期は不明。畑の畝溝の可能性が指摘される。

C SD24～SD27・SD67

北東—南西方向に走る溝SD24・SD26・SD27と北西-南東方向に走る溝SD25・SD67が交差し、平面形が井桁状に検出された溝群である。幅は30cm前後、深さは10cm前後を測る。時期は不明。畑の畝溝の可能性が指摘される。

D SD36～SD43・SD57・SD61・SD62

北北西—南南東方向に走る溝群と東北東—西南西方向に走る溝群が交差した溝群である。幅は30cm前後、深さは10cm前後を測る。時期は不明。NR01に排水する小溝または畑の畝溝の可能性が考えられる。

第6節 06C区

1 調査の経過と概要

重機によって表土および灰色砂・黄灰色砂・灰黄褐色シルトを除去し、南東部の高くなっている部分では褐灰色および黒色シルト上面で遺構検出を行ったが、褐灰色および黒色シルト層が極めて薄く、直に基盤とした黄灰色シルトに到達する地点もあった。そのため第1面とすべきE期の遺構と、第2面のB・C期の遺構が同一面で検出されているが、第2面遺構として図化した。001NR部分については、中～近世の包含層である第1層を除去した後、第2層上面で竪穴状遺構群を検出し、第2面遺構に含めた。その後褐灰色および黒色シルト層を除去して基盤面で遺構を確認するとともに、001NRの掘削を行い第3面とした。

2 第1面

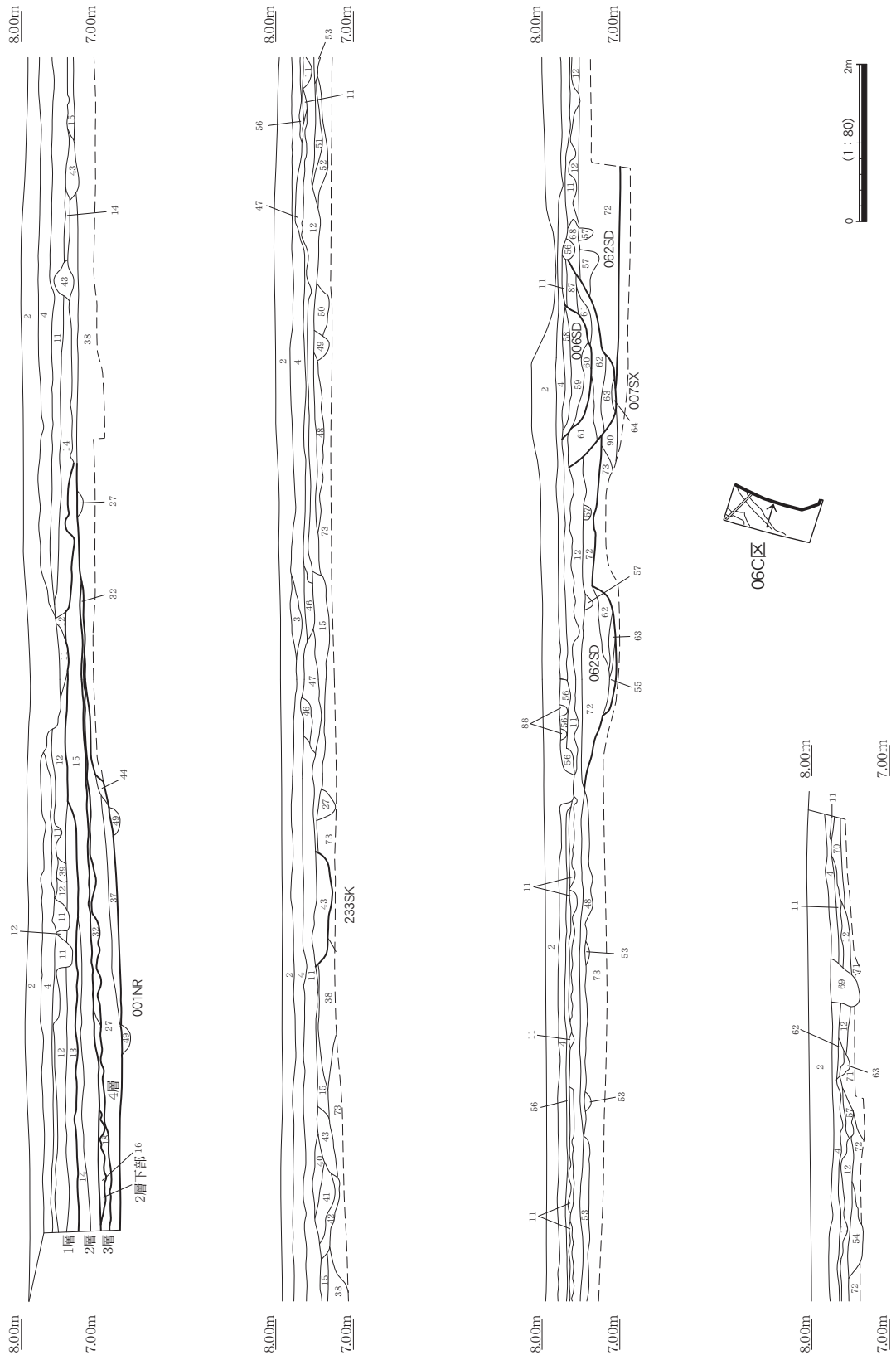
(1) 溝

調査区中央部東側を、北東—南西方向に走る002～005SDの4条の溝のみ検出されている。

3 第2面

(1) 竪穴状遺構・不明遺構(第121～126図)

008(SB)・009(SB)・010(SB)・011(SB)・012(SB)・013・014・016・029・030・031(SB)・032(SB)・040(SB)・043(SB)・045・133・148・276(SB)・281(SB)・282(SB)・283(SB)・284(SB)・285(SB)・286(SB) SXは調査区北東から南西にかけて連続する24基の竪穴状の落ち込みである。これらは全て深さ2～5cmと極めて浅く、堀肩も垂直に近いものは無く、全体に断面形が皿状を呈している。大きさは4～5mの大型のものと、2～3mの小型のものがあり、平面形は方形・長方形を呈する。また032SX・043SXでは壁周溝状の溝が検出されたが、極めて浅い。埋土は褐灰色シルト・砂もしくは黄灰色砂で、C期となる灰釉陶器・土師器が出土するが、下層の001NR第2層も同時期の遺物を包含しており、混入の可能性も考えられる。これらの遺構のうち15基は当初竪穴建物と認識していたが、上記の理由で建物跡とするには問題があり、竪穴状遺構・不明遺構とする。

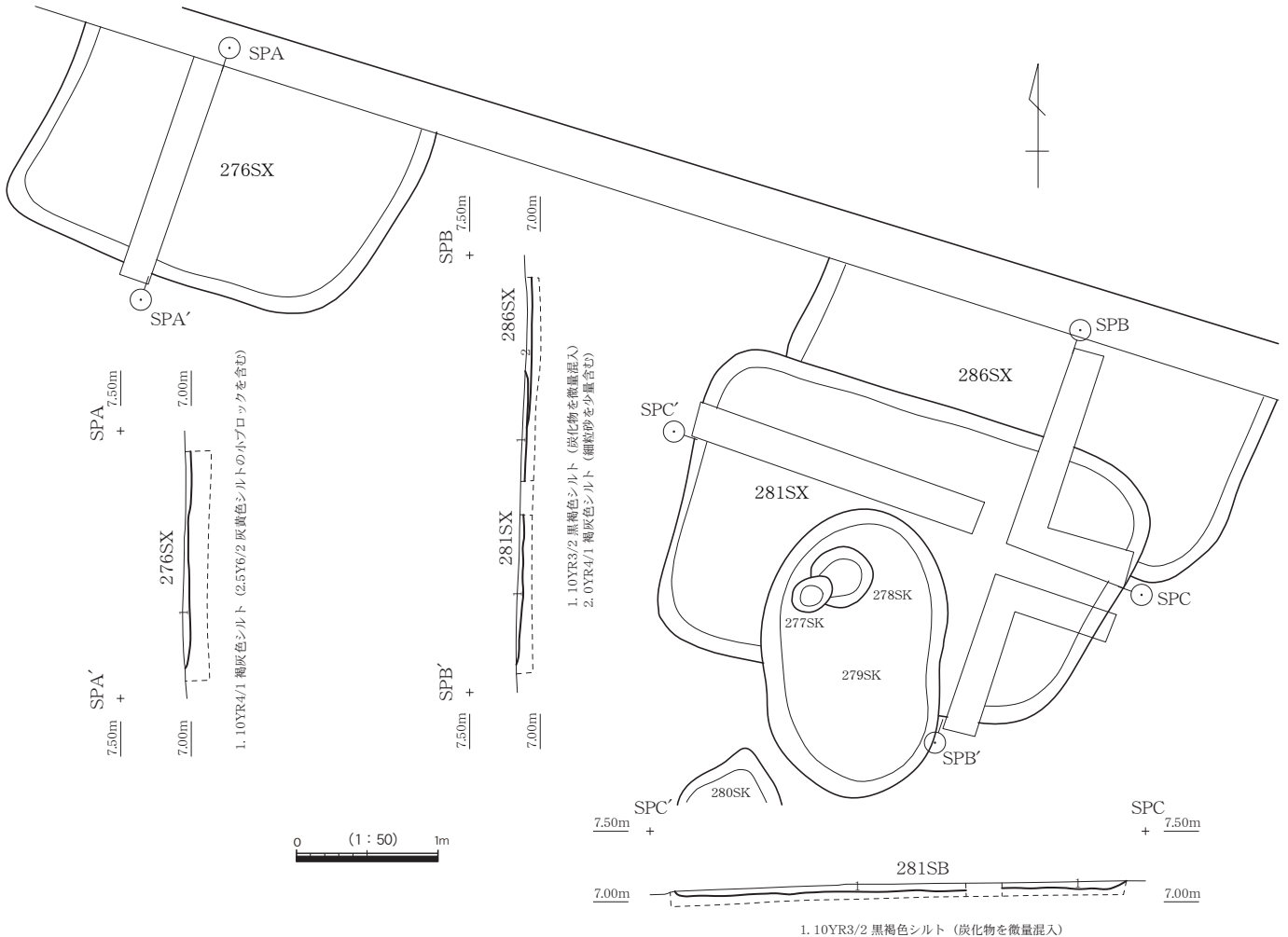


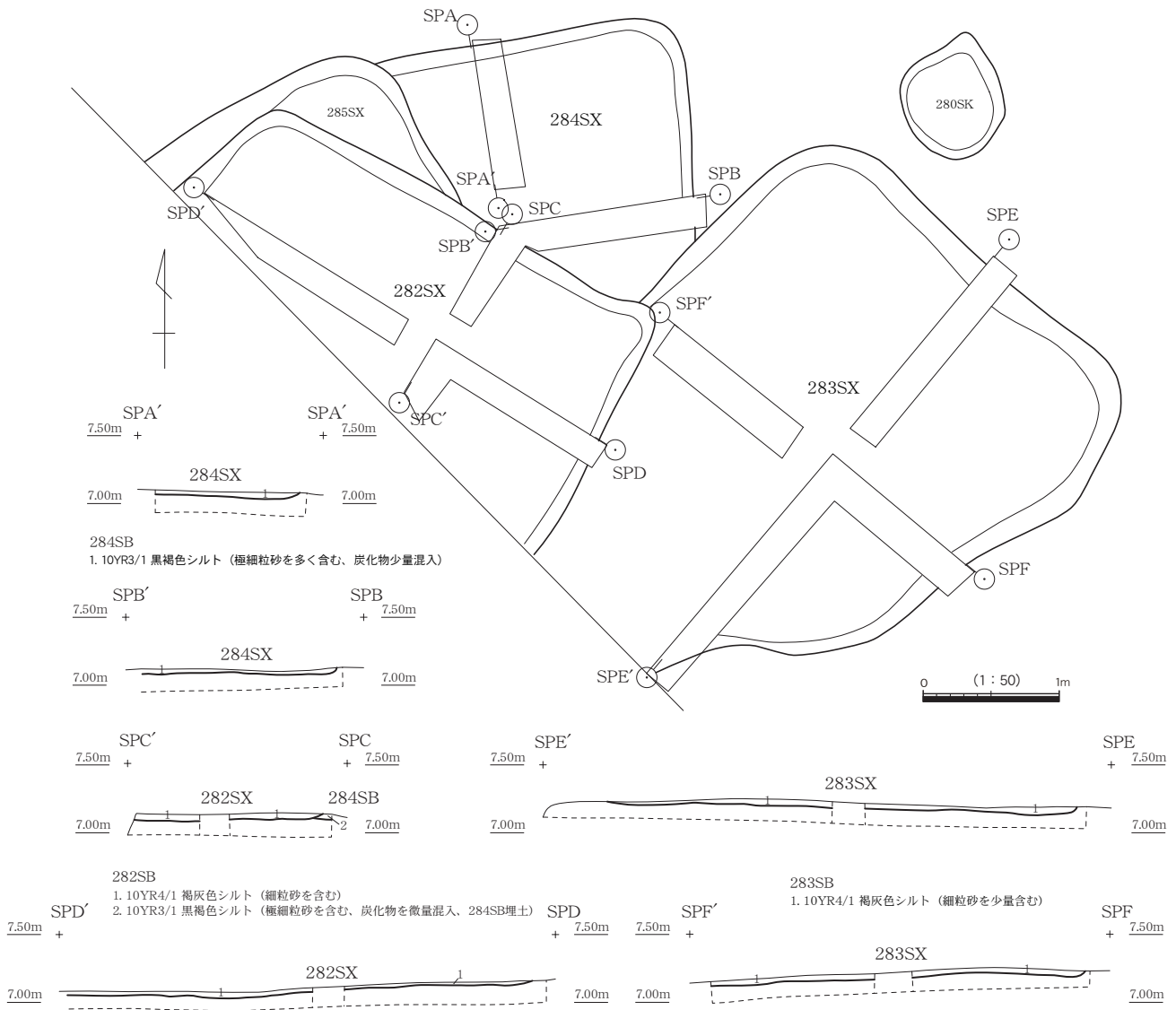
第 119 图 O6C 区東壁土層断面图 (S=1/80)

06C 区東壁

1. 5Y6/1 灰色極細粒砂 (小礫を含む)
2. 5Y5/1 灰色極細粒砂 (礫・コンクリート片・ビニール片混じる)
3. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂
4. 5Y5/1 灰色極細粒砂 (木片を若干含む)
5. 2.5Y5/2 暗黄灰色極細粒砂 (中粒砂～小礫を含む)
6. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (10YR3/1 黒褐色シルトブロックを含む、粗砂少量含む、客土か)
7. 5Y5/1 灰色極細粒砂 (極粗砂をわずかに含む)
8. 2.5Y4/2 暗黄灰色極細粒砂 (粗砂を含む)
9. 2.5Y5/2 暗黄灰色極細粒砂 (小礫を少量含む、鉄分の沈着目立つ)
10. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (細粒砂と小礫を含む)
11. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (鉄分の沈着目立つ、7.5Y8/1 灰白色粗砂含む)
12. 10YR4/1 褐灰色シルト (粗砂を少量混入)
13. 10YR4/1 褐灰色シルト (粗砂を少量含む)
14. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色極細粒砂のブロックを少量含む)
15. 7.5YR2/1 黒色シルト (炭化物を多く混入、土器片を多く含む、10YR3/1 黒褐色シルトブロック (2~5cm) を含む)
16. 10YR4/1 褐灰色極細粒砂 (18層を少量混入する、炭化物を少量含む)
17. 7.5YR2/1 黒色シルト (10YR4/1 褐灰色シルトブロックを多量に含む、土器片を多く含む、木片・炭化物を少量含む)
18. 2.5Y2/1 黒色シルト (上下の層をブロック状に大量に混入する、土器片を多く含む、粘性強い)
19. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (木材・植物繊維を多量に含む、大型の炭化物を少量含む、下に5Y5/1 灰色の細粒砂を混入する)
20. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト (木材・植物繊維を多く含む、少量の炭化物を含む、粘性強い)
21. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (炭化物をわずかに混入)
22. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (色調は21層よりやや明るい、5B7/1 明青灰色中粒砂をやや多く含む)
23. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (5B7/1 明青灰色中粒砂を含む)
24. 10YR4/1 褐灰色シルト (下位で2.5Y6/1 灰色細砂を含む)
25. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (微量の炭化物を含む)
26. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (色調は25層よりやや明るい+5Y8/2 灰白色細粒砂+2.5Y8/1 灰白色細粒砂互層)
27. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y6/1 灰色+2.5Y8/1 灰白色細粒砂やや互層状)
28. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y6/1 灰色+2.5Y8/2 灰白色細粒砂+2.5Y8/1 灰白色細粒砂互層)
29. 5Y4/1 灰色シルト (2.5Y6/1 灰色+5Y4/1 灰白色細粒砂やや互層状)
30. 5Y5/1 灰色極細粒砂 (混入物は見られない、互層状)
31. 10YR5/2 暗黄褐色極細粒砂 (炭化物をやや多く含む、土器片の混入目立つ)
32. 2.5Y4/2 暗黄褐色極細粒砂 (下位で27層のブロックの混入目立つ、炭化物をやや多く含む)
33. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (炭化物を少量含む)
34. 2.5Y4/2 暗黄褐色極細粒砂 (角礫を多量含む)
35. 5Y5/1 灰色極細粒砂
36. 10YR3/1 黒褐色シルト (18層土を縞状に混入する、微量の炭化物を含む)
37. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
38. 5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂
39. 2.5Y5/2 暗黄褐色細粒砂
40. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (細粒砂をやや多く混入する)
41. 2.5Y5/2 暗黄褐色シルト (細粒砂をやや多く含む)
42. 2.5Y4/2 暗黄褐色中粒砂 (粗粒砂を少量混入し、微量の炭化物を含む)
43. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (11層・15層土をモザイク状に含む)
44. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (27層土をブロック状に混入する、炭化物を微量含む)
45. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (微量の炭化物を含む、275SD埋土)
46. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (小礫と炭化物を微量含む)
47. 10YR5/1 褐灰色シルト (ブロック状に細粒砂を含む)
48. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (下位で中粒砂を多く含む)
49. 10YR5/1 褐灰色シルト (中粒砂をやや多く含む)
50. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (下位で中粒砂を多く含む)
51. 2.5Y6/2 灰黄色粗粒砂
52. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂 (粗粒砂縞状に入る)
53. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (中～細粒砂の混入目立つ)
54. 5Y6/1 灰色粗粒砂
55. 2.5Y5/2 暗黄褐色粗粒砂 (細粒砂を縞状に混入する、鉄分の沈着目立つ)
56. 2.5Y4/2 暗黄褐色極細粒砂 (粗粒砂・小礫を混入する、客土か)
57. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂混入・小礫を含む)
58. 10YR6/6 明黄褐色中粒砂 (極細粒砂混入、鉄分の沈着顕著、互層状)
59. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂 (中粒砂を混入する、互層状)
60. 2.5Y7/1 灰白色中粒砂 (極粗粒砂を多く含む)
61. 5Y6/1 灰色極細粒砂
62. 2.5Y5/2 暗黄褐色 (極細粒砂細～中粒砂を多く含む、やや互層状)
63. 2.5Y5/2 暗黄褐色極細粒砂 (鉄分の沈着目立つ、互層状)
64. 2.5Y5/2 暗黄褐色極細粒砂
65. 2.5Y5/2 暗黄褐色シルト (細粒砂・小礫を混入する)
66. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (粗粒砂～小礫を混入する)
67. 10YR5/2 暗黄褐色極細粒砂
68. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂
69. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂
70. 10YR5/2 暗黄褐色極細粒砂
71. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂
72. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂
73. 2.5Y6/2 灰黄色粗粒砂
74. 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 (18層土を縞状に混入する、炭化物を微量含む)
75. 10YR4/1 褐灰色極細粒砂 (下層の土をブロック状に含む、炭化物を少量含む)
76. 5B7/1 青灰色極細粒砂
77. 10YR4/1 褐灰色シルト
78. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
79. 10YR4/1 褐灰色シルト (2.5Y2/1 黒色粘性土含む)
80. 5B7/1 青灰色極細粒砂 (10YR4/1 褐灰色シルト含む)
81. 10YR4/1 褐灰色シルト
82. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
83. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
84. 2.5Y8/1 灰白色粗粒砂
85. 2.5Y2/1 黒色シルト (5B7/1 明青灰色中粒砂ブロック (2~3cm) を多く含む、粘性強い)
86. 10YR4/1 褐灰色シルト (粘性強い)
87. 5Y5/1 灰色極細粒砂
88. 5Y4/1 灰色極細粒砂
89. 5B7/1 明青灰色中粒砂
90. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y6/2 灰黄色粗粒砂ブロック (5~10cm) を含む)

第 120 図 06C 区東壁土層断面土色





第 122 図 282SX・283SX・284SX 土層断面図 (S=1/50)

(2) 土坑

A 028SK (SX) (第 126 図) 長径 544cm、短径 428cm、深さ 57cm を測る大型の土坑で、020SD と南西部で接続する。時期については、出土遺物は C 期のものが圧倒的に多いが、一部近世陶磁器がみられるので、E 期としたい。

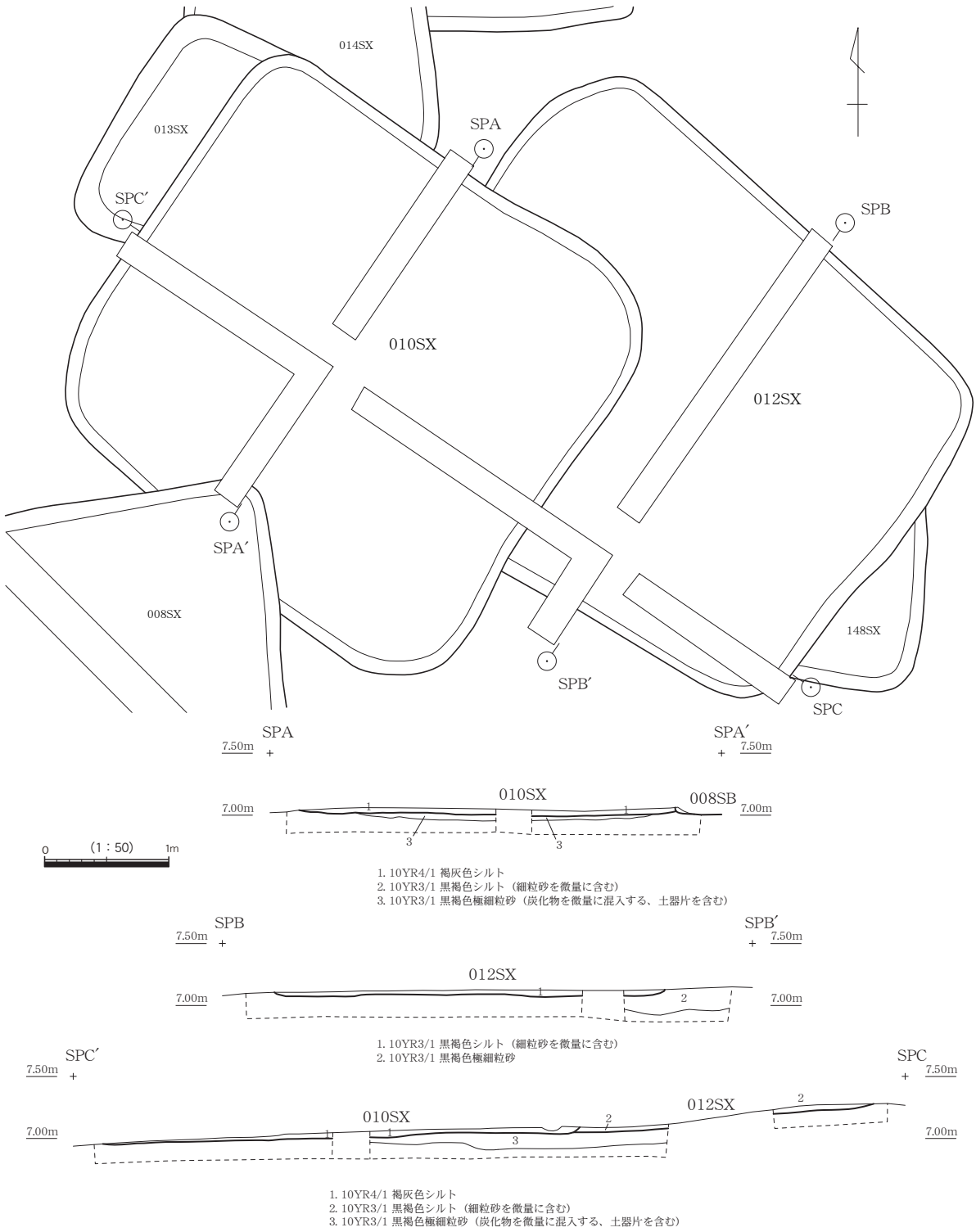
B 070SK (SX) 長径 471cm、短径 380cm、深さ 16cm を測る浅い不定形な土坑。時期は C 期か。

C 136・140 (SX) SK 調査区中央東端に並ぶ長径 80～130cm、深さ 10～20cm を測る土坑で、C 期の須恵器・灰釉陶器・甕形土器が出土する。両土坑の間にある 137SK も同様のものの可能性がある。

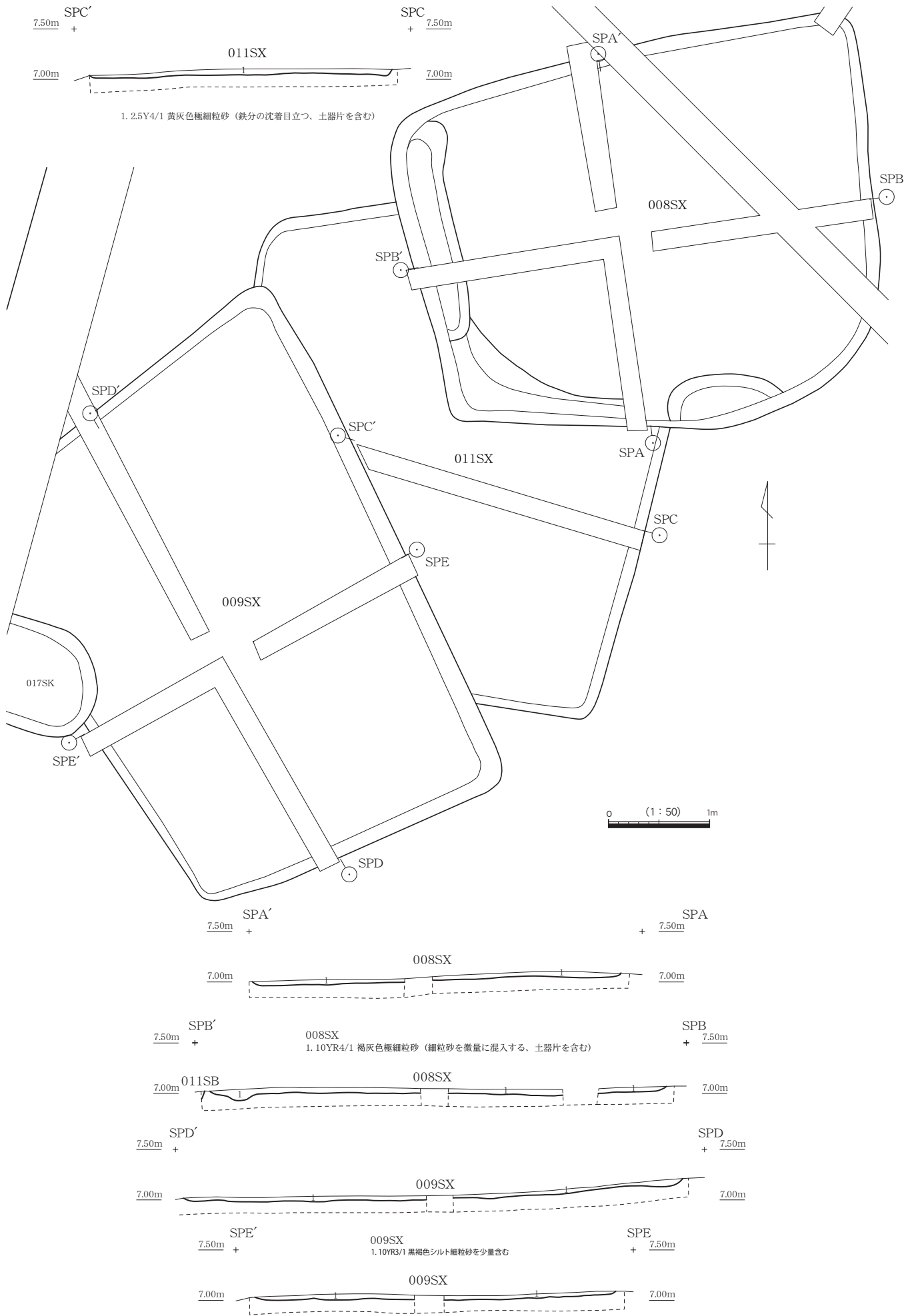
(3) 溝

A 006・007SD 調査区の南東隅を北東から南西方向に走る、幅約 300cm の溝で、007SD が再掘削されて 006SD が作られている。時期は E 期。

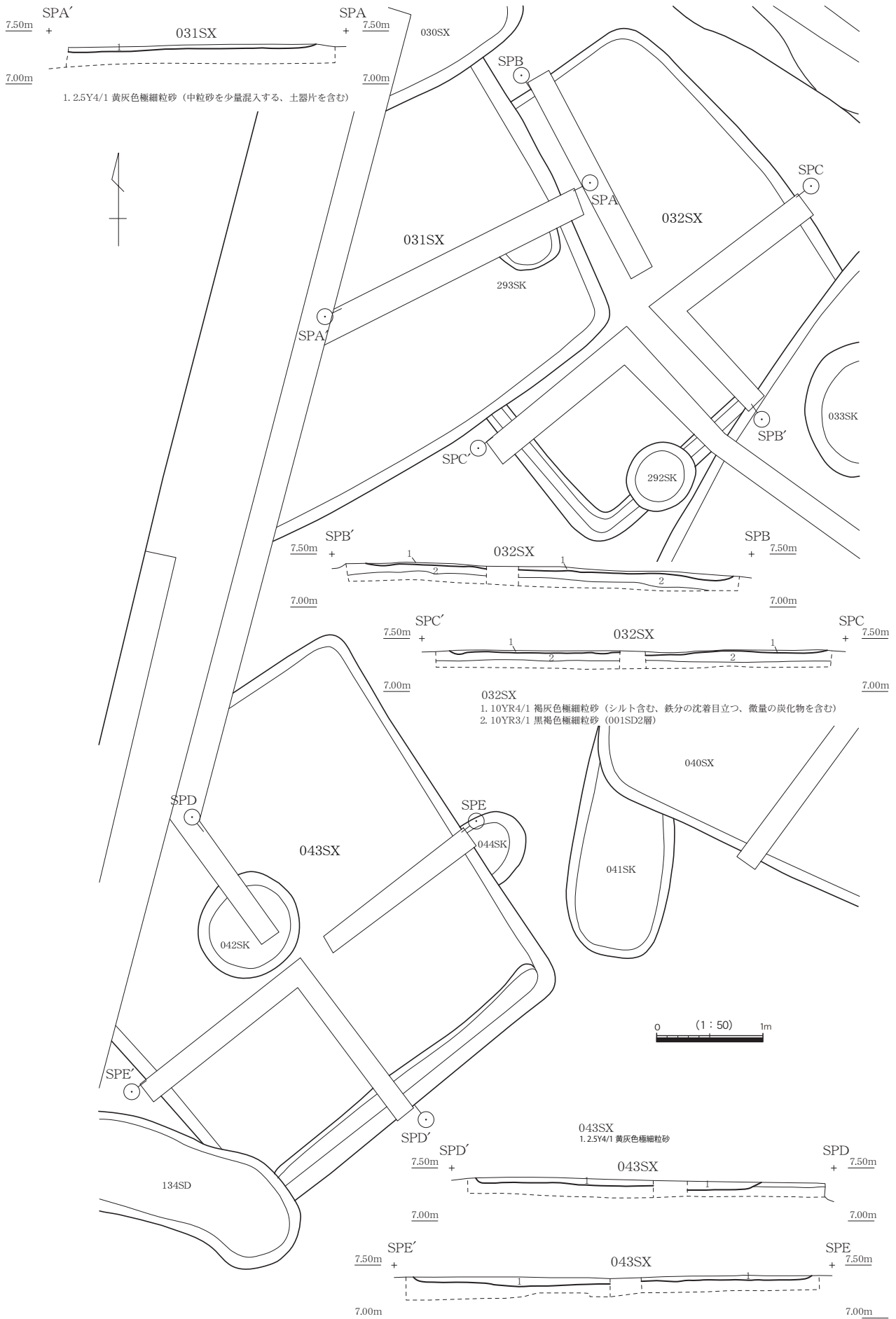
B 020SD 幅約 248cm、深さ約 57cm を測る溝。断面形は東側が台形で、西にいくに従い V 字形を呈するようになる。古代 C 期土器のみしか出土していないが、028SK との関係をかんがえると出土



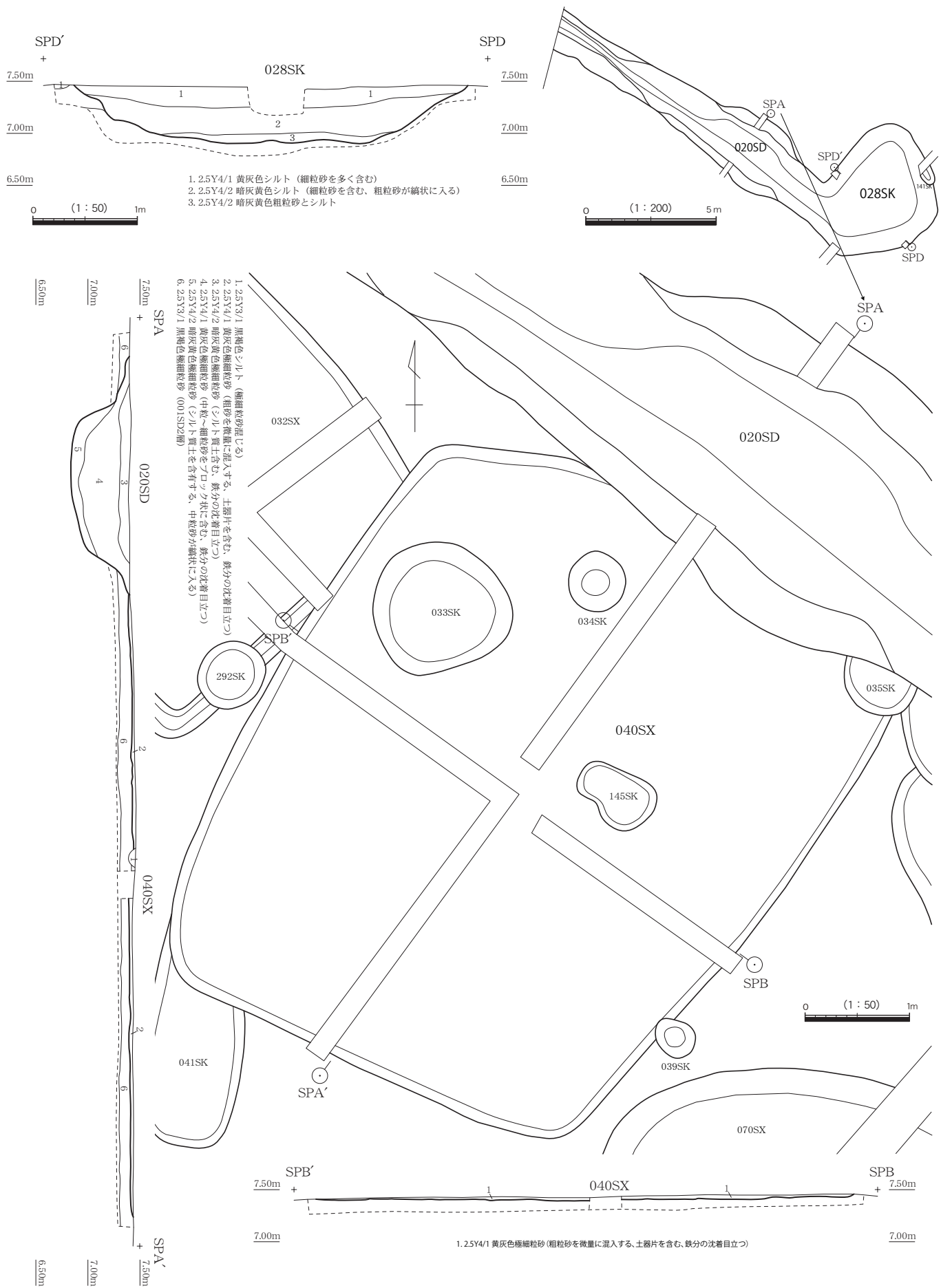
第 123 図 010SX・012X 土層断面図 (S=1/50)



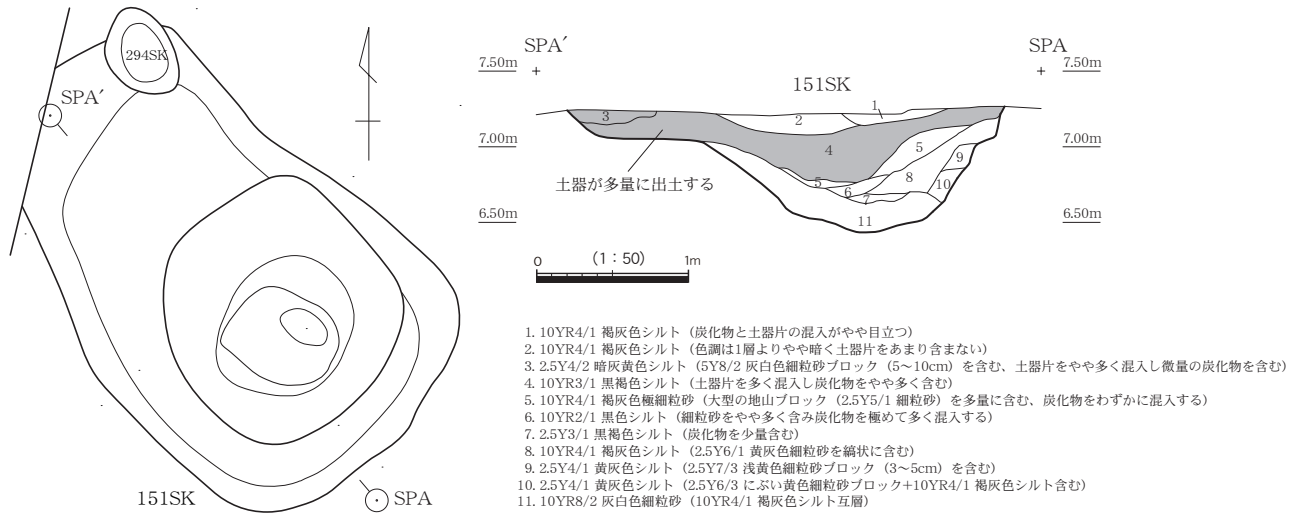
第 124 図 008SX・009SX・011SX 土層断面図 (S=1/50)



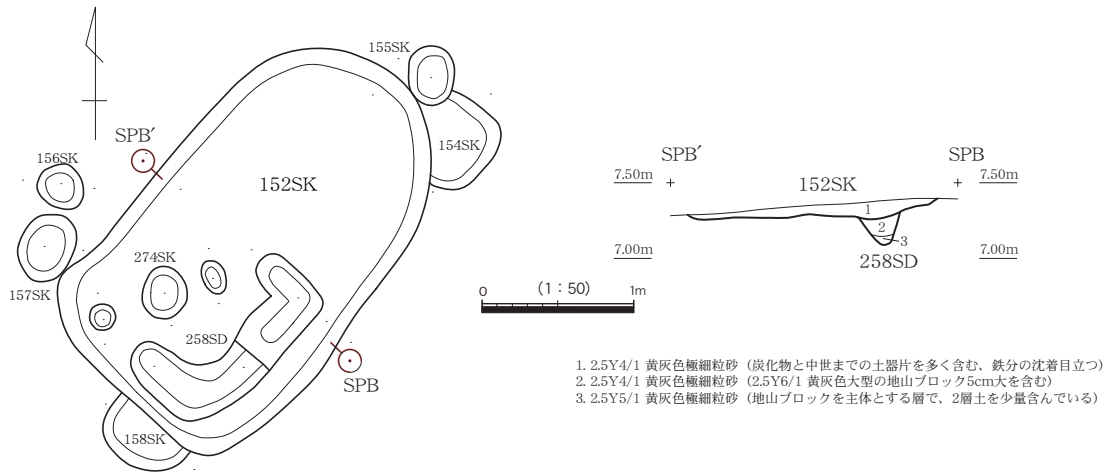
第 125 図 031SX・032X・043SX 土層断面図 (S=1/50)



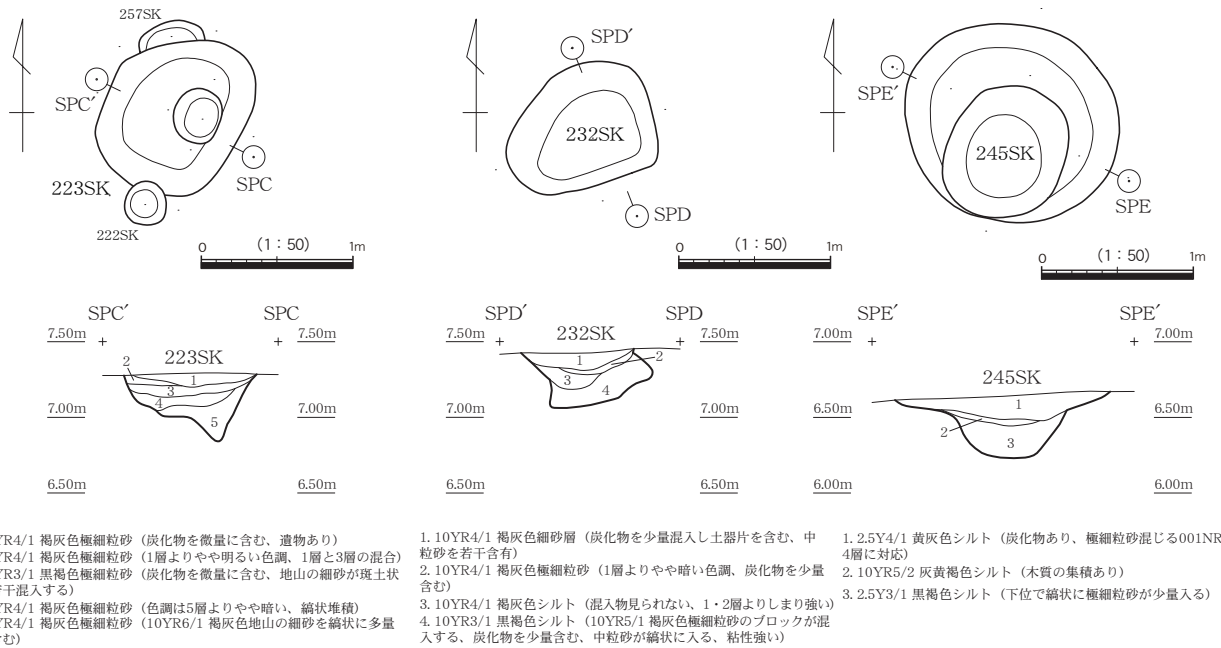
第 126 図 020SD・028SK・040SX 土層断面図 (S=1/50)



第 127 図 151SK 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 128 図 152SK 平面図・土層断面図 (S=1/50)



第 129 図 223SK・232SK・245SK 平面図・土層断面図 (S=1/50)

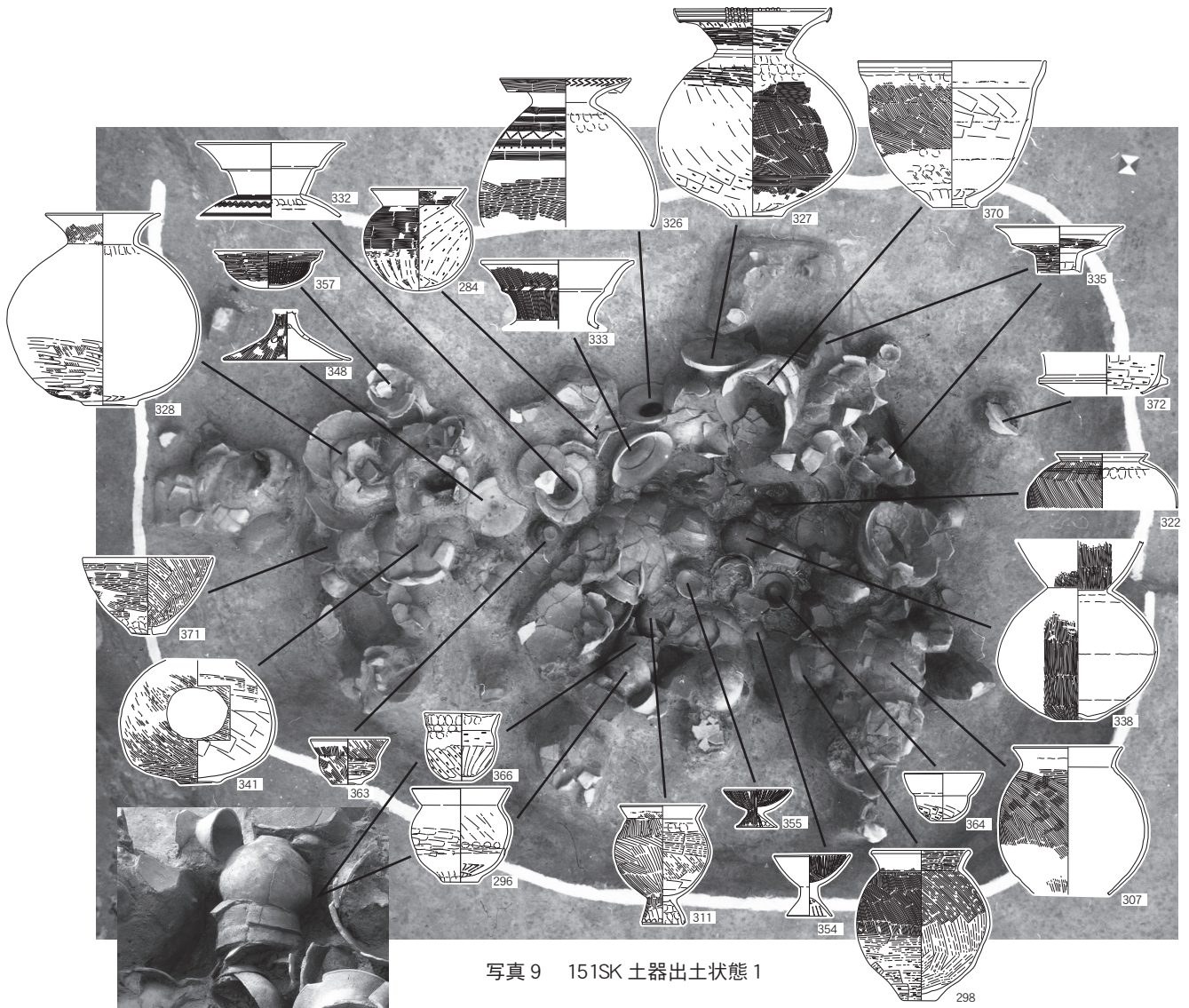


写真9 151SK 土器出土状態1

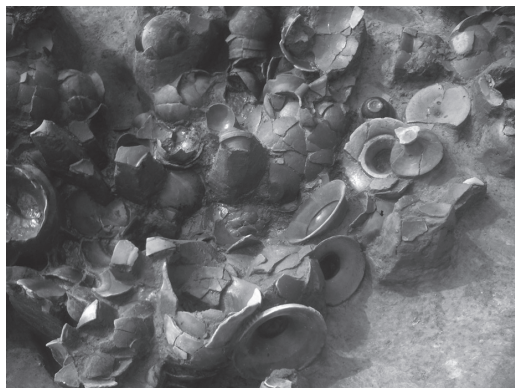


写真10 151SK 土器出土状態2

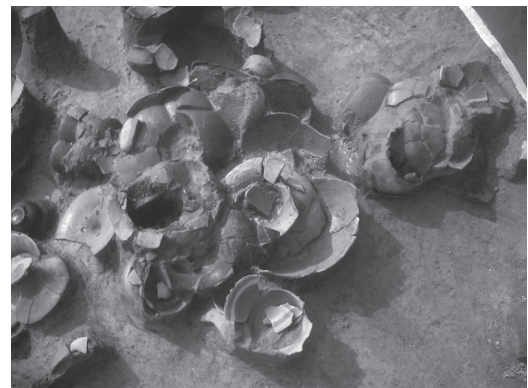


写真11 151SK 土器出土状態3



写真12 151SK 土層断面

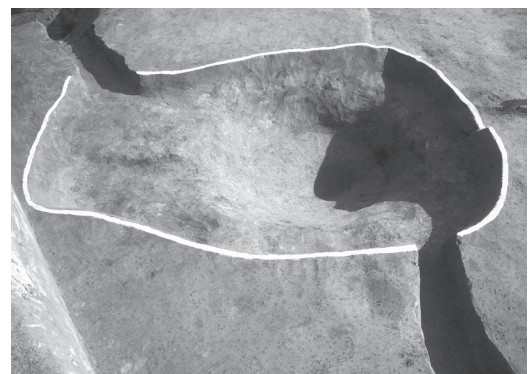


写真13 151SK 完掘状態

時期はE期か。

C 049・134・161・181SD 049・134・161SD
は第2面で検出された溝で、深さ4～8cmの
浅く、北東から南西及びそれにほぼ直交するよ
うに走る。また第3面で検出された溝であるが
181SDも同様な形態をもつ。時期はC期。

4 第3面

(1) 土坑

A 151SK (SX) (第127・写真9～13図) 長
径328cm、短径208cm、深さ20cmを測る長
方形の土坑で、南東部分でさらに径60cm、深さ
60cmの大きさで落ち込む。遺構埋土は、落ち込
み部の最下層が基盤層と類似する灰白色砂で、そ
の上層に褐色・黄灰色・黒褐色・黒色シルトが
交互に堆積した後、土坑中位から上位にかけて堆
積する黒褐色シルト内より大量の土器が出土し
た。これらの土器群は、土坑南東部の落ち込みが
中位まで埋まり、凹み状を呈している状況で廃棄
されており、出土状態からみると極短期間のうち
に廃棄が行われたと考えられる。土器の器種は
壺・甕・鉢・器台など特定のものに偏らず、完
形及び遺存状況の良い土器が多い。また体部穿孔
壺(341)も出土している。時期はB-1期。

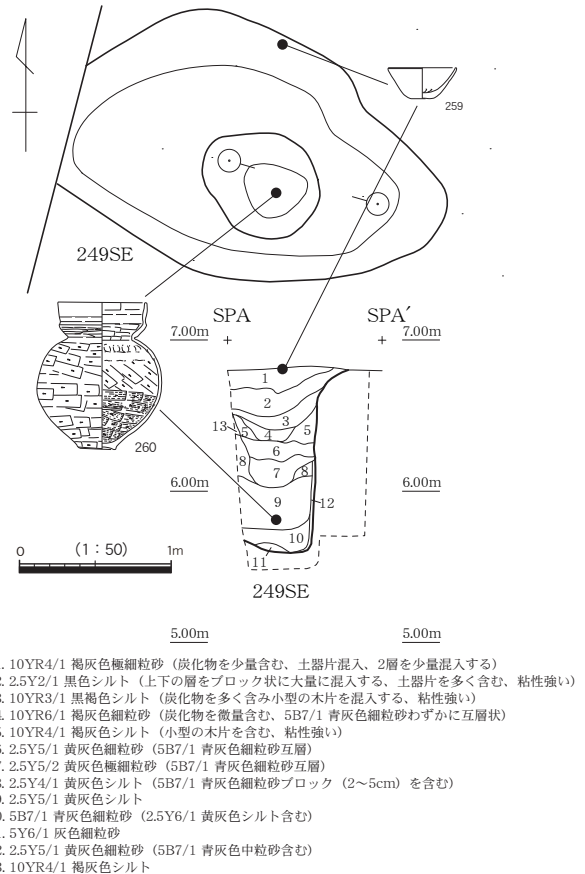
B 237 (SX)・247 (SX)・248SK 001NRの肩から緩斜面にある不定形な土坑で、大きさは300～
450cmjと大きい、深さは7～15cmと浅い。時期はB-1期。

(2) 井戸

A 249SE (SX) (第130図) 001NRの肩から緩斜面で検出され、一部は西壁にかかる。検出時の大
きさは長径255cm、短径164cmを測り、平明形は楕円形を呈する。土坑中央部よりやや東側で長
径80cm、短径68cmの円形にさらに約100cm落ち込み、断面形は漏斗状を呈する。西壁土層断面
をみると、上端はさらに斜め上方に広がり、明瞭な漏斗状になることが判る(第133図)。底面より
20cm程上で、完形の壺(260)が出土している。また上層には001NRから続く黒色シルトが流れ
込んだような状態で堆積しており、001NR3層堆積時には既に井戸として機能しておらず、凹地
になっていたと考えられる。時期はB-1期。

(3) 溝

A 239・258・262・273・275・276・277・278・279SD 調査区北東部で、北西から南東方向に約
200cmの等間隔で並列する溝群。幅は30～50cm、深さは5～10cmを測る。時期はC期か。



第130図 249SE平面図・土層断面図 (S=1/50)

第6節 05B区 NR01・05B区 NR02・06C区 001NR

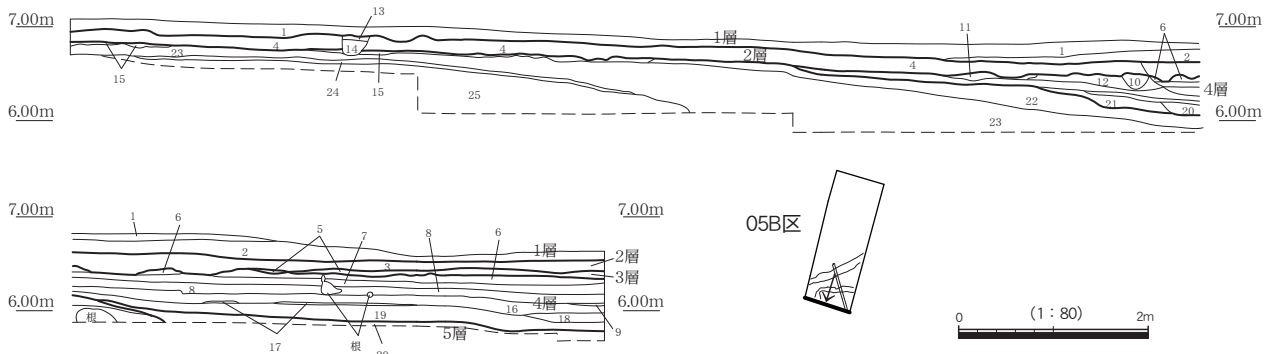
1 05B区 NR01

A NR01 重機による掘削により表土及び黄灰色砂、灰黄褐色シルトを除去し、さらに河道の最上層にわずかに堆積する褐灰色粘質土についても同時に掘削した。この最上層の褐灰色粘質土層のうち重機で取りきれなかった部分を1層とし人力で掘削した。その後トレンチを掘削し、SU02・03を含む黒色粘質土・黒褐色粘質土層を2層とし、その下位の土器・木製品・木材を多量に含む暗褐色粘質土・褐灰色粘質土層を3層、さらにその下層で土器・木製品・木材が出土する褐灰色・黒褐色粘質土・砂層を4層とし、さらにその下層で遺物が少なくなる褐灰色シルト・暗褐色粘質土層を5層として順次掘削していった。各層の時期は、1層がC期、2～5層がB-1期になる。

NR01は基本的に東北東から南西方向に走るが、3層堆積時と5層堆積時では流路の形態が変化している。3層堆積時には流路は東北東から西南西方向に向いており、調査区内で南西に振れることはなく、河幅も東側の約15mに対し、西側では約7.5mと半分程になっている。河道の深さは約120cmであるが、また河幅が狭まったことからか、断面形が東側では逆台形を呈するのに対し、西側にいくに従いV字形に近くなり、斜面も急になる。また東側では中央部が中州状に高くなっており、北は10～20cm、南は50～80cm低くなる。特に南側は斜面に沿って溝が走るような状況を呈する。この中州状の高まりは4層には既に形成されていたようであるが、掘削時には検出できず土層断面の観察によって確認している(第92図)。4・5層堆積時には河道は西部で南及び南西に屈曲した形状をしており、3層堆積までの間に直線的な形状に変化している。ただし河道南肩は06C区の調査で河道内の緩斜面端であることが判明している。

木製品・木材は3層掘削時に多量に出土している。3層出土のものとは4層出土のものは河道中央部では概ね区分できたが、斜面際については混在している可能性がある。また製品と材だけではなく、木屑類も多数出土しており、加工痕のあるものも含まれる。

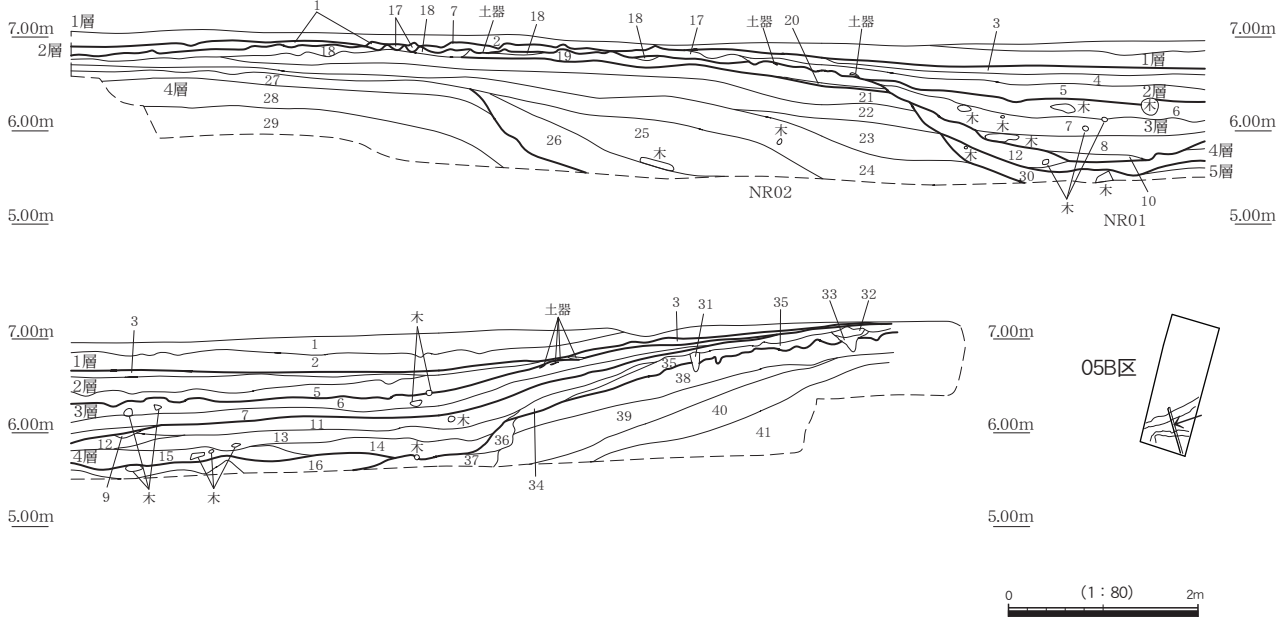
3層出土の木製品・木材分布をみると、大きく東西2ヶ所に分かれる。東側は杭列A付近が特に濃



05B区南壁

- 1. 10YR4/1 褐灰色粘質土
- 2. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (植物繊維少量含む)
- 3. 10YR2/1 黒色粘質土 (木片・植物繊維含む)
- 4. 10YR2/1 黒色粘質土 (10YR6/2 灰黄褐色粘質土ブロック・10YR6/1 褐灰色シルトブロック多く含む)
- 5. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (木材・植物繊維多量に含む)
- 6. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土粒少量含む、部分的に炭化物層状に含む木材含む)
- 7. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (木材含む)
- 8. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR7/1 灰白色細粒砂、部分的に筋状に含む木材少量含む)
- 9. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色細粒砂含む、部分的に10YR7/1 灰白色粗粒砂ブロック状に含む)
- 10. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土粒含む)
- 11. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土粒少量含む)
- 12. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土粒、炭化物含む)
- 13. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR2/1 黒色粘質土ブロック少量含む)
- 14. 10YR2/1 黒色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む)
- 15. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR8/2 灰白色シルト含む、炭化物少量含む)
- 16. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む、木材少量含む)
- 17. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む、炭化物を層状に含む)
- 18. 10YR5/1 褐灰色細粒砂 (10YR7/1 灰白色粗粒砂・10YR8/2 灰白色極粗粒砂含む・10YR4/1 褐灰色シルト筋状に含む)
- 19. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む、部分的に10YR7/1 灰白色粗粒砂ブロック状に含む)
- 20. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色シルト・10YR6/1 褐灰色細粒砂ブロック状に含む、10YR7/1 灰白色粗粒砂筋状に含む)
- 21. 10YR5/1 褐灰色シルト (N4/0 灰色シルト含む)
- 22. N6/1 灰色シルト (10YR7/1 灰白色細粒砂含む)
- 23. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む)
- 24. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR 8/2 灰白色細粒砂含む)
- 25. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR6/1 青灰色シルト・10YR4/1 褐灰色粘質土含む、10YR3/1 黒褐色粘質土粒少量含む)

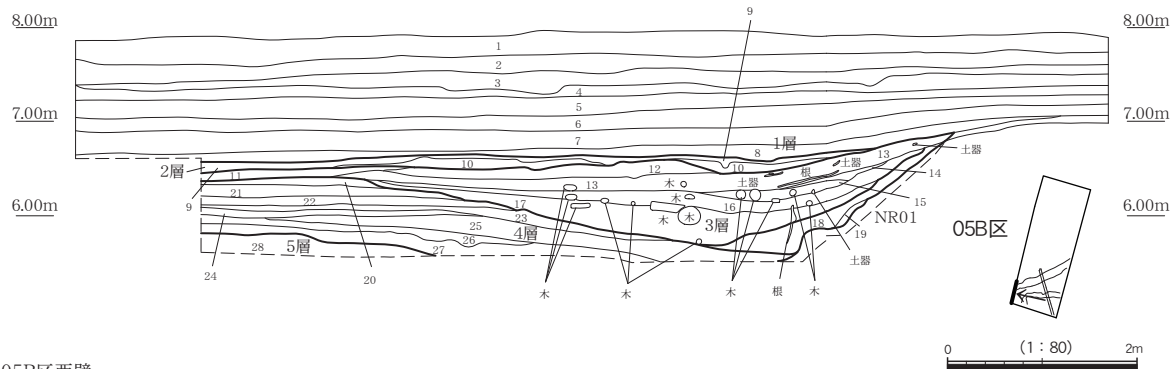
第131図 05B区南壁土層断面図 (S=1/80)



05B区NR01南北

1. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土
4. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (植物纖維少量含む)
5. 10YR2/1 黒色粘質土 (木片、植物纖維含む)
6. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (木材、植物纖維多量に含む)
7. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (木材含む、部分的に炭化物層状に含む)
8. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (木材含む)
9. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む)
10. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土少量含む、木材含む)
11. 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 (木材・炭化物含む、部分的に炭化物層状に含む)
12. 10YR5/1 褐灰色シルト (木材含む)
13. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (木材・炭化物含む)
14. 10YR4/1 褐灰色シルト (木材片含む、10YR6/1 褐灰色・10YR8/2 灰白色細粒砂含む)
15. 10YR5/1 褐灰色細粒砂 (10YR4/1 褐灰色シルト含む、木片・炭化物含む)
16. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色シルト・10YR8/2 灰白色中粒砂・10YR7/1 灰白色細粒砂含む、木片少量含む、小礫 (小石) 含む)
17. 10YR2/1 黒色粘質土 (10YR6/2 灰黄褐色粘質土ブロック・10YR6/1 褐灰色シルトブロック含む)
18. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR8/2 灰白色シルト、炭化物少量含む)
19. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む)
20. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR8/2 灰白色シルト含む)
21. 10YR6/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む、10YR3/1 黒褐色粘土粒少量含む)
22. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト・10YR 8/2 灰白色シルト含む)
23. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト・10YR8/2 灰白色シルト・10YR8/2 灰白色細粒砂含む)
24. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト・10YR8/2 灰白色シルト・10YR8/2 灰白色細粒砂・10YR4/1 褐灰色粘質土・10YR3/1 黒褐色粘質土含む)
25. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR8/2 灰白色シルト・10YR3/1 黒褐色粘質土を塊状に含む)
26. 上部に10YR5/1 褐灰色シルト・10YR8/2 灰白色シルト・10YR6/1 褐灰色シルト塊状に含む、下部に10YR5/1 褐灰色粘質土含む
27. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR8/2 灰白色シルト含む)
28. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルトブロック・10YR4/1 褐灰色粘質土含む)
29. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR8/2 灰白色細粒砂塊状に含む)
30. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色粘質土ブロック・10YR8/2 灰白色細粒砂ブロック含む、木片含む)
31. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む)
32. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR6/1 褐灰色シルト粒含む)
33. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック含む)
34. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト含む)
35. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR3/1 黒褐色粘土粒含む、炭化物少量含む)
36. 10YR6/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト含む)
37. 10YR6/1 青灰色シルト (10YR7/1 灰白色細粒砂含む)
38. 10YR6/1 褐灰色シルト・10YR6/1 青灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む)
39. 10YR6/1 褐灰色シルト・10YR6/1 青灰色シルト
40. 10YR6/1 青灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト (青灰色シルトの中に10YR8/2 灰白色シルト含む)
41. 10YR8/2 灰白色細粒砂 (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR6/1 青灰色シルト含む)

第 132 図 05B 区 NR01 南北土層断面図 (S=1/80)



05B区西壁

1. 2.5Y5/1 黄灰色土 (小礫含む)
2. 2.5YR6/2 灰黄色土 (小礫含む)
3. 2.5Y5/2 暗黄灰色土 (10YR6/1 褐灰色粗粒砂を層状に含む)
4. 10YR6/2 灰黄褐色シルト (小礫含む)
5. 10YR6/1 褐灰色粘質土
6. 10YR5/1 褐灰色粘質土
7. 10YR4/1 褐灰色粘質土
8. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (植物纖維少量含む)
9. 10YR2/1 黒色粘質土 (木片・植物纖維含む)
10. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (10YR 5/1 褐灰色粘土粒・10YR7/1 灰白色細粒砂少量含む、炭化物少量含む)
11. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (木材・植物纖維多量に含む)
12. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (10YR7/1 灰白色細粒砂ブロック少量含む)
13. 7.5YR4/1 褐灰色シルト (10YR5/1 褐灰色粘土ブロック・10YR7/1 灰白色細粒砂ブロック少量含む、炭化物・木材含む)
14. 10YR5/1 褐灰色シルト (10YR6/1 褐灰色シルト含む、炭化物含む)
15. N4/0 灰色シルト (10YR5/1 褐灰色シルトブロック含む、炭化物・木材含む)
16. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色粘土ブロック・10YR7/1 灰白色細粒砂少量含む、木材・炭化物含む)
17. 7.5YR4/3 褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色粘質土・10YR5/1 褐灰色粘質土ブロック含む、木材・炭化物含む)
18. 7.5YR4/3 褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルトブロック含む、10YR7/1 灰白色細粒砂筋状に含む、木材含む)
19. N4/0 灰色シルト (10YR7/1 灰白色細粒砂含む)
20. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR3/1 黒褐色粘質土粒少量含む、部分的に炭化物層状に含む、木材含む)
22. 10YR5/1 褐灰色粘質土 (10YR7/1 灰白色細粒砂部分的に筋状に含む、木材少量含む)
21. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (木材含む)
23. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (10YR6/1 褐灰色細粒砂含む、部分的に10YR7/1 灰白色粗粒砂ブロック状に含む)
24. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト少量含む、木材少量含む)
25. 10YR3/2 黒褐色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト・10YR 6/1 褐灰色細粒砂・10YR7/1 灰白色粗粒砂・10YR8/2 灰白色極粗粒砂混じる)
26. 10YR5/1 褐灰色細粒砂 (10YR7/1 灰白色粗粒砂10YR8/2・灰白色極粗粒砂含む、10YR4/1 褐灰色粘質土筋状に含む)
27. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 (10YR5/1 褐灰色シルト含む、部分的に10YR7/1 灰白色粗粒砂ブロック状に含む)
28. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (10YR4/1 褐灰色シルト・10YR6/1 褐灰色細粒砂ブロック状に含む、10YR7/1 灰白色粗粒砂筋状に含む)

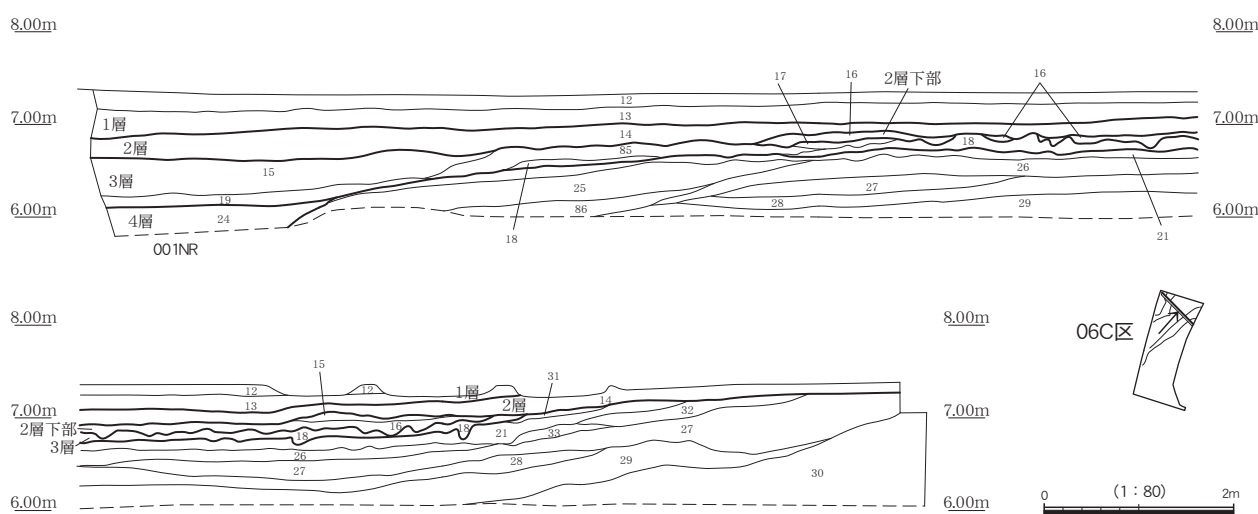
第 133 図 05B 区 NR01 西壁土層断面図 (S=1/80)

密に分布し、杭列Aによって木製品・木材が滞留したような状況も推定できる。西側についても杭列B・C付近に集中する傾向がみられる。また南東斜面部では机(W-186)と管玉(S-4・6)が近接して出土している。さらにその下位の4層になるが、南西側に近接して皿(W-016)と不明木製品(W-159)が出土している。杭列Bの北斜面付近では大型建築材やガラス小玉・管玉が出土する(第137～140図)。

B SU02・03(第142図) SU02はNR01北斜面に沿って、SU03は南緩斜面から南斜面にかけて出土した土器集積である。両集積とも2層の黒色粘質土及びその下層の黒褐色粘質土から出土する。

SU02は大きく東と西に分かれて分布するが、東部については斜面下まで廃棄が続いており、下位では3層上部の遺物と明瞭な区別をすることができず、遺物取り上げに際しては一部混在した可能性がある。またSU02東部の下位と西部では遺物の遺存状況は良好であったが、東部上位の河道肩付近では細片のものが目立った。

C 杭列A・B・C(第143・144図) 河道内で3列(A～C)、緩斜面部で1列(D)の杭列を検出した。



06C区001NR東西

1. 5Y6/1 灰色極細粒砂 (小礫を含む)
2. 5Y5/1 灰色極細粒 (砂礫・コンクリート片・ビニール片混じる)
3. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂
4. 5Y5/1 灰色極細粒砂 (木片を若干含む)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (中粒砂～小礫を混入する)
6. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (10YR3/1 黒褐色シルトブロックを含む、粗砂少量混入、客土か)
7. 5Y5/1 灰色細粒砂 (粗砂をわずかに含む)
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (粗砂を含む)
9. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (小礫を少量混入、鉄分の沈着目立つ)
10. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (細粒砂と小礫を含む)
11. 10YR4/2 暗黄褐色シルト (鉄分の沈着目立つ7.5Y8/1 灰白色粗粒砂含む)
12. 10YR4/1 褐灰色シルト (粗砂を少量混入)
13. 10YR4/1 褐灰色シルト (粗砂を少量含む)
14. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色極細粒砂のブロックを少量混入する)
15. 7.5YR2/1 黒色シルト (炭化物を多く混入し土器片を多く含む、10YR3/1 黒褐色シルトブロック (2～5cm) を含む)
16. 10YR4/1 褐灰色極細粒砂 (18層を少量混入する、炭化物を少量含む)
17. 7.5YR2/1 黒色シルト (10YR4/1 褐灰色シルトブロックを多量に含む木片・炭化物を少量混入する)
18. 2.5Y2/1 黒色粘性土 (上下の層をブロック状に大量に混入する、土器片を多く含む)
19. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (木材・植物繊維を多量に含み大型の炭化物を少量含む下位に5Y5/1 灰色の細粒砂を混入する)
20. 5Y3/1 オリーブ黒色粘性土 (木材・植物繊維を多く含み少量の炭化物を混入する)
21. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (炭化物をわずかに混入)
22. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (色調は21層よりやや明るい5B7/1 明青灰色中粒砂をやや多く含む)
23. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (5B7/1 明青灰色中粒砂を含む)
24. 10YR4/1 褐灰色シルト (下位で2.5Y6/1 灰色細粒砂を含む)
25. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (微量の炭化物を含む)
26. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (色調は25層よりやや明るい+5Y8/2 灰白色細粒砂+2.5Y8/1 灰白色細粒砂互層)
27. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y6/1 灰色細粒砂+2.5Y8/1 灰白色細粒砂やや互層状)
28. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y6/1 灰色細粒砂+2.5Y8/2 灰白色細粒砂+2.5Y8/1 灰白色細粒砂互層)
29. 5Y4/1 灰色シルト (2.5Y6/1 灰色細粒砂+5Y4/1 灰白色細粒砂やや互層状)
30. 5Y5/1 灰色細粒砂 (混入物は見られない、互層状)
31. 10YR5/2 暗黄褐色極細粒砂 (炭化物をやや多く含む土器片の混入目立つ)
32. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (下位で27層のブロックの混入目立つ、炭化物をやや多く含む)
33. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (炭化物を少量含む)
34. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (角礫を多量混入)
35. 5Y5/1 灰色細粒砂
36. 10YR3/1 黒褐色シルト (18層土を縞状に混入する、微量の炭化物を含む)
37. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
38. 5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂
39. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂
40. 2.5Y5/1 黄灰色シル (細粒砂をやや多く混入する)
41. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂 (シルト・細粒砂をやや多く混入する)
42. 2.5Y4/2 暗灰黄色中粒砂 (粗粒砂を少量混入し微量の炭化物を含む)
43. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (11層・15層土をモザイク状に混入する)
44. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (27層土をブロック状に混入する、炭化物を微量含む)
45. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (微量の炭化物を含む、27.5SD埋土)
46. 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂 (小砂と炭化物を微量混入する)
47. 10YR5/1 褐灰色シルト (ブロック状に細粒砂を含む)
48. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (下位で中粒砂を多く含む)
49. 10YR5/1 褐灰色シルト (中粒砂をやや多く含む)
50. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (下位で中粒砂を多く含む)
51. 2.5Y6/2 灰黄色粗粒砂
52. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂 (粗粒砂縞状に入る)
53. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (中～細粒砂の混入目立つ)
54. 5Y6/1 灰色粗粒砂
55. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗粒砂 (細粒砂を縞状に混入する、鉄分の沈着目立つ)
56. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (粗粒砂・小礫を混入する。客土か)
57. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂、小礫を含む)
58. 10YR6/6 明黄褐色中粒砂 (極細粒砂混入、鉄分の沈着顕著、互層状)
59. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂 (中粒砂を混入する、互層状)
60. 2.5Y7/1 灰白色中粒砂 (極粗粒砂を多く含む)
61. 5Y6/1 灰色細粒砂
62. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (細～中粒砂を多く含む やや互層状)
63. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (鉄分の沈着目立つ、互層状)
64. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂
65. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (細粒砂・小礫を混入する)
66. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (粗粒砂～小礫を混入する)
67. 10YR5/2 暗灰黄色細粒砂
68. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂
69. 2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂
70. 10YR5/2 暗灰黄色細粒砂
71. 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂
72. 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂
73. 2.5Y6/2 灰黄色粗粒砂
74. 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 (18層土を縞状に混入する、炭化物を微量含む)
75. 10YR4/1 褐灰色細粒砂 (下層の土をブロック状に混入する、炭化物を少量含む)
76. 5B7/1 青灰色細粒砂
77. 10YR4/1 褐灰色シルト
78. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
79. 10YR4/1 褐灰色シルト (2.5Y2/1 黒色粘性土含む)
80. 5B7/1 青灰色細粒砂 (10YR4/1 褐灰色シルト含む)
81. 10YR4/1 褐灰色シルト
82. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
83. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
84. 2.5Y8/1 灰白色粗粒砂
85. 2.5Y2/1 黒色粘性土 (5B7/1 明青灰色細粒砂ブロック (2～3cm) を多く含む)
86. 10YR4/1 褐灰色粘性土
87. 5Y5/1 灰色細粒砂
88. 5Y4/1 灰色極細粒砂
89. 5B7/1 明青灰色中粒砂

第134図 06C区001NR東西土層断面図(S=1/80)



第 135 图 06C 区 001NR 西壁土层断面图 (S=1/80)

06C区西壁

1. 5Y6/1 灰色極細粒砂 (小礫を含む)
2. 5Y5/1 灰色極細粒砂 (礫・コンクリート片・ビニール片混じる)
3. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂
4. 5Y5/1 灰色極細粒砂 (木片を若干含む)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (中粒砂・小礫を混入する)
6. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (10YR3/1 黒褐色シルトブロックを含む、粗粒砂少量混入、客土か)
7. 5Y5/1 灰色極細粒砂 (極粗粒砂をわずかに含む)
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (粗粒砂を含む)
9. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (小礫を少量混入、鉄分の沈着目立つ)
10. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (細粒砂と小礫を含む)
11. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (鉄分の沈着目立つ、7.5Y8/1 灰白色粗粒砂含む)
12. 10YR4/1 褐灰色シルト (粗粒砂を少量混入)
13. 10YR4/1 褐灰色シルト (粗砂を少量含む)
14. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR5/1 褐灰色極細粒砂のブロックを少量混入する)
15. 7.5YR2/1 黒色シルト (炭化物を多く混入し、土器片を多く含む、10YR3/1 黒褐色シルトブロック (2~5cm) を含む)
16. 10YR4/1 褐灰色極細粒砂 (18層を少量混入する、炭化物を少量含む)
17. 7.5YR2/1 黒色シルト (10YR4/1 褐灰色シルトブロックを多量に含む土器片を多く含む、木片・炭化物を少量含む)
18. 2.5Y2/1 黒色シルト (上下の層をブロック状に大量に混入する、土器片を多く含む、粘性強い)
19. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (木材・植物繊維を多量に含む、大型の炭化物を少量含む、下位に5Y5/1 灰色の細粒砂を含む)
20. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト (木材・植物繊維を多く含む、少量の炭化物を含む、粘性強い)
21. 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂 (炭化物をわずかに含む)
22. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (色調は21層よりやや明るい、5B7/1 明青灰色中粒砂をやや多く含む)
23. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (5B7/1 明青灰色中粒砂を含む)
24. 10YR4/1 褐灰色シルト (下位で2.5Y6/1 灰色細粒砂を含む)
25. 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂 (微量の炭化物を含む)
26. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (色調は25層よりやや明るい、5Y8/2 灰白色細粒砂+2.5Y8/1 灰白色細粒砂互層)
27. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y6/1 灰色+2.5Y8/1 灰白色細粒砂や互層状)
28. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y6/1 灰色+2.5Y8/2 灰白色細粒砂+2.5Y8/1 灰白色細粒砂互層)
29. 5Y4/1 灰色シルト (2.5Y6/1 灰色+5Y4/1 灰白色細粒砂や互層状)
30. 5Y5/1 灰色細粒砂 (混入物は見られない、互層状)
31. 10YR5/2 暗灰黄色細粒砂 (炭化物をやや多く含む、土器片の混入目立つ)
32. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (下位で27層のブロックの混入目立つ、炭化物をやや多く含む)
33. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (炭化物を少量含む)
34. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (角礫を多量混入)
35. 5Y5/1 灰色細粒砂
36. 10YR3/1 黒褐色シルト (18層土を縞状に混入する、微量の炭化物を含む)
37. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
38. 5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂
39. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂
40. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (細粒砂をやや多く混入する)
41. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (細粒砂をやや多く混入する)
42. 2.5Y4/2 暗灰黄色中粒砂 (粗粒砂を少量混入し微量の炭化物を含む)
43. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (11層・15層土をモザイク状に含む)
44. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (27層土をブロック状に混入する、炭化物を微量含む)
45. 2.5Y5/1 黄灰色シルト (微量の炭化物を含む27.5SD埋土)
46. 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂 (小砂と炭化物を微量混入する)
47. 10YR5/1 褐灰色シルト (ブロック状に細粒砂を含む)
48. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (下位で中粒砂を多く含む)
49. 10YR5/1 褐灰色シルト (中粒砂をやや多く含む)
50. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (下位で中粒砂を多く含む)
51. 2.5Y6/2 灰黄色粗粒砂
52. 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂 (粗粒砂縞状に入る)
53. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (中~細粒砂の混入目立つ)
54. 5Y6/1 灰色粗粒砂
55. 2.5Y5/2 暗灰黄色粗粒砂 (細粒砂を縞状に混入する、鉄分の沈着目立つ)
56. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂 (粗粒砂・小礫を混入する、客土か)
57. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂 (2.5Y5/1 黄灰色細粒砂斑土、小礫を含む)
58. 10YR6/6 明黄褐色 (中粒砂極・細粒砂混入、鉄分の沈着顕著、互層状)
59. 2.5Y7/2 灰黄色 (極細粒砂・中粒砂を混入する、互層状)
60. 2.5Y7/1 灰白色中粒砂 (極粗粒砂を多く含む)
61. 5Y6/1 灰色細粒砂
62. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (細~中粒砂を多く含む、やや互層状)
63. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂 (砂鉄分の沈着目立つ、互層状)
64. 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂
68. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (細粒砂・小礫を含む)
69. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 (粗粒砂~小礫を含む)
70. 10YR5/2 暗灰黄色細粒砂
71. 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂
72. 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂
73. 2.5Y6/2 灰黄色粗粒砂
74. 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 (18層土を縞状に混入する、炭化物を微量含む)
75. 10YR4/1 褐灰色細粒砂 (下層の土をブロック状に混入する、炭化物を少量含む)
76. 5B7/1 青灰色細粒砂
77. 10YR4/1 褐灰色シルト
78. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
79. 10YR4/1 褐灰色シルト (2.5Y2/1 黒色粘性土含む)
80. 5B7/1 青灰色細粒砂 (10YR4/1 褐灰色シルト含む)
81. 10YR4/1 褐灰色シルト
82. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
83. 2.5Y5/1 黄灰色シルト
84. 2.5Y8/1 灰白色粗粒砂
85. 2.5Y2/1 黒色シルト (5B7/1 明青灰色細粒砂ブロック (2~3cm) を多く含む、粘性強い)
86. 10YR4/1 褐灰色シルト (粘性強い)
87. 5Y5/1 灰色細粒砂
88. 5Y4/1 灰色極細粒砂
89. 5B7/1 明青灰色中粒砂

第 136 図 06C 区 001NR 西壁土層土色

杭列Cについては列の方向は不明であるが、A・Bに関しては河道に直交するように配列されている。杭頂部及び先端部の高さは不揃いで、打ち込まれた時期は不明であるが、調査時の所見では2層以下である可能性が高い。また、杭列Bには転用材と思われる板材(W-039・265・262・264)を用いたものもみられる。

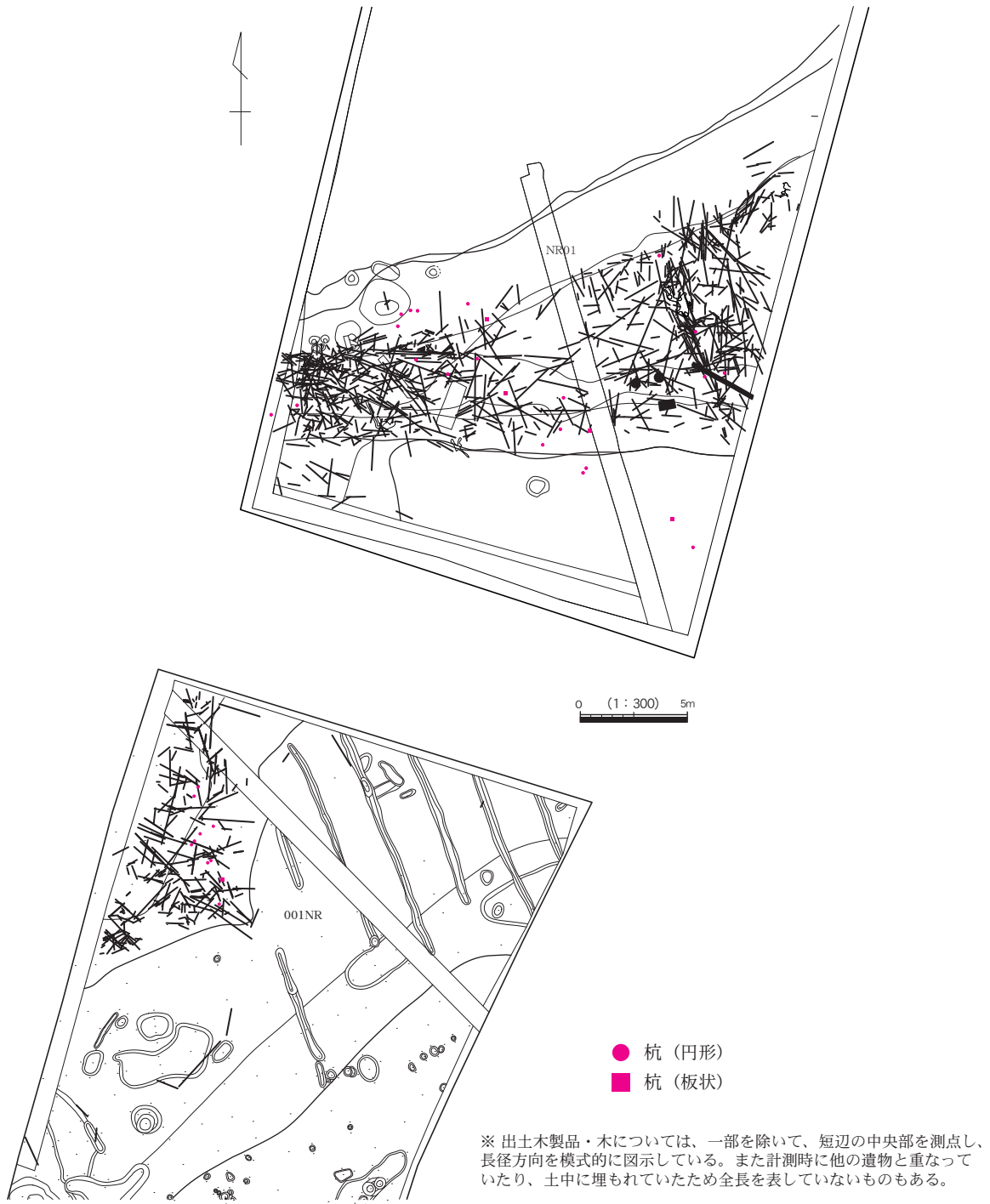
2 05B 区 NR02

調査区壁及びトレンチの土層観察では05BNR01の下層にも河道が存在することが確認されている。この下位にある明瞭な落ち込み部分をNR02とした(第92・131図)。堆積層内では土器の出土はなかったが、木製品で箱の側板(W-001)や木材が出土しており、木材の放射性炭素年代測定では、20AD(68.2%)70ADの値が算出されている。

3 06C 区 001NR

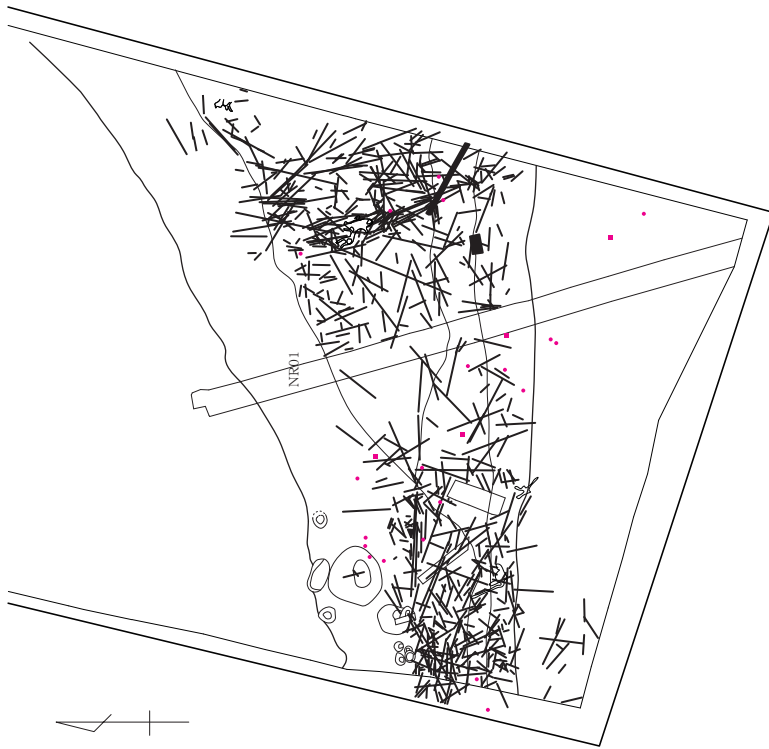
A 001NR 重機によって黄灰色・灰黄褐色砂まで掘削した後、トレンチによる土層確認を行い、黒色・黒褐色シルト層を2層として、その上の褐灰色シルト層を1層、下位の黒色シルト・黄灰色シルト層を3層、さらに下位の褐灰色シルトを4層として掘り下げて行った。また2層の下部で波打つような堆積をみせる褐灰色・黒色シルト層を2層下部として区別した。各層の時期は、1層がC・D期、2層がC期、2層下部・3・4層がB-1期になる。

この001NRの土層堆積を05B区NR01の調査結果を含めて検討すると、まず06C区1・2層は05B区1層と対応する。さらに波打つような堆積をする06C区2層下部とした層は05B区の2層、特に南岸部の堆積とは極めて類似しており、同一層と考えられる。また05B区3層に対応する堆積層は06C区には存在していない。06C区001 3層下層の黄灰色シルト及び4層は05B区4層・5



05NR01/06001NR上・下層木製品・木出土状況

第 137 図 NR01・001NR 木製品・木材・杭出土状況 (S=1/300)

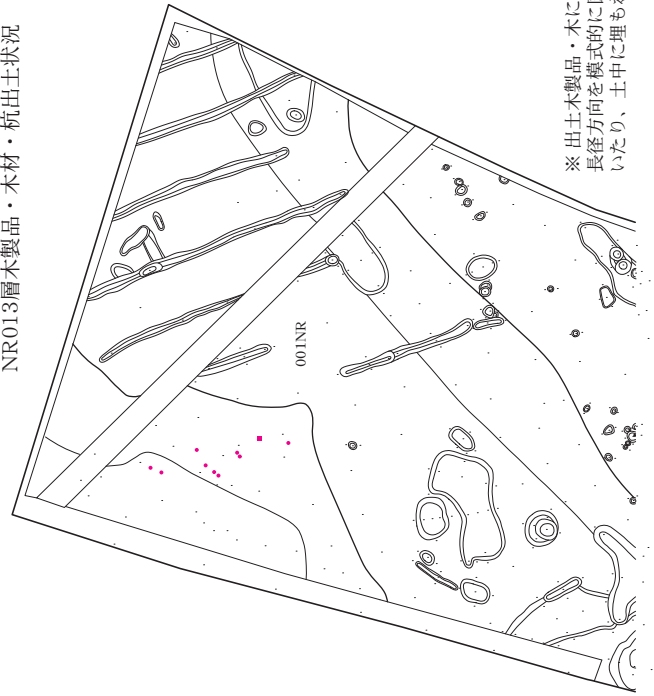


NR013層木製品・木材・杭出土状況

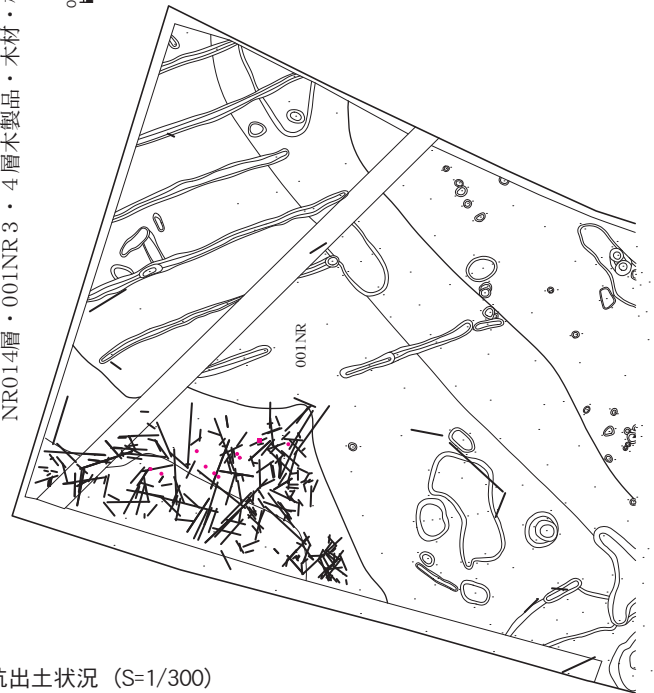
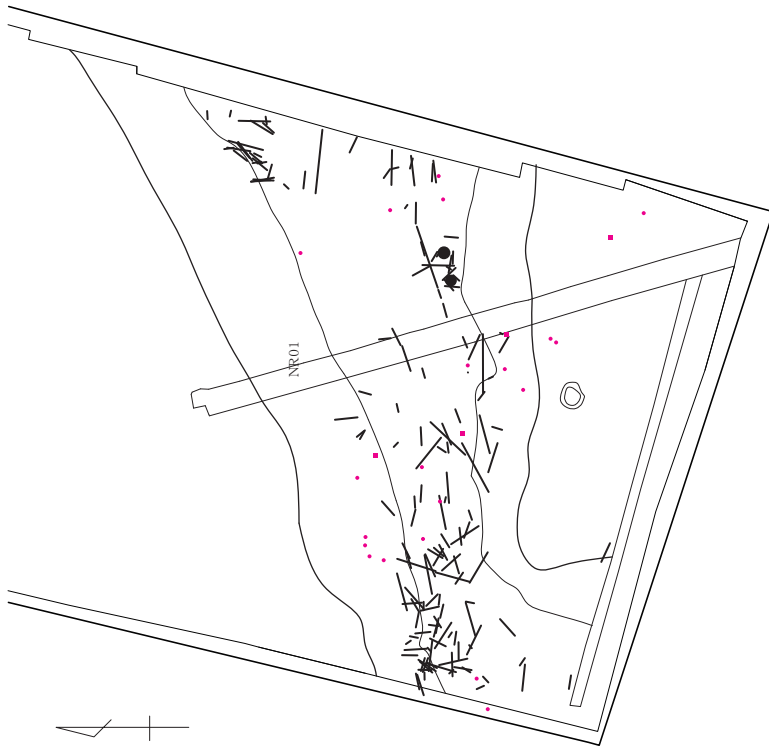


● 杭 (円形)
■ 杭 (板状)

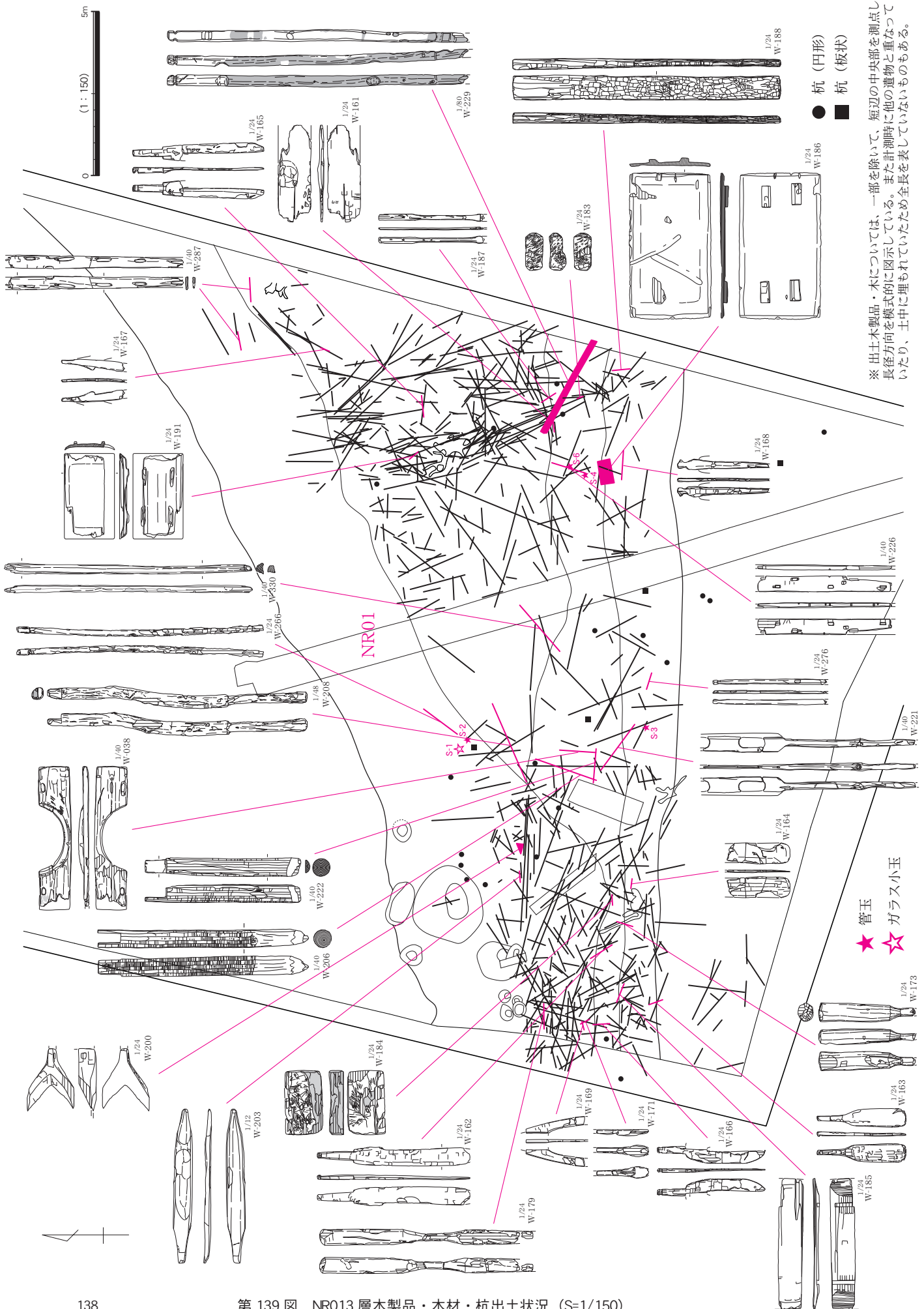
※ 出土木製品・木については、一部を除いて、短辺の中央部を測点し、長径方向を模式的に図示している。また計測時に他の遺物と重なっていたり、土中に埋もれていたため全長を表していないものもある。



NR014層・001NR3・4層木製品・木材・杭出土状況



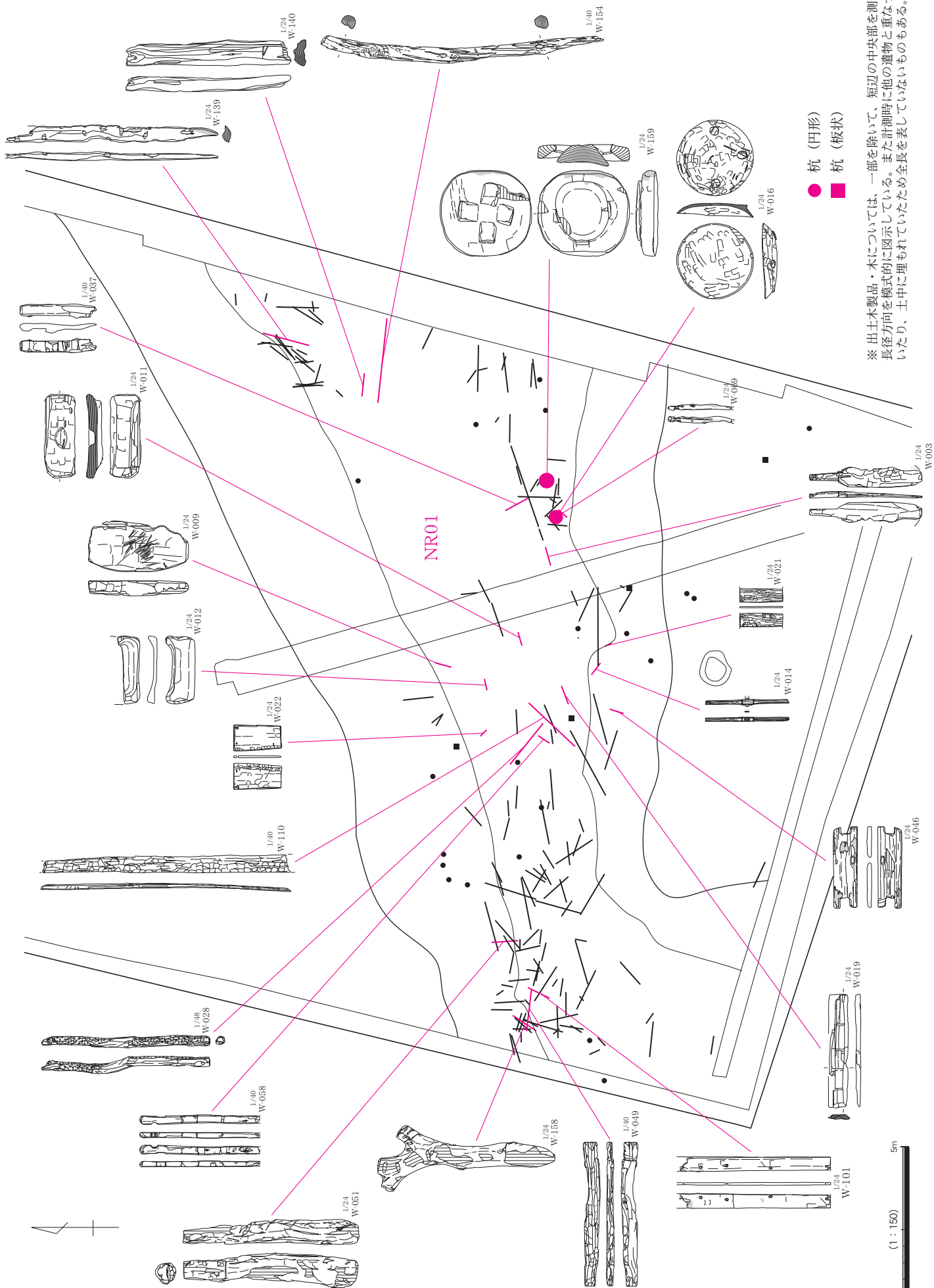
第 138 図 NR01・001NR 層別木製品・木材・杭出土状況 (S=1/300)



● 杭 (円形)
■ 杭 (板状)

※ 出土木製品・木については、一部を除いて、短辺の中央部を測点し、長径方向を模式的に図示している。また計測時に他の遺物と重なっていたり、土中に埋もれていたため全長を表していないものもある。

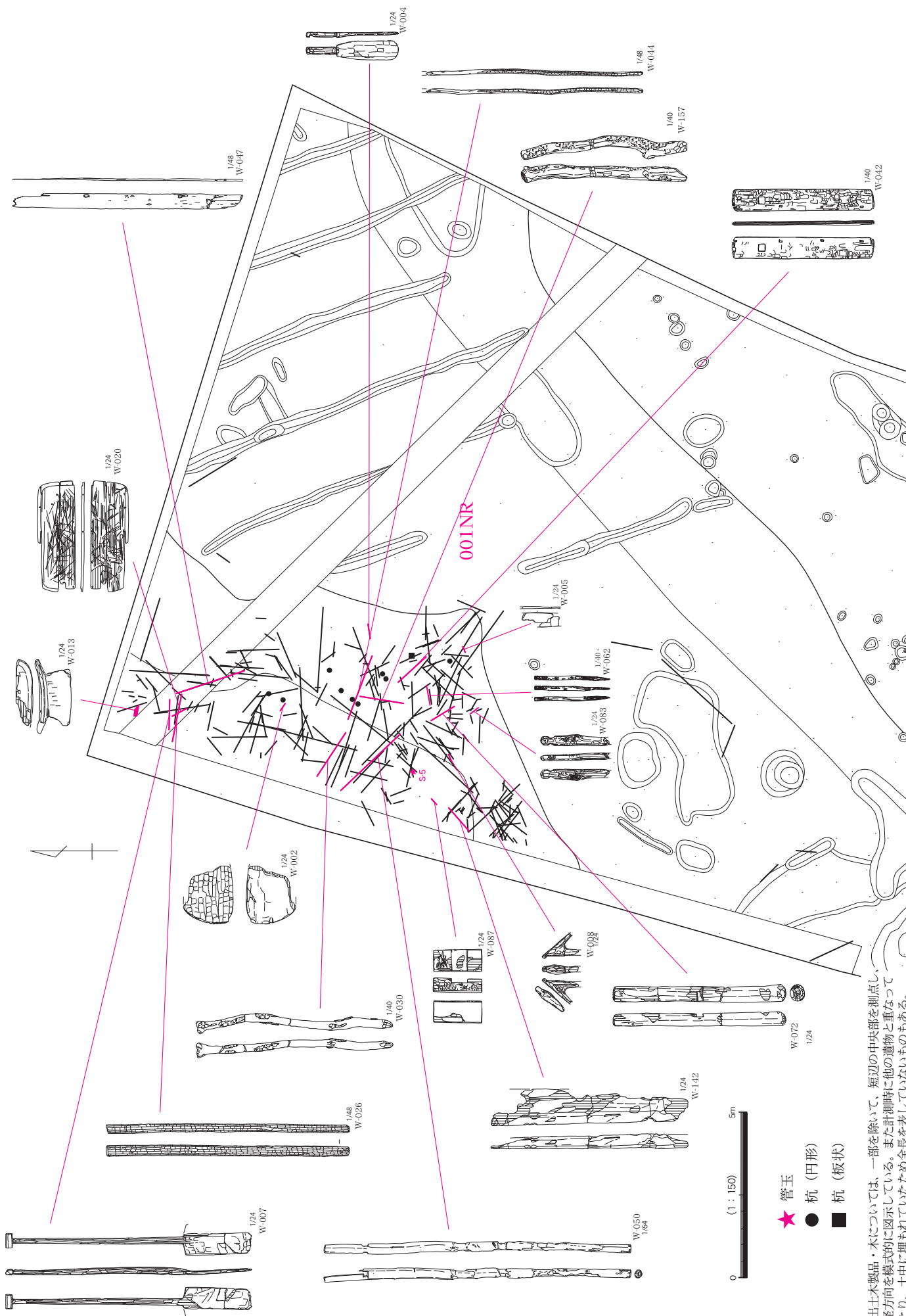
第 139 図 NR013 層木製品・木材・杭出土状況 (S-1/150)



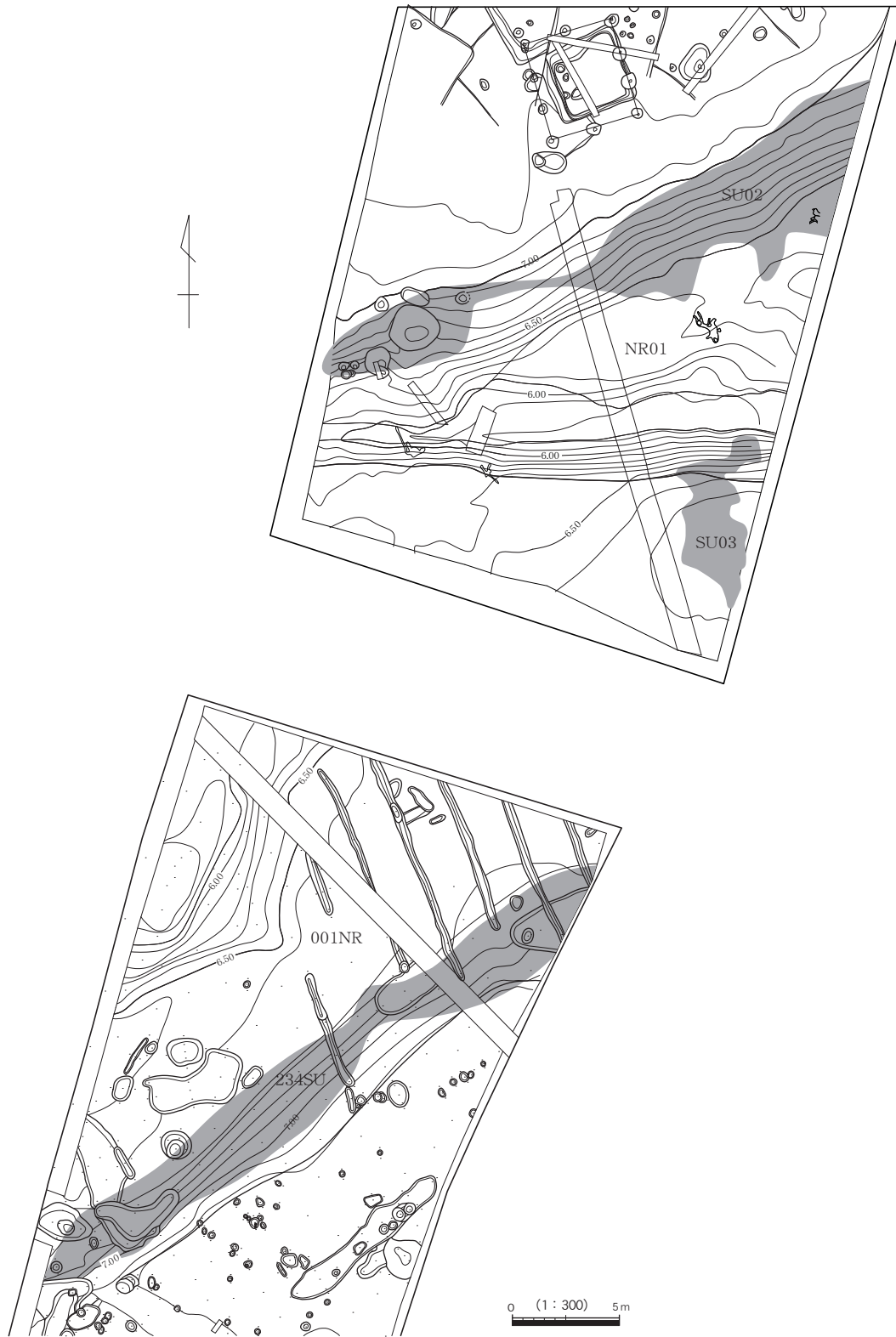
● 杭 (円形)
■ 杭 (板状)

※ 出土木製品・木については、一部を除いては、短辺の中央部を測点し、長径方向を模式的に図示している。また計測時に他の遺物と重なっていたり、土中に埋もれていたため全長を表していないものもある。

第 140 図 NR014 層木製品・木材・杭出土状況 (S=1/150)



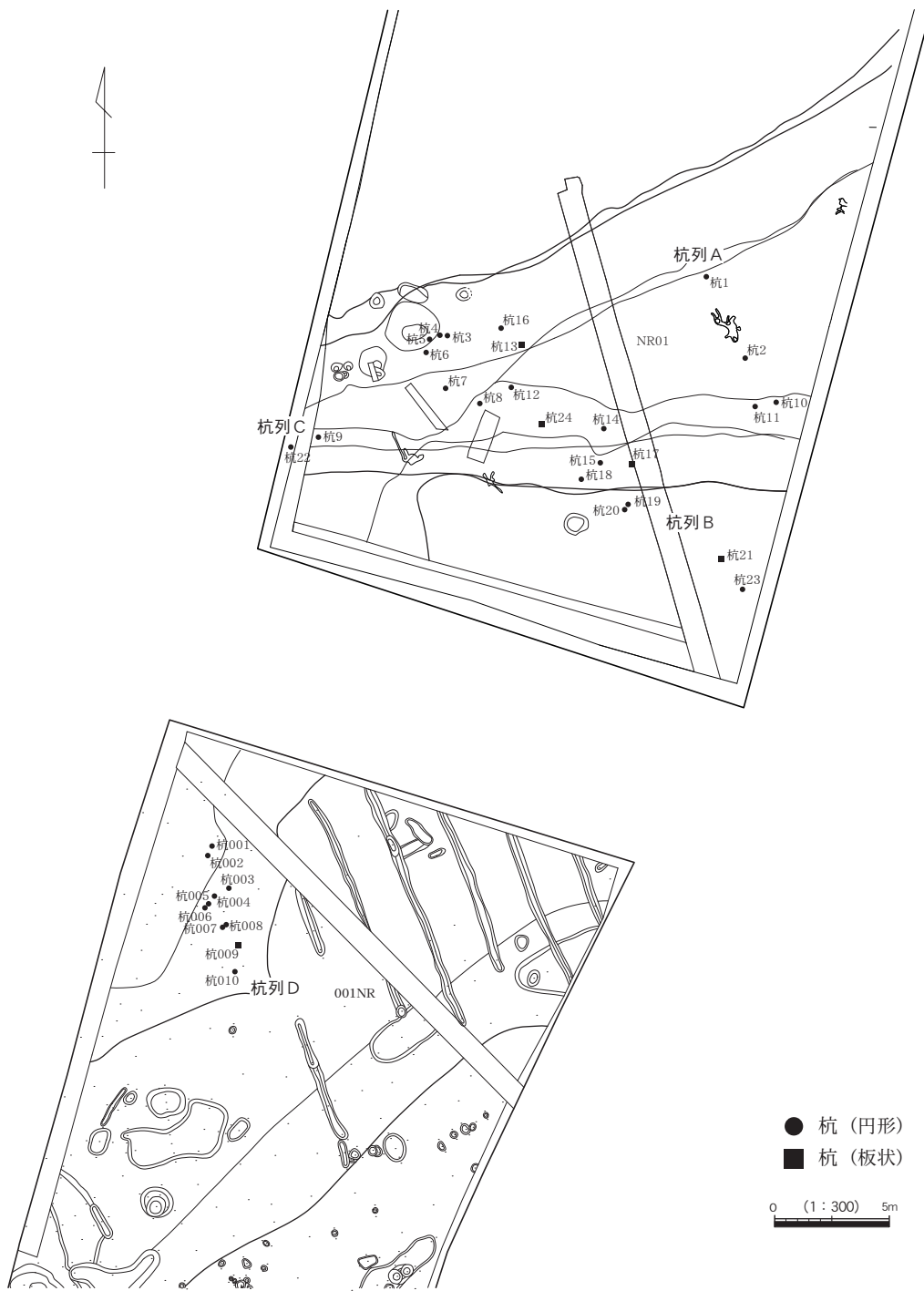
※ 出土木製品・木については、一部を除いて、短辺の中央部を測点し、長径方向を模式的に図示している。また計測時に他の遺物と重なっていたり、土中に埋もれていたため全長を表していないものもある。



第 142 図 SU02・SU03・234SU 遺物出土範囲 (S=1/300)

層に対応すると考えてよさそうであるが、06C 区 3 層上部の黒色シルトについては、土層観察や層序からみると 05B 区 4 層と対応すると思われるが、06C 区 2 層との関係やレベルからみると 05B 区 2 層に対応する可能性もある (第 134 ~ 136 図)。

001NR は南東肩から北西にかけて幅 11 ~ 13m、比高さ約 70cm の緩斜面があり、北東端で急激に落ち込む。木製品・木材の大部分や杭列は、この落ち込み部の堆積である 3 層下部・4 層から出土

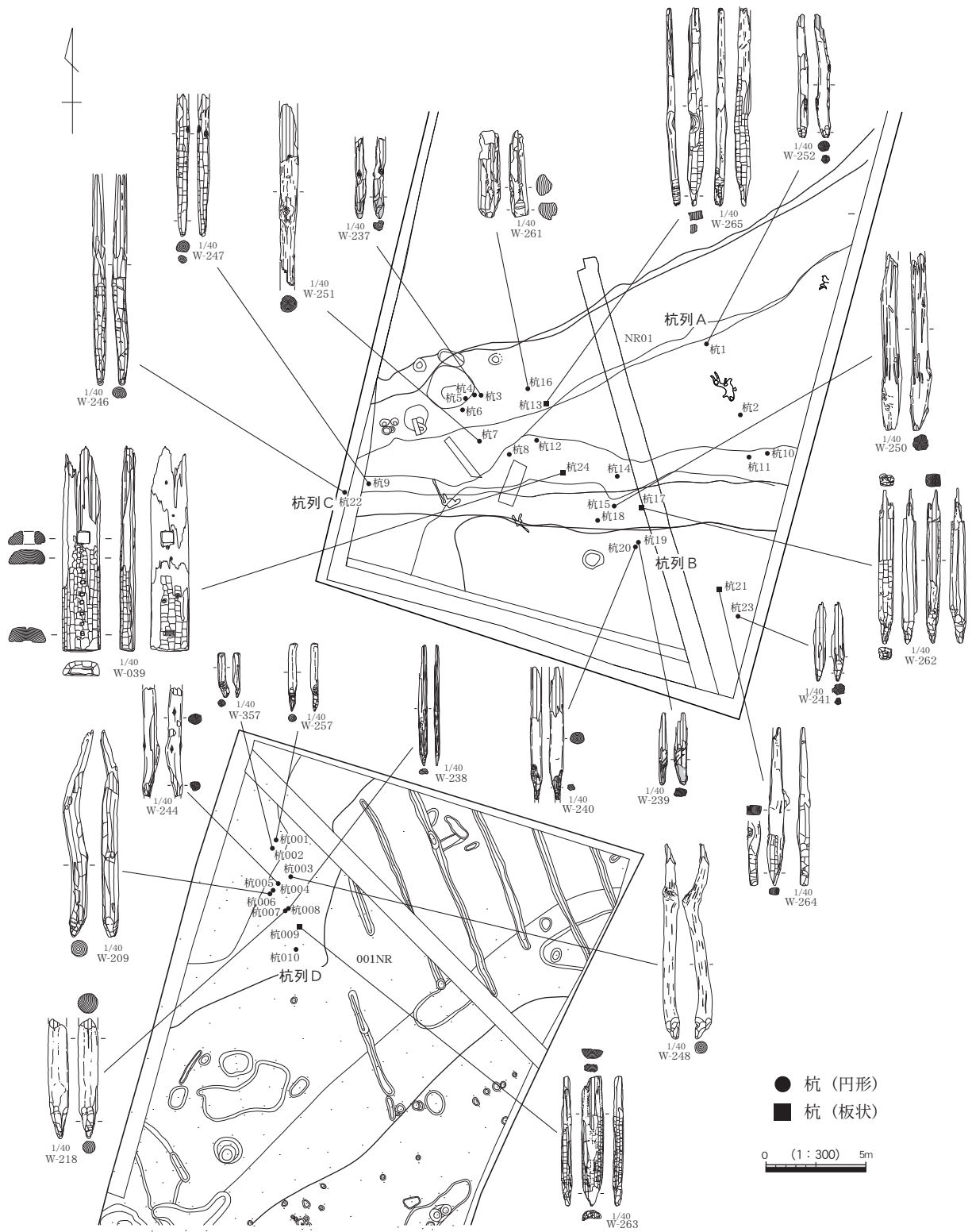


第 143 図 杭列出土状況 1 (S=1/300)

している (第 137・138・141 図)。

B 234SU (第 142 図) 234SU は 001NR の南東斜面で出土した土器集積で、河道肩からやや急に落ちる緩斜面部分に、調査区全域 32m にわたって廃棄がなされている。北東端より人面文土器片が出土している。

C 杭列 D (第 143・144 図) 北西から南東にかけて並ぶ 10 本の杭列で、この杭列方向で緩斜面部がやや抉れたような形状を呈する。また杭 009 のみ円形の杭ではなく板材が使われている。打ち込まれた時期は不明である。



第 144 图 杭列出土状况 2 (S=1/300)

第3章 遺物

第1節 遺物の記述

遺物番号の前に遺物記号である焼き物 E、石製品 S、金属製品 S、木製品 W、その他 X が付けられるが、本報告書では焼き物の E 番号については省略して記述している。縮尺については、掲載頁内に明記した。

第2節 土器・土製品

各遺物の時期については、下記の文献の型式・時期区分を参照した。また墨書の解読については名古屋大学 古屋谷知浩氏の、石製品の石材については本センター 堀木真美子氏のご教示を得た。

赤塚次郎 1990 「V 考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集

赤塚次郎 1994 「付論 1 松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 48 集

石黒立人・宮腰健司 2007 「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』

城ヶ谷和広 2010 「第 3 節 編年及び編年表 土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）」『愛知県史 資料編 4 考古 4 飛鳥～平安』

中野晴久 1994 「赤羽・中野「生産地における編年について」『「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

中野晴久 1995 「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館

藤澤良祐 1990 「付論 2 山茶碗と中世社会」『尾呂—愛知県瀬戸市 定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

1 06A 区

(1) 遺構内出土 (第 145 図)

022SX 001 は折り返し口縁部をもつ中世伊勢型鍋。

023SB 002 は K -90 窯式の灰釉陶器碗の高台部。

102SX 003 は常滑産鉢の高台部。12 世紀代のものか。

001SX 004 は灰釉陶器碗の口縁部～体部。

002SX 005 は須恵器蓋のつまみ部。

030SX 006 は K -90 窯式の灰釉陶器碗の高台部。

041SX 007 は山茶碗の口縁部～体部。

087SX 008 は O-53 窯式の灰釉陶器碗の高台部。009 は 12 世紀代の山茶碗。

038SD 010 は山茶碗の高台部。底部外面に細い沈線があり有機物が付着する。12 世紀代のものか。

098SD 011 は O-53 窯式の灰釉陶器碗の高台部。

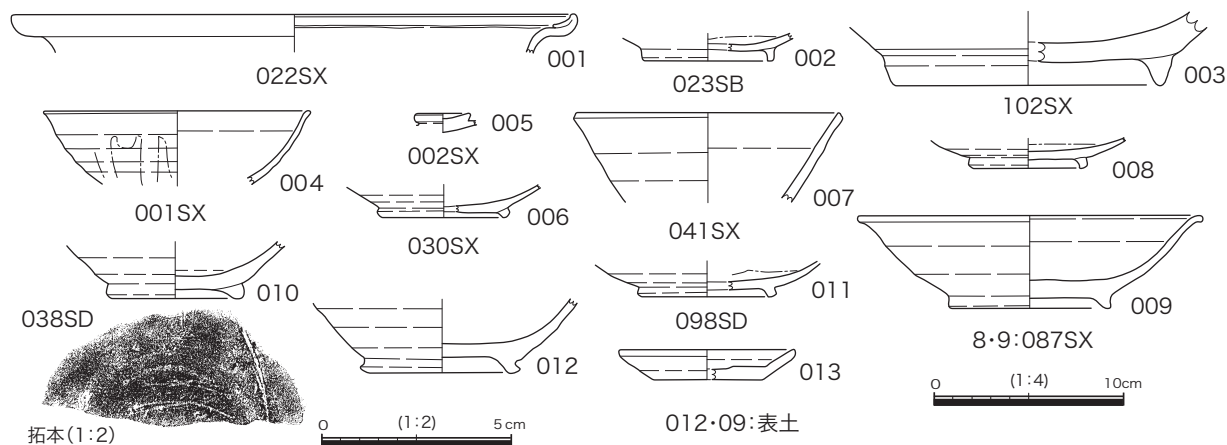
(2) 遺構外出土 (第 145 図)

012 は 12 世紀代の山茶碗。013 は山茶碗小皿。

2 06B 区

(1) 遺構内出土 (第 146 図)

121SX・163SX・177SX 014 は灰釉陶器碗の口縁部～体部。015 は H-72 窯式～百代寺窯式の灰釉陶器碗。016 は灰釉陶器碗の口縁部～体部。



第 145 図 土器・土製品：06A 区出土 (S=1/4、1/2)

234SX 017～018 は O-53 窯式から H-72 窯式の灰釉陶器椀高台部。

240SX 019 は 12 世紀代の山茶碗高台部。020 は製塩土器の杯部から脚部片。

242SB 021 は全体に降灰して黒ずんだ色を呈する O-53 窯式の灰釉陶器椀高台部。022 は 12 世紀代の山茶碗高台部。023 は手づくねの小型土器。

246SX・251SX 024 は H-72 窯式～百代寺窯式の灰釉陶器椀高台部。025 は O-53 窯式の灰釉陶器椀の高台部。

276SX 026 は山茶碗の口縁部～体部。

302SB 027 は灰釉陶器皿で底部外面に墨書がある。墨書は上位が「土カ」と判読でき、その下位にも痕跡があると推定できるが詳細は不明である。028 の脚台盤の底部外面には「聡」の墨書がある。時期は K-14 窯式。

321SX 029 は B-1 期二重口縁壺の口縁部。

347SX・112SX 030 は百代寺窯式の灰釉陶器椀。033 は口縁部に押圧による輪花が施される灰釉陶器椀。内面に 4 条の沈線が確認できる。

095SK 031 は二枚貝条痕を施す土器片。表裏面とも煤・炭化物が付着する。

440SK 032 の K-90 窯式の灰釉陶器椀高台部。底部外面に墨書が確認できるが判読はできない。

001SD 034 は口縁～体部にかけて灰釉が施される筒形鉢。底部外面には薄く煤・炭化物が付着しており、「六〇」の墨書が書かれる。035 の丸椀の外表面には鉄釉、内表面には灰釉が、036 の丸椀には呉須絵が描かれる。038 は志野釉に鉄釉絵が描かれる馬目皿。039 も志野釉に鉄釉絵が描かれる。

041 も志野釉が施されている。042・043 は二枚貝条痕が施される岩滑式の壺。

494SD 045 は 12 世紀代の山茶碗高台部。

(2) 遺構外出土 (第 146 図)

047 は 13 世紀代の山茶碗。048 は古井式の壺体部。050・051 は H-72 窯式～百代寺窯式の灰釉陶器椀。

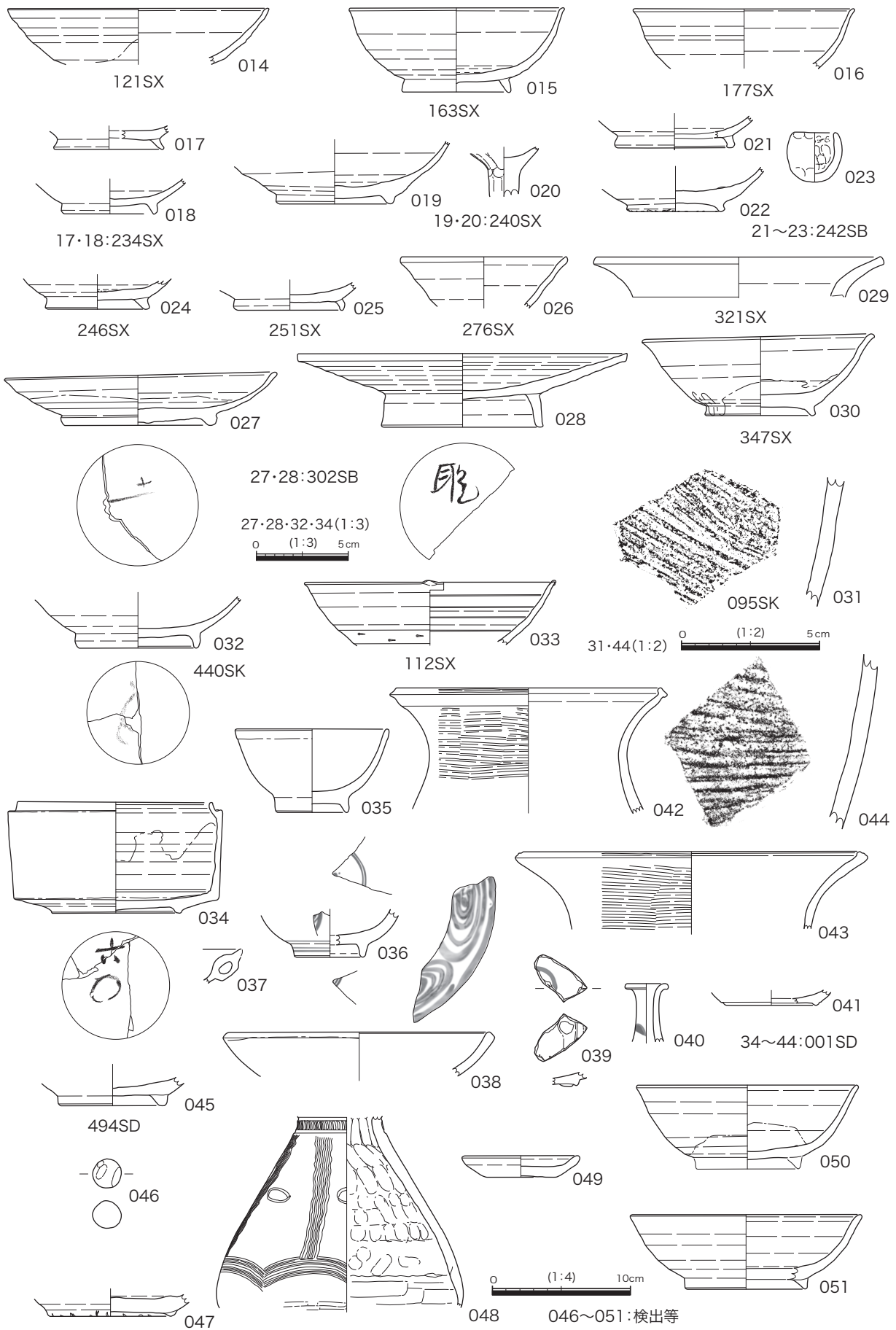
3 05A 区

(1) 遺構内出土 (第 147 図)

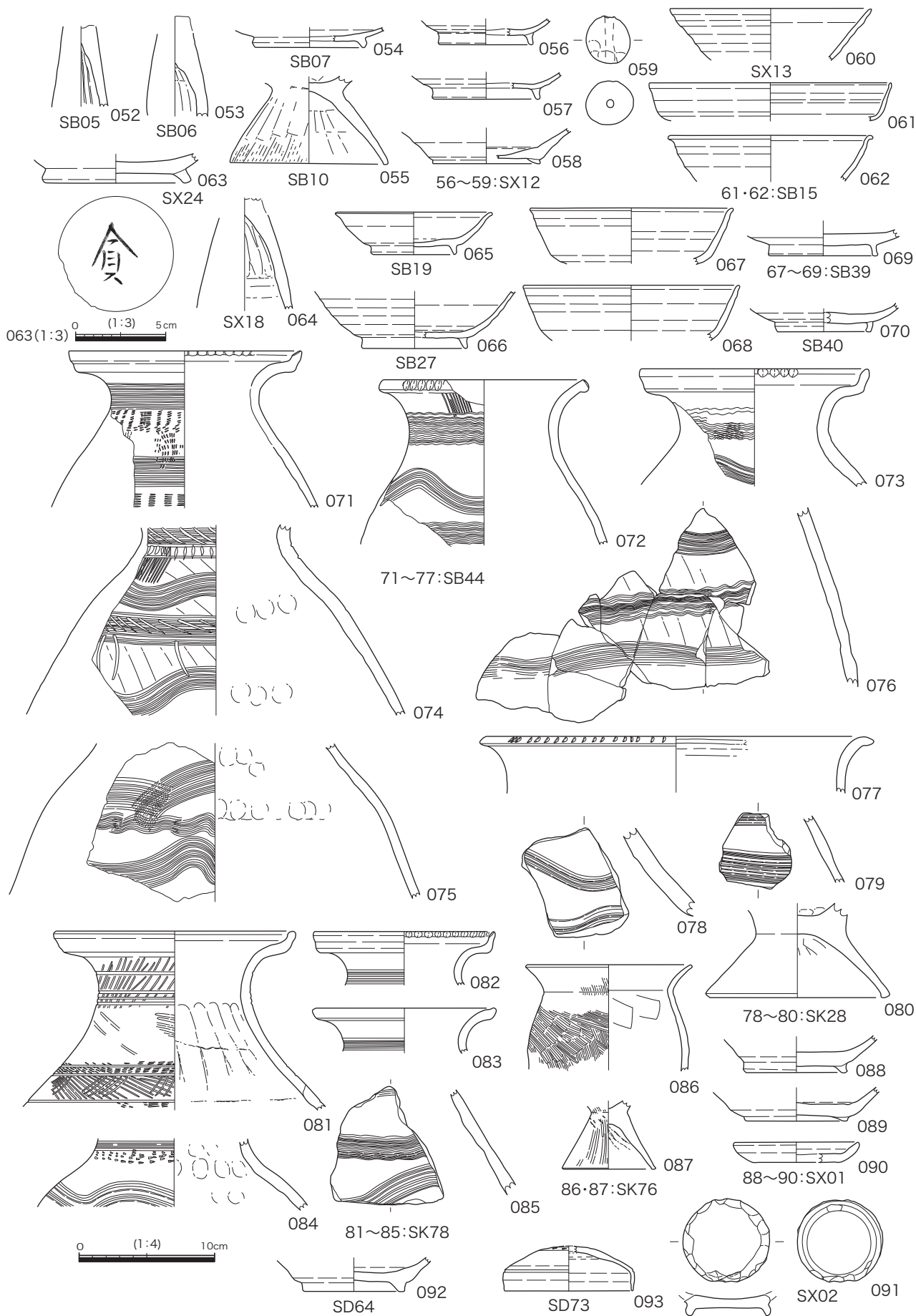
SB05・SB06・SB10 052・053 屈折脚高坏。055 は台付甕の脚台。時期は B-1 期。

SB07 054 は O-53 窯式の灰釉陶器椀の高台部。

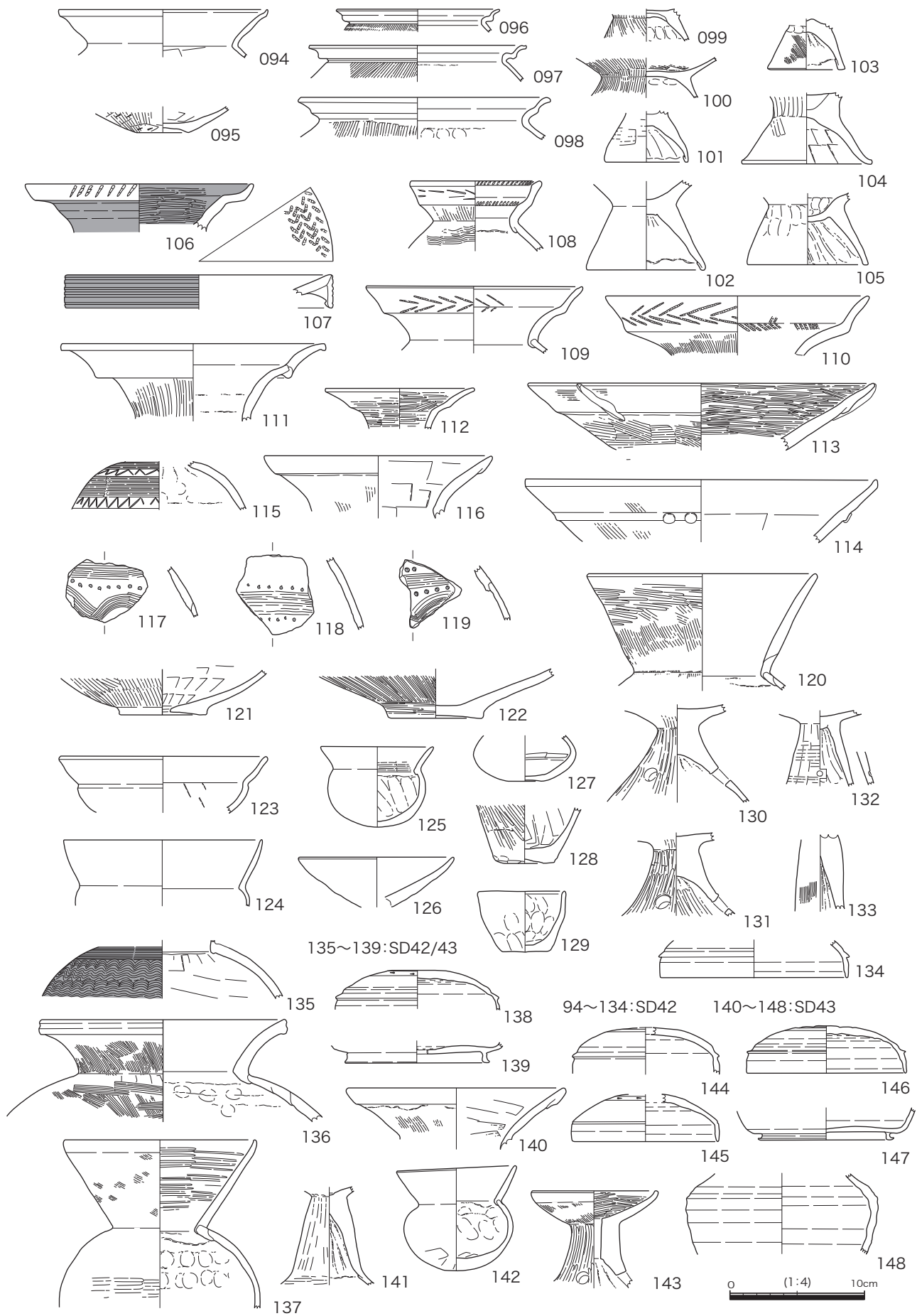
SX12・SB13 056・057 は H-72 窯式～百代寺窯式の灰釉陶器椀高台部で、058 は 13 世紀代の山茶碗高台部になる。060 は灰釉陶器椀。



第 146 図 土器・土製品：06B 区出土 (S=1/4、1/3、1/2)



第147图 土器・土製品：05A区出土 (S=1/4、1/3)



SB15 061 は須恵器坏、062 は灰釉陶器碗の口縁～体部。
SX24 063 は O-53 窯式の灰釉陶器碗の高台部で、底部外面に「食カ」または「貧カ」と判読できる墨書が書かれる。
SB19・SB27 065・066 は H-72 窯式～百代寺窯式の灰釉陶器碗高台部。
SB39・SB40 067～069 は須恵器杯で、069 の体部破面は打ち欠かれている可能性がある。070 は灰釉陶器碗。
SB44 071～076 は A-2 期古井式壺、077 は古井式甕口縁部。
SK28・SK78 078・079・081～085 は A-2 期古井式壺、080 は古井式甕口縁部。
SK76 086 は B-1 期の甕、087 は外面がミガキ調整される脚台部。
SX01 088～090 は 13 世紀代の山茶碗と小皿。
SX02 091 は O-53 窯式の灰釉陶器碗の高台部で、破面が打ち欠かれている。
SD64 092 は 12 世紀代の山茶碗高台部。
SD73 093 は B-2 期の H-50 窯式の坏蓋。

(2) SD42・43 (第 148 図)

SD42 094 は端部がやや上方に引き上げられる甕口縁部。095 はケズリ成形・調整後にミガキ調整がなされる壺底部。096～100 は S 字状口縁甕で、096～098 は C 類。102～105 は台付甕脚台部。106 は有段口縁壺で、頸部外面と口縁～頸部内面に赤彩が施される。107 は垂下する口縁部外面に赤彩がなされパレススタイル壺。108 は有段口縁壺で、口縁部外面に羽状連続刺突、内面に 2 段のイタ連続刺突、体部に直線・波状? 文が描かれる。109・110 は柳ヶ坪型壺口縁部。111・112 は二重口縁壺。113・114 は口縁部外面に粘土が付加されて有段・二重口縁壺状になる壺で、棒状・円形浮文が付く。115 は山形文部分に、117～119 は列点文部分赤彩された加飾壺。116 は口縁部が折り返される。120 は大型直口壺。121 の壺底部は焼成後穿孔がみられる。123 の鉢はナデ・イタナデ調整がなされる。128 は外面ミガキ調整される筒状の土器。132 の高坏脚部には 1 方向のみに円形の刺突が行われる。134 の須恵器坏蓋は SD42 出土として取り上げたが、SD43 のものある可能性が高い。

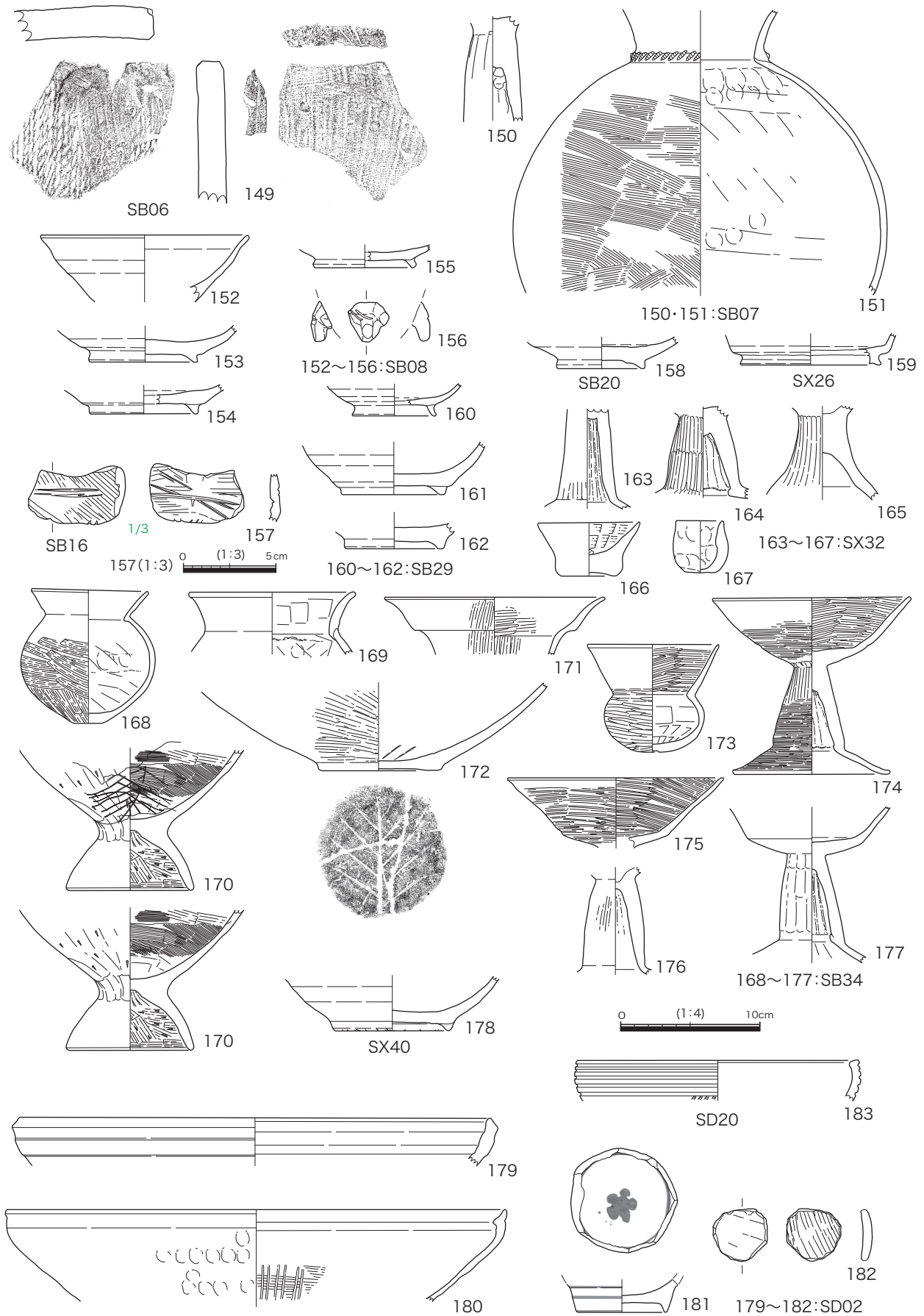
SD42/SD43 135～139 は取り上げ時に SD42 と SD43 の区別ができなかったものである。135 の加飾壺は体部外面全体に赤彩がなされる。137 の直口壺の口縁端部はナデによりわずかに上方に延びる。138 は須恵器坏蓋。

SD43 140 は口縁部が折り返される太頸壺。144～148 は B-2 期の H-50 窯式～I-17 窯式期の須恵器。

4 05B 区

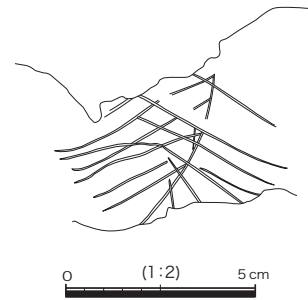
(1) 遺構内出土 (第 149・150・151 図)

SB06 149 は縄目痕・布目痕がある瓦。
SB07 150 はイタナデ調整される屈折脚高坏、151 は壺の頸～体部で、頸部に突帯が巡り、イタによる連続刺突がなされる。
SB08 152～154 は 12 世紀代の山茶碗。155 は O-53 窯式の灰釉陶器碗の高台部。156 は灰釉陶器脚部。
SB16 157 は加工を加えた土器片。砥石溝状の溝が表裏面ともに認められる。
SB20・SX26 158 は灰釉陶器碗、159 は須恵器坏。
SB29 160 は H-72 窯式～百代寺窯式の灰釉陶器碗高台部。161・162 は 12 世紀代の山茶碗高台部。
SB32 163～165 は高坏脚部。166 はナデ・イタナデ調整された小型鉢。167 は手づくねの小型土器。



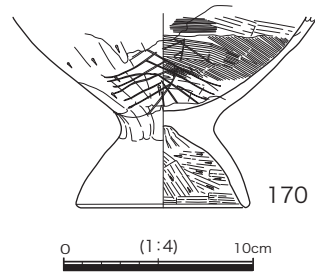
第149図 土器・土製品：05B区出土1 (S=1/4、1/3)

SB34 170 (第 150 図) は体部外面と脚部内面がイタナデ・ケズリ成形・調整、体部内面がハケ調整される台付甕で、外内面とも煤・炭化物が付着する。体部最下位には線刻がなされる。線刻は最初に上から左斜め下一次にその線に鋭角になるように右上から左下へ 5～6 条一次に左上から右下へ 7 条の細かい沈線が施される。168 は体部にイタナデ調整される平底甕。171 は二重口縁壺、172 は壺底部で、底部外面に木葉痕がみられる。173 は横位のミガキ調整がなされる小型壺。174・175 の屈折脚高坏は横位の細かいミガキ調整がなされる。176・177 はナデ・イタナデ調整される屈折脚高坏。



SB40 178 は 13 世紀代の山茶碗。

SD02・SD20 179 は鉄釉が施される播鉢、180 は土師質の鍋、181 は呉須絵が描かれる広東椀になる。時期は江戸時代後期。182 は土師質土器の加工円盤。183 は A-2 期の凹線文系土器の口縁部。



SK38 184 は 12 世紀代の山茶碗高台部。

SK61 185 の屈折脚高坏は、坏部内外面より脚部外面にかけて横位の細かいミガキがなされる。脚部内面は横位のケズリ成形・調整。

SK62 186 の甕は外面がハケとケズリ成形・調整、体部内面がケズリ成形・調整される。187 の壺内面にはケズリ状となるイタナデ調整が施される。

第 150 図 線刻土器 170
(S=1/4、1/2)

SK63 188～190 は口縁部が逆八字状を呈する甕。188 は体部外面にイタナデ調整、内面にケズリ状となるイタナデ調整、189 の体部外面には束ねた棒またはクシ状工具による条痕状の深い凹凸のある調整、189 の体部外面はナデ調整される。

SK64 191 の丸底甕は口縁部がナデによりわずかに上方に延び、体部外面には細かいハケ調整、内面はケズリ状となるイタナデ調整がなされる。192 は外面がケズリ状となるイタナデ調整後ハケ調整される長頸壺。内外面とも煤・炭化物が厚く付着する。193 は口縁部が強いヨコナデによりわずかに段となる加飾太頸壺。194 は柳ヶ坪型壺で、体部外面はケズリ成形・調整後、ミガキ調整される。

SK66 195 はミガキ調整され、頸部に横位に沈線が巡って段状をなす。

SK81 196 は S 字状口縁甕 C 類。197 は口縁部外面にイタによる凹線が巡る。

SK135 ミガキ調整される 198 の壺は、体部下位に焼成後穿孔される。

P59 199 は 12 世紀代の山茶碗か。

P76 200 は外面ハケ調整、内面がイタナデ調整される甕。

(2) SU01 (第 152 図)

甕 201 と屈折脚高坏 208 は SU01-09、甕 202 と屈折脚高坏 205 は SU01-05、屈折脚高坏 204・209 は SU01-06、屈折脚高坏 203 は SU01-08、206 は SU01-07、207 は SU01-01、小型壺 210 は SU01-15 より出土している。

5 06C 区

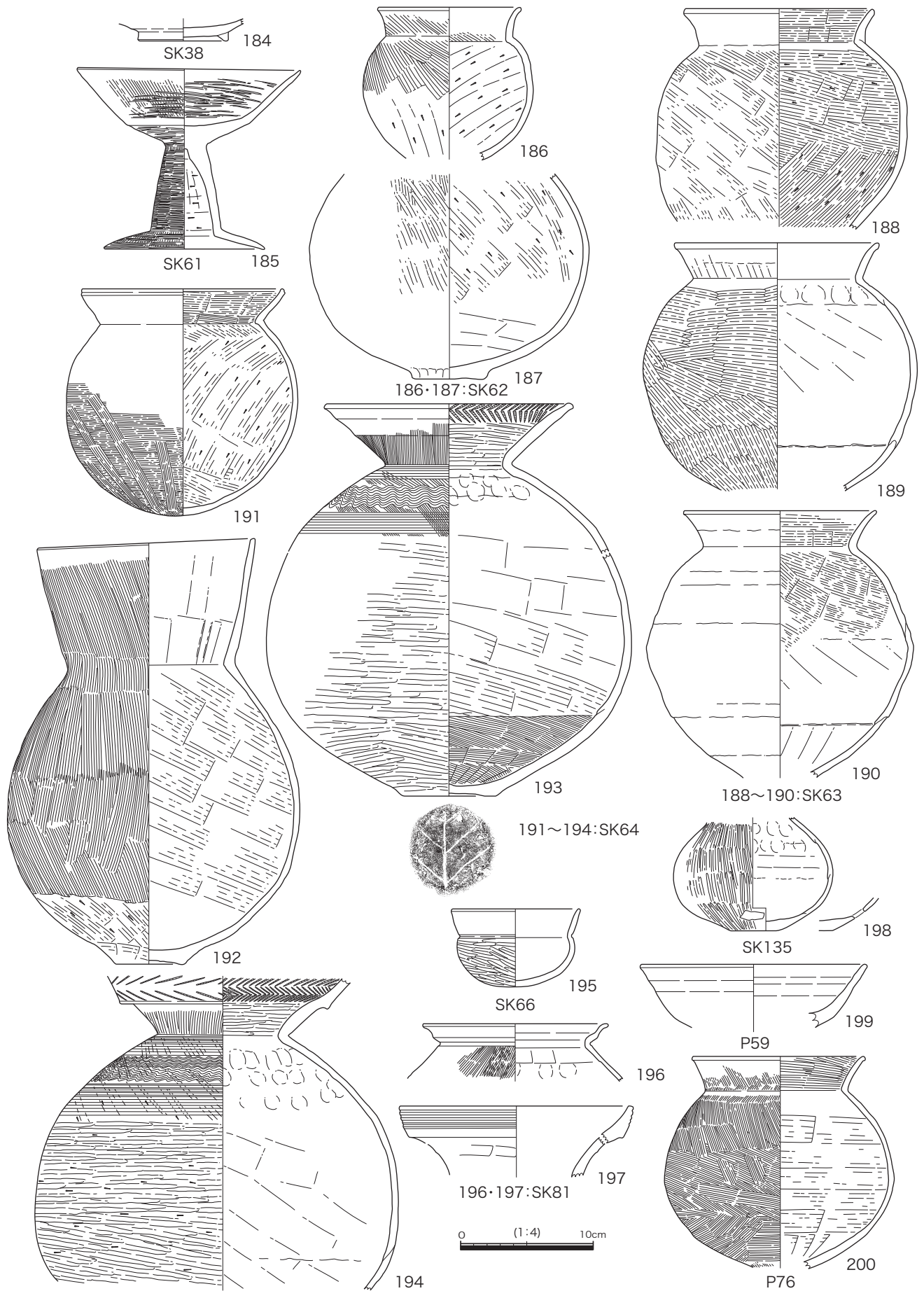
(1) 遺構内出土 (第 153・154 図)

009SX・011SX・012SX・031SX 211・213 は灰釉陶器椀。212 は O-53 窯式の灰釉陶器椀の高台部。214 は K-90 窯式の灰釉陶器椀の高台部。215 は竈形土器の脚部。

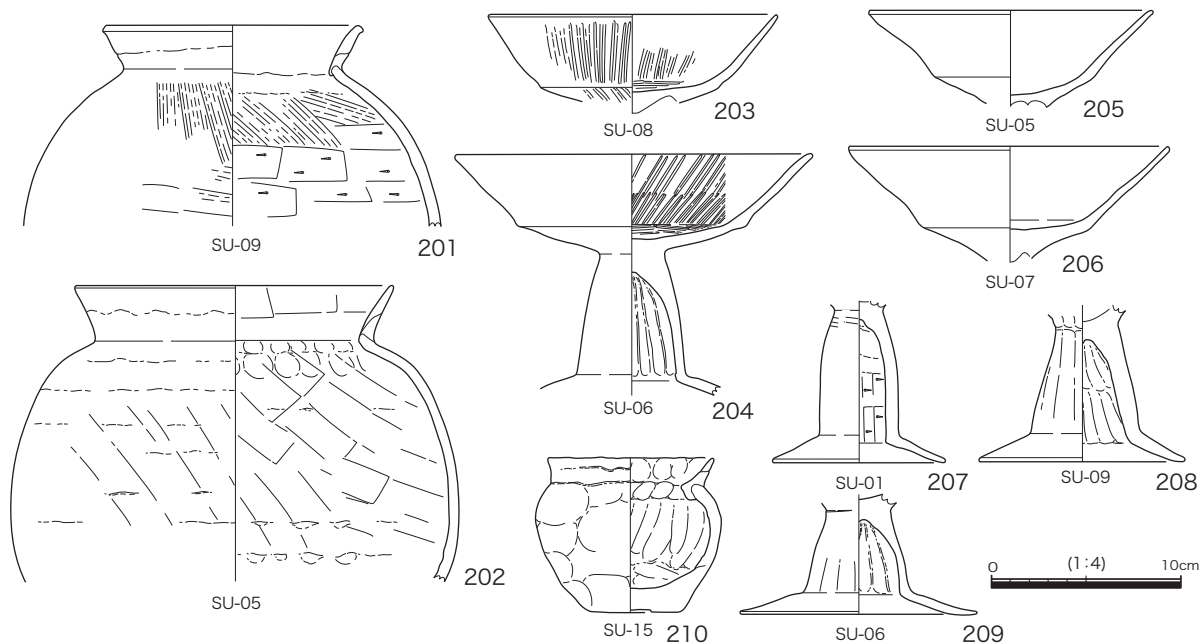
040SX 217～219 は K-90 窯式～O-53 窯式の灰釉陶器椀の高台部。220 は線刻が描かれる灰釉陶器。221～223 は土師器甕。

043SX・023SK 224～227 は O-53 窯式の灰釉陶器椀。

250SK・287SK・288SK 228～232 の甕・鉢・屈折脚高坏は B-1 期に属する。



第 151 図 土器・土製品：05B 区出土 2 (S=1/4)



第 152 図 土器・土製品：05B 区 SU01 出土 (S=1/4)

013SX・028SK 234 は須恵器坏蓋。235・237 は須恵器坏。236 は土師質の甑把手。238・239 は O-53 窯式の灰釉陶器碗の高台部になる。

134SD 240～243 は K-90 窯式～O-53 窯式の灰釉陶器碗の高台部。244 は土師器甕。

136SK 245 は H-72 窯式～百代寺窯式の灰釉陶器碗高台部。248 は竈形土器の脚部。248 は棒状具に粘土を巻き付けたように、平滑な弧状の面をもつ土師質土器で、被熱している。

140SK 249～251 は B-2 期の須恵器坏蓋。

237SK・247SK・248SK 252 は体部に連続押圧された突帯と覆部にも突帯が付く手焙り形土器。254 のパレススタイル壺は浮文部分を除き口縁端面に赤彩が施される。256 は口縁部外下位に粘土が付加されて有段口縁をなす壺で、ミガキ調整される。

249SE 257 の甕は 249SE 上位の破片と 001NR4 層出土の破片が接合している。磨滅する 259 の鉢も上位より出土する。260 の有段口縁壺は、下位より出土する。ナデにより口縁部を凹ませて段部を作り出しているもので、イタによるケズリ成形・調整がなされている。

006SD 261 は鉄釉が施される鉢の口縁部。262 も鉄釉で施釉される。263 は土師質の焙烙。264 は灰釉が施釉される C 期の壺。265 は呉須絵が描かれる磁器で、破面が打ち欠かされている。266 は 13 世紀代の山茶碗の加工円盤。出土遺物に時期差があるが、遺構の時期としては江戸時代後期と考えられる。

008SX 267 は灰釉陶器の 268 山茶碗の口縁部。

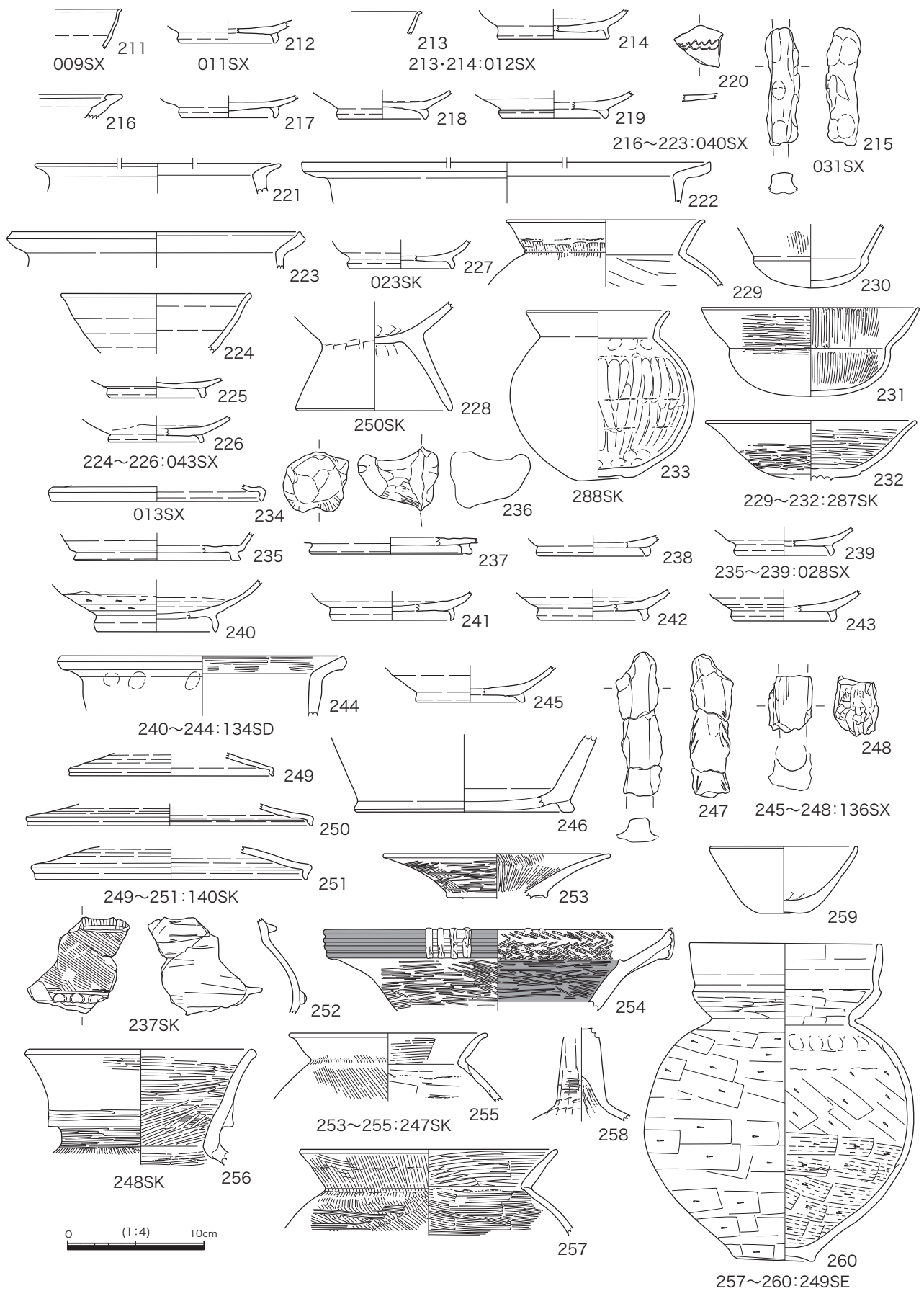
020SD・049SD・181SD 270～273 は K-90 窯式～H-72 窯式期の灰釉陶器碗高台部。274 は須恵器壺の高台部。275 は K-14 窯式の灰釉陶器碗高台部。276 は須恵器碗であるが、やや軟質である。277～289 は K-14 窯式～O-53 窯式期の灰釉陶器碗高台部。

(2) 検出等 (第 154 図)

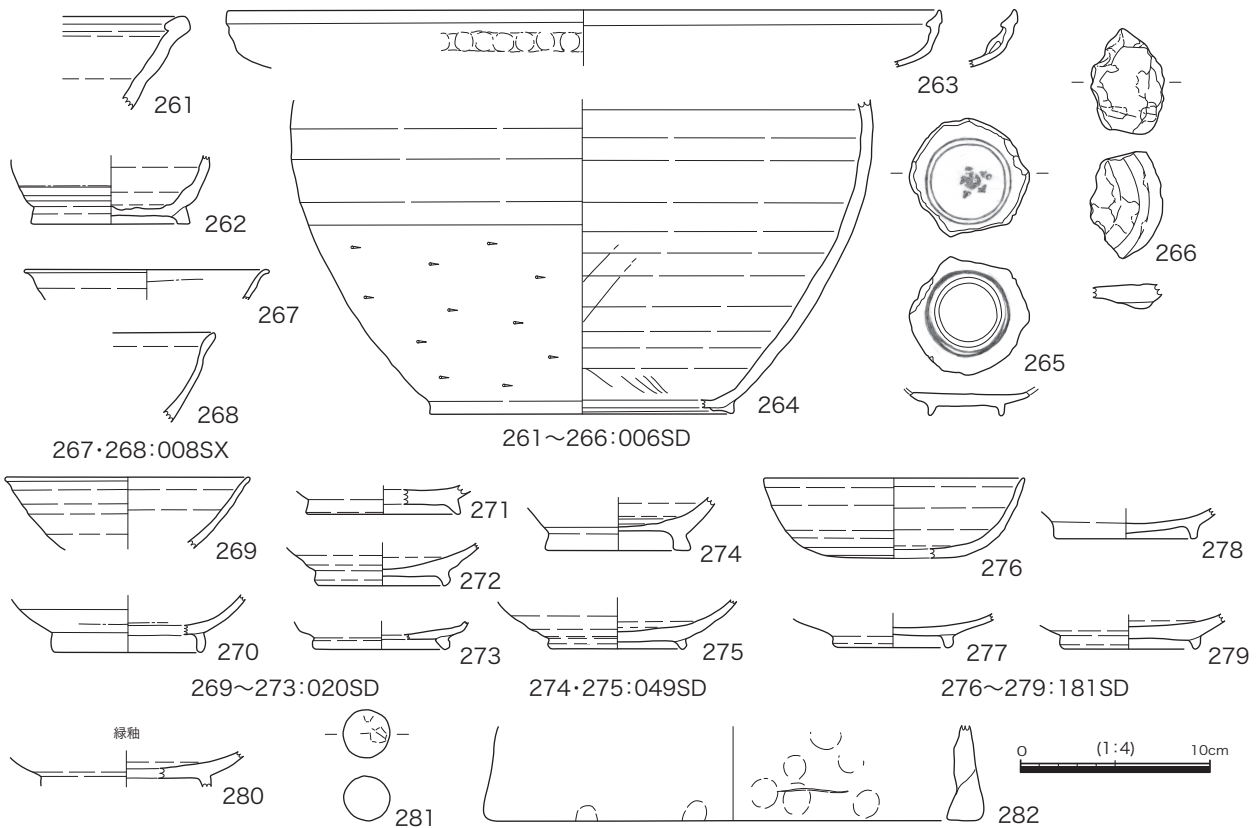
280 は内外面とも緑釉が施される。281 は D 期の陶丸。282 は竈形土器の底部。

(3) 151SK (第 155～159 図)

283～293 は丸底甕。283・284 は口縁部端がわずかに肥厚し、体部外面に細い横位のハケ調整、内面にケズリ成形・調整がみられる。285 も類似するが、体部外面はケズリ成形・調整、内面はイ



第 153 図 土器・土製品：06C 区出土 1 (S=1/4)



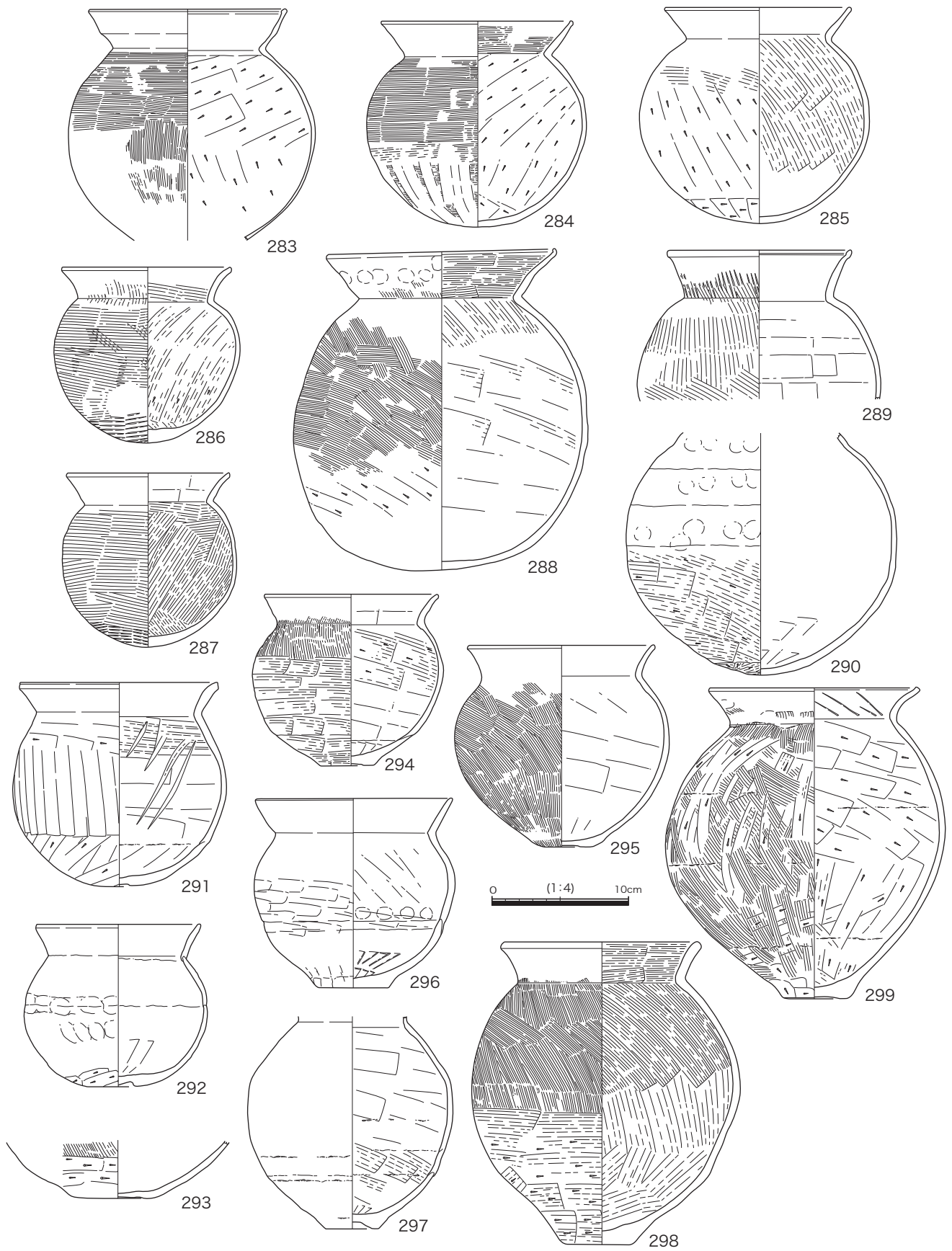
第154図 土器・土製品：06C区出土2 (S=1/4)

タナデ調整される。286・287は同形の甕で、口縁部がやや外反する。体部はタタキ成形後細い横位のハケ調整がなされ、内面はイタナデ調整が行われる。283～287の器壁はいずれも薄い。288は大型の甕で、口縁部端が上方にわずかに延びる。体部は丸くなく、やや歪な形を呈している。291～293は底部外面が凹むもので、ナデ調整が主体となる。294～299は平底甕で、いずれも器壁は厚い。300～313は甕または台付甕。309は体部に深い条痕状の調整がなされる。311の小型台付甕は、脚台部端に外側から粘土が覆って段をなす。大きく逆ハ字状に延びる口縁部をもつ314は、頸部にナデによる低い突帯をもつ。外面全体に煤・炭化物が付着している。315～325はS字状口縁甕で、315～322の口縁部はC類になる。

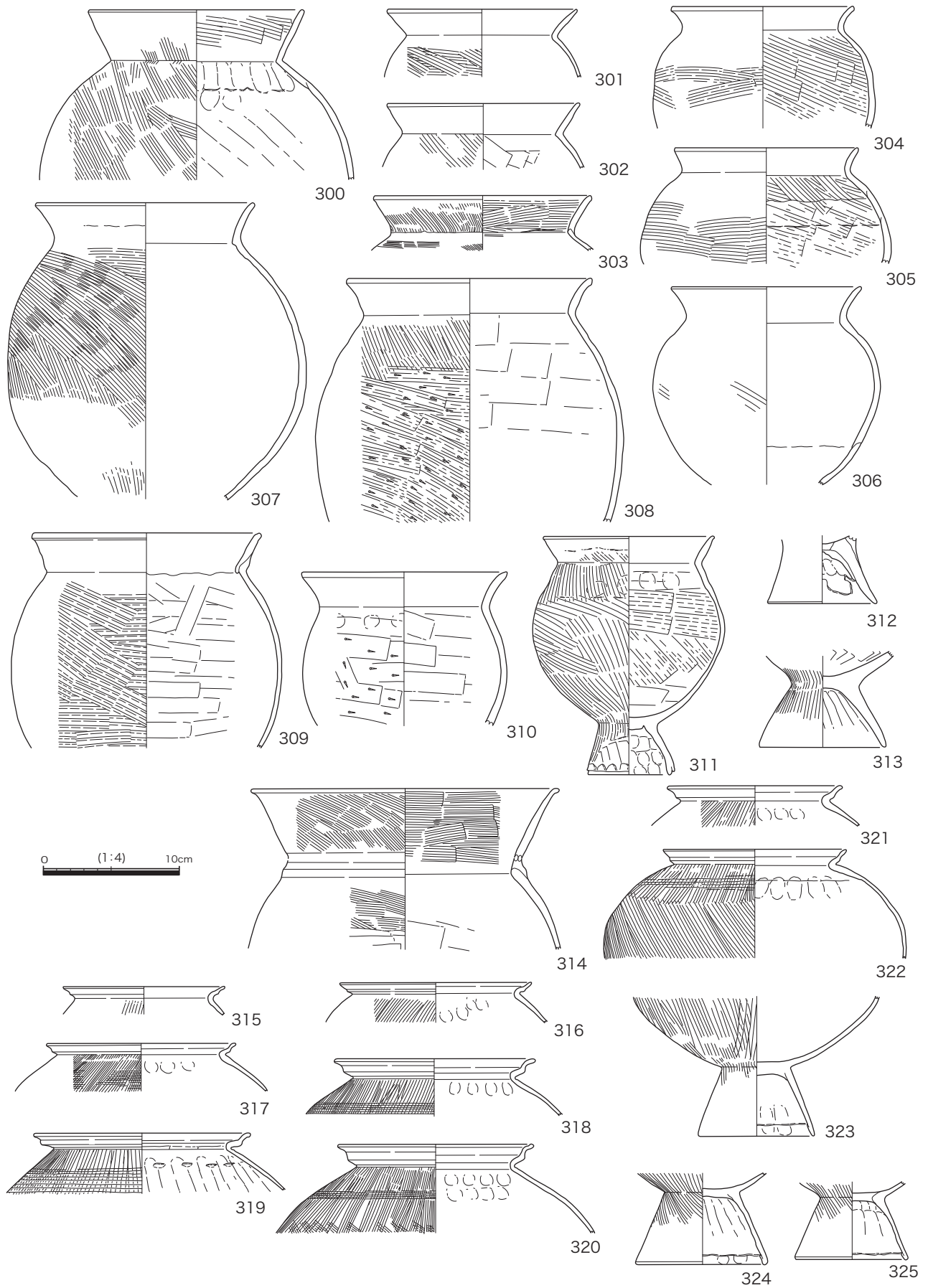
326・327・330はパレススタイル壺で、赤彩はみられない。326は条痕状の深いハケ調整が行われ、クシによる山形文・羽状文・列点文が施される。327はイタナデ及びケズリ後細いミガキ調整がなされる。棒状浮文は4個×4方向。328・329・331は単純口縁壺。332～335は二重口縁壺。336の底部には木葉痕がある。

338～340は大型直口壺。341は壺体部で、焼成後に中位に大きく穿孔がなされる。口縁部も意図的に打ち欠かれた可能性がある。342～344は小型壺で、344は直口壺になるかもしれない。345は短頸壺。346～348は有稜高坏。349・350は屈折脚高坏で、349の脚部には1孔×1方向の透孔がある。351～356は小型高坏。357～361は浅鉢で、有段口縁となる357の内面には放射状の細いミガキが施される。362～366は小型丸底壺及びそれに類するものである。367・368は椀形鉢。

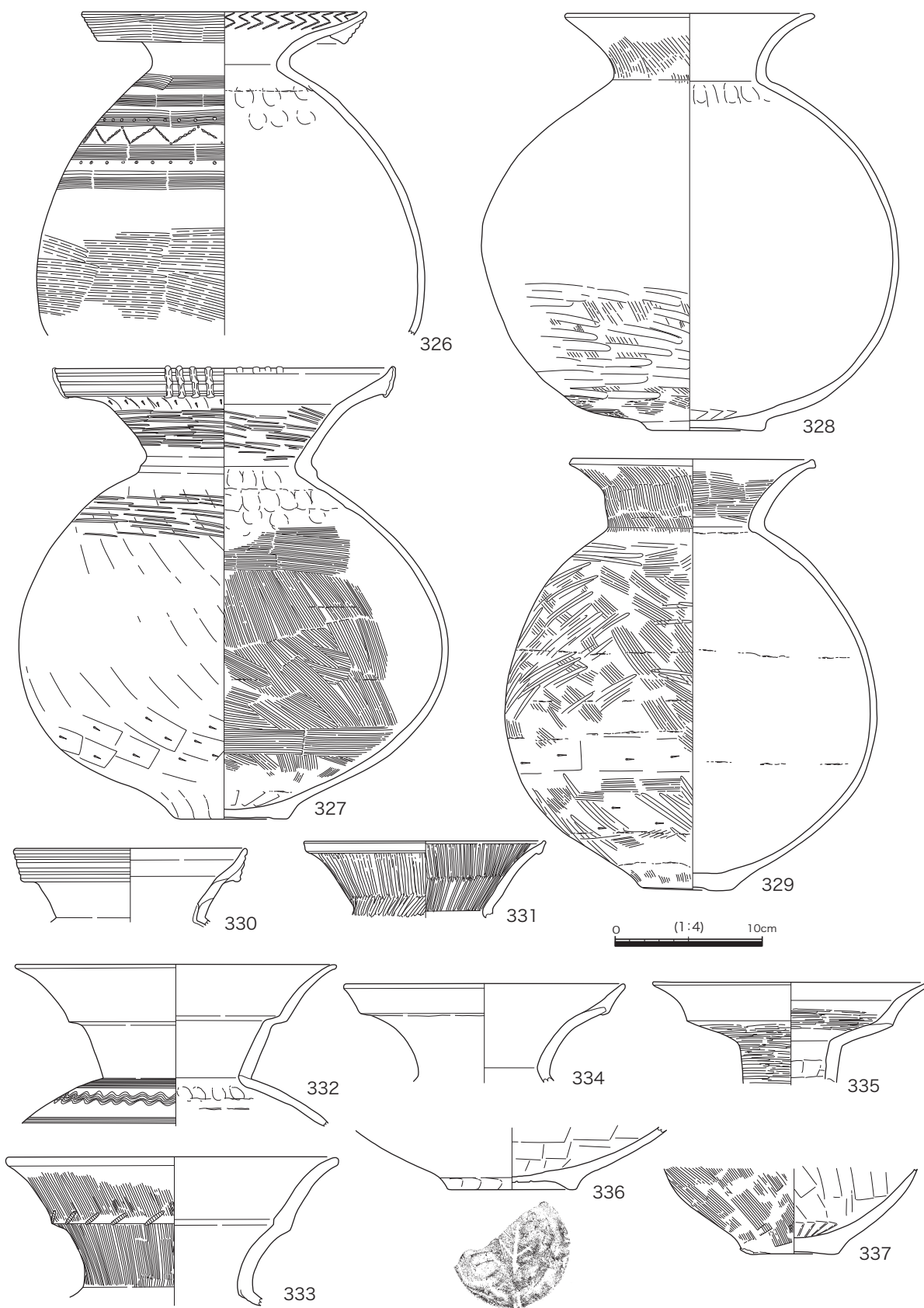
369の長頸壺は底部に焼成前に穿たれた孔がある。370・371は有孔鉢で、いずれも焼成前穿孔される。372は突帯が巡る土器で、ナデ・ケズリ調整される。手焙り形土器か。



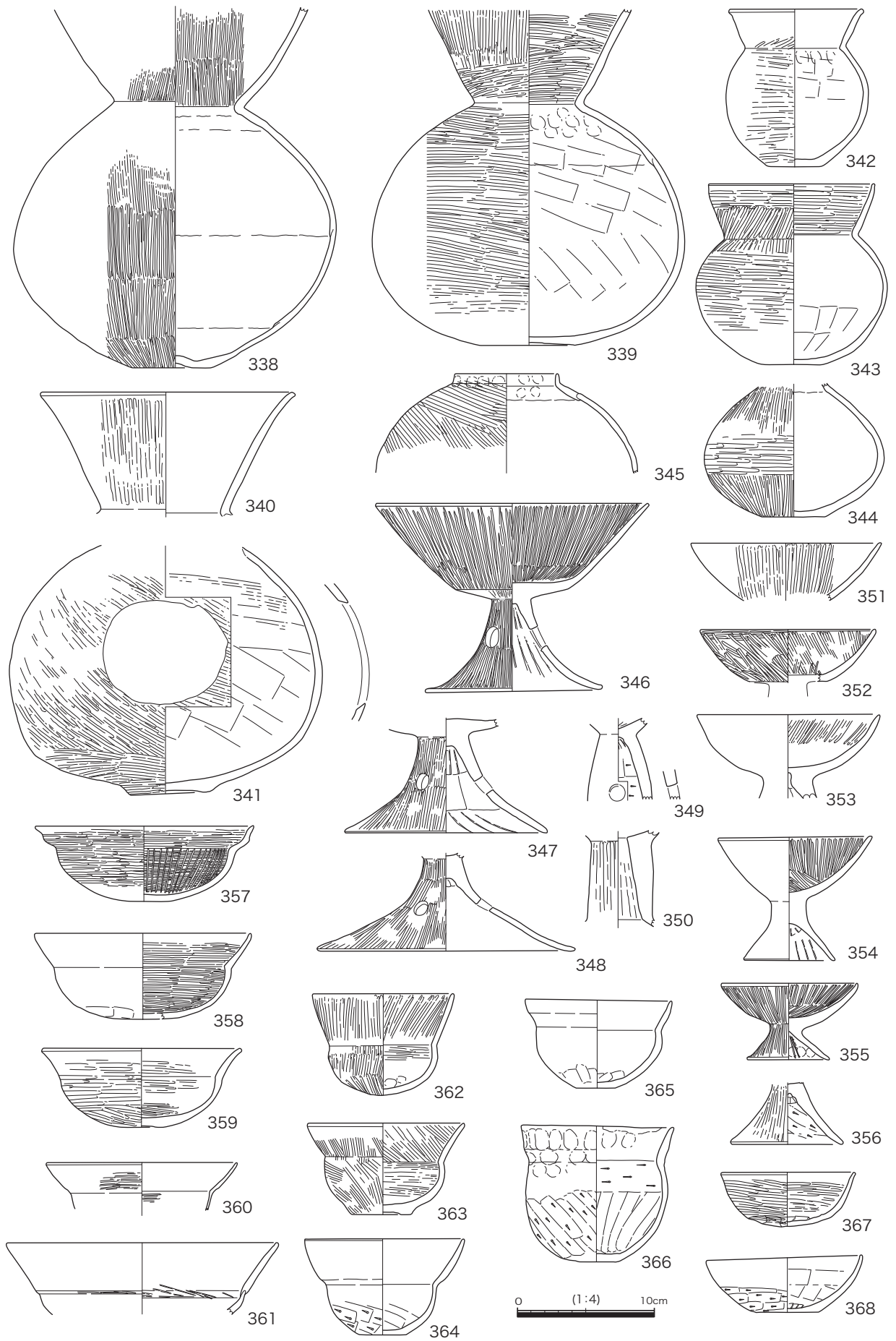
第155图 土器·土製品:06C区151SK出土1 (S=1/4)



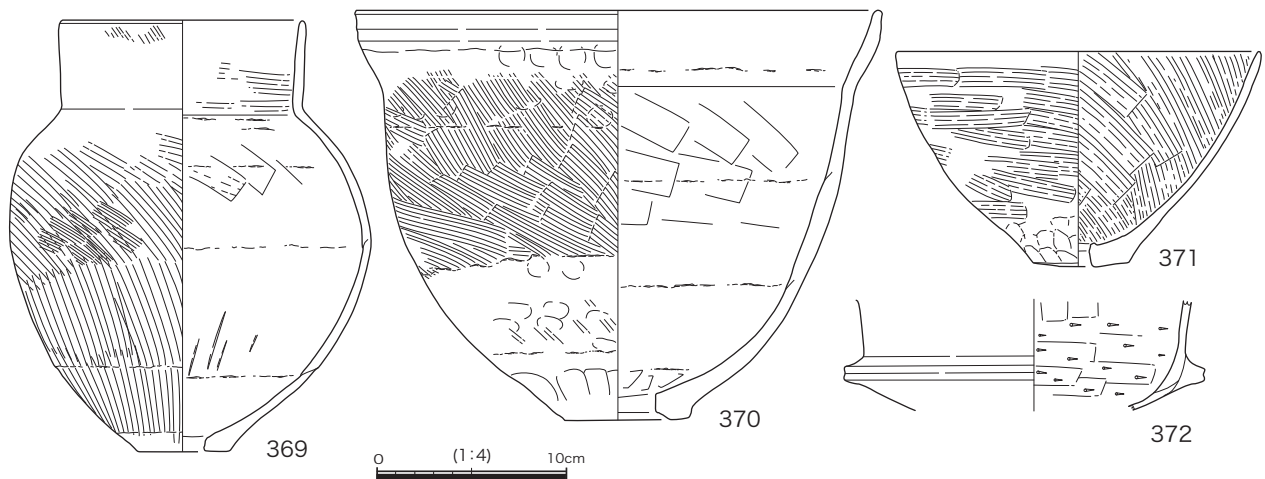
第 156 図 土器・土製品：06C 区 151SK 出土 2 (S=1/4)



第 157 図 土器・土製品:06C 区 151SK 出土 3 (S=1/4)



第 158 図 土器・土製品：06C 区 151SK 出土 4 (S=1/4)



第 159 図 土器・土製品:06C 区 151SK 出土 5 (S=1/4)

6 05B 区 NR01・SU02・SU03

(1) SU02 (第 160～164 図)

373・374・376・378・379 は丸底甕。373 は口縁部がわずかに内湾し、体部外面には細い横位のハケ調整、内面はケズリ成形・調整がなされる。378 の口縁部は上方に延びた後ハ字状に広がる。379 はケズリ状のイタナデ調整がなされ、体部がやや歪になり、頸部の屈折も明瞭ではない。375・377・385 は平底甕。385 の口縁部は左斜め上方に延びた後ハ字状に開くもので、外内面とも煤・炭化物が付着する。

387～393 は台付甕。394～398 は S 字状口縁甕で、397 は D 類、他は C 類になる。

399～408 は有段口縁壺。403 は体部上半に、不揃いな工具で直線文を施した後にヘラによる波状文を全周の約 1/2 描いている。410 については煤・炭化物が付着していることからみて、平底甕の可能性が高い。411～415 は直口壺か。411 の底部外面にはヘラによる不定形な沈線がある。416・417 は単純口縁壺。

418 は有稜高坏か。419～455 は屈折脚高坏になる。451～455 には 1 孔×1 方向の透孔がある。

456～479・489 は小型壺。480～483 は小型丸底壺に類するもので、486・487 は鉢、488 は有孔鉢。484 は器台。

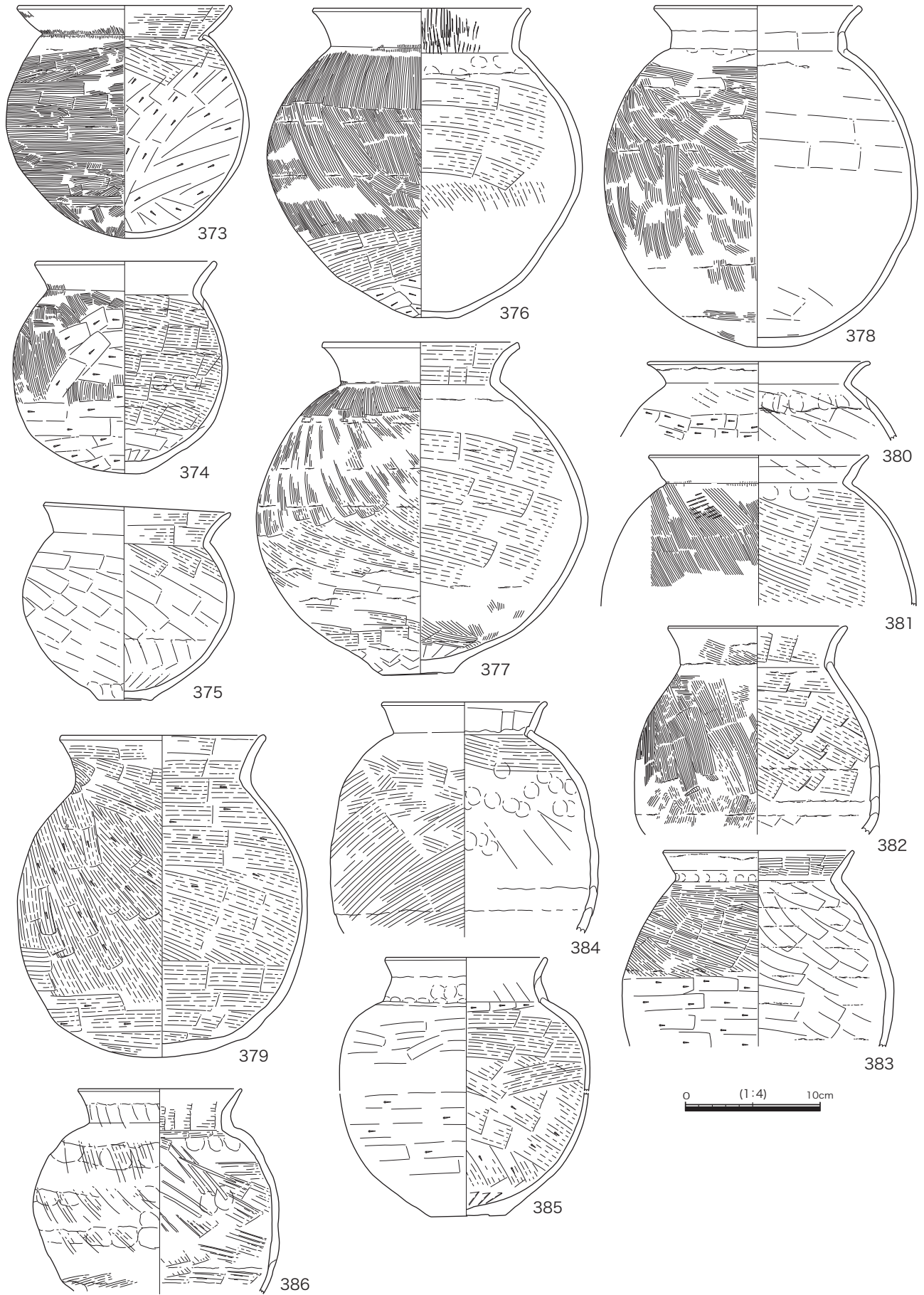
(2) SU03 (第 166 図)

492・496 は平底甕。496 は口縁部が上方に延び、体部が横に広がり扁平な形態をなし、底部が大きい。煤・炭化物が付着する。493 は平底甕。491 は小型甕か。494・495 は台付甕脚台部で、494 の上位にはタタキ成形の痕跡がみられる。497 は有段口縁壺で、口縁部に羽状、体部に直線・波状・連続刺突文が施される。498～500 は二重口縁壺。501 は有孔鉢。502・503 は有稜高坏、504・505 は屈折脚高坏、506 は器台。

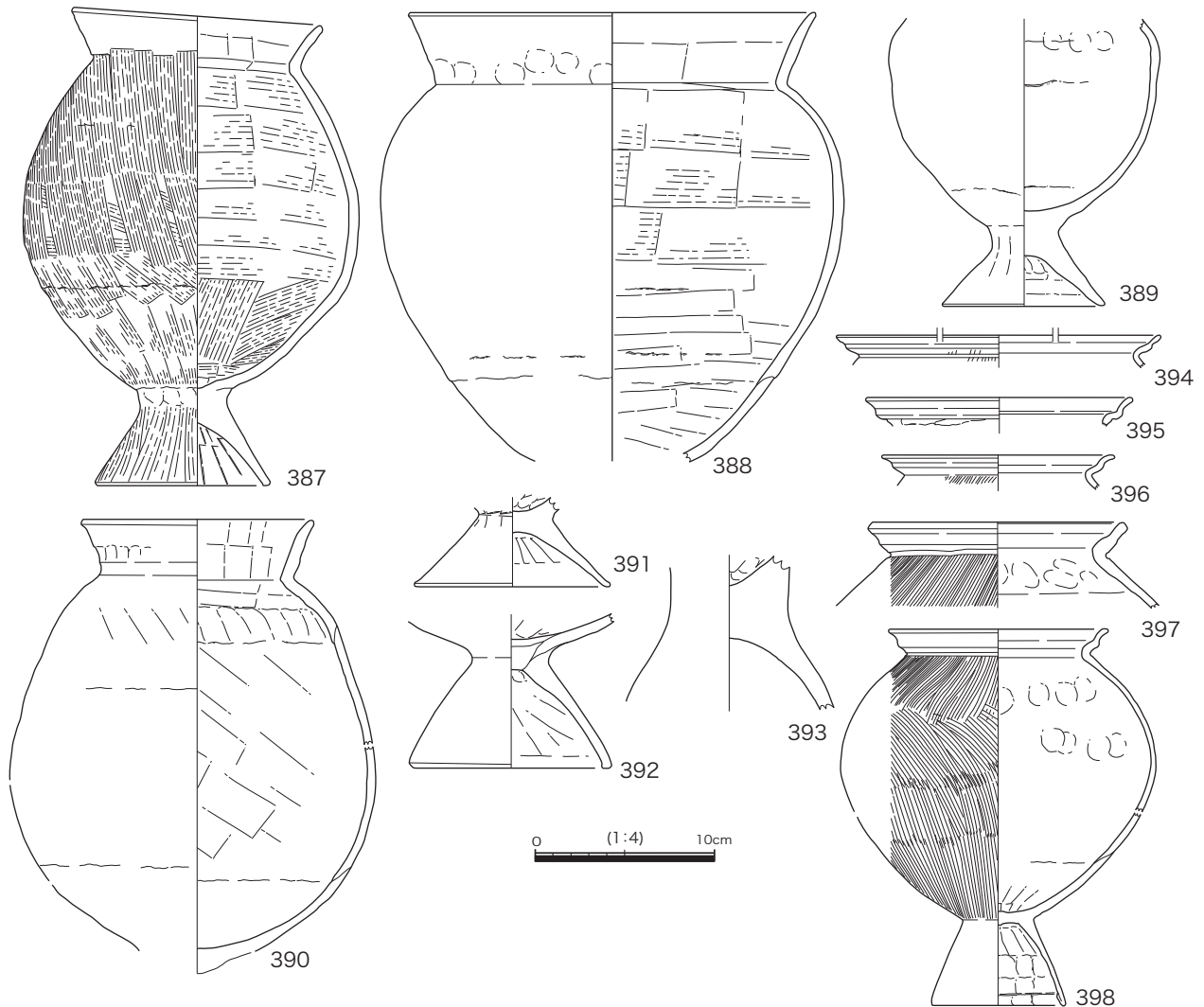
(3) NR01

1 層出土 (第 167 図) 509 は平底甕。510 は有段口縁壺。511 の甕体部には、煤・炭化物の上に編み物の痕が残る。512 は台付甕、513 は小型高坏か。

2 層出土 (第 168 図) 514～518 は丸底甕。514・515 は横位に 516 は上方に口縁部端が延び肥厚する。517 はナデ、518 はイタナデによりわずかに有段状を呈する。519～523 は平底甕または台付甕。524・525 は S 字状口縁甕 C 類。526 は二重口縁壺。527～534 は屈折脚高坏。535～538 は小型壺。539 は底部が欠損しているのではっきりしないが、有孔鉢になるか。540 は浅鉢。541 は器台。



第160図 土器・土製品：05B区SU02出土1 (S=1/4)

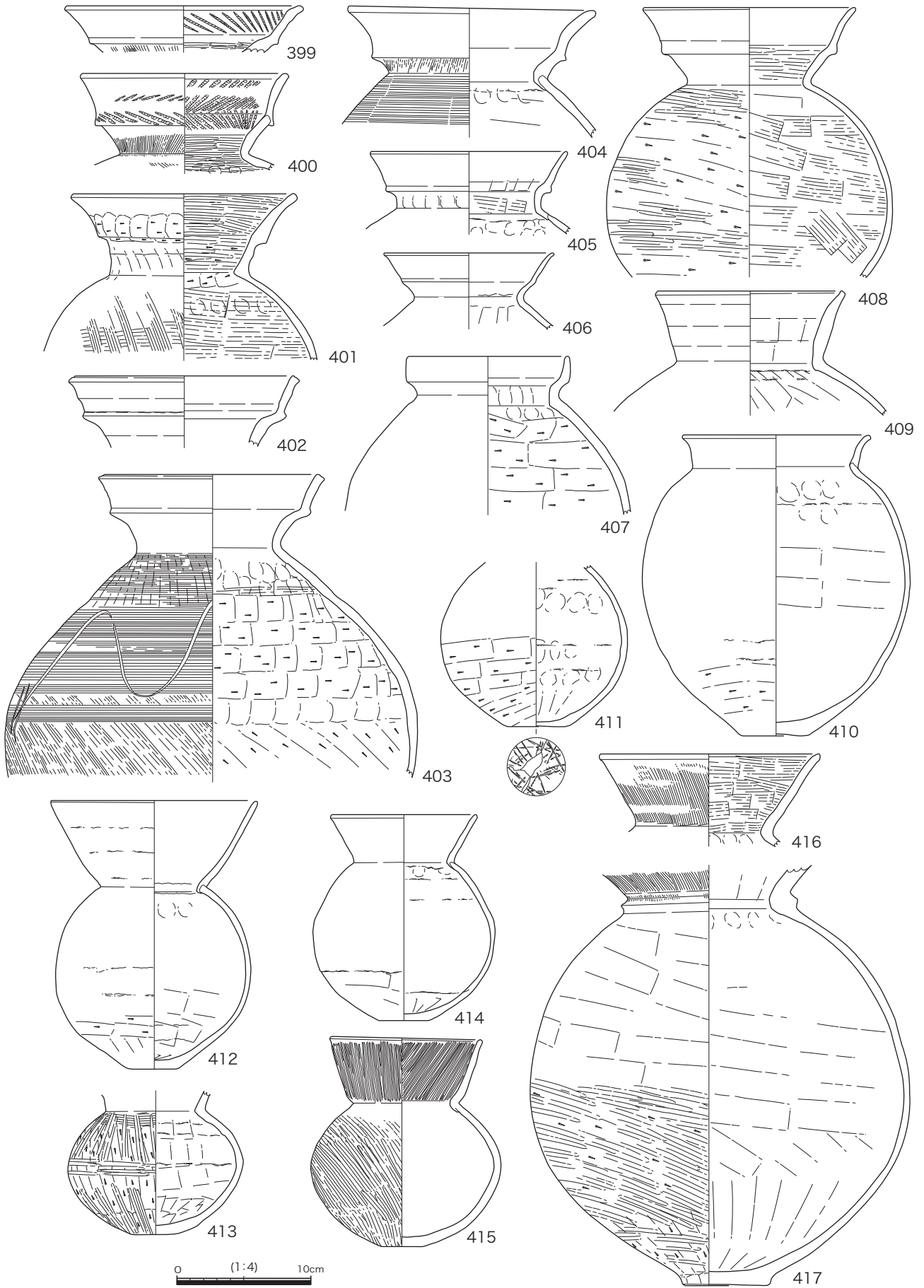


第 161 図 土器・土製品：05B 区 SU02 出土 2 (S=1/4)

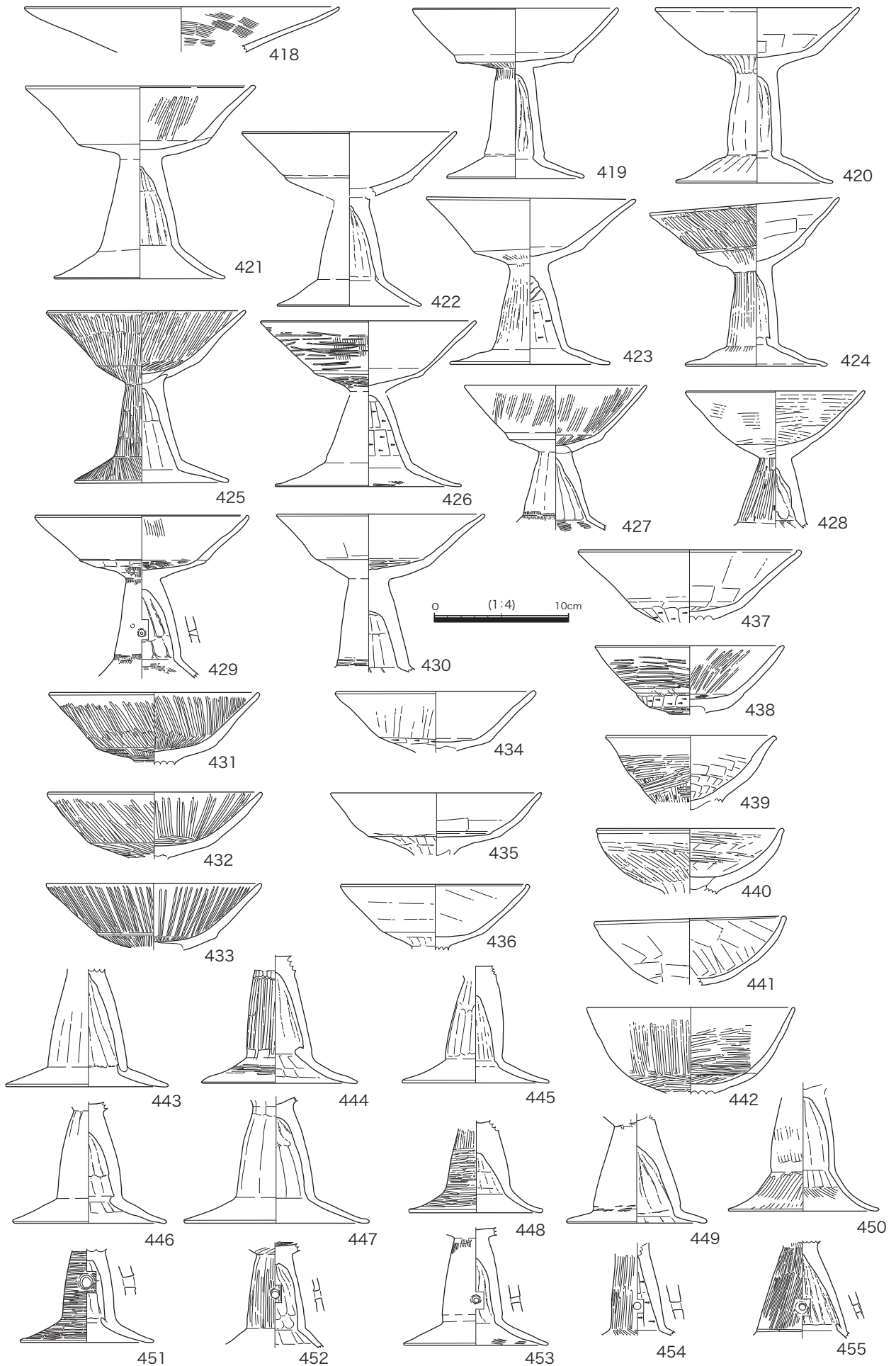
3層出土(第 169～173・175～178 図) 545～568 は丸底甕になると思われ、口縁部端は横位または上方に延びて肥厚する。545 は有段口縁をなし、体部内面は横位のケズリ成形・調整がみられる。558 は斜位のタタキ成形の後横位のハケ調整がなされる。569～581 は底部が欠損する甕。579 はクシまたは棒状工具により、条痕状の調整が行われる。

582・583・585 は大型鉢で、このうち 582 のみ煤・炭化物が付着する。584 は多孔鉢または長頸壺。底部に焼成前に 21 個の孔が開けられるが、1 孔のみ未貫通となっている。586～600 は平底甕。600 は口縁部が大きく逆八字状に外反して延び、体部が低く扁平になるもので、外面には煤・炭化物が付着する。601・604～617 は台付甕。601(第 173 図)の体部上位にはヘラによるバチ状形の線刻がなされる。線刻は上下の横線—左右の縦線—中央の縦線とそこから延びる横線の順に描かれている。605 は体部の粘土が下位で厚くなり、不定形な段をなす甕で、有稜高坏・器台の脚のような 1 孔×3 方向の透孔が付く脚台部をもつ。618～630 は S 字状口縁甕。口縁部が遺存するものは全て C 類になる。

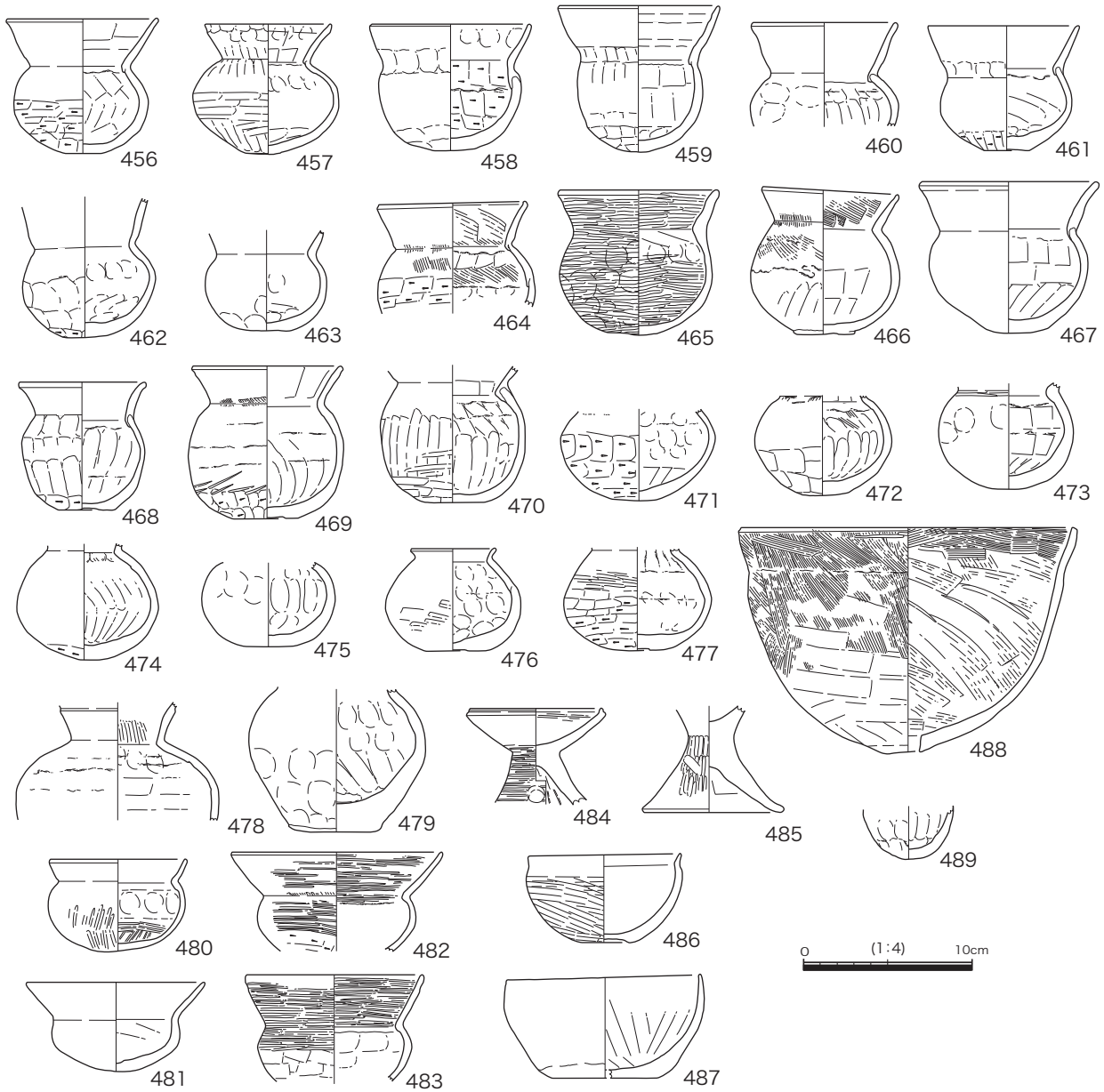
631～633 は柳ヶ坪型壺で、634・635 は有段口縁壺。632 は口縁部に 2 個×1 方向、頸部に 1 個×2 方向の焼成前孔が認められる。637～639 は二重口縁壺。640～643 は単純口縁壺。643 は直立する口縁部と最大径が下位にある扁平な体部をもち、底部外面には木葉痕がみられる。644・



第 162 図 土器・土製品：05B 区 SU02 出土 3 (S=1/4)



第163图 土器・土製品：05B区SU02出土4 (S=1/4)



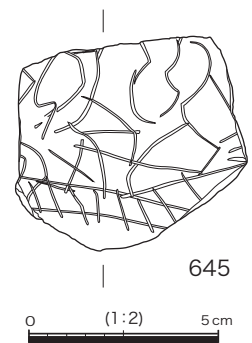
第 164 図 土器・土製品：05B 区 SU02 出土 5 (S=1/4)

645 は壺体部片で、644 はクシによる直線文と波状文が、645 (第 165 図) はヘラにより梯子状・弧状の線刻が描かれる。

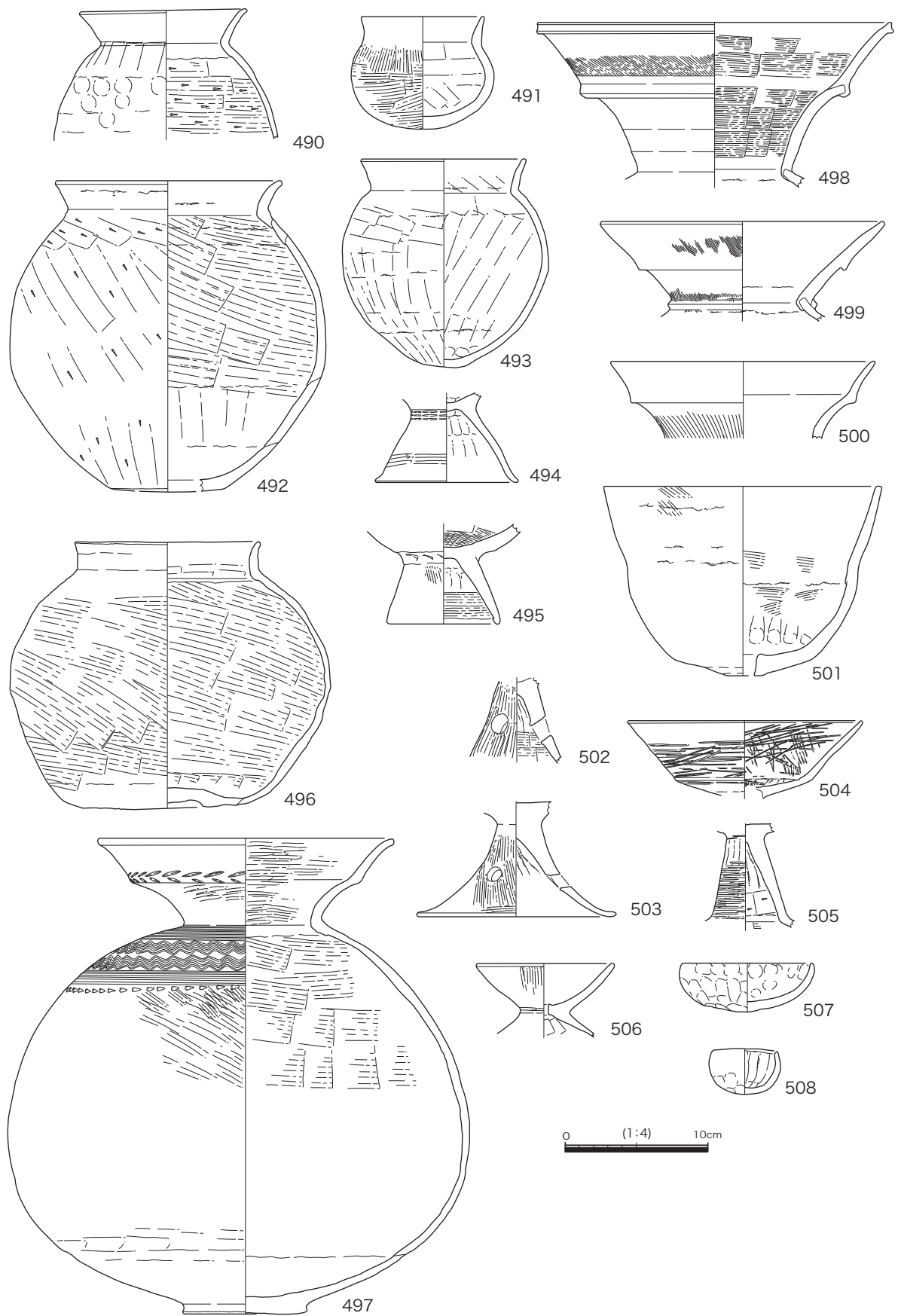
646 ~ 648 は壺体部。651 ~ 661 は直口壺。大型の 651 の底部外面には木葉痕がある。650 は口縁部が内湾し、底部外面が凹むヒサゴ形壺になる。664 は頸部が細く口縁部が長い細頸直口壺。663・665 は口縁部が長く延びる土器で、煤・炭化物も付着しており甕に分類される可能性もある。

666 ~ 674・676・677 は有稜高坏。675 は別器種になる可能性がある。678 ~ 702 は屈折脚高坏。701 の脚部には 1 孔×1 方向の透孔がみられる。703 は小型高坏か。

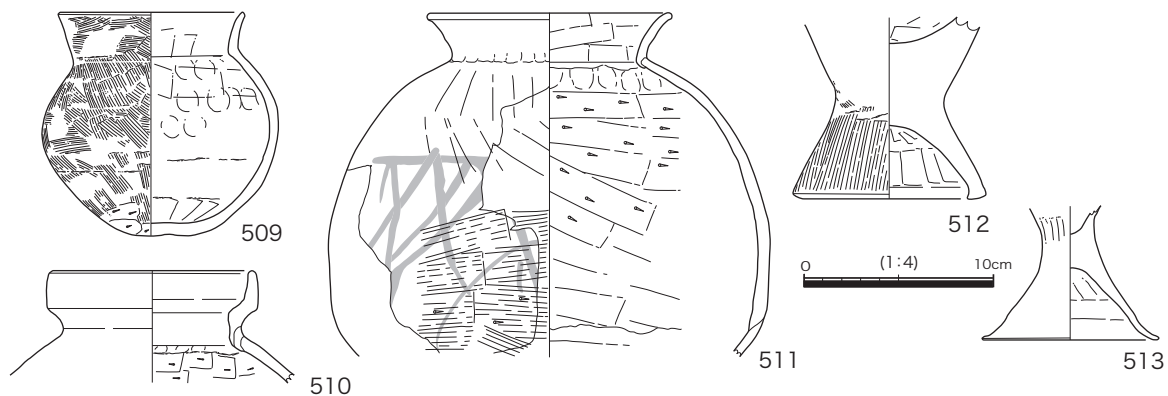
704 ~ 715 は小型壺。723 は小型壺に脚台が付くもので、小型壺+器台の複合器種の可能性もある。716 ~ 722 は小型丸底壺に類する壺。724 ~ 732 は浅



第 165 図 線刻土器 645 (S=1/2)



第 166 图 土器・土製品：05B 区 SU03 出土 (S=1/4)



第 167 図 土器・土製品:05B 区 NR01 1 層出土 (S=1/4)

鉢で、724～726 は有段口縁をなす。733～739 は器台。735 の外面には赤彩が施される。740 は鼓形器台。741 は小型高坏。742～747 は椀形の鉢、748・749 は鉢。750 は扁平な鉢または壺になる。

4 層・5 層出土 (第 179 図) 753～766 は 4 層より出土している。758 は柳ヶ坪型壺。760 の壺底部外面には木葉痕がみられる。762 の長頸壺の体部中位には焼成後の孔が穿たれており、さらに口縁部の一部についても打ち欠かれている可能性がある。763 は破面が打ち欠かれた加工円盤。764 は坏部内面に直線文と山形文が描かれる。767～772 は 5 層より出土している。767～770 は A 期の土器片で、768～770 には条痕文が施される。771 は A-2 期の甕口縁部か。772 は B-1 期の壺体部。

7 06C 区 001NR・234SU

(1) 234SU (第 174・182～189 図)

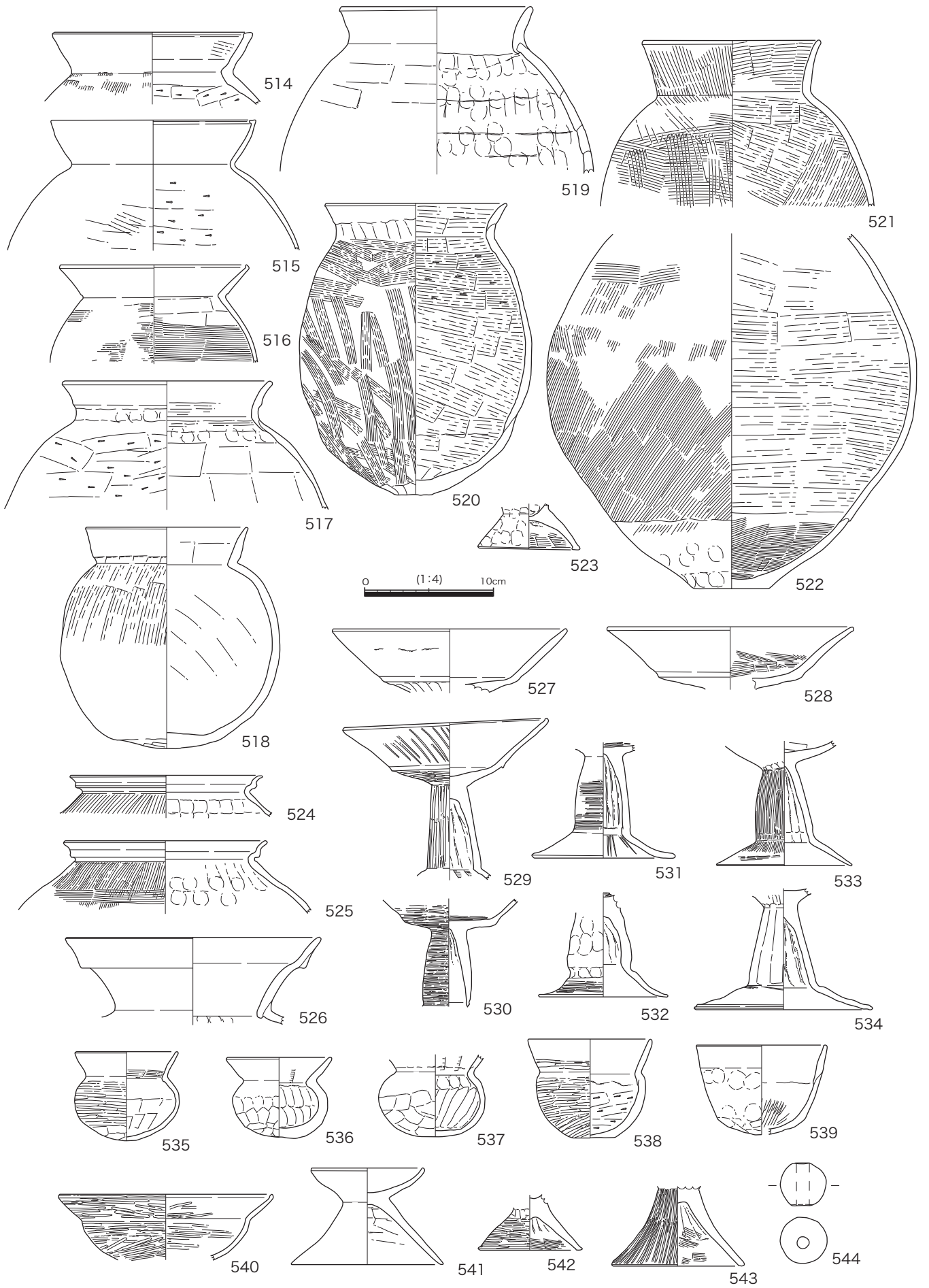
779～781 は丸底甕。782～785 は平底甕で、782 は有段口縁となり、784 はイタ状工具による粗いハケ調整がなされる。787 は壺の可能性もある。786・788～816 は甕口縁～体部。792・800・803・805・811 には粗い条痕状の調整が行われる。814 は口縁端が外に押されて片口状になる。815 には頸部に突帯が巡る。818・819 は平底甕または壺になるもので、817 も含め煤・炭化物が付着する。820～856 は台付甕。821 には高坏の脚状の高い脚台が付く。824～826 は S 字状口縁甕で、824・825 は C 類になる。857 は蓋のつまみ部。859～862 は鉢で、858 は浅鉢、860～862 は有孔鉢と思われるが、860・861 は壺の可能性もある。

863～867 はパレススタイル壺。863・864 は赤彩が施される。868・871 は柳ヶ坪型壺で、155 の底部外面には木葉痕がある。また壺底部の 875 にも木葉痕がみられる。872・873・874・876 も加飾壺である。

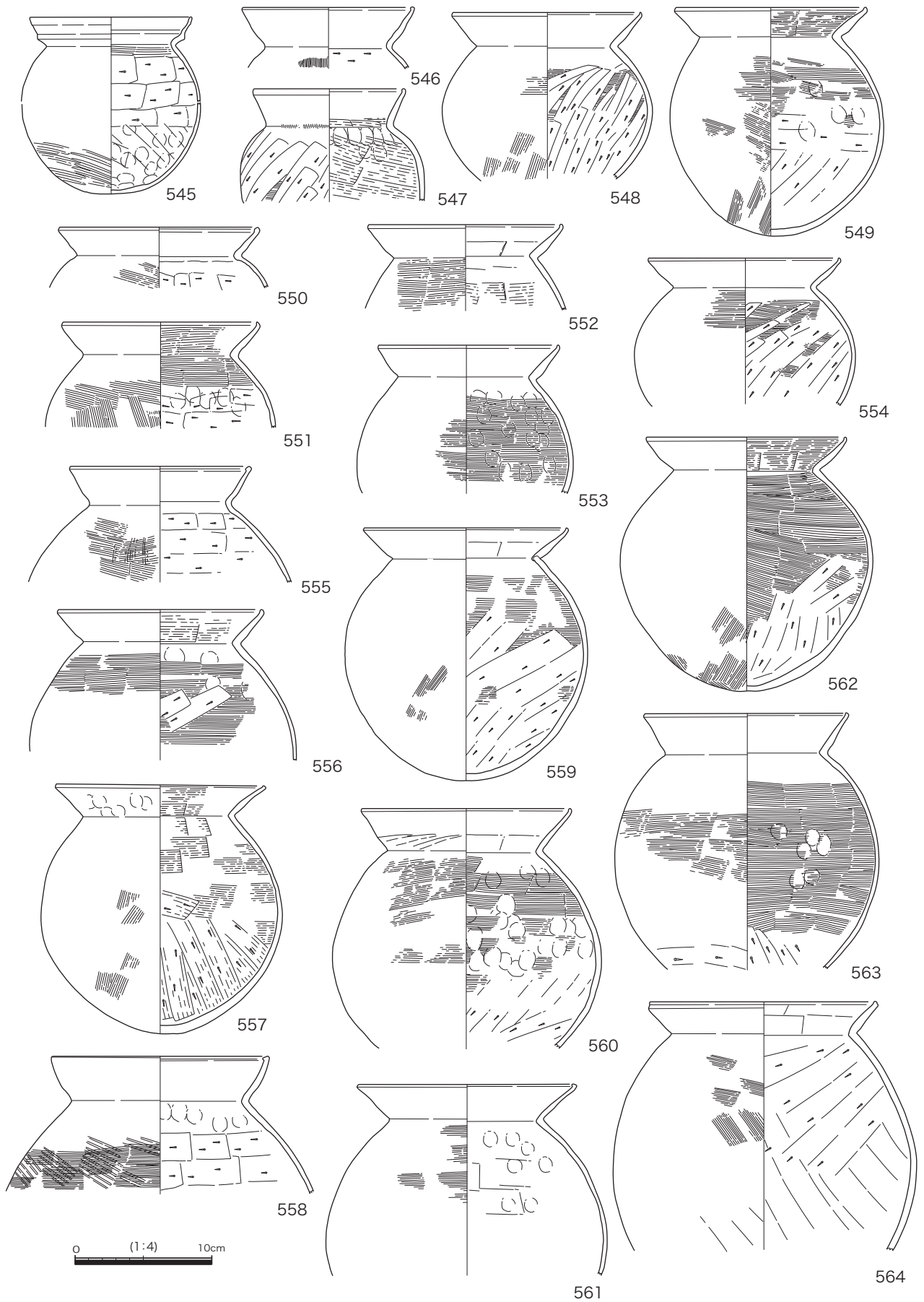
883～894 は二重口縁壺。895～904 は直口壺、905・906 は短頸壺か。907 (第 174 図) はへらによって人面が線刻された壺体部片。土器片の部位は体部肩から中位と思われ、目一放射状の弧状線の順に描かれている。

910～923 は有稜高坏で、952 はその模倣品か。924～951 は屈折脚高坏で、932・933 の屈折部に 1 孔×3 方向の透孔が穿たれる。953 は外来系の高坏。

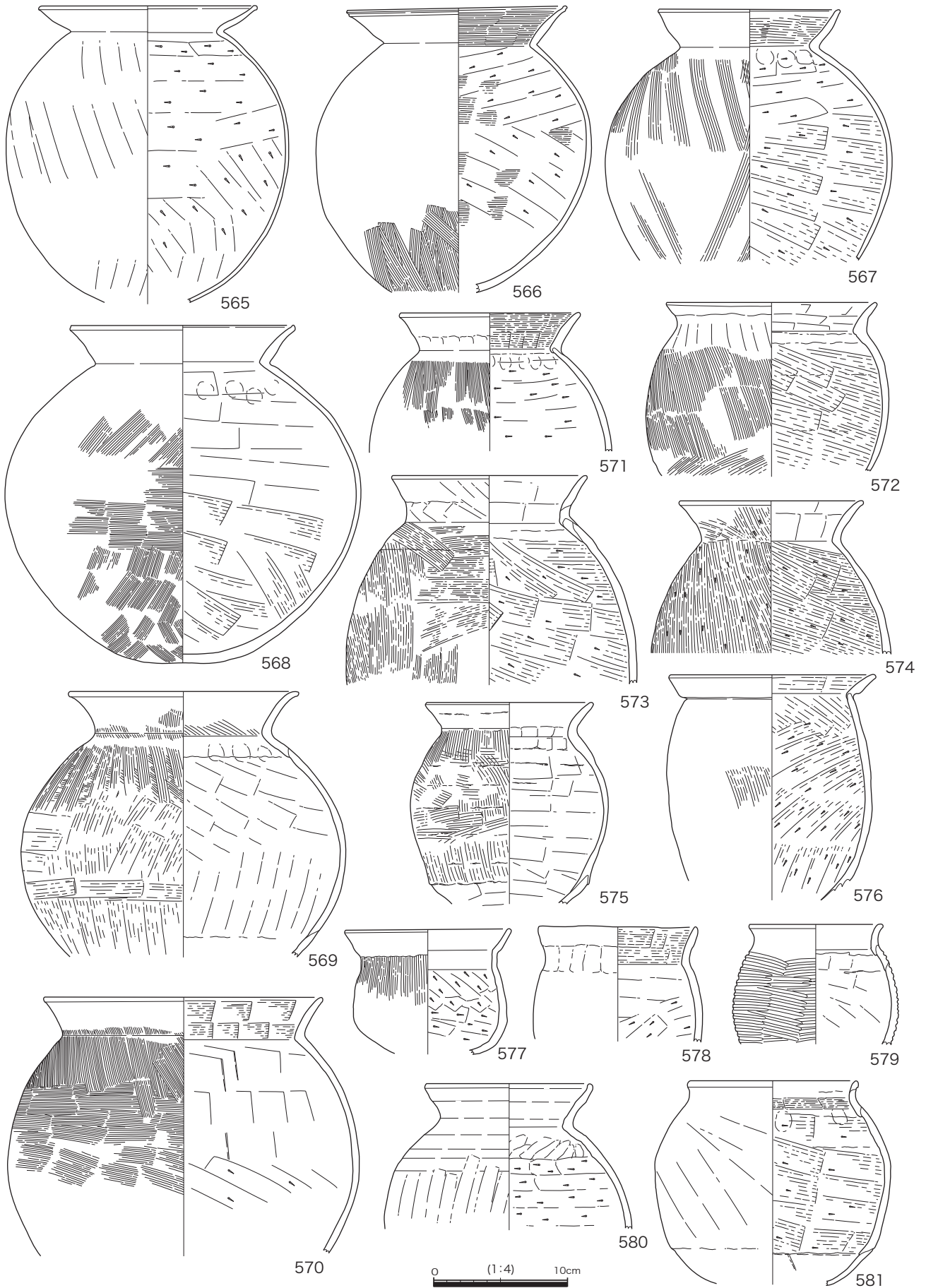
954～962 は小型壺、963～965 は鉢に分類できるか。966～970 は椀形鉢、971～973 は小型土器、974～982 は器台となる。975 の脚部裾にはタタキ成形・調整痕がみられる。



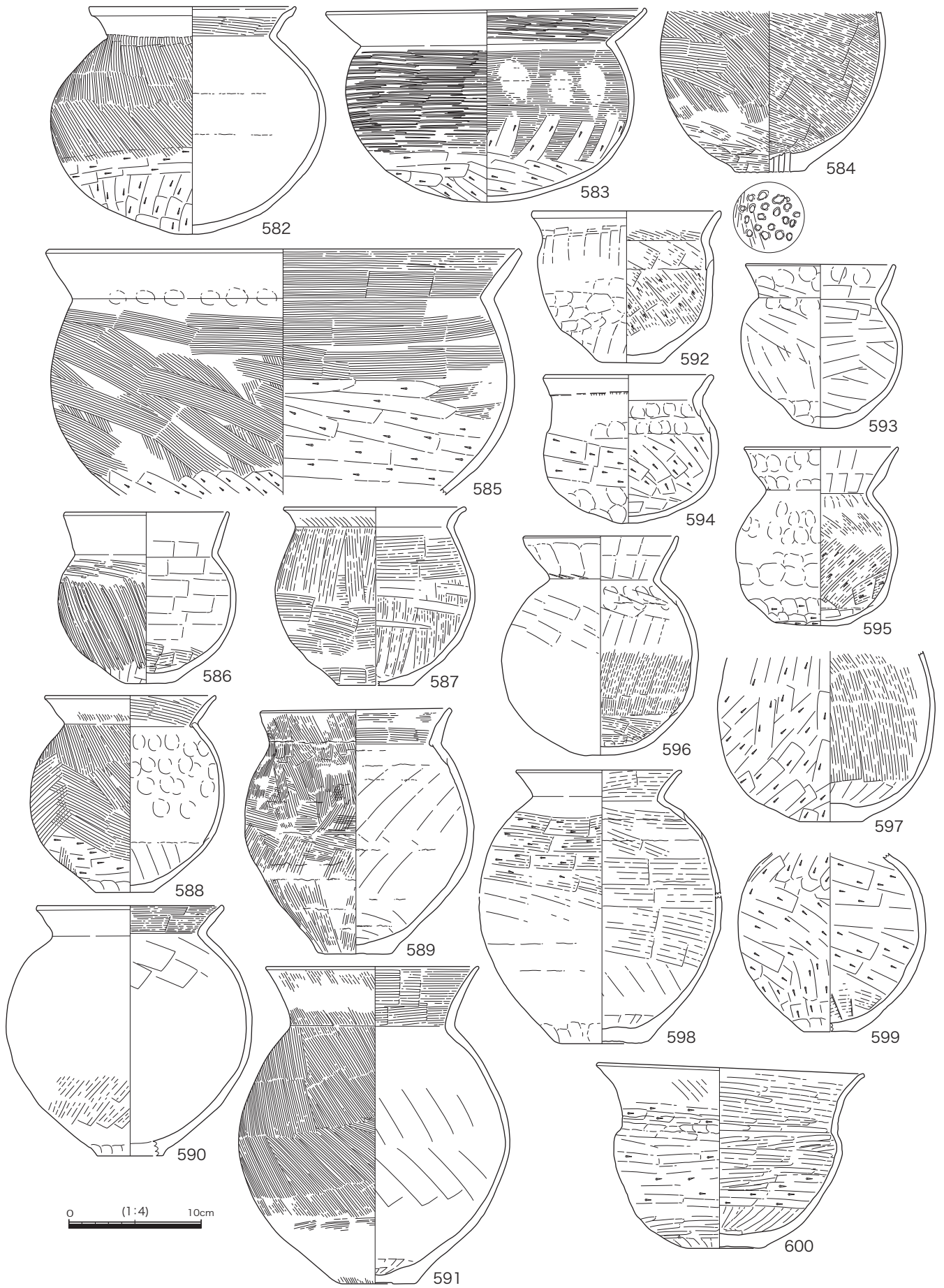
第 168 图 土器·土製品:05B 区 NR01 2 層出土 (S=1/4)



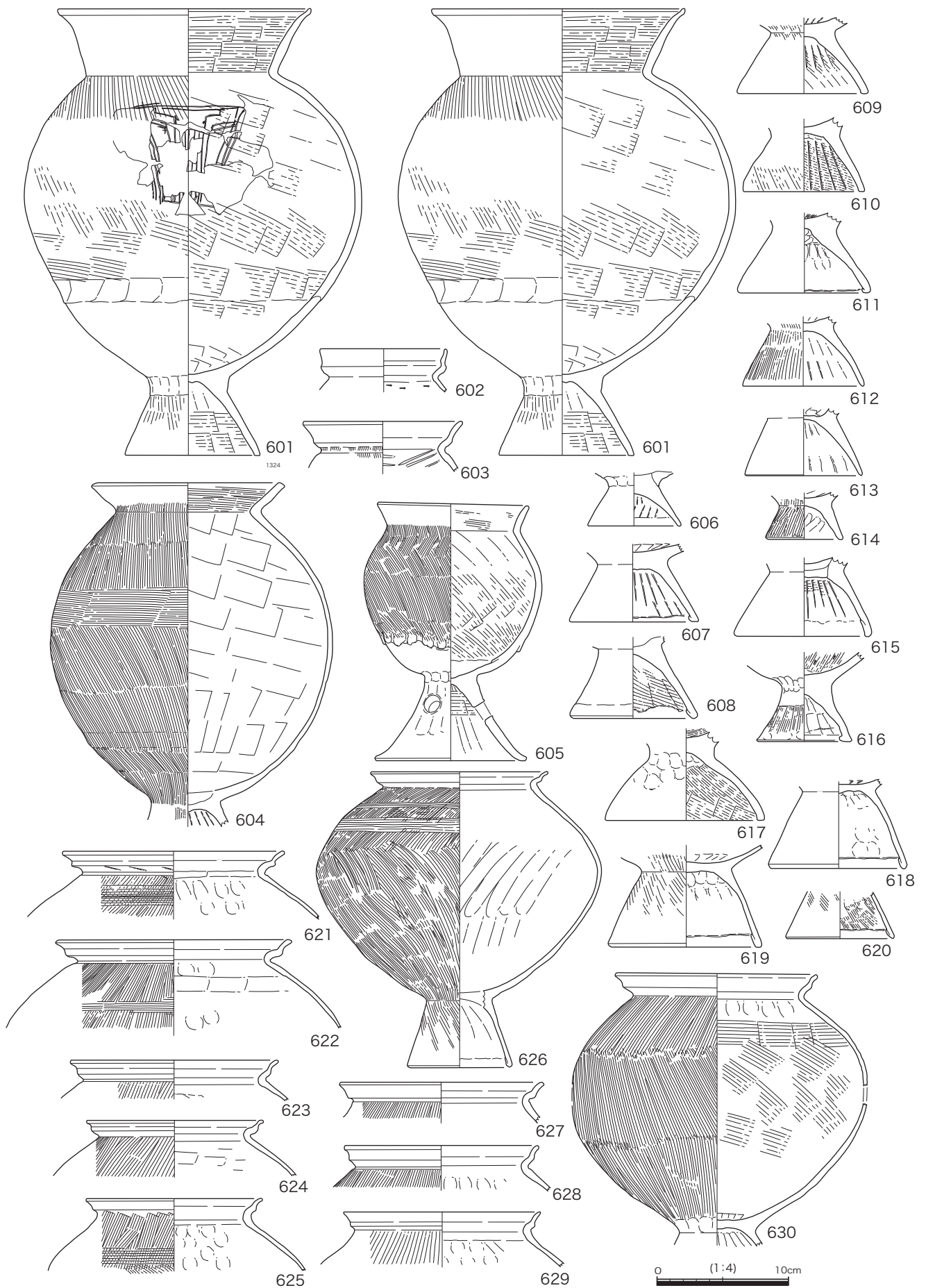
第 169 図 土器・土製品:05B 区 NR01 3 層出土 1 (S=1/4)



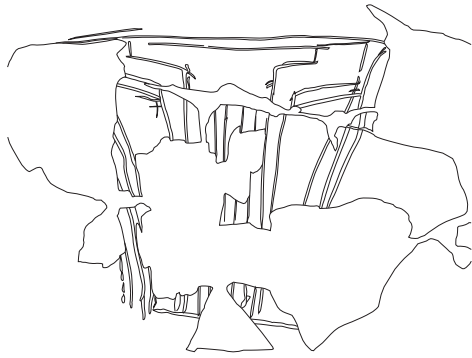
第 170 図 土器・土製品:05B 区 NR01 3 層出土 2 (S=1/4)



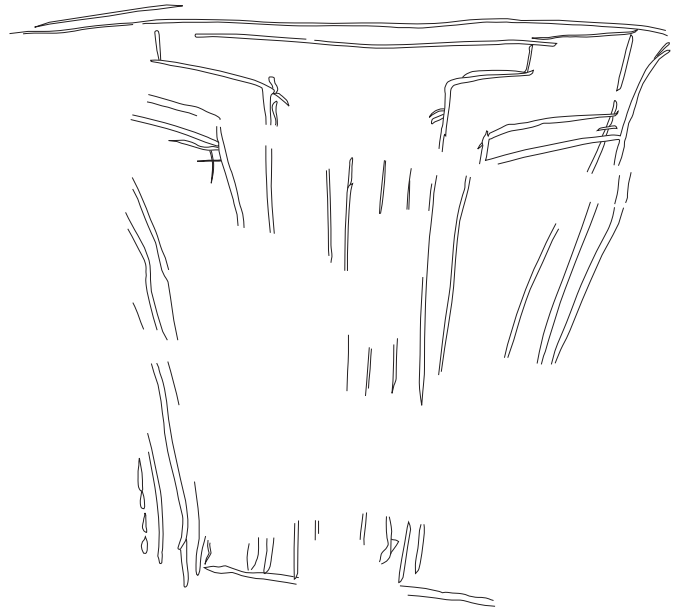
第 171 図 土器・土製品:05B 区 NR01 3 層出土 3 (S=1/4)



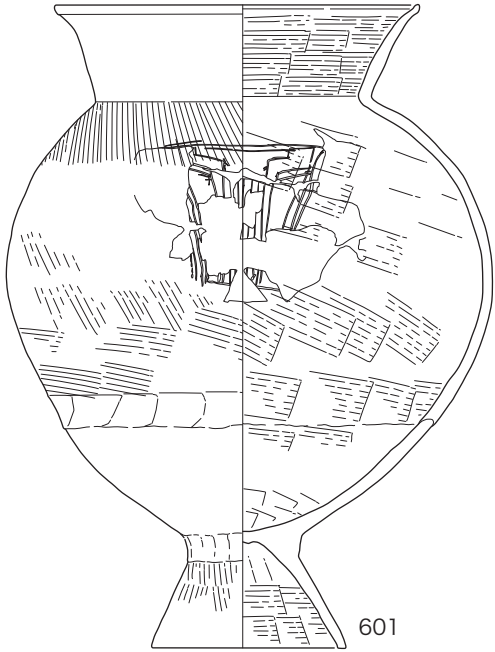
第 172 图 土器・土製品:05B 区 NR01 3 層出土 4 (S=1/4)



0 (1:2) 5cm

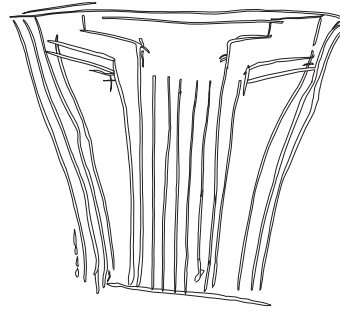


0 (1:1) 2cm



601

0 (1:4) 10cm



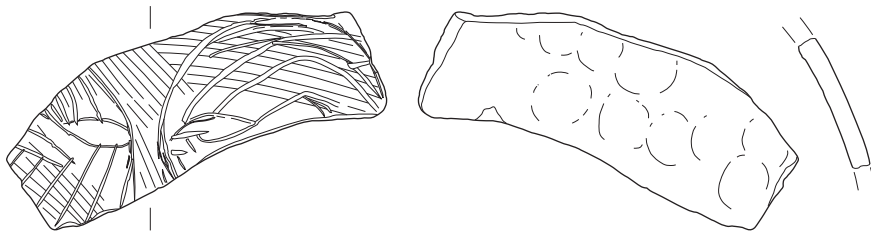
復元図

0 (1:2) 5cm

第 173 図 線刻土器 601 (S=1/4、1/2、1/1)



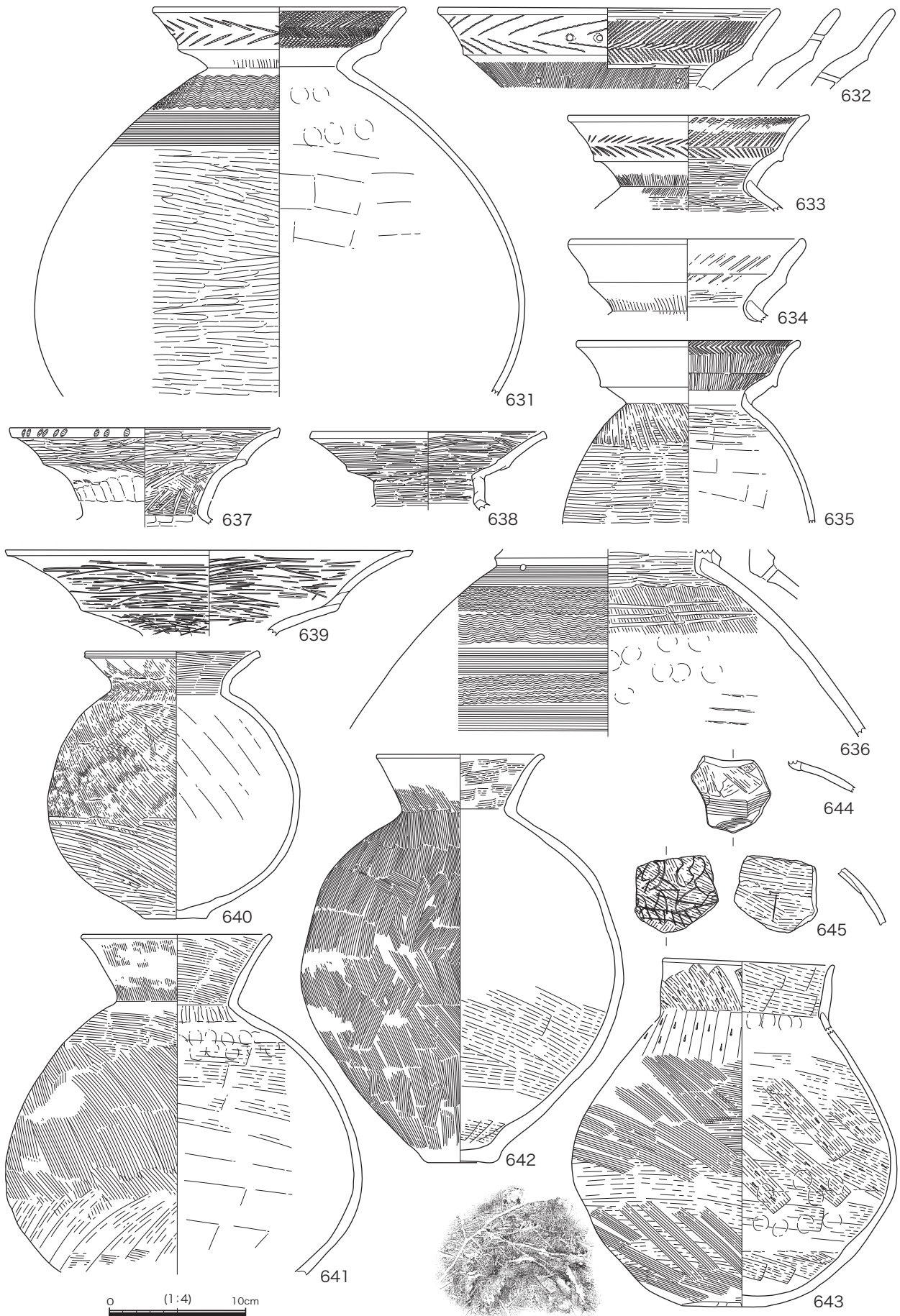
0 (1:1) 2cm



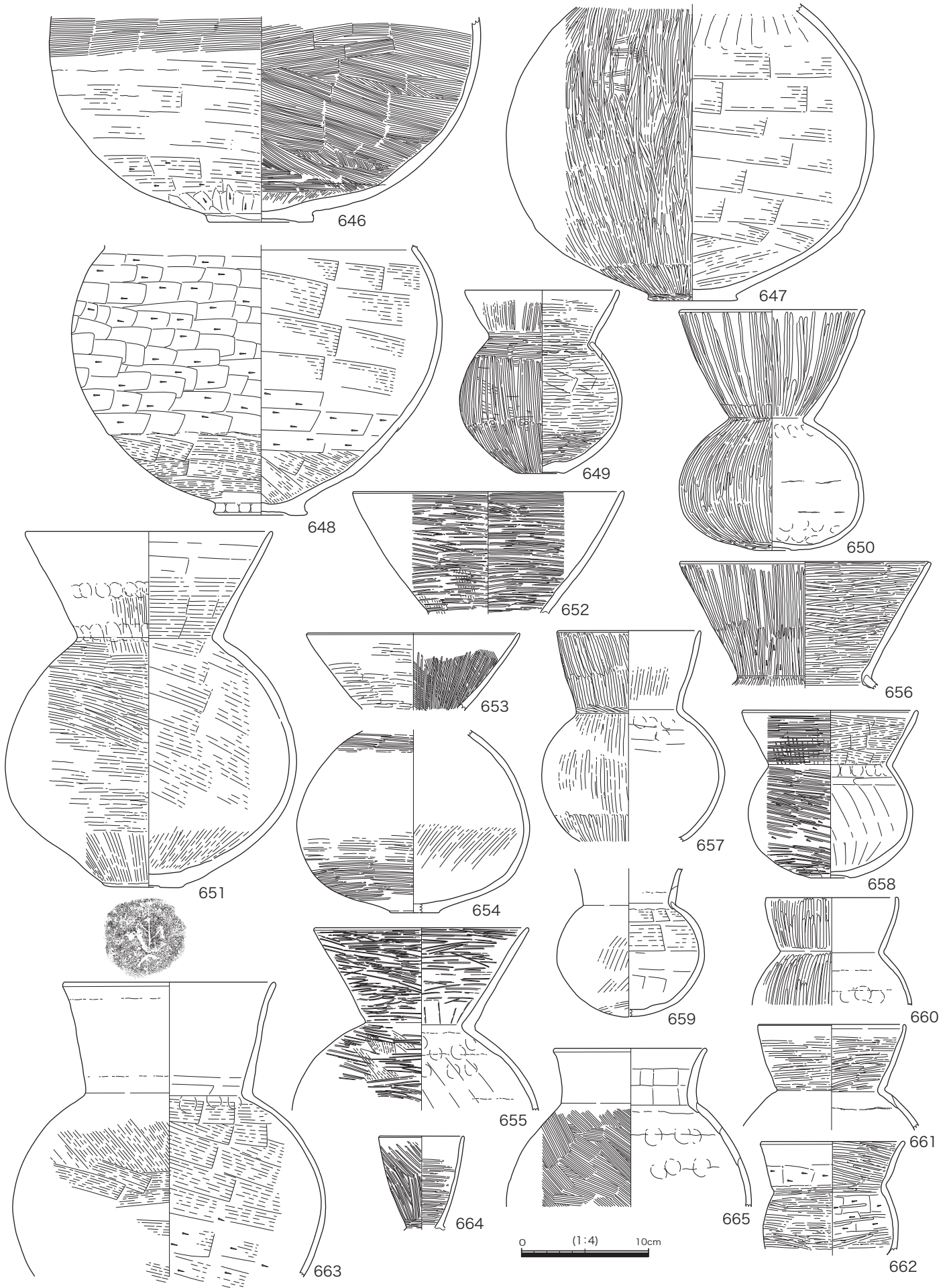
907

0 (1:2) 5cm

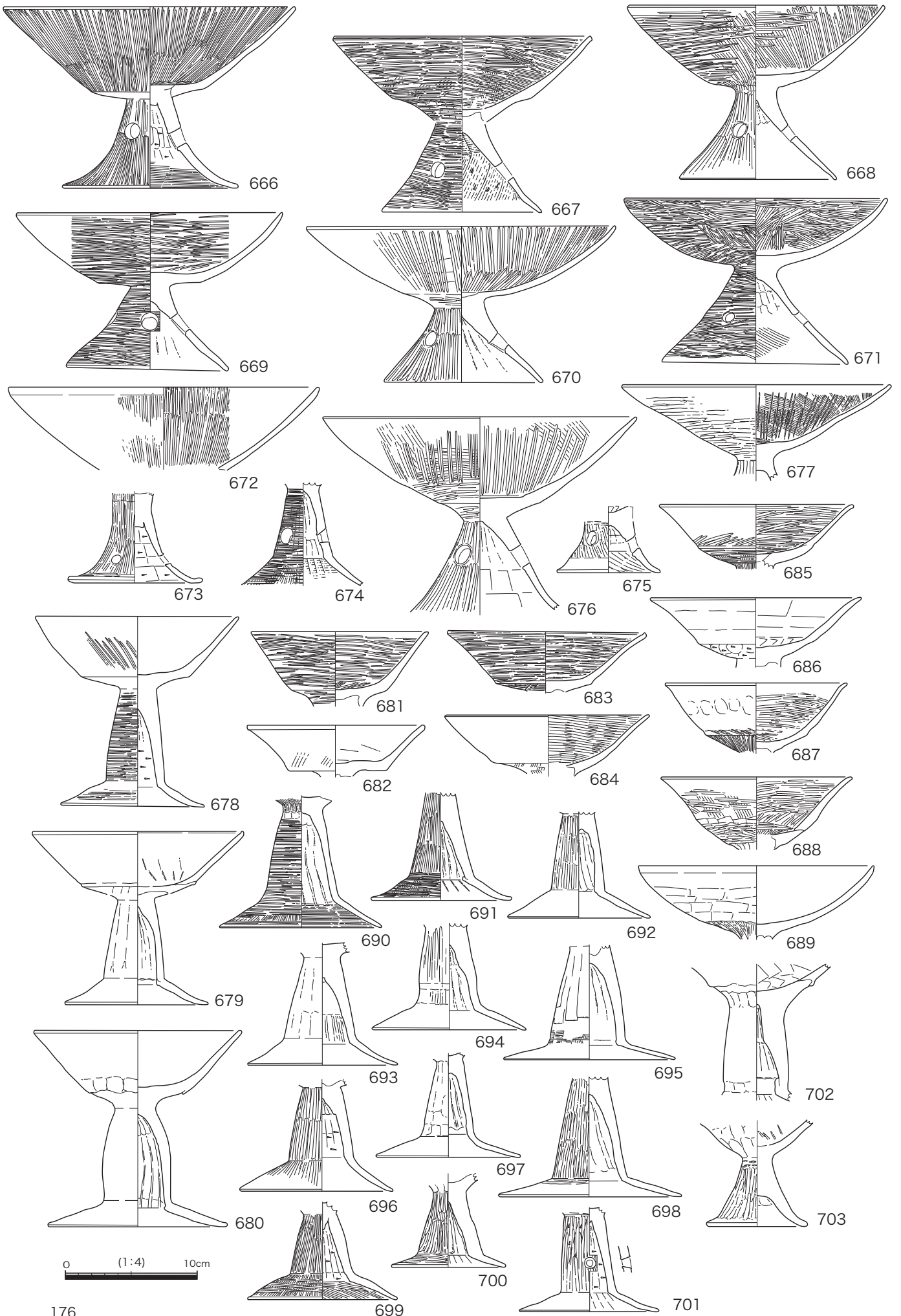
第 174 図 線刻土器 907 (S=1/2、1/1)

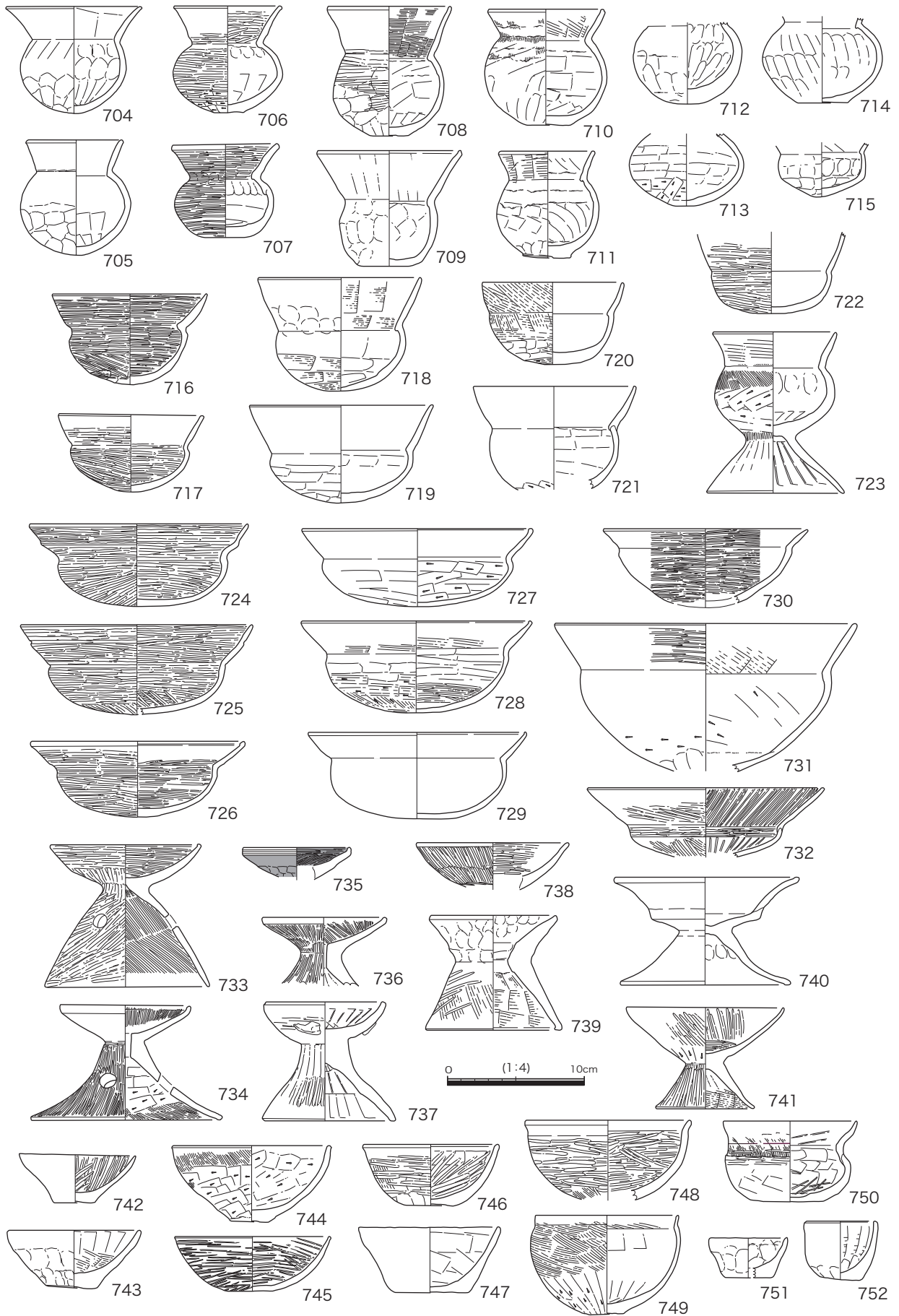


第 175 図 土器・土製品:05B 区 NR01 3 層出土 5 (S=1/4)

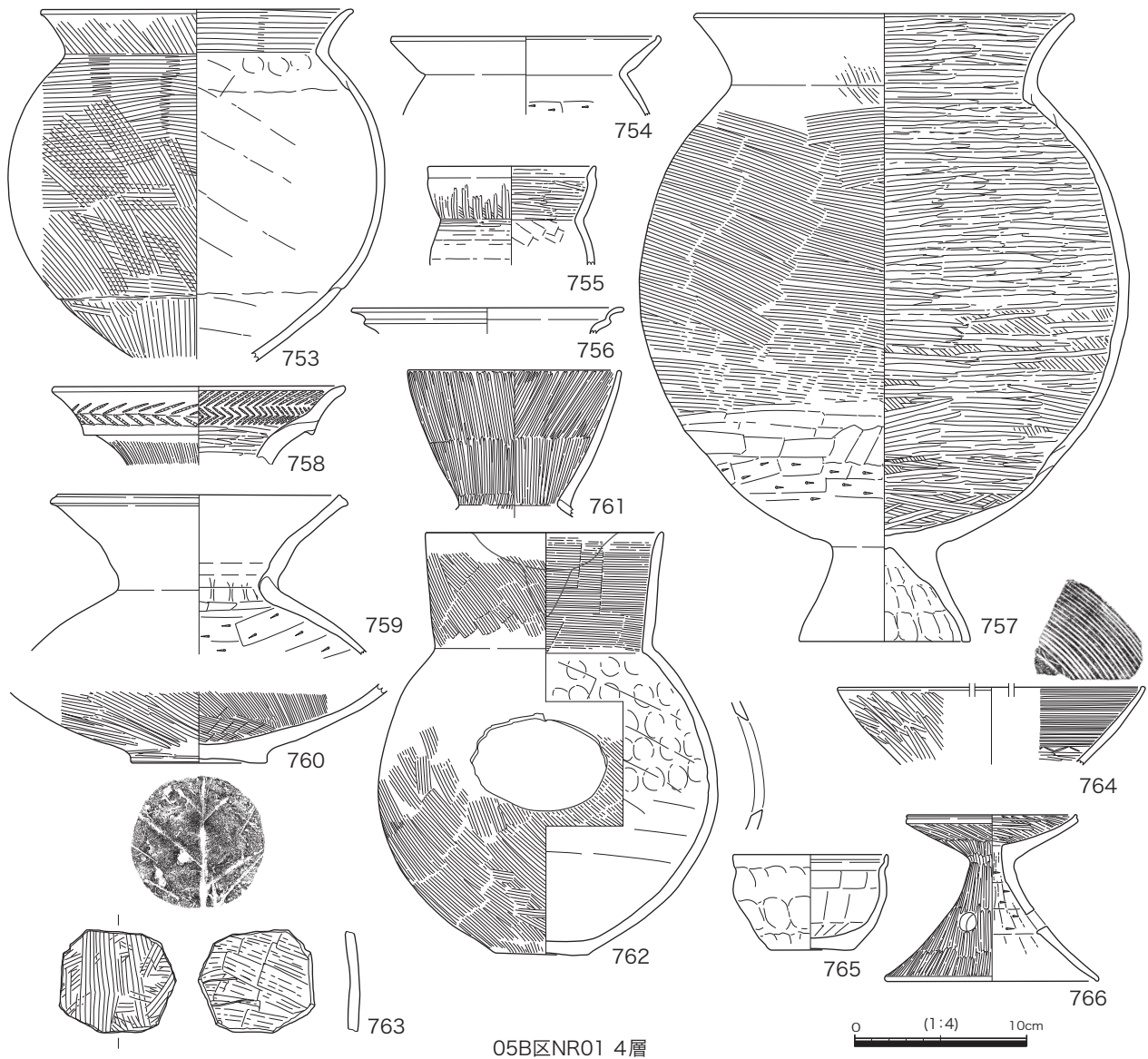


第 176 图 土器・土製品:05B 区 NR01 3 層出土 6 (S=1/4)

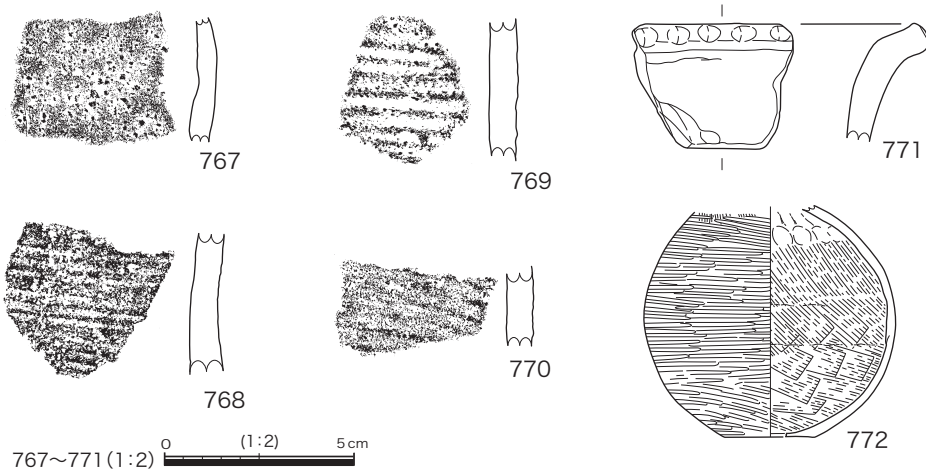




第 178 图 土器・土製品:05B 区 NR01 3 層出土 8 (S=1/4)

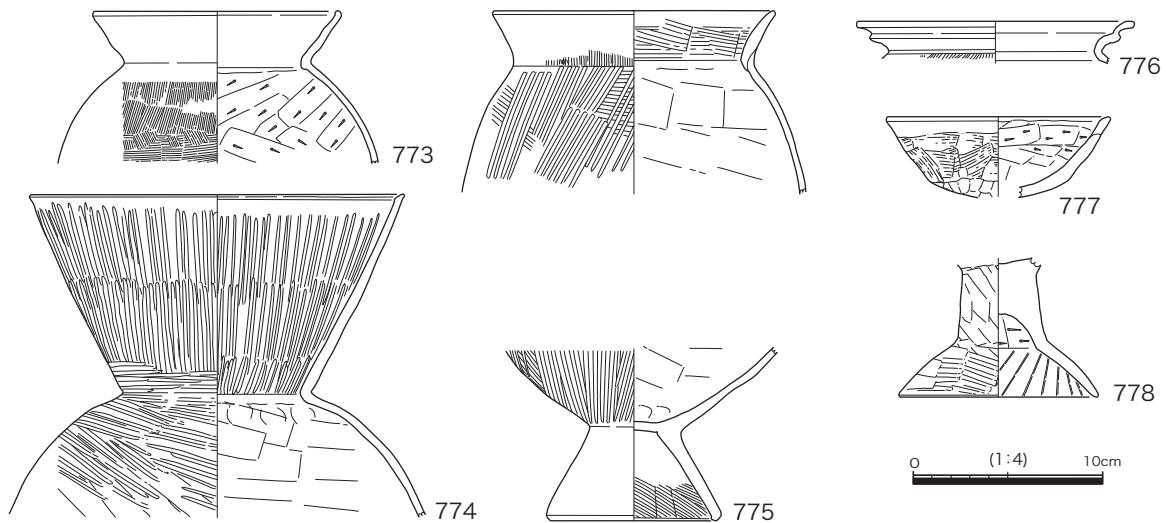


05B区NR01 4層



05B区NR01 5層

第 179 図 土器・土製品：05B 区 NR01 4・5 層出土 (S=1/4、1/2)



第180図 土器・土製品：05B区NR01出土層不明（S=1/4）

(2) 001NR

1層出土（第190図） 985は鉄釉が施される（播）鉢の口縁部。時期は江戸時代。986は北部系山茶碗小皿。987は戦国時代～江戸時代の東三河系内耳鍋口縁部。988～990・992はB-2期の須恵器坏・壺。991はH-72窯式の灰釉陶器椀高台部。993はB-2期の甑把手部。994は布目痕がある瓦片。

2層出土（第190～192図） 995～1018は須恵器。995～997・996～1004は坏、998は盤か。1005～1007は椀、1008は高坏または高盤の脚部になる。1009は把手、1010は短頸壺口縁部、1011～1013は広口壺口縁部、1014～1017は壺底部、1018は甕底部になる。時期はB-2期。

1019～1028は土師質甕。時期としては、O-10窯式からO-53窯式頃までの幅が認められる。

1029～1033は竈形土器。1031は口縁部、1032・1033は底部、1029・1030は脚部になる。

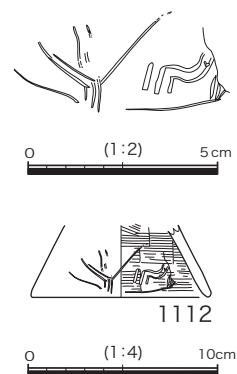
1034・1035は甑把手部。1036・1037は製塩土器脚部になる。

1038～1080は灰釉陶器。時期としてはK-14窯式からH-572窯式頃までの幅が認められる。1038と1039の底部外面には墨書がなされており、1038では墨痕は明瞭に確認されるが、字義は不明。1039は「福力」。

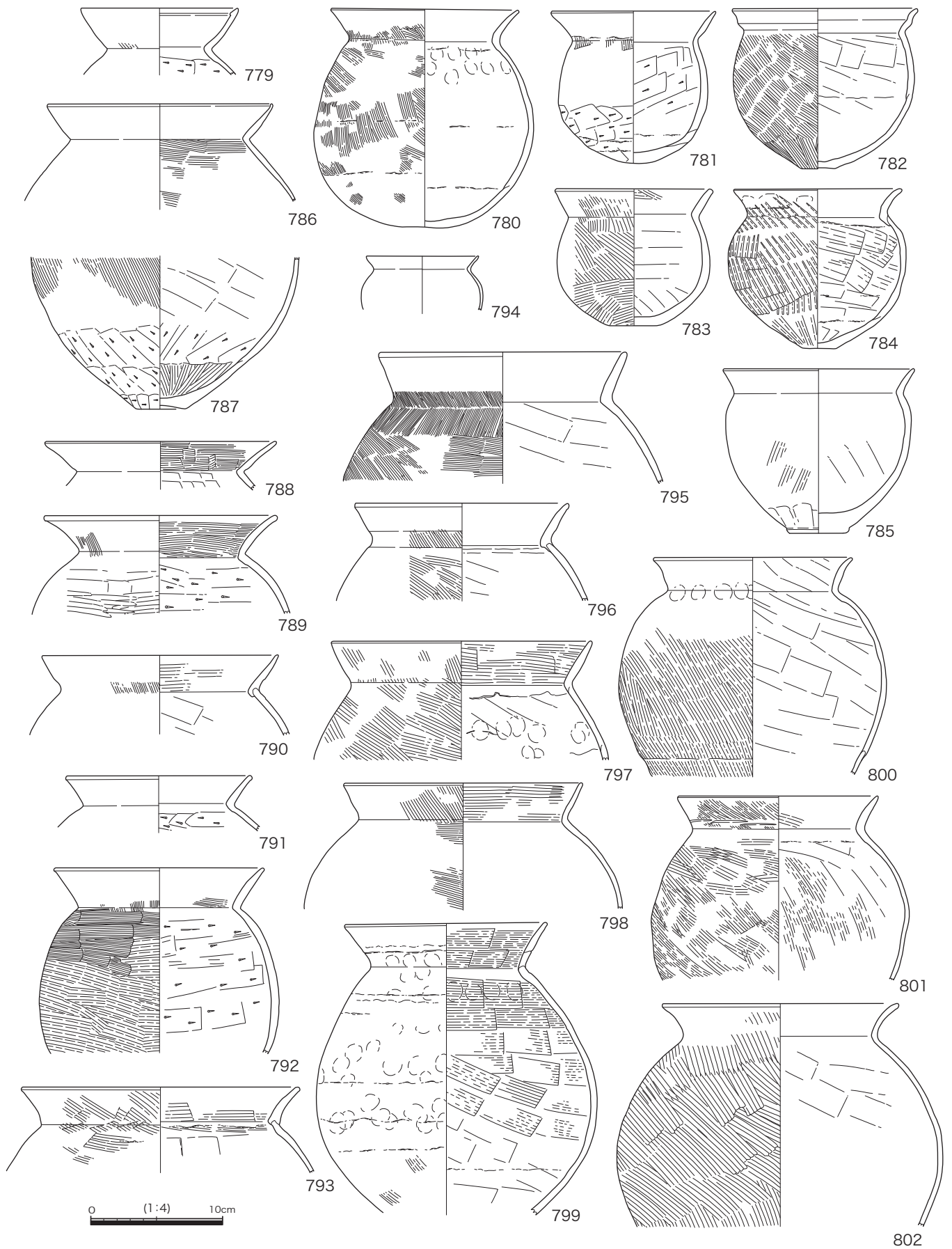
1083はS字状口縁甕C類。1086は柳ヶ坪型壺、1087は有段口縁壺で外面に赤彩が施される。1089は口縁端が折り返されて、イタによる連続刺突がなされる。1101の屈折脚高坏の脚部には透孔がある。1103は器台または高坏脚部で、焼成前に上下から穿孔されているが、貫通していない。

3層出土（第181・193図） 1112（第181図）の台付甕脚台部裾部には不明瞭な線刻がみられる。パレススタイル壺1116は口縁部外面に、1121は、外面の山形文、列点文より下位、内面の頸部に赤彩が施される。有段口縁壺1120の外面と内面頸部にも赤彩がある。1122の体部外面には、直線文後に短い単位の波状文が重なって施文される。1137の屈折脚高坏の脚部には焼成後なされた穿孔が1孔ある。1141はB-2期であるI-17窯式期の坏身であるが、混入した可能性が高い。

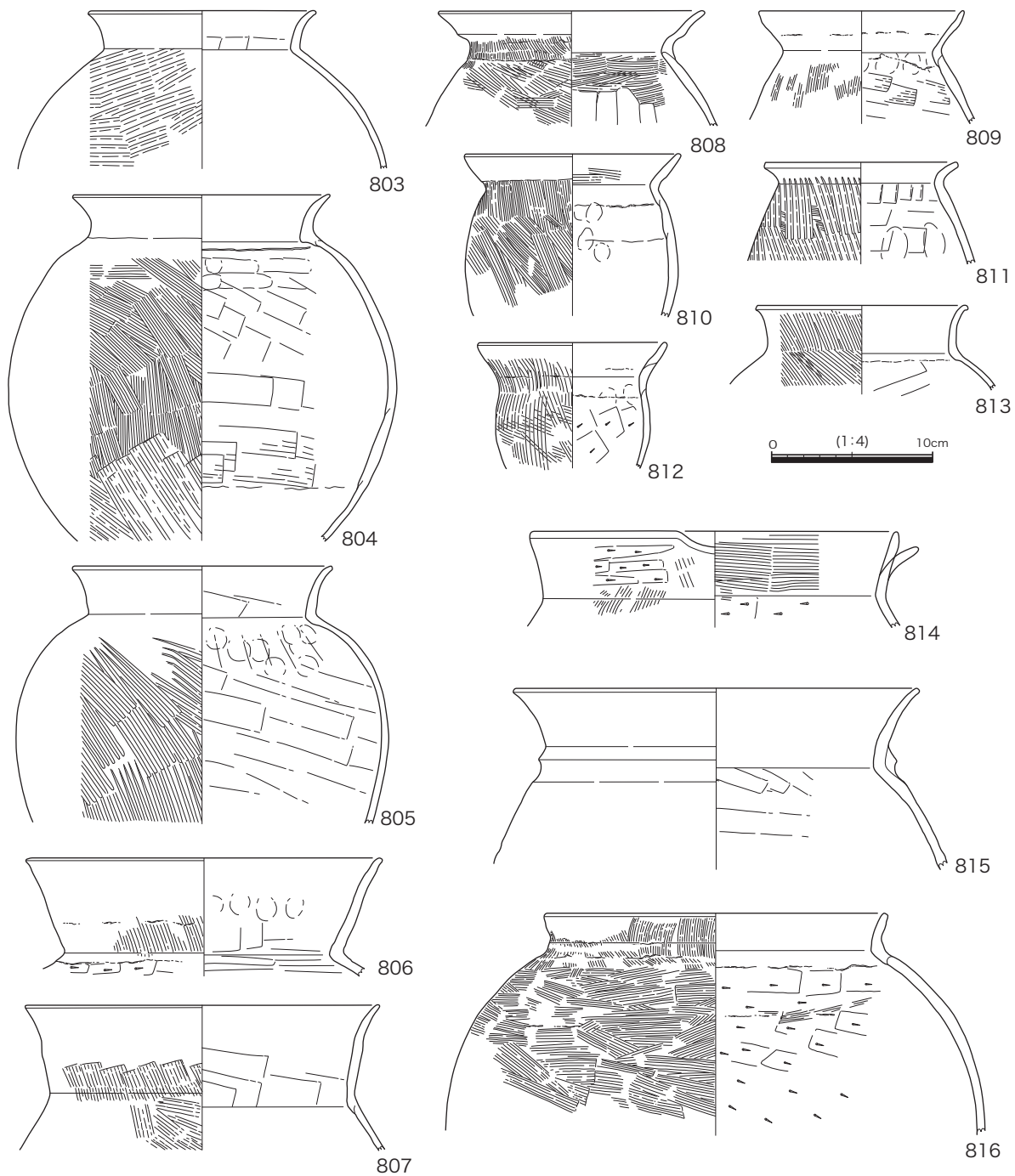
4層出土（第194～197図） 1142・1143は丸底壺か。1145～1147は平底甕。1158は条痕状の粗い調整がなされる。1159は有段口縁甕、



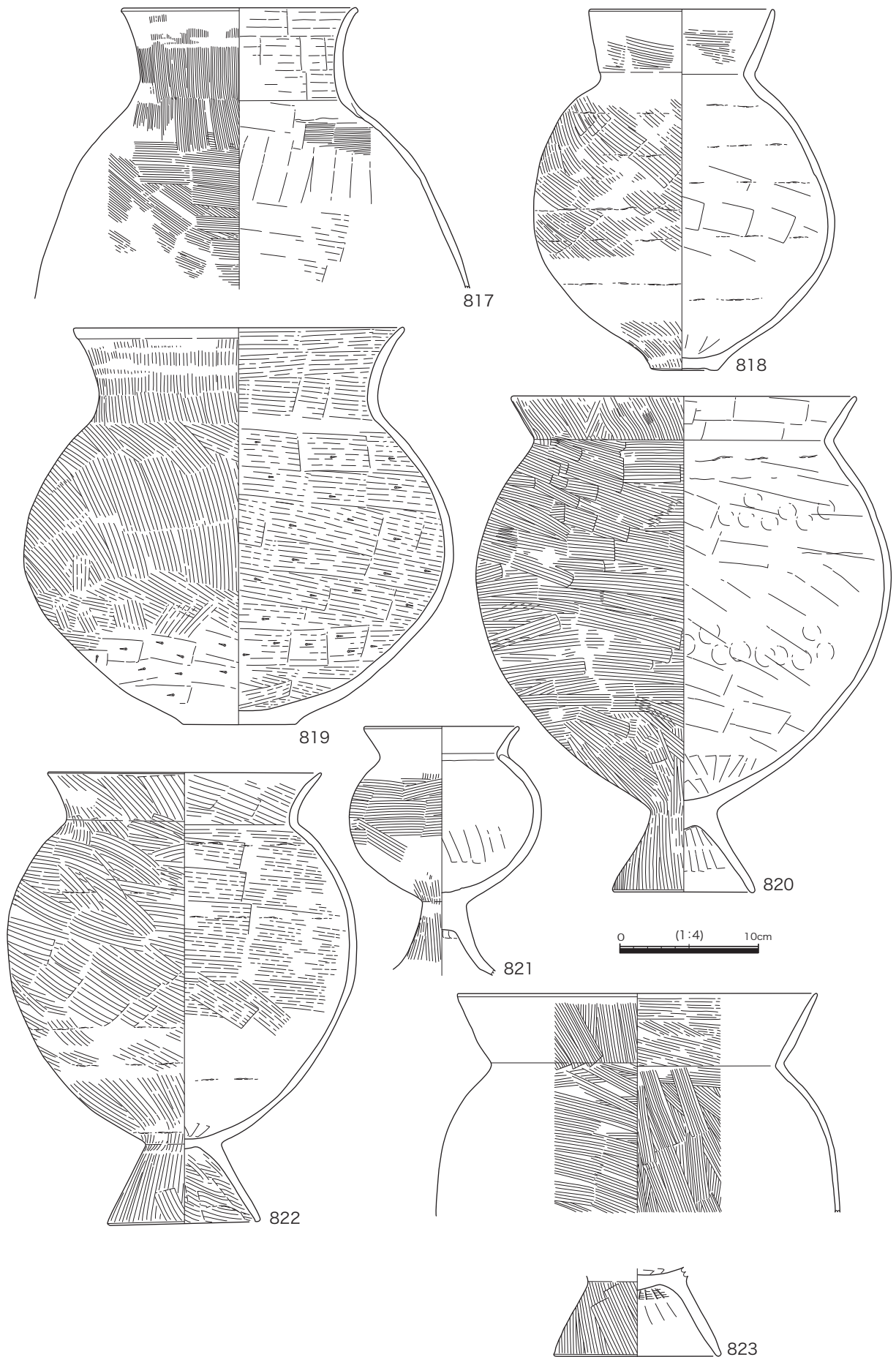
第181図 線刻土器1112（S=1/4、1/2）



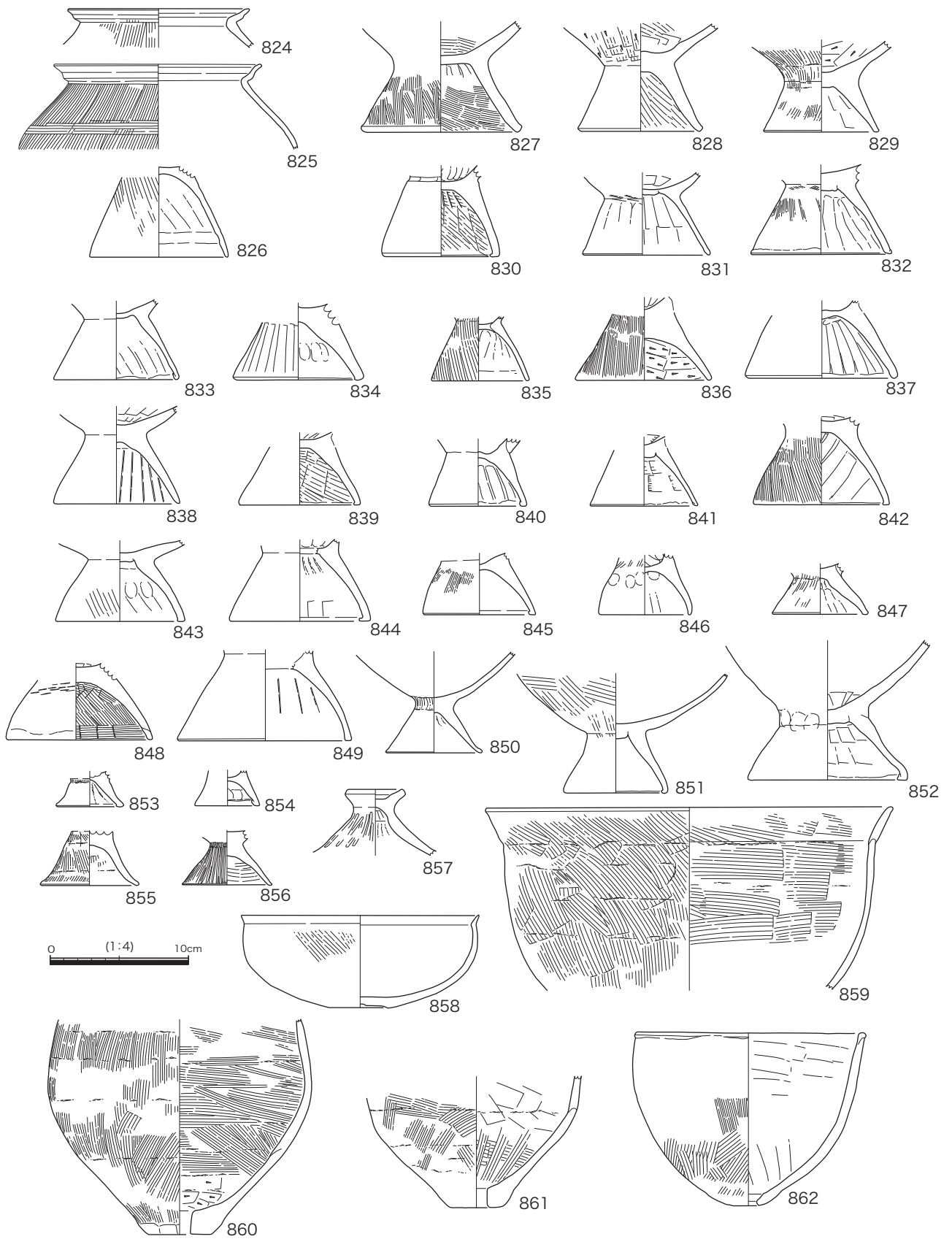
第182図 土器・土製品：06C区234SU出土1 (S=1/4)



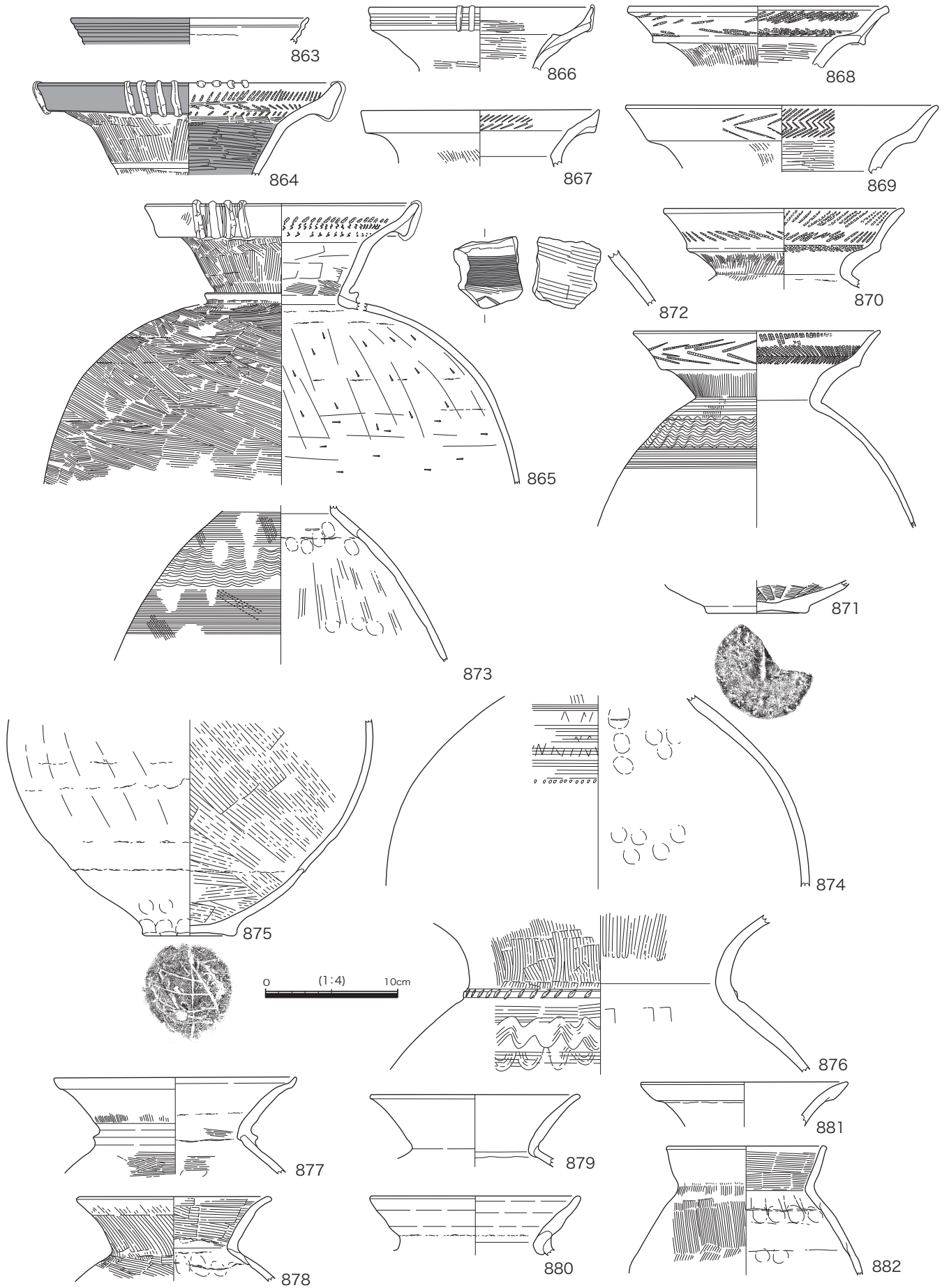
第 183 図 土器・土製品：06C 区 234SU 出土 2 (S=1/4)



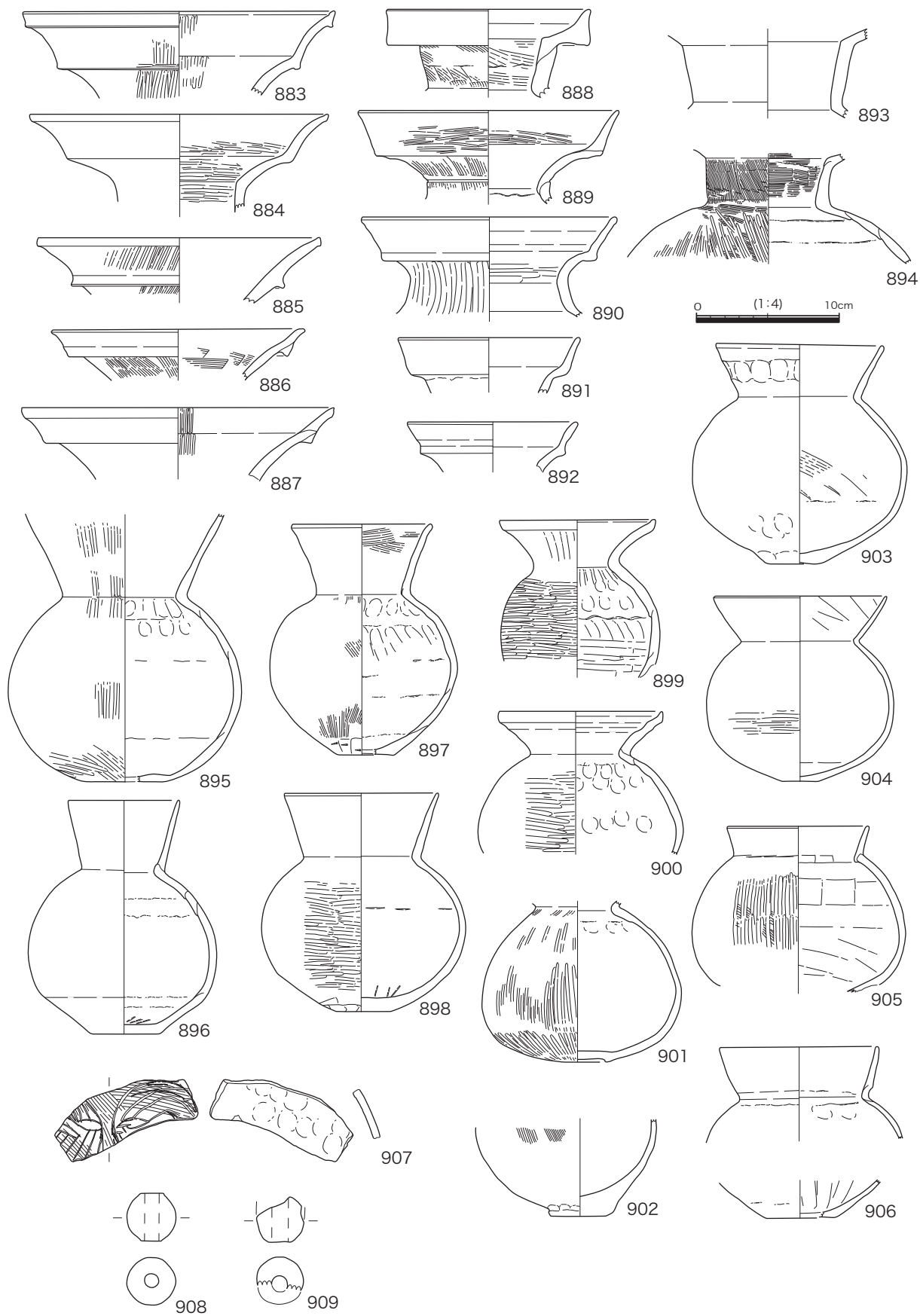
第 184 図 土器・土製品：06C 区 234SU 出土 3 (S=1/4)



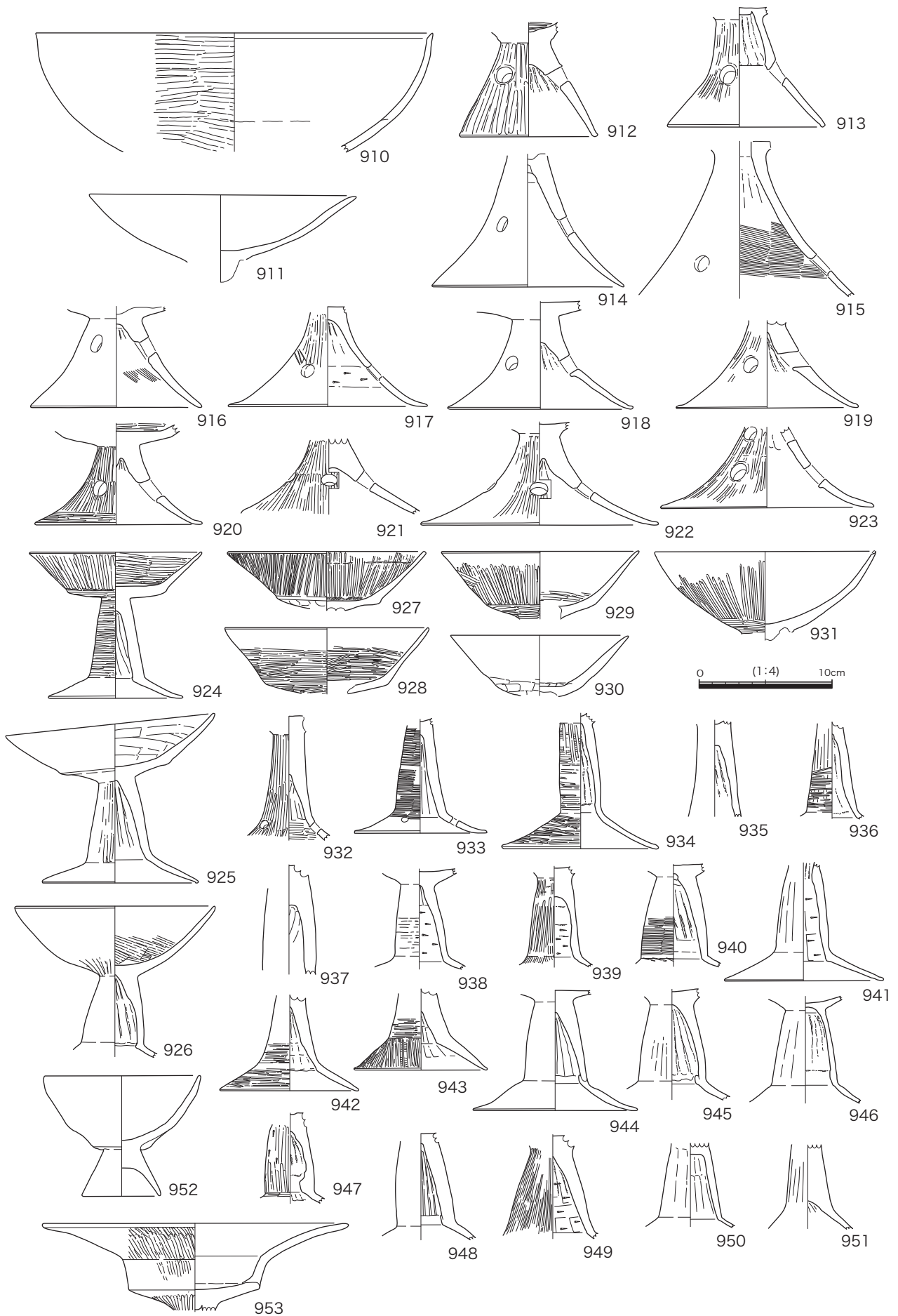
第185图 土器・土製品：06C区234SU出土4 (S=1/4)



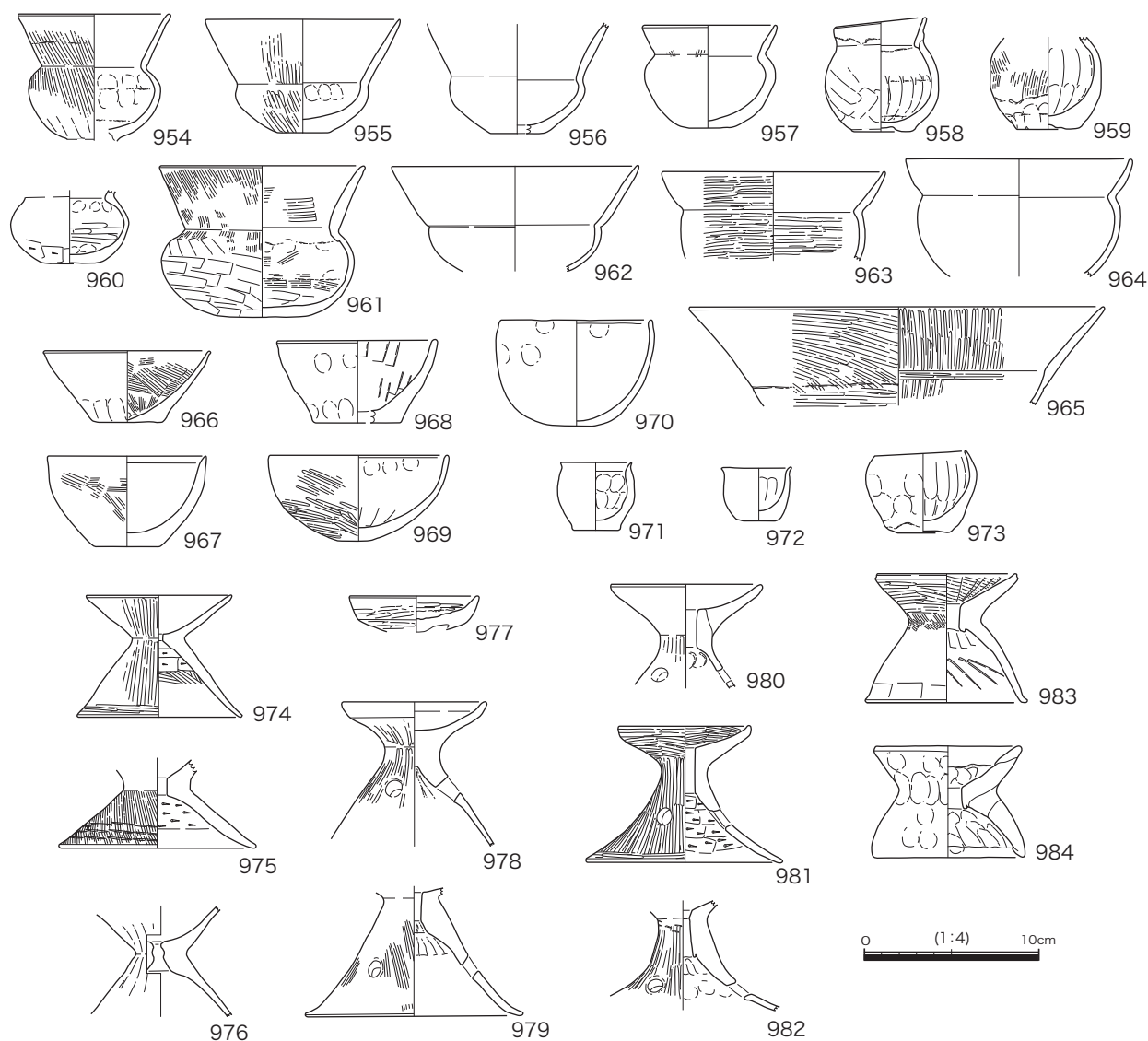
第186图 土器・土製品：06C区234SU出土5 (S=1/4)



第187图 土器・土製品：06C区234SU出土6 (S=1/4)



第 188 图 土器・土製品：06C 区 234SU 出土 7 (S=1/4)

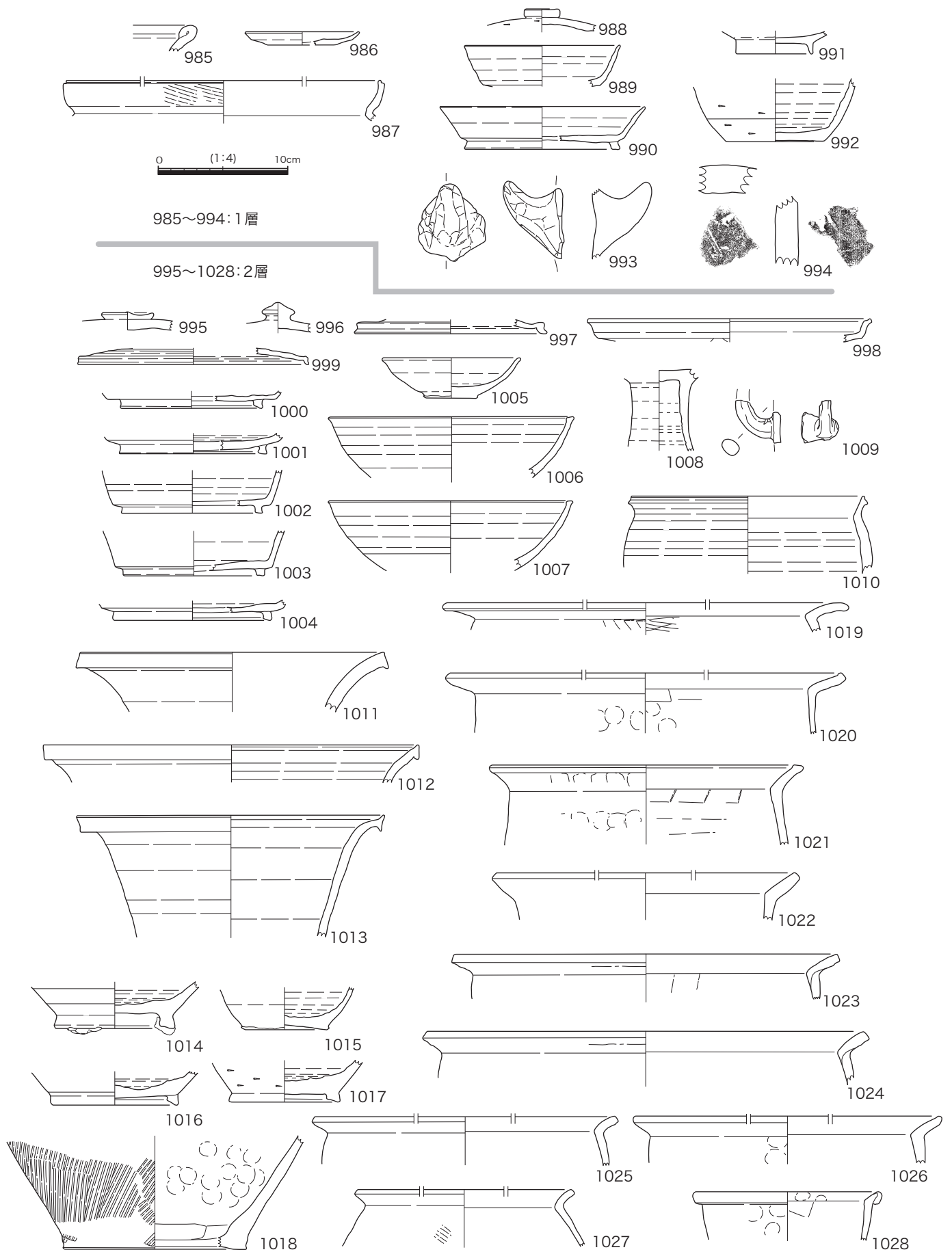


第189図 土器・土製品：06C区234SU出土8 (S=1/4)

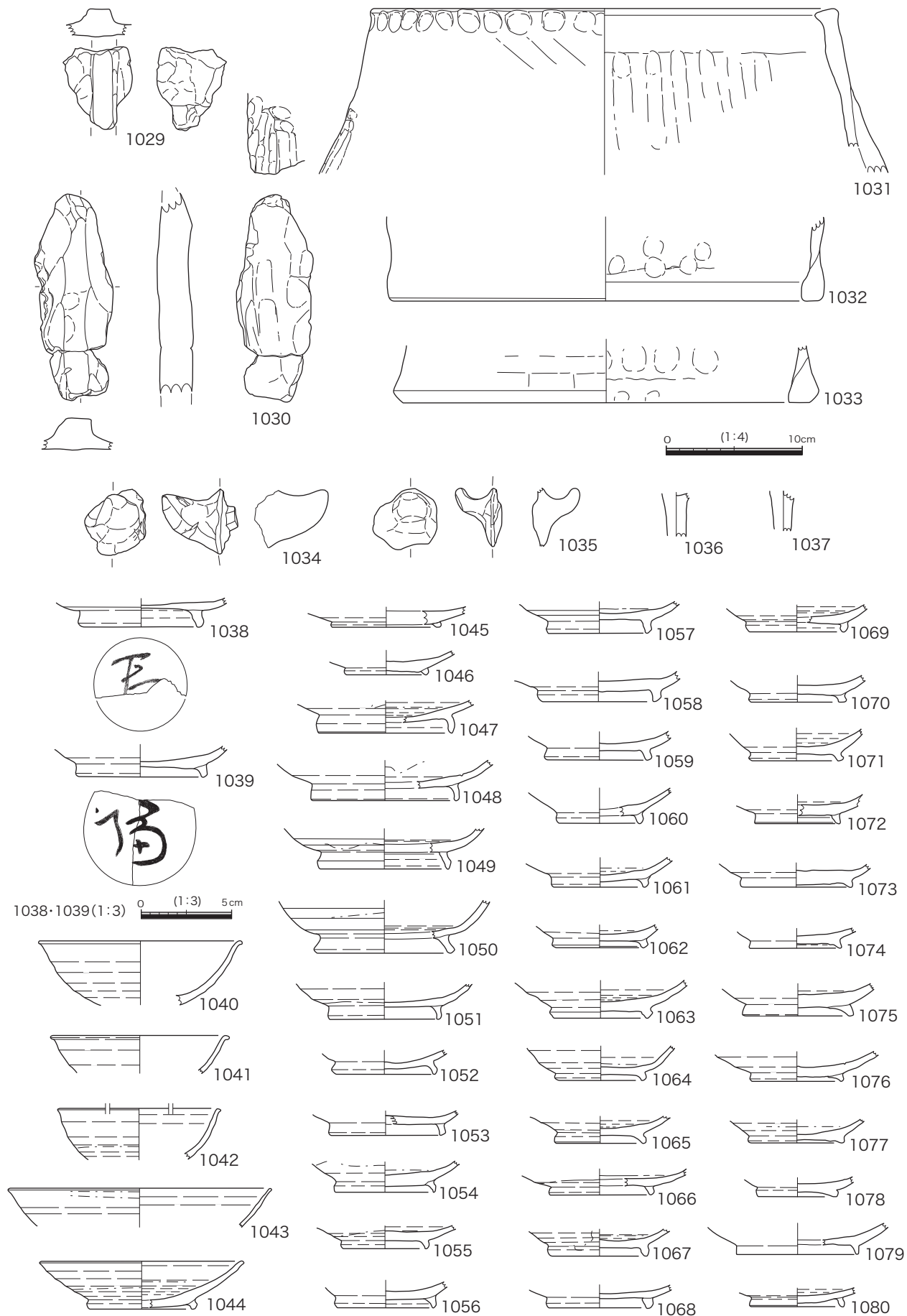
1160は頸部に突帯を巡らす。1162は甕または鉢に分類されるもので、棒状の浮文が頸部から体部にかけて斜位に貼付けられる。その他1163・1164のような同様の土器片も出土しているが、3点は接合しない。1165～1174は台付甕。1175・1176はS字状口縁甕で、1175はA類、1176はC類になる。1177は受口状口縁甕。

1179～1183はパレススタイル壺、1184は柳ヶ坪壺か。1190の壺底部には焼成後穿孔がみられる。1196は脚台が付く壺の可能性があり、外面には煤・炭化物が付着する。1198～1207は直口壺で、1206の体部中位には焼成前の、1207の体部上位には焼成後の穿孔がみられる。1208は山形の線刻があるが、文様の可能性もある。1209・1210は手焙り形土器。663は土製紡錘車で、上面が磨滅する。1211はタタキ成形・調整される製塩土器の脚台部。

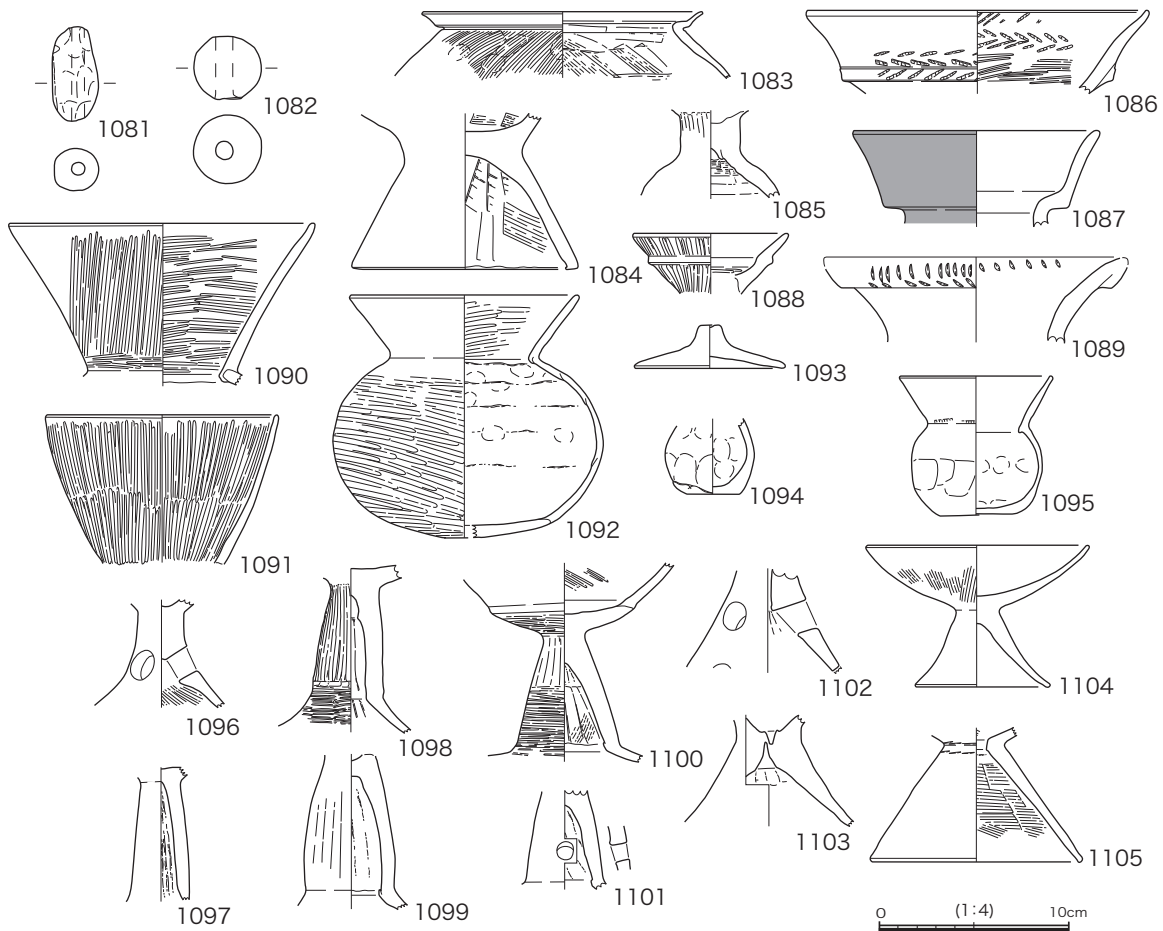
1215・1223・1227は有稜高坏、1224～1226は屈折脚高坏、1228・1229小型高坏になる。1245は外来系の高坏か。1230～1233は小型壺。1234・1235は椀形鉢、1237～1241は浅鉢、1242～1444は器台になる。



第190図 土器・土製品:06C区001NR1・2層出土 (S=1/4)



第 191 图 土器・土製品：06C 区 001NR 2 層出土 1 (S=1/4)



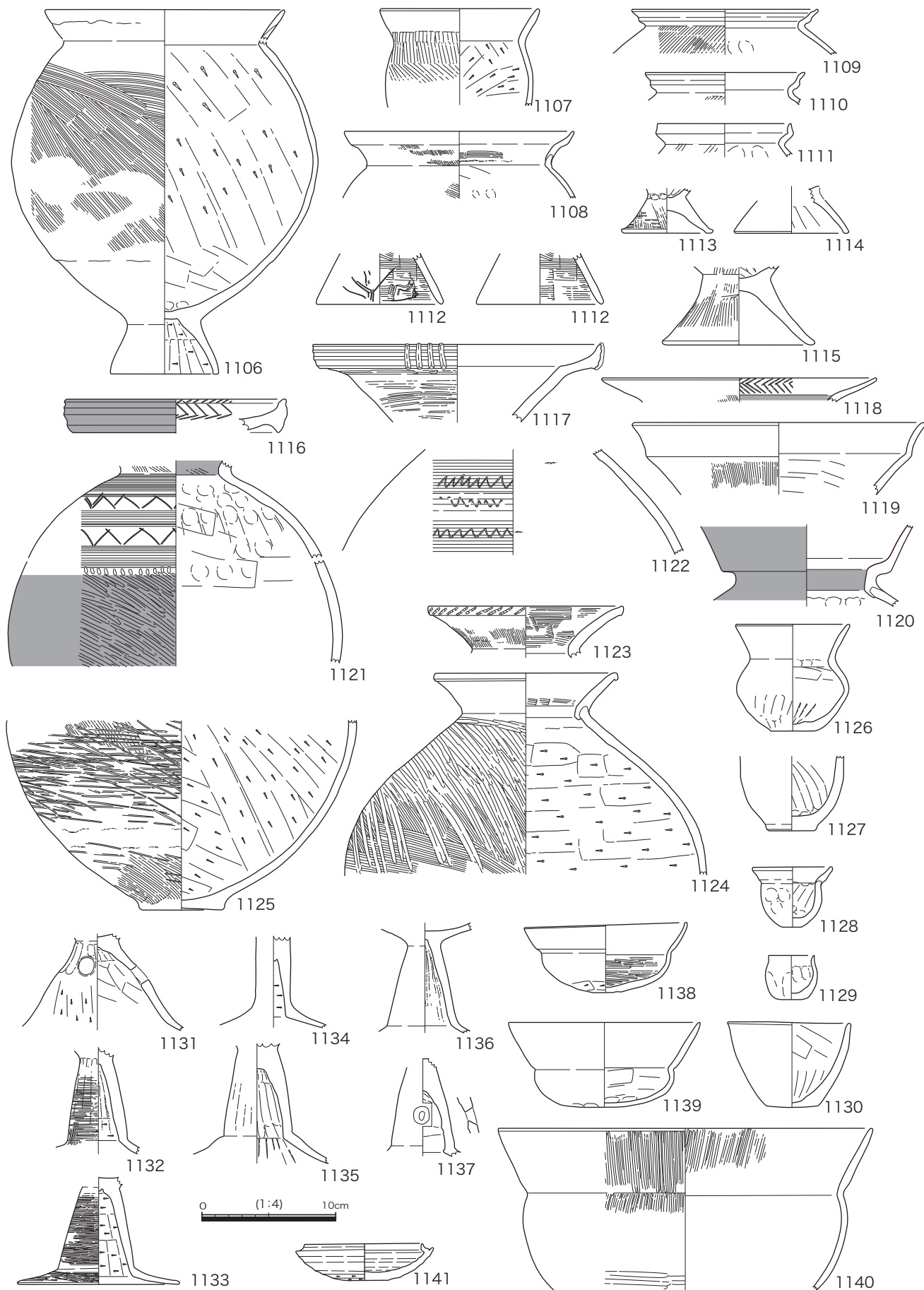
第 192 図 土器・土製品：06C 区 001NR 2 層出土 2 (S=1/4)

第 3 節 石製品 (第 198 ~ 200 図)

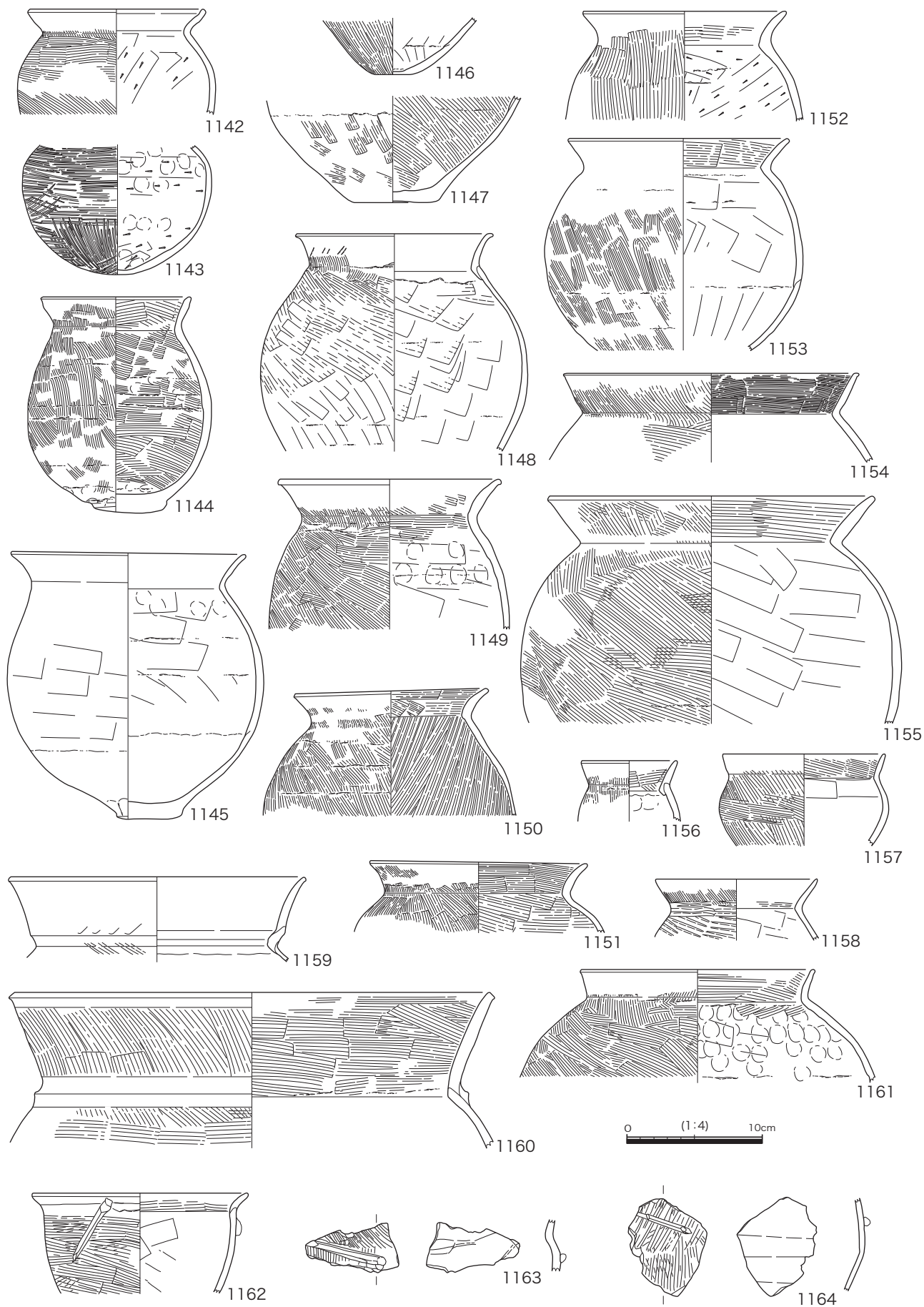
S-001 は青色を呈するガラス小玉。S-002 ~ 006 は溶結凝灰岩の管玉。S-002・003 が暗緑色、その他は淡緑色を呈する。S-007 はチャート製の石鏃。S-008 は上・下・側面とも研磨痕があり、下面には敲打痕がみられる。泥質凝灰岩。S-009 は上・下・側面とも敲打痕がある濃飛流紋岩の叩石。S-010 は上下面に研磨痕があり、角部分に敲打痕、短辺側下面にも敲打痕がみられる。砂質凝灰岩。S-011 は軽石の磨石。上・下・側面とも研磨痕がる。S-012 は下面に研磨痕がある砂岩の磨石。

S-014 は砂質凝灰岩で、下面に研磨痕、上・側面に敲打痕がある。S-015 ~ 018 は 05B 区 SK136 から出土する。4 点とも加工がなされていない自然石で、S-015 がアプライト、S-016 が斑レイ岩、S-17・18 が花崗岩になる。S-018 の下部にのみ煤・炭化物が付着していた。

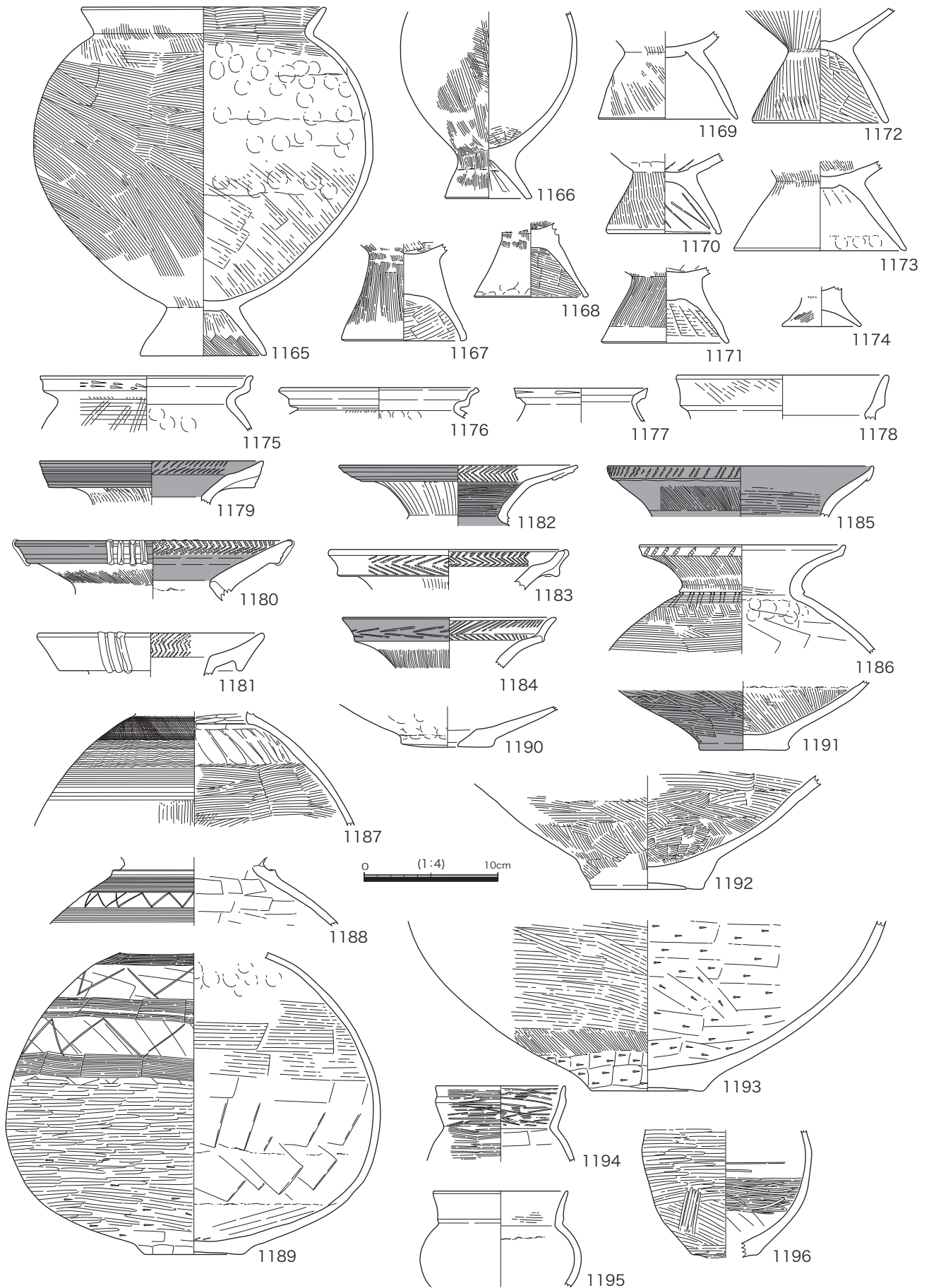
S-019 は下側面に研磨痕、上面と右側面に敲打痕がある。片麻岩。S-020 は全体が研磨される軽石。S-021 は上面から下側面にかけて研磨痕が、上面に条線がみられる。凝灰質泥岩。S-022 はほぼ全面に敲打痕をもつ片麻岩の叩石。S-023 は上・下・側面とも敲打痕のある緑色凝灰岩。S-024 は側面に研磨痕、上面に条線、下面に敲打痕がある片麻岩。S-025 は上・下・側面に研磨痕があり、特に上面が平滑にされる。片麻岩。



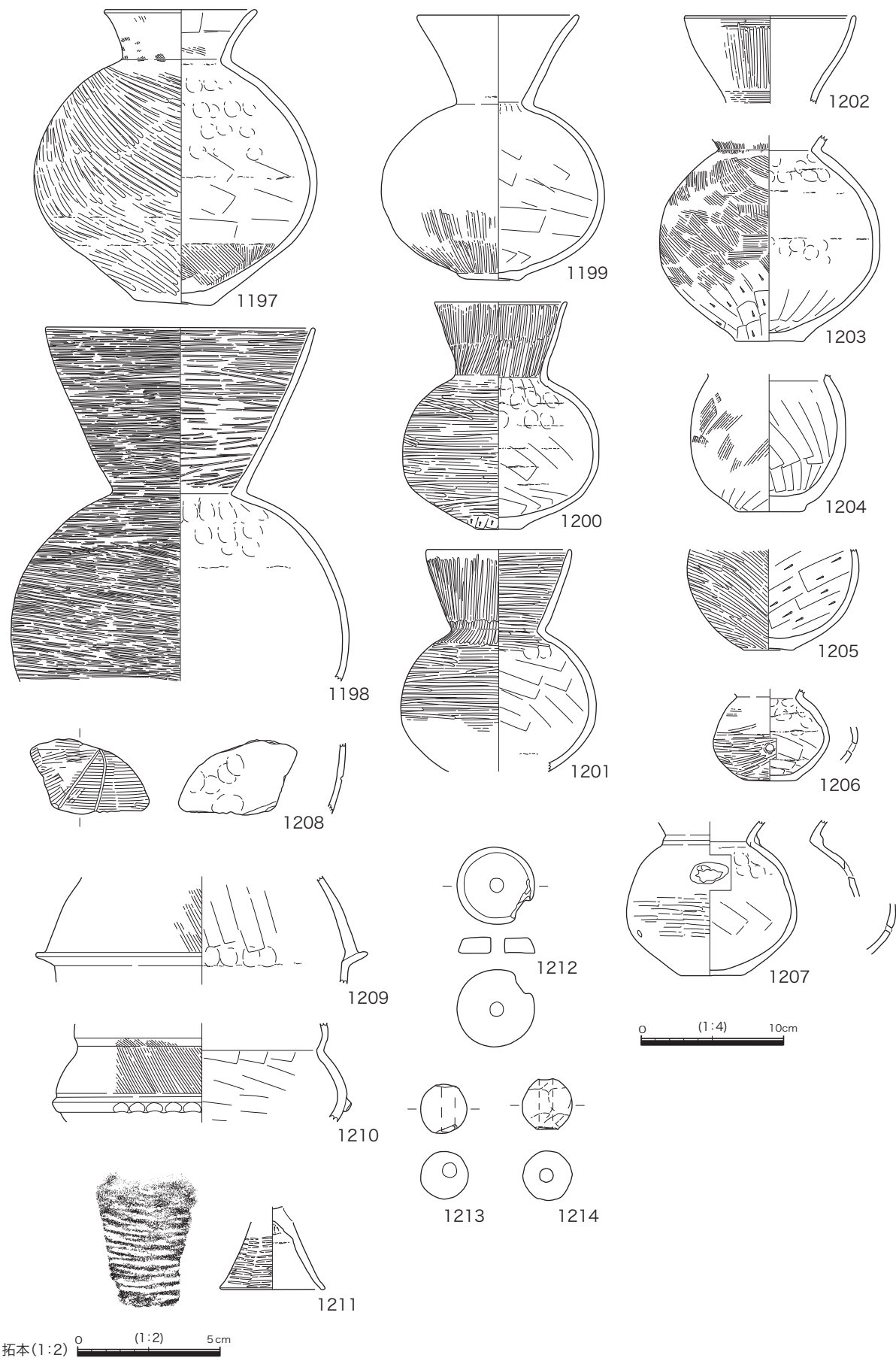
第 193 図 土器・土製品：06C 区 001NR 3層出土 (S=1/4)



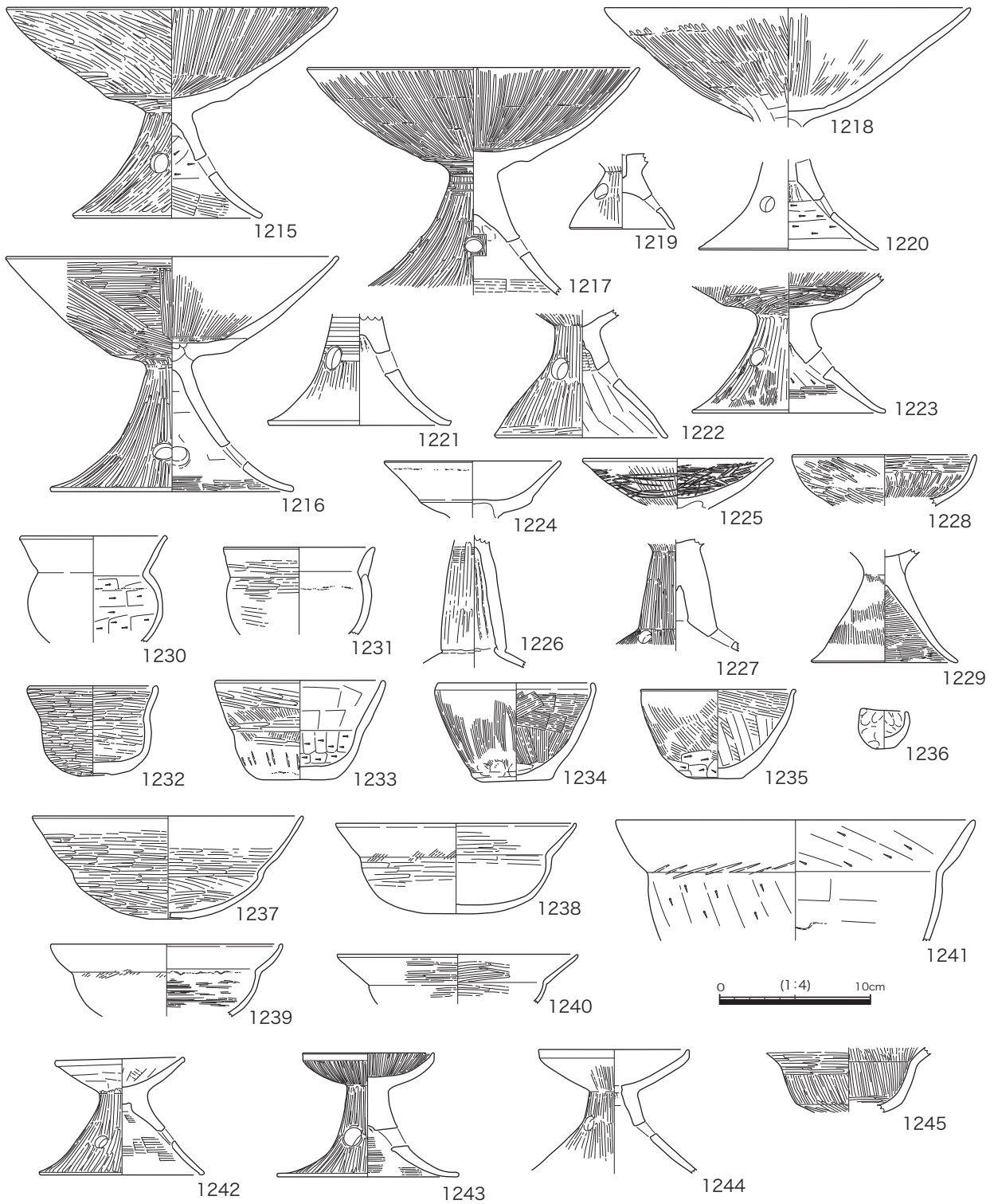
第 194 図 土器・土製品：06C 区 001NR 4 層出土 1 (S=1/4)



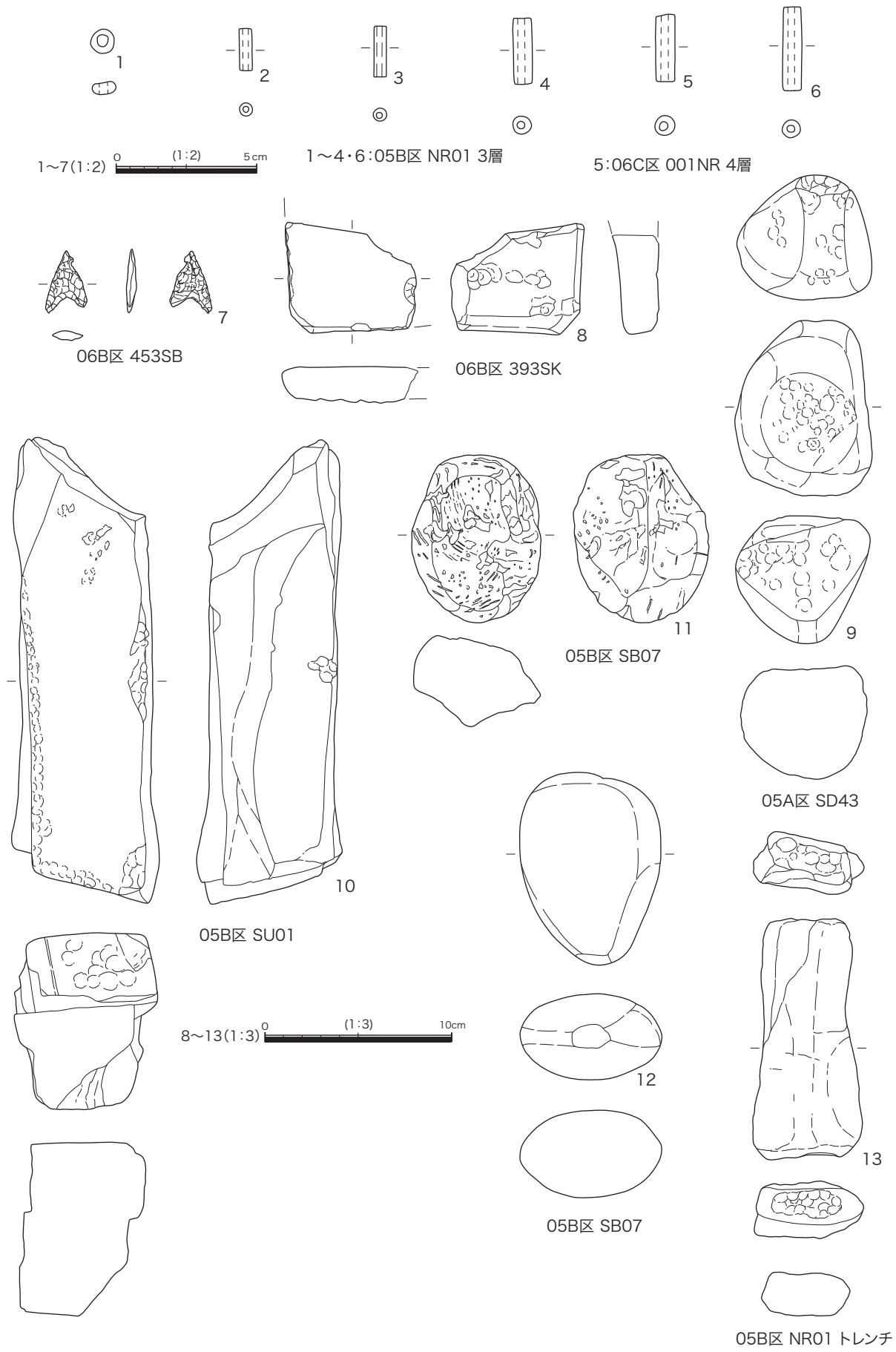
第195图 土器·土製品：06C区001NR 4層出土2 (S=1/4)



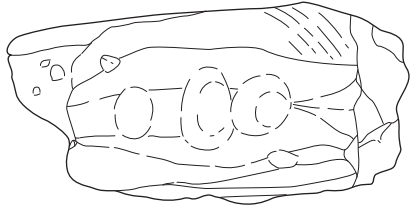
第 196 図 土器・土製品：06C 区 001NR 4 層出土 3 (S=1/4、1/2)



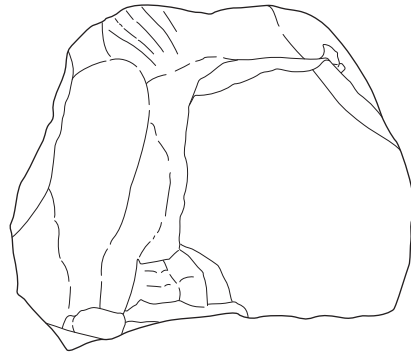
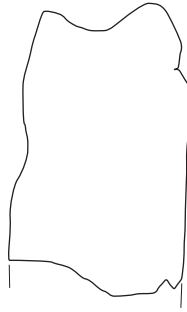
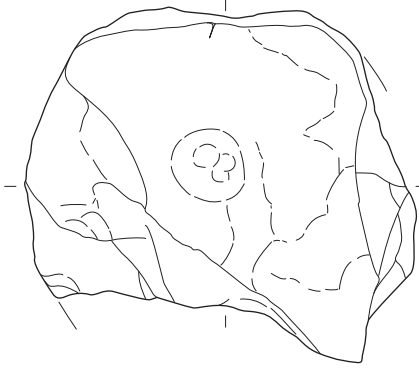
第 197 图 土器・土製品：06C 区 001NR 4 層出土 4 (S=1/4)



第 198 図 石製品 1 (S=1/3、1/2)

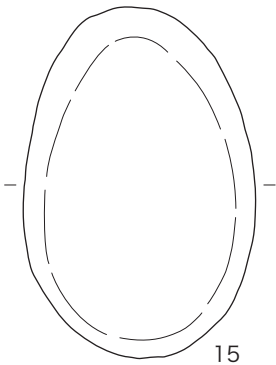
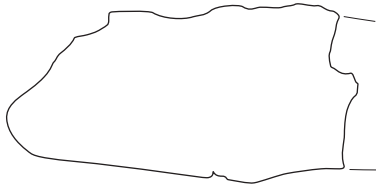


14(1:3) 0 (1:3) 10cm

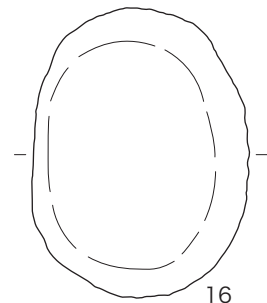


14

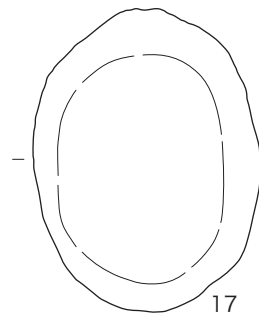
05B区 NR01 2層



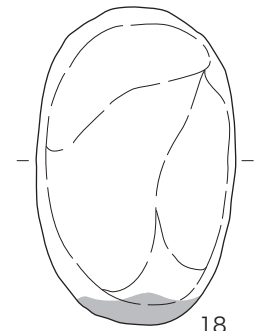
15



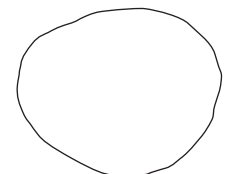
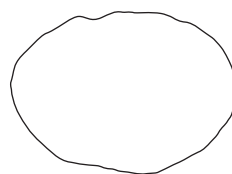
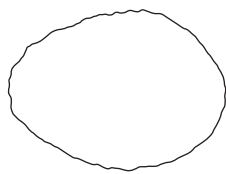
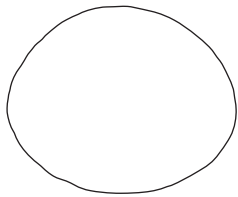
16



17



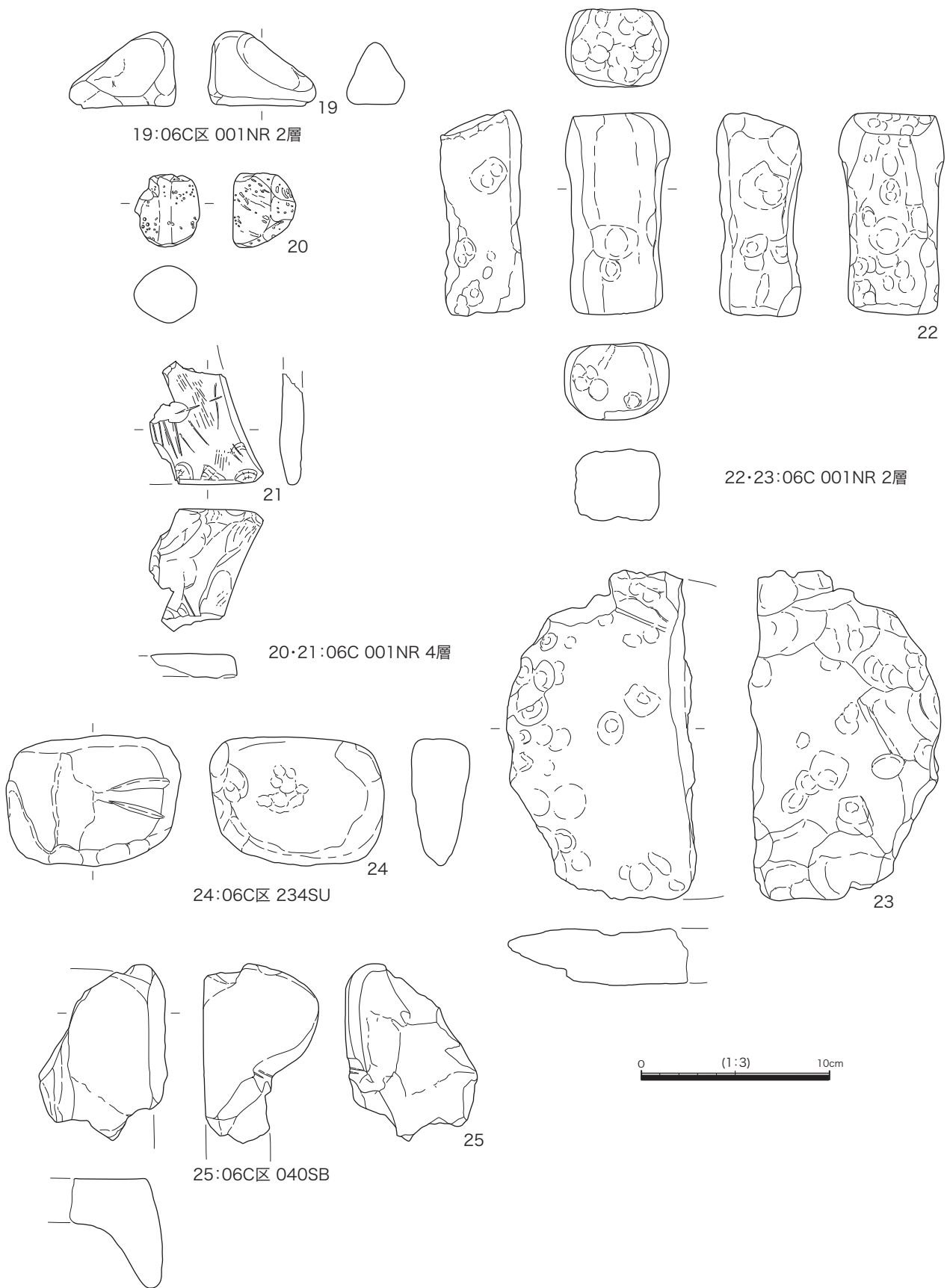
18



15~18(1:4) 0 (1:4) 10cm

15~18:05B区 SK136

第 199 図 石製品 2 (S=1/4、1/3)



第 200 図 石製品 3 (S=1/3)

第4節 木製品

木製品の所属時期は出土遺構から、05B区 NR02:弥生時代中期～後期、05B・06C区 NR01-4・5層:廻間Ⅲ式期、05B・06C区 NR01-2・3層:廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期、06C区 134SX・011SB:古代の4時期に分けられる。ただしNR01は、あくまでも河道内の出土層位による時期区分であることから、必ずしも厳密なものではないことをあらかじめことわっておきたい。

なお、建築部材については、首都大学東京 山田昌久教授と奈良文化財研究所 黒坂貴裕氏のご教示を得た。

1 弥生時代中期～後期:W-001 (第201図)

001は、短辺の片側に浅い溝、長辺の片側に7カ所穿孔を施す箱の側板。残存長が94.4cm、幅は12.4cm、厚さ1.8cmを測る。樹種はヒノキ。大型琴の側板である可能性を有する。

2 廻間Ⅲ式期:W-002～37・40～160

掘削具(002～008)、工具(009)、雑具(010)、調度品(011～013)、紡織具・編み具(014・015)、容器(016～022)、運搬具・漁撈具(023～025)、建築部材(026～037・040～059)、杭(060～067)、矢板(068)、丸棒(069～082)、角棒(083～098)、板(099～134)、分割材(135～143)、残材(144～147)、丸太(148～158)、その他(159・160)がある。

掘削具(第202図) 002は泥除け具未成品で樹種はアカガシ亜属。003・004は伊勢湾型曲柄平鋏。いずれも筆者分類によるDⅠ類(樋上2000)で、樹種はコナラ節。

005は伊勢湾型曲柄二又鋏の刃部で、樹種はアカガシ亜属。

006は伊勢湾型曲柄多又鋏の刃部で樹種はアカガシ亜属。

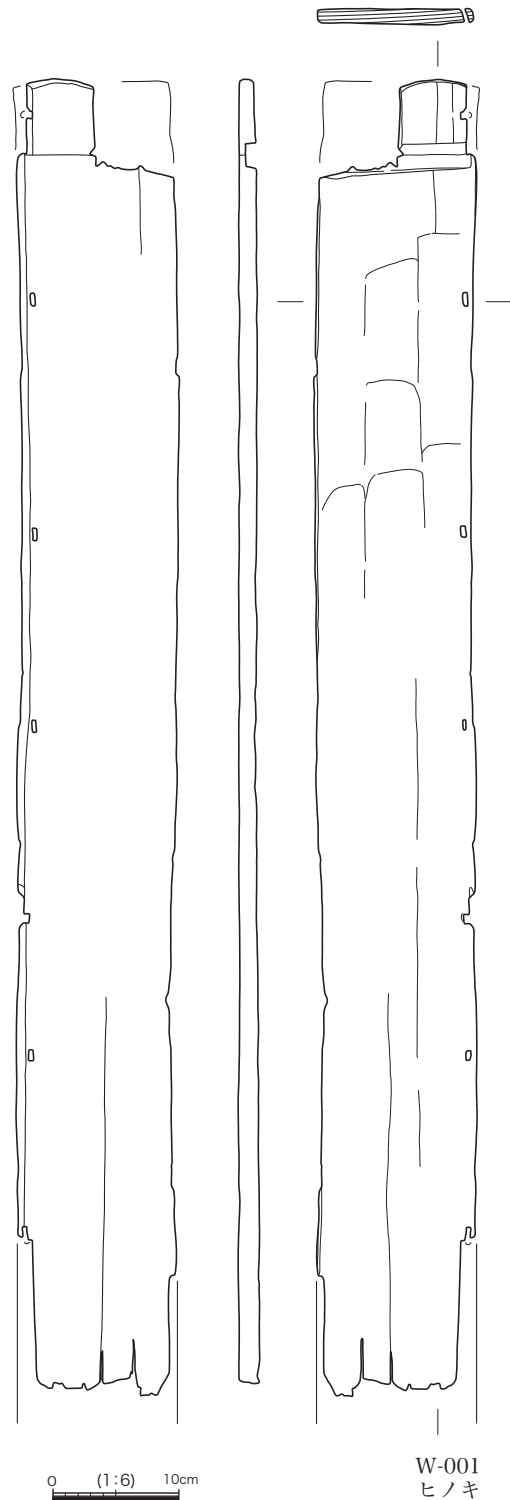
007は一木平鋏だが、使用の痕跡はほとんどない。樹種はコナラ節。

008は曲柄鋏の膝柄で、台部と柄部の境に段がつく。樹種はサカキ。

工具(第203図) 009はクリの厚板で、片面に細かな刃物傷がつくことから、作業台であったことがわかる。

雑具(第203図) 010はマキ属の細い棒で、先端が焦げていることから、燃えさしと考えられる。

調度品(第203図) 011～013はいずれも一木で作られた椅子。011はのちに転用の際、座板上面に楕円形の孔を穿っている。013は座板端面の左右が脚より外側でゆるやかに上方へと伸びており、人物埴輪が座る椅子に近



第201図 木製品 (S=1/6)
弥生時代中期～後期

い。樹種は011がヒノキ、012がスギ、013がクスノキ。

紡織具・編み具（第205図）014は栲の腕木。樹種はヒノキで、穿孔部にスギの支え木が残る。東村純子の分類では、側面の幅が一定であるTi型にあたる（東村2011）。

015は木錘。コナラ節の芯持ち材で、中央に溝を一条刻む。

容器（第204図）016は直径約37cmを測る大型の刳物皿。直径約50cmにおよぶクスノキの2分の1分割材からの横木取りで、4つの低い脚が作りだされている。

017は刳物槽の破片で、樹種はクスノキ。

018はマキ属の芯持ち材を削りぬいて作られた筒形器台の未成品（樋上2010）。4点を組み合わせて一周する。

019は四周を斜めに面取りしたヒノキの厚板。精製刳物容器(箱)の蓋の未成品である可能性が高い。

020は隅丸方形の曲物底板。割れた面に沿って小孔が多数開けられており、結わえて用いたと考えられる。中央に三角形の孔と両面に多数の刃物痕があることから、幾度かの転用を経たものと考えられる。

021・022は曲物の把手とされるものである（山田1997）。樹種はヒノキで、上端付近に2カ所円孔が開く。県内では、一宮市八王子遺跡、名古屋市西区志賀公園遺跡に類例がある（愛知県埋蔵文化財センター2001・2004）。

運搬具・漁撈具（第205図）023は船材あるいは槽の一部とみられる。樹種はヒノキで、穿孔部に樹皮を詰めている。024はソリの可能性がある。樹種はクリ。025は有爪型の背負子か？樹種はクリ。

建築部材（第206～212図）026～034は柱。うち、028・030～032は上端が二又に分かれる竪穴建物の柱で、他は掘立柱建物の柱である可能性が高い。026は丁寧に面取りをほどこす。樹種は026がマキ属027～031はコナラ節、032～034はクリ。

035・036は垂木で、樹種は035がマキ属、036がマツ属。

037はクリ製の梯子で、3段のステップが残る。

040・049・050・054は横架材で、054は中央に壁板を受ける溝が彫られる。041は破風材、042・047・048は壁材で、特に042の側面にはひぶくらはぎの技法が認められる。樹種は041・042がヒノキ、047・048がスギ、049・050がコナラ節、054がクリ。

044・045は屋根の下地材と考えられる。樹種はいずれもマキ属。

043・046・051～053・055～059はその他の建築部材。樹種は043がヒノキ、046がスギ、051～053がコナラ節、055・056がクリ、057がクヌギ節、058がクスノキ科、059がクワ属。

杭（第213図）060～067は杭。樹種は060～064がマキ属、065がクヌギ節、066がクリ、067がヤナギ属で、すべて芯持ち材。

矢板（第213図）068は矢板で、スギの柁目材を用いる。

丸棒（第215・216図）069はいわゆる有頭丸棒で、マキ属の芯持ち材。

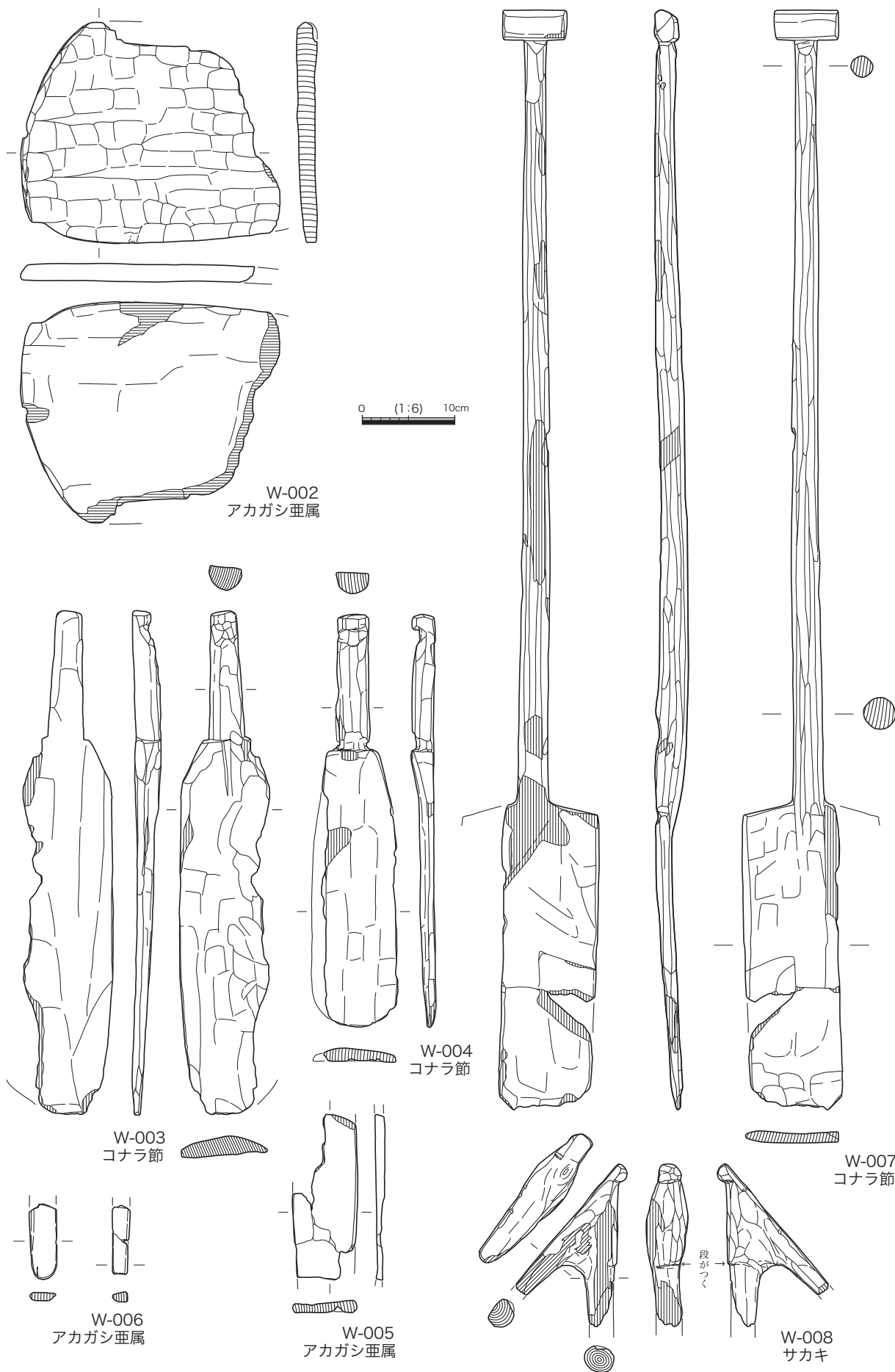
070～073は有挟丸棒。うち、072・073は中央に断面が台形状の溝を切る同形の有挟丸棒。樹種は070・071がマキ属、072・073がクヌギ節の芯持ち材。

074～082のうち、074～077がヒノキ、078～080がマキ属、081がマツ属、082がイヌガヤを用いる。

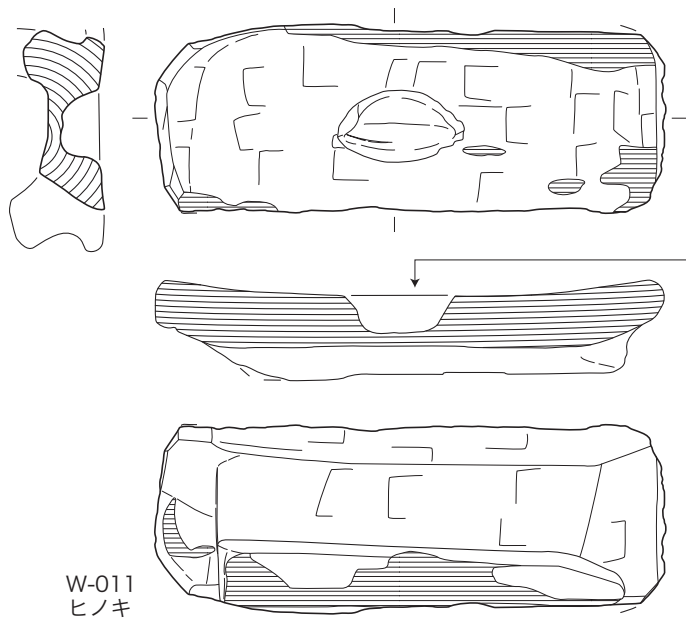
角棒（第217・218図）083・084は有挟角棒で、樹種はヒノキ。

085・086はヒノキの有段角棒。

087は横断面がカマボコ状の厚みのある板で、片面の中央に幅広の溝を彫っている。樹種はムクノキ。



第202図 木製品:掘削具1 (S=1/6)



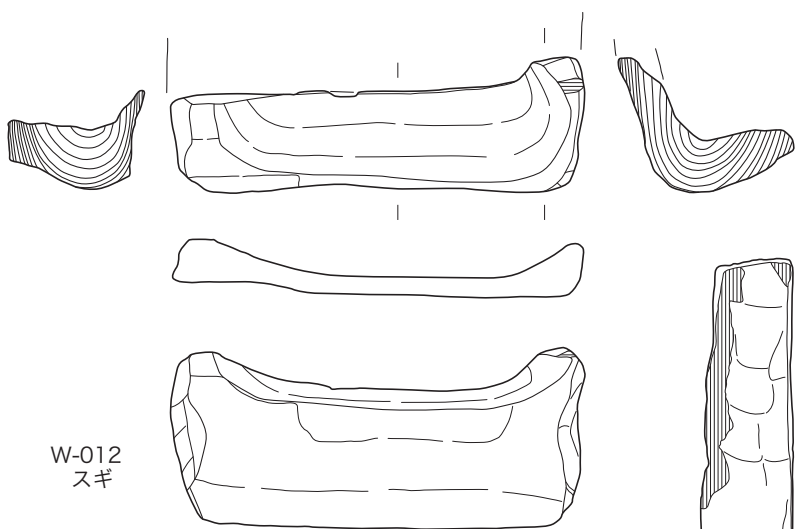
W-011
ヒノキ

本来は両脚の付いた
椅子であった。
孔は後であけている。
転用して使用。

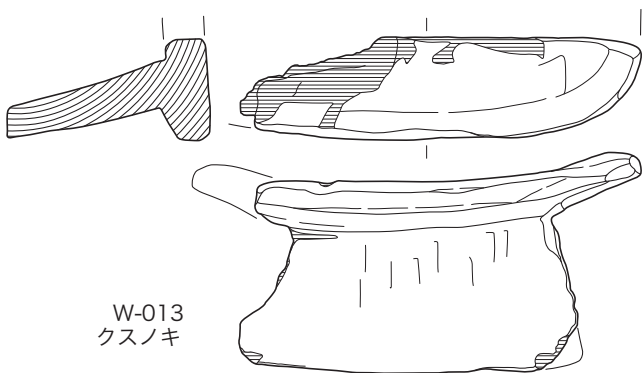


W-010
マキ属

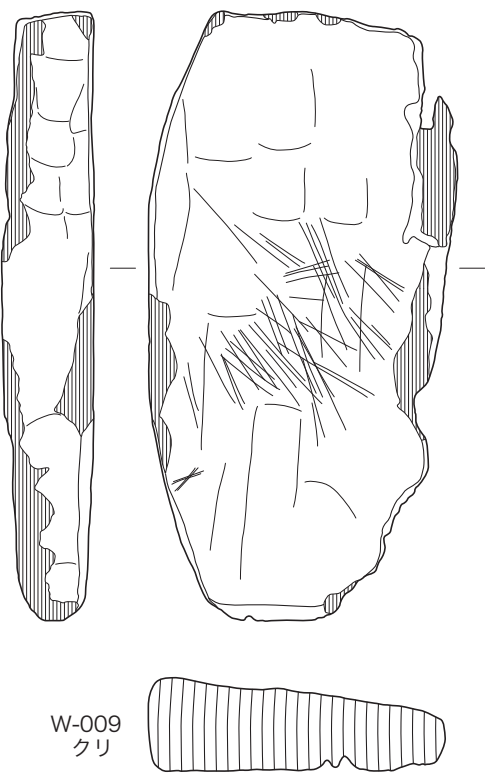
0 (1:6) 10cm



W-012
スギ

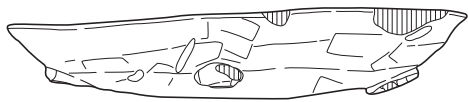
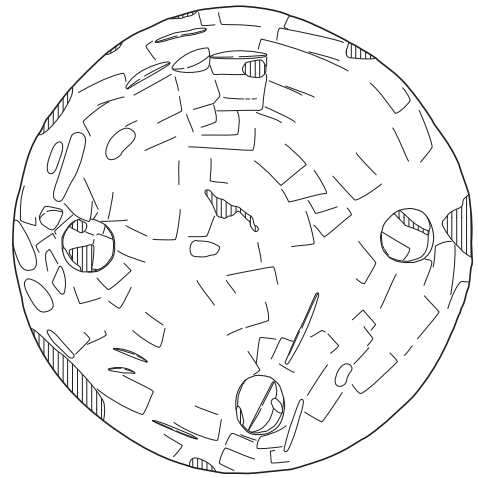


W-013
クスノキ

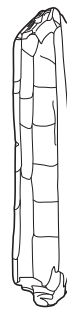
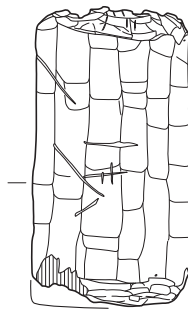


W-009
クリ

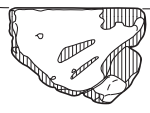
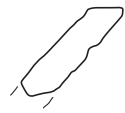
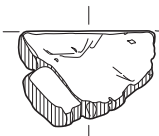
第 203 図 木製品:工具 1・雑具・調度品 1 (S=1/6)



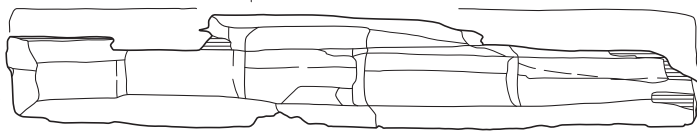
W-016
クスノキ



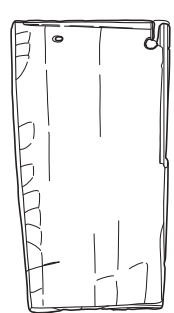
W-018
マキ属



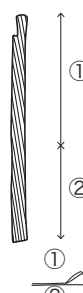
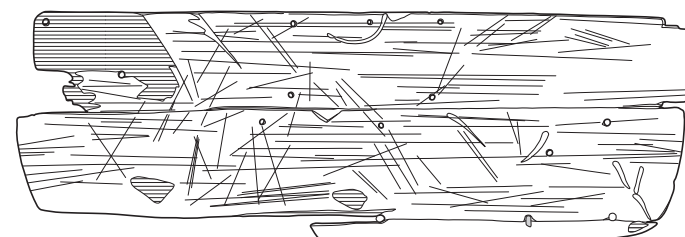
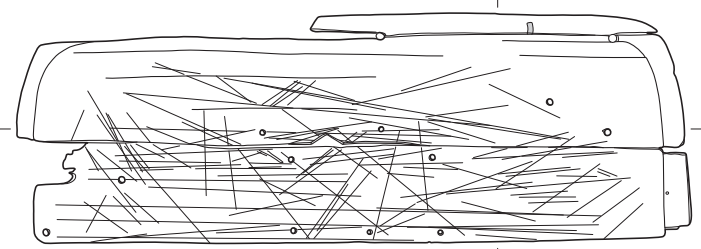
W-017
クスノキ



W-019
ヒノキ



W-022
ヒノキ



一枚の板を①と②に分割した後
①の方に孔を作ったと思われる。

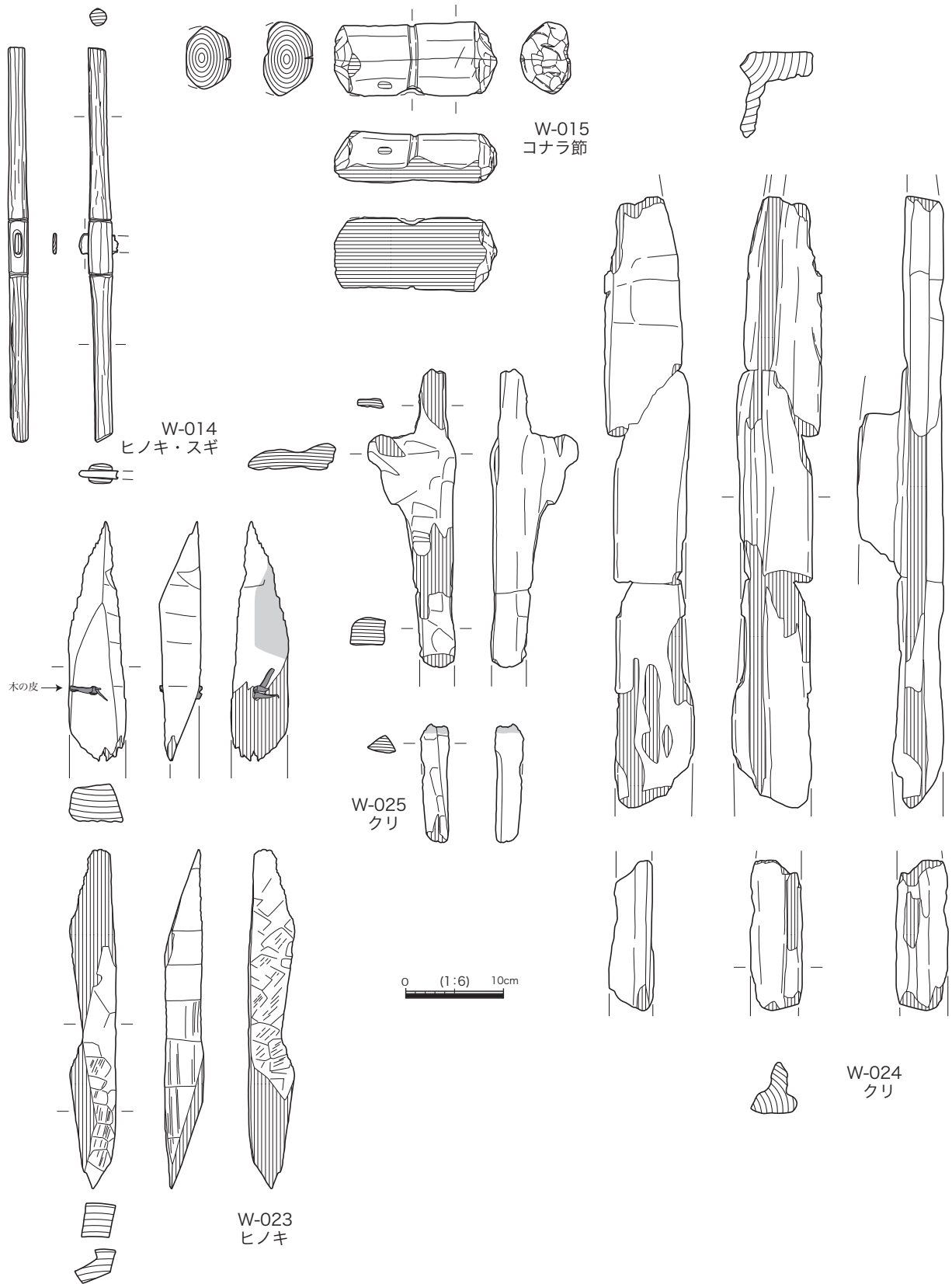
両面に対物キズ有り
穿孔は転用後か？

W-020
ヒノキ

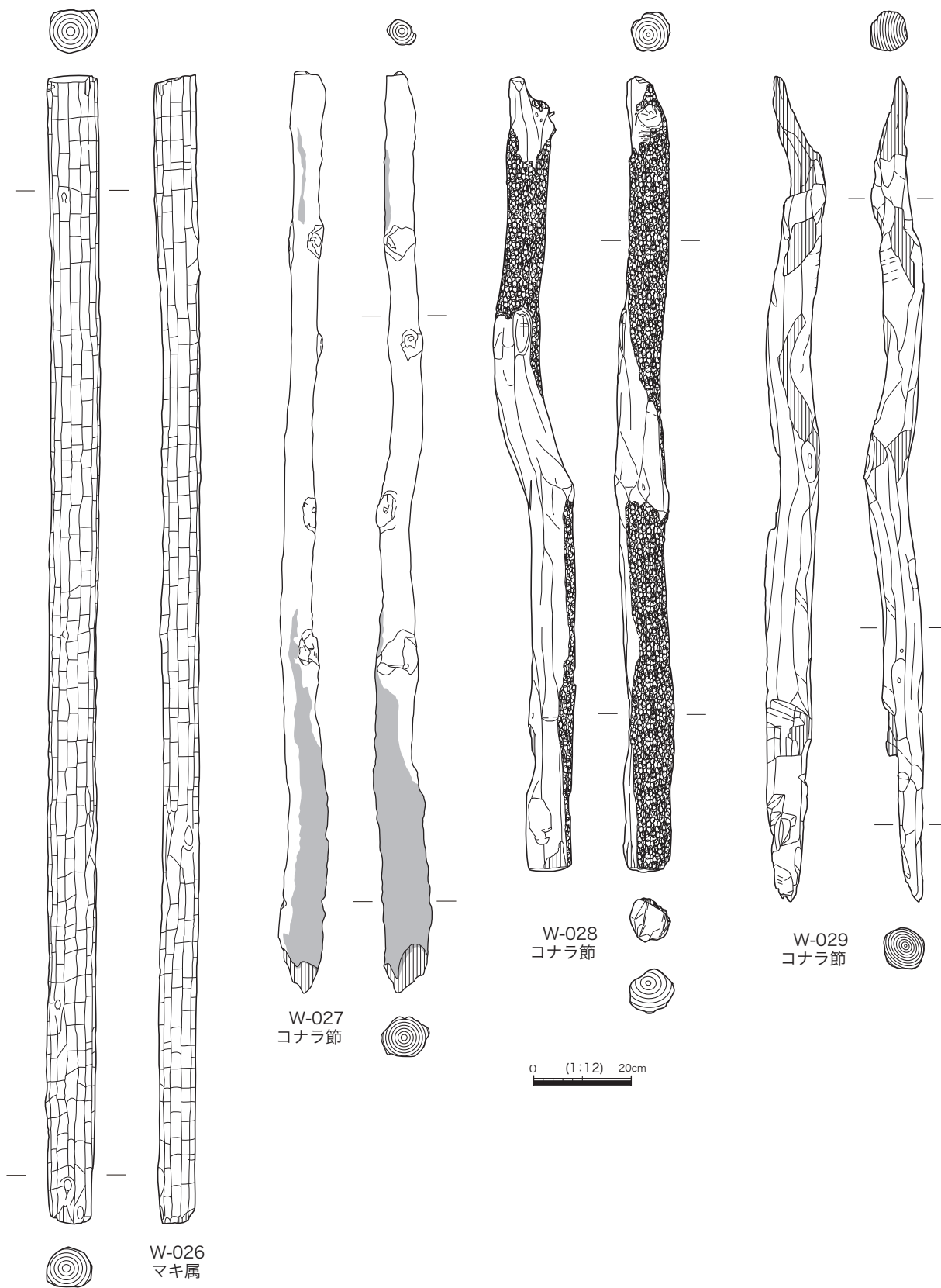


W-021
ヒノキ

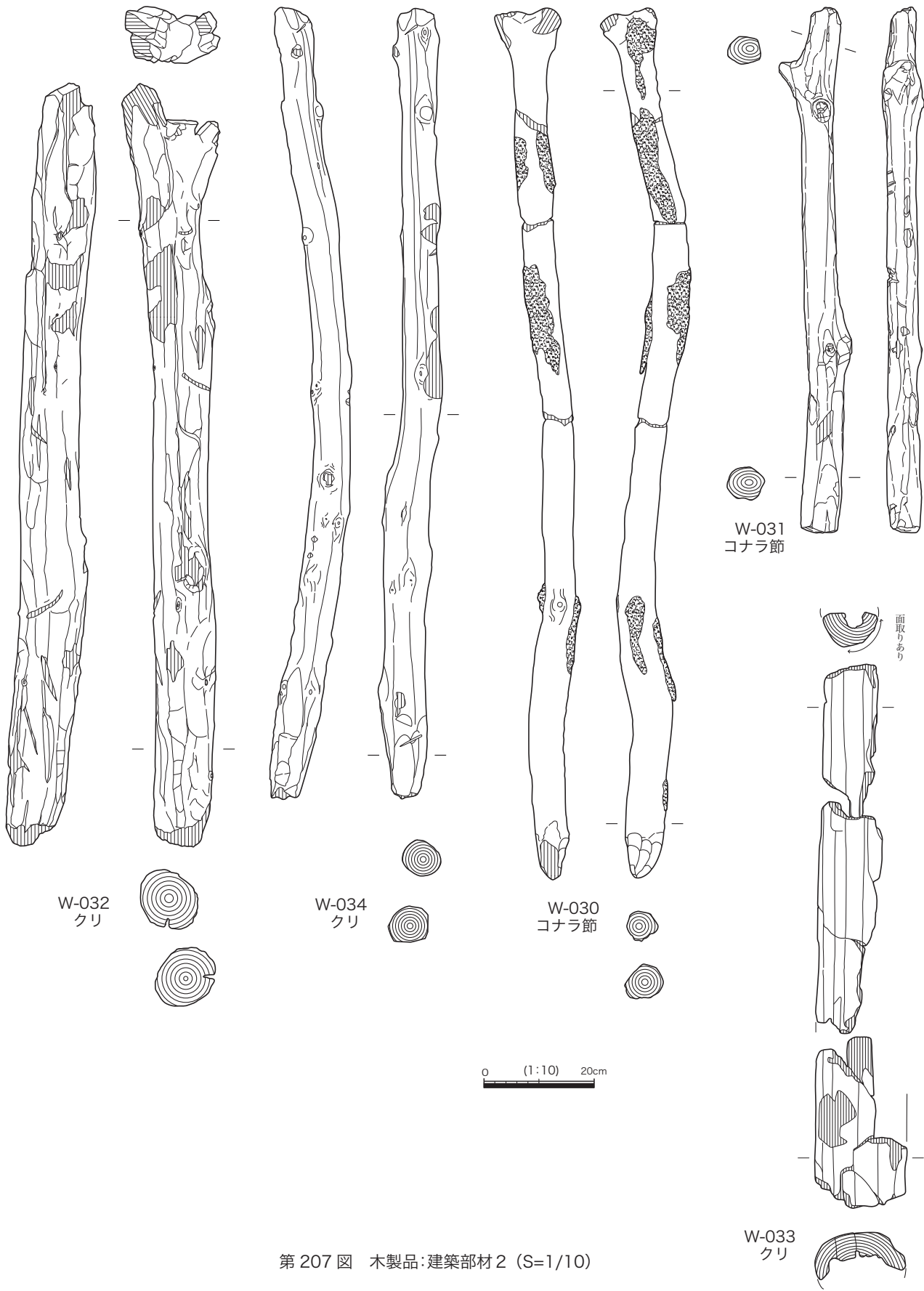
0 (1:6) 10cm



第 205 図 木製品：紡織具 1・編み具 1・運搬具 1・漁撈具 1 (S=1/6)



第 206 図 木製品:建築部材 1 (S=1/12)



W-032
クリ

W-034
クリ

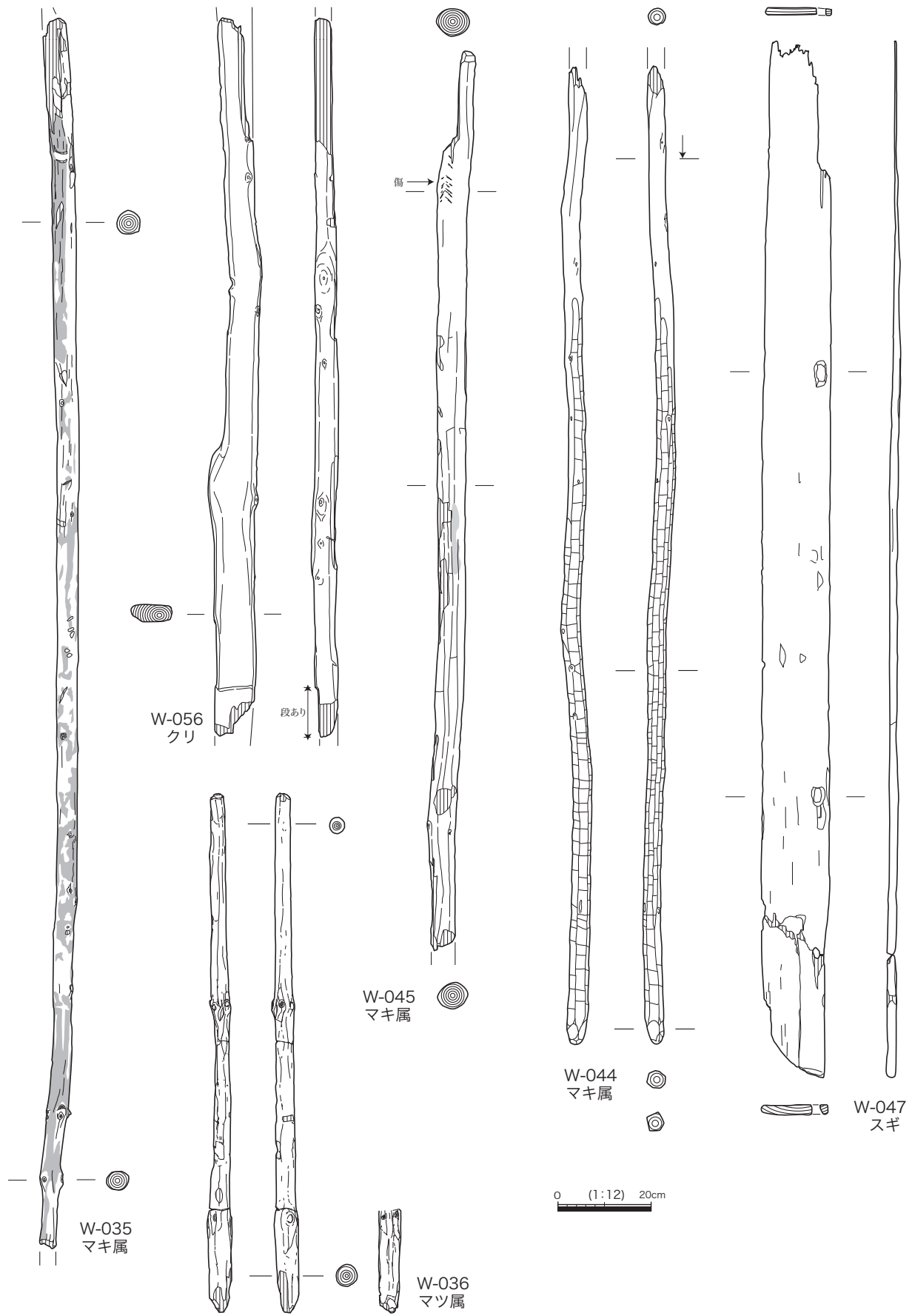
W-030
コナラ節

W-031
コナラ節

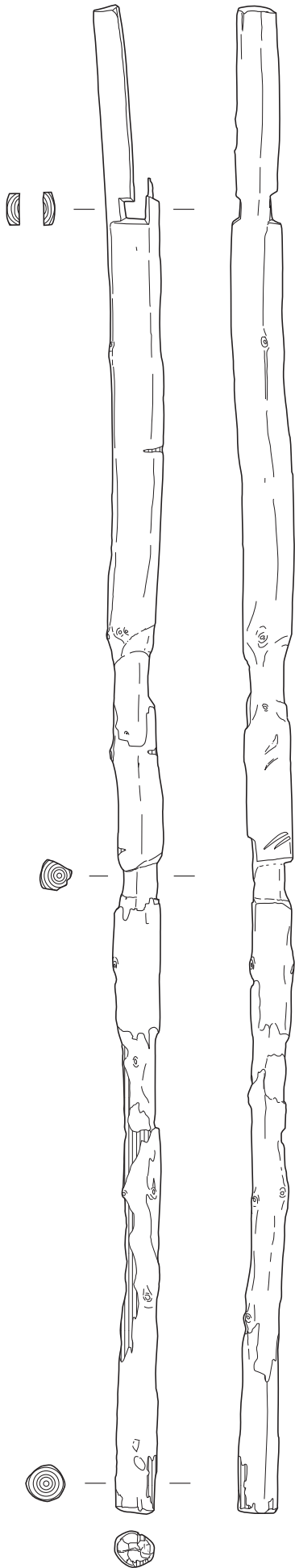
W-033
クリ

0 (1:10) 20cm

第 207 図 木製品:建築部材 2 (S=1/10)



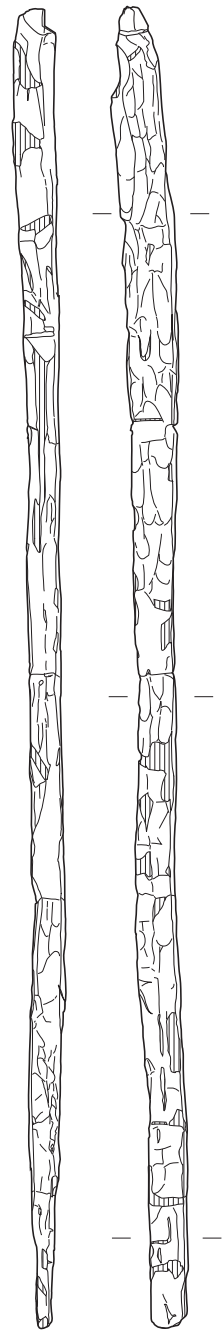
第 208 図 木製品:建築部材 3 (S=1/12)



W-050
コナラ節



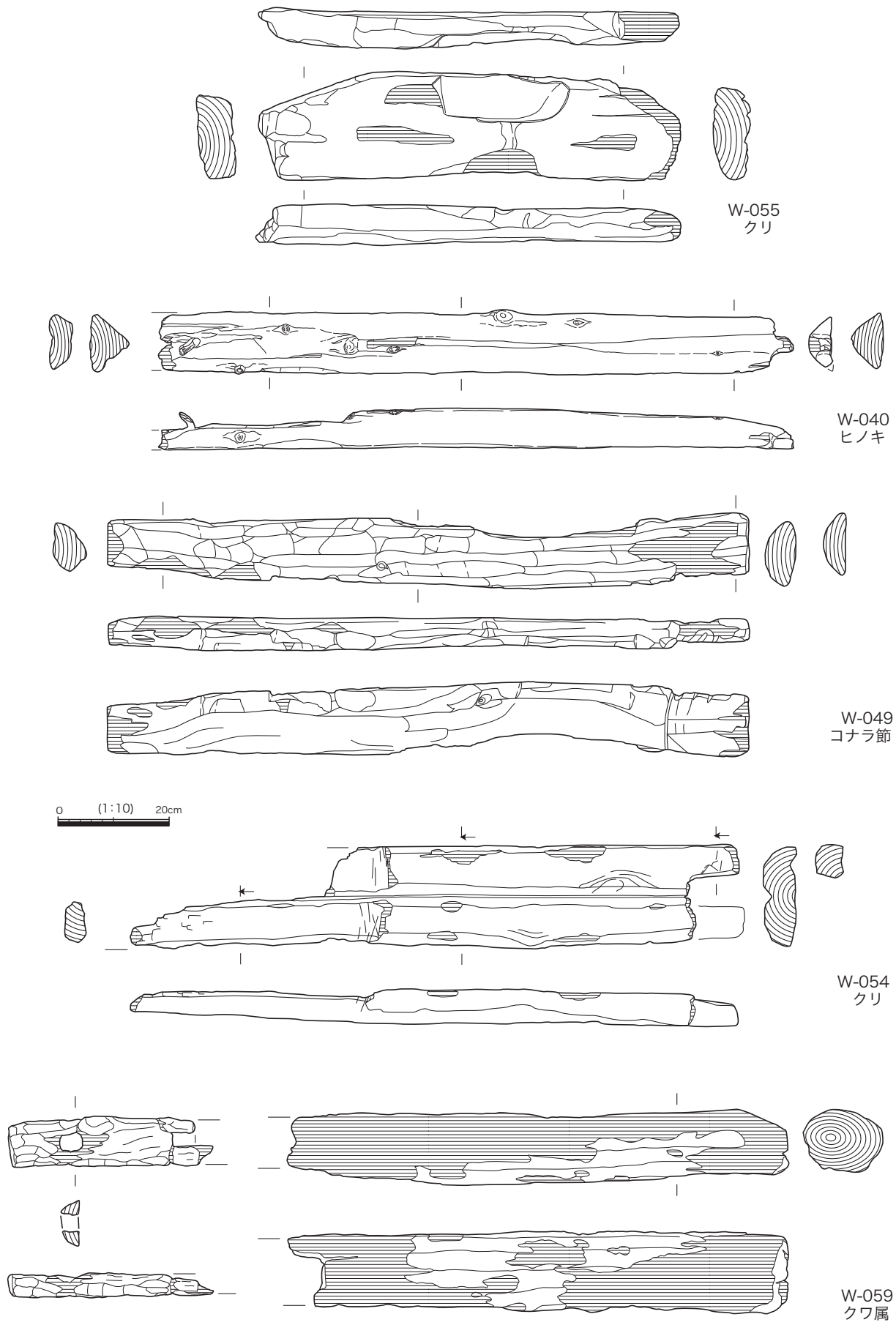
W-052
コナラ節



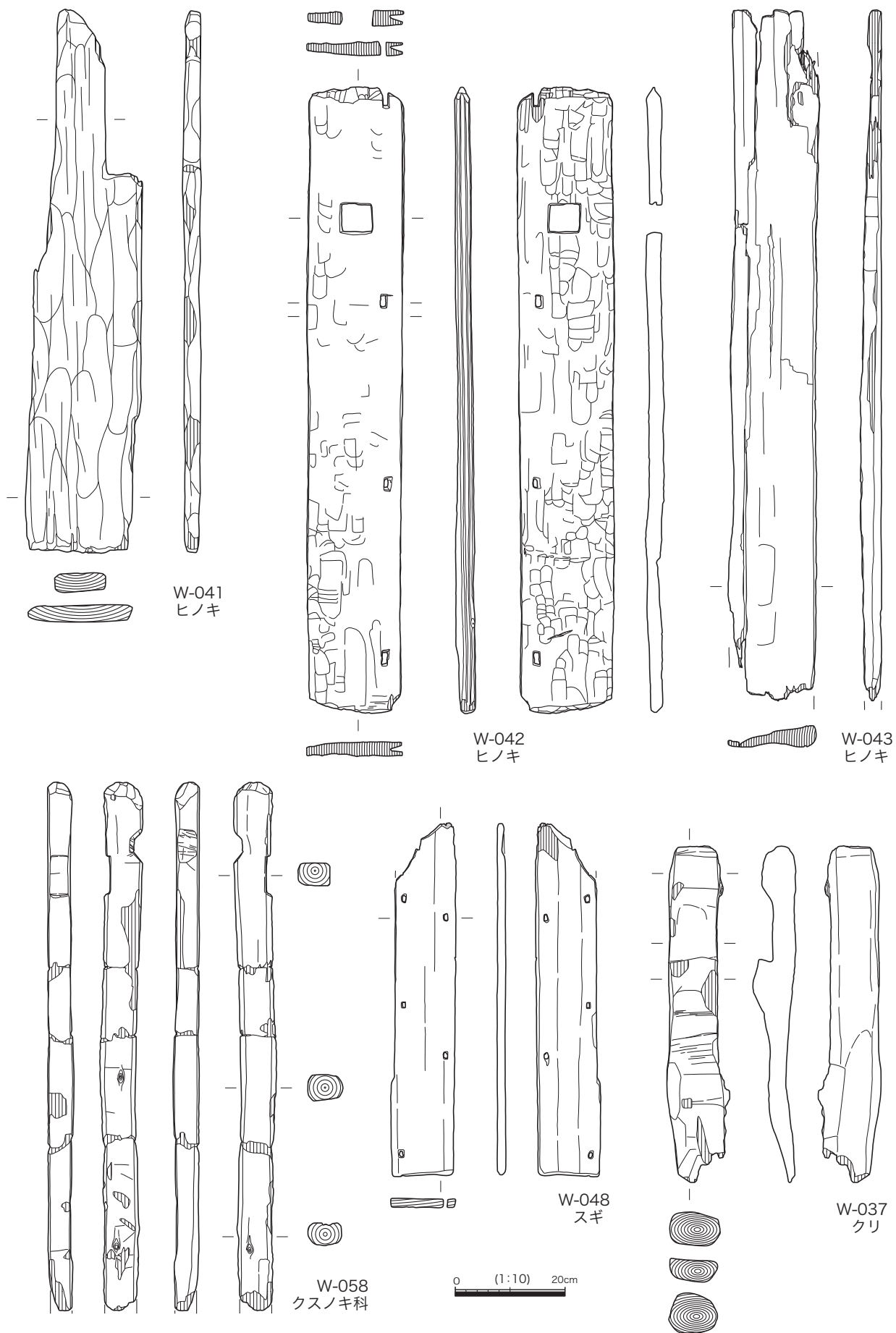
W-057
クヌギ節

0 (1:16) 40cm

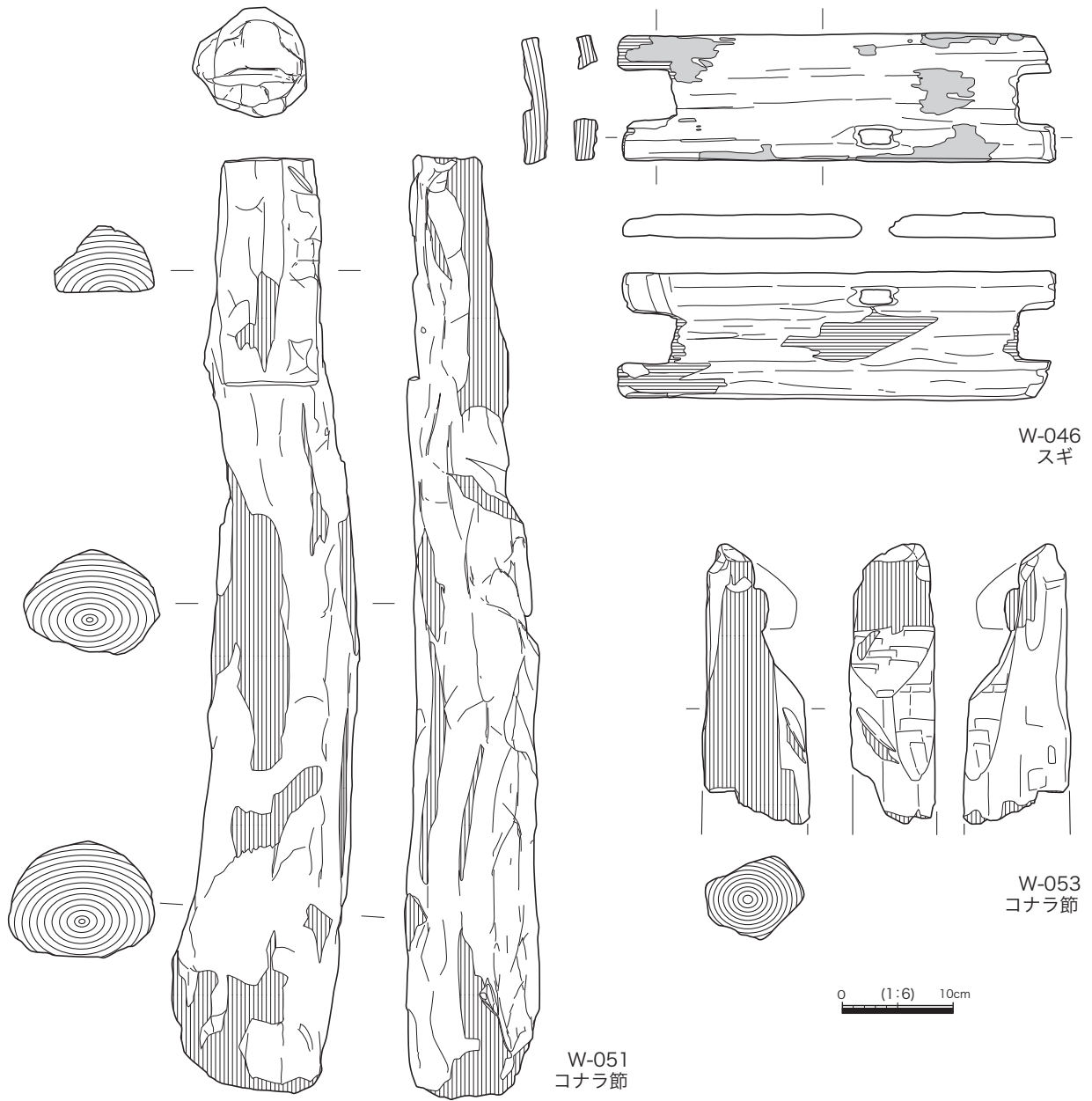
第 209 図 木製品:建築部材 4 (S=1/16)



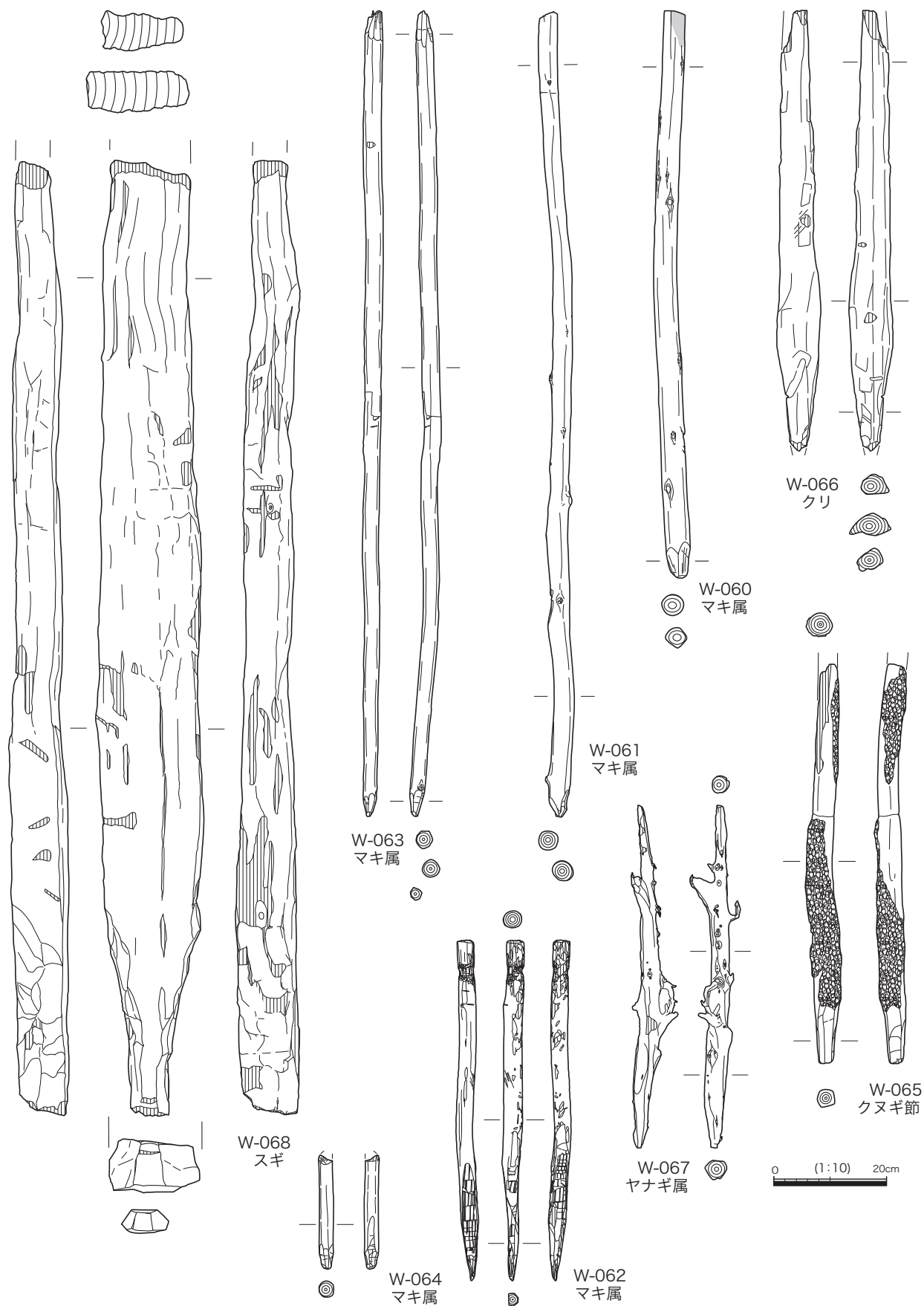
第 210 図 木製品:建築部材 5 (S=1/10)



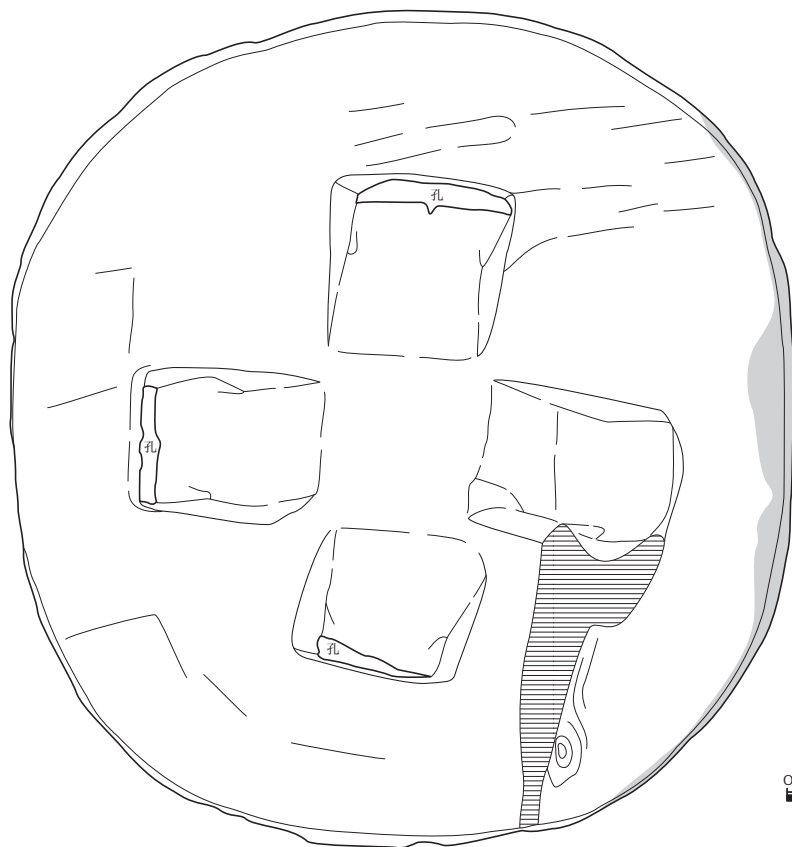
第 211 図 木製品:建築部材 6 (S=1/10)



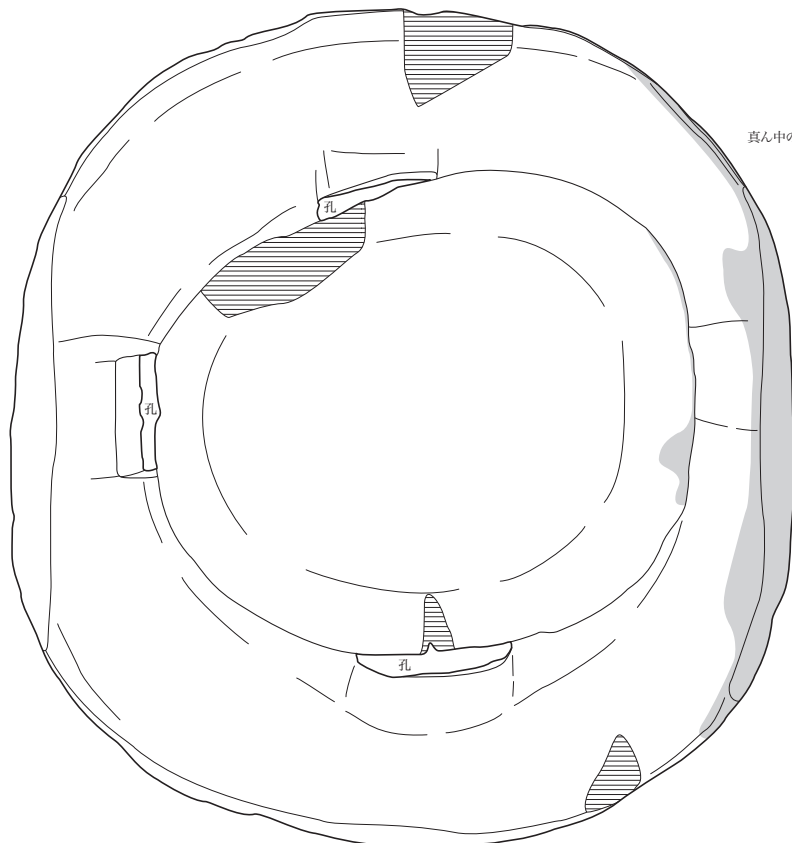
第 212 図 木製品：建築部材 7 (S=1/6)



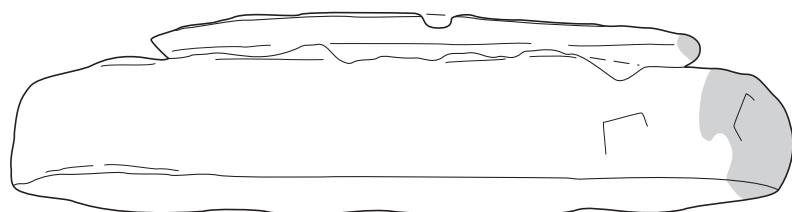
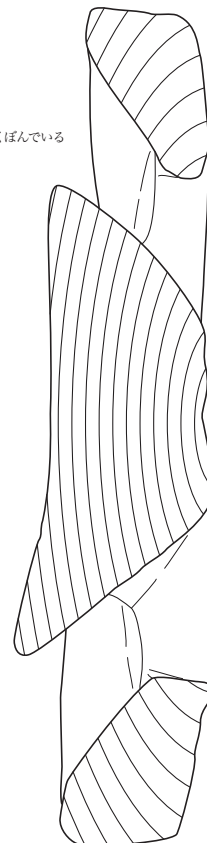
第 213 図 木製品：杭 1・矢板 1 (S=1/10)



0 (1:4) 10cm

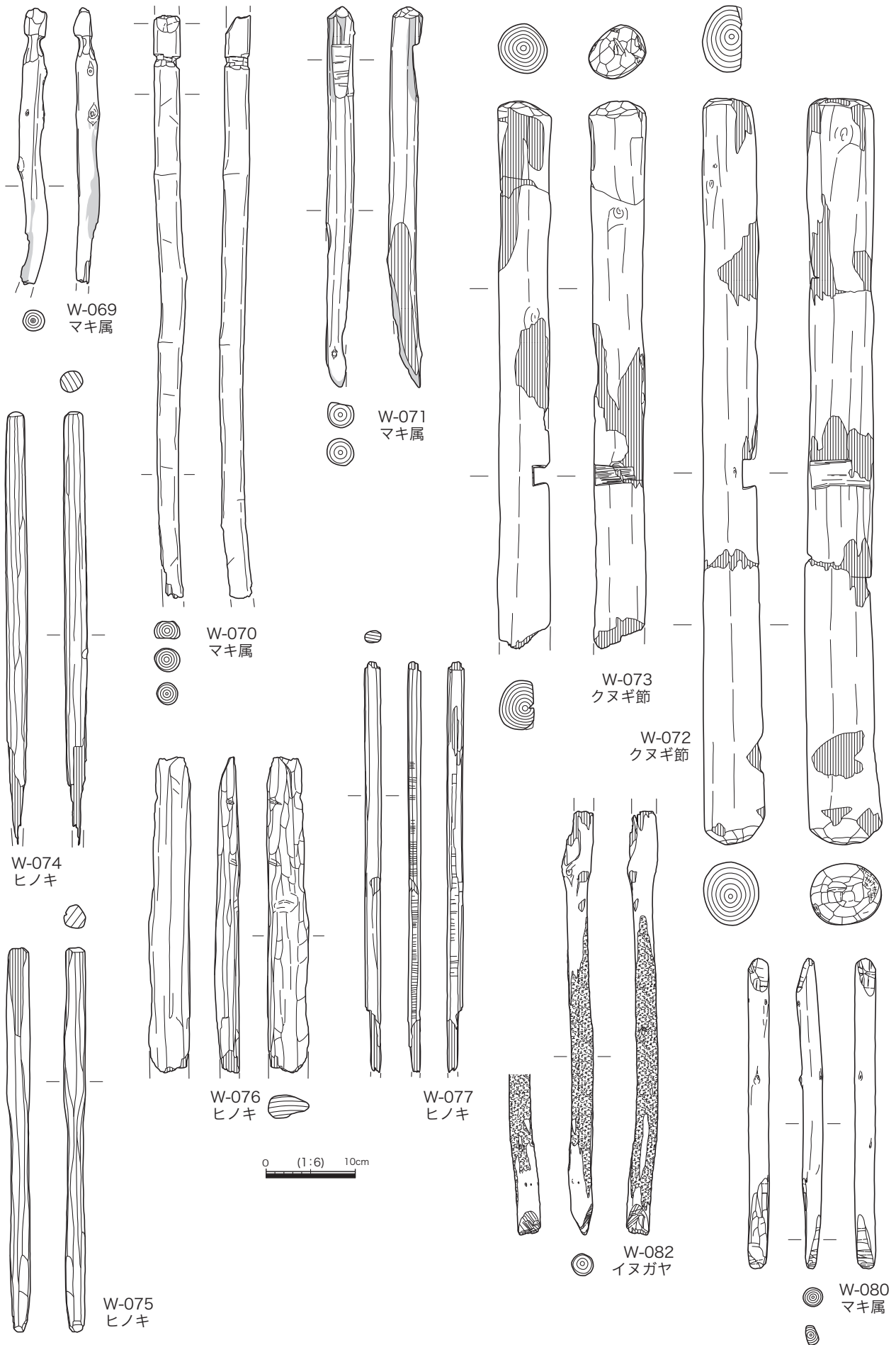


真ん中の面くぼんでいる



W-159
クリ

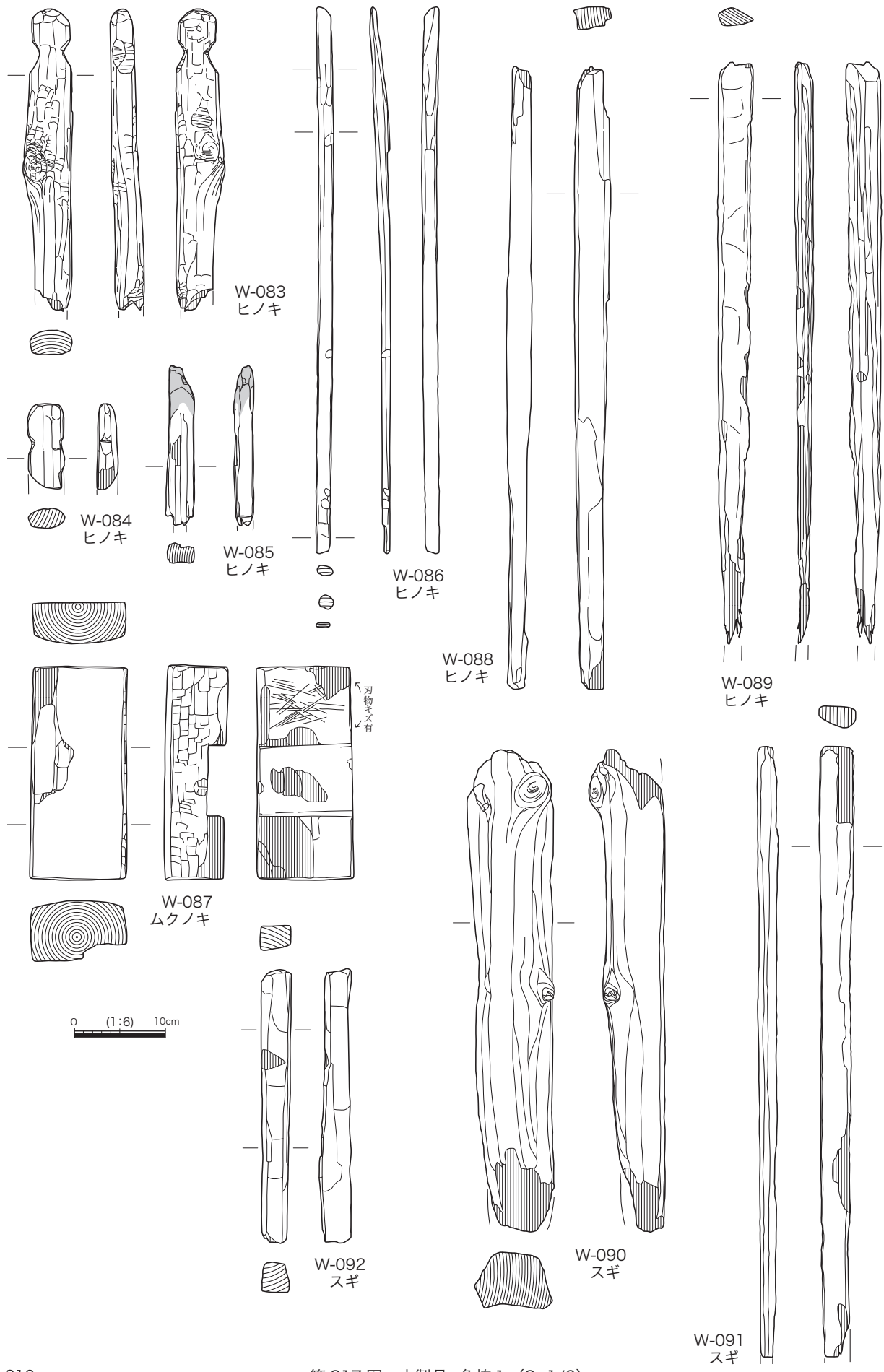
第 214 図 木製品：用途不明 1 (S=1/4)

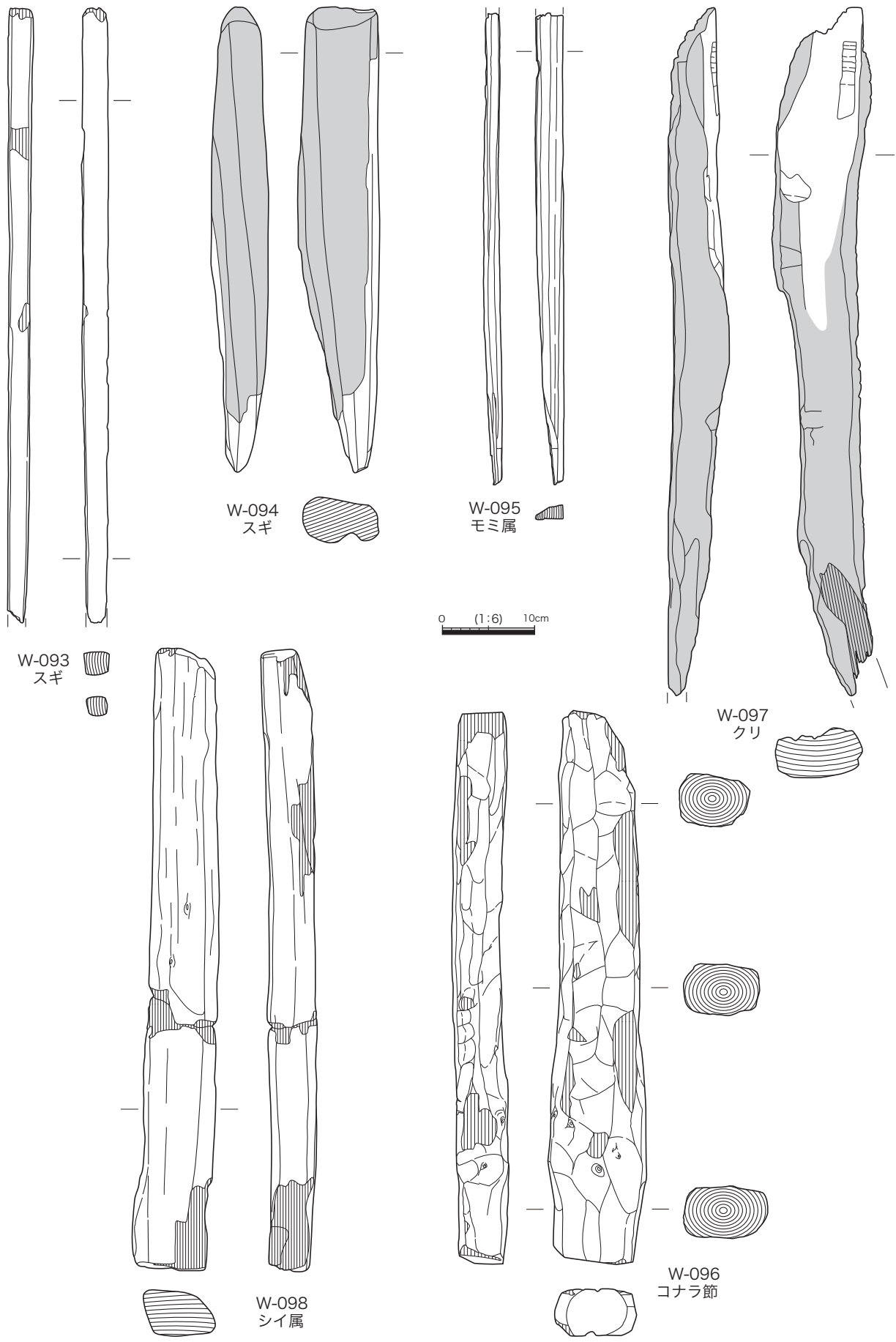


第215図 木製品:丸棒1 (S=1/6)

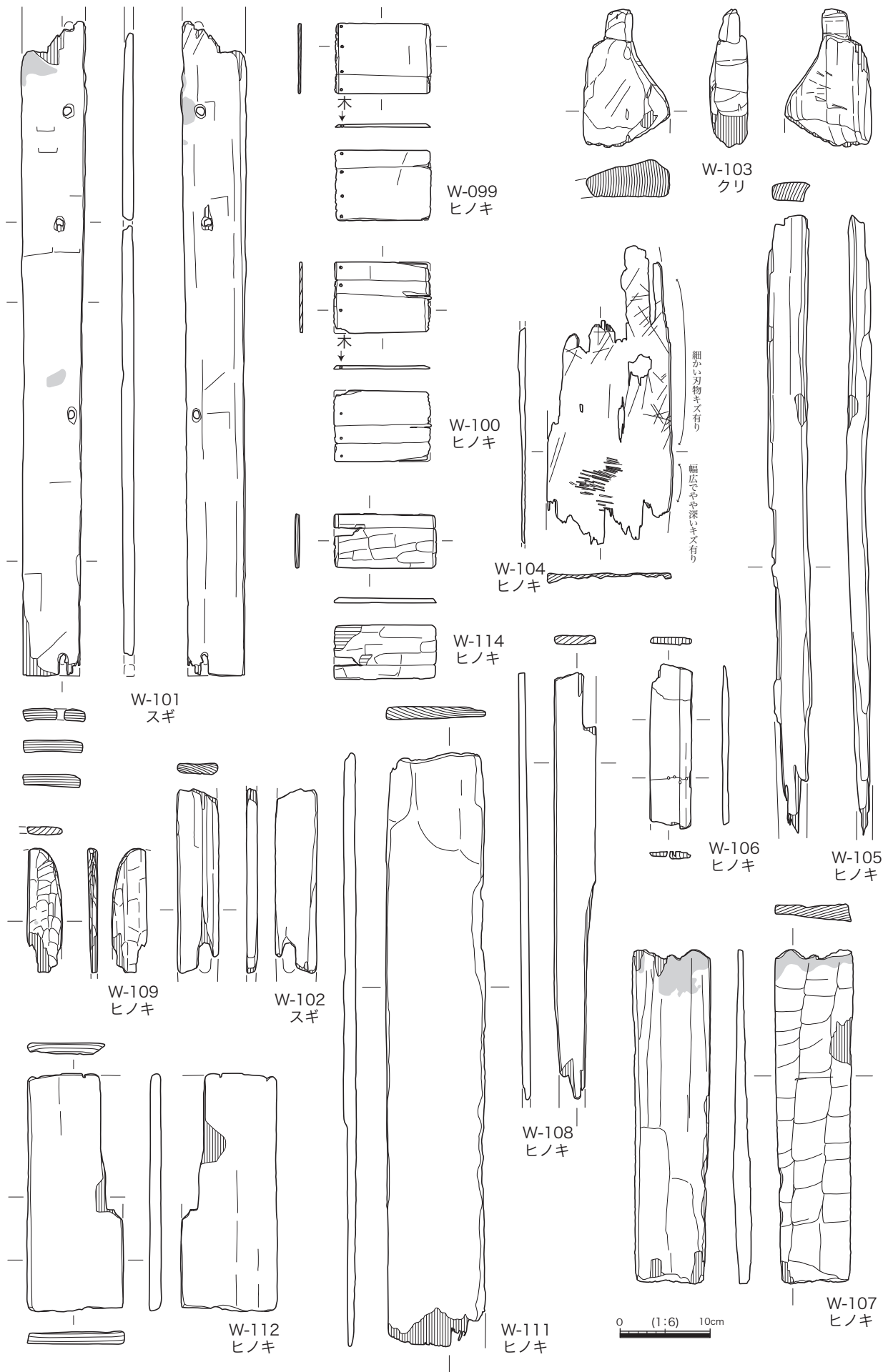


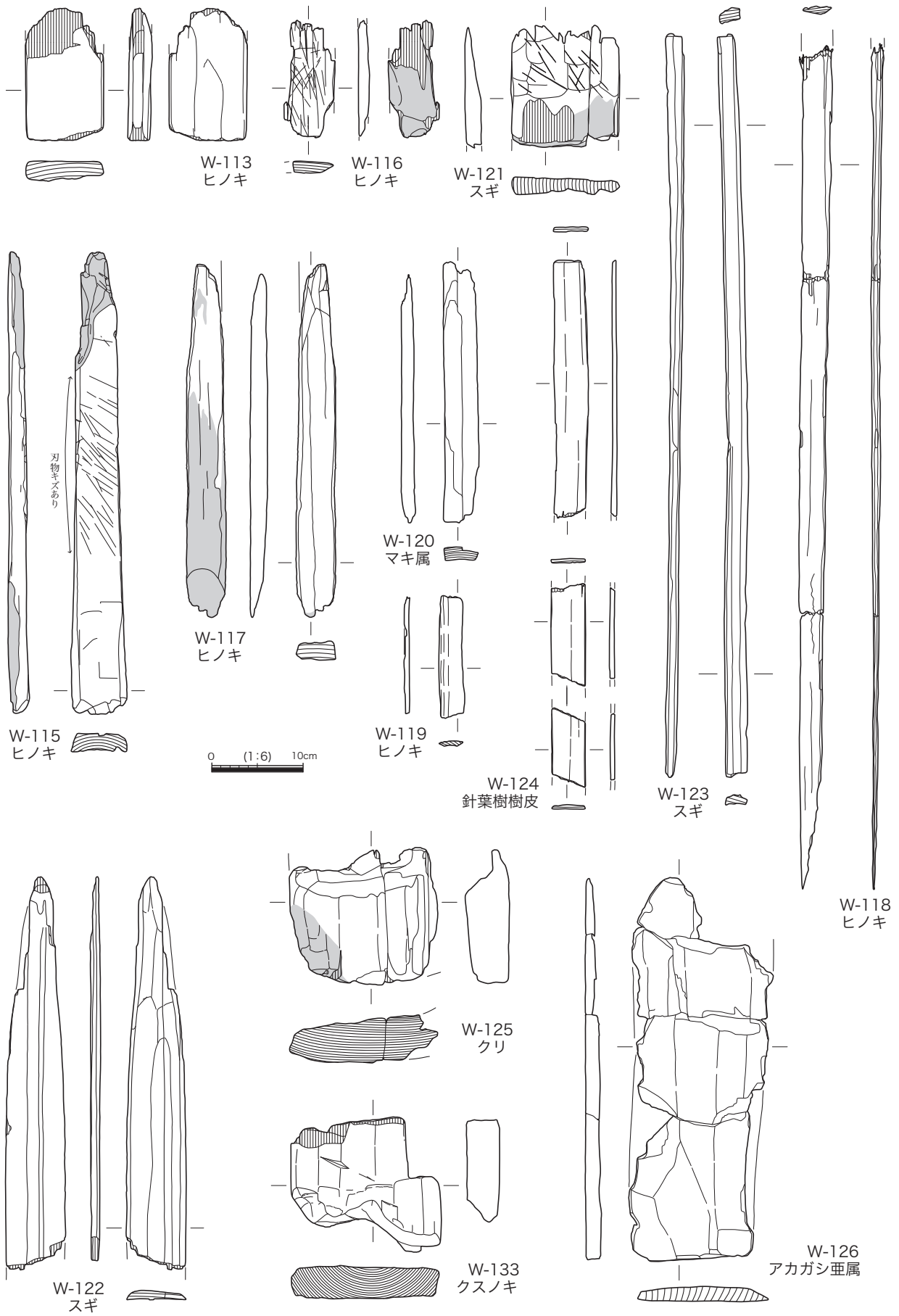
第216図 木製品：丸棒2・板1・丸太1 (S=1/10)



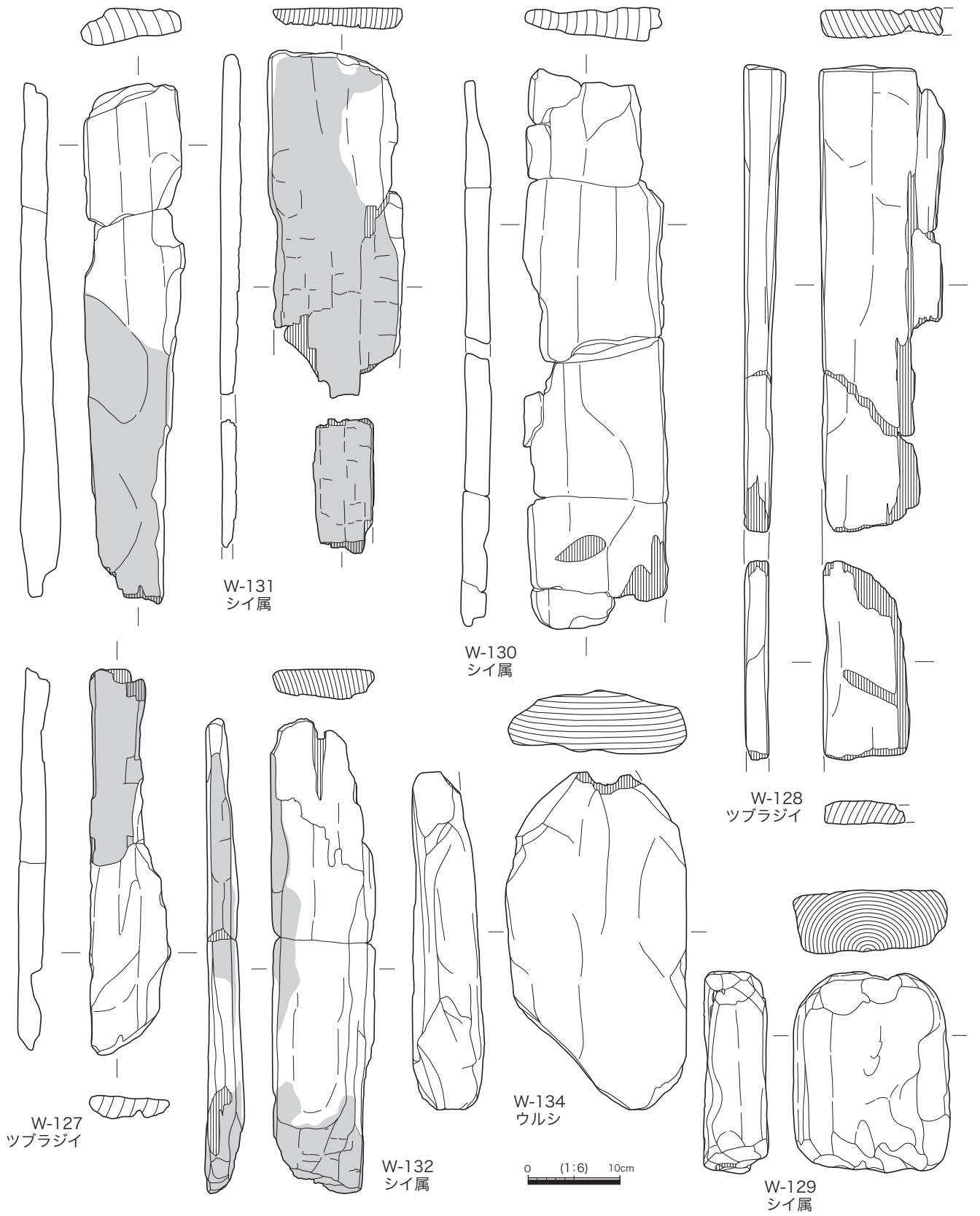


第 218 図 木製品：角棒 2 (S=1/6)

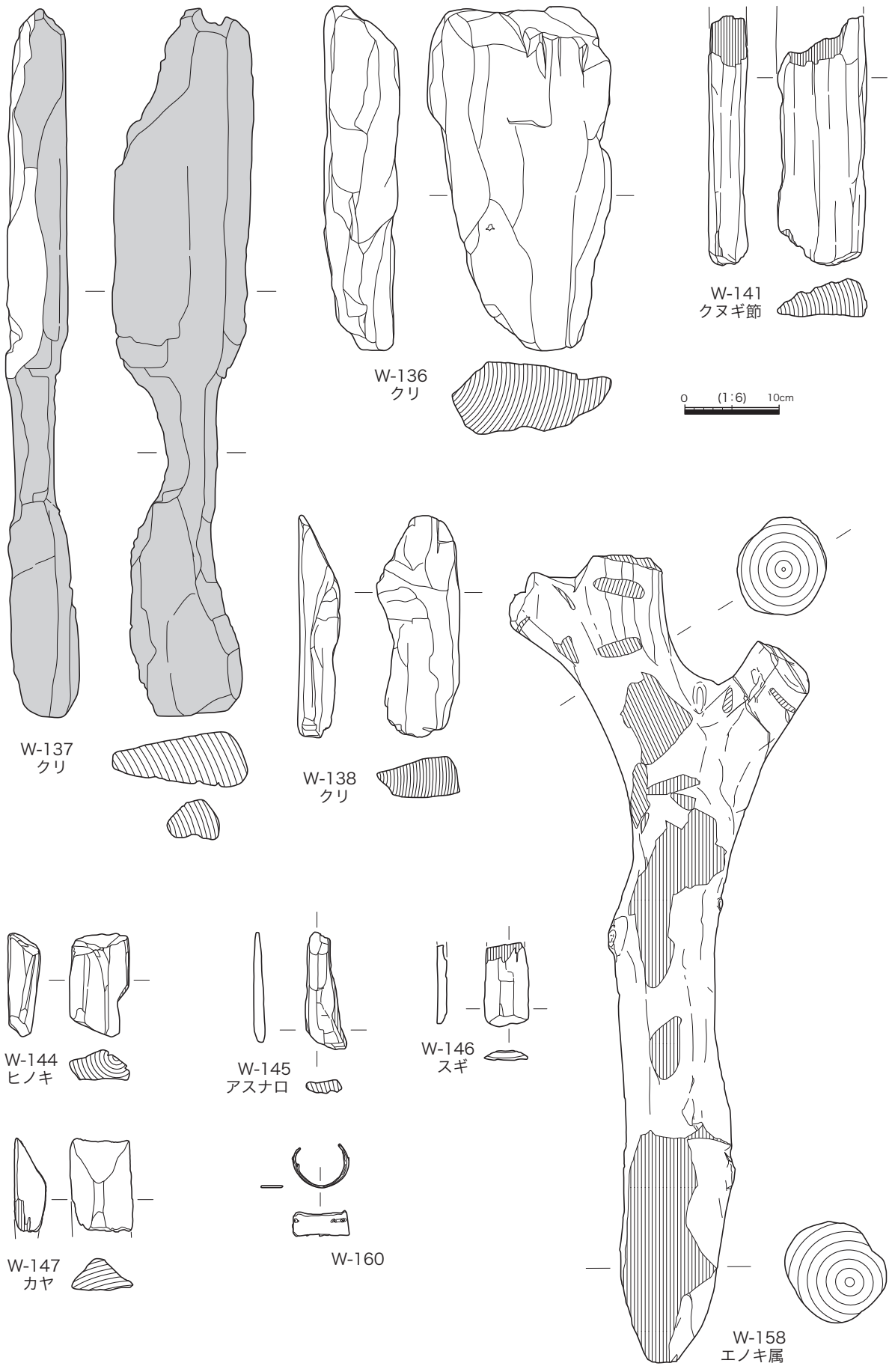




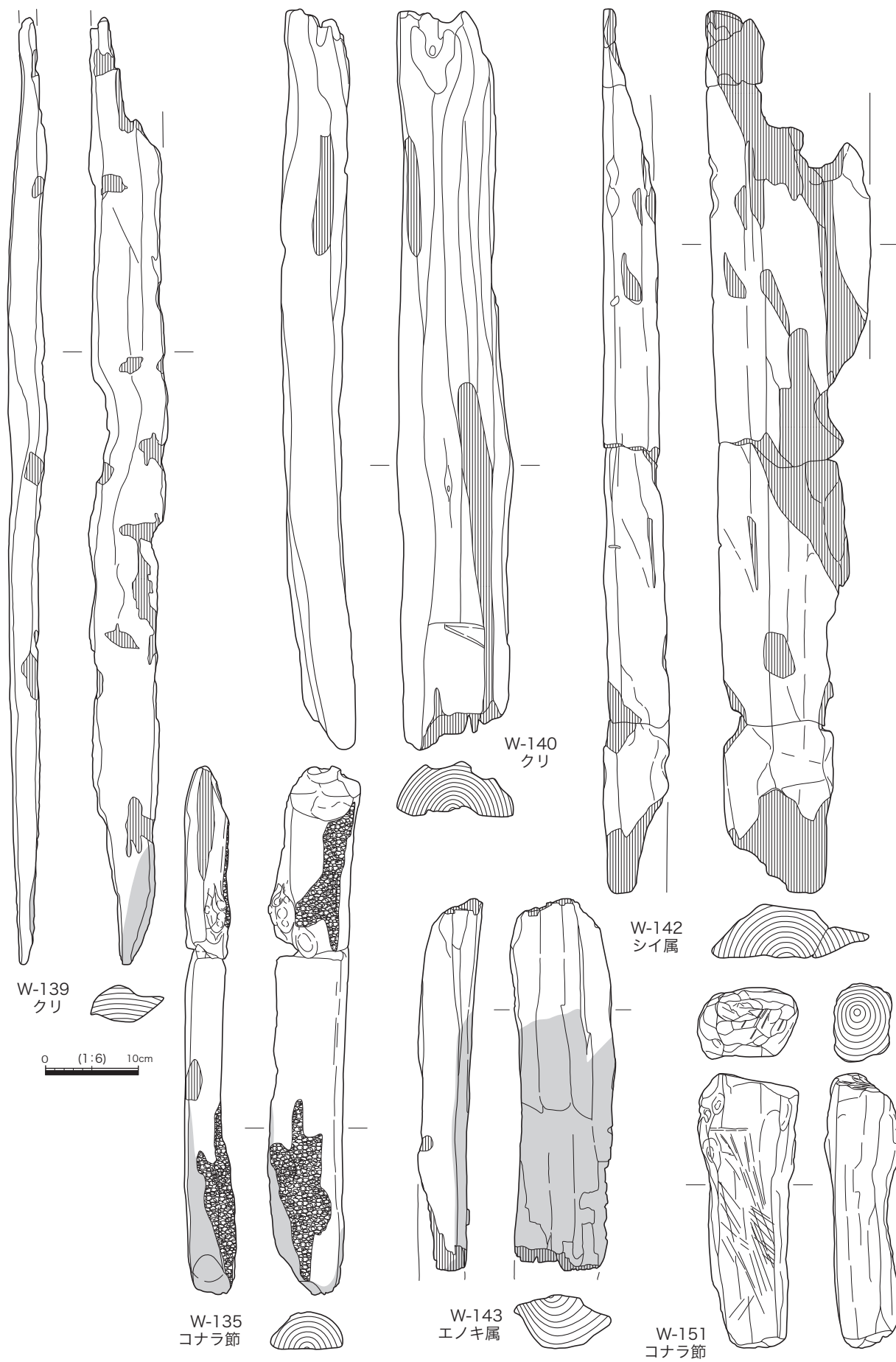
第 220 図 木製品：板 3 (S=1/6)

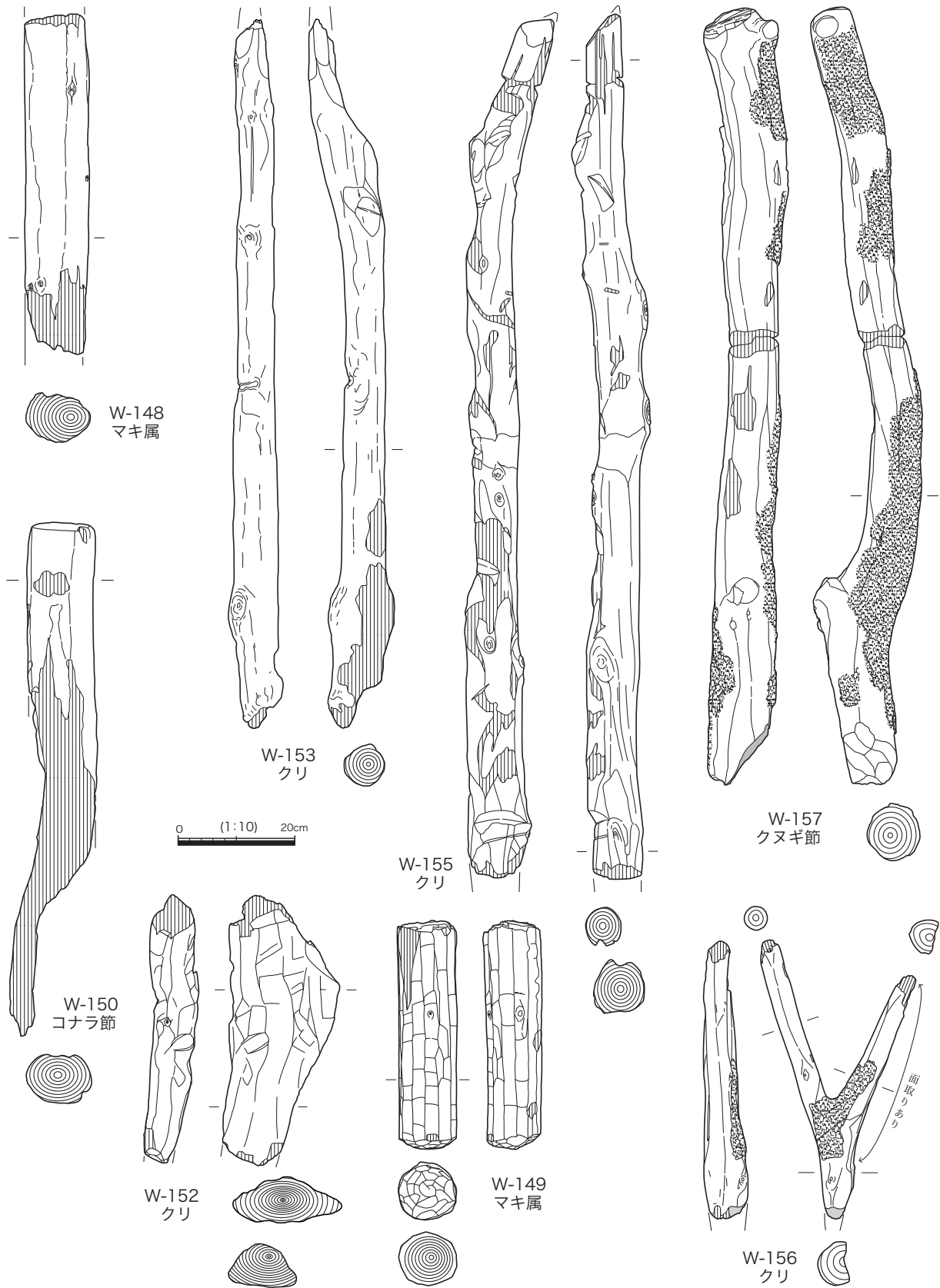


第 221 図 木製品：板 4 (S=1/6)



第 222 図 木製品：分割材 1・残材・丸太 2・用途不明 2 (S=1/6)





第 224 図 木製品：丸太 4 (S=1/10)

088・089 はヒノキ、090～094 はスギ、095 はモミ属、096 はコナラ節、097 はクリ、098 はシイ属の角棒。

板（第 216・219～221 図） 099・100 は、短辺に面取りをほどこし、その片側のみに 4 カ所の穿孔をおこなう。114 は同形同大の板だが、穿孔はない。樹種はいずれもヒノキ。

101 は短辺側に 1 カ所、長辺の片側のみに 3 カ所穿孔した板。大型の箱側板の可能性はある。樹種はスギ。

102 は楕円形の穿孔をもつ板で、樹種はスギ。

103 はクリの厚板で、図面の側を上側に斜めに削り込む。

104 はヒノキの薄板で、刃物痕が多数つく。

105～119 はヒノキ、120 はマキ属、121～123 はスギ、124 は針葉樹（樹皮）、125 はクリ、126 はアカガシ亜属、127・128 はツブラジイ、129～132 はシイ属、133 はクスノキ、134 はウルシの板。

分割材（第 222・223 図） 135 はコナラ節の 2 分の 1 分割材。

136～140 はクリの分割材で、136～138 は 8 分の 1、139 は 4 分の 1、140 は 2 分の 1 分割材。

141 はクヌギ節の 8 分の 1 分割材。

142 はシイ属の 2 分の 1 分割材。

残材（第 222 図） 144 はヒノキ、145 はアスナロ、146 はスギ、147 はカヤの残材。

丸太（第 216・222～224 図） 148・149 はマキ属の丸太で、149 は両端部を丁寧に面取りしている。

150・151 はコナラ節、152～156 はクリ、157 はクヌギ節、158 はエノキ属。うち、156・158 は又木部分。

その他（第 214・222 図） 159 は 4 カ所に穿孔をほどこした円盤状の木製品で、中央に台状の突起がある。下懸遺跡からはほぼ完形で、三重県六大 A 遺跡からは破片で同様のものが出土している（三重県埋蔵文化財センター 2000 の第 21 図-228）。うち下懸遺跡のもの（図 42-1586）は、平面が隅丸方形に近い楕円形で、その四隅にそれぞれ一カ所ずつの 4 カ所と、長辺側中央にそれぞれ 1 カ所ずつの 2 カ所、計 6 カ所の穿孔をほどこしている。六大 A 遺跡の報告では捏ね台とされているが、用途は不明。この姫下遺跡・下懸遺跡ともに樹種はクリの 2 分の 1 分割材を用いる。下懸遺跡出土例の方が本遺跡例よりも穿孔の数が多いこと、遺構の所属時期が下懸遺跡の方が廻間Ⅱ～Ⅲ式期とわずかに古いことから、型式学的に下懸遺跡出土例がより古い要素をとどめているものと考えられる。

160 はカバ皮で樹種は不明。

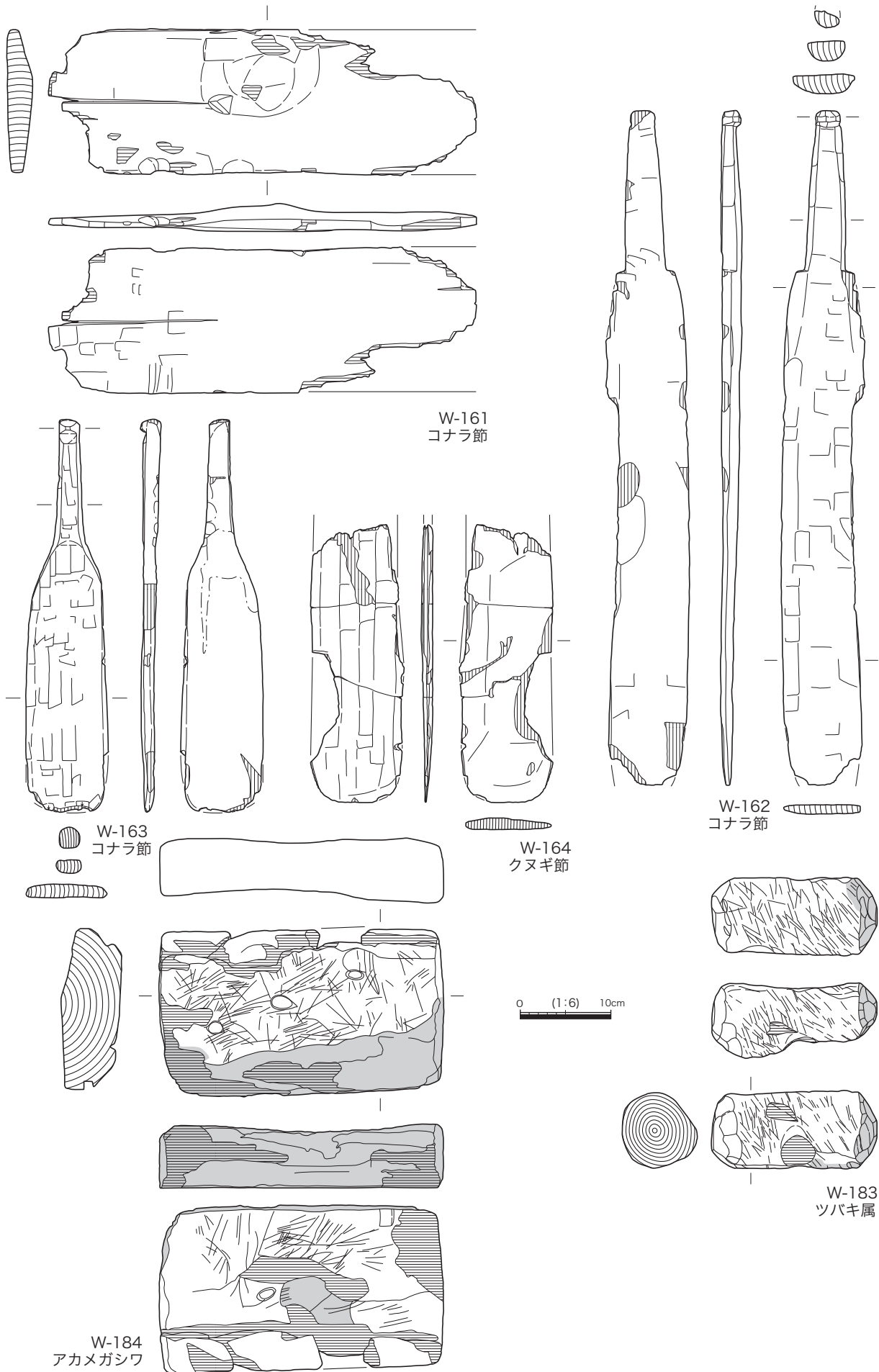
3 廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期：W-38・39・161～366

掘削具（161～171）、農具（172～179）、工具（180～184）、調度品（185・186）、紡織具・編み具（187～189）、容器（190～199）、運搬具・漁撈具（200～202）、祭祀具・威儀具（203・204）、建築部材（038・039・205～236）、杭（237～261）、矢板（262～265）、丸棒（266～275）、角棒（276～282）、板（283～329）、分割材（330～341）、丸太（342～366）がある。掘削具（第 225・226 図） 161 はエブリあるいは直柄横鋏の柄穴穿孔前未成品。樹種はコナラ節。

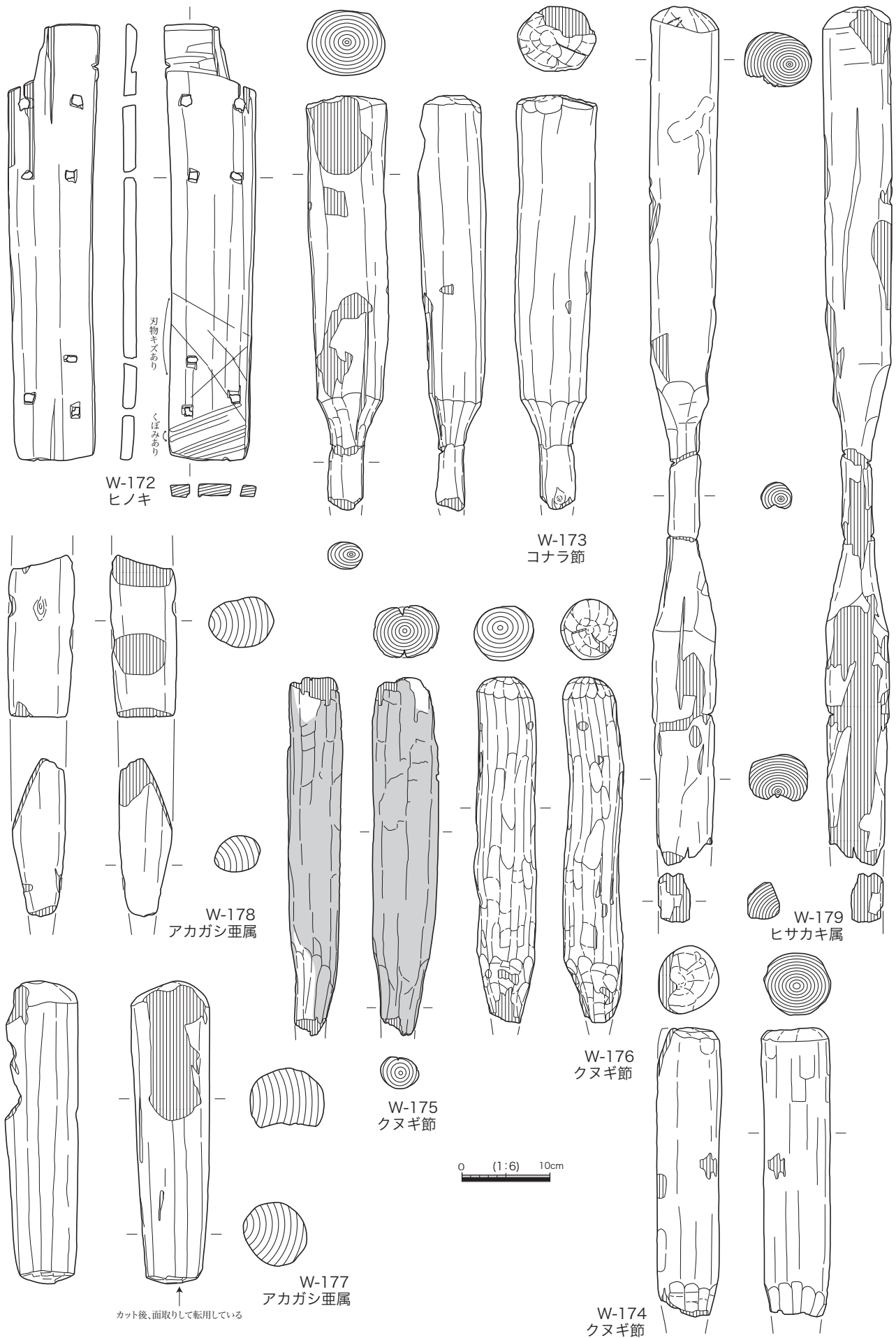
162～164 は伊勢湾型曲柄平鋏で、樹種は 162・163 がコナラ節、164 がクヌギ節。162 は筆者分類の CⅡ類で、163 は DⅡ類。164 は刃部のみ。

165・166 は伊勢湾型曲柄二又鋏で、樹種は 165 がコナラ節、166 がアカガシ亜属。165 は DⅡ類だが、刃部幅と開きが極端に狭いことから、本来は曲柄平鋏であったものを二又鋏に転用したと考えられる。166 は伊勢湾西部系の EⅠ類。

167 は同時期のこの地域では珍しいナスビ形曲柄二又鋏。通常、他地域ではナスビ形曲柄二又鋏



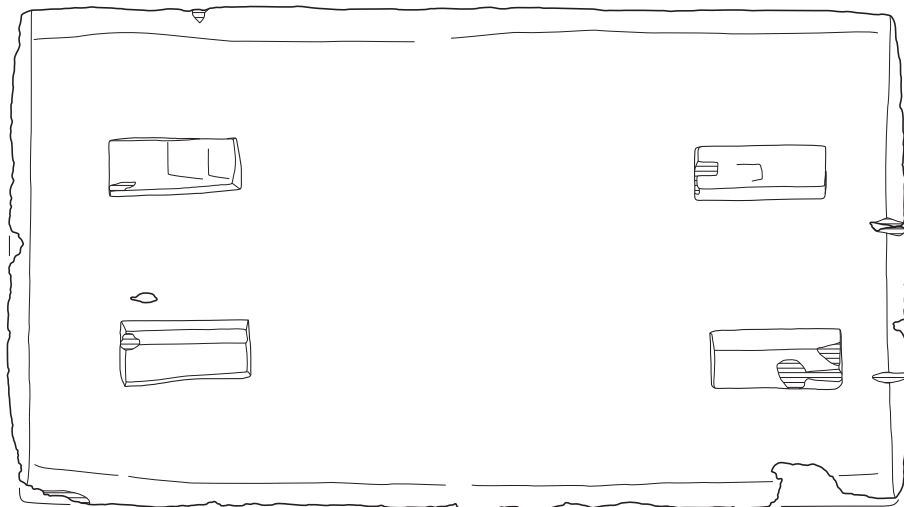
第 225 図 木製品：掘削具 2・工具 2 (S=1/6)



第 227 図 木製品：農具 (S=1/6)

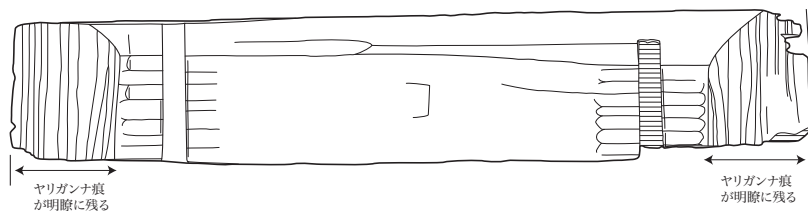
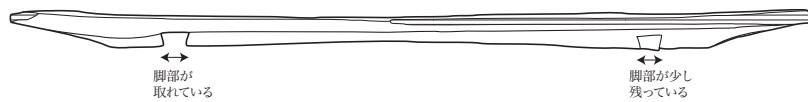
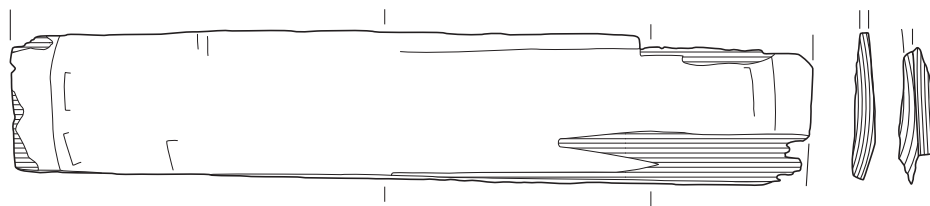


くぼんでいる

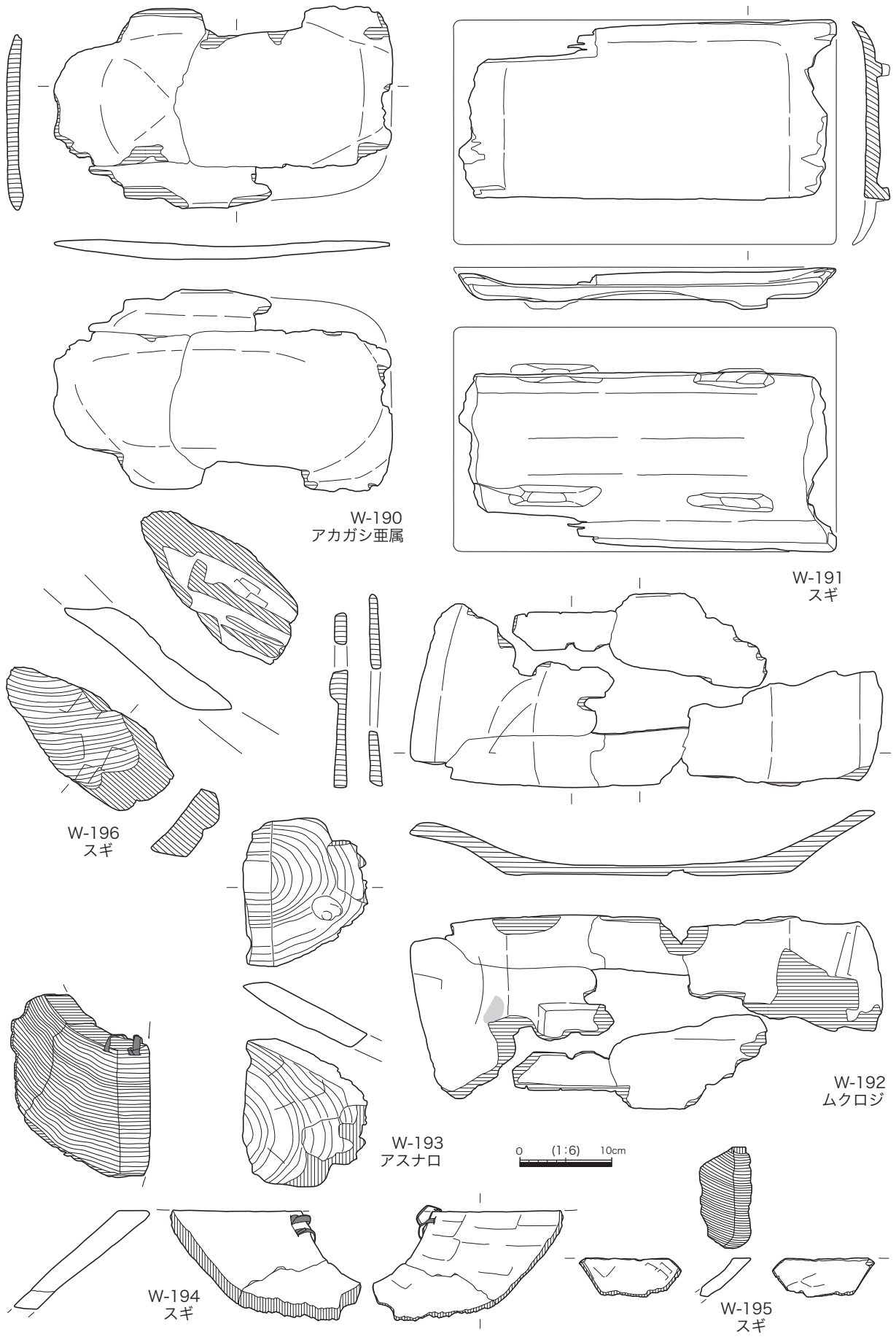


W-186
キハダ

0 (1:6) 10cm



W-185
ヒノキ



W-190
アカガシ亜属

W-191
スギ

W-196
スギ

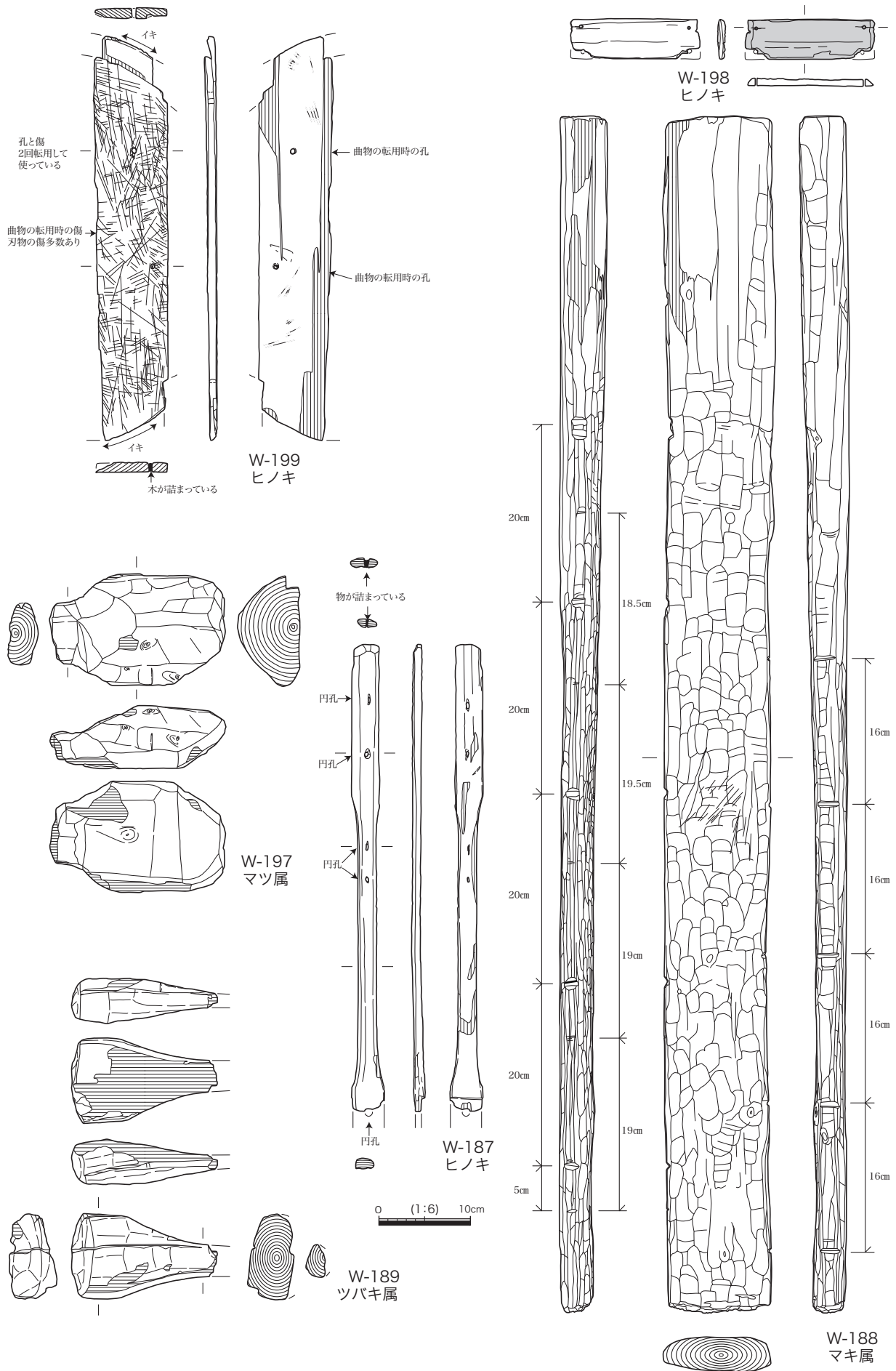
W-192
ムクロジ

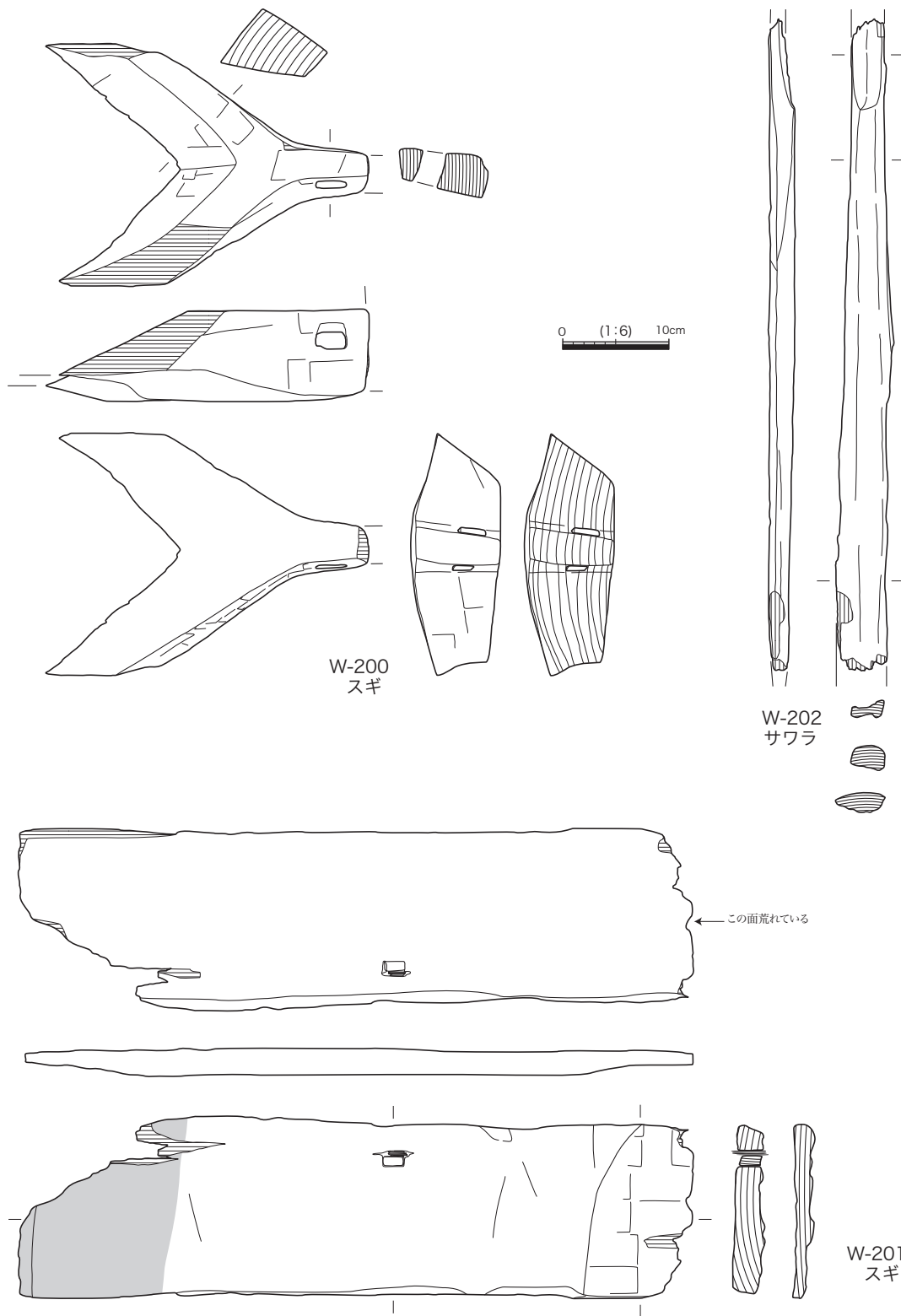
W-193
アスナロ

0 (1:6) 10cm

W-194
スギ

W-195
スギ





第 231 図 木製品：運搬具 2・漁撈具 2 (S=1/6)

にはアカガシ亜属を用いるのに対し、本例はコナラ節であることから、尾張低地部と同様の用材法で作られた在地製品であることは間違いなからう。

168～170は伊勢湾型曲柄三又鍬の刃部で、樹種はいずれもアカガシ亜属。

171は一木の掘り棒で樹種はクリ。

農具(第227図) 172は田下駄足板で、曲物底板からの転用品。樹種はヒノキ。173～179は竖杵で、うち177は握部をカットして別用途に転用している。樹種は173がコナラ節、174～176がクヌギ節、177・178がアカガシ亜属、179がヒサカキ属で、177・178が4分の1分割材のほかはすべて芯持ち材。端部が依存しているもののうち、173・174はみかん掘りで、176・179はたまご掘り。

工具(第225・226図) 180はヨコヅチで、渡辺誠の分類によるD類(藁打ち用)に属する(渡辺1985)。

181・182は木を割るクサビ(箭)で、樹種は181がコナラ節の柾目材、182がクリの2分の1分割材。

183・184は作業台で、いずれも細かな刃物痕が多数ついている。樹種は183がツバキ属の芯持ち材で、184がアカメガシワの2分の1分割材。

調度品(第228図) 185・186は机(案)。185はヒノキの板目材を用い、脚は蟻溝に別材を挿入するタイプで、脚の部材がわずかに残る。上面はゆるやかに凹み、裏面の短辺側は斜めにヤリガンナで斜めに面取りをほどこす。長友朋子の分類によるA4類に属する(長友2005)。186は作りだしの低い4本脚がつくタイプで、樹種はキハダの柾目材。上面は周縁がわずかに高くなる。長友分類のB1類。

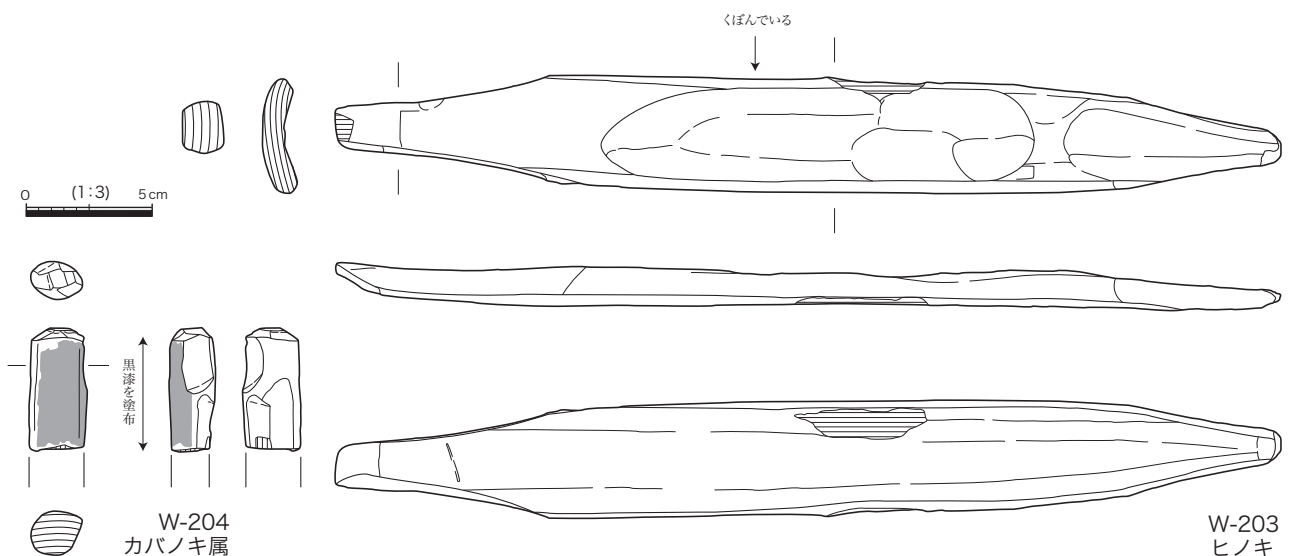
紡織具・編み具(第230図) 187は総かけで、東村分類のB類(絹繊維用)に属する。樹種はヒノキ。

188は全長130.9cmの大型の目盛り板(編み台)で、樹種はマキ属の芯持ち材。長辺の両側縁に目盛りが刻まれており、図面上の右側は16cmピッチで5カ所、左側は20cmピッチで5カ所と19cmピッチで5カ所の溝を刻んでいる。山田昌久氏のご教示では、建物の壁など大型の編み物を編むための目盛り板である可能性が高い。

189はツバキ属の芯持ち材を用いた木錘。

容器(第229・230図) 190はアカガシ亜属の柾目材を用いた浅い平面が隅丸長方形の皿。脚はなし。

191は低い四脚がつく平面が長方形の槽。前述の案(186)よりも立ち上がりが高いことから槽としたが、長友分類では、186と同じくB1類となる。樹種はスギ。192も同じく四脚の槽で、191



第232図 木製品：祭祀具・威儀具 (S=1/3)

よりも立ち上がりが高い。長友分類の B2 類。樹種はムクロジ。193～196 も槽の破片で、樹種は 193 がアスナロ、194～196 がスギ。

197 は全長が 20cm 弱の刳物容器未成品。図面上の左側に突起を持ち、厚みがあることから匙や杓子の未成品か。樹種はマツ属。

198 は四隅に穿孔をほどこす板で、短辺を面取りする組み合せの箱側板。樹種はヒノキ。

199 はヒノキの曲物底板。多数の刃物傷があり、2 カ所に穿孔をおこなっていることから、何度か転用されている。

運搬具・漁撈具（第 231 図） 200 は船の舳先。先端に紐を通すための穴が開けてある。田舟か小型の丸木舟と思われる。樹種はスギ。201 はスギの厚板で、図面上の上辺に長方形の穿孔をほどこす。小型準構造船の舷側版と考えられる。

202 はサワラの板目材。上部をやや薄く削って面取りをおこない、上部から下部に向けてゆるやかに幅が広がる。櫂の可能性が高い。

祭祀具・威儀具（第 232 図） 203 は船形。樹種はヒノキの板目材。

204 はカバノキの 4 分の 1 分割材を丁寧に丸棒状に仕上げ、黒漆を塗布している。用途は不明だが、祭祀具あるいは威儀具の一部と思われる。

建築部材（第 234～241 図） 038 は台輪と考えられる建築部材。2 枚一組で、直径 60cm ほどの柱を挟み込むかたちとなり、同様のものが下懸遺跡からも出土している（愛知県埋蔵文化財センター 2009）。ただし、安城市域で同時期の遺跡から直径 60cm もの柱が出土した例はなく、はたして台輪であるのか否かで疑問の余地が残る。半円形の刳り込み部分周縁のみ分厚くなる。クスノキの板目材を使用。

039 は不明部材。本来は大形建物の根太材とみられる。中央に貫通する方形の穿孔があり、その片側に未貫通の小さな方形の穿孔が 7 カ所ある。ヒノキの 2 分の 1 分割材を用いる。

205～218 は柱。うち 207・212・213 は上端が二又になる竪穴建物の柱で、他は掘立柱建物の柱と考えられる。樹種は 205 がヒノキ、206 がマキ属、207～215 がコナラ節、216・217 がクリ、218 がツブラジイである。206・216・217 は桁あるいは梁を受けるために凹字状に刳り込む輪なぎこみという技法を用いる。さらに 217 は横断面が長方形を呈する角（ごひら）柱という形式で、同様の類例は奈良県御所市極楽寺ヒビキ遺跡の大型掘立柱建物や大型の家型埴輪など特殊な建物に認められる（奈良県立橿原考古学研究所 2007）。216 は丁寧に面取りをほどこしており、建物の妻側の束柱と考えられる。208 は上端に段を有し、下端から約 70cm の根入れ部分は腐食のために痩せている。214 は上端に出柄を作りだす。

219 はマキ属の芯持ち材を用いた垂木。

220 は片面に溝を刻み、ここで壁板を受ける横架材で、樹種はヒノキ。

221 は図面上の下半部は断面が丸く細く仕上げ、上半部は幅広で 2 カ所に大きな楕円形の穿孔をほどこす。格の高い掘立柱建物の妻側を飾る千木と考えられる。樹種はヒノキ。安城市域では下懸遺跡（図 49-1622）と釈迦山遺跡（安城市教育委員会 2001 の第 49 図 -423）からも同様の木製品が出土している。

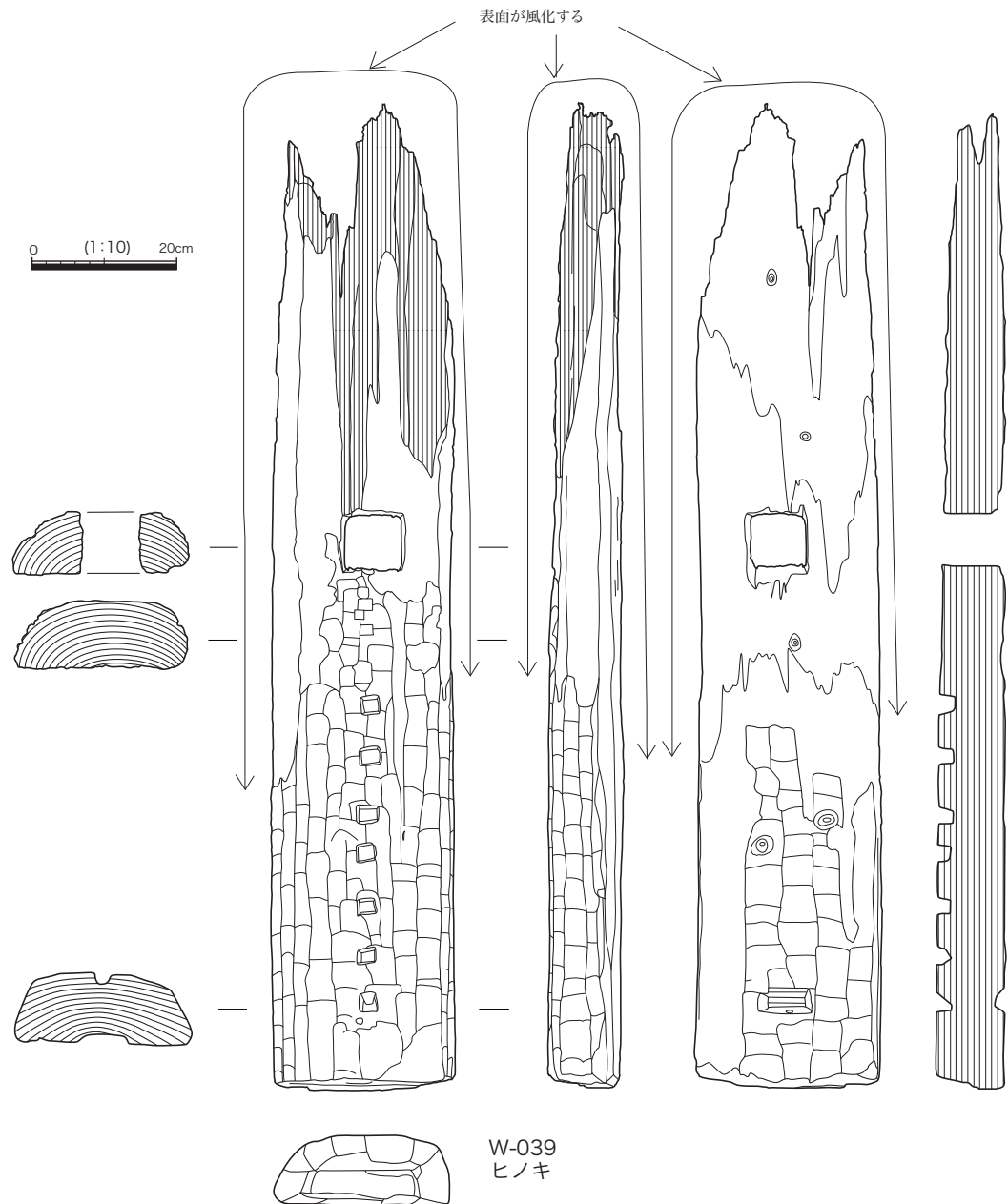
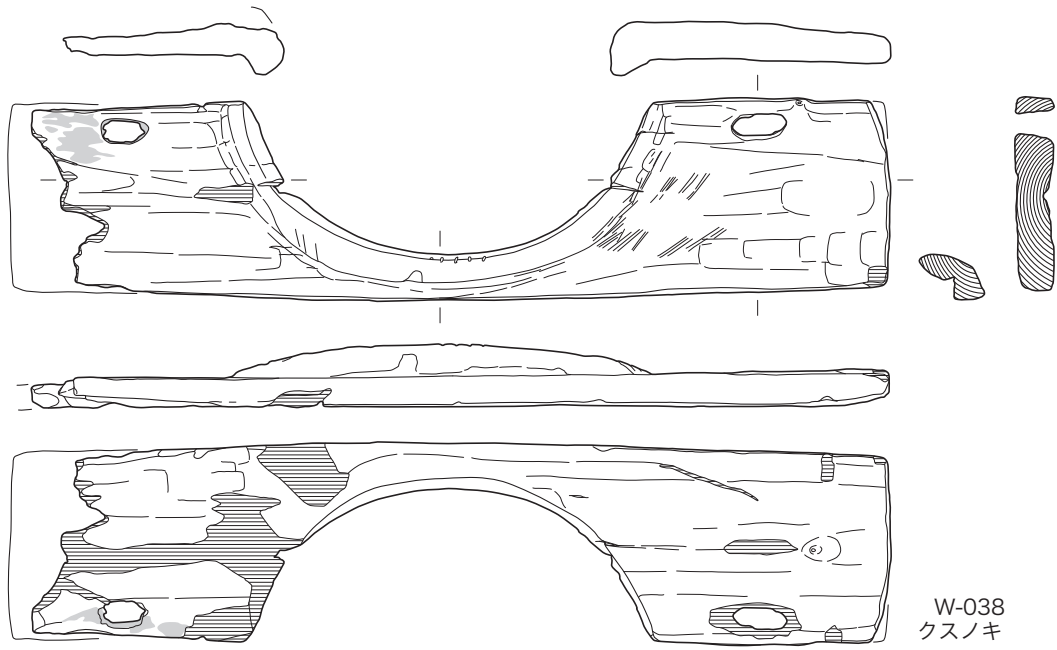
227 は横架材で、中央付近の両側縁に刳り込みをほどこす。樹種はマツ属。

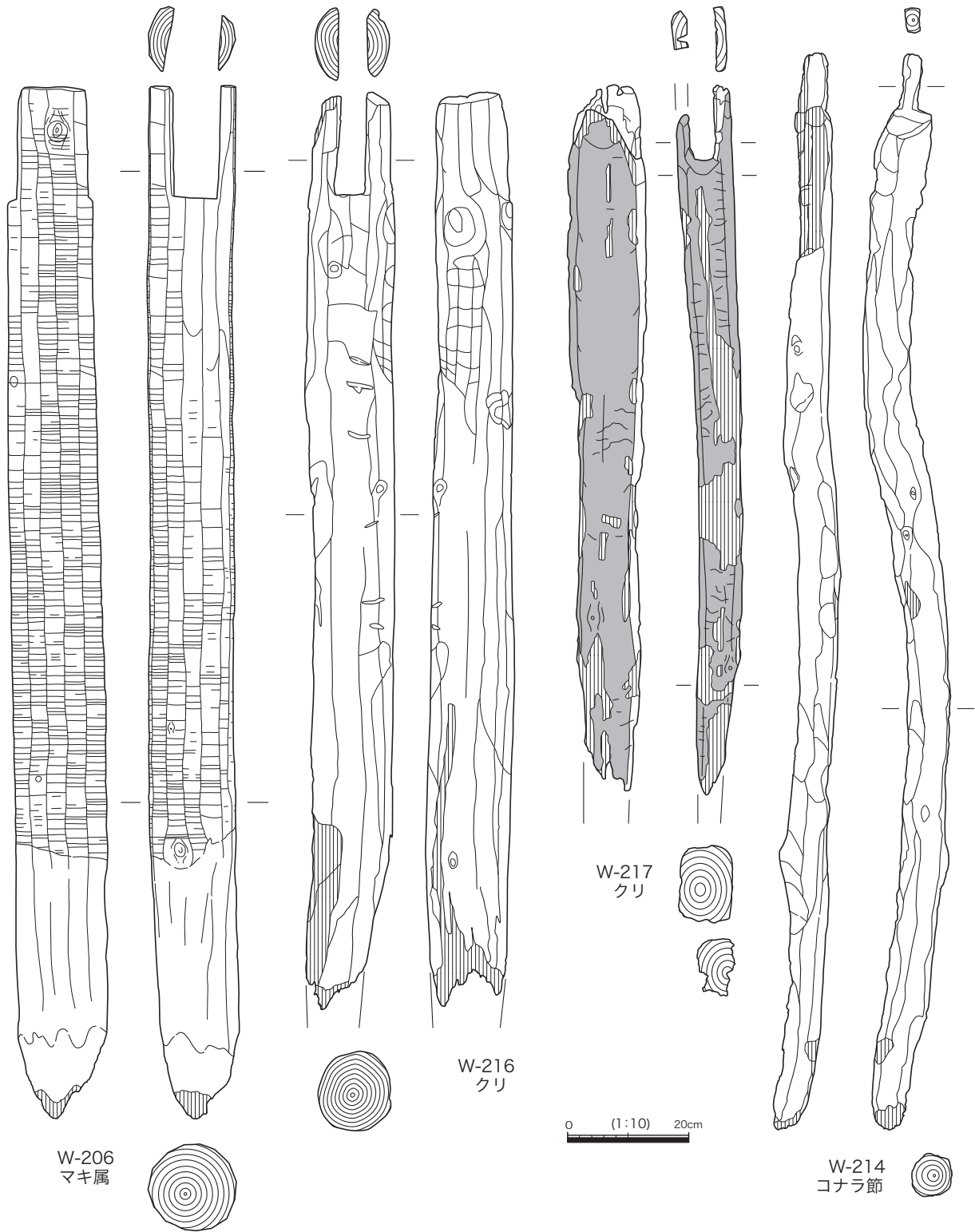
229 は残存長が約 4.65m におよぶ大型の高床建物根太材。端部に突起と、数カ所に刳り込みをほどこす。中央付近の凹みは束柱を受けるための細工と考えられる。炭化が著しい。樹種はコナラ節。

230 は妻側の横架材で、椽首の傾斜に合わせて斜めに仕上げている。樹種はコナラ節。

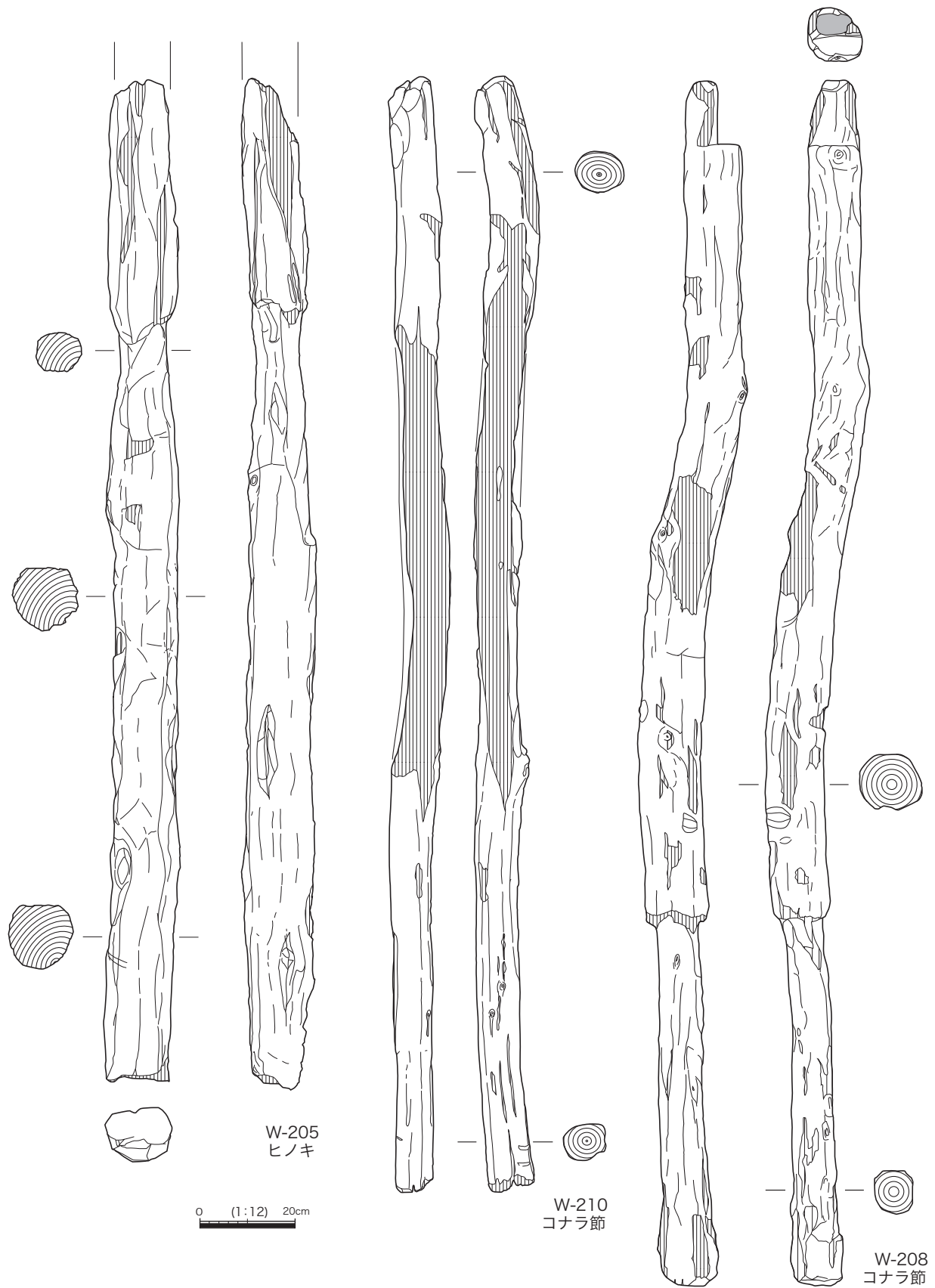
231 は横架材か梁とみられ、片側に L 字状の切れ込みをほどこす。樹種はコナラ節。

他の樹種は 222～224 がマキ属、225 がスギ、226 がモミ属、228 がマツ属、232～235 がコナラ節、

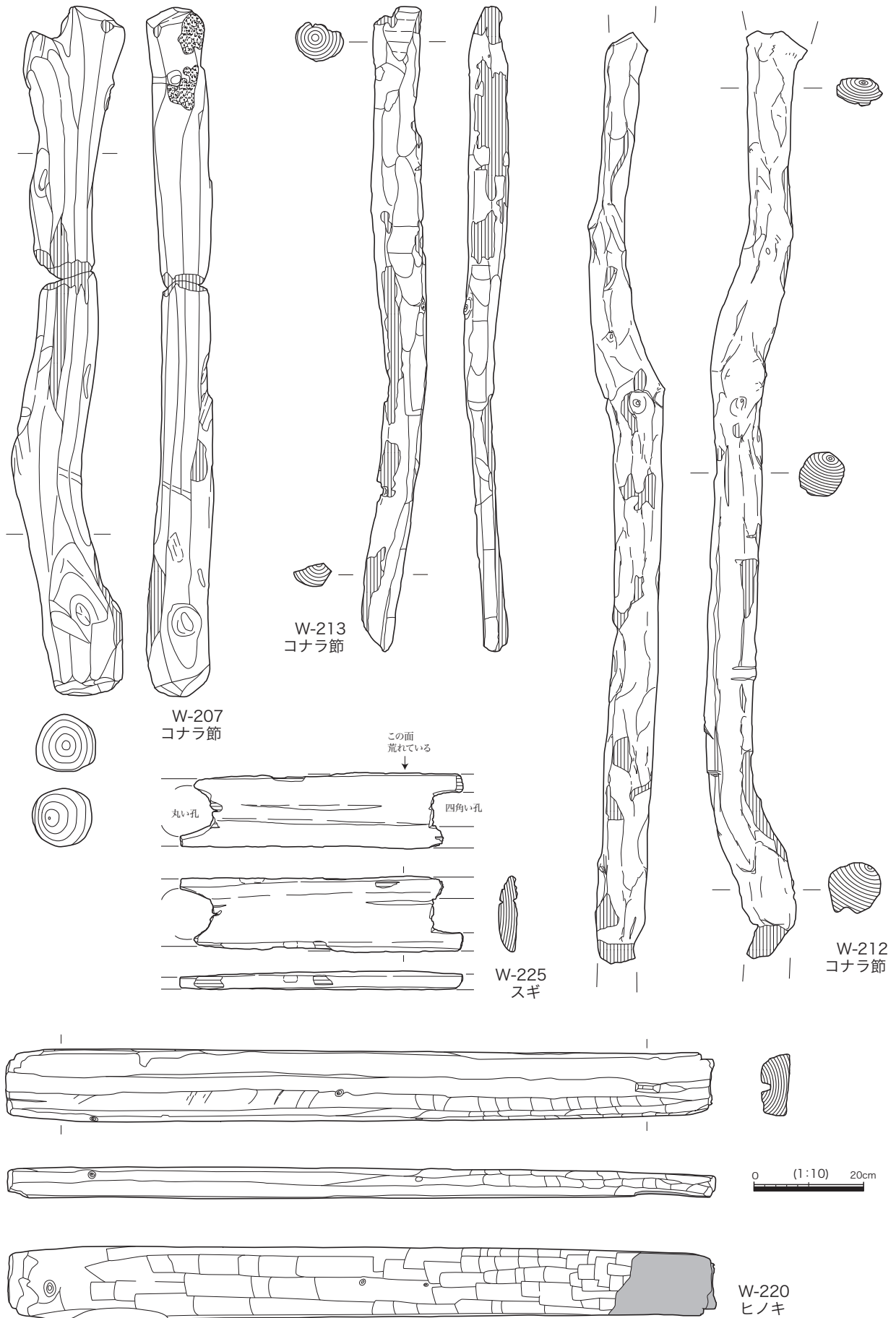




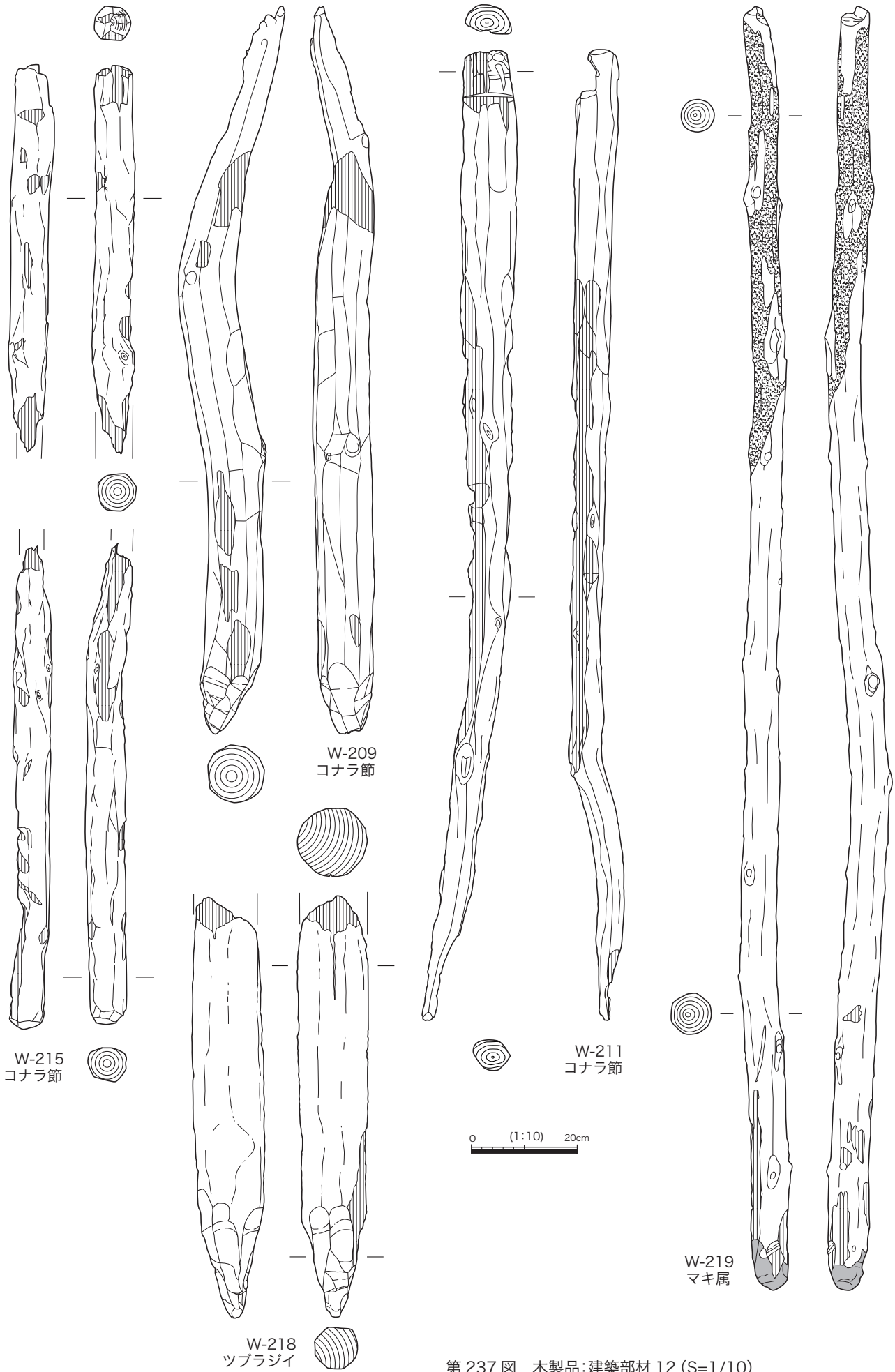
第 234 図 木製品：建築部材9 (S=1/10)



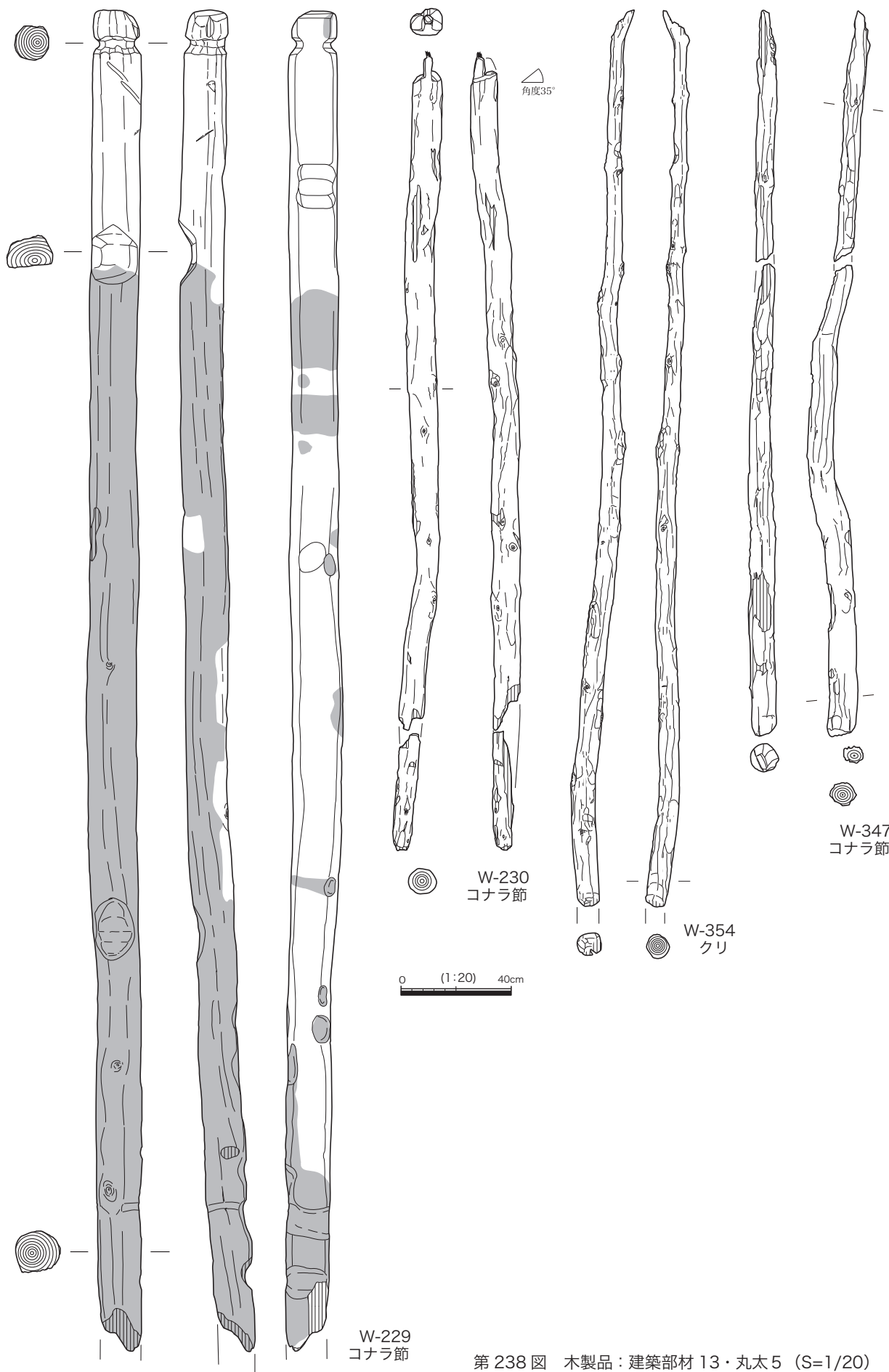
第 235 図 木製品:建築部材 10 (S=1/12)



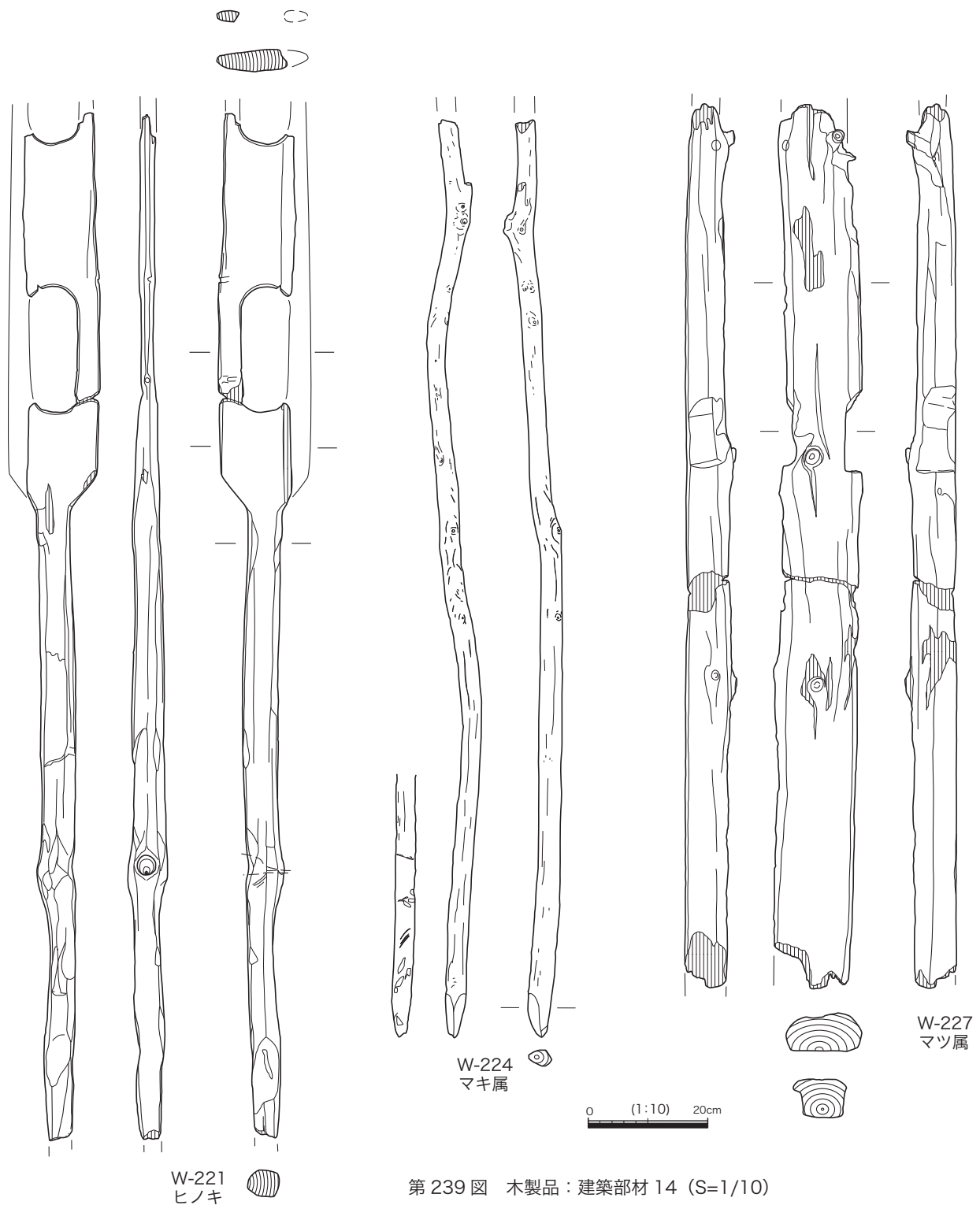
第 236 図 木製品:建築部材 11 (S=1/10)



第 237 図 木製品:建築部材 12 (S=1/10)



第 238 図 木製品：建築部材 13・丸太 5 (S=1/20)



第 239 図 木製品：建築部材 14 (S=1/10)

236 がクリ。

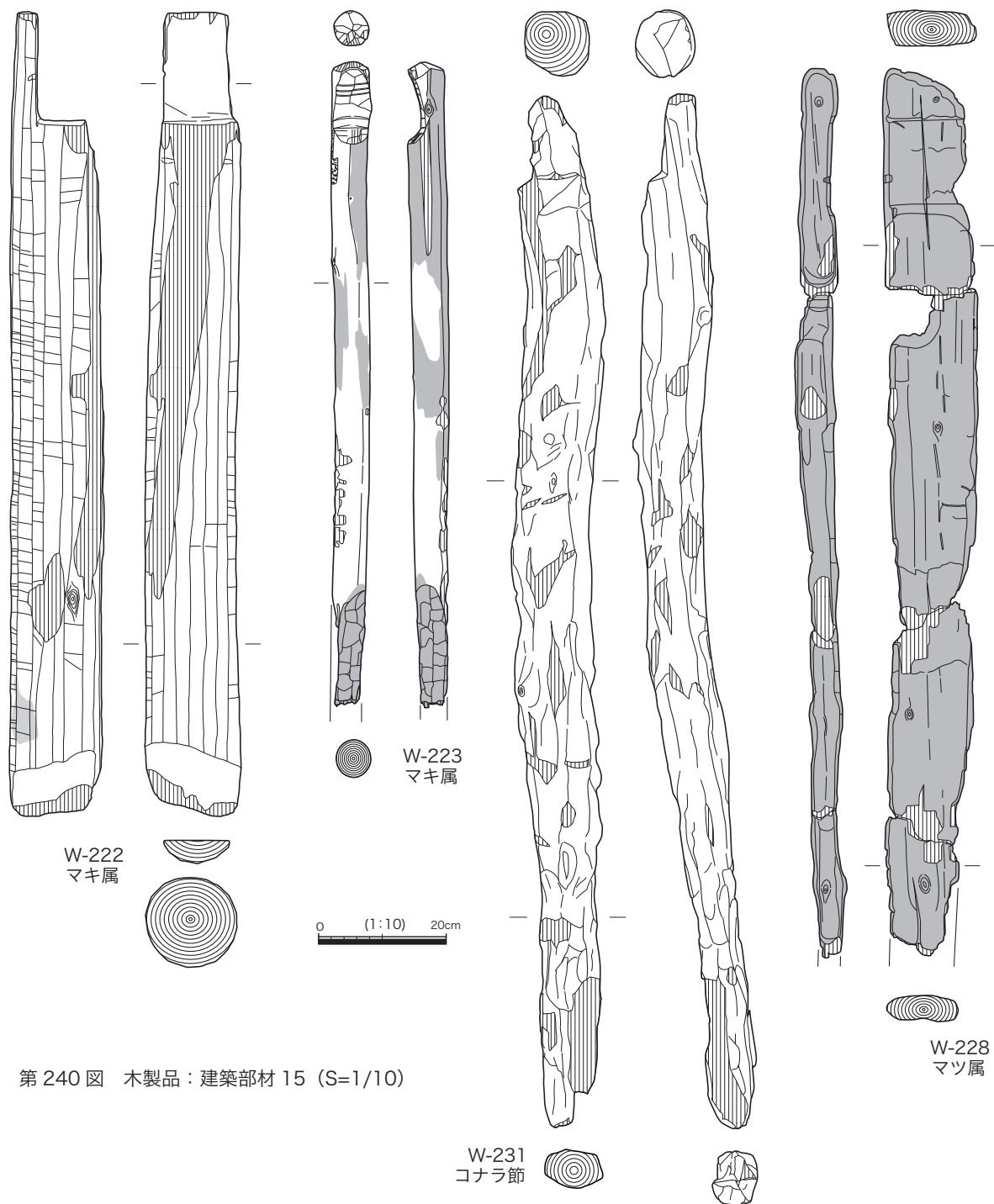
杭（第 242・243 図） 237～261 が杭。樹種は 237～239 がヒノキ、240～243 がマキ属、244～249 がコナラ節、250～253 がクリ、254～259 がクヌギ節、260 がクワ属、261 がトネリコ節。

矢板（第 244 図） 262～265 は矢板で、樹種は 262 がヒノキ、263 がマキ属、264・265 がスギ。262 は上端に出柄があることから、建築部材からの転用と考えられる。

丸棒（第 245 図） 266～268 は有頭丸棒で、樹種は 266・267 がマキ属、268 がマツ属。267 は弓の可能性がある。268 は最大径が 7.7cm と非常に太い。

269・270 は有扶丸棒で、樹種は 269 がマキ属、270 がコナラ節。

その他、271 がヒノキ、272 がサワラ、273 がマキ属、274 がスギ、275 がコナラ節。



第 240 図 木製品：建築部材 15 (S=1/10)

角棒 (第 246 図) 276 は有頭角棒で樹種はヒノキ。

その他、277・278 がヒノキ、279 がサワラ、280・281 がスギ、282 がコウヤマキ。

板 (第 246～251 図) 283 が有溝板で、樹種はシイ属。

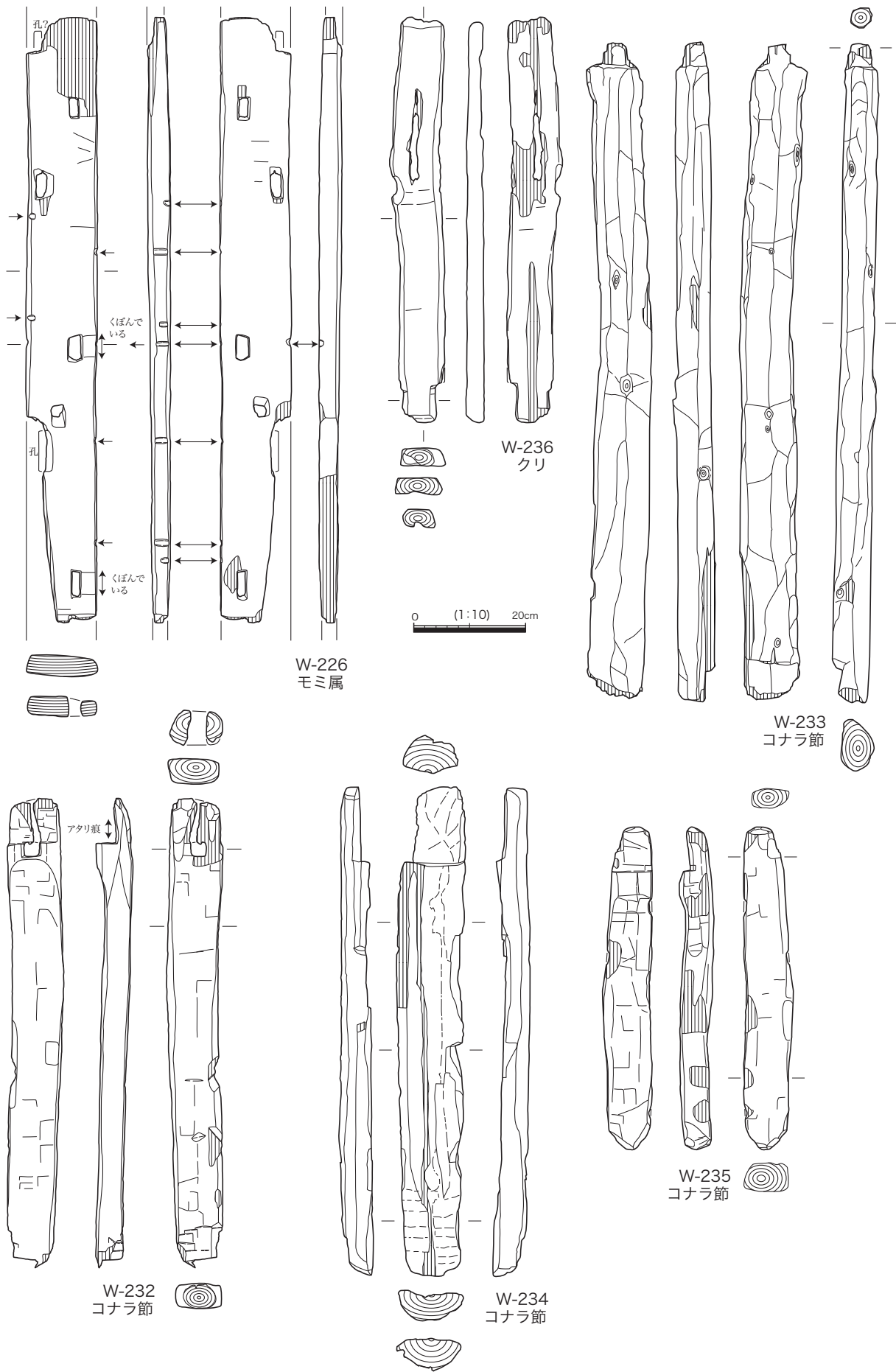
284 は図面上の上端と下端が柄状に細くなる有挾板で樹種はスギ。285 はクヌギ節、286 はクスノキ。

287 は 5 カ所に長楕円形の穿孔をほどこす板で、樹種はスギ。288 は 2 カ所に円孔がある板で樹種はシイ属。

その他、289～301 がヒノキ、302～306 がスギ、307 がマツ属、308～310 がコウヤマキ、311～313 がコナラ節、314～319 がクリ、320 がクヌギ節、321～323 がツブラジイ、324 がスダジイ、325 がシイ属、326・327 がクスノキ科、328・329 がサクラ属の板。

分割材 (第 251・252 図) 330 はコウヤマキの 4 分の 1 分割材。

331～335 はクヌギ節で、331・332 が 8 分の 1、333・334 が 4 分の 1、335 が 2 分の 1 の分割材。



第241図 木製品：建築部材16 (S=1/10)

336～338はクリの2分の1分割材。

339はシイ属の8分の1分割材。

340・341はクワ属の8分の1分割材。

丸太（第238・253・254図） 342～344はマキ属で、342は面取りをほどこすことから柱の可能性はある。

345はマツ属で、枝が若干残る。

346～351はコナラ属で、349は面取りが残る。

352～354がクリ、355～357がクヌギ節、358がスダジイ、359がシイ属、360～362がエノキ属、363・364がクワ属、365がハゼノキかヤマハゼ、366は樹種不明。

4 古代：W-367・368（第255図）

367・368はいずれもヒノキの薄板。

5 時期不詳：W-369～375（第255図）

369～375は出土層位は不明だが、NR01からの出土であり、時期は廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期に収まるものと考えられる。

369は上端部付近が若干細くなっており、建築部材とみられる。樹種はヒノキの4分の1分割材。

370はスギ、371はコナラ節、372はクリ、373はクヌギ節の柾目板。

374はハゼノキかヤマハゼの丸太。

375はヒノキの丸棒で、2本の棒の一部を入れ子状に組み合わせる構造となる。用途は不明。

6 まとめ

最後に姫下遺跡出土木製品のうち、中核をなす廻間Ⅲ式期および廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期に属する木製品群と、そこから考えられる姫下遺跡の性格について、ごく簡単にまとめておきたい。

本文では、一応、NR01の出土層位に基づいて、廻間Ⅲ式期と廻間Ⅲ式～松河戸Ⅰ式期に分けて記述をおこなったが、実際に相伴する土器群をみるかぎり、明確に分けることは難しい。そこで、この両者を一体のものとして、器種と樹種の相関関係がわかるグラフを作成した（第256・257図）。

まずこれらのグラフから読み取れるのは、器種のバラエティーが非常に豊富であるということである。狩猟具・武具（弓・楯など）や服飾具（櫛・履き物）以外の器種がすべて揃う遺跡は、現状において鹿乗川流域遺跡群のうち、この姫下遺跡のみである。

また、惣作遺跡のような威儀具（団扇形）こそないものの、案（185・186）や椅子（011～013）が出土していることや、大型掘立柱建物の建築部材が比較的よく揃うこと、なかでも千木（221）・輪なぎこみをもつ角（ごひら）柱（214）・梁間が5mを超える横架材（229）のように、きわめて格の高い建物の部材が認められることは、本遺跡に近接した碧海台地縁辺に立地する姫小川古墳（全長69mの前方後円墳、4世紀前半頃）の存在も含めて、この姫下遺跡の性格を考えるうえで大変重要である。

手工業生産の点では、斧の柄こそないものの、各種未成品や分割材・残材・丸太などが多く出土していることから、この地で木製品生産をおこなっていたことは間違いない。なかでもその主体は、掘削具・容器・建築部材であったと考えられる。

さらに柿・総かけの出土が示すように、紡織作業もまた、ここでおこなわれていたことがわかった。なかでも総かけは東村純子の分類ではB類にあたることから、絹繊維を用いた紡織作業であった可能性が高い。

姫下遺跡で木製品として使用された樹種では、針葉樹はヒノキ科（ヒノキ・サワラ・アスナロ）・マキ属・スギ・マツ属の順に多く、なかでもヒノキ科が全樹種の5分の1を占めている。広葉樹では、コナラ節・クリ・クヌギ節・シイ属（ツブラジイ・スタジイ）・アカガシ亜属・クスノキ科の順に多い。このうちマキ属・コナラ節・クリ・クヌギ節は樹皮付きの芯持ち材をそのまま利用している例が非常に多く認められる。

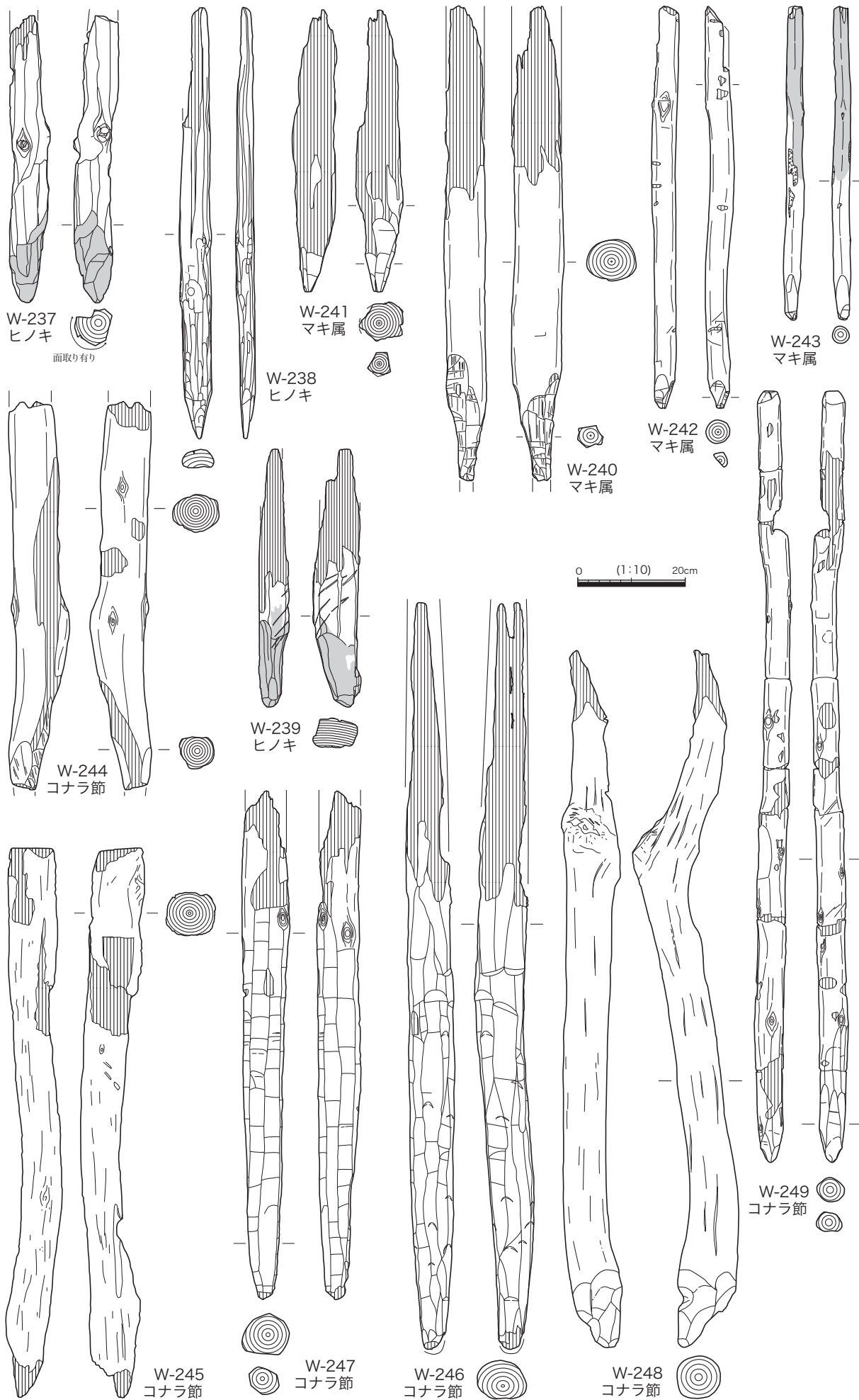
一方、762点におよぶ樹種サンプル（自然木および低加工の棒・板など、うち3点は樹種不明）では、ヒノキ科・スギ・アカガシ亜属が、製品群におけるこれら樹種の割合に較べてかなり少ない。このことはヒノキ科・スギ・アカガシ亜属が、碧海台地よりもやや遠距離から持ち運ばれた可能性を示唆している。それに対して、姫下遺跡近隣の碧海台地上にあって容易に利用できたのが、コナラ節・クヌギ節・クリ・シイ属・マキ属などの樹種であったと考えられる。ヤナギ属・エノキ属は、樹種サンプルではめだつが、木製品としてはあまり利用されていない。クワ属もまた、西日本では弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、よく精製容器に利用される樹種だが、本遺跡の刳物容器には主として針葉樹が用いられている。

掘削具では、泥除け具・曲柄二又鋏・曲柄三又鋏など刃部幅が広いものにはアカガシ亜属、エブリ（直柄横鋏）・曲柄平鋏など刃部幅が狭いものにはコナラ節・クヌギ節を用いるという、尾張低地部と同じ用材法が認められる。ただし曲柄鋏の形態は、尾張系（003・004・163・165）のほか、東三河～遠江系（162）、伊勢系（166）、近畿系？（167）ときわめて多様である。このような状況は近隣の釈迦山遺跡や中狭間遺跡とよく似ており（安城市教育委員会 1999・2001）、同じ矢作川流域でも豊田市周辺の遺跡（現状では尾張系のみ）とは状況が異なる。おそらくは、伊勢湾型曲柄鋏の発祥の地である尾張低地部からその技術が伝播した際の用材法を守り続ける一方、伊勢湾西部から尾張を経由せずに入ってきた伊勢系・近畿系曲柄鋏の形態がこの地で融合したのであろう。

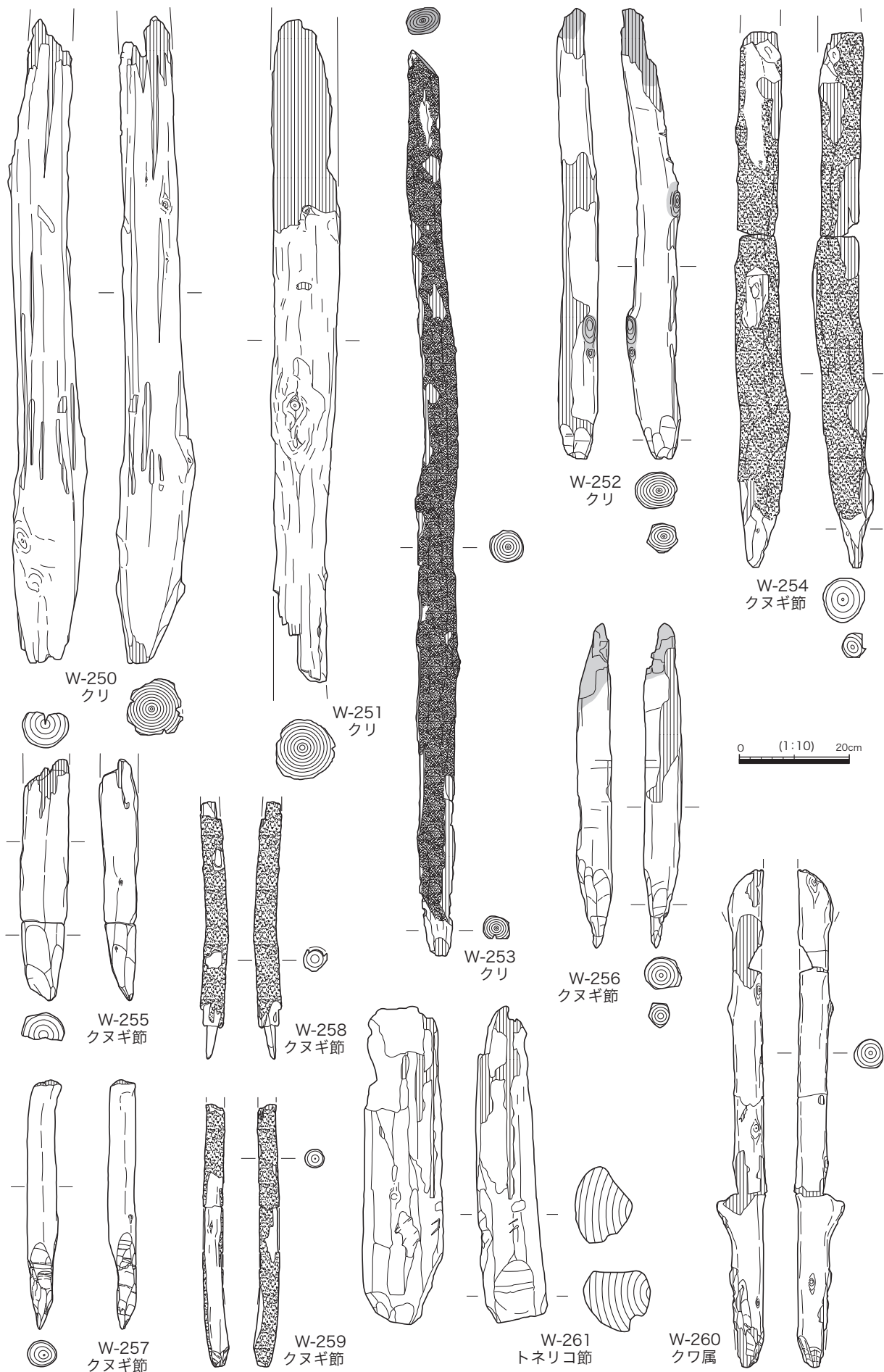
以上みてきたように、廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期の姫下遺跡は、地域最大級の前方後円墳に埋葬されるような上位階層者（王）の居住地である可能性をもつとともに、木製品や紡織などの手工業生産拠点であり、かつ、伊勢・尾張・東三河～遠江などさまざまな地域からの人・情報・技術が行き交う場でもあったことが、出土した木製品から読み取れるのである。

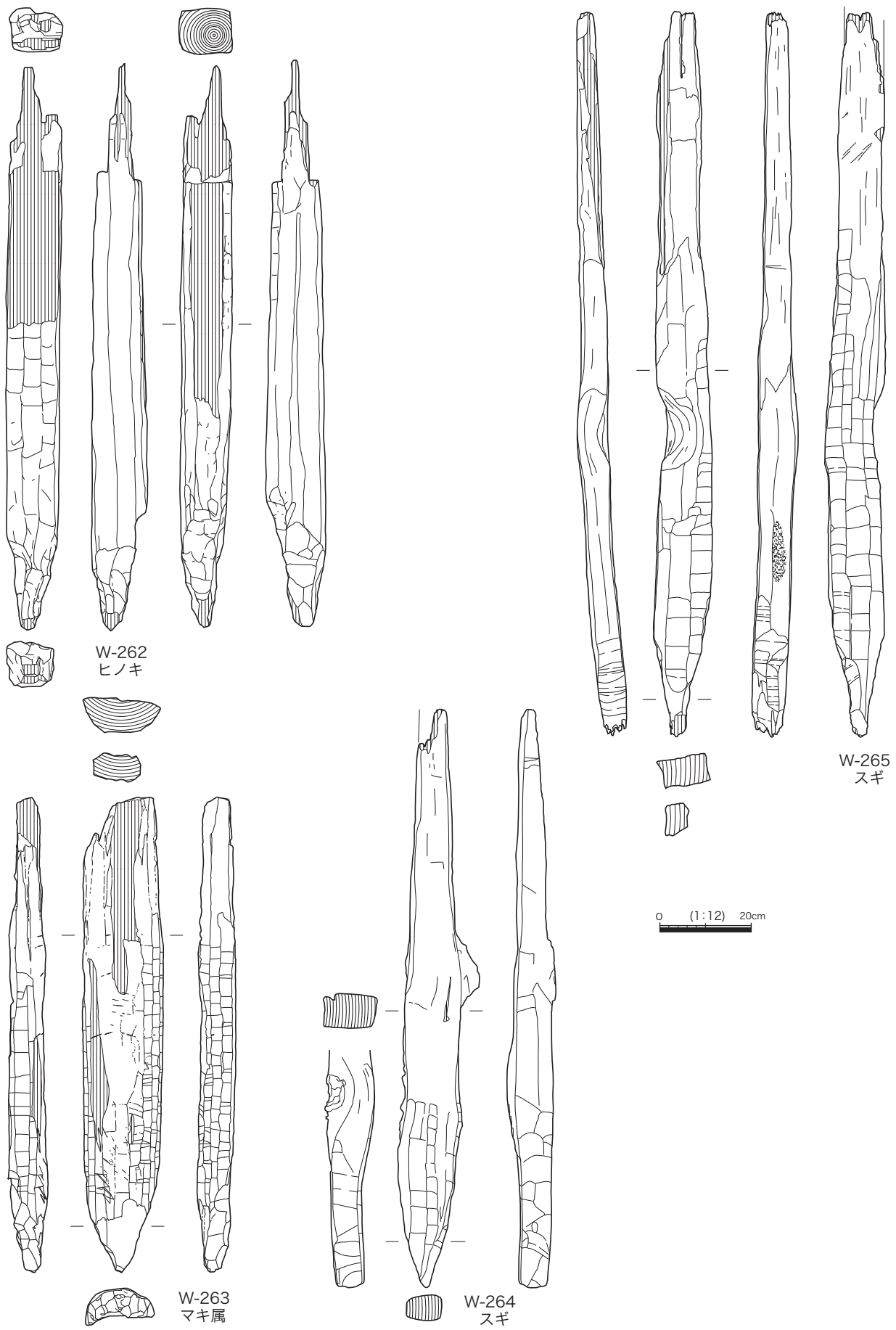
引用文献：

- 愛知県埋蔵文化財センター 2001 『八王子遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2004 『志賀公園遺跡Ⅱ』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2009 『下懸遺跡』
- 安城市教育委員会 1999 『中狭間遺跡』
- 安城市教育委員会 2001 『釈迦山遺跡』
- 長友朋子 2005 「弥生時代から古墳時代への食事様式の変化とその歴史的意義」『待兼山考古学論叢—都出比呂志先生退官記念—』大阪大学考古学研究室
- 奈良県立橿原考古学研究所 2007 『極楽寺ヒビキ遺跡』
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇（解説）』
- 東村純子 2011 「糸をつくり、経を揃える」『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
- 樋上 昇 2001 「3～5世紀の地域間交流—東海系曲柄鋏の波及と展開—」『日本考古学』第10号、日本考古学協会
- 樋上 昇 「木製『筒形容器』考—名古屋平手町遺跡第6次調査資料からその用途を推測する—」『古代学研究』第183号、古代学研究会
- 三重県埋蔵文化財センター 2000 『六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）』
- 山田昌久 1997 「考古資料の曲げ物研究を器具研究にするために」『人類誌集報 1997』東京都立大学
- 渡辺 誠 1985 「ヨコヅチの考古民具学的研究」『考古学雑誌』第70巻第3号、日本考古学会

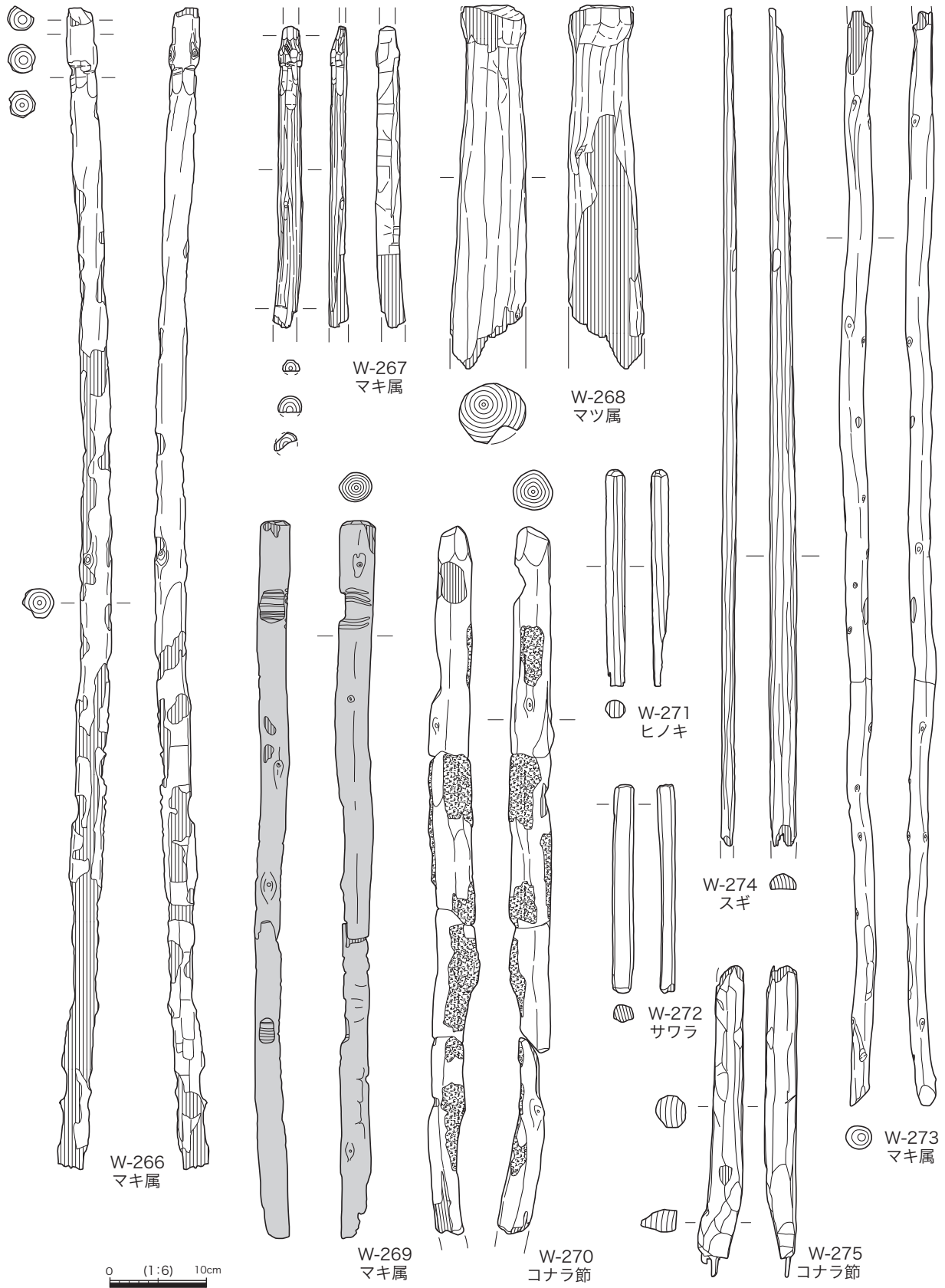


第 242 図 木製品：杭 2 (S=1/10)

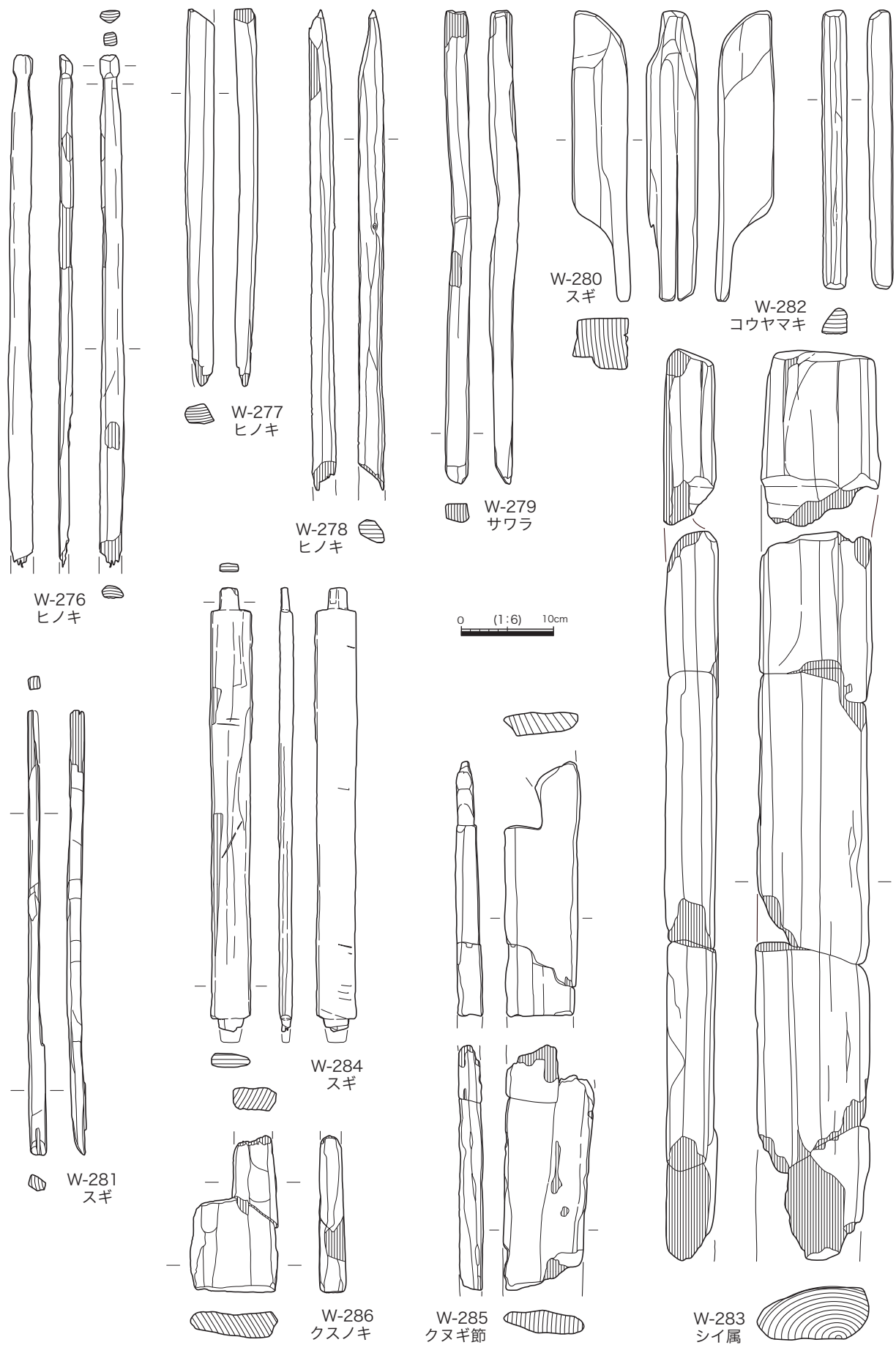




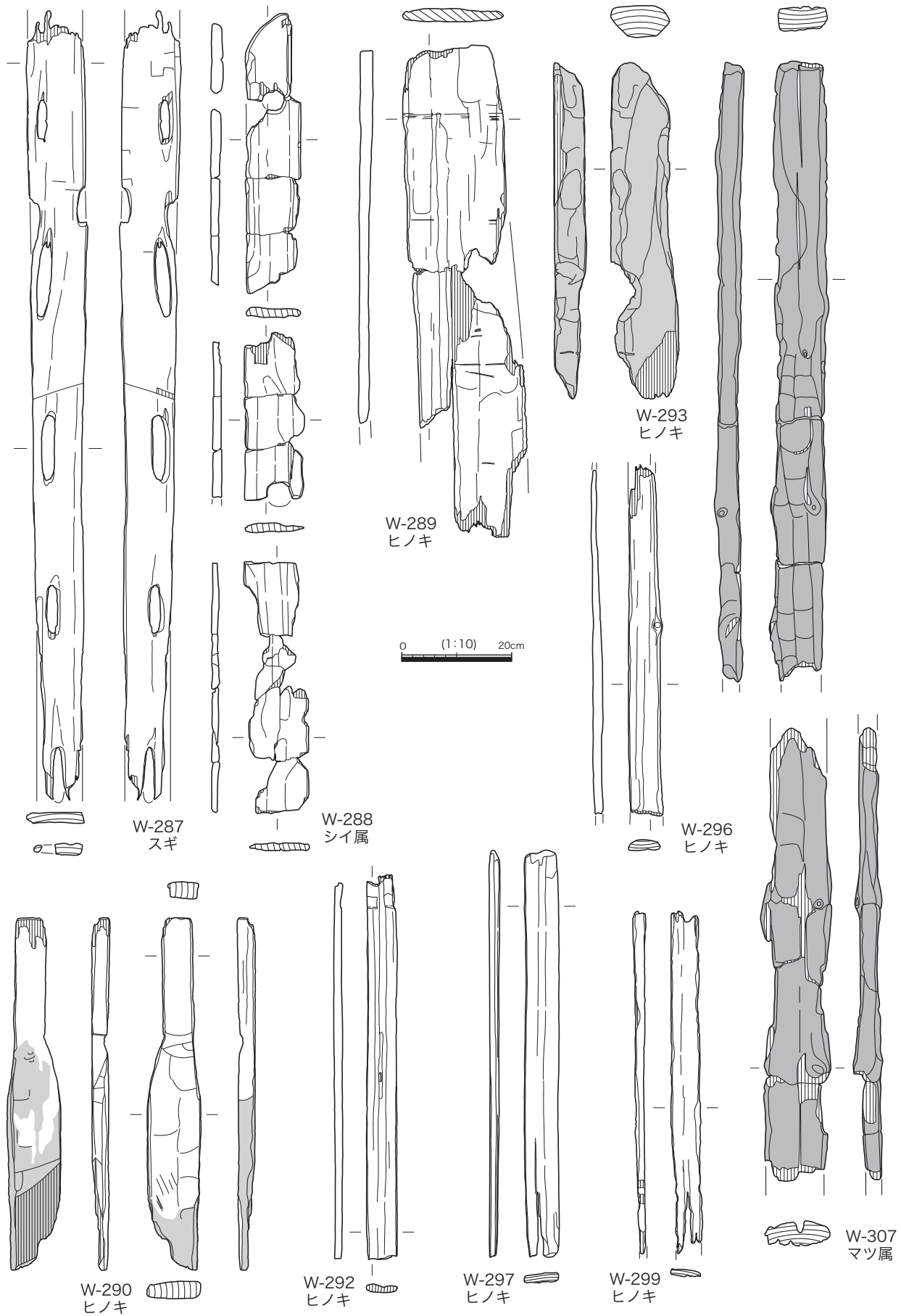
第 244 図 木製品：矢板 2 (S=1/12)



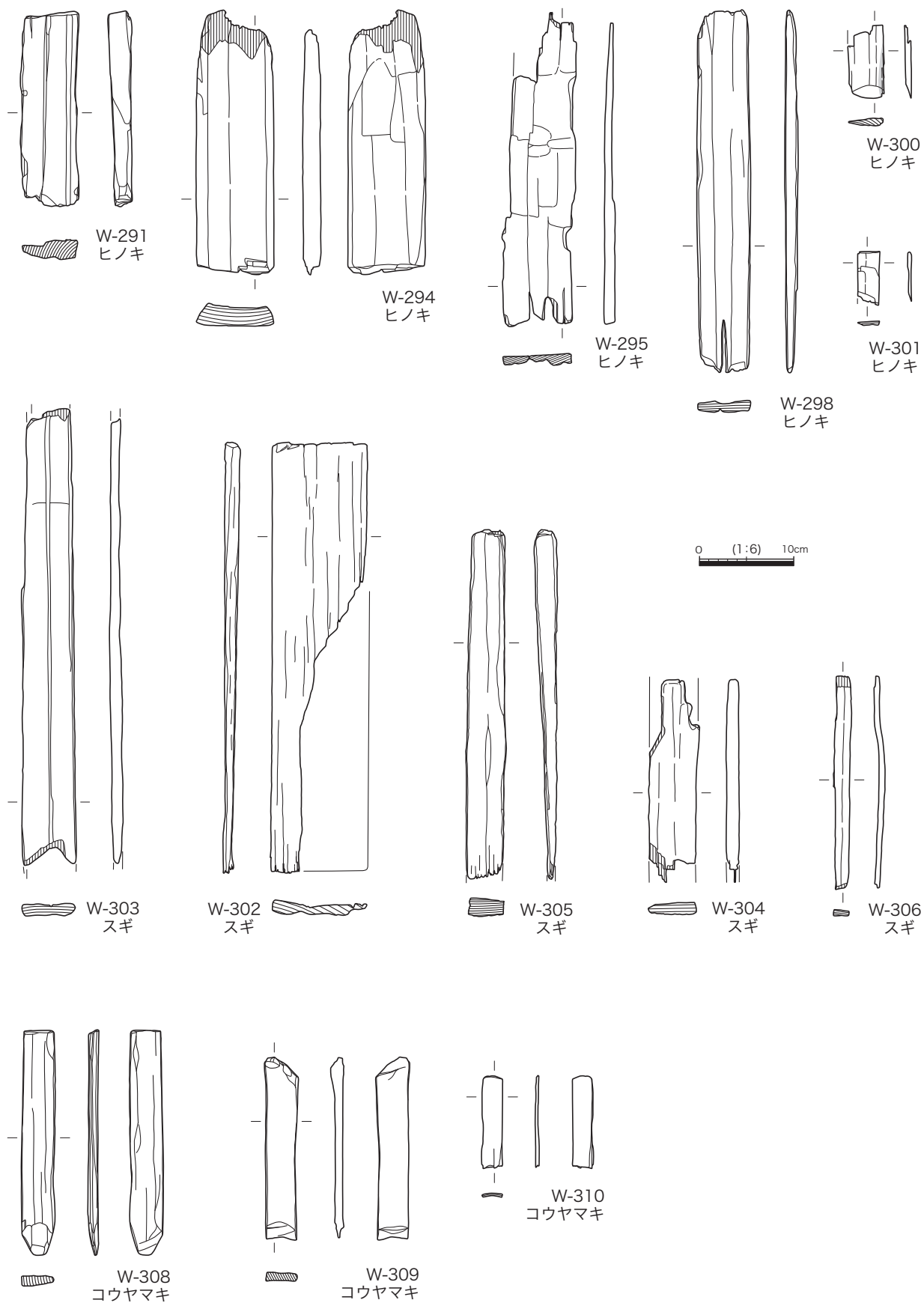
第245図 木製品：丸棒3 (S=1/6)



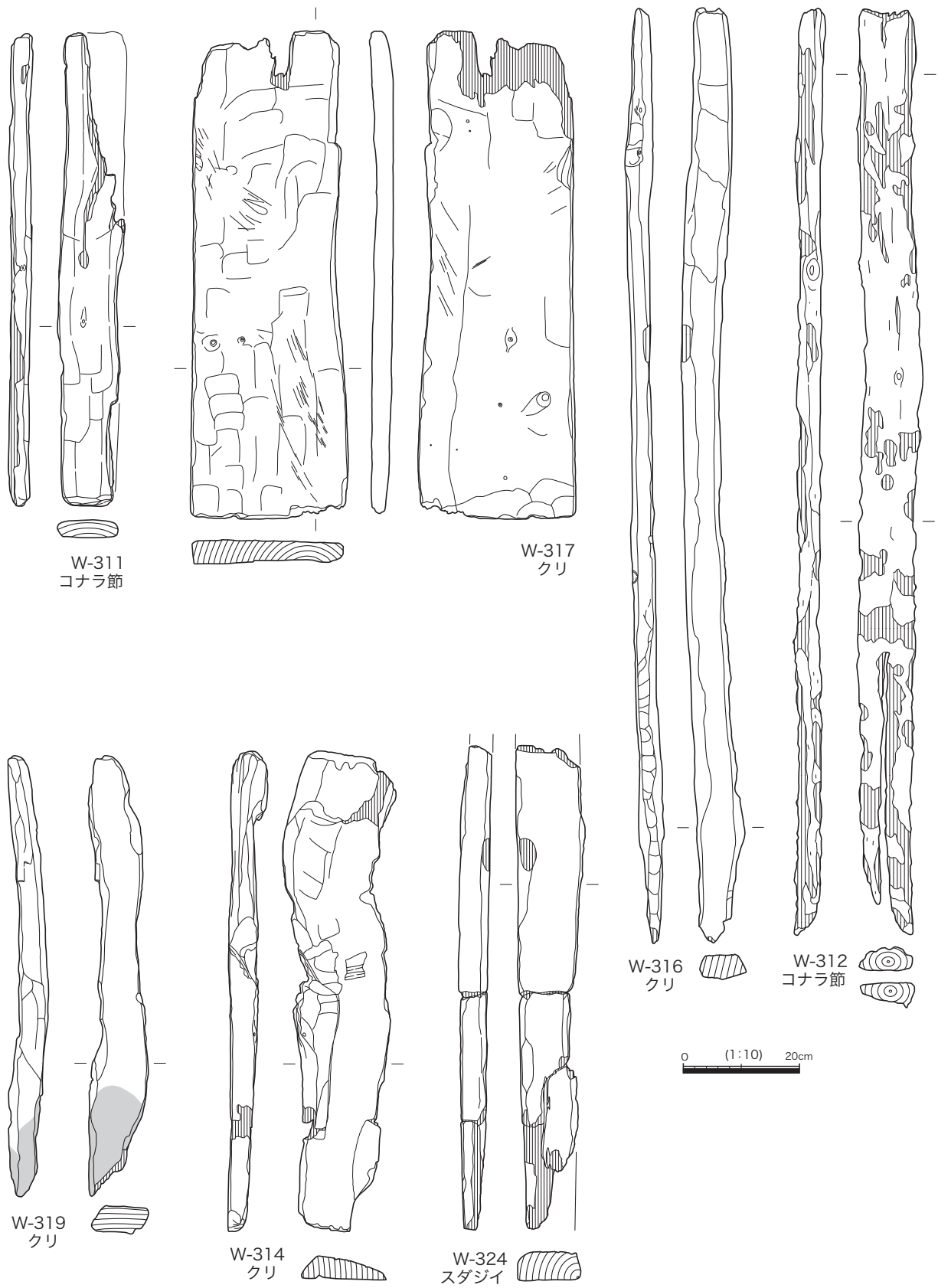
第 246 図 木製品：角棒 3・板 5 (S=1/6)



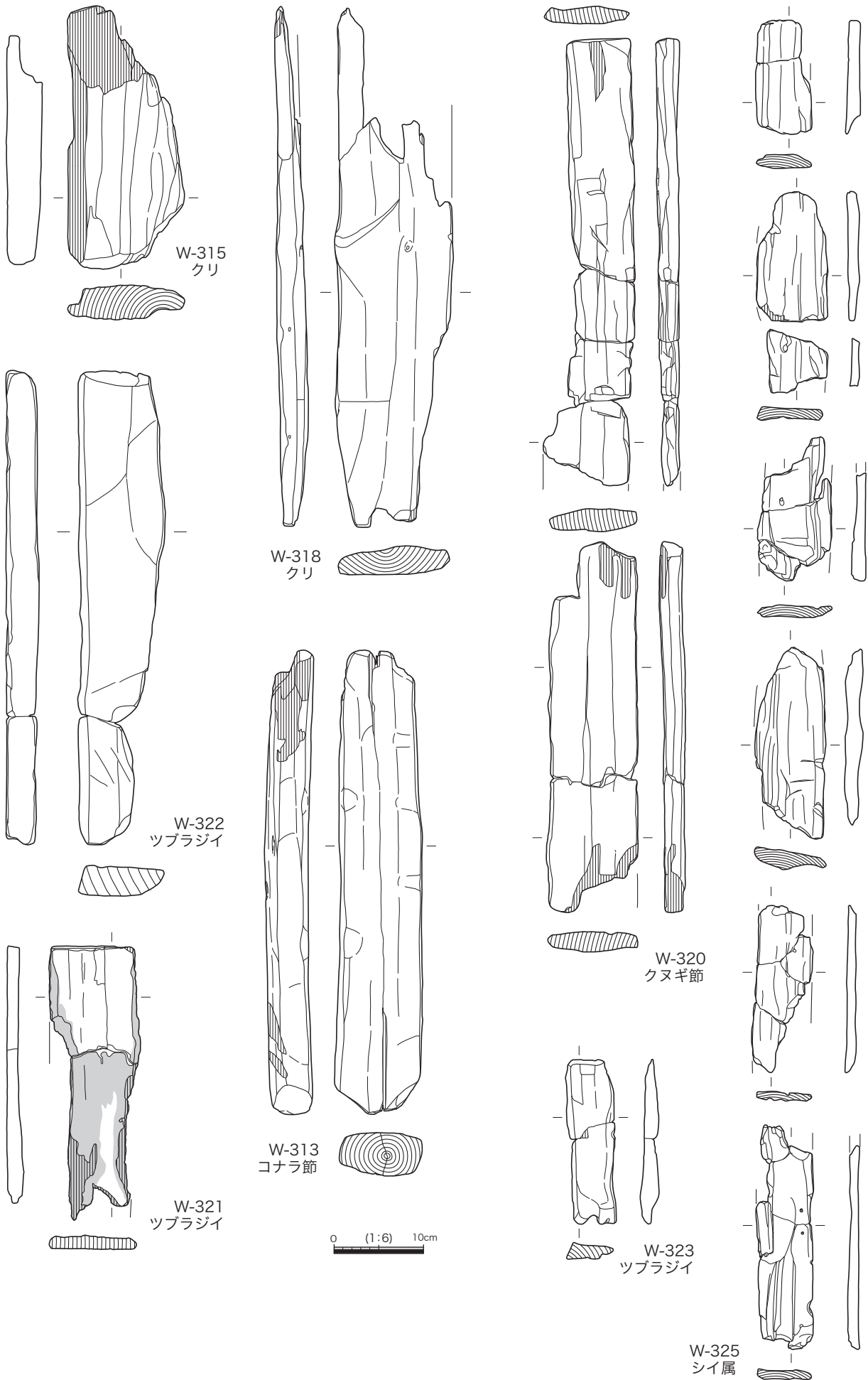
第 247 図 木製品：板 6 (S=1/10)



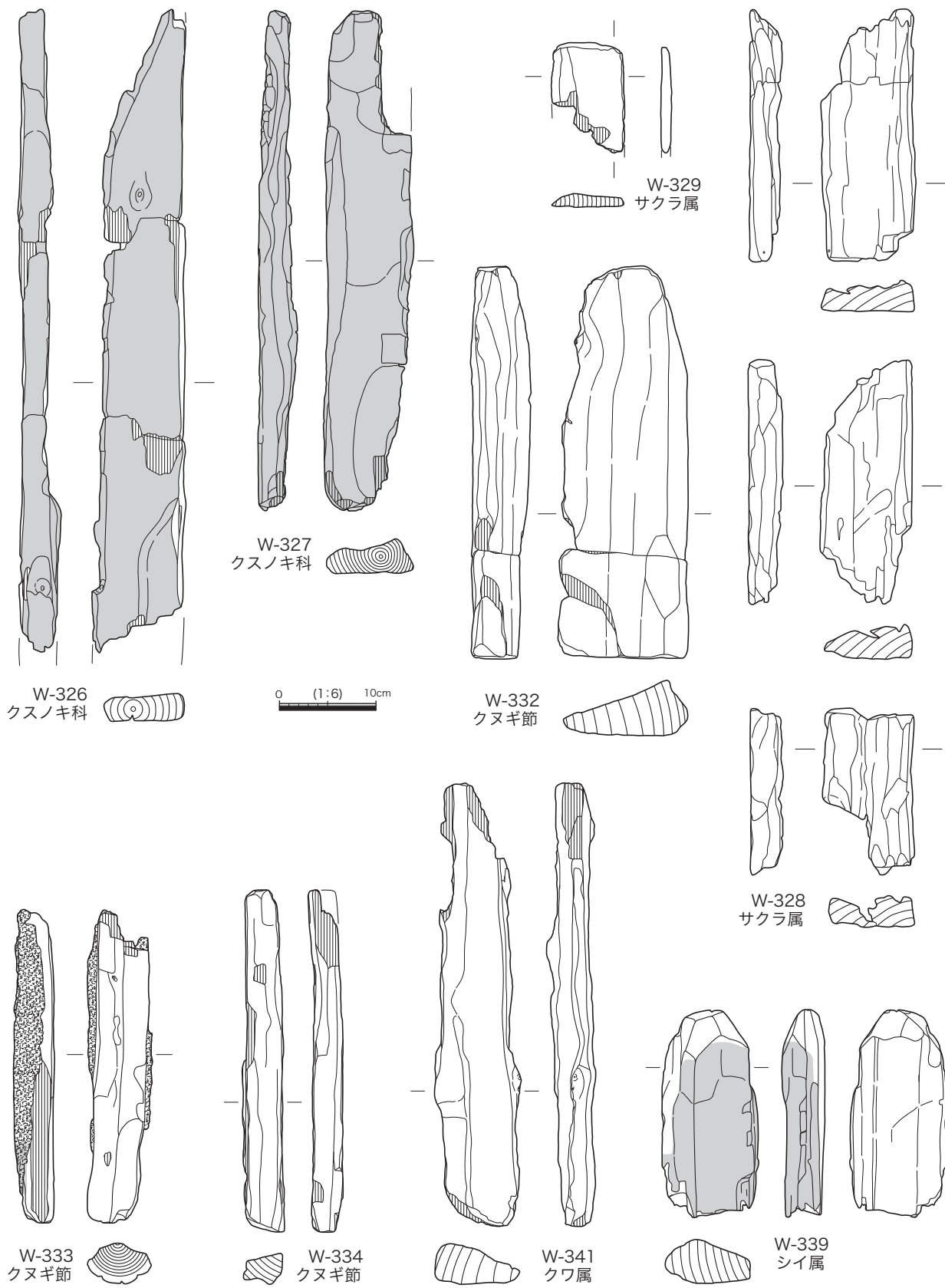
第 248 図 木製品：板 7 (S=1/6)



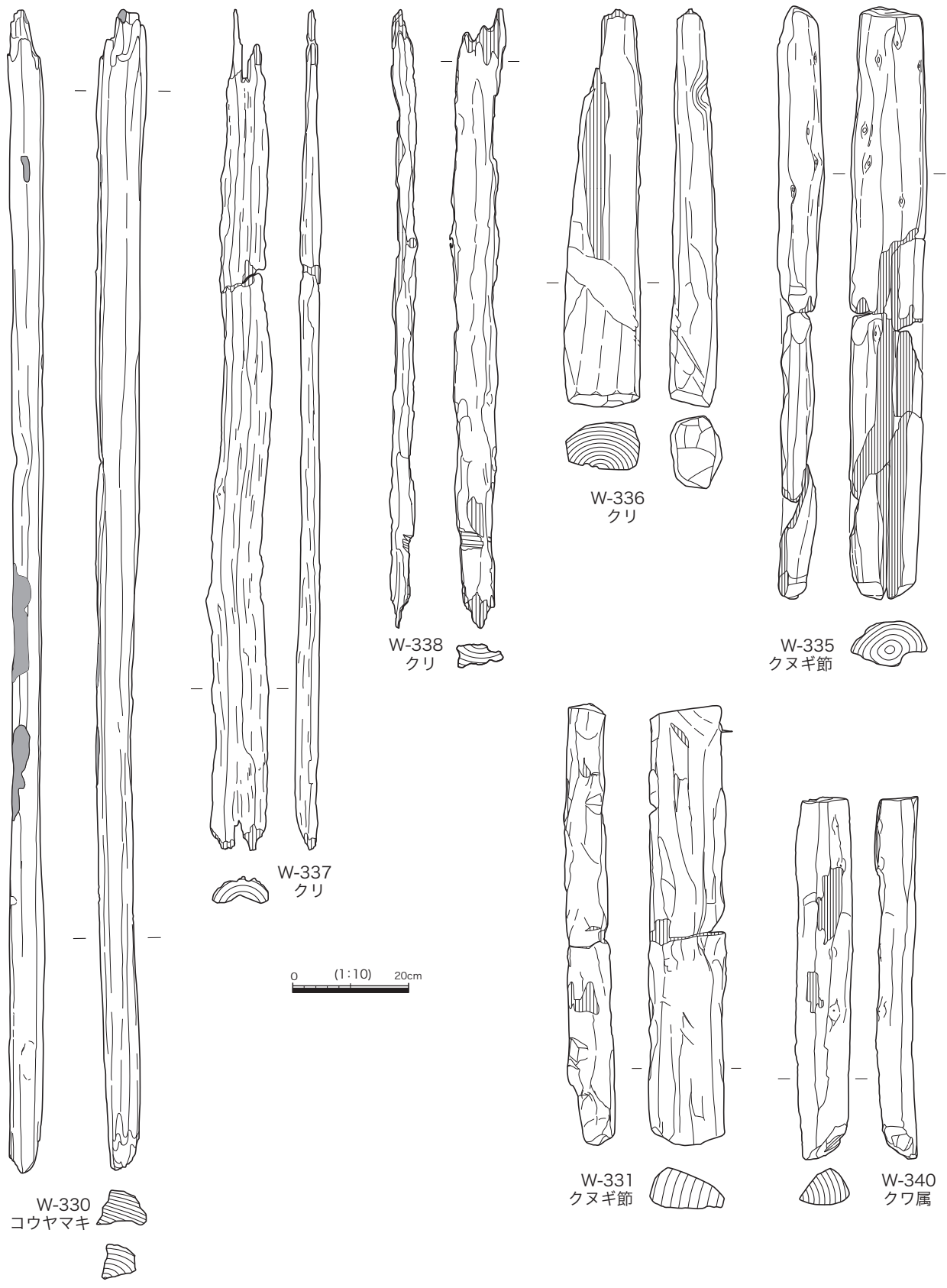
第 249 図 木製品:板 8 (S=1/10)



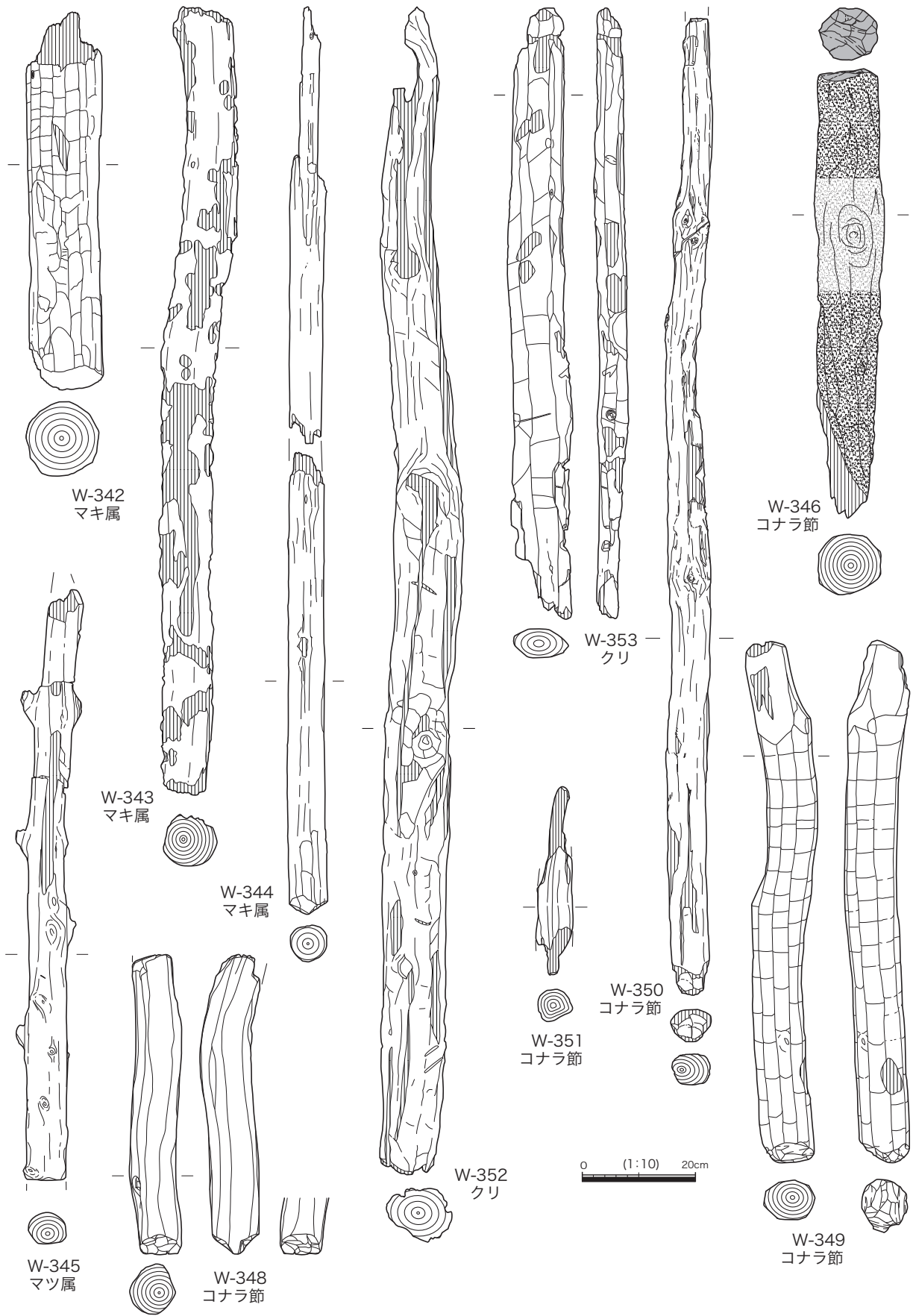
第 250 図 木製品：板9 (S=1/6)



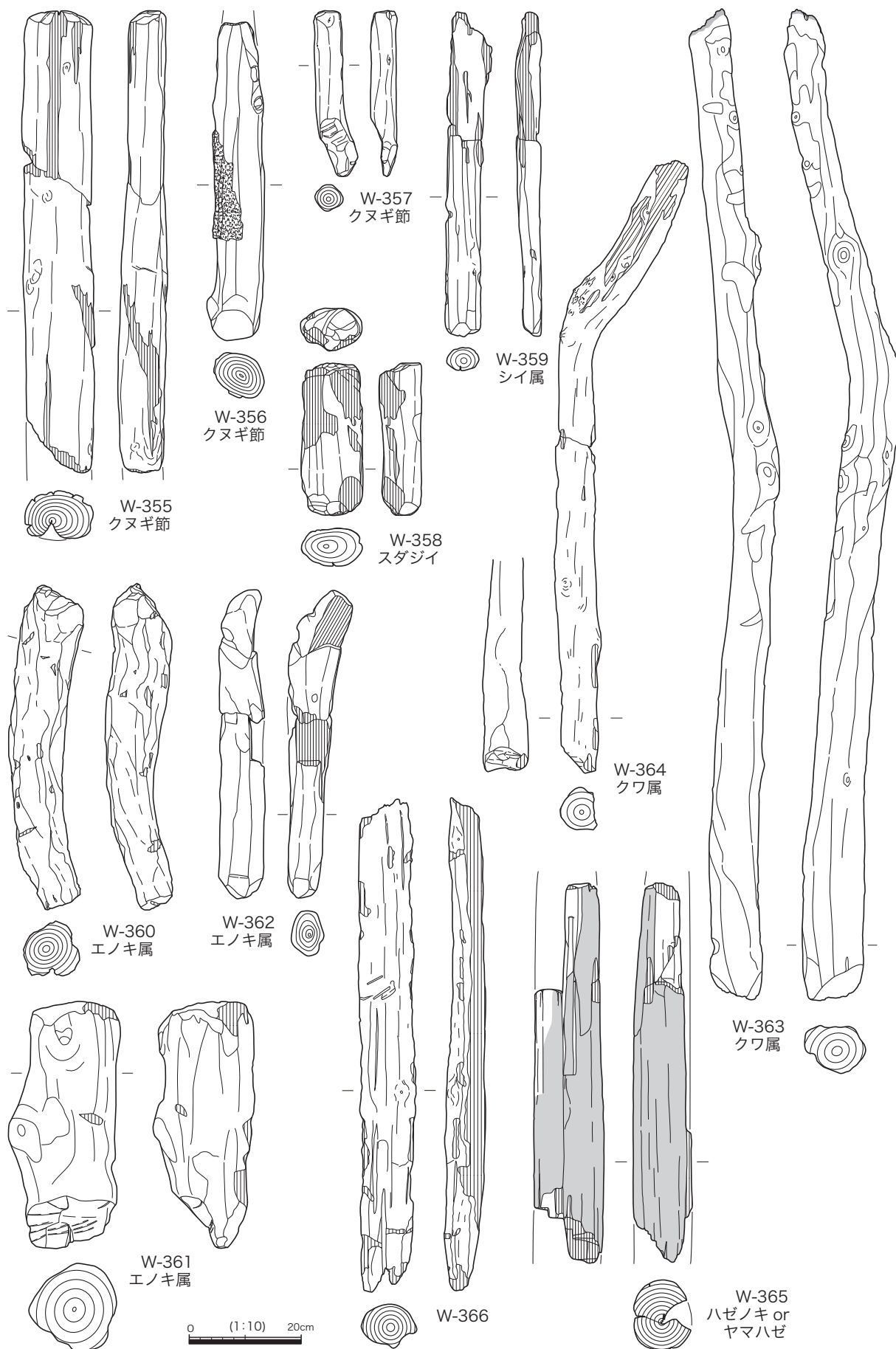
第251図 木製品：板10・分割材3 (S=1/6)



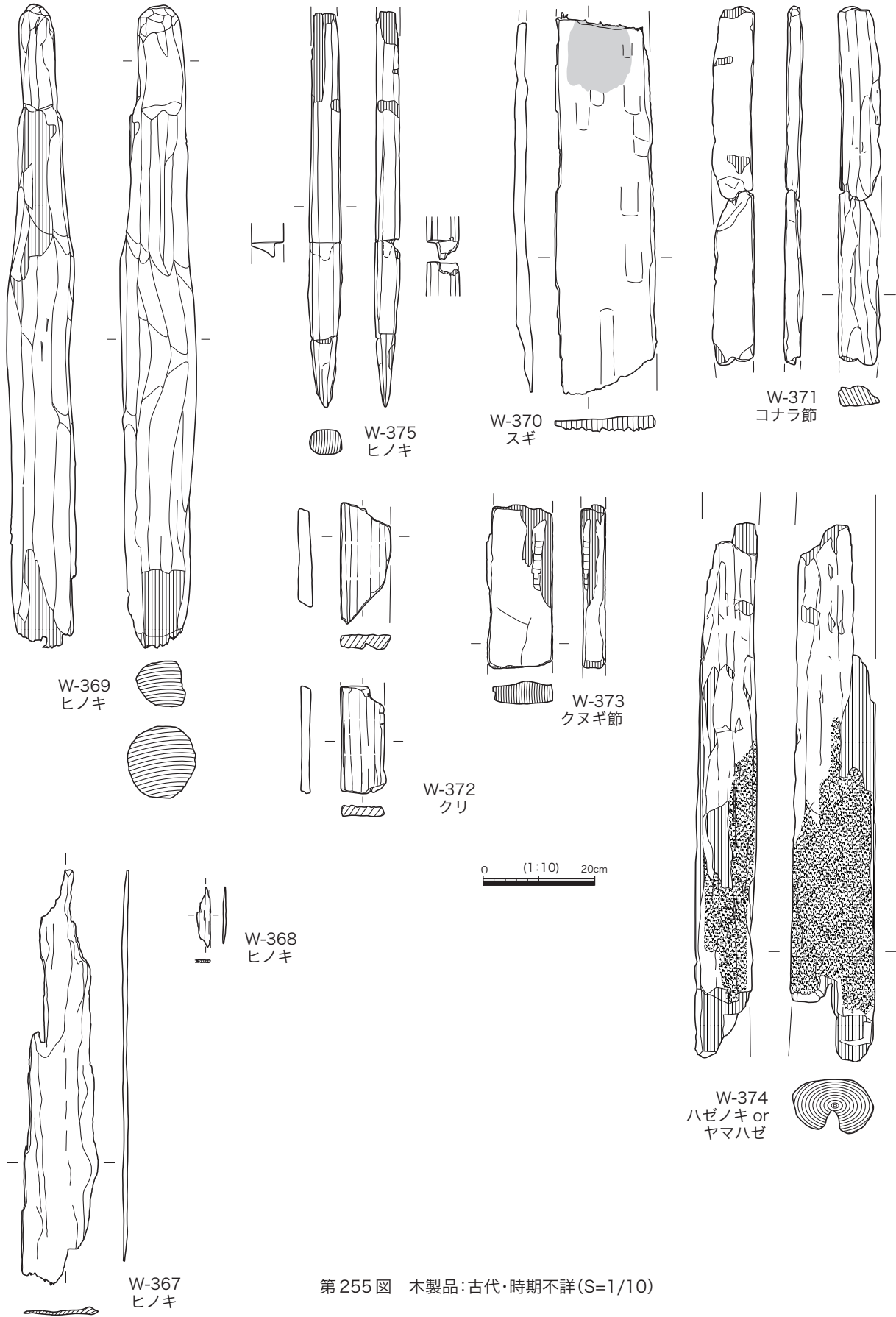
第 252 図 木製品：分割材 4 (S=1/10)



第253図 木製品：丸太6 (S=1/10)

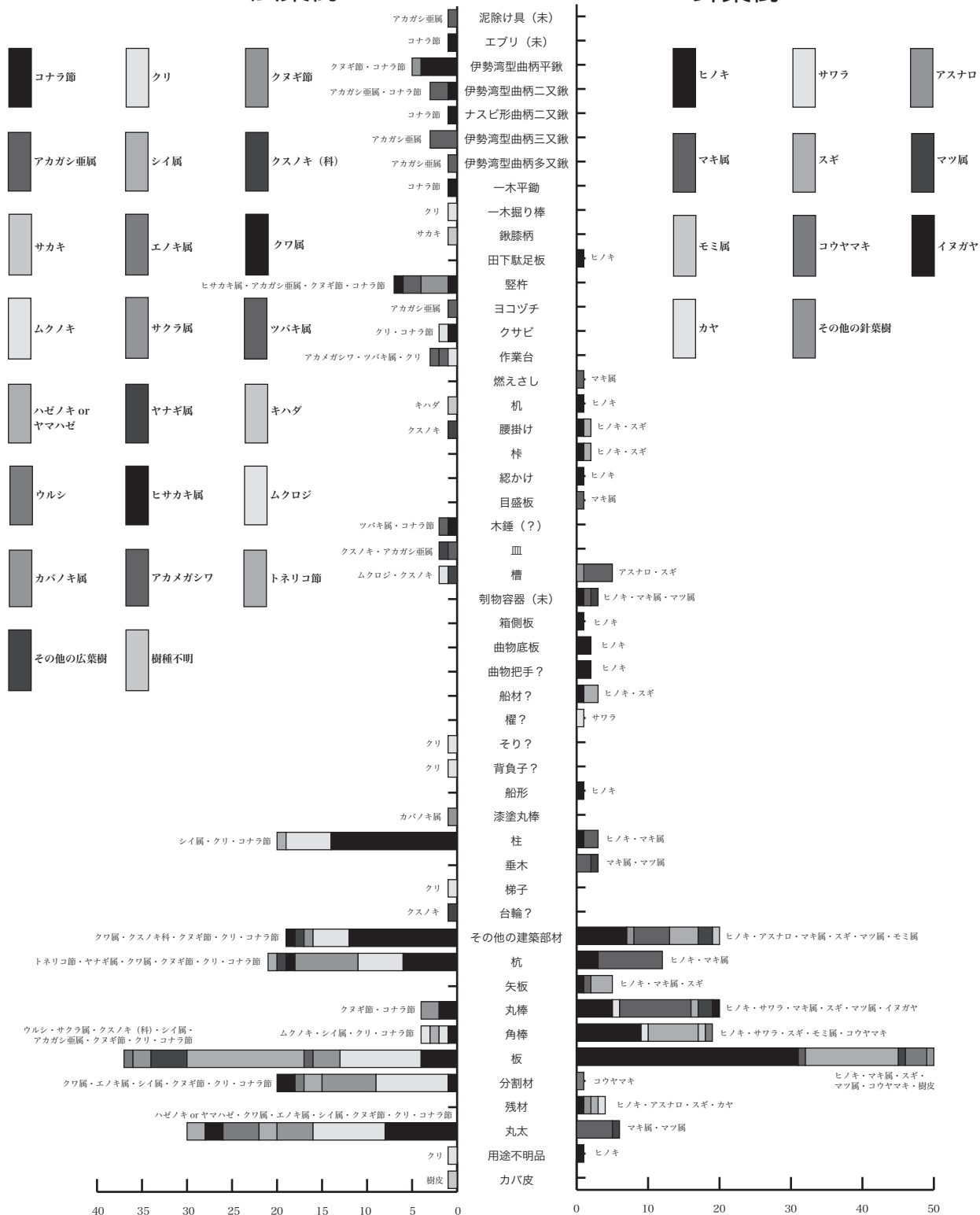


第 254 図 木製品：丸太7 (S=1/10)



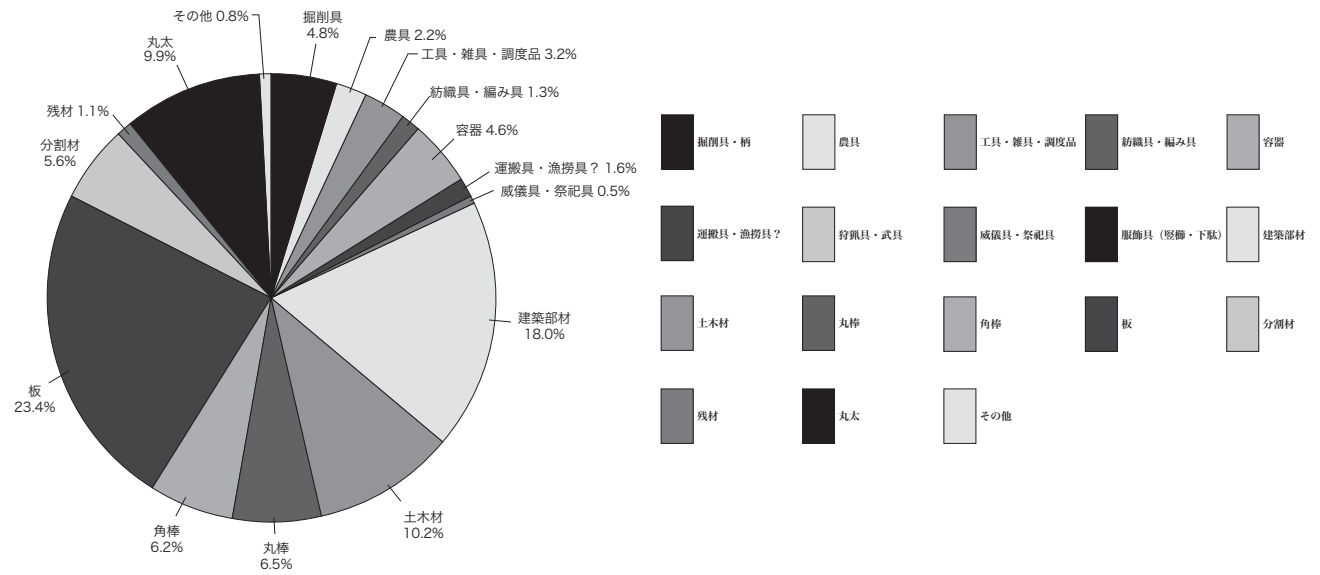
広葉樹

針葉樹

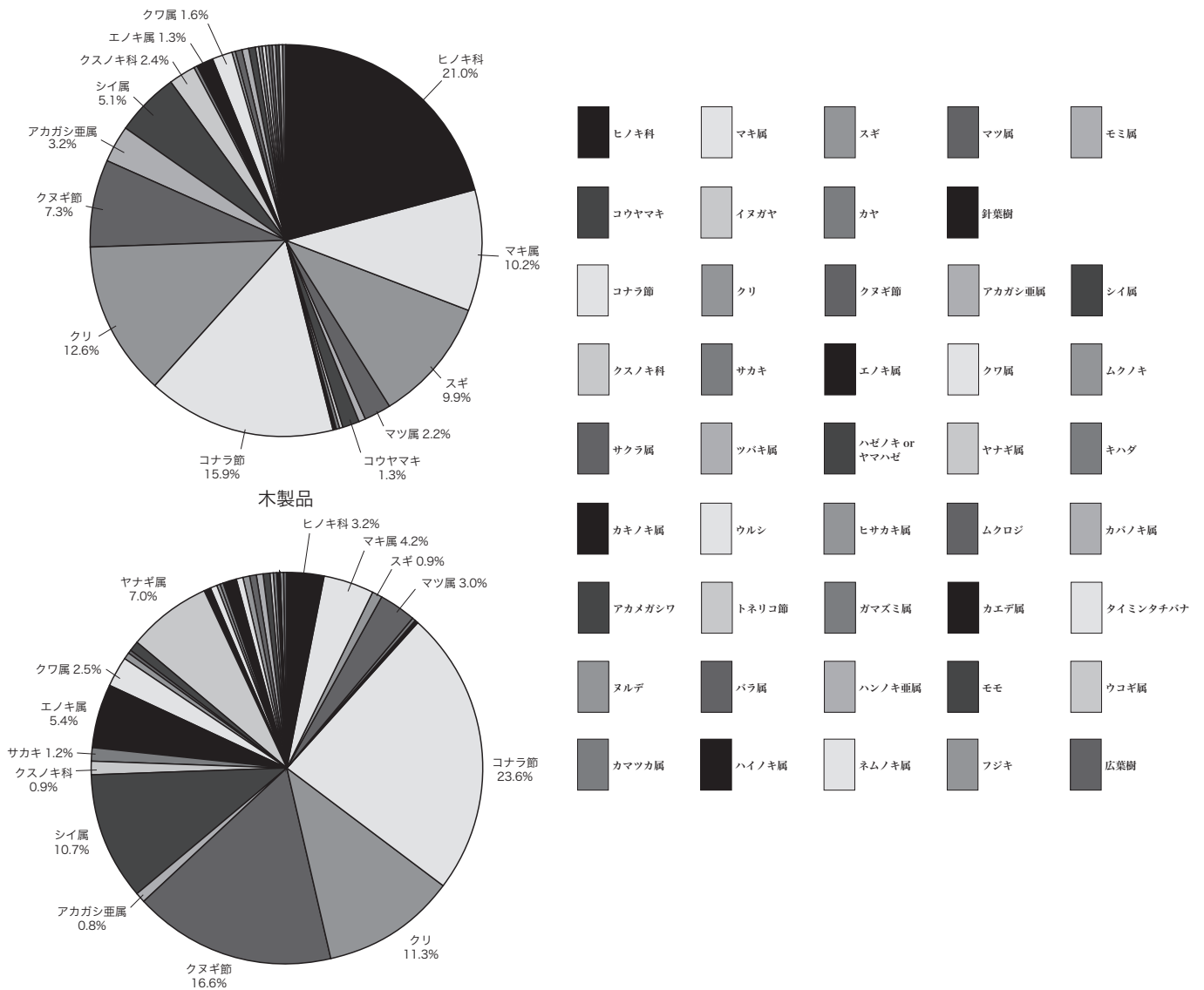


第 256 図 木製品器種・樹種関連グラフ 1

器種組成グラフ



樹種組成グラフ



第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定 1

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani

1 はじめに

愛知県安城市に位置する姫下遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

試料 PLD-10520 は 05B 区の第 132 図の土層断面観察ベルトの南東にあたる地点、標高 5.90m の木片を含む中粒砂層で採取したもので、NR02 内にあたる。PLD-10521 は、調査区の北側の居住域下の地点、標高約 5.30m の砂層直上の腐食層で採取した。

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-10520	調査区：II AHS05B 位置：NR02深掘 試料No.：14C-1 その他：060317, 半割, 枝はらいの痕?	試料の種類：生材(環孔材, 5年輪) 試料の性状：最外年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-10521	調査区：II AHS05B 位置：調査区北側深掘 試料No.：14C-2 その他：丸木	試料の種類：生材(環孔材, 5年輪) 試料の性状：最外年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

3 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 ± 40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-10520 試料No. : 14C-1	-27.76 ± 0.14	1958 ± 19	1960 ± 20	<u>20AD (68.2%) 70AD</u>	30BC (1.4%) 10BC <u>AD1 (94.0%) 90AD</u>
PLD-10521 試料No. : 14C-2	-27.14 ± 0.20	2132 ± 20	2130 ± 20	<u>200BC (50.5%) 150BC</u> 135BC (17.7%) 110BC	350BC (6.3%) 320BC <u>210BC (87.7%) 90BC</u> 70BC (1.4%) 50BC

4 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代. 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

第2節 放射性炭素年代測定 2

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫
Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani

1 はじめに

愛知県安城市・姫下遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

試料 PLD-5871 は 05B 区の第 132 図の土層断面観察ベルト下、標高約 5.20m で採取した木片で、NR02 に属する可能性がある。PLD-5872 ~ 5881 は第 113 図の 05B 区 SU01 の炭化物・材、PLD-5882 は第 106 図の 05B 区 SB34 内炭化物・材を、PLD-5883・5884 は第 115 図の 05B 区 SK61 内の炭化物・材である。

測定試料の情報、調整データは表 3 のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3 結果

表 4 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ¹⁴C 年代, 3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

表3 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5871	遺構：NR01深掘 その他：IIAHS05B ¹⁴ C-1	試料の種類：生試料・材(枝) 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5872	遺構：SU01-5- その他：IIAHS05B AMS-1	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5873	遺構：SU01-5- その他：IIAHS05B AMS-2	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5874	遺構：SU01-5- その他：IIAHS05B AMS-3	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5875	遺構：SU01-5- その他：IIAHS05B AMS-4	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5876	遺構：SU01-5- その他：IIAHS05B AMS-5	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5877	遺構：SU01-5- その他：IIAHS05B AMS-6	試料の種類：炭化物・材 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5878	遺構：SU01-5- その他：IIAHS05B AMS-7	試料の種類：炭化物・材 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5879	遺構：SU01-2- その他：IIAHS05B AMS-8	試料の種類：炭化物・材 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5880	遺構：SU01-2- その他：IIAHS05B AMS-9	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5881	遺構：SU01-2- その他：IIAHS05B AMS-10	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5882	遺構：SB34 その他：IIAHS05B AMS-11	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5883	位置：VG10d 遺構：SK61 その他：IIAHS05B AMS-12	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N,	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5884	位置：VG10d 遺構：SK61 その他：IIAHS05B AMS-13	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N,	PaleoLabo : NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

表 4 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)
			1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
PLD-5871	-27.75 \pm 0.15	1945 \pm 25	<u>20AD (68.2%) 80AD</u>	<u>AD (95.4%) 130AD</u>	1947 \pm 23
PLD-5872	-28.03 \pm 0.17	1780 \pm 20	<u>220AD (40.8%) 260AD</u> <u>280AD (27.4%) 325AD</u>	<u>130AD (95.4%) 340AD</u>	1778 \pm 22
PLD-5873	-28.92 \pm 0.20	1715 \pm 25	<u>250AD (30.2%) 300AD</u> <u>320AD (38.0%) 390AD</u>	<u>250AD (95.4%) 400AD</u>	1717 \pm 23
PLD-5874	-27.78 \pm 0.14	1745 \pm 20	<u>250AD (12.6%) 265AD</u> <u>270AD (55.6%) 335AD</u>	<u>230AD (95.4%) 380AD</u>	1743 \pm 22
PLD-5875	-25.71 \pm 0.12	1775 \pm 20	<u>230AD (34.1%) 260AD</u> <u>280AD (34.1%) 325AD</u>	<u>130AD (95.4%) 340AD</u>	1774 \pm 22
PLD-5876	-26.48 \pm 0.17	1695 \pm 25	<u>260AD (7.2%) 280AD</u> <u>330AD (61.0%) 400AD</u>	<u>250AD (19.1%) 300AD</u> <u>320AD (76.3%) 420AD</u>	1695 \pm 23
PLD-5877	-28.50 \pm 0.13	1710 \pm 20	<u>260AD (15.9%) 280AD</u> <u>320AD (52.3%) 390AD</u>	<u>250AD (95.4%) 410AD</u>	1708 \pm 22
PLD-5878	-27.53 \pm 0.15	1745 \pm 25	<u>245AD (14.2%) 265AD</u> <u>275AD (54.0%) 335AD</u>	<u>230AD (95.4%) 380AD</u>	1746 \pm 23
PLD-5879	-28.27 \pm 0.18	1755 \pm 20	<u>240AD (21.0%) 265AD</u> <u>280AD (47.2%) 325AD</u>	<u>220AD (95.4%) 350AD</u>	1757 \pm 22
PLD-5880	-28.65 \pm 0.14	1740 \pm 25	<u>250AD (68.2%) 335AD</u>	<u>230AD (95.4%) 390AD</u>	1740 \pm 25
PLD-5881	-25.12 \pm 0.14	1750 \pm 20	<u>245AD (15.7%) 265AD</u> <u>275AD (52.5%) 330AD</u>	<u>230AD (94.1%) 350AD</u> <u>360AD (1.3%) 380AD</u>	1750 \pm 21
PLD-5882	-26.57 \pm 0.13	1790 \pm 20	<u>170AD (7.5%) 190AD</u> <u>210AD (48.5%) 260AD</u> <u>290AD (12.1%) 320AD</u>	<u>130AD (77.5%) 260AD</u> <u>280AD (17.9%) 330AD</u>	1790 \pm 21
PLD-5883	-27.73 \pm 0.12	1745 \pm 20	<u>245AD (13.8%) 265AD</u> <u>275AD (54.4%) 330AD</u>	<u>230AD (95.4%) 380AD</u>	1747 \pm 21
PLD-5884	-25.11 \pm 0.17	1805 \pm 20	<u>130AD (68.2%) 250AD</u>	<u>130AD (92.1%) 260AD</u> <u>300AD (3.3%) 320AD</u>	1803 \pm 21

第3節 姫下遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1 はじめに

姫下遺跡は安城市姫小川町に所在する、碧海台地東南部の鹿乗川東岸の沖積地に広がる弥生時代中期から江戸時代までの複合遺跡である。ここでは05B区から出土した木製品と、流路NR01 5層に堆積していた木材加工の際に出た木屑と思われる木端一式の樹種同定を行なった。なお樹種同定に際し、独立行政法人森林総合研究所木材特性研究領域の能城修一氏にご指導いただいた。

2 試料と方法

試料のうち、05B区から出土した1135点の木製品の樹種については、本文・挿図・一覧表に示している。流路NR01の5層に堆積していた木屑は、生材で加工痕のあるもの、および加工痕は明瞭ではないが木屑と思われる木端40点と、炭化材10点を抽出した。

方法は、剃刀を用いて試料の3断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。なお木製品の切片採取に際し、試料全体が炭化していて試料採取が行えなかったものが3試料あり、不明とした。

3 結果

樹種同定の結果、木製品は針葉樹のモミ属、マツ属複雑管束亜属、コウヤマキ、スギ、ヒノキ、サワラ、アスナロ、マキ属、イヌガヤ、カヤ、針葉樹樹皮の11分類群、広葉樹はヤナギ属、ハンノキ属ハンノキ亜属（以下、ハンノキ亜属と呼ぶ）、カバノキ属、クリ、ツブラジイ、スタジイ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属と呼ぶ）、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節と呼ぶ）、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節と呼ぶ）、ムクノキ、エノキ属、クワ属、クスノキ、クスノキ科、ツバキ属、サカキ、ヒサカキ属、カマツカ、モモ、サクラ属、バラ属、ネムノキ属、フジキ（根材）、アカメガシワ、キハダ、ヌルデ、ウルシ、ハゼノキまたはヤマハゼ、カエデ属、ムクロジ、ウコギ属、タイミンタチバナ、カキノキ属、ハイノキ属ハイノキ節（以下、ハイノキ節と呼ぶ）、トネリコ属トネリコ節（以下、トネリコ節と呼ぶ）、ガマズミ属、ニワトコ、広葉樹a、広葉樹bの40分類群、不明樹皮1分類群、合計52分類群が確認された。

また、05B区NR01 5層流路出土の木端一式から検出された分類群は、炭化材は広葉樹のクリ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ節の3分類群であった。加工痕のある木屑は、針葉樹のモミ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、ヒノキ、サワラ、アスナロの6分類群、広葉樹のヤナギ属、クリ、ブナ属、エノキ属、サクラ属、バラ属、ハゼノキまたはヤマハゼの7分類群、合計13分類群であった。流路出土木屑の結果の一覧を表5、形状ごとの集計を表6に示す。

4 まとめ

木製品の樹種同定の結果は、全体ではコナラ節が最も多く238点、次にクヌギ節が153点、クリが132点と続いており、ブナ科の検出率が高い。確認された分類群の総数は不明も含めると51分類群にも上るが、そのうち検出点数が10点以下のものは広葉樹で多くみられ、1点のみ検出された樹種も多くある。針葉樹ではヒノキの94点、マキ属の71点が突出して多く、次にスギとマツ属複雑管束亜属が続いている。

当遺跡周辺の元来の自然植生はシイ-カシ林を主とする常緑広葉樹林帯であり（宮脇，1977）、今回の調査で検出された中では、シイ属やアカガシ亜属の他、クスノキ科、ツバキ属、ネムノキ、ムクロジ、タイミンタチバナなどが該当する。針葉樹でヒノキに次いで多く検出されたマキ属も常緑樹林帯に生育する。マキ属は暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の針葉樹でイヌマキとナギの2種があるが、ナギは和歌山県・山口県以南に分布するため、本遺跡で検出されたものはイヌマキであると思われる。針葉樹でヒノキとマキ属が多く検出されているのは、近隣の下懸遺跡とも類似している。下懸遺跡ではマキ属が最も多く検出されており、本遺跡周辺の特徴と考えられる（植田・野村，2009）。

しかしマツ属複維管束亜属、クヌギ節・コナラ節・ヌルデ・アカメガシワなどの樹種は陽向地を好み、裸地などにいち早く進入する二次林的要素が強い樹種であるため、常緑広葉樹林帯における代償植生となる。またエノキやムクノキも日当たりの良い肥沃な土地に生育する樹種であることから、開けた土地および二次林の存在が伺える。特に多く検出されたクヌギ節やコナラ節などは陽向地などでは生長も早く、伐採後に萌芽更新を行なうことにより再生するため、10～20年単位で繰り返し利用される材である（宮脇，1977）。

ヤナギ属、ハンノキ節、トネリコ節は低湿地など湿潤な環境で生育する樹種も検出されており、これらは周辺河川から得られたものと思われる。一方、コウヤマキ、モミ属、カバノキ属などの樹種は山地に生育する樹種であり、必要に応じて広範囲から木材を得ていたと推測される。

また、ウルシが7点と比較的まとまって検出されている。ウルシは中国原産とされるが、少なくとも縄文時代前期以降には本州中部や東北地方などで生育していることが明らかになっている（能城・鈴木，2004）。樹液を漆工に用いるほか、材も板材・杭材・容器などの木製品として利用されている。縄文時代前期から中期の東京都下宅部遺跡ではウルシの杭材が大量に発見されており、漆液の採取に関連すると思われる線状の痕跡が確認された（千葉，2006）。東海地方でのウルシの検出例は少ないため、漆器生産との関わりについても注目される。

05B区 NR01 5層出土の木屑類で検出された生材の樹種は、明瞭に加工痕の残るものでモミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキ、アスナロ、ヤナギ、クリ、エノキ属、バラ属の9分類群が確認された。木端と思われるも

表5 05B区 NR01 5層出土木屑一覽

No.	樹種	形状
1	エノキ属	加工（大）
2	エノキ属	加工（大）
3	ヒノキ	加工（小）
4	ヤナギ属	薄片状
5	アスナロ	薄片状
6	ヤナギ属	加工（大）
7	スギ	加工（小）
8	アスナロ	加工（大）
9	エノキ属	木端？
10	アスナロ	木端？
11	バラ属	薄片状
12	モミ属	加工（小）
13	ヒノキ	加工（小）
14	ヒノキ	加工（小）
15	アスナロ	木端？
16	アスナロ	木端？
17	アスナロ	細片
18	アスナロ	加工（小）
19	サクラ属	木端？
20	ヤナギ属	木端？
21	アスナロ	木端？
22	サワラ	木端？
23	アスナロ	木端？
24	アスナロ	木端？
25	エノキ属	木端？
26	クリ	木端？
27	ブナ属	木端？
28	アスナロ	木端？
29	アスナロ	細片
30	マツ属複維管束亜属	薄片状
31	クリ	加工（小）
32	ヒノキ	加工（小）
33	アスナロ	細片
34	モミ属	細片
35	アスナロ	細片
36	スギ	加工（小）
37	アスナロ	加工（小）
38	アスナロ	薄片状
39	スギ	薄片状
40	アスナロ	加工（小）
41	アカガシ亜属	丸木（炭化材）
42	クリ	破片（炭化材）
43	ハゼノキまたはヤマハゼ	丸木（炭化材）
44	クリ	破片（炭化材）
45	コナラ節	破片（炭化材）
46	クリ	破片（炭化材）
47	クリ	破片（炭化材）
48	コナラ節	破片（炭化材）
49	クリ	破片（炭化材）
50	アカガシ亜属	破片（炭化材）

表6 05B区NR01 5層出土木屑集計

樹種/形状	生材				炭化材		計	
	加工(大)	加工(小)	薄片状	細片	木端?	丸木		破片
モミ属		1		1				2
マツ属複雑管束亜属			1					1
スギ		2	1					3
ヒノキ		4						4
サワラ					1			1
アスナロ	1	3	2	4	7			17
ヤナギ属	1		1		1			3
クリ		1			1		5	8
ブナ属					1			1
アカガシ亜属						1	1	2
コナラ節							2	2
エノキ属	2				2			4
サクラ属					1			1
バラ属			1					1
ハゼノキまたはヤマハゼ						1		1
計	4	11	6	5	14	2	8	50

のではサワラ、アスナロ、クリ、ブナ属、エノキ属、サクラ属の8分類群が確認され、広葉樹が多い。これらは木製品の分析で検出された樹種と同一であり、特に加工痕の明瞭なものは木製品を加工した際の木屑である可能性が高いと言える。しかし、1つの材を加工する際に大量の木端がでることを考慮すると、樹種ごとの検出点数は必ずしもあてにならない。また、試料は小片のものが多く、保存性の低い樹種は残存していないか加工痕が摩滅して抽出対象から外れている可能性もある。そのため、保存性の高い樹種など限られた樹種のみが検出された可能性が考えられる。炭化材で検出された樹種はクリ、アカガシ亜属、コナラ節、ハゼノキまたはヤマハゼといずれも広葉樹であった。形状は破片状で不明のことが多いが、枝状の丸木もある。木材の加工過程において産出したものとも考えられるが、単に燃料材等である可能性もある。

引用文献

- 植田弥生・野村敏江(2009) 樹種同定. 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター編「下懸遺跡」: 102-103, 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 千葉敏朗(2006) 下宅部遺跡出土試料からみた縄文時代の漆利用. 下宅部遺跡調査団編「下宅部遺跡Ⅰ(1)」: 369-379, 東村山市遺跡調査会.
- 能城修一・鈴木三男(2004) 日本には縄文時代前期以降ウルシが生育した. 植生史研究 12(1):3-11.
- 宮脇昭(1977) 日本の植生. 535p. 学研.

第4節 姫下遺跡のプラント・オパール

米田恭子 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

姫下遺跡は愛知県安城市姫小川町に所在しており、現鹿乗川東岸の沖積地に立地位置する弥生時代中期から江戸時代にかけての複合遺跡である。ここでは平安時代中～後期とみられる竪穴建物跡や東山72号窯式期以降が主体の灰釉陶器、山茶碗などが検出された06A区から、柱状に採取された土壌試料について、イネ科の植生変遷の解明を目的に、プラント・オパール分析を行なった。以下に、分析の結果および考察を記す。

2 試料と方法

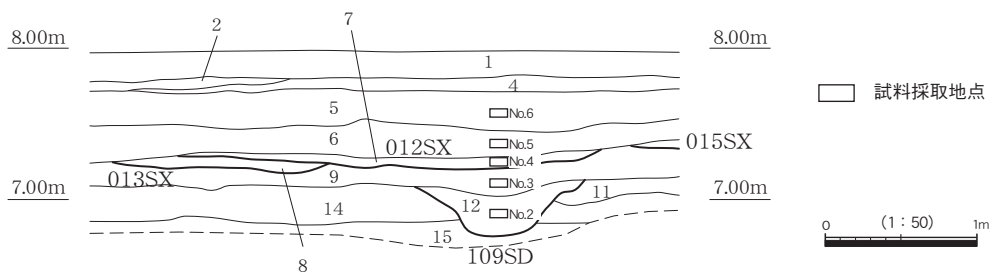
試料は、06A区北壁より採取された試料No.2(2層)、No.3(3層)、No.4(4層)、No.5(5層)、No.6(6層)の5点である(第5図、第258図)。2層と3層は黒褐色・黒色シルト層であり、古墳時代から平安時代中期までの堆積層とみられている。3層の上面で、平安時代の竪穴建物跡とみられる遺構群や、溝などが検出されている。4層は3層上面で検出された遺構の覆土と同様の粘性の強い褐灰色シルト層である。5層は褐灰色シルト層、6層は灰黄褐色シルト層である。

プラント・オパール分析は上記した5試料について、下記に示した手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについてガラスビーズが300個に達するまで行なった。

3 観察の結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(表7)た。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。



06A区北壁

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (籾・ビニール片等を含む、現耕作土) 2. 5Y5/1 灰色シルト (1よりしまり強い) 3. 10YR5/3 にぶい黄褐色中粒砂 (1層の大型ブロックを含む) 4. 2.5Y5/1 黄灰色極細粒砂 5. 10YR5/2 灰黄褐色シルト (細粒砂を多く混入する、鉄分の沈着目立つ) 6. 10YR4/1 褐灰色シルト (鉄分の沈着目立つ) 7. 10YR4/1 褐灰色粘性強いシルト (炭化物をわずかに含む) 8. 10YR4/1 褐灰色シルト (粘性強いシルトに10YR3/1 黒褐色シルトが混じる、粗粒砂を少量含む) 9. 10YR3/1 黒褐色シルト (2.5Y5/2 暗灰黄色(地山)ブロックシルトを多量に含む) | <ol style="list-style-type: none"> 10. 10YR4/1 褐灰色粘性強いシルト (2.5Y5/2 暗灰黄色(地山)ブロックを主体とする層で、9層を少量混入している) 11. 10YR4/1 褐灰色粘性強いシルト (10層土より色調はやや明るい) 12. 10YR2/1 黒色粘性強いシルト (2.5Y5/2 暗灰黄色(地山)ブロックを少量含む、9層と比べて黒色度が強い) 13. 10YR5/1 褐灰色シルト 14. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 15. 5Y4/1 灰色極細粒砂～粗粒砂 (籾状堆積) 16. 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂 (小礫、中粒砂含む) |
|--|---|

第258図 06A区プラント・オパール試料採取地点

表7 試料 1gあたりのプラント・オパール個数

試料 番号	イネ (個/g)	イネ類破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
6	2,000	2,000	1,000	2,000	0	0	0	0	1,000	2,900
5	2,100	0	4,100	1,000	0	0	0	1,000	0	2,100
4	2,100	0	1,100	0	1,100	0	1,100	0	3,200	4,200
3	3,200	0	2,200	0	1,100	3,200	0	0	2,200	3,200
2	5,000	0	1,300	0	0	0	0	2,500	2,500	13,900

検鏡の結果、すべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。個数的には試料 No.2 が最も多く、5,000 個体が得られた。ネザサ節型は、試料 No.5 では約 4,000 個体が観察された。ヨシ属は試料 No.3 のみから約 3,000 個体が検出された。その他イネ類の破片、クマザサ属型、他のタケ亜科（ネザサ節型やクマザサ属型とは異なるタイプのタケ亜科）、シバ属、キビ族、ウシクサ族が検出された。

4 考察

プラント・オパール分析の結果、古墳時代～平安時代中期の 2 層（試料 No.2）、3 層（試料 No.3）からイネが多く検出された。イネのプラント・オパールが試料 1g 当り 5,000 個体以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査成果とはよく対応する結果が得られており（藤原，1984）、稲作の検証に際しては、この 5,000 個体を目安とし、植物珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断がなされている。2 層からは試料 1g 当り 5,000 個体のイネが検出したことから、試料採取地において稲作が行なわれていたと推察される。3 層については稲作の目安である 5,000 個体を下回る 3,200 個体であったが、2 層から連続して検出されており、稲作が行なわれていた可能性はあると思われる。ただし、花粉分析や他の地点におけるプラント・オパール分析との比較検討が必要と考える。2 層で検出されたキビ族については、アワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類によるものか、現時点においてはプラント・オパールの形態による分類が難しく不明である。3 層からは他の層では得られていないヨシ属が検出された。試料採取地周辺は、ヨシ、ツルヨシなどのヨシ属が生育しやすい湿地的な環境であったと思われる。他のタケ亜科については、メダケ属と似た形態を有していると思われるが、詳しい同定には至っておらず不明である。

平安時代の遺構の検出面である 3 層上面より上位の層に相当する 4 層～6 層（試料 No.4、5、6）については、試料 1g 当り約 2,000 個体のイネが得られているが、検出個数は少なく、3 層と同様に、さらなる検討が必要と考える。4 層ではやや乾燥した場所を好むシバ属や、ススキやチガヤなどのウシクサ族が、遺跡周辺に成立していたと思われる森林の林縁部など日のあたる開けたところに草地を形成していたとみられる。4 層の堆積時期に試料採取地周辺は、湿地的環境から乾燥した環境へと変化したと推察される。5 層と 6 層の時期には、ケネザサ、ゴキタケといったネザサ節型のササ類が、森林の林縁部などの日のあたる開けたところに生育を広げていたと思われる。また、スズタケ、ミヤコザサなどのクマザサ属型のササ類は、森林の下草的存在として分布を広げていたと推察される。

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－. 考古学ジャーナル, 227, 2-7.

第5章 総括

第1節 遺跡の変遷

今回調査地点の姫下遺跡の変遷を第259～261図に示した。遺構の時期については、遺物がまとまって出土しているもの、遺物が少量出土しているもの、出土状況からみて当該期の可能性が高いものの順に認定している。遺構の性格について、本調査で問題となったものが、竪穴状遺構・不明遺構とした方形の浅い落ち込みである。検出遺構を竪穴建物として認定する場合、炉及び竈に伴う焼土・炭化物面が認められる、柱跡と認定できる土坑が複数ある、床面（貼床面・硬土面）が認められる、方形の堀肩及び落ち込みが明瞭などの条件があるが、竪穴状遺構の大部分がこのいずれもあてはまらない。また姫下遺跡では全ての条件を満たしている竪穴遺構はなく、この傾向は本県内の各遺跡でも同様である。本章ではその中でも、炭化物が面的に広がっているものや、竪穴掘削時に中央部をわずかに残して周囲を掘り下げ、それを埋めた後に上部に床面を作る、いわゆる幅広周溝状遺構をもつものを竪穴建物として認定できる遺構に含めた。逆に方形の掘り込みの一辺が同じ方向を向き、並列して連続するものは建物として考えることが難しいものである。後者の並列する竪穴状遺構の性格については、近年の周辺遺跡の調査結果を踏まえて「第2章 遺構」内でも述べられているように、水田遺構として考えるのがもっとも妥当であると思われる。ただ検出遺構のうち、竪穴建物か竪穴状遺構であるかを明確に区別できるものは少なく、その中間の判別不能な区分に分類されるものが大部分である。「第2章 遺構」では調査時の所見をもとに竪穴建物と竪穴状遺構を区別し、本章では上記の理由で遺構の性格が確定できるものを中心に遺構配置の側面から区別したが、双方で齟齬が生じている。この事は遺構の性格を判断する上で、検討の余地が多いことを示しており、明確な区別については今後検討を重ねるとともに、調査・研究の進展を待ちたいと思う。

（1）弥生時代（第259図）

05A区北西で検出された竪穴建物・竪穴状遺構・土坑、06B区で検出された土坑が弥生時代に属する。時期は05A区の遺構群が弥生時代中期後半の古井式期に、06B区の土坑が前期～中期になる。この05A北部から06B区南部にかけての地域が弥生時代の居住域、05B区南部から06C区にかけて河道が走ると考えられる。この河道部分は弥生時代以前より古墳時代まで河道として続いており、中世まで凹地として残る地域になる。弥生時代の河道の肩として検出されたのは、05B区の南肩のみで、これも大きな河道の一部として捉えることができる。また河道の方向も後世の様相から、北東—南西方向に走っていたと想定される。NR02より大型琴と思われる側板（W-001）が出土したが、時期を特定できる遺物の出土はなく、05B区NR01の5層から出土した条痕文土器や、「第3章 第1節 放射性炭素年代測定1」でのNR02出土木材の年代AD1（94.0%）90ADの結果を参照すると、弥生時代中期後葉から後期にかけてNR02部分が河道であった可能性が高い。

（2）古墳時代前期（第260図）

05A区の中央部を北西—南東方向に走るSD42から河道までが居住域となる。SD42北側も居住域の可能性があるが、それも06B区部分までで、遺物の出土状況をみると、06A区までは広がっていない。また河道の南側については、06C区内では居住域の可能性は低い。また居住域内の掘立柱建物05B区SB45については時期不明であるが、遺構の切り合いを考えると平安時代以前と思われる。05B区SU01は焼土・炭化物を多く含む不定形な土坑群で、出土遺物や「第3章 第1節 放射性炭素

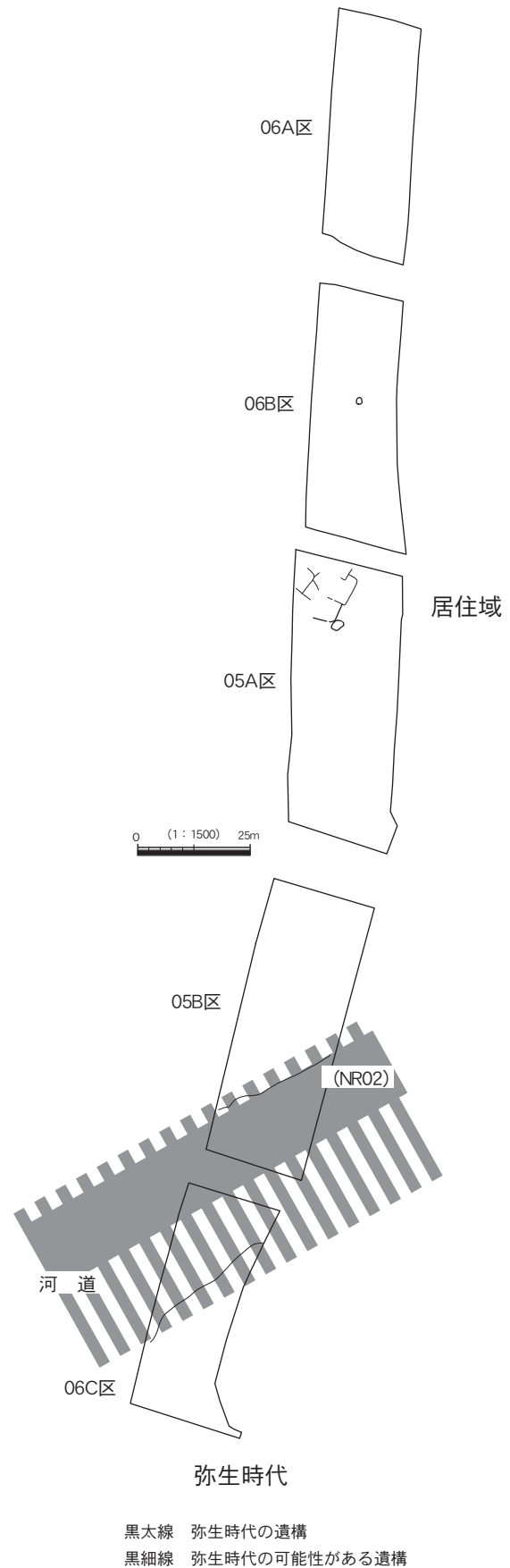
年代測定 2」の結果を参照しても当該期になることは確実であるが、性格は不明である。

河道は浅くなる部分については変わらないが、深くなる部分に変化しており、当初 05B 区の南西端で南に大きく広がっていた南肩（1 段階）が、ほぼ東西になる（2 段階）。この南肩部分の変化については、直線化することや、西部では断面が V 字状を呈していることから人為的な掘り直しであると考えられる。また杭列については、B・C が河道幅が変わる部分に伴う施設と考え、D とともに河道の古い段階のものになる。この河道の変化の時期を後述する古墳時代前期土器の変遷にあてはめると、1 段階が 1 a 期、2 段階が 1 b 期・2 期にあたる。また、06C 区河道南岸の 151SK は 1 段階 1 a 期に、249SE は 2 段階 2 期には埋没している。

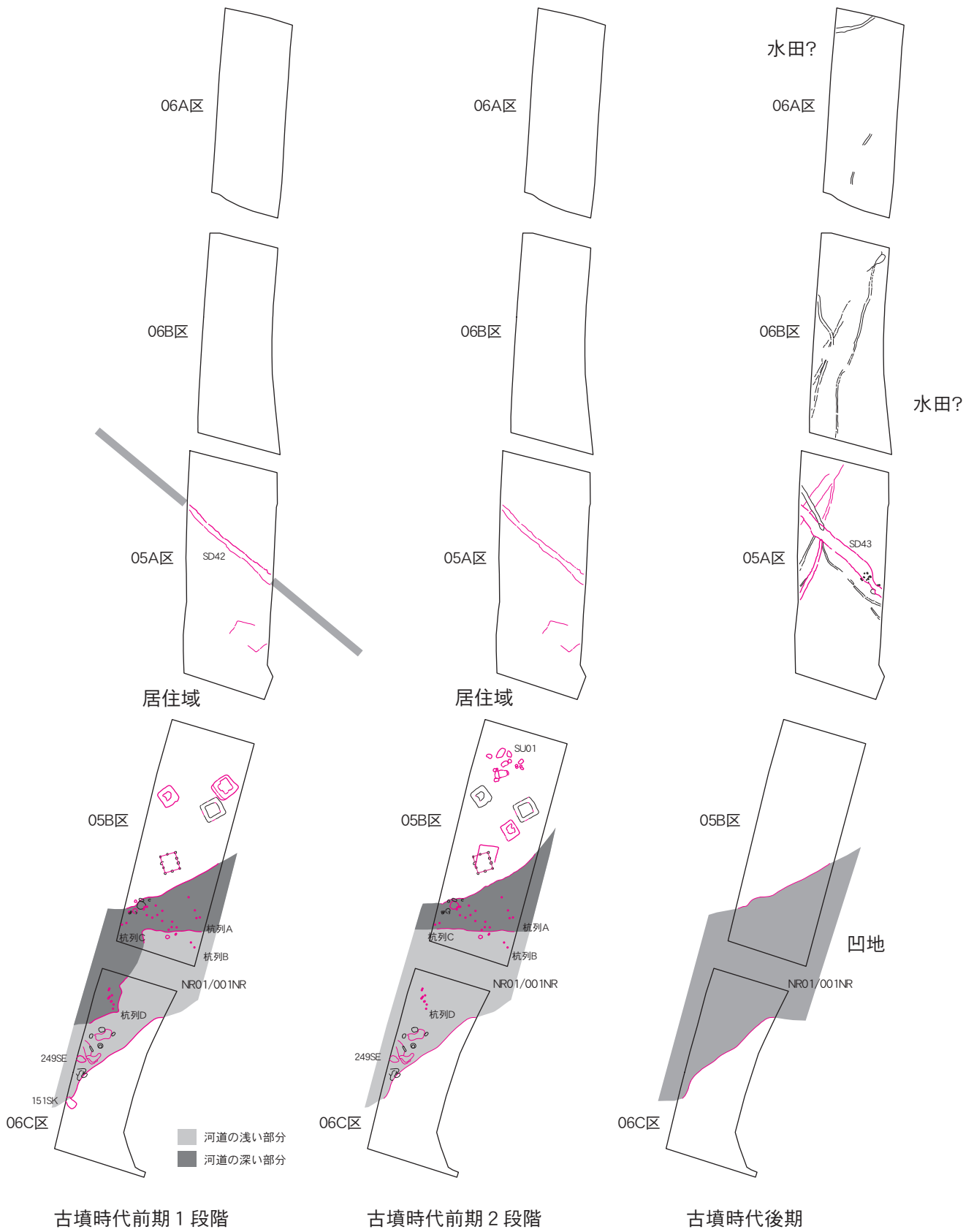
河道内より出土した木製品は量も多く、大型の建築材が目立つことから、今回の調査区内の居住域のみで使用されたとは考えにくく、さらに西側の居住域、または上流にある別の居住域内で使われたと考えるのが妥当だと思われる。ただ第 139・140 図の 05A 区の南岸東側地点では案や容器、不明特殊木製品、管玉がまとめて出土しており、このような遺物に関しては河道の近接した場所で使用された可能性がある。また出土遺物には製品だけではなく、木屑や材・自然木なども伴っており、木製品生産地としての側面も指摘される。

(3) 古墳時代後期 (第 260 図)

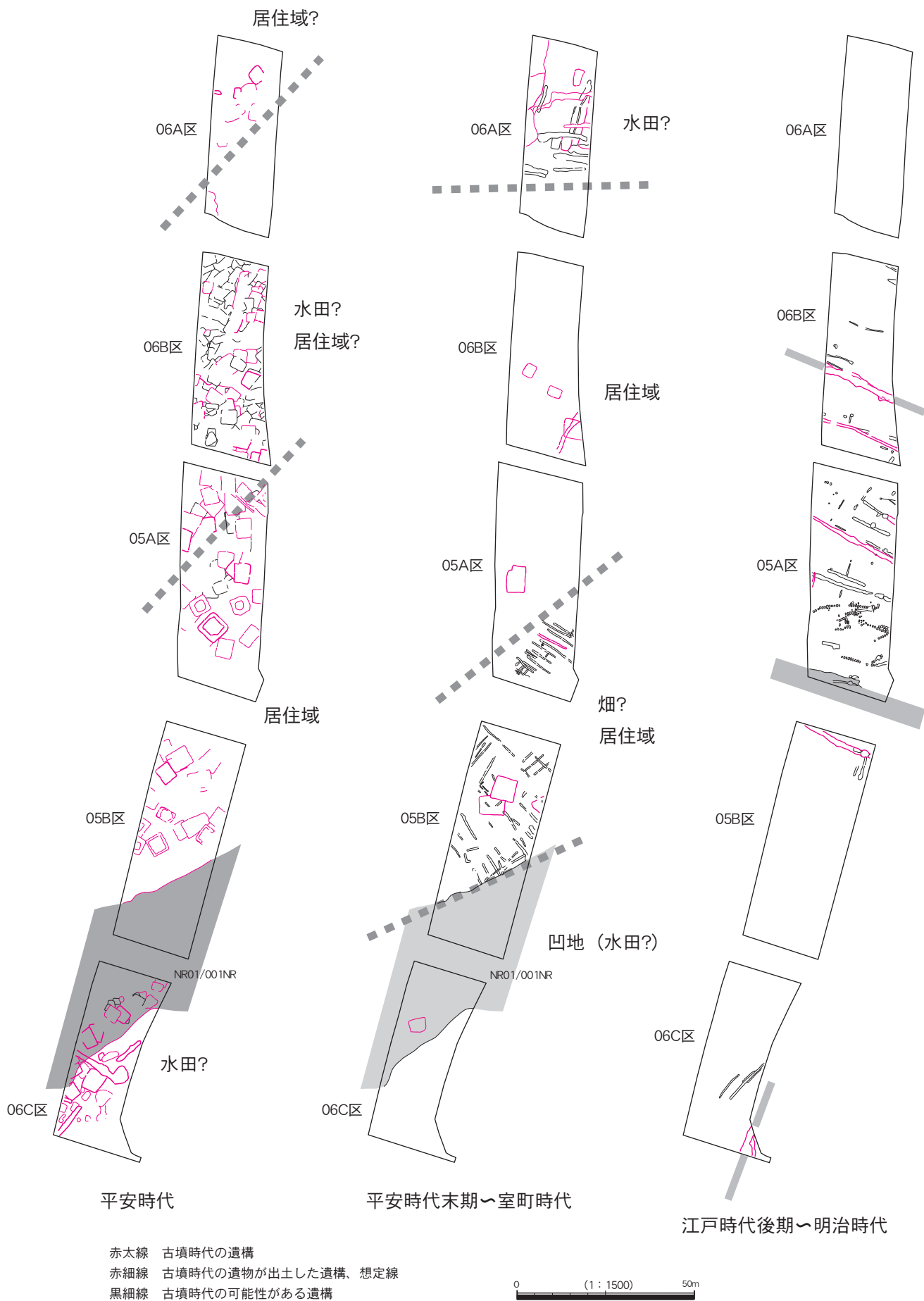
05A 区 SD43・73 より 6 世紀後半から 7 世紀前半の須恵器が出土しており、それらに類似する溝群を当該期のものとして考えた。これら遺構の性格はまったく不明であるが、検出地点が古代の水田域と想定する部分と重なることや、06A 区北端にある 109SD より一定数のプラントオパールが検出されている（「第 3 章 第 4 節 姫下遺跡のプラントオパール」）ことから、水田遺構に伴う水路のようなものが想定される。また 05A 区 SD43 の南東部で溝幅が狭くなっている部分にピットが集中するのも、水利施設に伴うものと考えられることができる。



第 259 図 姫下遺跡遺構変遷図 1 (S=1/1500)



第 260 図 姫下遺跡遺構変遷図 2 (S=1/1500)



第 261 図 姫下遺跡遺構変遷図 3 (S=1/1500)

(4) 平安時代 (第 261 図)

出土遺物をみると、奈良時代に属するものは極めて少なく、第 261 図で示した遺構群は 9～11 世紀に属すると考えられるものである。

NR01/001NR は浅い河道または凹地状のものとなり、06C 区では竪穴状遺構が作られる。06C 区の竪穴状遺構については低い場所にも作られていることから、建物より水田遺構を想定することが妥当だと思われ、020SD や 028SK は水田に伴う施設と考えられる。また 06A 区南部から 06B 区、05A 区北部にかけては、竪穴建物となる可能性の高い遺構は検出されておらず、06A 区南西隅の 001SX、06B 区北東部の 108SD、106SB・115～118SB、06B 区中央部東側の 161～164SX、06B 区南東隅の 246～248SX・251SX・347SX、05A 区の北部 SX29・SX28・SX31～33 など方形遺構の一边が並列するもの、各辺が極めて直線的なもの、不定形なものを水田と推定すると、この部分が水田域と想定される。ただこの水田域は固定化されたものではなく、居住域から水田、水田から居住域といった変化があった可能性も考えておきたい。

上記の水田域の北部である 06A 区北部と、河道に挟まれた 05A 区南部・05B 区北部は居住域と考えられるが、06A 区北部については水田域と重なり、居住域から水田といった変化も想定できる。

(5) 平安時代末期～室町時代 (第 261 図)

12 世紀～13 世紀に属する遺構が含まれる。

06A 区北側 2/3 程では、西側に 011SX・087SX・041SX、東側に 038SD、中央部に 101SX・102SX など上述した水田遺構に類する遺構が集中しており、水田域と推定した。また NR01/001NR は前代よりさらに浅い凹地状を呈していたと思われ、06C 区部分については前代に引き続き水田が営まれていた可能性がある。また 05A 区南東部から 05B 区北部で NR01/001NR との間では同方向に連続して並列する溝群が検出されている。所属時期については不明な部分が多いが、05A 区 SD64 より山茶碗片が出土しており、当該期と推定した。遺構の性格についてははっきりしないが、畑耕に伴う畝溝の可能性が考えられる。

05A 区北部から 06B 区にかけては居住域と思われるが、詳細は不明である。また 05B 区部分では居住域と畑が重なっており、畑域から居住域への転換が想定できる。

(6) 江戸時代後期～明治時代 (第 261 図)

06B 区南部から 05B 区北端にかけて、西北西—東南東方向の溝が多数検出されている。05A 区南端で検出された SX02 が最も規模の大きい溝と考えられ、次に 06B 区 001SD がくる。また 06C 区 006SD も比較的規模の大きな溝で、北側の溝群にほぼ直交する。これらは水田耕作に伴う水利施設また区画溝と考えられる。また 05A 区南部で見つかった連続する小土坑群については、土嚢の痕跡との指摘もあり、水田に伴う土木工事に關する遺構の可能性もある。

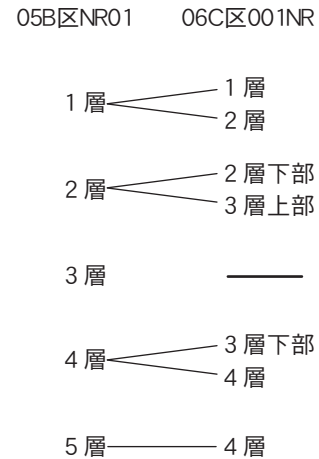
第 2 節 古墳時代前期土器の変遷と様相

(1) 時期区分 (第 263～266 図)

本来であるなら姫下遺跡出土の全ての遺物を対象に時期区分を行い、遺構変遷と対応させていくべきであろうが、本報告書では出土土器の大部分を占めている古墳時代前期の土器についてのみ時期区分を行った。

最初に、まとまった量の土器が出土している遺構を取り上げ、それらの比較から時期の変遷を考えた。取り上げた遺構は、05 区 SU01・SU02・NR01、06C 区 151SK・234SU・001NR である。こ

これらの遺構の中で最も良好な遺物群は06C区151SKのみで、他は05区SU01が土坑群出土、05区SU02・06C区234SUが河道肩部分の廃棄遺物、05区NR01・06C区001NRは河道出土のため、時間幅のある遺物が混在している可能性が高い。05区NR01・06C区001NRについては、調査年度で取り上げた層の呼称が変化している。その対応関係を表わしたものが第262図になる。06C区001NR3層については、05区NR013層との関連で混乱しており、調査後に検討を行った結果、06C区001NRには05区NR013層に相当する層は存在しないことが判明した。また層が薄いため一部上層のものが混じる06C区001NR2層と3層上部が05区NR012層と、06C区001NR3層下部と4層が05区NR014層と対応すると考えた。また河道肩に廃棄された05区SU02については、河道内まで廃棄が及んでおり、NR013層及び2層出土のものと明確には区別できていない。



第262図 河道層別対応図

土器の時期は1期・2期と大きく2時期にわかれ、前半部分がさらに1a期・1b期の2時期に区分される。

1a期 06C区151SK・06C区001NR4層・05区NR014層出土の遺物がこの時期に属する。

甕は、畿内地方の布留系甕（283・284・1142・1143）とそれに極めて類似するもの（286・287）、影響を受けたもの（285・288・291・296）があり、影響を受けたものの中には布留系甕に近いものから異なる要素が多いものがある。在来系の平底甕には大（298・299・1145）小（294・296・1144）がある。台付甕のうちS字状口縁甕はC類に分類され、口縁端部がやや横方向に延びるものが目立つ。く字状口縁甕は体部が上下に延びて長くなるもの（307）と球形を呈するもの（757・1165）がある。

壺は、加飾壺にはパレススタイル型太頸壺（326・1180・1189）と類似するもの（327）、柳ヶ坪型太頸壺（1184・1187）、二重口縁壺（332・335）、無飾壺には単純口縁太頸壺（328・329）、直口壺がある。直口壺には大型・小型の二種があり、横位の細かいミガキ調整がなされるもの（1198）と縦位のやや太いミガキ調整がなされるもの（338）と両者が混在するもの（339・1200）がみられる。

高坏には、廻間式有稜高坏（346・1215）と屈折脚高坏（350・349・352・1224・1226）があるが、屈折脚高坏の量は少ない。さらに1245・1227は庄内系高坏・有段高坏と考えられる。

鉢では、細かい横位のミガキ調整がなされ、内面に放射状ミガキが施される有段鉢（357）と、通常の太さのミガキが施される無段の鉢（359・1238・1237）がある。

小型壺では、丸底のものと平底のものがあり、丁寧にミガキ調整されるもの（362・1232）とそうでないものがある（364・1230?）。

1b期 05B区NR013層・06C区234SU出土の遺物がこの時期に属する。

丸底甕には、545・546・555・779のような布留系甕と多様な布留影響甕が存在する。長胴形の平底甕・く字状台付甕はやや縦位に長くなる傾向がみられ、球形体部のものもある。S字状口縁甕はC類に分類され、口縁部端が斜め上方に短く延びるものが目立つ。

壺は、パレススタイル太頸壺が減少し、柳ヶ坪型太頸壺・二重口縁壺が主体を占める。直口壺は1a期と同様に、大型・小型、横位の細かいミガキ・縦・横斜位のやや太いミガキのものがある。

高坏では、屈折脚高坏の割合が急増する。横位の細かいミガキ調整がなされたもの（678・683・690・924）が特徴的にみられ、それ以外にミガキ調整・ナデ調整されたものなど多様性を有する。廻間式有稜高坏は坏の稜線が不明瞭になる（670・911）。952・932は庄内系高坏・有段高坏。

鉢は、体部が丸みを帯びて深くなり、1a期同様に細かいミガキ調整のものとそれ以外のナデ・ハケ・ケズリ成形・調整されるものに分かれる。

小型壺も1a期と同じく、丸底・平底、丁寧にミガキ調整されるものとそうでないものがある。

2期 05B区SU02・05B区SU01出土の遺物がこの時期に属する。

甕は、布留系のもの(373)と多様な形態を有する影響甕が存在する。また平底甕には球形のもの(377)と長胴のもの(410)がある。台付甕のく字状口縁甕の体部は縦位に延びる傾向が続く。布留系甕を除き口縁部の折れがゆるくなり直立するものが目立つようになり、ナデ調整が多用されるようになる。台付甕のS字状口縁甕にはC類以外にD類がみられるようになる。

壺は、パレススタイル・柳ヶ坪型太頸壺が見られなくなり、有段口縁壺が目立つようになる。直口壺では細かいミガキ調整されるものが見られなくなるが、大・小の区分は残る。

高坏では、有稜高坏がなくなり、屈折脚高坏のみとなる。調整は直口壺同様、細かい横位のミガキを施すものがなくなり、縦位のナデ・ミガキ調整が基本となる。

小型壺では横位の細いミガキ調整のものが残る可能性もあるが、大部分がナデ・ケズリ成形・調整に変わり、出土量も多くなる。

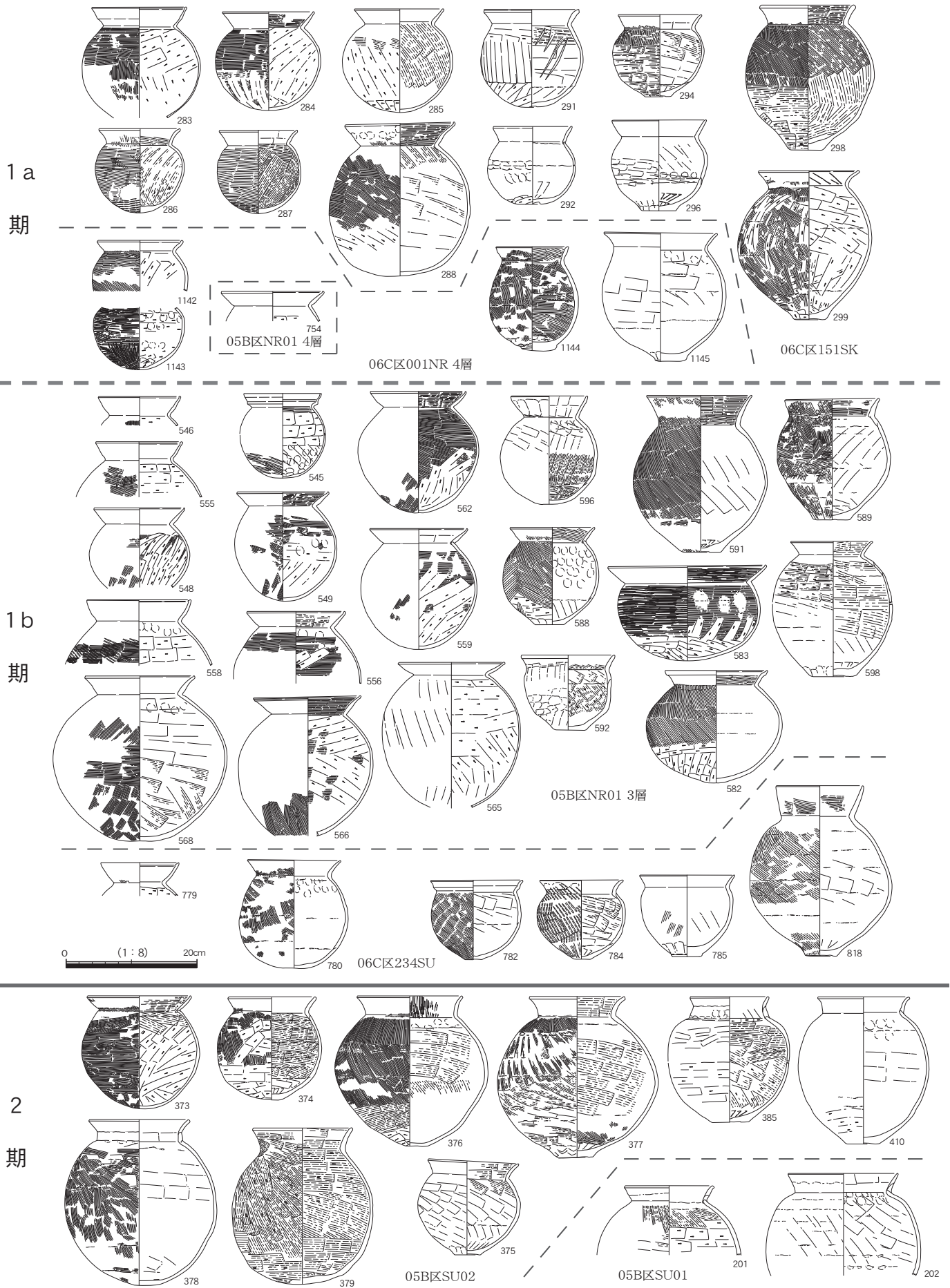
(2) 古墳時代前期土器の様相

上記の時期区分を遺構変遷(第261図)に対応させると、1a期が古墳時代前期1段階、1b期・2期が古墳時代前期2段階になる。このうち古墳時代前期2段階に含めた05B区SU01は居住期廃絶後に設けられた可能性があり、05B区SU02の河道肩への廃棄とともに、本遺跡における古墳時代前期の最終的な姿として分離できるかもしれない。

またこれまで提唱されている土器型式と比較すると、伊勢湾岸地方では赤塚氏の編年をもとにすると、1a期が廻間III式2段階、1b期が廻間III式3～4段階、2期が松河戸I式前半期にあたると思われる(赤塚1990、1994)。さらに畿内地方との比較では寺沢氏の編年をもとにすると、1a期が布留1式、1b期が布留2式～3式、2期が布留3式～4式古相にあたるかと思われる(寺沢1986)。

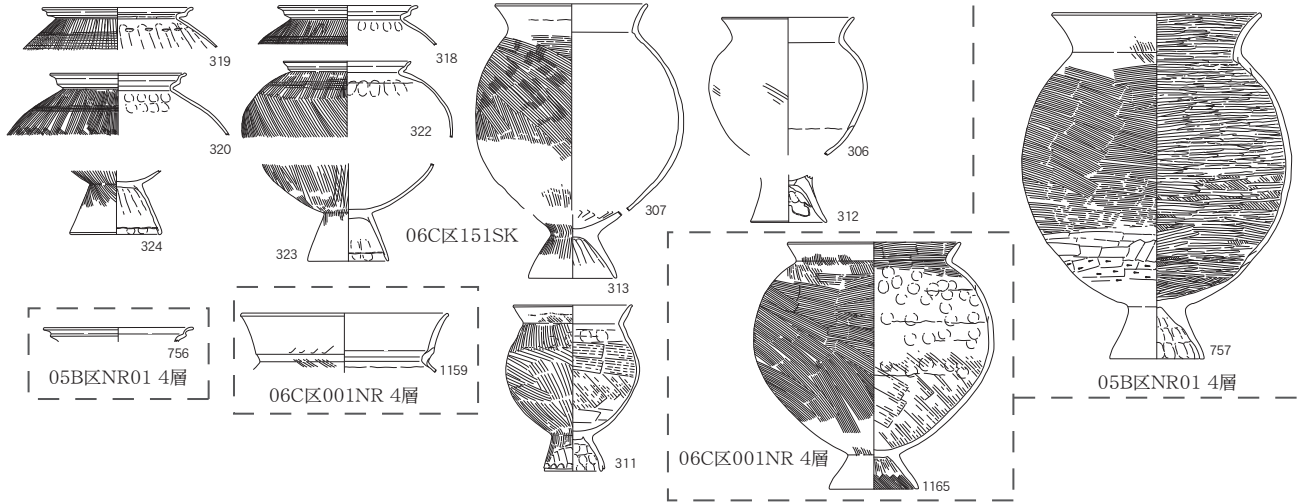
この姫下遺跡の1期の土器組成をまとめると第267図のようになる。甕では布留系甕とそれに影響を受けて球形の体部を呈して丸底化するものがあり、影響甕には布留系甕により類似するもの(布留影響1)とそうでないもの(布留影響2)がある。平底甕はこれまで指摘されてきたように(鈴木1998・北島1999・川崎1998)古墳時代初頭に叩き甕が流入し、その影響で平底の要素が在来系土器に取り入れられたもので、矢作川流域を中心に分布する。く字状口縁台付甕・S字状口縁台付甕も在来系の廻間様式土器群に共通するもので、S字状口縁台付甕はC類では矢作川流域でも一定量見られるようになる。壺では横位の細いミガキ調整を施す直口壺が布留系で、影響壺339もある。二重口縁壺は畿内もしくは伊勢湾西岸域の影響化で成立する外来の要素が強い器種で、パレススタイル太頸壺は濃尾平野の土器として認識できるものであるがこの時期には在地化が進んでいると思われる。高坏・小型鉢・小型壺においても、細かいミガキ調整がなされる布留系のものと、その類似品・影響品がある。特に屈折脚高坏の定着は画期となる。

以上のように姫下遺跡1期の土器群を区分したが、実際の出土土器にはどの区分に分類されるか意見が分かれるものが多数含まれている。また在来系という概念も、外来系のもので定着した後は在来化するもので、あいまいな基準と言える。さらに在来系土器といっても、狭義の在来系(ここでは矢作川流域)と広域の在来系(ここでは伊勢湾岸域に分布する広義の廻間様式)がある。この中で、第267図の二重線より左にある布留式土器の影響を受けたと思われる1期の土器群を姫下型土器群として区別したいと思う。今までの周辺の調査ではこのような土器群は見つかっておらず、現状では点的な様相を示すが、姫下型土器群のような土器組成をもつ遺跡が本遺跡だけなのか、他にいくつか存

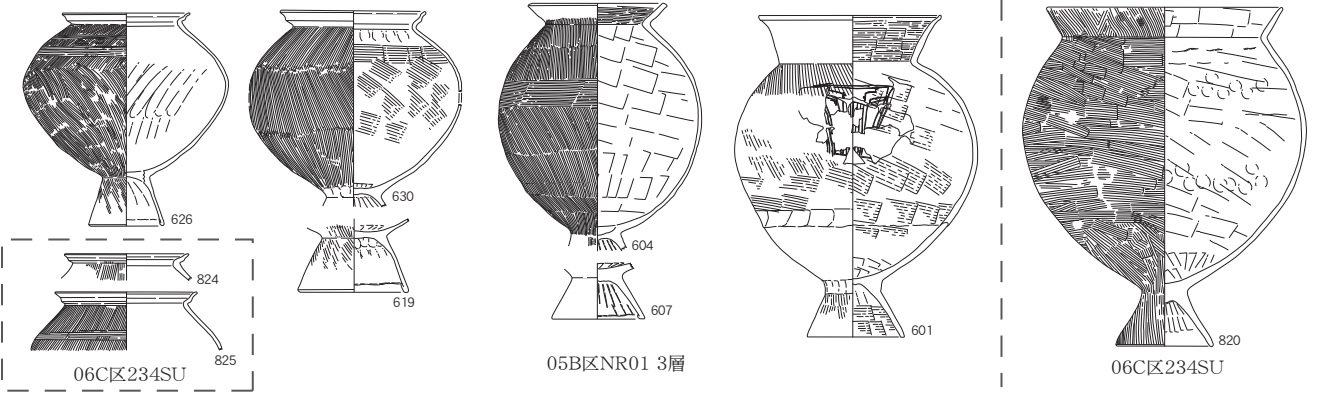


第 263 图 古墳時代前期土器変遷図 1 (S=1/8)

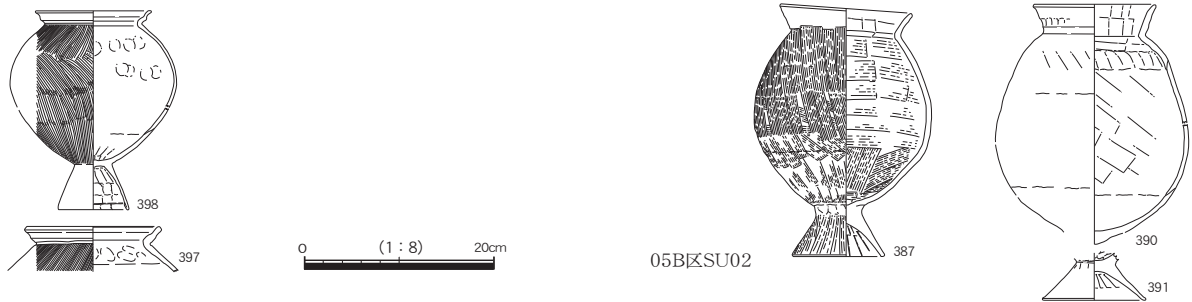
1 a
期



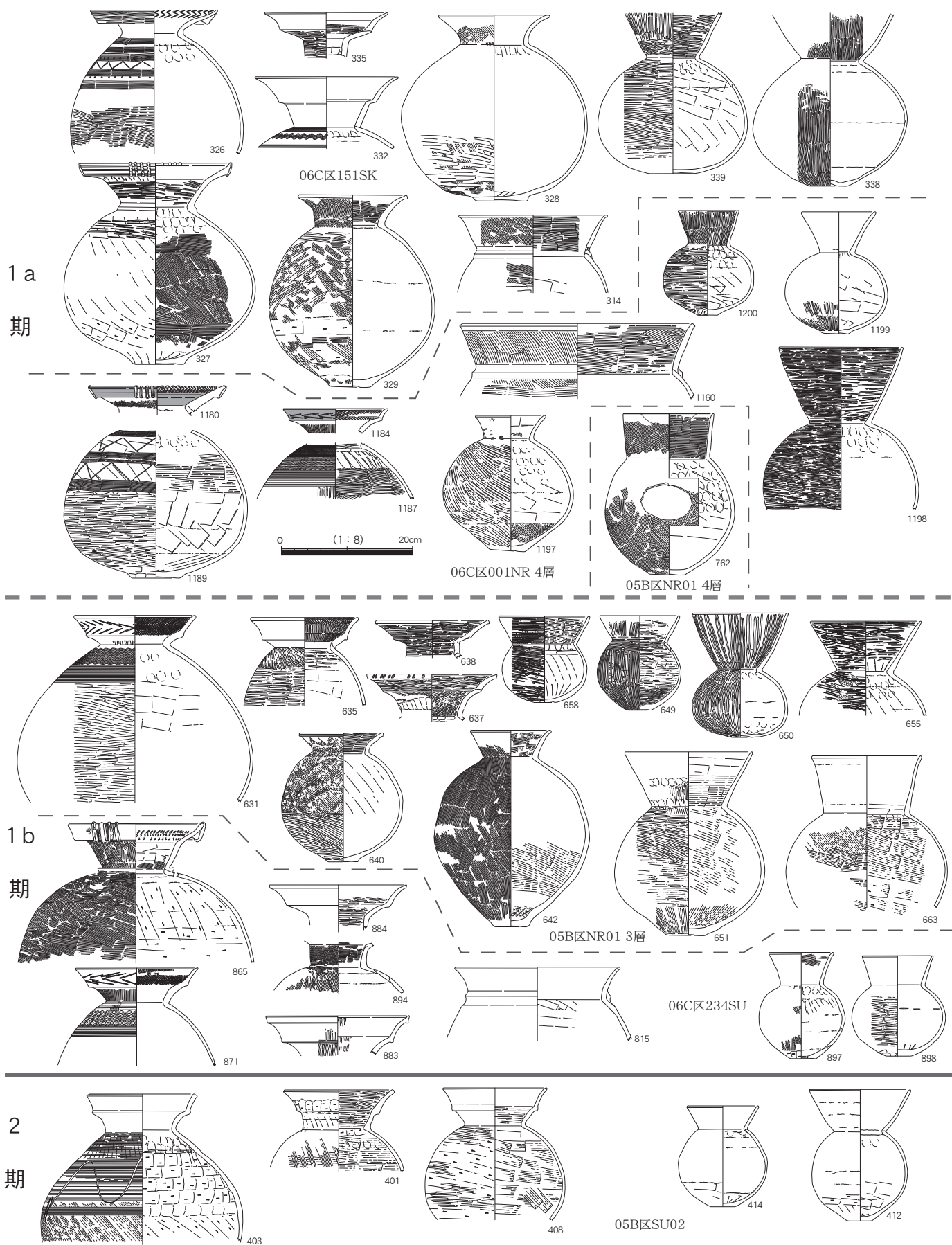
1 b
期



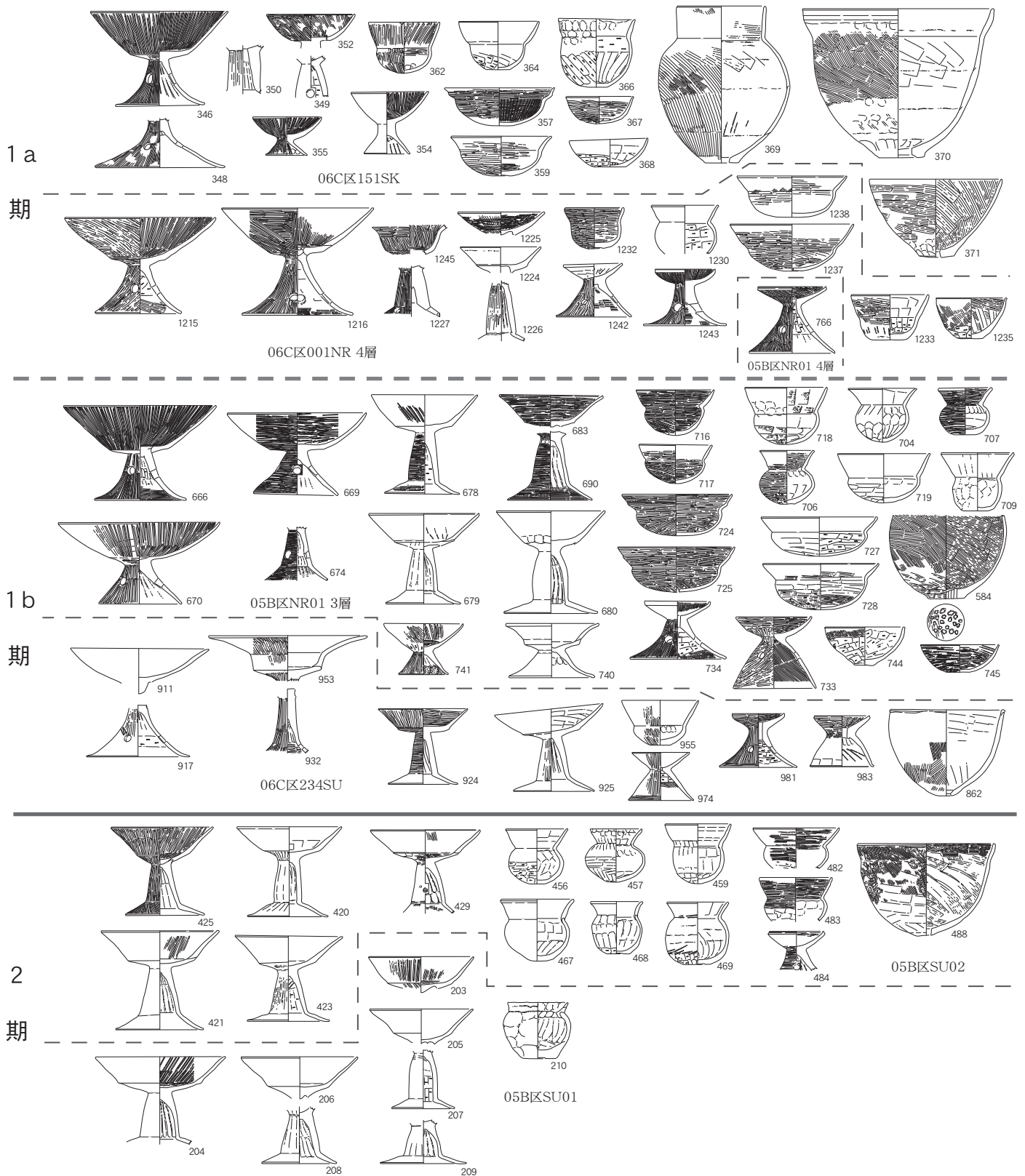
2
期



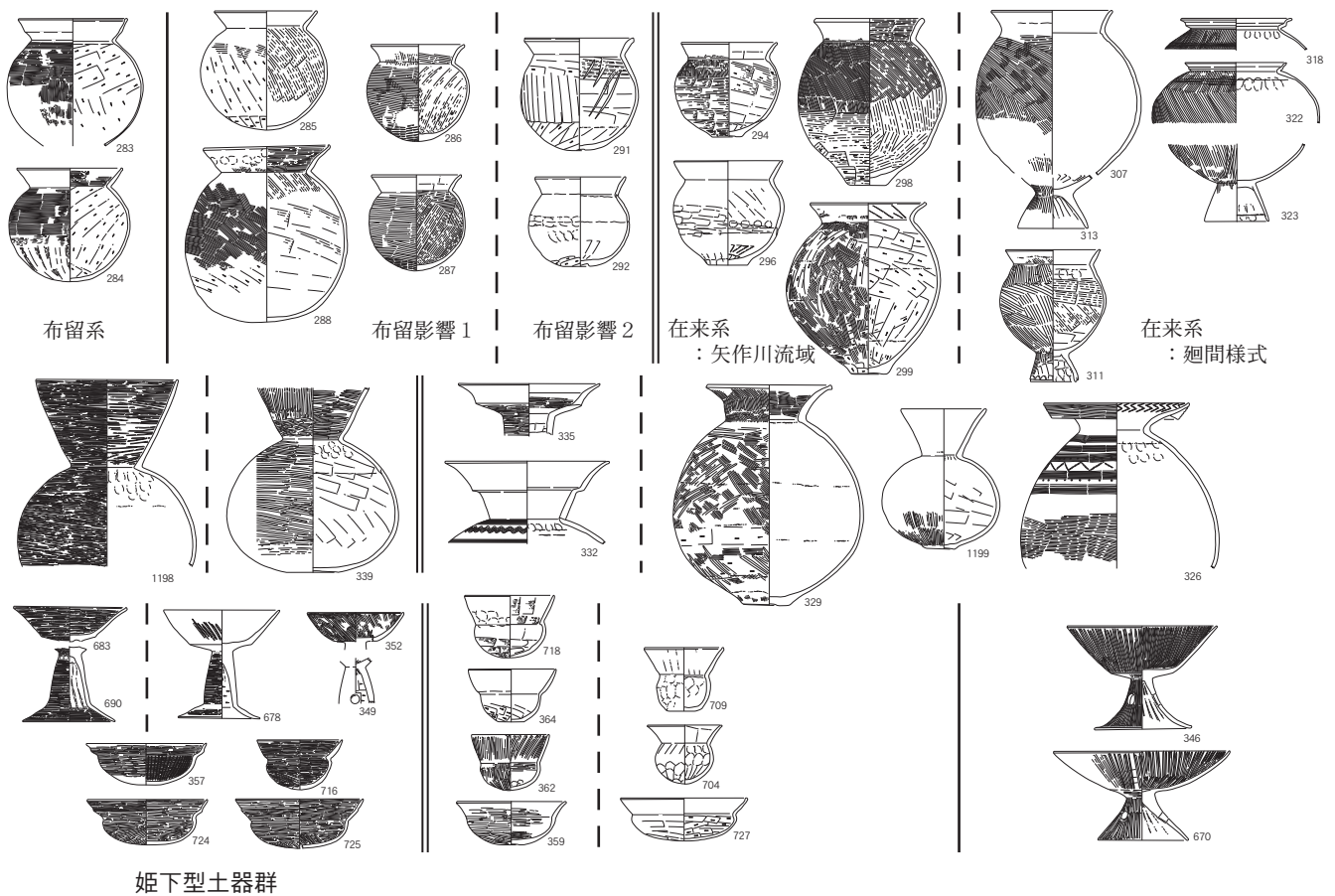
第 264 図 古墳時代前期土器変遷図 2 (S=1/8)



第 265 図 古墳時代前期土器変遷図 3 (S=1/8)



第 266 図 古墳時代前期土器変遷図 4 (S=1/8)



第 267 図 姫下遺跡 1 期土器分類図

在するのかが今後の課題となる。また、まとまった量の非在来系土器を出土する遺跡は、叩き甕が出土する本神遺跡・伊保遺跡、北陸系土器が出土する中廻間遺跡など矢作川流域に集中している。通常見られる少量の土器交流ではないこのような動きは、人の移動とも関係してくるであろうし、この地域の古墳時代前期社会を考える上で重要な要素となる。

参考文献

赤塚次郎 1990 「V 考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集
 赤塚次郎 1994 「付論 1 松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 48 集
 安達厚三・木下政史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第 60 号第 2 卷
 大阪府文化財センター 2006 『古式土師器の年代学』
 加納俊介 1991 「2 土師器の編年 4 東海」『古墳時代の研究 第 6 巻土師器と須恵器』雄山閣
 川崎みどり 1998 「第 5 章考察 1. 出土土師器の編年と特徴」『本神遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 4 集
 北島大輔 1998 「第 5 章考察 第 1 節桜林遺跡出土古式土師器をめぐる諸問題」『桜林遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 3 集
 北島大輔 1999 「第 5 章考察 3. 中廻間遺跡出土の北陸系土器をめぐる諸問題」『中廻間遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 6 集
 北島大輔 2000 「古墳出現期の広域編年—尾張低地部編年の提示、近畿・北陸地方との併行関係を中心に—」『S 字甕を考える』第 7 回東海考古学フォーラム
 鈴木とよ江 1998 「矢作川流域における弥生時代後期～古墳時代前期の土器について」『考古学フォーラム 9』
 寺沢薫 1986 「論考 畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 49 冊
 早野浩二 1996 「濃尾平野における布留式甕について—門間沼遺跡 94Cb 区 SD15 出土土器を中心として—」『年報 平成 7 年度』愛知県埋蔵文化財センター
 村木誠 1996 「付論 1、名古屋地域の土師器について」『埋蔵文化財発掘調査報告所 24 伊勢山中学校遺跡 (第 5 次)』名古屋市文化財調査報告 31
 米田敏幸 1991 「2 土師器の編年 1 近畿」『古墳時代の研究 第 6 巻土師器と須恵器』雄山閣

Y=6,370

Y=6,360

Y=6,350

Y=6,340

X=120,210

X=120,220

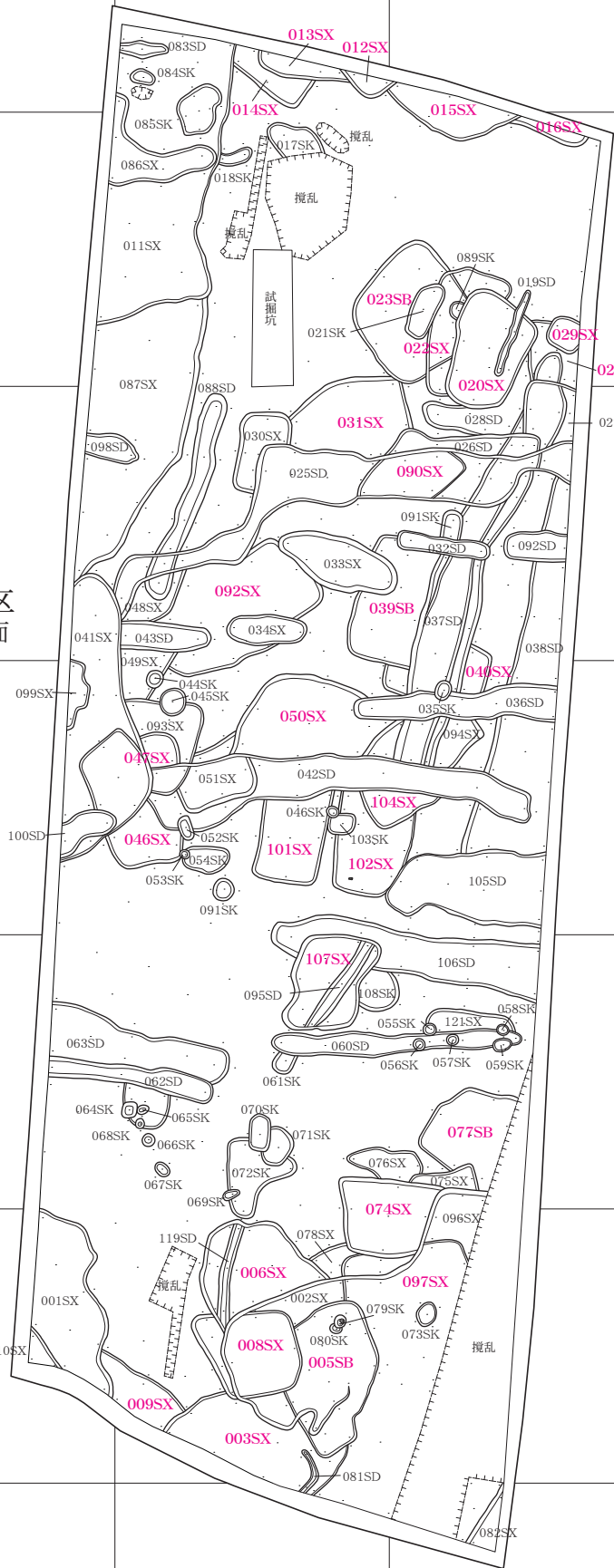
X=120,230

X=120,240

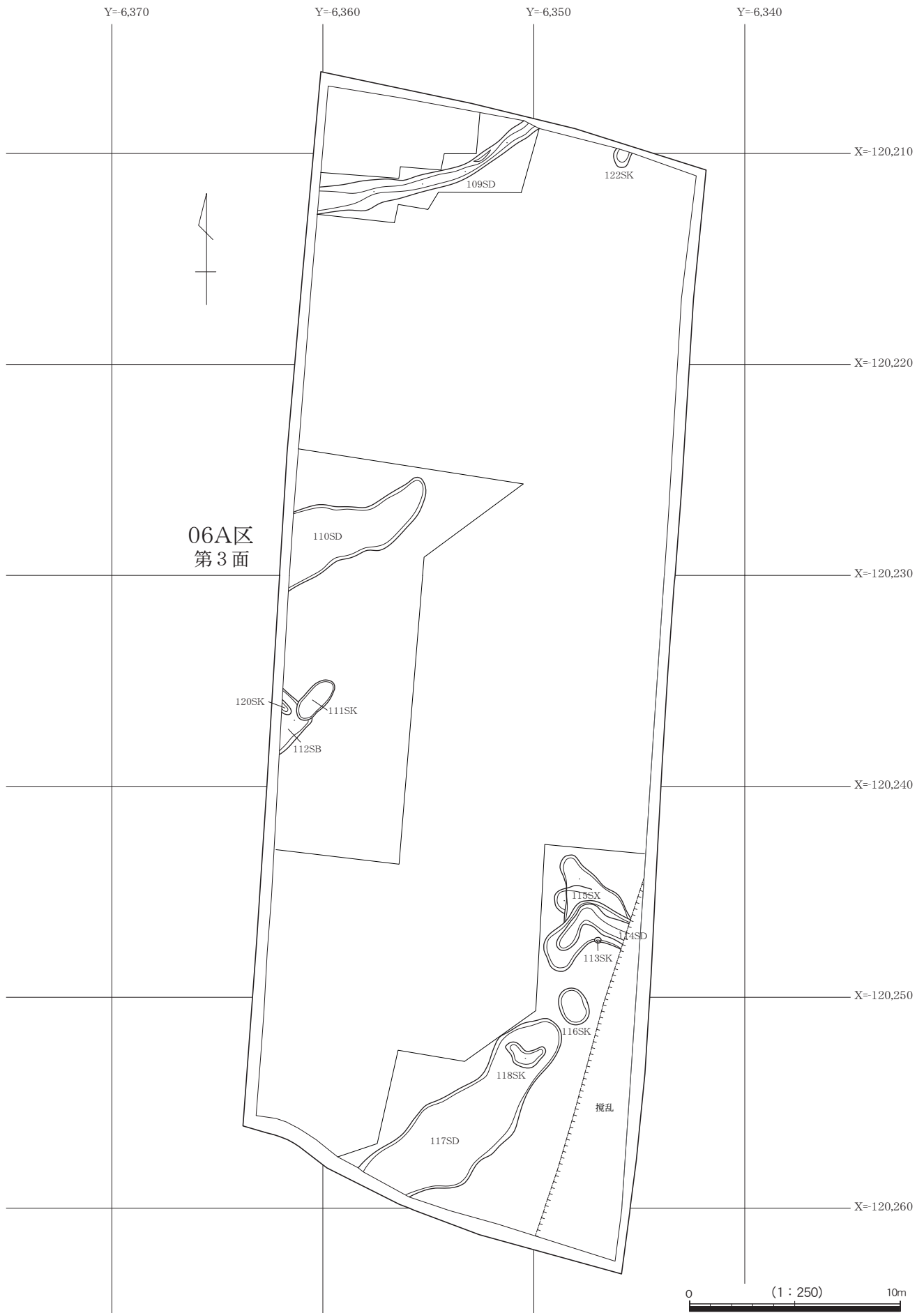
X=120,250

X=120,260

06A区
第2面



図版1 06A区第2面遺構平面図(1/250)



図版2 06A区第3面遺構平面図 (1/250)

Y=6.370

Y=6.360

Y=6.350

Y=6.340

X=120,270

X=120,280

X=120,290

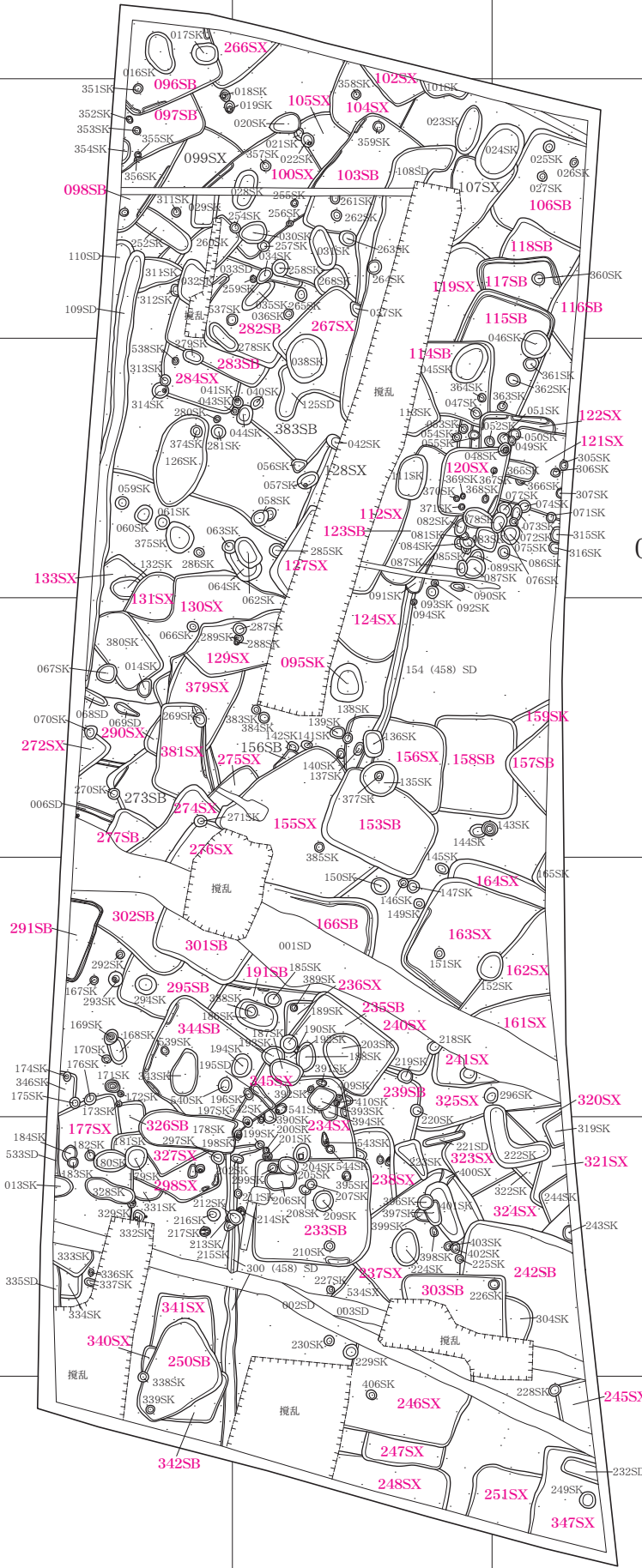
X=120,300

X=120,310

X=120,320

06B区
第2面

0 1:250 10m



图版4 06B区第2面遺構平面図 (1/250)

Y=6.380

Y=6.370

Y=6.360

Y=6.350

X=120,330

X=120,340

X=120,350

X=120,360

X=120,370

X=120,380

X=120,390



05A区
第1面

0 (1 : 250) 10m

図版6 05A区第1面遺構平面図 (1/250)

Y=6.380

Y=6.370

Y=6.360

Y=6.350

X=120,330

X=120,340

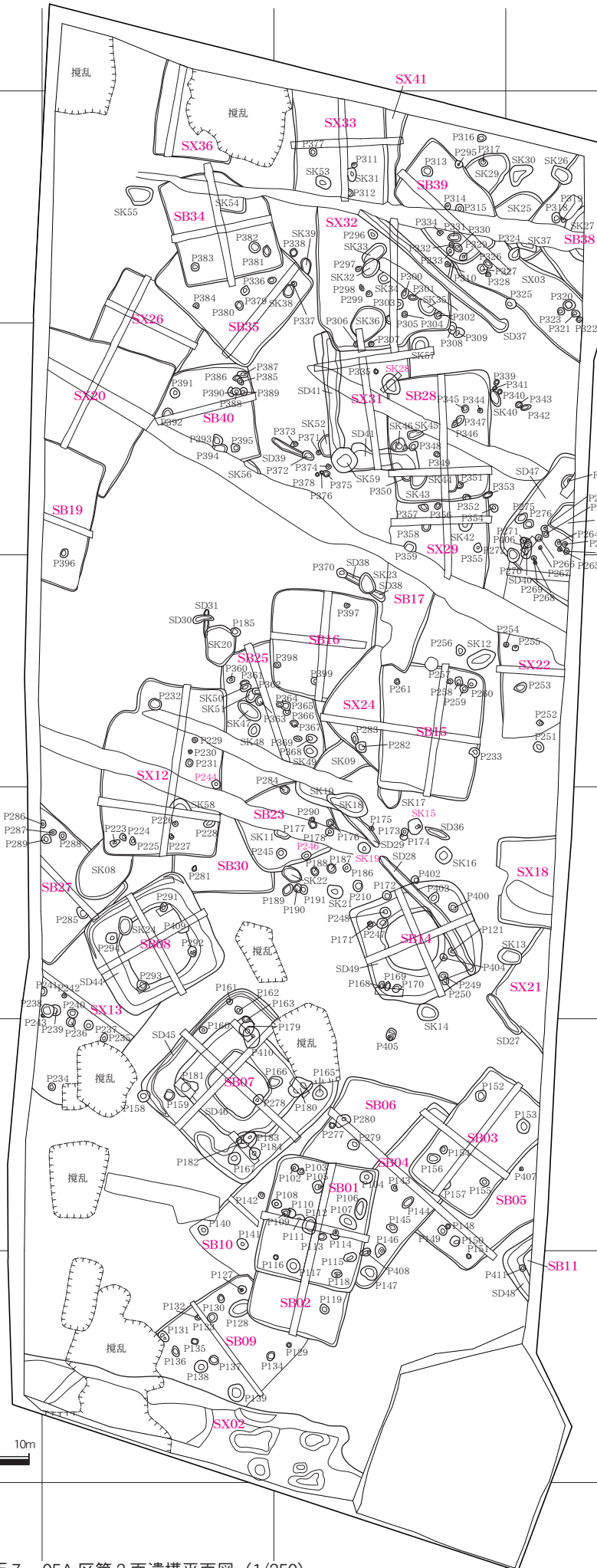
X=120,350

X=120,360

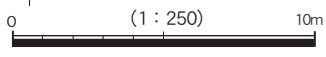
X=120,370

X=120,380

X=120,390



05A区
第2面



図版7 05A区第2面遺構平面図 (1/250)

Y=6,380

Y=6,370

Y=6,360

Y=6,350

X=120,330

X=120,340

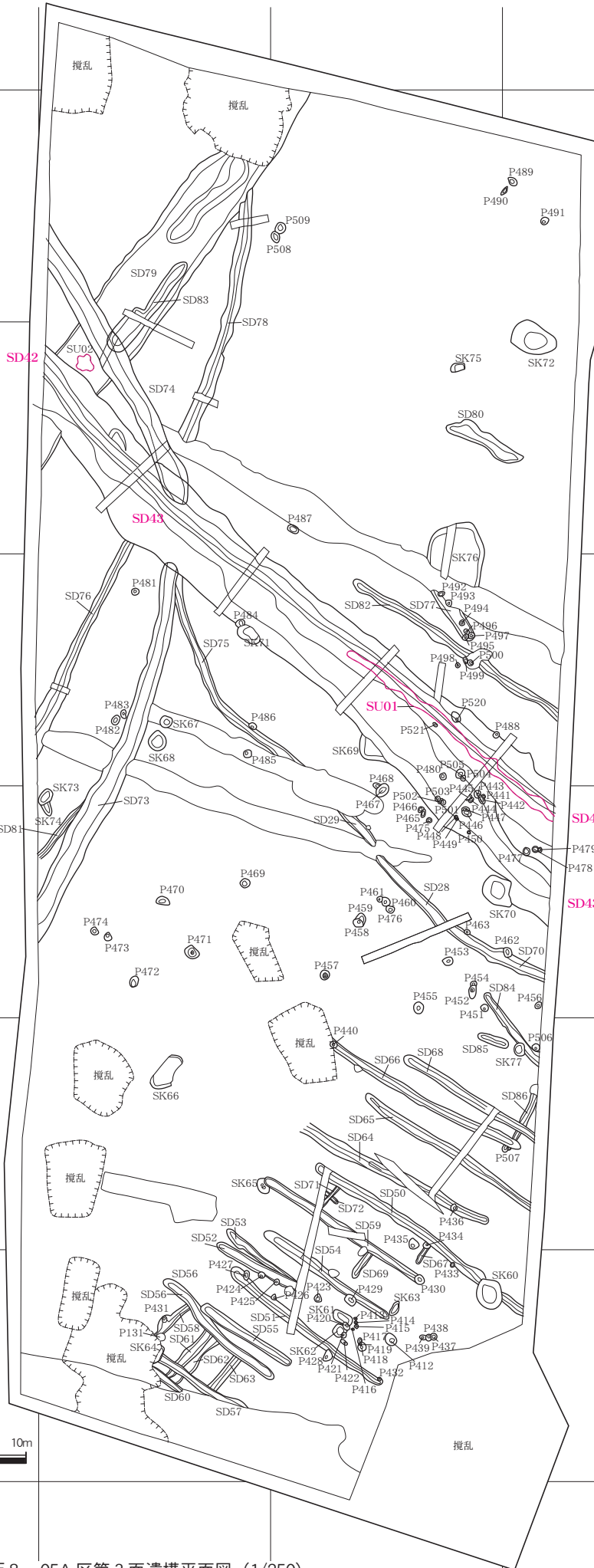
X=120,350

X=120,360

X=120,370

X=120,380

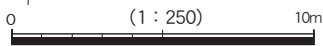
X=120,390



05A区
第3面

SD42

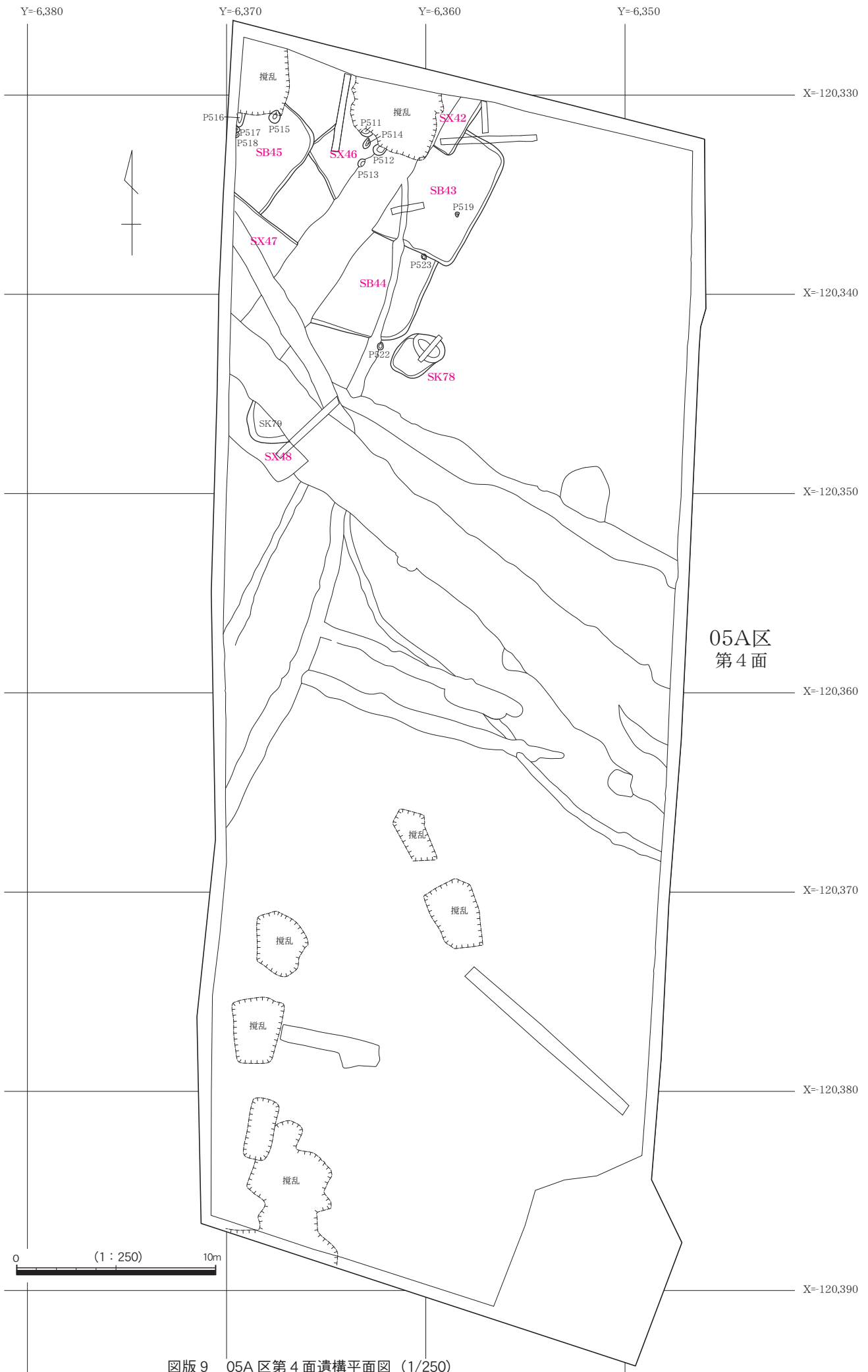
SD43



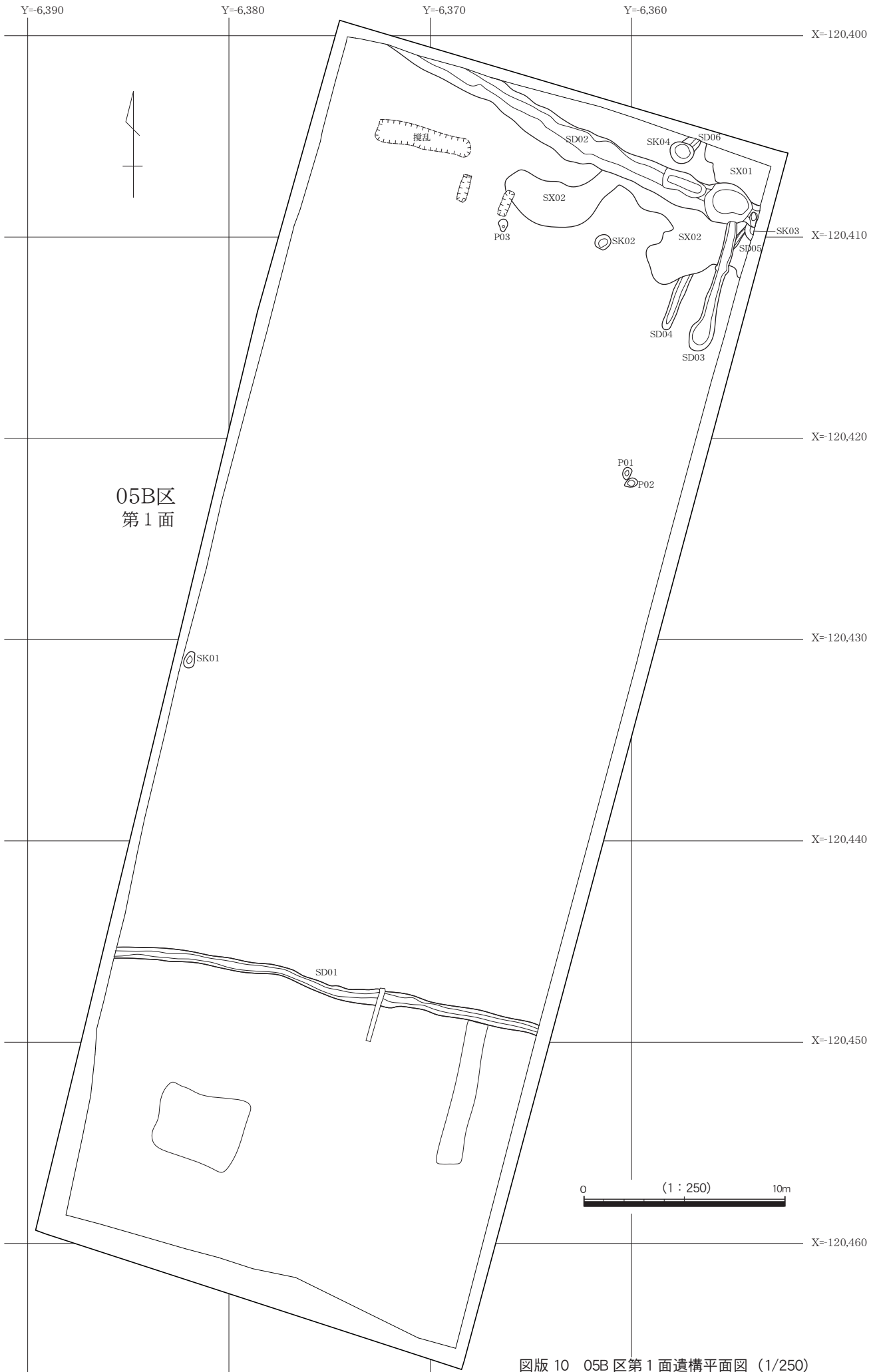
(1 : 250)

10m

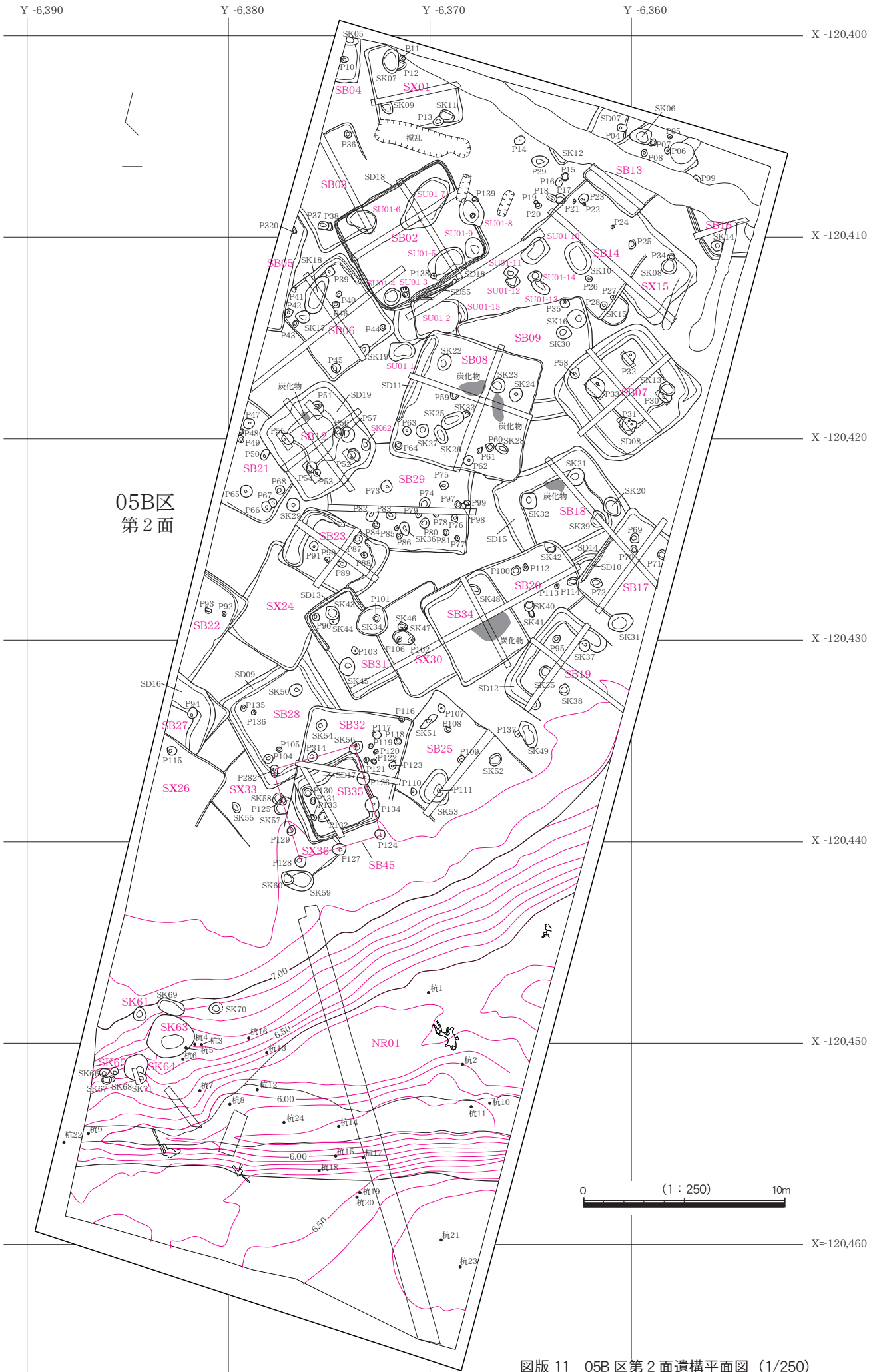
図版8 05A区第3面遺構平面図 (1/250)



図版9 O5A区第4面遺構平面図 (1/250)



图版 10 05B 区第 1 面遺構平面图 (1/250)



Y=6.390

Y=6.380

Y=6.370

Y=6.360

X=120,400

X=120,410

X=120,420

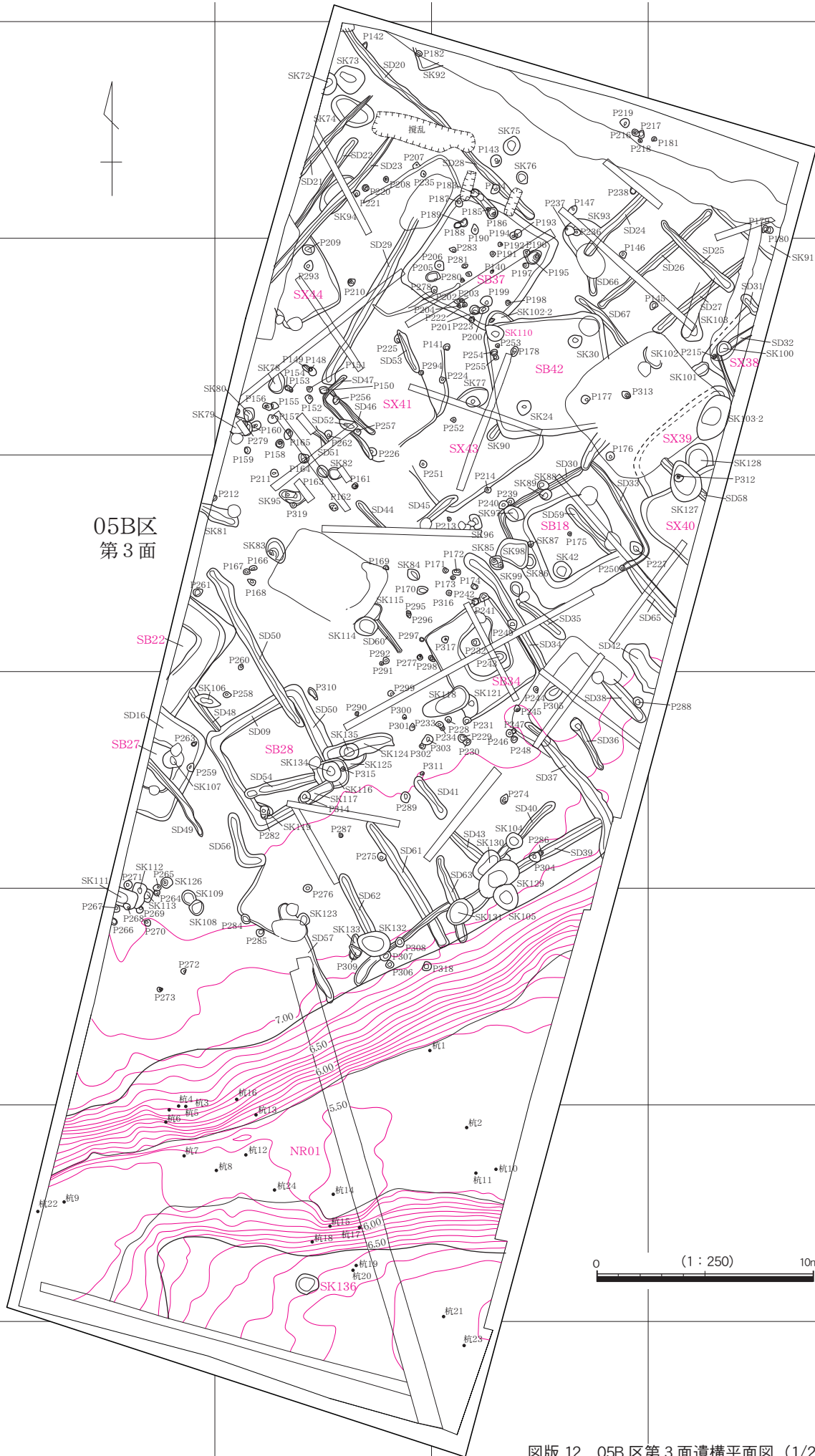
X=120,430

X=120,440

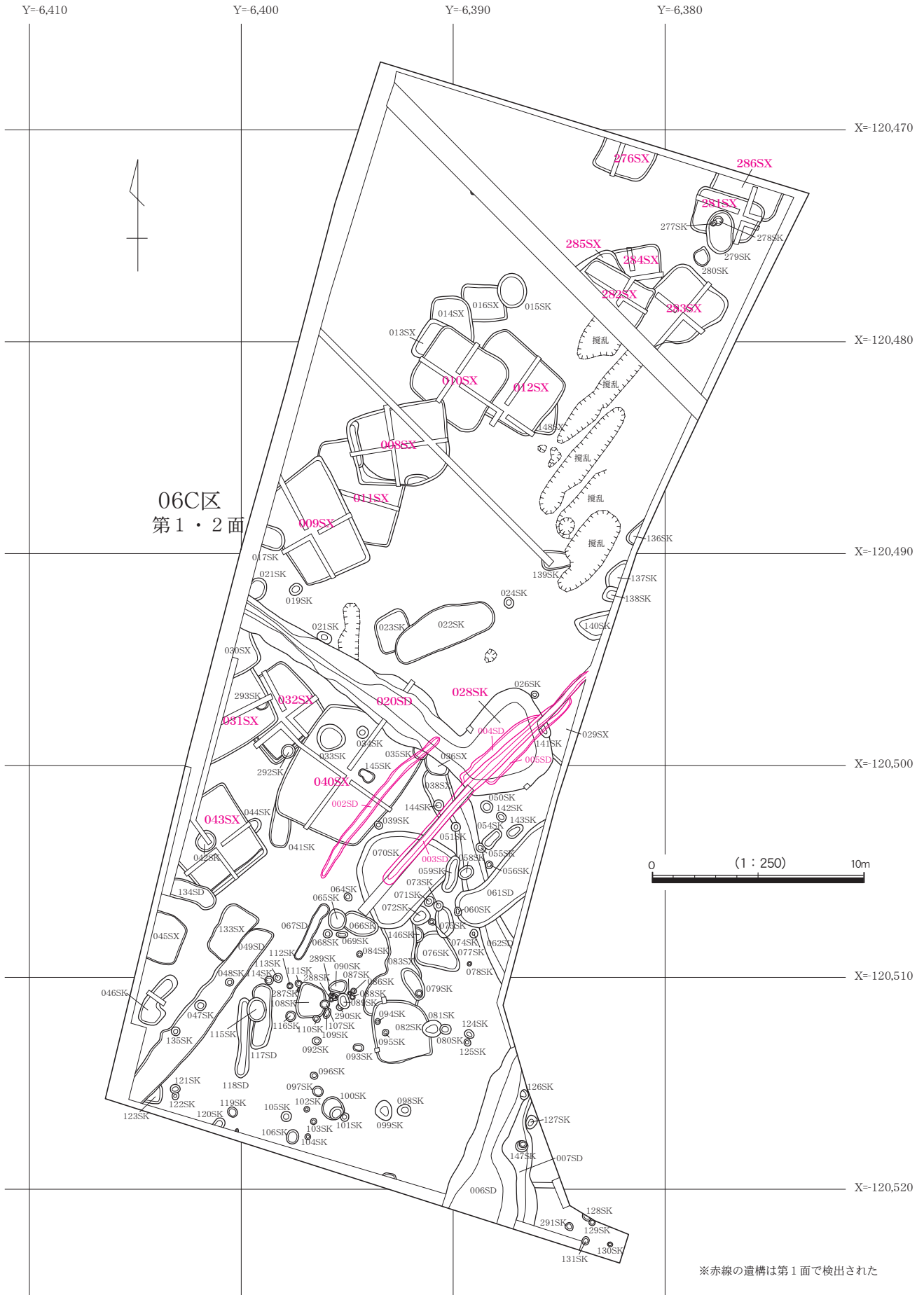
X=120,450

X=120,460

05B区
第3面



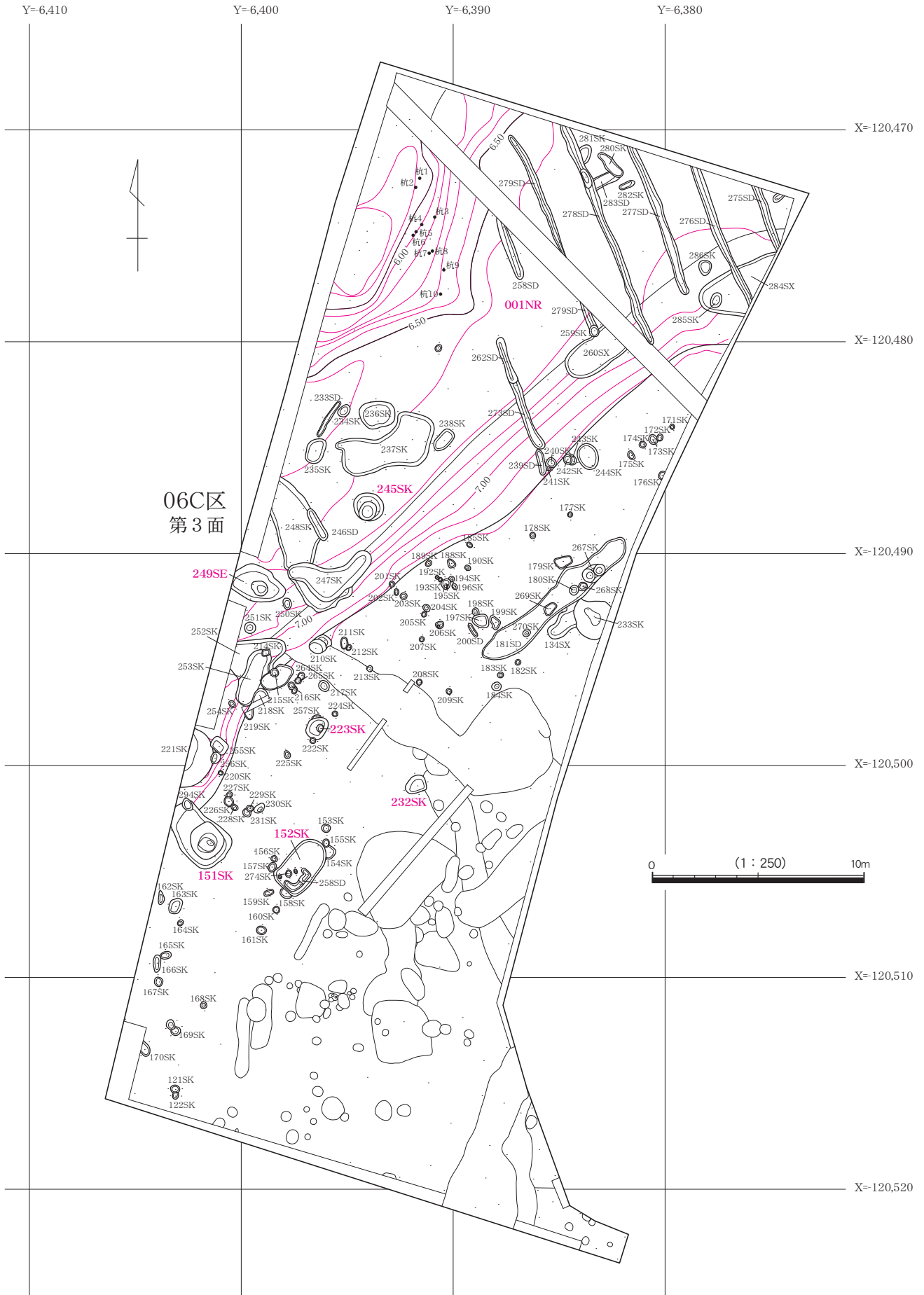
图版 12 05B区第3面遺構平面図 (1/250)



06C区
第1・2面

※赤線の遺構は第1面で検出された

図版 13 06C区第1・2面遺構平面図 (1/250)



图版 14 06C 区第 3 面遺構平面図 (1/250)



06B 区 2 面と姫下古墳・姫塚古墳・崖古墳（上空より）



06B 区 2 面（東より）、奥は姫下古墳・姫塚古墳・崖古墳



06B 区 3 面から南を望む（北より）



06C 区 2 面から北西を望む（南東より）



05A 区 2 面から南を望む（北より）



06C 区 3 面から北を望む（南より）



06A区2面全景(北より)



06A区2面北東部(西より)



06A区2面中央部東(北西より)



06A区002SX・005SB・008SX周辺(南西より)



06A区020SX・023SB周辺(南より)



06A区039SB・037SD周辺(南より)



06A区077SB(南西より)



06A区 102SX 遺物出土状態 (南東より)



06A区 098SD 遺物出土状態 (東より)



06A区 114SD・115SX 周辺 (西より)



06A区 117SD・118SK (南西より)



06A区 109SD 検出状況 (北東より)



06A区北壁・109SD 土壌サンプル採取状況 (南より)



06B区 1面全景 (南より)



06B区 001SD (西より)



06B区2面全景（南より）



06B区2面北部（南西より）



06B区095SK土層断面（南東より）



06B区242SB土層断面（南東より）



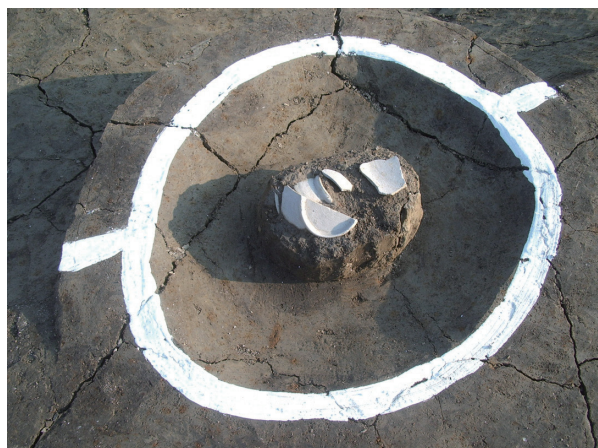
06B区3面全景（南より）



06B区3面全景（北西より）



06B区348SB土層断面（南東より）



06B区440SK遺物出土状態（西より）



05A 区 1 面全景 (北より)



05A 区南部小土坑群 (西より)



05A 区 2 面全景 (北より)



05A 区 2 面全景 (西より)



05A 区 3 面全景 (北より)



06A 区 3 面全景 (南東より)



05A 区 SX12 (北より)



05A 区 SB14 (西より)



05A区 SB07 周溝状遺構・土坑検出状況（南西より）



05A区 SB08 周溝状遺構・土坑検出状況（南西より）



05A区 SB07 周溝状遺構 SD45 掘削状態（北東より）



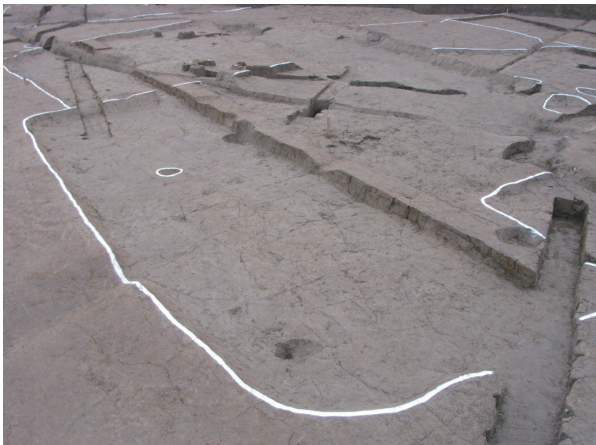
05A区 SB08 東西土層断面東部（南東より）



05A区 SB07 周溝状遺構 SD46 掘削状態（北東より）



05A区 SB08 周溝状遺構 SD44 掘削状態（北東より）



05A区 SB43（北東より）



05A区 SK78 土層断面・遺物出土状態（南東より）



05A区 SD42 遺物出土状態・SD43 (南東より)



05A区 SD42 (南東より)



05A区 SD42 遺物出土状態・SD43 (北西より)



05A区 SD43 (南東より)



05B区 SD02 (東より)



05B区 2面全景 (南より)



05B区 2面全景 (東より)



05B区 2面全景北部 (南より)



05B区3面全景(南より)



05B区3面全景(東より)



05B区3面全景北部(南より)



05B区3面全景南部(西より)



05B区SB07(北東より)



05B区SB18(南より)



05B区SB34遺物出土状態(南より)



05B区SB34(南西より)



05B区 SU01 検出状況 (南より)



05B区 SU01-1・2 検出状況 (南西より)



05B区 SB45 (南西より)



05B区 SK61 遺物出土状態 (南より)



05B区 SK136 炭化物層検出状況 (東より)



05B区 SK136 石出土状態 (南東より)



05B区 NR01 南北ベルト部分杭検出状況 (西より)



05B区 NR01 南北ベルト部分杭検出状況 (北より)



05B区NR01 南北ベルト土層断面（東より）



05B区NR01 東壁土層断面（西より）



05B区NR013 層掘削状況（北東より）



05B区NR013 層掘削状況（南西より）



05B区NR01 完掘状況（北西より）



05B区NR01 完掘状況（南西より）



05B区 NR01 W-016・159等遺物出土状態（北より）



05B区 NR01 W-038・206・222等遺物出土状態（北東より）



05B区 NR01 W-168・186等遺物出土状態（北より）



05B区 NR01 758・762等遺物出土状態（北より）



05B区 SU02 北東部遺物出土状態（北東より）



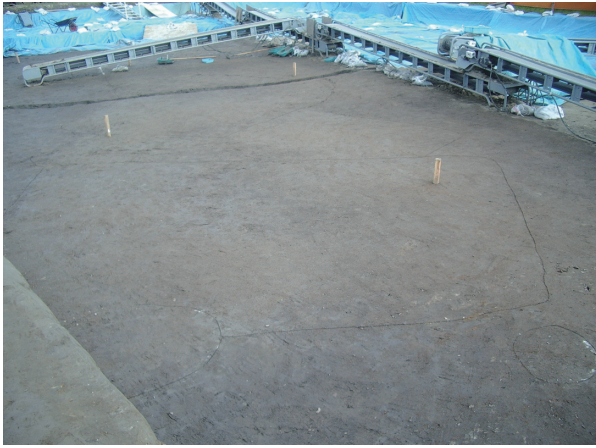
05B区 SU02 南西部遺物出土状態（西より）



05B区 SU02 遺物出土状態（南西より）



05B区 SU03 遺物出土状態（南より、奥はNR01・SU02）



06C区008・009・011SX検出状況(南西より)



06C区008～012SX(北西より)



06C区3面全景(北より)



06C区3面全景(南より)



06C区東西ベルト土層断面(南東より)



06C区001NR完掘状態(南より)



06C区001NR遺物出土状態(南東より)



06C区001NR遺物出土状態(北西より)



06C区 151SK 遺物出土状態 (南西より)



06C区 151SK 遺物出土状態 (西より)



05C区 151SK 遺物出土状態 (北東より)



06C区 234SU 遺物出土状態 (南西より)



06C区 234SU 遺物出土状態 (北東より)



06C区 234SU 遺物出土状態 (西より)



06C区 234SU 遺物出土状態 (西より)



06C区 248SE 遺物 (260) 出土状態 (南より)



06C区 248SE 土層断面 (南東より)









295



296



298



299



311



329



341







589



600



601



605



601







819



821



822



862



1112



924



907







W-180



W-015



W-018

W-019



W-187

W-014



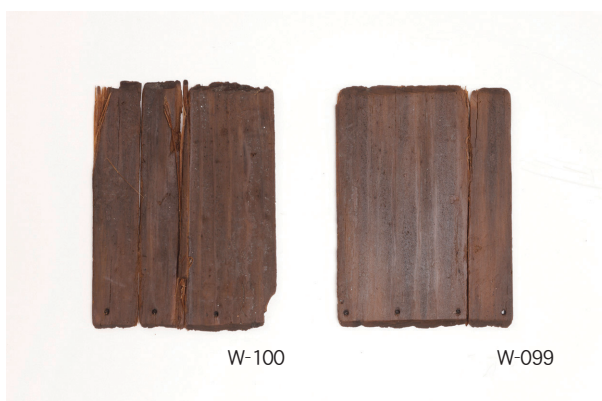
W-016

W-190

W-191









W-182

W-181



W-197



W-198



W-203



W-204



W-263



W-222



W-217



W-216



W-206





報告書抄録

ふりがな	ひめした							
書名	姫下遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第168集							
編著者名	宮腰健司・鈴木正貴・樋上昇・永井邦仁・株式会社パレオ・ラボ (伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫 小林紘一・山形秀樹・Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani・黒沼保子・米田恭子)							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町字野方802-24							
発行年	西暦2012年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
ひめした 姫下	あんじょうしひめ おかわちようひめした 安城市姫小川 町姫下	23213	540121	34° 54′ 52″	137° 05′ 49″	2005年10月 ～2006年3月 2006年10月 ～2007年3月	3470㎡ 3950㎡	鹿乗川河 川改良工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
姫下遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代	竪穴建物 掘立柱建物 土坑 溝 井戸 河川	弥生土器 土師器 須恵器・灰釉陶器 土製品 木製品 石製品		線刻(人面文1)土器5点 墨書土器7点 案2点・椅子3点		
文書番号	発掘届出 (17埋七第49号・2005.9.20) (18埋七第47号・2006.9.15) 通知 (17教生第1349号・2005.10.20) (18教生第1672号・2006.10.30) 終了届・保管証・発見届 (17埋七第133号・2006.3.29) (18埋七第99号・2007.3.14) 監査結果通知 (18教生第536号・2006.6.14) (19教生第459号・2007.5.23)							
要約	本遺跡は鹿乗川左岸の標高約7mを測る、自然堤防に立地する。弥生時代中期後葉の竪穴建物・竪穴状遺構7基、土坑1、古墳時代前期と平安時代～室町時代前半にかけての竪穴建物・竪穴状遺構が272基、井戸1基や土器廃棄土坑も検出されている。 また、弥生時代から古墳時代にかけての河道が検出され、古墳時代前期の大型掘立柱建物の建築部材や掘削具、案・椅子、紡織具、分割材・丸太・杭など多量の木製品が出土している。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第168集

姫下遺跡

2012年3月31日

編集 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
発行 愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社